

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27

—更埴市内その6—

こうしょくじょうり やしろ
更埴条里遺跡・屋代遺跡群

おおざかい くぼがわら
(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—古代2・中世・近世編—

本 文

2000.3

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27

—更埴市内その6—

こうしよくじょうり やしろ
更埴条里遺跡・屋代遺跡群

おおざかい くぼがわら
(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—古代2・中世・近世編—

本 文

2000.3

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡遠景



I層
II-1~2層
II-3層 / II-4層
II-5~6層
III-1-1~2層
III-1-5層
III-1-6~7層
III-1-8層
(図版3g図対応)

窪河原遺跡H2区 基本土層と善光寺地震(1847年)の砂脈



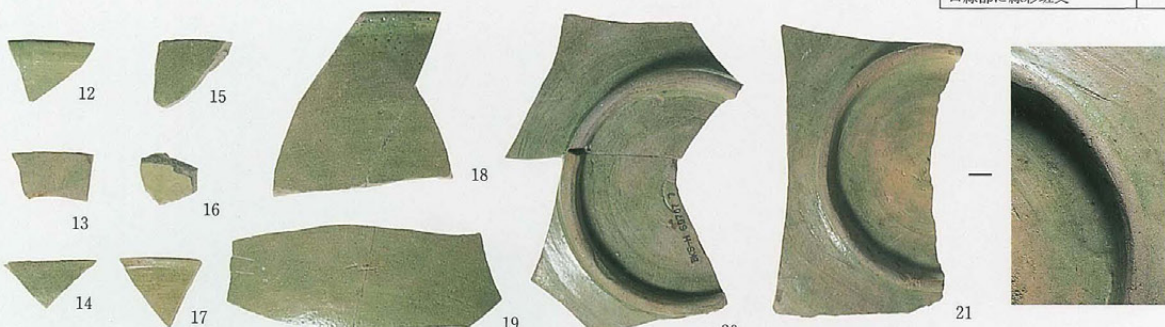
屋代遺跡群①区 中世集落

o類 (1)

a-1類 (2~19)



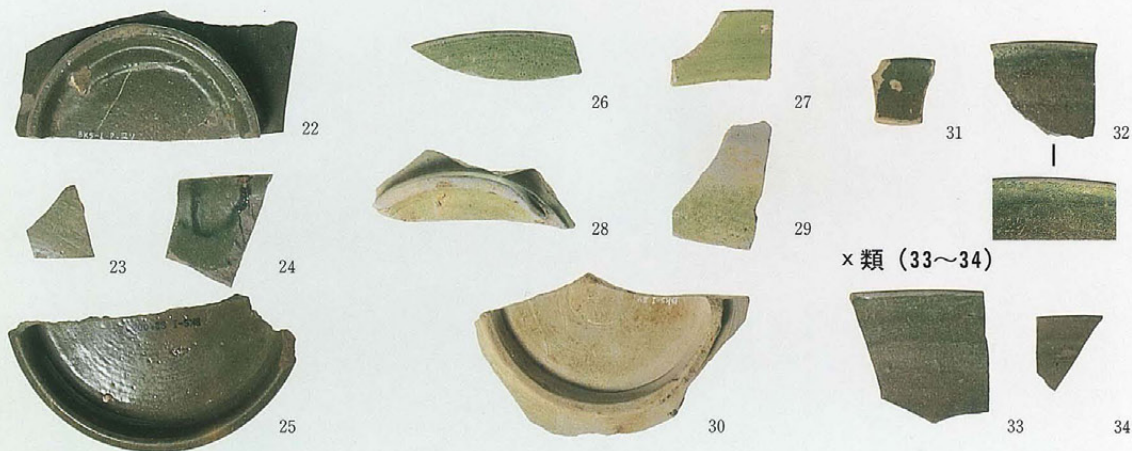
a-3類 (20~21)



d-1類 (22~25)

e-1類 (26~30)

e-2類 (31) f類 (32)



x類 (33~34)

出土遺構	写真No
SB806 覆土下層	9
SB806 カマド周辺	21
SB808	34
SB809 緑釉緑彩陶	24
SB809	5
SB809 掘方	12
SB827 カマド内	4
SB827	33
SB843 カマド脇	11
SB851 カマド周辺	10
SB851	15
SB851	18
SB851	19
SB852 緑釉緑彩陶	7
SB861 覆土中層	26
SB9032	27
SB9038 床	6
SD707	20
SD707	31
SD707	16
SD949	32
SD1008	25
I地区 P III層	22
I地区 XP109 III層	28
I地区 III層	30
I地区 III層	2
H地区 III層	3
I地区 III層	8
I地区 X II K9 III層	29
I地区 X I 015 III層	23
I地区 III層	14
J地区 III層	17
I地区 III層	13
㊦b区 SP4 口縁部に緑彩斑文	1

屋代遺跡群・更埴条里遺跡出土 緑釉陶器

1のみ屋代遺跡群、他はすべて更埴条里遺跡 S=1:2



「王強私印」印面 逆位拡大



銅印「王強私印」
更埴条里遺跡 H地区 III-2層 実寸



越州窯系青磁碗
更埴条里遺跡 SB843・SD857接合 S=1:2



軒丸瓦
屋代遺跡群 SB3022
S=1:2



越州窯系青磁小片
屋代遺跡群 SB4809 S=1:2
(古代1編対象)

序

森將軍塚古墳に立つと、整然と区画された更埴条里地帯の水田域と自然堤防上に営まれた町並み、さらにその向こうを緩やかに流れる千曲川が一望されます。ここを交通の大動脈である上信越自動車道と長野新幹線が南北に貫く様子は壮観で、まさに21世紀の景観そのものができあがっています。

このようにして眺める水田や町並みの下には厚い砂層が埋もれています。更埴条里遺跡・屋代遺跡群の発掘調査区内ほぼ全域で確認されたこの砂の堆積は、9世紀後半に起きた大規模な洪水がもたらしたもので、仁和の大洪水（888年）にあたるものではないかと考えられています。そうしますと、今から1111年前のこの一帯は一面砂に覆われた砂漠のような景観であったこととなります。集落も、道も、大規模な開発によって築きあげた条里水田も、全てが埋め尽くされてしまった様子を当時の人々も私たちと同じように森將軍塚に立って見下ろしたのでしょうか。だとすれば、それは全てが無に帰したような絶望的な眺めであったと思われる。現代に生きる私たちにはとても想像することができませんが、それが実際の出来事であったことを洪水砂が物語っています。

しかし厚く堆積した砂の上には、洪水の直後からその被害を克服せんとする人々営みの跡がはっきりと刻み込まれておりました。本編で報告を行うのは、まさにこの大災害からの復興の記録であり、さらに新たな開発を試みる前進の記録でもあります。道路の早期開通につなげるための限られた期間内の発掘調査および整理であったため、内容的に至らない点多々あるとは思いますが、人々が大洪水後のこの地域をどのように再開発し、文化を育み、それを発展させ現在に至っているかをこの一冊から読みとっていただき、資料として活用していただければ幸いです。

本年10月30日をもって中郷インター―上越インター間が開通し、長期間に渡った上信越自動車道全通のための工事も大きな目的が達成されました。そして更埴条里遺跡・屋代遺跡群の発掘調査報告もおかげさまをもちまして、『古代2・中世・近世編』の発行をもって縄文時代前期から現代に及ぶ非常に長い歴史がつながることとなりました。発掘調査開始から本報告書の刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団、同上田工事事務所、長野県土木部高速道局、更埴市、同教育委員会、ちくま農業共同組合、地区対策委員会、地権者会等の関係機関、また、地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事していただいた多くの方々、直接御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化財生涯学習課に対しまして、心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成12年3月17日

(財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間鉄四郎

例 言

1. 本書は、上信越自動車道建設工事にかかわる更埴条里遺跡、屋代遺跡群、および屋代遺跡群に属する大境遺跡、窪河原遺跡の発掘調査報告書の第5分冊（更埴市内その6）である。
1. 本書は、上記の遺跡における9世紀後半～19世紀の遺構・遺物を中心としている。各遺跡の概要については、当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』7. 8. 9. 10. 11などで紹介している。また、更埴条里遺跡H地区出土の銅印（王強私印）については国立歴史民俗博物館発行の『日本古代印集成』で紹介しているが、事実報告に関しては本書の記述をもって最終報告とする。ただし、全時期にまたがる分析などは『総論編』に掲載する予定である。
1. 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道倉科・雨宮地区および更埴JCT～長野地区平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）、更埴市発行の地形図（1：10,000）を使用した。
1. 航空写真は、更埴地区の全景写真については長野県立歴史館から提供を受けたものと、国土地理院に著作権のある昭和23年米軍撮影の写真を使用した。また、各調査区の写真は（株）新日本航業、（株）共同測量社に撮影を委託したものである。航空写真のモザイク作成は松尾カメラに発注した。
1. 本報告書作成には次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する（掲載順）。

第1章第3節5、第9章第2節2、第4節、第11章第5節2

(株)パリノ・サーヴェイ 高橋 敦・田中義文・辻本崇夫

第9章第2節1

(株)古環境研究所 金原正子・松田隆二

第9章第3節、第11章第5節1

国立歴史民俗博物館 辻誠一郎・辻 圭子・住田雅和

第9章第5節

千歳サケのふるさと館 高橋 理

第9章第6節

京都大学霊長類研究所 茂原信生

第9章第7節

獨協医科大学 櫻井秀雄・芹澤雅夫

第10章第1節

(株)川鉄テクノロジーサーチ 岡原正明・伊藤俊治

第11章第4節

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

1. 執筆分担は次の通りである。

第1章第3節1・2

市川桂子

第1章第3節3・4、第3章第3節、第5章第2節1、第6章第2節4、第7章第3節、第8章、第9章第1節

寺内隆夫

第1章第2節2、第3章第1・2・4節、第5章第1・3節、第7章第1・2節、第11章第2・3節

鳥羽英継

第1章第1節・第2節1・第4節、第2章、第3章第5節、第4章、第5章第2節2・3、第4節、第6章第1節・第2節1～3・第3節、第7章第4節、第11章第1節、第12章

宮島義和

1. 遺物写真の撮影・焼き付けは田村 彬・西嶋 力が、脆弱遺物の保存処理は長野県立歴史館 白沢勝彦・寺内貴美子、埋蔵文化財センター 白田広之、相沢秀樹が担当した。
1. 本書の編集・校正は担当者合議の上、最終的には宮島が行い、小林秀夫・土屋 積が校閲した。
1. 遺構記号・遺構番号は原則として発掘調査時の記号や番号を変更していない。そのため、欠番などが

存在する。

1. 註・参考文献は各章あるいは節の末にまとめた。

1. 発掘調査・報告書作成にあたり下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

穴沢義功、伊藤俊治、井上 巖、井上喜久男、井原今朝男、上原真人、岡田正彦、岡原正明、小野紀男、金箱正美、金原正子、河内晋平、金田章裕、北原糸子、国立歴史民俗博物館、更埴市教育委員会、齋藤孝正、櫻井秀雄、佐藤信之、茂原信生、白沢勝彦、住田雅和、芹澤雅夫、高橋 敦、高橋 理、高橋 学、田中義文、辻 圭子、辻誠一郎、辻本崇夫、寺内貴美子、長野県立歴史館、長野市教育委員会、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館、奈良国立文化財研究所、橋口定志、原田信男、平川南、福島正樹、藤沢高広、松田隆二、百瀬新治、森島 稔、矢口忠良、矢島宏雄、山口 明、山崎ます美、山田昌久、若尾正成

また、センター内の調査研究員、あるいは現地調査に携わった方々から多くの助言を得ている。

校閲、執筆者以外で、調査・整理に関わった調査研究員は以下の通りである。

相沢秀樹、青木一男、井口慶久、市川隆之、出河裕典、伊藤克己、伊藤友久、稲葉 隆、上田典男、上田 真、白居直之、臼田武正、大久保邦彦、岡沢康夫、奥原 聡、大和龍一、河西克造、川崎 保、木内英一、小林清人、桜井秀雄、澤谷昌英、島田正夫、清水 弘、下島浩伸、下平博行、武居公明、田中正治郎、谷 和隆、月原隆爾、常長虎徹、寺内貴美子、徳永哲秀、中沢道彦、中平智明、中村 寛、夏目大介、贅田 明、西 香子、西嶋 力、西村政和、西山克己、野村一寿、馬場信義、伴 信夫、平出潤一郎、廣田和穂、深沢重夫、福島正樹、藤沢袈裟一、藤原直人、瀧井英知、本田 真、町田勝則、松岡昭彦、松岡忠一郎、水沢教子、宮入英治、宮下健司、宮下祐治、宮脇正実、百瀬忠幸、百瀬長秀、柳沢 亮、山極 充、山中 健、吉江英夫、吉沢信幸、依田 茂、若林 卓

1. 本調査には、ベトナム文化・情報・スポーツ省のグエン・テ・フン氏が研修で参加している。

1. 本書で報告した記録および出土遺物は長野県立歴史館が保管している。

凡 例

1. 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりで、該当個所のスケールの上に記してある。

1) 主な遺構実測図

遺構分布図 1 : 500 遺構割付図 (集落跡) 平面図 1 : 120
 遺構分布図および割付図対応断面図 1 : 80 建物跡個別平面図 1 : 80
 土坑個別平面図 1 : 20 ~ 1 : 80

2) 主な遺物実測図

土器・焼物 1 : 4 土製品 1 : 4
 石器・石製品・骨角製品・ガラス製品 1 : 3 ~ 1 : 6 木製品 1 : 4 ~ 1 : 12
 金属製品・鉄滓 1 : 2 銭拓本 2 : 3

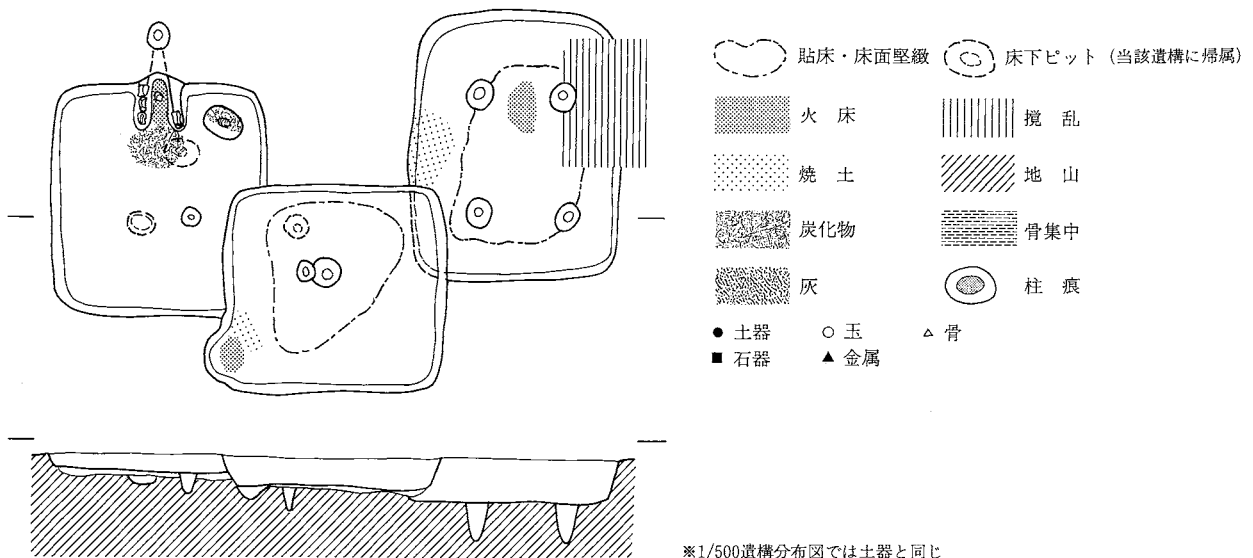
1. 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は下記の通りである。

古代の土器 1 : 3 中世・近世の焼物 1 : 2、一部で 1 : 6 銭 1 : 1 金属製品 1 : 2
 その他の製品は原則として実測図の縮尺に準じた。

1. 遺物の出土地点表記は、図版中に出土遺構名またはグリッド名等を表記した。

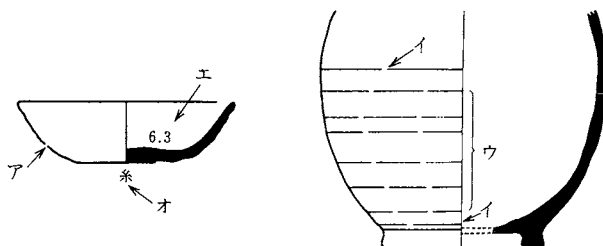
1. 実測図中のスクリーントーンなどは下記のように用いた。これ以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

1) 遺構実測図

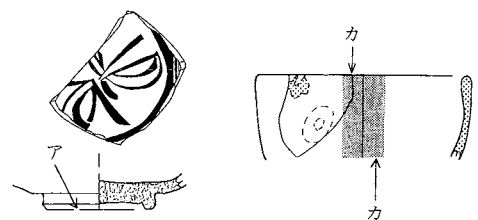


2) 遺物実測図の表現

古代の土器実測図の表現



中・近世の焼物実測図の表現



・ 実測線の不連続の部分は、破片資料を回転実測した際の欠落部分を示す(ア)。

- 古代の土器実測図の断面は須恵器の質Dタイプは黒ぬり、非ロクロ土師器・黒色土器・土師器は白ぬきで、その他のものについては以下のようにスクリーントーンで区別している。



- 実測図の線の種類は、回転へら削りの場合ロクロナデから回転へら削りが始まる部分は1マスあけた線(—)であらわし(i)、回転へら削りの単位は2マスあけた線(— —)であらわした(u)。手持へら削りは削った範囲を図示した。器面のミガキは非ロクロ土師器の場合はかき入れ、ロクロ使用の土器はミガキがある場合はかき入れていない。したがって、黒色土器A、黒色土器Bにはほとんどミガキを伴うが図面にはミガキはかき入れていない。ミガキのあるなしで土器の種類が判断できる。
- 糸切りの須恵器杯Aの内面底径は、実測図の内面部分にcmを省略した数字で書き入れた(x)。へら削りの須恵器杯Aは、編年の指標とならないため特別の例を除いて未記入である。
- 編年上重要な杯Aの底部調整は略号で底部近辺に示した(v)。(略号) → (底部調整) で例示。

糸 → 回転糸切り未調整をさす 回へ → 回転へら削り 手へ → 手持へら削り
 へ → へら切り、へら切り後ナデも含む 糸+手へ → 中心部糸切り、底部周辺を手持へら削り
 糸+回へ → 中心部糸切り、底部周辺を回転へら削り 糸+ナデ → 中心部糸切り、底部周辺をナデ
 糸→ナデ → 回転糸切りの後ナデ調整 ナデ+糸 → 中心部ナデ、底部周辺回転糸切り

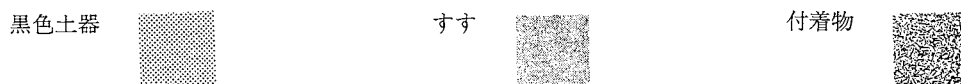
- 灰釉陶器と緑釉陶器の断面のスクリーントーンは同じだが緑釉陶器は土器番号の下に緑釉と書いた。
- 中・近世の焼物実測図の断面は以下のように示した。



- 中・近世の焼物の釉薬は、該当する焼物の内面・外面に以下のスクリーントーンで示した(w)。

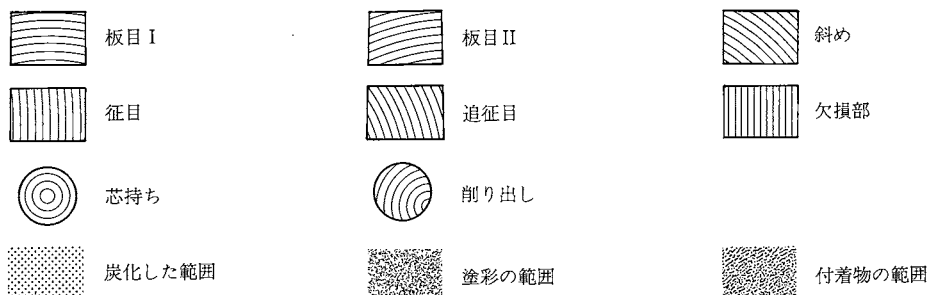


- 古代の土器、中・近世の焼物の断面以外のスクリーントーンは以下のように区別している。



- 特に、特徴的な土器・焼物については土器番号の下に簡単に説明を書いた。
- カワラケは番号の下に非ロクロ、ロクロの区別を書いた。
- 近世の焼物は番号の下に産地名をしるした。
- 同じ遺構番号の遺物が2プレート以上にまたがる場合は—①、—②と表記した。また、遺構番号の横の()内にそのプレートにおける遺物番号を記入した。

木製品 実測図および一覧表中の木製品(一部屑を含む)の木取りと、木製品の欠損部、炭化した範囲、塗彩の範囲および付着物の範囲については以下のスクリーントーンで示した。



本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 本編の範囲	1
1 報告書作成の方針	1
2 本編の範囲	2
第2節 歴史的環境と周辺遺跡	3
1 遺跡の位置	3
2 大洪水（9世紀後半）以降の屋代地区	3
第3節 地形・地質環境と基本層序	10
1 善光寺平南部の地形・地質環境	10
(1) 長野盆地南部の地形 (2) 遺跡周辺の地形	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序	12
(1) セツ石層 (2) 反町層 (3) 屋代層	
3 調査対象となった層序	15
(1) 層名 (2) II・III層の特徴	
4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群のIII層について	17
(1) なぜIII層を取り上げるか？ (2) 更埴条里遺跡A地区～屋代遺跡群⑥区III層の特徴	
(3) 屋代地区での洪水災害発生状況	
5 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の環境変遷	20
(1) 検討会の設置 (2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の古環境変遷	
第4節 調査・整理の経過	23
1 調査の概要	23
(1) 調査の実施にあたって (2) 調査の手順	
2 整理の概要	24
第2章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況1（古代2）	
第1節 概観	26
第2節 古代2の集落跡の概要	26
1 概観	26
2 更埴条里遺跡H地区集落跡・I地区集落跡	27
3 更埴条里遺跡J地区集落跡	28
4 更埴条里遺跡K地区集落跡	29
5 屋代遺跡群①区集落跡	30
6 屋代遺跡群②区集落跡	30

7	屋代遺跡群③b区集落跡	31
8	屋代遺跡群④区～⑤区集落跡	31
第3節	古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況	32
1	掲載方法	32
2	竪穴建物跡 (SB、SKの一部)	32
	(1) 概要 (2) 竪穴建物の構築・使用に関して (3) 竪穴建物の付属施設 (4) 竪穴建物の廃絶と遺物出土状況	
3	掘立柱建物跡 (ST)	43
	(1) 概要 (2) 掘立柱建物跡の時期に関して (3) 規模・構造に関して	
4	墓坑・井戸・その他の土坑 (SK)	44
	(1) 概要 (2) 分類 (3) I群1類 井戸跡 (4) I群2類 いわゆる焼土坑 (5) I群3類 廃棄土坑 (6) I群4類 墓坑 (7) I群5類 用途不明の掘削坑	
5	焼土跡 (SF)	46
6	鍛冶関連遺構	46
7	性格不明の遺構 (SX)	47
8	溝・自然流路 (SD)	47
	(1) 概要 (2) 溝・自然流路の分類	
第3章 古代2の遺物		
第1節	土器	72
1	古代の土器の分類	72
	(1) 土器の種類 (2) 器種 (3) 使用の場における分類 (4) 集計法	
2	各遺構出土土器	73
	(1) 竪穴建物跡 (SB) 出土土器 (2) 土坑 (SK) 出土土器	
第2節	土製品	90
1	瓦	90
2	硯	90
	(1) 朱墨硯 (2) 転用硯	
3	土錘	91
第3節	石器・石製品	92
1	概要	92
2	各器種の属性	92
第4節	金属製品・鍛冶関連遺物 (古代2)	94
1	銅・青銅製品	94
2	銭貨	94
3	鉄製品	95
4	鉄生産関連遺物 (古代2)	99
第5節	木製品	103
第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2 窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)		
第1節	概観	104

第2節 中世の集落跡の概要	104
1 概観	104
2 更埴条里遺跡K地区集落跡	105
3 屋代遺跡群①区集落跡	106
4 屋代遺跡群④～⑥区集落跡	107
5 窪河原遺跡の集落跡	108
第3節 中世の集落跡および周辺検出の遺構と遺物出土状況	109
1 掲載方法	109
2 竪穴建物跡 (SB)	109
(1) 概要 (2) 各集落のSBの状況	
3 掘立柱建物跡 (ST)	110
(1) 概要 (2) 掘立柱建物の構築・使用に関して	
4 墓坑・井戸・その他の土坑 (SK・SFの1部・SM)	113
(1) 概要 (2) 分類 (3) I群1類 井戸跡 (4) I群2類 廃棄土坑 (5) I群3類 墓坑	
(6) I群4類 火葬施設 (7) I群5類 用途不明の掘削坑	
5 炉・焼土跡 (SF)	117
6 鍛冶関連遺構	117
7 性格不明の遺構 (SX)	117
8 溝・自然流路 (SD)	117
(1) 概要 (2) 溝・自然流路の分類	
第5章 中世の遺物	
第1節 中世の焼物・土製品	146
1 中世の焼物の分類	146
(1) 使用の場における分類 (2) 焼物の種類 (3) 器種	
2 出土した中世焼物の概要	147
(1) 在地産の焼物 (2) 搬入系の焼物 (3) 輸入陶磁器	
3 各遺構出土の焼物	150
(1) 竪穴建物跡 (SB) 出土の焼物 (2) 溝・自然流路 (SD) 出土の焼物	
(3) 土坑 (SK) 出土の焼物 (4) 墓 (SM) 出土の焼物	
(5) 不明遺構 (SX) 出土の焼物 (6) 包含層出土の焼物	
4 中世の土製品	155
(1) 土錘	
第2節 石器・石製品、ガラス製品、骨角製品	156
1 石器・石製品	156
(1) 概要 (2) 中世の石製品	
2 ガラス製品	157
3 骨角製品	157
第3節 金属製品・鍛冶関係遺物 (中世)	158
1 銅・青銅製品	158
2 銭貨	158

3	鉄製品	158
4	鉄生産関連遺物（中世）	161
第4節	木製品	164
1	概要	164
2	木製品	164
	(1) 木製品の分類 (2) 木製品の解説	
3	木製品製作過程の遺物	166
	(1) 概要 (2) 中世の層の解説	
第6章	更埴条里遺跡・屋代遺跡群Ⅲ層上面検出の遺構と遺物出土状況	
	窪河原遺跡Ⅱ層検出の遺構と遺物出土状況（近世）	
第1節	概観	168
第2節	近世遺構群の概要	168
1	概観	168
2	後背湿地Ⅰ群内の遺構	169
	(1) 概要 (2) 低地部の遺構 (3) 微高地部の遺構	
3	自然堤防Ⅰ群内の遺構	169
	(1) 概要 (2) 高所部の遺構 (3) 傾斜部の遺構	
4	窪河原遺跡の遺構	170
	(1) 概観 (2) 水田跡 (3) 溝 (SD) (4) 畝状遺構（畝跡）	
第3節	近世の遺構と遺物出土状況	171
1	掲載方法	171
2	掘立柱建物跡 (ST)	171
3	柵列跡 (SA)	171
4	井戸跡・その他の土坑 (SK)	172
	(1) 概要 (2) 分類 (3) Ⅰ群1類 井戸跡 (4) Ⅰ群2類 木柵をもつ土坑	
	(5) Ⅰ群3類 用途不明の掘削坑	
5	溝・自然流路 (SD)	173
	(1) 概要 (2) 溝・自然流路の分類	
第7章	近世の遺物	
第1節	近世の焼物	180
1	近世の焼物の分類	180
2	各遺構出土の焼物	180
	(1) 溝・自然流路 (SD) 出土の焼物 (2) 土坑 (SK) 出土の焼物 (3) 包含層出土の焼物	
第2節	金属製品（近世）	182
1	銅・青銅製品	182
2	銭貨	183
3	鉄製品・鉄生産関連遺物	183
第3節	石器・石製品	184
第4節	木製品	184
第8章	自然災害痕跡	

第1節 古代8期（9世紀後半）から近世における自然災害痕跡	185
1 洪水痕跡	185
(1) II・III層に見られる洪水砂堆積 (2) 9世紀後半の大洪水 (3) 中・近世の洪水	
2 地震痕跡	189
(1) 善光寺地震（1847年）に比定される砂脈	
第9章 微化石と動・植物遺体の分析	
第1節 II・III層を対象とした環境の復元	191
第2節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析	192
1 更埴条里遺跡I～III層における微化石分析	192
(1) 目的 (2) 試料 (3) 方法 (4) 分析結果	
(5) 古代、中・近世から現代にかけての農耕と環境	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析	198
第3節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代2・中世・近世の大型植物遺体群	205
はじめに (1) 植物遺体群の産出状況 (2) 注目すべき植物群	
第4節 木製品・炭化材の樹種	215
第5節 屋代遺跡群・窪河原遺跡出土貝類遺存体	219
第6節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡から出土した古代2および中世の人骨	220
はじめに	220
1 出土人骨の特徴	220
(1) 更埴条里遺跡出土の人骨 (2) 屋代遺跡群出土人骨 (3) 窪河原遺跡出土人骨	
2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土人骨の特徴	
(古代2～中世人骨に関するまとめ)	233
第7節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の古代2・中世・近世の脊椎動物遺存体	239
1 はじめに	239
2 更埴条里遺跡出土の脊椎動物遺存体	239
(1) 出土獣骨リスト (2) 出土獣骨の特徴	
3 屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体	241
(1) 出土動物骨リスト (2) 動物遺存体の出土状況 (3) 出土状況と種別の特徴	
4 窪河原遺跡出土の脊椎動物遺存体	250
(1) 出土脊椎動物のリスト (2) 出土脊椎動物遺存体の特徴	
5 まとめと考察	251
第10章 手工業生産物に関する成分分析	
第1節 金属製品成分分析	252
1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土鉄製品・鉄滓・羽口等の分析・調査	252
はじめに (1) 調査項目および試験・検査方法 (2) 各分析条件および装置一覧 (4) 分析結果	
第11章 成果と課題	
第1節 洪水後の集落の変遷と用水開発	262
1 集落変遷把握の方法	262
(1) 土器編年による変遷の把握 (2) 遺構検出状況による新旧・並行関係の把握	
2 古代2の集落の変遷 1（8期後半～10期）	262

(1) 後背湿地 I 群への進出と展開	
3 古代 2 の集落の変遷 2 (11期~15期)	264
(1) 用水の開発と集落 (11期~13期) (2) 用水廃絶後の集落 (14期~15期)	
4 中世集落の展開	267
(1) 中世集落の成立 (2) 自然堤防 I 群南端部の集落 (3) 自然堤防 I 群高所域の集落	
(4) 自然堤防 II 群の集落 (5) 用水の再整備	
5 洪水後の集落変遷と用水開発に関わる諸問題	274
(1) 坪区画復元期の諸問題 (2) 用水開発期の諸問題 (3) 自然堤防 I 群進出期の諸問題	
(4) 中世集落成立期の諸問題	
6 社会情勢の中での位置づけ (まとめにかえて)	275
第 2 節 屋代遺跡群における古代の土器編年 (その 2)	279
1 時間軸の設定	279
2 食膳具の変容	280
(1) 土師器 (2) 黒色土器 A (3) 黒色土器 B (4) 搬入系土器 (5) 食膳具の変遷	
3 煮炊具の変容	294
(1) 土師器 (2) 煮炊具の変遷	
4 貯蔵具の変容 (編年表 5 下段)	296
5 実年代の比定・松本平地域との併行関係	296
第 3 節 重要遺物 (土器)	299
1 灯明具	299
2 穿孔土器	300
3 底部縁辺加工土器	302
4 墨書・刻書土器	302
5 暗文をもつ土器	302
第 4 節 屋代遺跡群出土灰釉陶器の胎土分析	305
1 実験条件	305
2 X線回析試験結果の取扱い	305
(1) Mont-Mica-Hb 三角ダイアグラム (2) Mont-Ch、Mica-Hb 菱形ダイアグラム	
(3) 化学分析結果の取り扱い	
3 分析結果	307
4 化学分析結果	308
5 まとめ	309
第 5 節 洪水 (III層堆積) 以後の環境と開発	313
1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史(3)	313
2 洪水 (III層堆積) 以降の環境と開発	315
第12章 結 語 一大洪水以後の更埴条里遺跡・屋代遺跡群	316
報告書抄録	
奥 付	
図版・写真図版	

挿 図 目 次

<p>図1 古代2、中・近世の周辺遺跡……………7</p> <p>図2 古代の小地域 地域区分……………6</p> <p>図3 長野盆地の地形……………10</p> <p>図4 地形分類図(周辺遺跡)……………11</p> <p>図5 遺跡周辺の地質……………11</p> <p>図6 総合柱状図……………14</p> <p>図7 屋代遺跡群⑥区～窪河原遺跡の旧河道……………16</p> <p>図8 屋代遺跡群⑥区西壁III層細分……………17</p> <p>図9 屋代遺跡群⑥区西壁III層粒度分析結果……………18</p> <p>図10 9世紀後半の洪水砂が確認された遺跡(代表例) ……………20</p> <p>図11 総合柱状図に基づく更埴条里遺跡・屋代遺跡群・ 窪河原遺跡の古環境変遷……………22</p> <p>図12 仮地区名と分割調査……………23</p> <p>図13 竪穴建物 時期別長軸・短軸長さの相関(古代 2)……………33</p> <p>図14 時期別竪穴建物の主軸方位①(古代2)……………34</p> <p>図15 時期別竪穴建物の主軸方位②(古代2)……………35</p> <p>図16 竪穴建物の床面積(古代2)……………37</p> <p>図17 竪穴建物の断面形分類図……………37</p> <p>図18 竪穴建物(住居)のカマドの位置と時期別傾向 (古代2)……………39</p> <p>図19 カマド脇ピット(貯蔵穴?)分類図……………40</p> <p>図20 竪穴建物の埋土分類図……………42</p> <p>図21 掘立柱建物の主軸方位(古代2)……………43</p> <p>図22 古代の土器 器種分類 1……………76</p> <p>図23 古代の土器 器種分類 2……………77</p> <p>図24 朱墨硯 時期別推移……………90</p> <p>図25 転用硯 時期別推移……………91</p> <p>図26 古代2の転用硯 土器の種類……………91</p> <p>図27 古代2の転用硯 器種別割合……………91</p> <p>図28 砥石法量相関グラフ(古代8期後半～15期)……………92</p> <p>図29 鎌 各部の名称……………97</p> <p>図30 鋤鎌先 各部の名称……………97</p> <p>図31 釘の分類(吉田川西分類)……………98</p> <p>図32 古代2の鉄生産関連遺物 地区別重量比(鍛造 剥片・粒状滓を除く)……………99</p> <p>図33 古代2の鉄生産関連遺物 出土状況(地区別・ 時期別)……………99</p> <p>図34 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 鉄生産関連遺物構 成図(古代2関係)……………102</p> <p>図35 掘立柱建物の主軸方位(中世)……………111</p> <p>図36 掘立柱建物の面積(中世)……………112</p> <p>図37 カワラケ集成図……………148</p> <p>図38 土錘の消長……………155</p> <p>図39 中世の鉄生産関連遺物 地区別重量比(鍛造剥</p>	<p>片・粒状滓を除く)……………162</p> <p>図40 中世の鉄生産関連遺物 出土状況(地区別・遺 構別)……………162</p> <p>図41 屋代遺跡群 鉄生産関連遺物構成図(中世関係) ……………163</p> <p>図42 屋代遺跡群における洪水被害(III層関係)……………186</p> <p>図43 自然災害痕跡関連遺構と遺物……………188</p> <p>図44 窪河原遺跡H2区東壁断面……………190</p> <p>図45 環境復元・動植物遺体分析地点……………191</p> <p>図46 更埴条里遺跡I～III層におけるプラント・オパ ール分析結果(1)……………193</p> <p>図47 更埴条里遺跡I～III層におけるプラント・オパ ール分析結果(2)……………193</p> <p>図48 更埴条里遺跡I地区西壁地点の主要花粉化石群 集……………194</p> <p>図49 更埴条里遺跡I地区西壁地点の主要珪藻化石群 集……………197</p> <p>図50 屋代遺跡群①区の主要珪藻化石群集の層位分布 ……………199</p> <p>図51 屋代遺跡群①区の主要花粉化石群集の層位分布 ……………199</p> <p>図52 屋代遺跡群⑥a区の主要珪藻化石群集の層位分 布……………200</p> <p>図53 窪河原遺跡の主要珪藻化石群集の層位分布……………201</p> <p>図54 窪河原遺跡の主要花粉化石群集の層位分布……………202</p> <p>図55 更埴条里遺跡K地区井戸の主要花粉化石群集の 層位分布……………203</p> <p>図56 屋代遺跡群①区の植物珪酸体群集の層位分布……………204</p> <p>図57 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近 世のモモ核とクルミ属核の産出状況……………207</p> <p>図58 屋代遺跡群 古代2・中世・近世のモモ核のサ イズ分布(SD23、SK6116)……………207</p> <p>図59 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近 世のモモ核とクルミ属核の概形……………210</p> <p>図60 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近 世のモモ・クルミ類以外の大形植物遺体1……………213</p> <p>図61 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近 世のモモ・クルミ類以外の大形植物遺体2……………214</p> <p>図62 窪河原遺跡出土の人骨1……………236</p> <p>図63 窪河原遺跡出土の人骨2……………237</p> <p>図64 窪河原遺跡出土の人骨3……………238</p> <p>図65 屋代遺跡群出土のウシ・ウマ……………248</p> <p>図66 屋代遺跡群出土のイヌ……………249</p> <p>図67 鍛冶関連遺物の分析・調査1(更埴条里遺跡) ……………258</p> <p>図68 鍛冶関連遺物の分析・調査2(更埴条里遺跡・</p>
---	---

屋代遺跡群) ……………	259	図94 緑釉陶器 古代6期～8期前半の産地別割合 ……	290
図69 鍛冶関連遺物の分析・調査3 (屋代遺跡群) ……	260	図95 緑釉陶器 古代8期後半以降の産地別割合 ……	290
図70 鍛冶関連遺物の分析・調査4 (屋代遺跡群) ……	261	図96 更埴条里遺跡出土の緑釉緑彩陶 ……………	290
図71 古代2の集落変遷図①(8期後半～10期) ……	263	図97 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の輸入陶磁器 ……	290
図72 古代2の集落変遷図②(11期～13期) ……………	265	図98 古代各期の食膳具 その4 ……………	292
図73 古代2(10世紀後半)の用水と圃場整備以前の 堰 ……………	266	図99 古代各期の食膳具 その5 ……………	293
図74 第4トレンチ 溝平面図 ……………	267	図100 古代9期～12期の土師器甕I(砲弾甕) ……	294
図75 古代2の集落変遷図③(14期～15期) ……………	268	図101 古代8期後半の土師器甕I(砲弾甕) ……	294
図76 更埴条里遺跡K地区・屋代遺跡群①区中世集落 ……………	269	図102 実年代の比定(古代2関係) ……………	296
図77 屋代遺跡群④～⑥区中世集落 ……………	270	図103 薬師寺西僧坊焼土層と大原9号窯出土資料の 対比……………	297
図78 屋代遺跡群①区中世集落・墓域を囲む道 ……	271	図104 灯明具の分類(古代2関係) ……………	299
図79 屋代遺跡群④～⑥区中世集落を囲む用水と道 ……	271	図105 灯明具の分析(古代8期後半以降) ……	300
図80 中世の水路と圃場整備以前の堰 ……………	272	図106 特殊な灯明具(古代2関係) ……………	299
図81 生仁館付近の地籍図(字生仁 1888年) ……	273	図107 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土 中世の灯明 皿……………	299
図82 日吉神社(雨宮神社)付近の区画 ……………	273	図108 屋代遺跡群出土 近世の灯明皿……………	299
図83 洪水後の更埴条里遺跡・屋代遺跡群の動向区分 図 ……………	276	図109 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の穿孔土器 (古代2関係) ……………	300
図84 倉科庄東條中心推定値の地割と字名 ……	277	図110 更埴条里遺跡出土の底部縁辺加工土器(古代 2関係) ……………	302
図85 土師器碗・小碗の形態 ……………	281	図111 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土 絵?が描か れた土器……………	302
図86 黒色土器A碗・小碗 法量からみた分類(古代 8期後半以降) ……………	282	図112 内面に暗文をもつ土器集成図(古代8期前半 以降) ……………	303
図87 黒色土器A碗の形態分類と異なる時期の同一形 態の器形(古代9期と13期) ……………	282	図113 三角ダイヤグラム位置分類図……………	307
図88 黒色土器A小碗の形態分類 ……………	283	図114 菱形ダイヤグラム位置分類図……………	307
図89 黒色土器B 特殊な器形 ……………	283	図115 各窯跡領域図……………	310
図90 灰釉陶器の時期的変化 ……………	284	図116 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土灰釉陶器 胎 土分析結果……………	311
図91 灰釉陶器 胎土分析遺物の実測図 ……	285		
図92 緑釉陶器の分類 ……………	289		
図93 緑釉陶器の消長 ……………	289		

表 目 次

表1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の時期区分……………	2	表14 古代2の瓦一覧表……………	90
表2 古代2、中・近世の周辺遺跡 1……………	8	表15 古代2の硯一覧表……………	91
表3 古代2、中・近世の周辺遺跡 2……………	9	表16 古代2の土錘一覧表……………	91
表4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の土地 利用変遷と古環境……………	22	表17 古代2の遺構出土石製品一覧……………	93
表5 竪穴建物跡(SB)一覧(古代2) ……………	50	表18 古代2の銅・青銅製品一覧表……………	94
表6 掘立柱建物跡(ST)一覧(古代2) ……………	62	表19 古代2の銭貨一覧表……………	94
表7 墓坑・井戸跡・その他の土坑(SK)一覧(古代 2)……………	62	表20 古代2、中・近世の鉄製品出土点数 器種別・ 地区別・時期(包含層)別……………	95
表8 焼土跡(SF)一覧(古代2) ……………	67	表21 古代2の鉄製品一覧表……………	96
表9 性格不明遺構(SX)一覧(古代2) ……………	67	表22 古代2の鉄生産関連遺物 地区・時期別出土量 ……………	100
表10 溝・自然流路跡(SD)一覧(古代2) ……	67	表23 古代2の鍛造剥片・粒状滓等検出結果 ……	100
表11 古代の土器 器種分類表 その1……………	74	表24 古代2の鍛冶関連遺構 遺物出土量 ……	101
表12 古代の土器 器種分類表 その2……………	75	表25 古代2の鉄生産関連遺物一覧表(構成図使用遺 物)……………	103
表13 古代の土器 器種分類表 出土遺構……………	89		

表26	竪穴建物跡 (SB) 一覧 (中世) ……………	119	遺体産出表 ……………	208・209	
表27	掘立柱建物跡 (ST) 一覧 (中世) ……………	120	表60	木製品・自然木の樹種同定結果 ……………	216
表28	墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世) ……………	122	表61	古代・中世の炭化材樹種同定結果 ……………	217
表29	炉・焼土跡 (SF) 一覧 (中世) ……………	140	表62	屋代遺跡群出土貝類 ……………	219
表30	性格不明の遺構 (SX) 一覧 (中世) ……………	140	表63	窪河原遺跡出土貝類 ……………	219
表31	溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (中世) ……………	140	表64	更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡から出土した古代2・中世の人骨の概要 ……………	232
表32	中世の土錘一覧表 ……………	155	表65	屋代遺跡群・窪河原遺跡の古代2・中世の人骨の上顎歯の計測値と比較資料 ……………	233
表33	中世遺構出土石製品一覧 ……………	156	表66	屋代遺跡群・窪河原遺跡の古代2・中世の人骨の下顎歯の計測値と比較資料 ……………	234
表34	中世の銅・青銅製品一覧表 ……………	158	表67	窪河原遺跡出土の頭蓋骨の計測値と比較資料 ……………	234
表35	中世の銭貨一覧表 ……………	159	表68	更埴条里遺跡出土の獣骨 遺構別一覧 ……………	240・241
表36	中世の鉄製品観察表 ……………	160	表69	屋代遺跡群 古代2・中世・近世遺構から出土したウマ中足骨の計測値 ……………	243
表37	中世の鉄生産関連遺物 地区・遺構別出土量 ……………	162	表70	在来馬の四肢骨計測値 ……………	244
表38	中世の鍛造剥片・粒状滓等検出結果 ……………	162	表71	屋代遺跡群出土の獣骨 遺構別一覧 ……………	244・245・246・247
表39	中世の鍛冶関連遺構 遺物出土量 ……………	162	表72	窪河原遺跡出土の獣骨 遺構別一覧 ……………	251
表40	中世の鉄生産関連遺物一覧表 (構成図使用遺物) ……………	163	表73	資料および調査項目一覧表 ……………	253
表41	中世の木製品一覧表 ……………	167	表74	各分析条件および装置一覧 ……………	254
表42	掘立柱建物跡 (ST) 一覧 (近世) ……………	174	表75	耐火度試験結果 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群) ……………	254
表43	柵列跡 (SA) 一覧 (近世) ……………	174	表76	ゼーゲルコーン温度比較表 ……………	254
表44	井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (近世) ……………	174	表77	化学成分分析結果 (EPMAによる金属部分の定量分析) ……………	255
表45	溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (近世) ……………	179	表78	鉄生産関連遺物関係 化学成分分析結果 ……………	255
表46	近世の銅・青銅製品一覧表 ……………	182	表79	羽口・炉壁関係 化学成分分析結果 ……………	255
表47	近世の銭貨一覧表 ……………	183	表80	鉄器・鉄塊関係 成分分析結果 ……………	255
表48	近世の鉄生産関連遺物 地区・遺構別出土量 ……………	183	表81	調査・考察結果のまとめ 1 ……………	256
表49	近世遺構出土石製品一覧表 ……………	184	表82	調査・考察結果のまとめ 2 ……………	257
表50	近世の木製品一覧表 ……………	184	表83	肉眼観察による灰釉陶器の分析 ……………	286
表51	更埴条里遺跡 I～III層におけるプラント・オパール分析結果(1) ……………	194	表84	灰釉陶器 胎土分析結果 (要約) ……………	287
表52	更埴条里遺跡 I～III層におけるプラント・オパール分析結果(2) ……………	194	表85	緑釉陶器一覧表 (古代2関係) ……………	288
表53	更埴条里遺跡 I～III層におけるプラント・オパール分析結果(3) ……………	194	表86	灯明具一覧表 (古代2以降) ……………	301
表54	更埴条里遺跡 I 地区西壁地点における花粉化石産出表 ……………	195	表87	穿孔土器一覧表 (古代2関係) ……………	301
表55	更埴条里遺跡 I 地区西壁地点における珪藻化石産出表 ……………	196	表88	底部縁辺加工土器一覧表 (古代2関係) ……………	302
表56	窪河原遺跡試料採取層準 ……………	201	表89	文字関係資料一覧表 (古代2以降) ……………	302
表57	窪河原遺跡の植物珪酸体分析結果 ……………	202	表90	胎土性状表 ……………	306
表58	更埴条里遺跡・屋代遺跡群 現地取り上げ大型植物遺体産出表 ……………	206	表91	タイプ分類一覧表 ……………	308
表59	更埴条里遺跡・屋代遺跡群 水洗選別大型植物		表92	化学分析表 ……………	312
			表93	組成分類表 ……………	312

第1章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 本編の範囲

1 報告書作成の方針

地域一括・時代別報告 平成7年度、上信越自動車道関係の整理がはじまるにあたり、更埴条里遺跡と屋代遺跡群（含む大境遺跡、窪河原遺跡）については、遺跡別とはせず一括して報告する方針を立てた。

間断ない遺跡 その主な理由は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群（窪河原遺跡）での全長2.3kmをほぼ全面発掘し、その間、遺跡が途切れなかったことによる。このことは、従来の遺跡別（地区別）報告では、同一時期の水田面や水路をみすみす分断してしまうこと。また、同時期の集落と水田との位置関係などといった、調査対象地域全体の様相がつかみにくくなってしまふこと。などを意味していた。

景観復元 さらに、例えばⅢ-2層とした洪水砂は、更埴条里遺跡A地区から屋代遺跡群⑥区の約2kmにわたって、9世紀末の水田や住居をバックしていた。この洪水砂を剥ぐことによって遺物・遺構の有無とは関係なく、一時期の「地表」を検出することが可能となった。これにより人間活動の痕跡を点（一定の範囲）でおさえる狭義の「遺跡」や、その集合・ネットワークとしての「遺跡群」をとらえる作業だけでなく、一時期の「景観」を復元しうる可能性が強まった。「景観」復元を目指すという課題を掲げるためにも、全地域を統合した報告書作成を選択した。

キー層による時代別分冊 時代別分冊方式をとった理由は、現地表面直下から地表下8mにわたって、江戸時代から縄文時代に至る遺構・遺物が層位別に検出できたことにある。膨大な資料をまとめるにあたり、大きな環境の変化をもたらしたと思われる層を「キー層」として、時代別の分冊方式を採用した。

自然環境分析 各時代別分冊では、「景観」を復元するにあたって狭義の考古資料以外の微化石や動・植物遺体の分析を重視し、多くの研究者に参加を願った。総論編では、それらを元に自然環境と人間の営みの相関関係とその変遷を主眼として、まとめてゆく方針を立てた。

長野自動車道関連 また、窪河原遺跡については、上記の方針から、平成2年度に調査を実施した長野自動車道分についても含めた。

分冊の区分 各分冊の表題と刊行年度は以下のとおりである。

第1分冊 『長野県屋代遺跡群出土木簡』 平成7年度刊行

第2分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡— 縄文時代（Ⅶ層～Ⅸ層）編』（本文編、遺構図版編、遺物図版・写真図版編）平成11年度刊行予定

第3分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 弥生・古墳時代（Ⅵ層）編』 平成9年度刊行

第4分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代1（Ⅳ・Ⅴ層）編』（本文編、図版編）平成10年度刊行

第5分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 古代2、中世・近世（Ⅱ・Ⅲ層）編』（本文編、図版編）
本編

第6分冊 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—含む大境遺跡・窪河原遺跡— 総論編』 平成11年度刊行予定

2 本編の範囲

第5分冊では更埴条里遺跡・屋代遺跡群ほぼ全域にみられるⅢ層（洪水砂層）堆積後の遺構を対象とするが、基本土層ではⅢ-2層、Ⅲ-1層、Ⅱ層にわたる。時期的には9世紀後半（第4四半期）以降で、1部近・現代の水路等を含むが、遺構の埋土、切り合い、出土土器および検出層位によって、「古代2」・「中世」・「近世」の3時期に分けて報告を行う。

古代2 第4分冊で報告を行ったⅣ-1層上面の遺構とはⅢ層の存在によって明確に分離できる。しかし、Ⅲ層の上面を掘り込む遺構にも古代8期の土器が出土するものが数多く存在し、洪水によって景観は一変したものの、人々の営みは断絶していない。洪水後に掘削され、8期の土器が出土するものを8期後半という時期で捉え、ここを古代2の上限とする。基本的にⅢ層上部の土壌化（Ⅲ-1層）以前に掘削され、埋没した遺構をここに含め、土器の時期では11世紀後半（古代15期）までとなる。

なお、窪河原遺跡ではⅢ-2層に対応する層が確認できず、古代2に属する遺構は存在しない。

中世 Ⅲ-2層上面では埋土にⅢ-1層の入る遺構が多量に検出された。Ⅲ層上部土壌化以前の遺構とは明らかに時期差があるこれらの遺構を古代2と区別し、中世の遺構と捉える。出土土器から12世紀～16世紀の範囲に入る。窪河原遺跡でも中世の遺構が検出されたが、Ⅲ-1層が明確に存在しない更埴条里遺跡J地区以南では、該当する遺構は確認されなかった。

近世 更埴条里遺跡J地区以南ではⅢ-2層上面、更埴条里K地区以北ではⅢ-1層上面を主として、埋土にⅡ層土を含む遺構が検出された。これらを含め、近世の焼物等が出土した遺構を近世の範疇で捉える。

また、窪河原遺跡ではトレンチ調査区内において近世の遺構の存在が確認されている。遺物の時期は17世紀～19世紀の範囲となる。同時に現代の遺物を含む堆積土をもつ水路等も検出された。昭和40年代に行われた圃場整備以前の用水路跡であり、これらを含め掲載を行った。

表1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の時期区分（網かけ部分は本編）

層位	歴代⑥区・窪河原H6区層位	時代区分	中時期区分	遺構	備考
I	I	近・現代		水路、農ほか	
II	II-1・2	近代		水田・畠	
	II-3	近世			洪水砂（善光寺地震1847年より後、明治期より前） 善光寺地震直前までの水田面数面有
	II-4			水田・畠	
	II-5以下			水田・畠	
III-1	III-1	古代2	(後半) (前半)	集落・水田・畠・用水路 遺域	Ⅲ-1層上に洪水砂 用水路の再整備
			古代15期	集落・水田？	
			古代14期	集落・水田？	
			古代13期	集落・水田？	
			古代12期	用水路	
			古代11期	集落・水田？・畠？	用水路の開発
			古代10期	集落・水田？	
			古代9期	集落・水田？	
			古代8期後半	集落・水田？	
III-2	III-2		古代8期後半		9世紀第4四半期、全域を覆う洪水砂
IV・V	第1水田対応層～第5水田対応層	古代1	古代1期～7期	集落・祭祀施設・水田・畠	紀年銘木簡 神亀3(726)年、養老7(723)年、(和銅)7(714)年、戊戌(698)年
			古代0期＝古墳9期	集落	屋代⑥区旧河道埋積進む
VI	VI	古墳	古墳1期～8期	集落・祭祀施設・水田	屋代①区などで小規模な洪水
		弥生	弥生1期～5期	集落・水路など	
VII	VII	縄文晩期後葉		焼土跡など	全域で砂堆積
VIII	VIII	縄文晩期中葉		掘立柱建物、焼土跡など	
IX	IX	縄文後期～晩期		焼土跡など	自然堤防側に砂層多数
X	X	縄文後期前葉			
XI	XI				
XII-1	XII-1				
XII-2	XII-2	縄文中期後葉		集落	
	(XII-3)				
XIII	XIII-1	縄文中期中葉			
	XIII-2				
	XIII-3				
XIV	XIV	縄文中期前葉			自然堤防側に砂層多数
XV	XV	縄文中期前葉		焼土跡・墓坑ほか	集落縁辺部か？
XVI	XVI	縄文前期後葉		焼土跡など	
XVII～XIX	XVII～XIX	不明			大形礫出土
不明	不明	縄文前期中葉			河道への遺物混入

第2節 歴史的環境と周辺遺跡

1 遺跡の位置 (図版1、図1)

更埴市・千曲川右岸 更埴市屋代から雨宮地籍、千曲川右岸の自然堤防上には多くの遺跡が立地している。これらの遺跡を総称した名称が屋代遺跡群(・雨宮遺跡群)である。その中で、古代以降に形成された比較的新しい自然堤防II群に立地するのが窪河原遺跡である。屋代遺跡群の中心部は自然堤防I群上に位置しており、調査対象範囲の一部は大境遺跡(屋代遺跡群④区の一部)と命名されている。更埴条里遺跡との境は便宜的に五十里川とした。更埴条里遺跡は自然堤防の南側に広がる後背湿地I群を中心としている。

調査対象地区の位置 上信越自動車道はこの地域を南北に縦断する形で計画され、発掘対象地区は更埴条里遺跡A地区(更埴市屋代字七ツ石)から窪河原遺跡(更埴市雨宮字窪河原)の全長約2.3kmにわたる。各調査地区の地籍名は、図版1に示したとおりである。国土座標では、更埴条里遺跡A地区南端が、第VII系X=58.8km、北端の窪河原遺跡がX=62.0km。東西は窪河原遺跡で広くY=-31.9kmから-32.10kmである。北緯36°31'50"~36°33'、東経138°8'付近にあたる。

2 大洪水(9世紀後半)以降の屋代地区

古代の小地域の把握 屋代地区における9世紀後半の大洪水以降の歴史的環境を考えるにあたって、周辺遺跡を含めてまとめたものが表2・3と図1である^(註1)。千曲川と山麓部とによって区切られる地域を古代の小地域と仮定して、小地域ごとに遺跡を把握した。古代の小地域の地形区分は、必要に応じてごくわずかな変更は加えてあるが『更級埴科地方誌』(森嶋1978)に準じている(図2)。今回対象となるのは図2に示したI、II、IV、V、VI、VII、VIIIの各地域面である。表2・3の各遺跡の存続時期は11世紀までは屋代遺跡群の編年観で示し、12世紀以降は遺物量が減少するため「12世紀~中世」「近世」という大きな尺度で分けてある。表作成にあたっての留意点は以下に示すとおりである。

- ① 対象とする時期は『古代2、中・近世編』の対象である古代8期後半以降(9世紀末以降)であるが、前時代とのつながりを考えやすくするため8期前半(9世紀後半)も含めてそれ以降とした。
- ② 掲載遺跡は『石川条里遺跡』(臼居1997)を基本として、それ以降に報告された遺跡と未掲載のものを付け加えた。今回対象の時期の遺構が未確認の遺跡も、前時代とのつながりを考える上から表に遺跡名のみを掲載している。
- ③ 新しく加えた遺跡の基準は、報告書が刊行されているか『更級埴科地方誌』(森嶋1978)等の文献に遺物の図が提示され、それによって遺跡の時期が限定できるものに限った。
- ④ 古代8期~15期の棒グラフは、住居が検出されている場合を黒ぬりとした。土抗や溝などの遺構や包含層から遺物が発見されている場合は点線で表現してある。棒グラフの幅の広狭は、遺構の多少を示す。これは各遺跡内の多少であって、他遺跡と比較してのものではない。広狭のおおまかな目安は、一番太いもので住居が3軒以上、中位の太さで2軒程度、細いものは1軒のみである。2~3時期にまたがってしか時期判断できない遺構も多く、更にすべての遺構の遺物が報告書に掲載されているとは限らないので、前述の基準にそってグラフ化を試みたが、厳密さは欠ける場合も多い。しかし、大まかな傾向をつかむには十分であると考えられる。
- ⑤ 12世紀以降の表記は以下のようである。●は住居が検出されている場合、◎は住居は未検出だが他の

遺構が検出されている場合、○は遺物のみが出土している場合。

- ⑥ 墓域の表記は墓が1基検出されている場合は①で示し、複数の墓の検出がある場合は墓群としている。人骨が出土しているものは墓と断定できるが、人骨の出土がない場合、遺物の出土状況と遺構の形状から墓と断定できるもの以外は墓としていない。また、出土遺物等により時期判断できない場合はこの表にはのせていない。したがって、実際の墓の数はこの表より多くなる。
- ⑦ 生産域のほとんどは水田遺構である。水田遺構が存在している場合は波状の黒ぬりとした。

大洪水（9世紀後半）以降の遺跡の動向 表2・3を参考にしながら屋代遺跡群とそれをとりまく周辺の遺跡のあり方をみると以下のことが指摘できる。古代の小地域を7つにわけたが、信田丘陵面（VI）、埴生・戸倉沖積面（II）、佐野川扇状地面（VII）、更級洪積台地面（VIII）の各小地域は、発掘調査が十分に進んでおらず、各地域面の中での遺跡の動向を考えるには未だ資料不足である。これに対して屋代遺跡群の属する屋代沖積面（I）と、千曲川をへだてて対岸にあたる塩崎沖積面（V）は、発掘調査件数も一定量あり、各地域面の中で居住域、墓域、生産域、中世城館跡等が総合的に把握でき、さらに各地域面との比較検討の可能な所として重要な地域といえる。また、川中島扇状地面（IV）は、発掘調査件数は多くないものの、これらの地域の動向を考える補強材量としては有効な地域となる。

今回、大洪水（9世紀後半）以降の遺跡の動向を考えるにあたって、まず、屋代遺跡群の属する屋代沖積面（I）の動向を考察の中心に据え、それとの比較資料として他の地域面の動向を考えることとする。

- ① 屋代沖積面の居住域は地形的にみて、千曲川の自然堤防上にあたるa屋代・雨宮自然堤防面（自然堤防I群）、千曲川の後背湿地にあたるb千曲川後背湿地内微高地面（後背湿地I群）、そして、山麓部に位置するc有明山山麓、倉科・森扇状地面の3つの地域に分けてとらえることができる。この3つの地域の中において遺跡の消長が非常に明確にとらえられる。

ア 古代以来絶えることなく安定的に集落域を構成していたa屋代・雨宮自然堤防面の集落は、大洪水前の古代8期前半ではほぼ一斉に廃絶してしまう。具体的には表2の居住域の項に示したが、新幹線屋代⑥区（1-2）、馬口（1-3）、城ノ内（1-4）、松ヶ崎（1-6）、高速道屋代③区（1-8）、大境（1-9）、高速道屋代④・⑤区（1-10）、新幹線屋代2区・郷津（4）、大塚（7）、高速道屋代①・②区（1-12）、灰塚（2-2）、大宮（2-5）、生仁（2-7）、新幹線更埴条里5区（6）等があげられる。

イ 逆に8期後半～9期以降、集落は、b千曲川後背湿地内微高地面と、c有明山山麓の遺跡に明確に移動する。この地域で高速道更埴条里K地区（8-2）や新幹線更埴条里3・4区（5）などのように9世紀代からの延長で継続的に営まれる集落も存在するが、b千曲川後背湿地内微高地面の高速道更埴条里I・J地区（8-3）、c有明山山麓の大穴（11）、清水製鉄（12）等は、この時期に新たに登場する集落として注目される。

ウ これらの集落は12～13期ころを境に衰退し始め、それに代わって約100年弱の空白期間ののち、伝統的居住域であったa屋代・雨宮自然堤防面に集落が再び営まれ始める。具体的にあげるならば、高速道屋代③区（1-8）、高速道屋代①・②区（1-12）、高速道屋代④区（1-10）、生仁（2-7）等である。なお、これらの集落の住居数は8期前半までに展開されていた住居数と比較すると少ないものとなる。

エ 12世紀～中世では、新しく登場する集落として窪河原（21）がみられるが、古代13期以降集落が継続していた地域において住居が営まれる傾向が強い。近世では遺物の出土はみられるものの、住居遺構は確認されていない。

居住域のあり方について他の地域面と比較すると塩崎沖積面（V）でも、古代以来安定的に遺跡が継続していた松節・横田自然堤防面において、集落の多くが8期前半に廃絶する（新幹線篠ノ井（39-1）、大規模自転車道（39-2）、市道山崎唐猫線（39-3）、聖川堤防（39-5）、市道角間線（40-1）、塩崎小学校（40-

- 2)、市道篠ノ井253号線(40-6)等)。それに代わって、高速道鶴前(44-2)など山麓部に集落が展開する点に共通性がうかがえる。更に自然堤防上でも12~13期前後に、約100年弱の空白期間において、新幹線篠ノ井(39-1)、聖川堤防(39-5)等に再度集落が展開する等共通点がみられる。また、塩崎沖積面(V)の猪平(46)、佐野川扇状地面(VII)の池尻(80)等の平地から離れた山中に新たな集落が短期間営まれる点は注目される。川中島扇状地面(IV)では8期前半において集落の廃絶はなく8期以降も継続する集落が多い。これは屋代沖積面でのb千曲川後背湿地内微高地面の集落のあり方と共通している。
- ② 墓については、8期~15期では集落の内部又は、集落の周辺にわずかに造られる。明確に墓と断定できるもの以外表に載せなかったため、実際にはこれより多いと思われるが^(註2)、各時期に1遺構前後が散在的にみられる程度である(表2、I 屋代沖積面の墓域の項参照)。12世紀~中世になると単独の墓ではなく墓群が形成され、墓の数も格段に多くなる。火葬施設の検出される例もみられる(窪河原(21)、高速道屋代④区・⑥区(1-10)、新幹線更埴条里5区(6)等)。近世の墓は未検出である。ここで述べた屋代沖積面にみられた墓域の動向は川中島扇状地面(IV)では資料が不十分だが塩崎沖積面(V)ではほぼ同様な傾向がうかがえる(表2・3の墓域の項参照)。
- ③ 生産域は、8期前半の大洪水の砂層にパックされた層位の上で水田層が複数検出される。明確に時期の特定をすることはむずかしいが古代8期後半以降、中世・近世も含めて水田経営が行われていたことは確実である(表2・3の生産域の項参照)。屋代沖積面(I)で時期が特定できる水田址として確認できるのは、窪河原(21)と屋代清水(10)のみで、両者とも中世と近世の水田址が検出されている。
- ④ 中世城館跡については、山上に立地するものと平地に立地するものを分けて図表化した(表2・3の中世城館跡の項参照)。山上に立地するのはいわゆる城郭で、屋代沖積面(I)の土口將軍塚古墳がある薬師山山上に存在しない点だけは例外であるが、平地への見通しの良い山上や尾根の先端部にまんべんなく配置されている。平地に立地するのは、たとえば館とか屋敷とか呼ばれるものである。屋代沖積面(I)では、それに付随すると考えられる大溝の発掘例はあるが、館や屋敷そのものは発掘されていない。館、屋敷そのものが発掘された例としては塩崎沖積面(V)の高速道石川条里(47-1)と川中島沖積面(IV)の於下館(31)があげられる^(註3)。
- ⑤ 文献史料の面からみたI 屋代沖積面での状況は、10世紀前半の成立となる『延喜式』及び『倭名鈔』には埴科郡の郷名が7郷記載されている。このうちでI 屋代沖積面に対応すると思われるのは屋代郷、倉科郷、大穴郷である。貞観八年(866年)に定額寺に列せられた埴科郡の屋代寺は、雨宮廃寺跡(2-4)の可能性が高い。延喜式内社では粟狭神社、祝神社があげられよう。12世紀~中世になると、屋代沖積面には加納屋代四ヶ村と倉科庄という庄園が成立し、村上氏、屋代氏といった武士が登場する時代へと展開していく。

註1 川中島扇状地面(IV)の南宮遺跡(22)の報告例の調査は長野市教育委員会1992『南宮遺跡』で行った。南宮遺跡は長野冬季オリンピックの開会式会場の敷地内にあり、9世紀末以降の大集落であるが、報告書作成中のため表2の「居住域」では8~12期の部分に斜線をつけている。また、塩崎沖積面(V)の高速道篠ノ井遺跡(39-4)の墓については、『概要・遺構編』第22表「墓一覧表」に掲載のあるもので獣骨出土のものを除いて時期の特定をした。その結果は古代6~8期以降のもの3遺構、9世紀代2遺構、9~10期1遺構、11~12期1遺構、13期1遺構、10世紀代1遺構である。2-⑥の項で説明する基準での特定のため、墓の数は「墓一覧表」よりも少なめになっている。

2 屋代遺跡群関係で前述の基準で表化した場合、除外してしまったものとして屋代遺跡群①区のSK358、SK359、SK360があげられる。これらは中世より古く、古代2の遺構であることは明確だが年代を決定できる出土遺物がないため表化できなかった。

3 中世城館跡全搬については河西克造氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

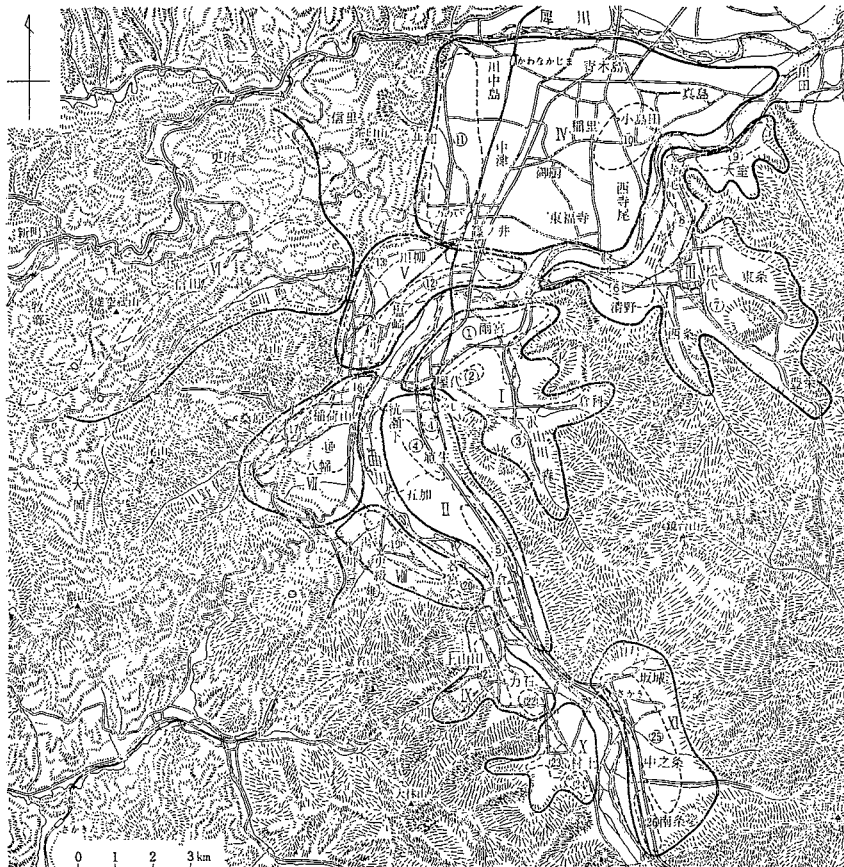
報告書は『古代1編』に記されたもの以外について記述する。

戸倉町誌刊行会 1999 『戸倉町誌第二巻 歴史編上』

森嶋 稔 1978 「第二節 更埴地方古代の歴史地理的把握」『更級埴科地方誌』第二巻

白居直之 1997 「第二節 歴史的環境と周辺遺跡」『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡 第1分冊』
(財)長野県埋蔵文化財センター

(財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内その4 篠ノ井遺跡群 概要・遺構編』



地形面	地域面
I 厩代沖積面	① 雨宮・厩代自然堤防面
	② 厩代微高地面
	③ 沢山川扇状地面
II 埴生・戸倉沖積面	④ 埴生微高地面
	⑤ 戸倉微高地面
III 松代沖積面	⑥ 清野自然堤防面
	⑦ 松代複合扇状地面
	⑧ 寺尾自然堤防面
IV 川中島扇状地面	⑨ 大釜自然堤防面
	⑩ 小島田微高地面
	⑪ 共和山麓台地面
V 塩崎沖積面	⑫ 松籐・横田自然堤防面
	⑬ 塩崎山麓台地面

地形面	地域面
VI 信田丘陵面	⑭ 聖川水系面
	⑮ 原川水系面
VII 佐野川扇状地面	⑯ 彌壽山自然堤防面
	⑰ 桑原山麓台地面
	⑱ 佐野川微高地面
VIII 更級洪積台地面	⑲ 更級洪積台地面
	⑳ 岩宮山麓台地面
IX 上山田洪積台地面	㉑ 上山田洪積台地面
	㉒ 力石微高地面
X 村上洪積台地面	㉓ 上平山麓台地面
	㉔ 網掛洪積台地面
XI 坂城洪積台地面	㉕ 坂城洪積台地面
	㉖ 南条自然堤防面

更埴地方歴史地理的環境図

図2 古代の小地域 地域区分 (更級埴科地方誌 第二巻 P450より転載)

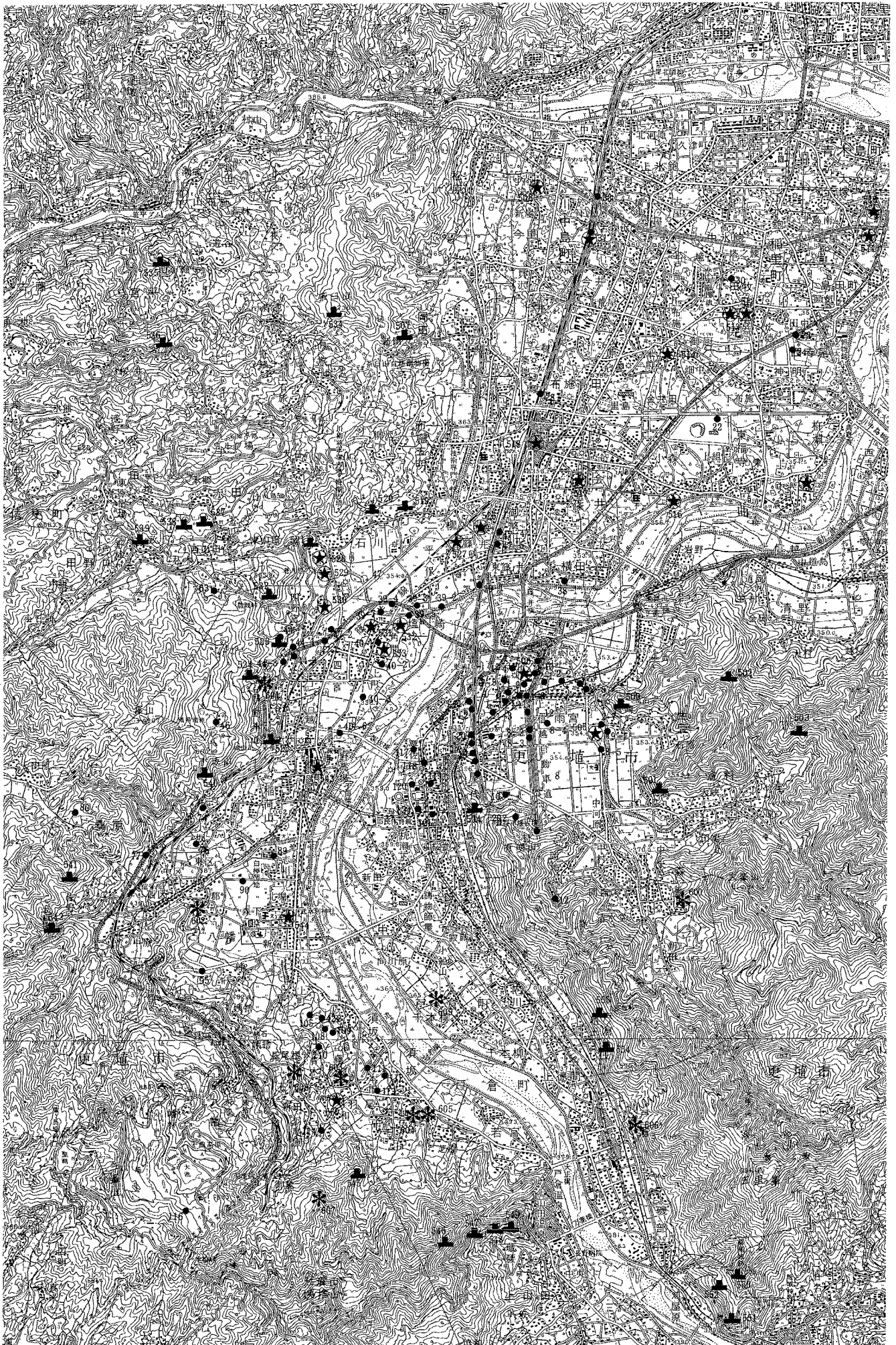


図1 古代2、中・近世の周辺遺跡

表2 古代2、中・近世の周辺遺跡1

I 屋代沖積面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世		近世			
			8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期				
居住域	屋代遺跡群(1)	21 窪河原								●	○			
		1-1 地之目・一丁田								◎	◎			
		1-2 屋代6区												
		1-3 馬口												
		1-4 城ノ内								◎				
		1-5 荒井								◎				
		1-6 松ヶ崎								◎				
		1-7 北中原												
		1-8 屋代②区								○	◎			
		1-9 大境								○				
		1-10 屋代④・⑤・⑥区								●	◎			
		4 屋代2区・郷津												
		7 大塚												
		1-12 屋代①・③区								●	◎			
		2-1 下条												
		2-2 灰塚												
		雨宮遺跡群(2)	2-3 大辻堂											
2-4 雨宮廃寺跡														
2-5 大宮														
2-6 唐崎														
2-7 生仁									◎					
土口遺跡群(3)	3-1 土口													
	3-2 日ノ尾													
千曲川後背湿地内微高地面 更埴条里遺跡(8)	5 更埴条里3・4区													
	6 更埴条里5区													
	8-2 更埴条里K地区													
	8-3 更埴条里J地区													
生置遺跡群	8-4 町田													
	9-1 島・道前													
有明山麓倉科・森脇状地面 有明山森倉科	10 屋代清水								◎	◎				
	11 大穴									○				
	12 清水製鉄									○				
	202 森将軍塚古墳								◎	○				
	13 中ノ宮													
	14 黒山													
	15 北山													
16 南薬木														
17 百瀬														
墓域	屋代遺跡群(1)	21 窪河原										火葬施設・墓群		
		1-2 屋代6区												
		1-9 大境											墓群	
		1-10 屋代④・⑤・⑥区											火葬施設・墓群	
		1-12 屋代①・③区											墓群	
		雨宮遺跡群(2)	2-7 生仁											墓群
			千曲川後背湿地内微高地面 更埴条里遺跡(8)	6 更埴条里5区										
		8-2 更埴条里K地区												墓群
		8-3 更埴条里J地区												
		9-1 島・道前												
生置遺跡群	202 森将軍塚古墳											墓群		
	生産域(水田跡)	19 屋代1区											時期不明の水田	
20 屋代3・4区,古道														
1-3 馬口														
1-7 北中原														
1-6 松ヶ崎														
1-11 町浦														
1-12,1-8 屋代①・②・③・④区														
1-9 大境														
8-5 本誓寺														
10 屋代清水												水田跡		
後背湿地 更埴条里遺跡(8)	8 更埴条里											水田跡		
	8 更埴条里1965年													
	18 更埴条里2・3区													
	1-2 屋代6・7区													
旧河道	1-10 屋代6区													
	21 窪河原											水田跡		
中世城館跡	山上	500 唐崎山城										■		
		501 鷲尾城										■		
		502 天城城										■		
		503 鞍骨城										■		
		504 屋代城										■		
		505 生仁館										■		
その他(経塚)	平地	506 屋代古城										◎		
		600 大峰経塚											○	

IV 川中島扇状地面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世		近世	
			8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期		
居住域	a 扇頂部	22 南宮(註1)										
		23 田中沖I										○
		24 田中沖II										◎
		25 粟川原										◎
		26 八幡原										
		27 花立										
		28 築地										●
	b 扇中央部	29 上九反										
		30 田牧居跡										◎
		31 於下										◎
	c 扇頂部	32 長峰										◎
		33 今里										◎
		34 寺内										○
		35 新田										
		36 湯沢尻										
		37 光林寺裏山										
		31 於下										
墓域	c 扇頂部	31 於下										火葬施設
		30 田牧居跡										
生産域	山上	31 於下										時期不明の水田
		507 篠の城										■
中世城館跡	平地	508 内後館										◎
		510 於下館										◎
		511 名称なし										◎
		512 大塚館										◎
		513 法田城										◎
		513 東昌寺館										◎
		514 富部館										◎
		515 杵淵館										◎
		516 小森館										◎
		517 横田城										◎
518 布施城										◎		

VI 信田丘陵面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世		近世	
			8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期		
居住域		48 小山田池										
		49 寺屋敷										
		50 卒塔原										
		51 鹿の入										
		52 大崎										
		53 天神山										
		54 かじか沢										
		55 瀬原										
		56 天池										
		57 寺平										
		58 家の人										
		59 釜上										
		60 大清水										
		61 大峰(即峰権)										
		62 平林										
		63 宮ノ下										
		64 薬山										
		65 戸口										
		66 大上										
		中世城館跡	山上	67 山田屋敷								
534 有放城												■
535 須立城												■
536 新山城												■
537 車の城												■
538 西の城												■
539 和田城												■

II 埴生・戸倉沖積面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世		近世			
			8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期				
居住域	栗佐遺跡群	117 諏訪南沖Ⅲ										●		
		118 北村										◎?		
		119 五輪堂										◎		
		120 南沖												
		121 小島												
		122 大炊												
		123 西五子												
		123 五輪堂												
		墓域	栗佐遺跡群	119 五輪堂										◎
				124 東沖										
生産域		121 小島										時期不明の水田		
		551 徳城												
中世城館跡	山上	552 葛尾城根小屋										■		
		553 葛尾城										■		
		554 壺井城										■		
		555 宮城峠小屋										■		
		504 屋代城										■		
		606 経ヶ峰経塚(承安二年(1172年)銘)											○	
609 千本柳経塚											不明			

表3 古代2、中・近世の周辺遺跡2

V 塩崎沖積面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世	近世
			8期	9期	10期	11期	12期	13期		
居住域	a 松節・横田自然堤防面									
	横田遺跡群(38)									
	38-1	富士宮							○	○
	39-1	篠ノ井	■						●	
	39-2	大規模自転車道							○	
	39-3	市道山崎唐磁線								
	39-4	篠ノ井	■	■	■	■	■	■	○	
	39-5	聖川堤防							○	
	39-6	聖徳橋								
	39-7	中部電力鉄塔								
	39-8	市営体育館								
	40-1	市道角間線							○	○
	40-2	塩崎小学校								
	40-3	市道松島小田井神社								○
	40-4	伊勢宮								
	40-5	塩崎中条								
	40-6	市道篠ノ井第23号線							○	
	b 塩崎山麓台地面									
	41	湯の入上								
	石川万田遺跡群(42)									
	42-1	石川万田遺跡群								
	上石川遺跡群(43)									
	43-1	上石川廃寺跡								
	523	塩崎城見山砦							○	
44-1	鶴前(中電鉄塔)								○	
長谷鶴前遺跡群(44)										
44-2	鶴前							○	○	
44-3	鶴前七尋岩塚									
44-4	長谷									
44-6	上見林									
高地面										
45	下辺									
46	猪平							○	●	
c 千曲川後背窪地内微高地										
47-1	石川条里							●	○	
47-2	耕下							○	○	
石川条里遺跡(47)										
47-3	消防塩崎分署									
47-5	石川条里							●	○	
墓域										
a 松節・横田自然堤防面										
篠ノ井遺跡群(39)										
39-1	篠ノ井	○								
39-2	大規模自転車道									
39-4	篠ノ井(註2)	①	①	①	①	①				
塩崎遺跡群(40)										
40-1	市道角間線	①								
b 塩崎山麓台地面										
523	塩崎城見山砦								墓群	
長谷鶴前遺跡群(44)										
44-2	鶴前				①				墓群	
生産域(水田跡)										
石川条里遺跡(47)										
47-1	石川条里							水田址	水田址	
47-4	石川条里							水田址	水田址	
47-5	石川条里							水田址	水田址	
39-7	篠ノ井遺跡群(中電鉄塔)									
39-5	聖川堤防									
39-1	篠ノ井									
中世城館跡										
山上										
519	二つ柳城								■	
520	湯の入城								■	
521	石川城								■	
522	薬山砦								■	
523	見山砦								■	
524	塩崎城								■	
525	赤沢城								■	
526	大塔城								■	
527	塚田								■	
528	堀の内								■	
529	堀内								■	
530	四宮館								■	
531	善右エ門屋敷								■	
532	下耕								■	
533	殿屋敷								■	
その他(経塚)										
47-1	石川条里								○	
601	長谷経塚(仁平元年(1151年)銘)								○	

- 8~15期の棒グラフは住居の有無で、大まかなめやすは、
- ……3軒以上 ■……2軒程度
- ……1軒
- 12C~中世、近世の表記は、
- ……住居検出
- ◎……住居以外の遺構検出
- ……遺物出土
- 墓域の表記は、
- ①……1基検出
- 墓群・複数検出
- 生産域の黒めりは水田遺構存在

VII 佐野川扇状地面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世	近世
			8期	9期	10期	11期	12期	13期		
居住域	a 稲荷山自然堤防面									
	桑原山麓台地面									
	68	大牧								
	69	元町								
	70	治田地下								
	71	治田池畔								
	72	後安								
	73	湯ノ崎								墓群
	74	小坂西								●
	75	小坂西沖								
	桑原遺跡群									
	76	返町	◆◆◆							
	77	鳥林	—							○
	78	雁塚								
	79	篠山								
	80	池尻								
	81	佐野山								
	82	佐野山								
	83	峠								
	84	志川								
	85	六反田								
	86	よこまくら								
	87	れんでは								
	88	よこみぞ								
89	青木	—	◆◆◆?						●	
90	北福付	—								
91	真光寺									
92	青木庵寺遺跡									
d 八幡山麓部										
93	赤坂									
94	石原A									
95	白石	◆◆◆							○	
96	社宮司									
97	峯									
98	宮川									
99	外西川原									
100	東中曾根									
101	西中曾根									
102	舞台									
墓域										
b 桑原山麓台地面										
74	小坂西								火葬施設	
c 佐野川微高地面										
89	青木								墓	
中世城館跡										
山上										
525	赤沢城								■	
540	小坂城								■	
541	熊山城								■	
542	佐野城								■	
543	稲荷山城								■	
544	八幡松田館								■	
その他(経塚)										
602	矢崎山経塚								○	

VIII 更級洪積台地面	番号	遺跡名	9C		10C		11C		12C~中世	近世
			8期	9期	10期	11期	12期	13期		
居住域	横沢遺跡群									
	103	下吉野A								
	104	下吉野C								
	105	下吉野C-1								○
	106	下吉野C-2								
	107	西久保								
	108	上ノ田	■		◆◆◆					○
	109	平田								
	110	龍田	◆◆◆							
	高地面									
	111	三島平	◆◆◆							○
112	巾田	—								
113	円光房								●	
114	和合			◆◆◆?						
115	花柄									
墓域										
横沢遺跡群										
108	上ノ田				①					
109	平田				①					
中世城館跡										
山上										
545	中院林城								■	
546	證城								■	
547	若宮入山城								■	
548	荒砥小城								■	
549	荒砥城								■	
平地										
550	明徳寺館								○	
603	堂城山経塚								○	
604	徒士山経塚								○	
605	小丸山経塚								不明	
607	扇平(密教法具)								○(平安末?)	
608	長尾根経塚								不明	
422	西久保瓦窯								○	

第3節 地形・地質環境と基本層序

1 善光寺平南部の地形・地質環境

(1) 長野盆地南部の地形 (図3)

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められる。長野市街地の中心部は裾花川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南北に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1/1000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井(東篠ノ井、横田)、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側には後背湿地となる湾入低地が形成されている。

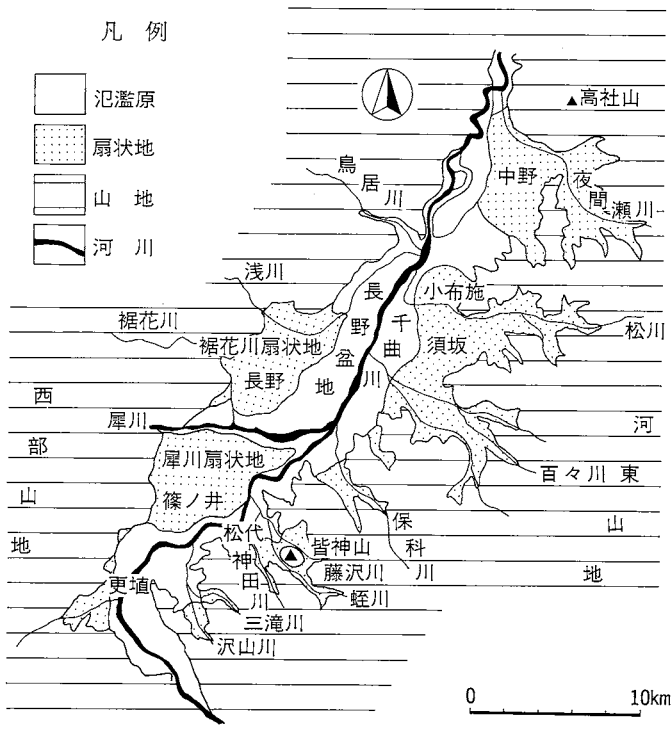


図3 長野盆地の地形 (『中部地方I』赤羽・花岡1988に加筆)

(2) 遺跡周辺の地形 (図4)

長野盆地東側の河東山地は壮年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西—南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようなものである。更埴条里遺跡はその枝状に広がる一重山と唐崎山の尾根に囲まれた大規模な後背湿地に位置し、屋代遺跡群は更埴条里遺跡の北側に形成されている雨宮の自然堤防上に位置する。

地形区分 自然堤防の頂部は北西—南東方向に傾斜が見られ、雨宮集落では長野電鉄河東線雨宮駅の南部にある雨宮坐日吉神社の辺りで標高355.9m、屋代工業団地周辺では長野電子工業辺りで標高356.7m、屋代高校北部で357.5mである。雨宮の自然堤防の北・西側には比高差約1～1.5mの明瞭な小崖が発達し、崖に沿って幅約50m～180m、長さ約5kmにわたって数本の明瞭な旧河道が確認できる。この小崖をもって氾濫原をI群・II群に区分した。I群は細粒に堆積を主とし、II群はそれより粗粒の堆積物からなる。更埴条里遺跡は後背湿地I群に、屋代遺跡群は自然堤防I群に、窪河原遺跡は旧河道に囲まれた自然堤防II群に位置する。自然堤防I群と後背湿地I群との境界は不明瞭である。発掘で得られた所見では後背湿地I群と区分されている中にも古代の集落域が存在する。堆積物は連続しており岩相の変化に乏しいため、地形分類図では五十里川付近を境界とした。自然堤防上にも細流などの働きによってできた浅い帯状の凹地が見られる。後背湿地は全体的に北西部から南東部へ傾斜しており、標高は最も高いところで一重

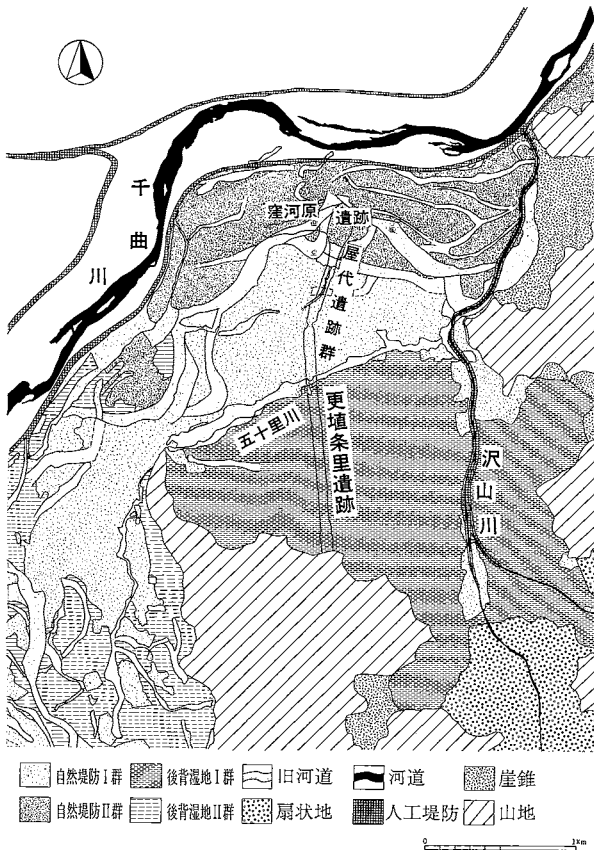


図4 地形分類図(遺跡周辺)

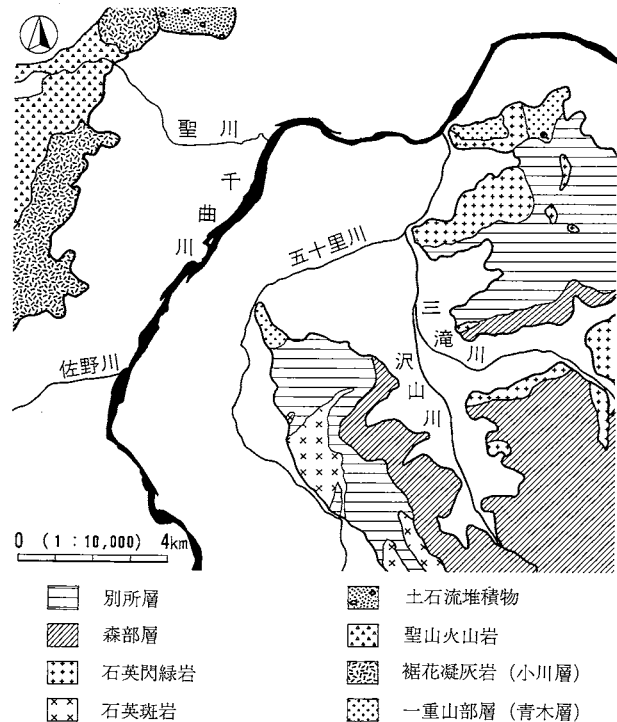


図5 遺跡周辺の地質(加藤・赤羽1986に加筆)

山の東側で358m、最も低いところは森、中河原の西側で356.6mを測る。後背湿地の中にも微高地や帯状の凹地が認められる部分もある。更埴条里遺跡新幹線地点の調査では凹地部分での旧河道は検出されていない。埋没微高地の検討は今後の課題である。

五十里川は戸倉町徳間地籍で屋代堰として千曲川から取水され、戸倉町内川の東方で戸倉用水と合わせて五十里川となる。中州状の微高地の間をぬうように旧河道の微低地の中を流れ、屋代の市街地を通り一重山で東西方向に流れを変えて雨宮の自然堤防と後背湿地とのほぼ境を流れる。唐崎山西方で沢山川と合流する。現在は河川改修が進み直線的であるが、かつては自然の姿で流れ小さな解析谷を形成していた。

森・倉科にはそれぞれ鏡台山・三滝山から流れ出る沢山川・三滝川による表面勾配36/1000の急傾斜の崖錐扇状地が形成されており、集落はその斜面上に立地する。生萱・土口は崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。沢山川は三滝川を途中更埴東小学校あたり(かつては少し下流の生仁)で合わせ、笹崎(業師山の先)で千曲川と合流する。沢山川は天井川となり、周囲に微高地を形成している部分もある。

新第三系の地質 河東山地には中新世の堆積岩と中新世貫入岩類が分布し石材として利用されている。中新世前期～中期の内村層上部に相当する横尾部層、森・豊栄部層は、緑色凝灰岩・凝灰角礫岩と黒色頁岩・砂岩からなる。森部層の模式地は更埴市森の沢山川上流である。倉科周辺一大峰山周辺一沢山川周辺に分布する。黒色頁岩層を主とし新鮮な部分はかなり硬質である。中新世中期の別所層は更埴市森將軍塚古墳付近採石場を模式地とし、主に河東山地から長野盆地へ鋸歯状に突出した尾根に分布する。黒色頁岩を主体とするが、最下部・中・上部は緑色凝灰岩が主である。森部層の黒色頁岩と肉眼では区別がつかないが、森部層の方が硬質であると感じられる。遺跡で出土する石器の石材は森部層または別所層の黒色頁岩を使用していると思われる。

中新世の貫入岩類は長野盆地底には分布しない。中～後期中新世に何回かにわけて貫入した石英閃緑岩は更埴条里遺跡・屋代遺跡群の東方約2～3kmの更埴市生萱、土口、倉科に分布する。生萱には大正時代に設置された採石場があり、石英閃緑岩は生萱石と呼ばれ主に間知石や割栗石として利用されていた。豎

穴住居の敷石や炉・カマド石、礎石建物の礎石などはこの石英閃緑岩を使用している。調査地南方の有明山南東方には石英斑岩が分布し、白色―灰白色で少量の大型石英の斑晶がみられる。

千曲川を挟んで対岸の西部山地に分布する中新世後期の小川層に相当する裾花凝灰岩部層も、カマド石の一部としてまれに使用されている。炭化物の付着や赤褐色の変色がみられ風化が著しいが、黒雲母・石英の斑晶の目立つ粗粒のこの凝灰岩は岩相からみて下部層にあたり、長野市四野宮、長谷付近に分布するものと考えられる。

2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の層序

更埴条里遺跡・屋代遺跡群に分布する堆積層を発掘調査・道路公団ボーリングの資料を基にセツ石層、反町層、屋代層の3つに大区分し、さらに屋代層を細分した(図6)。屋代層は地層命名規約(日本地質学会1952 地質雑誌58巻p112-113)に基づいているが、セツ石層・反町層はボーリング調査位置の小字名であるため今後変更の必要があるかもしれない。ボーリング資料は既にサンプリングから時間が経過しており、保存状態も悪く肉眼観察に耐えられないため、全て道路公団のボーリング調査報告書の結果を使用している。下位より順に説明する。

(1) セツ石層

模式地 更埴条里遺跡A・B地区 ボーリング資料

分布 更埴条里遺跡A・B・C・D・E地区

有機質の粘性土を主体とし砂質土、砂礫土との互層である。地表面下22.2~25.2m以深から50.5m(標高332~304m付近)までは確認されている。層厚約27mである。下限は不明である。上位の反町層との間には不整合があると考えられる。

粘性土はDc 1、Dc 2、Dc 3、Dc 4に区分されている。Dc 1は茶褐色の有機質粘土~腐植土で若干炭化した木片が点在する。Dc 2は帯黒褐色~茶褐色の有機質粘土~シルトである。Dc 3は茶褐色~灰色の有機質粘土~粘土である。Dc 4は帯緑灰色の径1~2cmの角礫を混入する粘土である。Dc 1~Dc 3は腐植物を多量に混入する。粘土は部分的に含水大でやわらかい層準もあるが、全体的に含水少なく硬い。

砂質土は青灰色~黒灰色の中~粗粒砂、礫混じり中~粗粒砂である。礫は径5mm~2cm大の軽石を主とする。スコリアを多量に含み、まれに凝灰岩礫も含む。上位の反町層と比較すると相対的に高いN値が測定された。

砂礫土は帯灰青色の径5~10mmの亜円~円礫を主とし、マトリックスは粘土である。含水は少ない。

ボーリング調査結果に地質時代は更新世、地層区分は古期氾濫原堆積層と記載があることから、セツ石層の堆積時期は20,000年以前と推定した。年代測定を行っていないので詳しいデータはない。

(2) 反町層

模式地 更埴条里遺跡F・G地区 ボーリング資料

分布 更埴条里遺跡・屋代遺跡群全体に確認される。

層相は変化し更埴条里遺跡A・B地区は砂を主体とし砂礫層を挟み、他の地区は礫を主体とする砂礫層である。地表面下5.8m~11mから22m(標高348~332m付近)に分布し、層厚約9~16m程度である。下位のセツ石層を不整合で覆い、上位の屋代層に不整合で覆われると考えられる。

公団資料では更埴条里遺跡F~G地区付近を主な分布としており、記載は以下の通りである。帯緑灰色、帯黒灰色、茶褐色の礫径2~5cmの亜円~円礫を主とした砂礫層である。径7~10cmの礫を点在し、

砂をブロック状・縞状に取り込むこともある。マトリックスは中～粗粒砂で粘土分も多く認められる。更埴条里遺跡A・B地区～E地区にかけては層相変化し砂質土に漸移していると考えられる。

屋代遺跡群③、④区となると、帯青黒灰色、帯緑黒灰色、帯茶褐色の径2～5cmの亜角～円礫を主体とする。径6～10cmの礫を点在する。マトリックスはシルト～粗粒砂である。

年代測定は行われていないが、約10,000年前から20,000年前までと推定される。その理由として上位の下部屋代層の下部の層準であるXVIが縄文時代前期後葉の諸磯式土器を包含するため約5,000年前の年代が与えられること、ボーリング資料と調査での所見を合わせると反町層の最上部と下部屋代層のXVIとのレベル差が2m程度であることから、堆積物の砂礫からシルトへの急激な変化を不整合面としてとらえるなら更新世～完新世の境?とするのが適当と思われる。

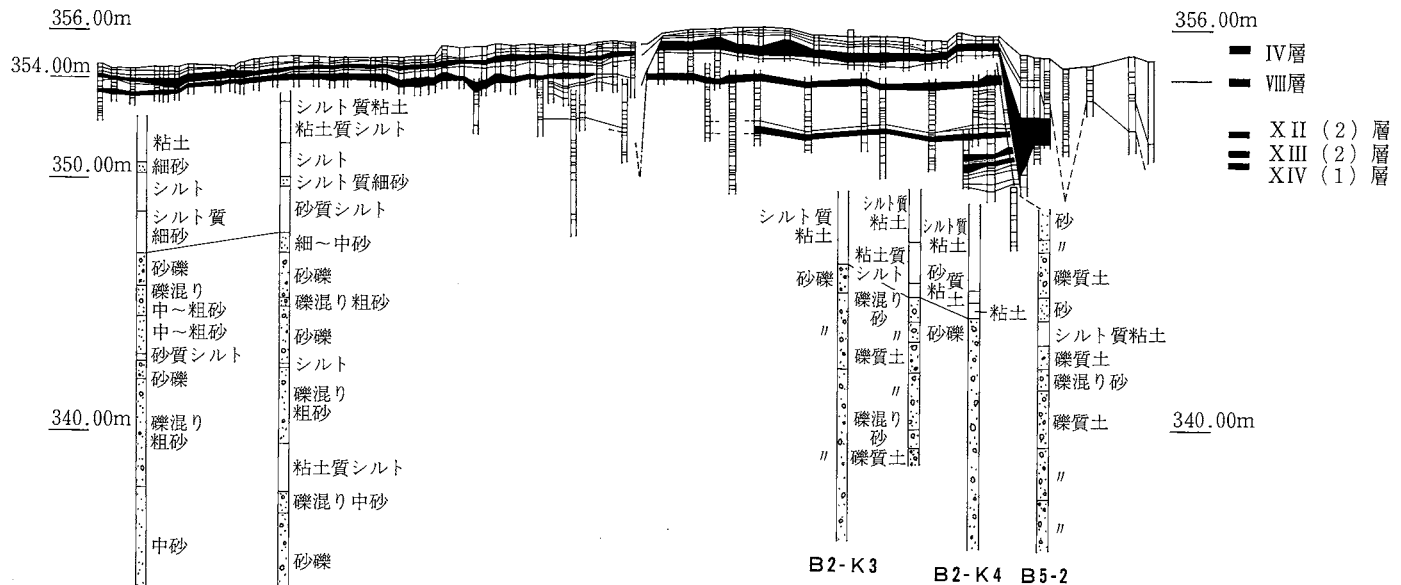
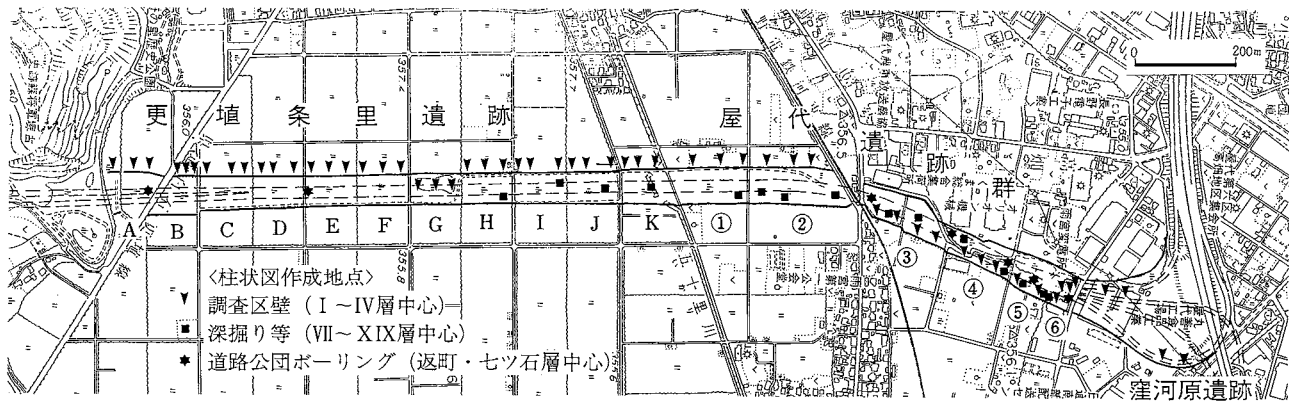
(3) 屋代層

模式地・分布 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡全域

調査地全域に分布する完新世の堆積物である。発掘調査により上部・中部・下部の3つに分け、さらに色調・粒度、遺物の包含の有無などによってI層からXIX層に細分した。屋代層上部層はI層からIII層、屋代層中部層はIV層からVI層、屋代層下部層はVII層からXIX層である。窪河原遺跡での屋代層中部層が砂礫層であることを除けば屋代層はほとんどシルト～粘土質で、細粒の堆積物から構成されていることが大きな特徴である。更埴条里遺跡A地区と屋代遺跡群⑥区とでは同一の層準でも層相の変化はあるが、自然堤防の堆積物・後背湿地の堆積物といった明確な区分はできない。(更埴条里遺跡A・B地区に分布するV層のみIV層と同時異相の関係にある。)一般的に自然堤防と背後の後背湿地との境は不明瞭なことが多いが、本遺跡では堆積物からの区分もできないのでより不明瞭になっている。

引用文献

- 更級・埴科地方誌刊行会 1986 『更級・埴科地方誌 自然編』
- 建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所 1993 『信濃の巨流 千曲川』
- 加藤 一・赤羽貞幸 1986 『長野地域の地質』地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 地質調査所
- 大矢雅彦編 1983 『地形分類の手法と展開』古今書院
- 赤羽貞幸 1995 「最終氷期以降における長野盆地の古環境」『第四紀研究』27, P37-44
- 井関弘太郎 1983 『沖積平野』東京大学出版会
- 日本道路公団関東第二建設局上田工事事務所 1989 『上信越自動車道 更埴地区第二次土質調査報告書』日本物理探査株式会社
- 日本の地質『中部地方I』編集委員会 1988 『中部地方I』共立出版
- 更埴市史編纂委員会 1994 『更埴市史 第1巻 古代・中世編』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1992 『長野県埋蔵文化財センター 年報』8
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1993 『長野県埋蔵文化財センター 年報』9
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1994 『長野県埋蔵文化財センター 年報』10
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群一弥生・古墳編一』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『新幹線 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』
- 長野県教育委員会・更埴市教育委員会 1968 『地下に発見された更埴条里遺構の研究』



地質時代	層序	模式柱状図	層厚 (m)	岩相	考古時代	遺構・遺物	
完 世	上 部	I	0.1~0.4 0~0.3	灰褐色、砂質シルト層	現代		
	II		(~3.1)	灰褐色、粘土質シルト層	中・近世	水田・畠・集落	
	III		0.1~0.5 (~1.6)	1は黒褐色、2はにぶい黄褐色 灰黄褐色~灰褐色、細粒砂層	平安~中世	水田・畠・集落	
	IV・V		0.05~0.6 (~2.7)	IVは黒褐色~暗褐色、粘土質シルト Vは灰黄褐色~オリーブ黒色、シルト混じり粘土層	飛鳥~平安	水田・畠・集落	
	VI		0.04~0.3	黒褐色、粘土質シルト層	弥生~古墳	水田・集落	
	VII		0.1~1.2	にぶい黄褐色~褐色、砂質シルト層	縄文晩期後葉	焼土跡・土器・石器	
	VIII		0.1~0.3	黒褐色~暗褐色シルト層	縄文晩期中葉	集落	
	IX		0.8~1.1	にぶい黄褐色~黄褐色、シルト層、砂層を挟む	縄文晩期前半	焼土跡・土器・石器	
	X		0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器	
	XI		0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト~細粒砂層		焼土跡・土器・石器	
	新 代	1			にぶい黄褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
		2			黒褐色、シルト層	縄文中期後葉	集落
		3			にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
		0			暗褐色、シルト層	縄文中期中葉	焼土跡・土器・石器
		1			灰褐色~にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
		2			灰黄褐色~暗オリーブ褐色、シルト層		集落
		3			暗灰黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
		1			オリーブ黒色、シルト層、砂層を挟む	縄文中期前葉	集落
		2			にぶい黄褐色~暗灰黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器
3				にぶい黄褐色、シルト層		焼土跡・土器・石器	
紀	XV		0.2~0.5	暗オリーブ褐色~灰色、シルト層		焼土跡・土器・石器	
	XVI		0.6	黒~灰色、シルト層	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器	
	XVII		0.6	黒~灰色、シルト層、しまりよい			
	XVIII		0.9	オリーブ黒~灰色シルト層、しまりよい	?	大形礫1点	
	XIX		0.4以上	オリーブ黒色、シルト層、しまりよい			
	返町層		14.7 ~ 17.6	砂礫層 砂主体 (BKs) 礫主体 (BYS)			
	七ツ石層		28.3以上	有機質粘土層			

図6 総合柱状図 (『古代1編』を改訂)

3 調査対象となった層序

(1) 層名

屋代層（I～XIX層） 屋代層のうち、発掘調査の手が届いた層をI～XIX層に区分した。XVII・XIX層を除く各層では遺構・遺物が確認されている。本編で対象となるのはII・III層である。

層名の統一 更埴条里遺跡から屋代遺跡群、窪河原遺跡の対応関係を明確にするため、ローマ数字による層名の統一を行った。これらは、主に洪水性の砂層などの層理面を基準とした。

II層は、後背湿地I群では水田土壌、自然堤防I群やII群上の集落や畠域では黒色土、旧河道内では砂とシルトあるいは水田土壌の互層、と層相が大きく異なっている。しかし、調査範囲の大半を被う洪水砂層(III層)の上層にあたり、現代の耕作やカクランを受けていない層として一括し、II層とした。時期的にはほぼ近世・近代に相当する。

III層は、9世紀後半の洪水砂を母材としており、土壌化の進んでいない下部のIII-2層と土壌化した上部のIII-1層に分けた。窪河原遺跡については対応する洪水砂が認められないため、III-1層については出土遺物から対応する層を確定した。III-1層は9世紀末(古代8期後半)から中世の時期に相当する。

このように、各地区毎に大きな層相の違いが認められるため、地区間の対応関係が明確でない細別層位については、基本土層(ローマ数字)の後に地区名と細別記号で示した。例えばII-Y6-4bは、全地区共通のII層の中で、Y6地区(屋代遺跡群⑥区)にのみ見られる細別層(4b)を示している。この細別層(4b)は、原則的には他地区の細別層とは一致しない。また、土壌学でいうb層を示してはいない。逆に、全地区で共通となる層(III-2層など)の場合は、共通であることを示すためあえて地区名を記載しない場合がある(図版2凡例参照)。

(2) II・III層の特徴

地形と土地利用の違いによる区分 対象が広範囲であるため、大きく7地区に分けて層相の特徴を述べる。ここでは、層相の変化に強い影響を与えたと思われる地形の違いと土地利用の違いによって区分を行った。

1. 後背湿地I群の水田域(更埴条里遺跡A～H地区)
2. 自然堤防I群内の耕地、集落域(更埴条里遺跡I地区～屋代遺跡群③区)
3. 自然堤防I群内の高所集落域(屋代遺跡群④～⑥区)
4. 千曲川旧河道A上層(屋代遺跡群⑥区)
5. 千曲川旧河道B上層(窪河原遺跡H6区)
6. 自然堤防II群内の集落・畠域(窪河原遺跡H2、H5、H6区)
7. 千曲川旧河道C・D上層(窪河原遺跡H2トレンチ調査地区)

後背湿地I群の層相 砂層(III層)上のシルトをII層とした。この地区では層厚が薄く、III-1層が明確でないため、中世に形成された層もII層に含む可能性がある。水田土壌化しているが、I層の影響を受けており、水田面は検出できていない。水路が見つかった。

III層も層厚が薄くIII-1とIII-2層との区分ができない地点が多い。

自然堤防I群内の耕地、集落域の層相 II層は砂層上のシルトである。更埴条里遺跡I地区では溶脱層と集積層に2細分できた。他の地区では層厚が薄いためI層のカクランを受けたり、I層水田の集積層となる場合が大半である。II層には水路、畦畔痕跡、施肥用の土坑、そして近世陶磁器などが認められる。

III層については、III-1とIII-2の区分が明瞭となる。III-1層に古代8期後半から中世全般にわたる遺

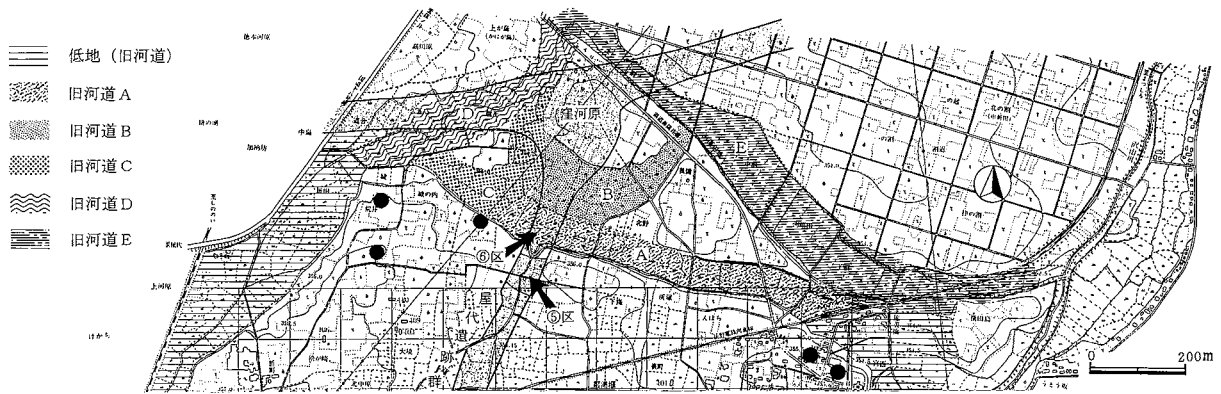


図7 屋代遺跡群⑥区～窪河原遺跡の旧河道（『木簡編』を改訂）

物が包含される。洪水（III層堆積）後の集落再建が行われており、III-2層と区分できない砂層が埋土となる竪穴建物と、黒色化したIII-1層を埋土に持つ例が存在し、時期差を示している。

自然堤防Ⅰ群内の高所集落域の層相 現代まで水田化しなかった地点であり、IV-1層上に存在する細砂～シルトの黒色土を基準にした。層厚が薄く、I層のカクランを受けているため、遺構の凹地などにII・III層が残存している場合が大半である。中世の集落が存在し、その後畠地になったと考えられる。

千曲川旧河道A内の層相 III層は最大1.6mに達しており、II層はこの砂層上のシルト～砂である。II-3層は、千曲川旧河道B、自然堤防Ⅱ群、旧河道C・Dの各地区と共通する。旧河道C・D地区では、この砂層によって善光寺地震（1847年）の砂脈が切られており、下層からは17世紀代の磁器が出土している。また、上層には明治期の磁器が認められることから、19世紀後半頃の洪水砂と推定される。自然堤防Ⅰ群以南とは異なり、II層全体に砂質の傾向が強く、II-3層以外にも薄い洪水砂層が見られる。畦畔などは明確ではないが、水路とプラント・オパール分析の結果から水田化されていたと考えられる。

また、ここではIII層が明瞭に細分された。粒度分析の結果（本節4項）粗粒～細粒のセットが何回か認められるが、大きな時期の断絶はないものと推測される。

千曲川旧河道B内の層相 屋代遺跡群⑥区と窪河原遺跡の境となる市道の立合調査地区では、それ以南で基準としたIII層（洪水砂）が旧河道Bに切れ存在しない。この地区や旧河道C・Dの地区では、比較的広範囲に見られた砂層（図版3 II-U6-5c層）が存在する。この層より下層には、15世紀代までの陶器が見られる。また、旧河道D内の第14トレンチでは、この砂層の上層に対応する可能性の高い層から17世紀代の陶器が検出されている。遺物がわずかであり、層の対応関係にも難点があるが、その砂層をもってII層とIII-1対応層の境界とした。

II層は薄い洪水砂層とシルト層が互層となっており、各シルト層は水田化されていたと見られる。また、III-1対応層では上部が水田化されているものの、大半は湿地状態であったと考えられる。

自然堤防Ⅱ群内の集落・畠域の層相 この地区では砂層（III-2層）が確認されていない。基盤となる砂礫層中には9世紀後半代の須恵器などが混在しており、上部砂層直上からは、12世紀代の珠洲甕が出土した。このことから、砂礫層は時期的にはIII-2層かIV層に対応する可能性が高く、その上層はIII-1層～II層に対応すると考えられる。旧河道B～Dと対応する砂層（II-3層）が認められる。

II層は全体に砂質であり畠に利用されている。洪水砂層による耕作面の埋没が幾度が認められる。

III-1対応層には、中世の集落・墓地が存在しており、黒色化する傾向が認められる。

千曲川旧河道C・D内の層相 この地区でも砂層（III-2層）は認められない。II層とIII-1対応層との区分は、旧河道Bで説明した通りである。III-1対応層は砂礫層で、II層段階になってようやく離水し、水田開発が行われている。近世以降の水田跡が4面以上確認されている。

4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群のⅢ層について

(1) なぜⅢ層を取り上げるか？

本報告でⅢ層とした砂層は、1968年報告(宝月ほか1968)の更埴市条里遺構で水田層を被覆していた砂層と一致する。当時の灰釉陶器の年代観により時期の一致は見えていなかったものの、「いわゆる仁和の洪水」堆積層である可能性も選択指の一つにあげられた。いわゆる仁和の洪水は、仁和四(888)年5月「今月八日、信濃國山類河溢、唐突六郡、城廬拂地而流漂、戸口随波而没溺、・・・」『類聚三代格』と記されていた災害で、6郡が被害を受けた大洪水として古くから検討の対象となってきた(島田1988)。その後、善光寺平南部を中心に類似した洪水砂層の調査例が増加し、いずれも9世紀後半代の可能性が強まってきている(註1)。Ⅲ層がいわゆる仁和の洪水砂に当たるのか、また、各地で検出された砂層が同じ洪水による堆積物であるのか、といった問題は信濃国の古代史において注目される点である。さらに、その洪水の原因が八ヶ岳の水蒸気爆発にあるのか、といった点も論争となってきた。このように地質学、地理学、歴史学、考古学などで高い関心がある問題だけに、今回の調査で得たⅢ層の特徴とその堆積状況についてここに取り上げることとした。

しかし、考古学的にはそれが888年なのか、その原因が八ヶ岳の水蒸気爆発なのかといった問題よりも、9世紀第4四半期といった程度の時間幅の中で、大規模な洪水災害が千曲川流域各地で発生したことを明確にすること。それによって集落、耕地などがどの程度の被害を受け、人々がどのような対処をし、景観が一変する中でどのような復興がなされたのか。あるいはそれによって信濃国の社会、経済などにどのような影響が現れたのか、などの点を残された遺構・遺物から復元することが優先課題である。

(2) 更埴条里遺跡A地区～屋代遺跡群⑥区Ⅲ層の特徴

更埴条里遺跡・屋代遺跡群(後背湿地Ⅰ群～自然堤防Ⅰ群) Ⅲ-2層は黄褐色～灰褐色の中粒～細砂を示し、上部は地表化した細砂～シルトのⅢ-1層がのる。Ⅲ層は上面で標高355.5m～354.4m、下面で355.1m～354.3mの間に分布し、屋代遺跡群②・③区付近で厚く、約50cmの堆積がある。千曲川の河道から遠くなる後背湿地側で層厚がしだいに薄くなる傾向が認められ、更埴条里遺跡A地区では10cm程度の堆積となる(付図1)。また、同一調査区内では、標高の低い東側で厚くなる傾向が認められる。

屋代遺跡群②区で行ったⅢ層の粒度分析では、粒径が2～3Φの中粒砂～細砂が60%を占め、上方細粒化は認められなかった。このように、後背湿地Ⅰ群～自然堤防Ⅰ群にかけては比較的均質な砂が堆積し、ラミナも不明瞭であることから、溢流氾濫による堆積物と考えることができよう。また、多くの地点では、Ⅲ-2層を分層することができなかった。ただし、南北大畦畔脇やSD22内(流路ではない溝)では、畦

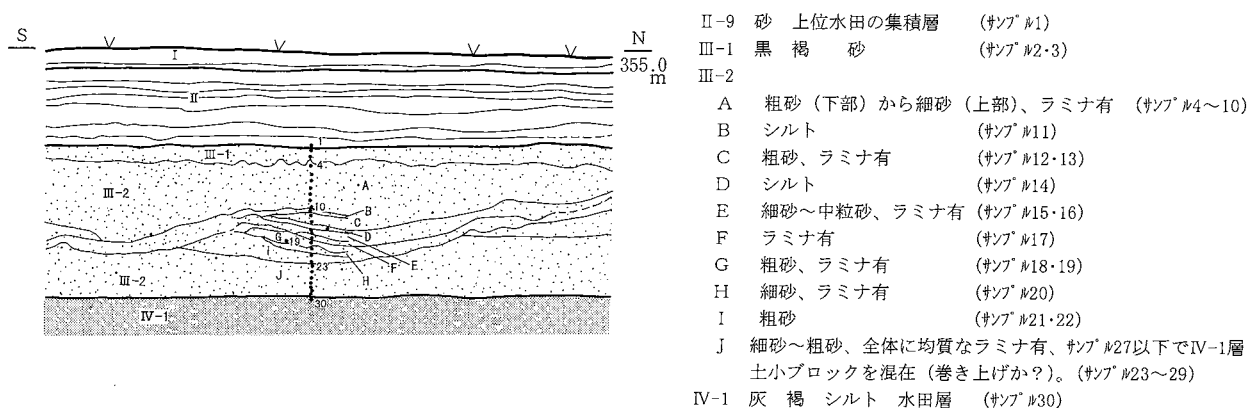
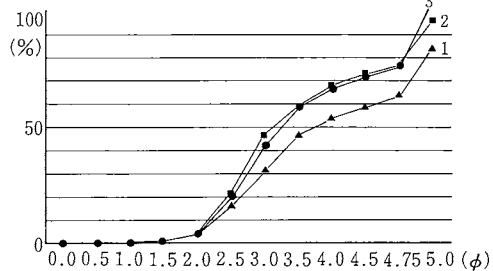


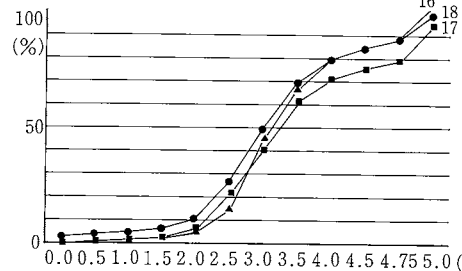
図8 屋代遺跡群⑥区西壁Ⅲ層細分 (S=1/80)

第1章 遺跡の概観と調査の概要

サンプル1～3



サンプル16～18



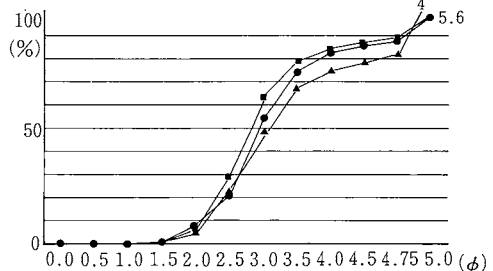
篩分け法による粒度分析

試料は1日以上室内で乾燥させた後、15～20gを湿式で篩分けた。篩は、JIS規格のものを使用し、再び乾燥後、秤量し累積頻度曲線

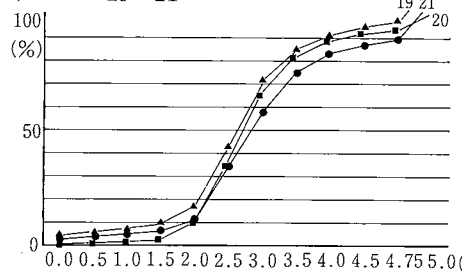
(左図)で表した。また、紙数の関係上3試料を1グラフに示した。

φ	μ	mm
0.0	—	1000 ≒ 1mm
0.5	—	710
1.0	—	500 ≒ 0.5mm
1.5	—	355
2.0	—	250 ≒ 0.25mm
2.5	—	180
3.0	—	125
3.5	—	90
4.0	—	63
4.5	—	45
4.75	—	32

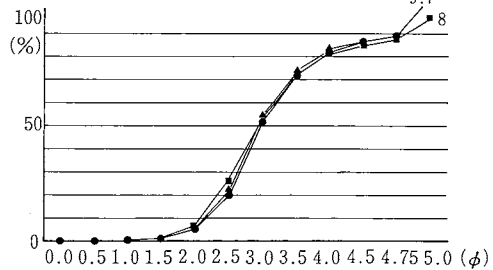
サンプル4～6



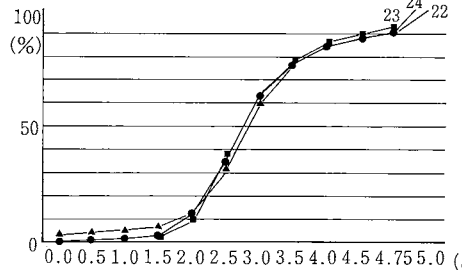
サンプル19～21



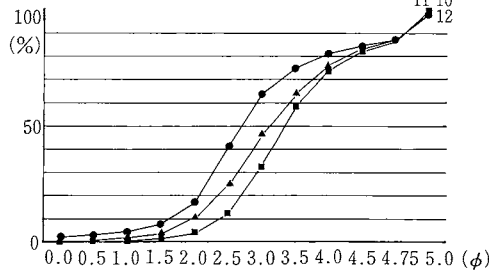
サンプル7～9



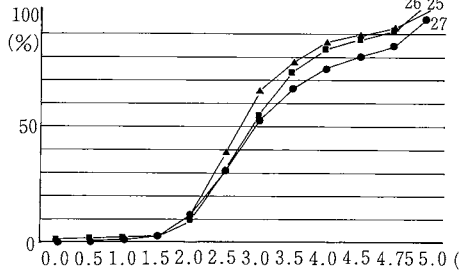
サンプル22～24



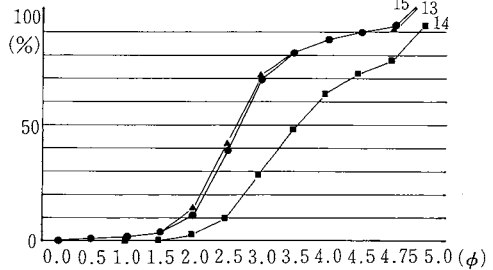
サンプル10～12



サンプル25～27



サンプル13～15



サンプル28～30

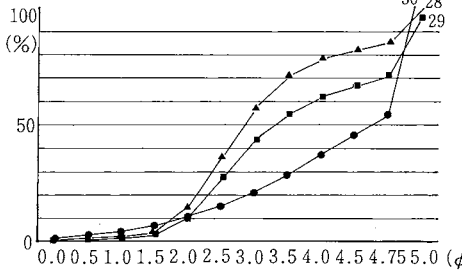


図9 屋代遺跡群⑥区西壁Ⅲ層粒度分析結果

畔の上部に平行する高さ、あるいはIII-2層中位に径1～5cmの軽石が集中する傾向が見られた。

屋代遺跡群⑥区（旧河道A） III-2層は標高352.4m～353.7mの間に堆積しており、上部の地表化したIII-1層を含めると最大1.6m余りの堆積が認められる。

この地点では、ラミナが明瞭に観察された。また、現地での観察と粒度分析の結果（図9）、粗砂→シルトの上方細粒化が幾度にもわたって認められた。図8で見るとIII-2.J層最下部ではIV-1層をブロック状に巻き込んでおり、ラミナが明瞭に認められた。III-2.J層堆積後、いったん旧河道中央付近を底面とする凹地（流路）が形成される。ここでは、ラミナが明瞭となり、粗砂→シルトの上方細粒化が幾度も繰り返された状況を示している。そして、さらにその上部に比較的均一な砂であるIII-2.A層が堆積している。

この旧河道A内で見られた状況は、自然堤防I群以南とは異なり、河川性の堆積状況を示している。また、その堆積は、①千曲川本流が増水し、水田化していた旧河道Aに侵入、水田面の土を巻き上げながら東流して厚い砂層を残した段階、②旧河道中央付近を底面とする流路が形成され、粗砂→シルトを繰り返し堆積していった段階、③上記の流路を完全に埋没させ、低地帯に水平堆積する砂層形成の段階、に大きく分けることが可能であろう。ただし、①から③に至る時間幅は不明である。

窪河原遺跡（旧河道B、自然堤防II群） 旧河道BがIII層を切り込んでおり（図版2）、洪水後に形成された河道であることがわかる。この河道は旧河道AやD・Eに比べ大きく蛇行している。

また、窪河原遺跡H2区の基盤砂礫層にはラミナが発達し、河道内の堆積層と見られる（PL49）。この砂礫層中には9世紀代の須恵器などが多く含まれており、それ以降の遺物は混入していない。このことは、III層を堆積した洪水には限定できないものの、9世紀代の洪水によって上流域の集落が削られ、多量の遺物を包含する結果となったと考えられる。

（3）屋代地区での洪水災害発生状況

洪水が大災害となるには、単に河川敷内で増水するのではなく、耕地や集落にまで影響が及ぶことが前提である。その点で、III層の堆積量と範囲は、その後の史料に登場する洪水災害と比較しても群を抜いている（第8章参照）。

屋代地区の災害発生状況 前項で示した堆積状況から、次の3地区に分けて被災状況を見てゆく。

- ① 窪河原遺跡（自然堤防II群）基盤砂礫層 同時期である確証はないが、9世紀代の遺物を多量に含んでおり、上流の集落を押し流した可能性がある。
- ② 旧河道内堆積のIII層 千曲川本流から溢れた濁流？が旧河道へ侵入し、水田を被覆した。
- ③ 集落（自然堤防I群）～耕地（後背湿地I群）のIII層 旧河道からさらに増水し、水路を逆流するなどして屋代遺跡群～更埴条里遺跡の集落と耕地のほぼ全域を洪水砂で被覆した。

水田では、犁による代掻きの痕跡が認められる田面があり、季節は初夏の可能性が高い。洪水砂はまず、旧河道などの低地を襲い、さらに増水し集落域や耕地に及んだ。また、地形の違いにより旧河道内と自然堤防I群（集落域）以南ではIII層の堆積に違いが認められた。

洪水発生の原因 八ヶ岳の水蒸気爆発により天狗岳～稲子岳が崩壊し、千曲川上流部を堰き止めた。その後、持ちこたえられなくなり決壊した、とする説（河内1983ほか）があり、それに懐疑的な論がある（島田1988）。河内晋平氏によると、屋代遺跡群⑥区III層のサンプルから八ヶ岳の天狗岳～稲子岳に特有の玄武角閃石が多数検出されたとしている（河内1994）^(註2)。

図10は9世紀後半の洪水砂が認められた代表的な遺跡である。類似した洪水砂は善光寺平地区から上流の佐久平地区で点々と見ついている。これは、千曲川流域で洪水被害が集中したことを示しており、『類聚三代格』の「六郡」に近い状況を示しているようにもとれる^(註3)。ただし、同じ洪水によるものであ

るか否かは資料に限界があり判然としていない。各遺跡の洪水砂層の時期限定と砂組成の比較など、今後取り組まなくてはならない課題である。

- 註1 灰釉陶器の実年代比定の研究成果により、洪水砂直下から最も多く出土する光ヶ丘窯式の年代は9世紀第4四半期に比定されている。詳細は『古代1編』参照。
- 2 屋代遺跡群④区には、III層堆積以前にもたびたび洪水による砂の堆積が認められる。こうしたIII層以外の砂であっても、千曲川起源の砂には玄武角閃石が普遍的に見られるのか、それともIII層にのみ多量に含まれているのか、今後の課題。
- 3 松本平の調査では9世紀後半の大洪水痕跡は見つからない(小口1990)。また、善光寺平でも犀川扇状地に近い川田条里遺跡などでも洪水砂は見つからない。

参考文献

井関弘太郎 1968 「第二篇第二章第一節 地形的考察」『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』

小口 徹 1990 「第2章第3節 松本盆地西南部の地形復元」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』

河西克造ほか 2000 『川田条里遺跡』(3月刊行予定)

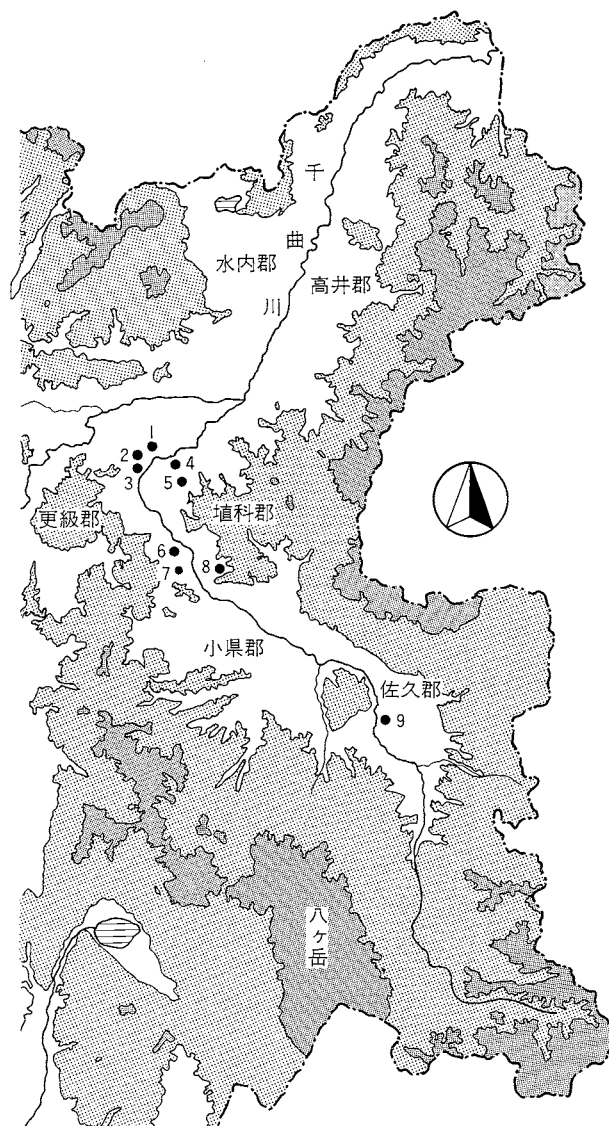
河内晋平 1983 「八ヶ岳大月川岩屑流」『地質学雑誌』89-3

河内晋平 1994 「松原湖(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊—八ヶ岳の地質見学案内・2-1—」『信州大学教育学部紀要』83

河内晋平 1995 「松原湖(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊—八ヶ岳の地質見学案内・2-1—」『信州大学教育学部紀要』84

島田恵子 1988 「八ヶ岳崩壊の仁和四年説に関する考察—考古学的調査を中心として—」『千曲』56

宝月圭吾 1968 「第三篇結 語」『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』



1. 篠ノ井遺跡群 2. 石川条里遺跡 3. 塩崎遺跡群 4. 屋代遺跡群
5. 更埴条里遺跡 6. 力石条里遺跡 7. 上五明遺跡 8. 青木下遺跡
9. 砂原遺跡

図10 9世紀後半の洪水砂が確認された遺跡(代表例)

5 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の環境変遷

(1) 検討会の設置

環境復元検討会 本報告書では、自然環境を含めた景観の復元を重視することとした。ただし、発掘調査時点では各地区の担当者の視点によって分析項目が設定され、委託先も複数に分散していた。今回、長大な調査地区を一冊にまとめる編集方針を受け、改めて全域を通じた課題の設定と各種分析内容の総合化が必要となった。そのため、環境復元に関する指導をいただいていた辻誠一郎先生、各々の分析を担当していただいた方々、それに発掘調査担当者を加え「環境復元のための検討会」を設置した。

本編に関する部分については、1999年6月に執筆分担と項目についての検討会を行った。

分析の進行状況 各種の分析は、①「検討会」発足以前にデータが寄せられたもの、②現在も分析を継続

中のもの、③「検討会」によって新たに追加されたもの、が存在する。

現状では、一部の分析を除いてデータが出そろいつつある。ただし、全てのデータについて検討を終えた段階とは言えない。そのため、本編では、平成11年度前半期までに得られたデータに基づいて更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の自然環境の変遷を描くこととする。今後の検討によって若干の修正が加わると予想されるが、長期の環境変遷の中に古代から中・近世を位置づけるため、あえて概観を示すこととする。最終的な結論は、本年度刊行予定の『総論編』にゆだねたい。

(2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の古環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・辻本崇夫

更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古環境変遷に関しては、環境復元検討会を中心に、基本土層に基づいた各地点間の層序対比を行い、自然科学分析調査成果をまとめつつある。しかし、これまでに分析成果は膨大であるため、ここでは図11に示すような総括図を提示し、古環境変遷の概略を述べる。

縄文時代の古環境 縄文時代は河川作用の影響が活発で、自然堤防Ⅰ群が徐々に形成された時代である。自然堤防構成層は、後代になって好気的環境にさらされたため、花粉化石を中心に化石の保存状態が悪い。したがって、縄文時代の古植生に関する情報は、後背湿地にあたる更埴条里遺跡B地区の情報が中心となる。縄文時代の古植生は、クルミ属、ニレーケヤキ属、シデ類、ナラ類等の河畔林やヨシ属などの水生植物からなる湿地が発達していたと考えられる。また、自然堤防上ではタケ類やウシクサ属などからなる草地や河畔林が、低地ではヨシ属など水生植物主体の草地（湿地）が成立していたと考えられる。さらに、花粉化石群集では、モミ属・ツガ属など温帯針葉樹の増加傾向が見られた。これは、後背山地に温帯針葉樹林が増加したためとみられ、縄文時代の終末以降増加し、古代には特に顕著であり、全国的にも認められている。そのうち関東平野では、スギ、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属の増加がみられることが多く、大阪平野ではモミ属、ツガ属の増加がみられることが多い。これは、「弥生の小海退」と呼ばれる環境変化で、海水準の低下や冷涼・多雨化などの気候変化が想定されている。また、北信地方ではこのような気候変化が、Fagus-Cryptomeia亜帯として、野尻湖底で認められている（那須、野尻湖花粉グループ、1992）。なお、このような気候は自然堤防Ⅱ群の形成まで続いたと考えられる。

弥生時代～古墳時代の古環境 弥生～古墳時代は、自然堤防Ⅰ群の形成がほぼ終了して安定化し、主に後背湿地を中心に水田が営まれていた時期である。屋代遺跡群では、自然堤防上に生育していた立木（カツラ、ケヤキ）を伐採して、水田開発が行われたとみられる。このほか、木本花粉では、クルミ属、ニレーケヤキ属、シデ類、ナラ類等が検出されており、これらが、自然堤防上などに河畔林を形成していたと考えられる。また、イネ科を中心に草本花粉の割合が急増することから、草地の拡大が示唆される。これは、低地上の河畔林や林縁部の森林が、水田開発の為に縮小したことに起因すると考えられる。

古代の古環境 この時期には、水田開発が自然堤防にまで及び、更埴条里遺跡K地区など高い場所に集落が作られるようになる。この時期の古植生は、弥生時代から引き続いて大きな変化はなく、遺跡周辺は開発の影響を受け、草本主体の植生であったと思われる。花粉分析や植物珪酸体分析の結果から、自然堤防上ではタケ類やウシクサ属などからなる草地やクルミ、ナラ類などの河畔林が成立していたと考えられる。また、水田域ではヨシ属などの水生植物が、いわゆる「水田雑草」として生育していたと考えられる。一方、縄文時代終末から始まった冷涼・多雨な気候は古代まで続いており、モミ属・ツガ属などの温帯針葉樹が引き続き増加している。このような変化は自然堤防Ⅱ群の形成と連動しており、屋代遺跡群で

表4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の土地利用変遷と古環境

層位	時代性	土地利用状況			地形・土地利用変遷の総括	古植生	
		後背湿地(更埴条里)	自然堤防I群(屋代遺跡群)	自然堤防II群(窪河原遺跡)		渡来種の出現時期	周辺植生
I	現代	水田、富栄養化	水田、畠、集落	畠		ワタ ゴマ	人間の植生干渉によるマツの増加
II	中世後半～近世	水田?、富栄養化	畑、高い場所に集落	畠(高まり)、水田(旧河道)	自然堤防上では集落域、後背湿地は水田域として利用される。窪河原遺跡がのる自然堤防II群が安定化する。水田域での富栄養化		
III-1	平安後期～中世	水田?、富栄養化、K・J地区集落	畠、集落	畠(高まり)、水田(旧河道)			
III-2	平安(9世紀末)	洪水層	洪水層	洪水	洪水(888年)により、遺跡全体が砂に覆われる。		
IV・V	飛鳥～平安時代	水田(A・B地区は泥炭地)、K地区集落	水田、集落	旧河道	自然堤防上まで条里水田が広がる。自然堤防のなかでも高い部分に集落が存在。窪河原遺跡は河川の影響を強く受ける。やや大規模な洪水が起きた形跡もあるが、耕作等の影響で堆積層では不明瞭。	マメ類 オオムギ ソバ	イネ科を中心とした草地の拡大 渡来種の出現 モミ属・ツガ属などの分布拡大
VI	古墳～弥生時代	水田、K地区集落?	水田、高い場所に集落	不明	自然堤防上の森林を伐採した痕跡が認められ、水田の拡大が示唆される。弥生時代中期以降、自然堤防上などで新たな水路がつくられる。自然堤防上は集落、後背湿地は水田として利用され、現在みられる自然堤防I群と後背湿地が安定化する。	モミ イネ	
VII	縄文時代晩期	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
VIII	縄文時代晩期前半	集落?、焼土跡、建物	生活痕跡あり				
IX	縄文時代後期中葉以降	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
X	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり		河川の作用が活発になり、微高地上の集落は不安定。大規模な洪水もたびたび起こる。		
XI	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
XII-1	縄文時代後期前葉	生活痕跡あり	生活痕跡あり				
XII-2	縄文時代中期後葉	生活痕跡あり	高い地点に集落、他地点にも遺物		流路が安定し、自然堤防が固定化される。自然堤防上に集落が営まれる。		
XIII	縄文時代中期中葉	—	高い地点に集落				
XIV	縄文時代中期前葉	—	高い地点に集落				
XV	縄文時代中期前葉	—	生活痕跡あり				
XVI	縄文時代前期後葉	不明	生活痕跡あり				
XVII	縄文時代前期				氾濫源上の微高地として徐々に安定化して行く。		
XVIII	不明						
XIX	不明						

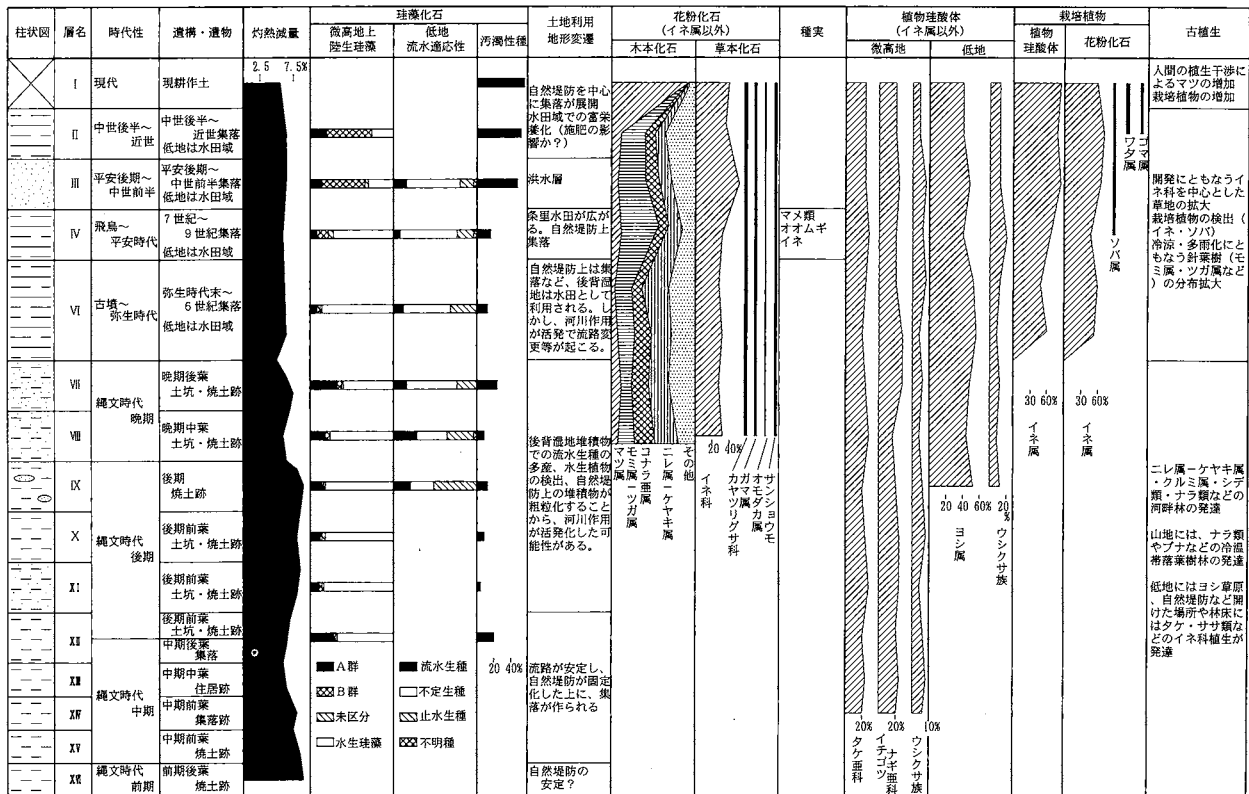


図11 総合柱状図に基づく更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡の古環境変遷

千曲川の旧流路が確認されている。また、イネ、ソバ、オオムギ、マメ類などの栽培植物も検出されており、これらの栽培が示唆される。

中・近世の古環境 平安時代末には、遺跡全体を覆うような大洪水にみまわれたが、中世になると流路の変更は少なくなり、自然堤防I群の外側に作られた自然堤防II群(窪河原遺跡)が安定化する。植生では、ワタ、ゴマなどの栽培植物の出現や、マツの二次林・植生の分布拡大などが顕著である。一方、水域環境

の富栄養化が指摘されており、農耕技術の変化（施肥など）が示唆される。

引用文献

那須孝徳・野尻湖花粉グループ 1992 「野尻湖周辺における最終氷期の古植物の古気候変遷」『月刊地球 野尻湖周辺の自然史—最終氷期以降の古環境—』p.50-55、海洋出版株式会社

第4節 調査・整理の経過

1 調査の概要

(1) 調査の実施にあたって

調査期間と調査範囲 上信越自動車道の供用開始時期と工事期間の兼ね合いから、更埴条里遺跡、屋代遺跡群、窪河原遺跡の発掘調査期間は平成3年度から平成6年度の4年間に限定された。その後、バスストップ設置のための調査が平成7年5月に追加された。また、これに先だって、平成2年度には中央自動車道長野線に関わる更埴ジャンクション用地（窪河原遺跡H2区）の調査が実施された。

上信越自動車道・中央自動車道用地の約2.3km区間ほぼ全域が調査対象である上、沖積地のために遺構が地下深く重層的に存在することが予想された。そのため、当初より遺跡の内容に見合った調査の遂行は困難が予想された。決められた期間の中でよりよい記録保存を実施するための調査体制の強化が図られた。

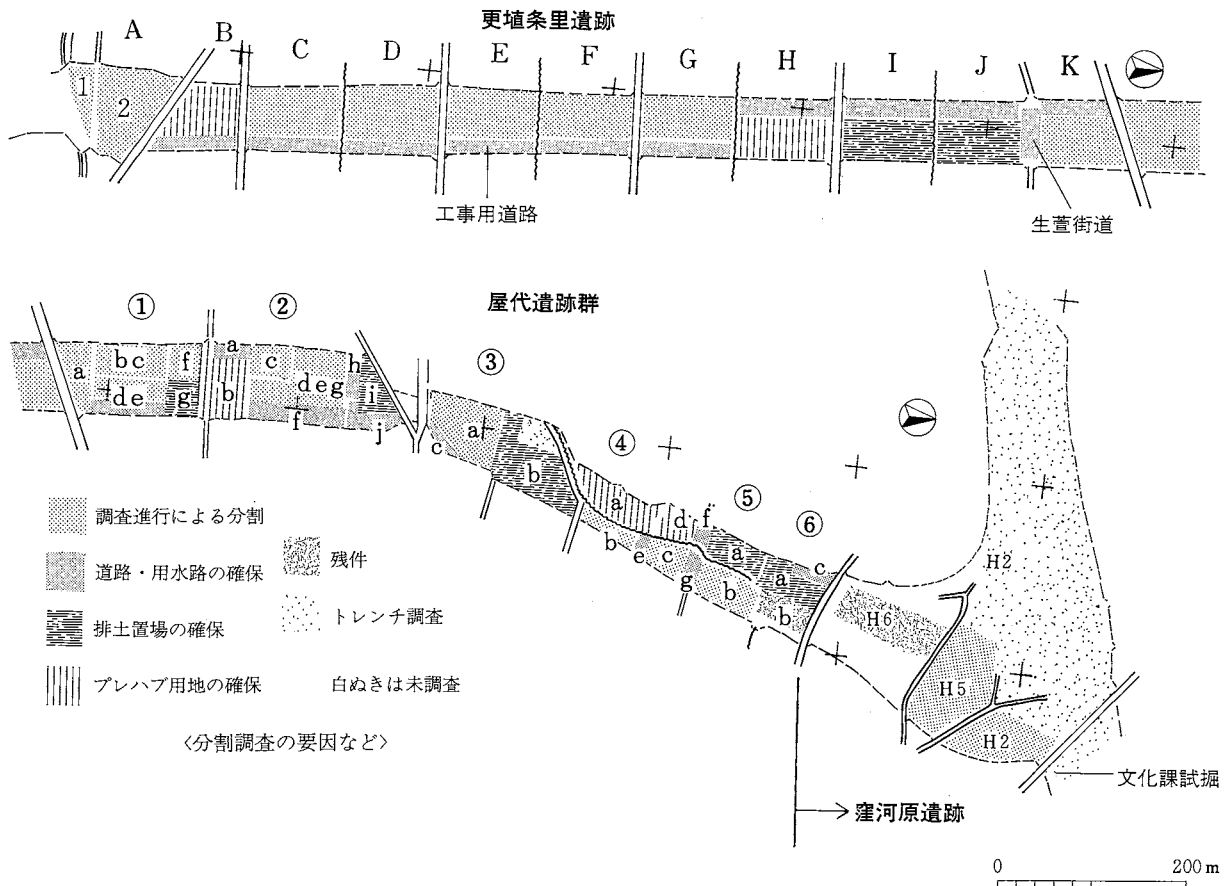


図12 仮地区名と分割調査

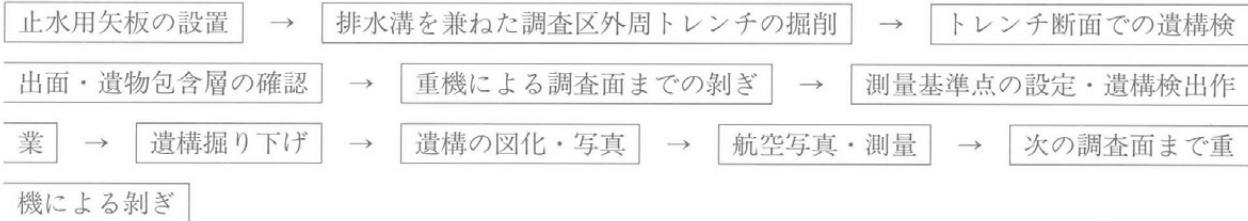
調査体制 広範囲の遺跡を短時間で調査し終えるために、調査班を複数作り、大量動員を図り、数カ所で同時に調査を実施した。

調査の概要の詳細については『総論編』に掲載する。

(2) 調査の手順

調査の手引き 調査の手順、仮地区設定、遺跡・遺構記号などは、長野県埋蔵文化財センター『発掘調査の手引き』に則して進めた。地区設定は図版1に、分割調査のために設定した仮地区は図12に示した。

基本的な調査進行 基本的な調査の進め方は、次の通りである。(写真)



さらに時間短縮のため、重機等の機械力や航空測量、航空撮影、8mmビデオカメラを活用した。

2 整理の概要

整理経過 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の本格的な整理作業は平成7年度から上田調査事務所において実施している。『古代2・中世・近世編』に関しては、平成7～9年度は主に遺物の洗浄と注記とともに、金属製品の錆落としや保存処理、骨等の脆弱遺物の処理を行った。

遺物の実測および写真撮影、遺構図の検討は平成10年度の後半から開始した。平成11年度は篠ノ井整理棟に移り、図版のトレース、遺物写真撮影、執筆作業を行った。

整理体制などについては『総論編』を参照していただきたい。



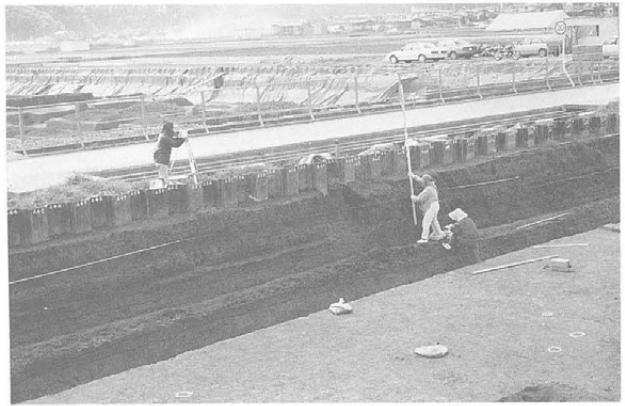
更埴条里遺跡 | 地区分割調査



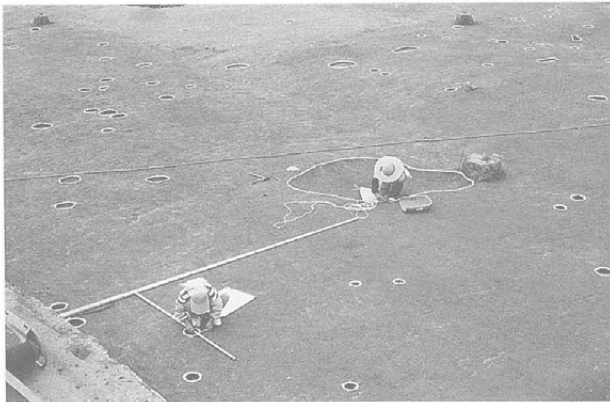
窪河原遺跡H2区トレンチ調査



更埴条里遺跡Ⅰ地区SD873発掘風景



更埴条里遺跡K地区 南壁断面実測風景



屋代遺跡群①区中世集落空撮準備



更埴条里遺跡Ⅰ地区小学生の見学

第2章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群Ⅲ-2層上面検出の遺構と遺物出土状況1（古代2）

第1節 概 観

遺構の検出層位 本章に掲載するのは、洪水砂であるⅢ-2層上面で検出された遺構の内、更埴条里遺跡K地区以北で確認された洪水砂上部の土壌化（Ⅲ-1層）以前に掘り込まれ、埋没したと考えられるものを主とする。なお、自然堤防Ⅰ群高所域のⅢ層の層厚が薄い範囲では（第1章第3節2）、古代1以前の遺構と同一面での検出となった。この点は中世および近世の遺構も同様である。

遺構の選別 古代2に属する遺構の選別は、①Ⅲ-2層を掘り込み、Ⅲ-2層あるいはそれに近似した砂、砂質土を埋土とするもの、②出土土器によって古代8期から15期の中に比定できるもの、③Ⅲ-2層を掘り込み、①、②の遺構に切られるもの、主として以上の項目に基づいて行った。

遺構検出地区 上記①～③に該当する遺構は更埴条里遺跡H地区から屋代遺跡群⑤区にかけて確認されているが、特に屋代遺跡群⑤区はⅢ-2層が削平された範囲があり、古代1以前の遺構との区別が困難であった。そのため、古代1、古代2、中世のいずれに属するか不明な遺構は各面の割付図に掲載している。

無遺構地区 更埴条里遺跡A地区～G地区にかけては、上記①～③に該当する遺構は検出されなかった。この範囲では、第9章第2節1に示された通り、洪水直後に水田が復旧された可能性がある。第2節ではこの点をふまえて古代2の集落跡について触れることとする。

検出遺構数 上記①～③に該当する遺構は、竪穴建物跡157軒、掘立柱建物跡12棟、井戸跡18基、墓坑17基、その他の土坑175基、焼土跡2基、性格不明遺構3基、溝跡136条である。

第2節 古代2の集落跡の概要

1 概 観

坪区画の復元 9世紀後半の洪水により更埴条里遺跡・屋代遺跡群一帯は洪水砂層（Ⅲ-2層）に覆われ、条里水田は廃絶した状況となる。この砂層上面の遺構でまず注目されるのは、更埴条里遺跡H～J地区で検出された旧条里水田の坪区画畦畔に沿って掘られた溝（南北—SD731・SD863・SD1011、東西—SD746・SD808・SD1021、1022）である。これらの溝は9期に属する竪穴建物跡との切り合いが認められ、集落が成立するのと前後して、洪水以前の坪区画の復元が行われた様子が窺える。

第9章第2節1に示されたように、これらの地区のⅢ-2層中からは非常に高い密度のプラントオーバーが検出されており、洪水直後に水田の復旧および耕作が行われた可能性が高い。しかし、区画の復元が確認された調査区内では、洪水後それほど時間を置かずに集落が形成されている。なお、自然堤防Ⅰ群内の屋代遺跡群ではこれに該当する遺構は確認できない。

後背湿地Ⅰ群の集落 8期後半に属する竪穴建物が更埴条里遺跡Ⅰ地区とK地区にみられ、洪水後の早い時期においてすでにふたつの集落が成立している。ここで特に注目されるのは、条里水田成立以前を含め、初めて後背湿地Ⅰ群のⅠ地区に集落が成立する点である。

9期の段階ではJ地区とH地区にも進出し、I地区では建物数が最大となる。J地区集落は9期で廃絶するが、I地区では10期まで集落が継続している。10期の竪穴建物はK地区を北限とし、条里水田造成以前の集落域であった自然堤防I群内（屋代遺跡群）には存在しない。

坪区画を復元した溝の内、南北溝は一部9期の竪穴建物に切られるが、東西溝は集落に関わる遺構との切合がなく、区画としての役割を維持している様子が窺える。

新たな溝群の整備 後背湿地I群内の集落が廃絶した後、条里型地割とはやや軸の異なった溝の掘削が行われる。更埴条里遺跡K地区南端の東西流路群につながる可能性が高く、新たな水路網の整備が行われたものと考えられる。自然堤防側においても溝の掘削が行われており、後背湿地側の溝の整備に対応する可能性がある。この時期（11期～12期くらいか？）の竪穴建物は、更埴条里遺跡K地区と、SD23（旧五十里川）をはさんだ屋代遺跡群①区南側に点在するのみである。この南北一体は溝による区画が広がる景観となっていたようだ。

自然堤防I群への集落の展開 新たな溝が整備された以降、後背湿地I群内では集落が営まれることはない。これに対し、更埴条里遺跡K地区以北の自然堤防I群内に集落が展開する。竪穴建物は13期以降に属するものが中心であり、自然堤防上の新たな集落はそれ以前に整備された溝群の廃絶後に成立している。

なお、古墳時代からの伝統的な集落が存在した屋代遺跡群⑤区は集落からややはずれた状況となっている。この後、古代15期を経て、更埴条里遺跡K地区、屋代遺跡群①区、④区を中心に中世の集落が展開していく。

2 更埴条里遺跡H地区集落跡・I地区集落跡（図版4・5、18～32、36）

立地 後背湿地I群内。III-2層上面での比高差は自然堤防I群の屋代遺跡群①区と0.7m以上。条里水田以前には人の居住が認められない。

範囲 I地区集落はSD808を北限、SD746を南限とし、東西への広がりを見せる。H地区集落はSD746を北限、SD731を東限とし、西への広がりがある。

両集落は区画によって別な集落集団である可能性が高いが、H地区集落の検出範囲が狭いため、一括して扱うこととする。

遺構 竪穴建物跡63軒 掘立柱建物跡10棟 井戸跡7基 墓坑1基 その他の土坑77基 ピット（柱穴）271基 溝跡61条

存続時期 8期後半～10期

集落の成立 洪水によりIV層水田が埋没した直後に水田の復旧が行われた可能性があることは前述の通りである。しかし、出土土器によって8期後半に属すると判断される竪穴建物跡10軒と井戸1基（SK8152、図版27）の存在は、洪水後間もなく人々の居住が開始されたことを物語る。

坪区画を復元した溝は南北方向のSD731、SD863と東西方向のSD746が検出されている。位置的にみてSD746の北の坪区画と考えられるSD808があるが、IV層水田の調査ではここで東西大畦畔は確認されていない。なお、I地区東側のSD858も部分的な検出であるが、旧畦畔（SC803）に沿って掘り込まれた溝の可能性はある。これらの溝からは時期が判断できる遺物の出土がみられない。SD863に極めて近接する8期後半の住居跡（SB864、図版22）があるほか、この時期の遺構と坪区画溝との切合は認められず、溝掘削と集落成立の前後関係は明確にできない。しかしSD863が9期の住居（SB836、図版19）に切られていることから、少なくとも9期に属する段階で南北溝は区画の意味を失っていたものと思われる。

集落の継続 I地区集落は9期の段階で住居数が最大となる。南端部には比較的大きな井戸（SK8083、図版21、24）がある。SB826（図版20）のように床面積が他の住居を大きく上回る（28.5㎡）ものもみられ、集

落内の力関係の存在を想起させる。

10期の竪穴建物跡は9期に比べ激減し、区画の中央部に東西帯状に集まる傾向がみられる。I地区では柱跡と思われるピットが特に南東部に集中した状況で検出され、掘立柱建物跡が確認されている（ST812～819、図版20・21、108～110）。さらにこれより北約40mほどの地点にも比較的ピットが集中する部分があり、ここでも掘立柱建物跡が確認された（ST810・811、図版32・108）。

これらのピットおよび建物跡の多くは8期後半～9期の竪穴建物跡を切るが、10期の竪穴建物跡との切合がほとんどないことから考えて、10期の集落を構成する建物群であった可能性が高い。規模や柱の配列から考えると倉庫的な建物であったことが想定される。

なお、集落北側に土坑墓が1基検出された（SK8406、図版111）。長軸が東西区画溝と平行する点、竪穴建物の密集地帯を避けて存在し、長軸が東西区画溝に並行する。9期に属する土器が出土しており、この段階の集落に伴うものと考えられる。

集落の消滅 I地区集落では10期を最後として竪穴建物は消滅する。この後は10期に属するSB806の上で検出されたSD801、SD802（図版22）の存在からもわかるように溝の掘削が行われている。SD801はH地区側に伸び、SD703につながる溝である。SD703は地区北側で分岐して、I地区のSD858とつながる。SD858は、当初H地区のSD734につながり、東へ方向を変える溝（SD859、SD857）を改修して掘削されたものと考えられる。SD857からは9期の土器が出土しており（図版143）、改修前の溝の掘削はこの段階まで遡る可能性もある。さらにI地区北東隅にはJ地区から伸びて東へ屈曲するSD883が存在する。SD703の底部に酸化鉄分が集積していることから（図版23）、これらの溝はある程度の流水があったことが予想され、集落廃絶後に水路網が整備されたと考えられることができそうである。

特記遺構 なし

特記遺物 越州窯青磁（SB842）、緑釉緑彩陶（SB852）、布目瓦（SB836）、鉄鎌（SB840）、緑釉陶器片多数。なお、H地区不明遺構SX701南東付近のIII-2層中から銅印（「王強私印」、図版149、巻頭カラー）が出土している。

3 更埴条里遺跡J地区集落跡（図版6、33～36）

立地 後背湿地I群内。III-2層上面では南側のI地区と比べ中央部がやや低い、際だった比高差はない。条里水田以前は北部に焼土坑が確認されており、北側のK地区の集落域に含まれていたが、人の居住は認められない。

範囲 竪穴建物は地区中央部に集中し、南北への広がりは見られない。東西については不明だが、竪穴建物の配置からみて広がりをもつ可能性は少ないと思われる。

遺構 竪穴建物跡5軒 不明遺構1基 井戸跡1基 その他の土坑3基 ピット3基 溝跡25条

存続時期 9期

集落の成立 南側のI地区、北側のK地区では洪水直後の8期後半には集落が成立していたが、このJ地区は9期の竪穴建物跡のみが存在する。

南北区画溝SD1011東側に近接して、周溝をもつ中規模な住居が南北に2軒（SB1001・SB1002、図版33、90・91）、その北東にやや距離をおいて、小規模な住居が南北に2軒（SB1003・SB1004、図版34、92）、地区東側に比較的大規模な住居が1軒（SB1005、図版35）と規模によって整然と配置された感がある。SB1005北側に竪穴状の遺構SX1001（図版35）があるが、底部が掘方状となるのみで、竪穴建物跡であったかは明確でない。もし建物跡とすると、規模別に南北2軒ずつ配列するような建物配置となっていたことになる。さらに井戸1基（SK10021、図版35・36）が伴い、1時期の小集落の景観を示す例と考えられる。

地区北側には坪区画を復元した東西区画溝SD1021・SD1022があり、SD1011がそれと交差する。注目されるのは、断面観察によってSD1011がSB1001の周溝SD1012を切り、SB1002の周溝SD1013に切られることが判明した点である(図版36)。周溝だけで捉えると、SB1001とSB1002には時期差が存在したことになるが、周溝の作り替えなども考えられる。ただ、これによってJ地区の南北区画溝SD1011は集落成立後に掘削され、集落存続中には埋没したことがわかる。

集落の消滅 9期のみでJ地区集落は消滅し、I地区へつながる溝が掘削される(SD1008・SD1027)。地区外から伸びてくるためその先の溝の接続は不明だが、K地区南端部からJ地区北端部にかけて検出された東西流路状の溝群につながる可能性が高い。SD1008からは13期から14期に属する土器(図版143)が出土している。

特記遺構 なし

特記遺物 転用硯(SB1002)、朱墨硯(SB1005)

4 更埴条里遺跡K地区集落跡(図版7、37～47、54)

立地 自然堤防I群から後背湿地I群に転換する地点。III-2層上面はJ地区中央部と約1mの比高差がある。IV層段階では洪水直前の8期前半まで集落が存在する。

範囲 北は屋代遺跡群①区集落との間にSD23(旧五十里川)が存在する。南は後背湿地に向かって傾斜する転換点で、東西流路群が成立する部分をほぼ境界とする。東西の広がり不明。

遺構 竪穴建物跡30軒 掘立柱建物跡2棟 井戸跡7基 墓坑1基 廃棄土坑1基 その他の土坑32基
ピット(柱穴)多数 溝跡15条

存続時期 8期後半～15期(中世に続く)

集落の成立 洪水直前の8期前半に属する竪穴建物が存在するが、洪水時には使用されていなかった状況がみられる(寺内1999)。このため8期後半の集落を洪水以前の集落の継続として捉えることには疑問が残る。

J地区集落の南北区画溝(SD1011)の延長と考えられるSD966が低地部分にみられるが、集落中心部には及んでいない。東西の広がりはわからないが、I地区と比較する限り集落の規模は小さい。

中央部やや西側で検出されたSK9259(図版42、44)からは、多量の椀型鍛冶滓を主とした鍛冶関係遺物が出土している(図版155)。鍛冶に関わる廃棄土坑と考えられ、集落内で生産が行われていたことを示す。

集落の継続 15期に及ぶまで、K地区集落は竪穴建物が点在する状況が続く。また、多数の柱穴跡(ピット)が検出されたが、2棟の掘立柱建物跡(ST903・931、図版38、41、110)を確認するにとどまった。

K地区南側の低地部で検出された東西流路群(SD950・955・965)は、10期に属するSB9057(図版40)を切り込み、この流路が成立したのは少なくとも10期以降の段階と考えられる。しかし、ST931をはじめ多数のピットが流路の上から掘り込まれている。また墓坑と考えられるSK9270もその流域内で検出された(図版38)。SK9270出土土器(図版145)は13～14期に属することから、この間にK地区内の流路は廃絶しその上に集落が展開したことを示すと思われる。

更埴条里遺跡K地区は、唯一古代2の時期を通して集落が存続しており、この後も中世集落が成立していく。

特記遺構 鍛冶関連廃棄土坑(SK9259) 獣骨埋納井戸(SK9282)

特記遺物 白磁(SB9015a) 転用硯(SB9038) 鉄鎌、鉄斧(SB9047) 隆平永宝 多量のマメ科炭化種子(SB9015a)

5 屋代遺跡群①区集落跡（図版8・9、48～63）

立地 自然堤防I群内。古代1の集落が微高地上に成立していたのに対し、古代2の集落はその南側の1段低い条里水田域の上に立地している。

範囲 旧五十里川（SD23）を南限とし、北は②区集落との間に無遺構地帯が存在する。東西の広がりについては不明。

存続時期 12期～15期（中世に続く）

遺構 竪穴建物跡27軒 墓坑4基 墓坑と思われる土坑10基 その他の土坑25基 ピット（柱穴）多数 溝跡13条

集落の成立 出土土器によって12期に比定できるSB15（図版51）が古代2の①区の竪穴建物跡の中で最古であり、これを含めて13期までの間3軒の竪穴建物跡が確認できる。

地区中央部に東西に伸びる溝（SD19）、それと直行する溝（SD20・21）がある。旧条里水田の坪区画とは一致せず、洪水後新たに掘削された溝である。時期の特定はできず、12～13期の竪穴建物との切合がないため、集落成立との前後関係は明確にできない。埋土はIII-2層と同質の砂の単層堆積であり、明確に流水があった痕跡は認められない。

集落の継続 14期から15期にかけ竪穴建物の数が増加する。14期に属するSB23がSD19を切るため、この段階ではすでに溝が廃絶していたことがわかる。8期前半までの集落域である微高地側にも竪穴建物がまばらに存在するが、中心は地区南側であり、中世集落も同じ範囲に成立する。微高地側にはSK46、358～360といった墓坑（図版59・60）があり、中世にかけて墓域が形成される（図版198）。

特記遺構 入口状施設をもつ竪穴建物（SB2）

特記遺物 鉄製紡錘車（SB1、SB6） 鉄鏃（SB1、SB13、SD23）

6 屋代遺跡群②区集落跡（図版10・11、64～69、77）

立地 自然堤防I群内。IV層条里水田段階では低地であったが、洪水後はIII層の堆積により①区北側とほぼ同レベルの微高地状となっている。

範囲 南北および東側は無遺構地帯となるが、西へはさらに広がっていたものと考えられる。

存続時期 14期～15期

遺構 竪穴建物跡10軒 土坑6基 溝跡11条

集落の成立 最も古い竪穴建物は14期に属するSB101（図版64、101）である。集落内には東西南北に伸びる溝が検出されているが、SB101がSD2204を切っている。このことから、これらの溝が整備されたのは集落が成立する以前であったことがわかる。

集落の継続 15期の段階で竪穴建物の数が増加し、北への広がりがみられる。SB103、SB104以外は切合がなく、SB102、105～108は配置の間隔、長軸方位、カマドの方位などからみて同時期に存在した可能性が高い。ただ、集落の東辺部分にあたるためか遺構の密集度が低く、井戸跡や土坑、ピットなどはほとんど検出されなかった。

集落の消滅 15期をもって②区集落は消滅する。中世においては耕作域になっていた可能性が高く、人の居住は認められない。

特記遺構 壁溝をもつ竪穴建物（SB101、SB106、SB108）

特記遺物 鉄鏃（SB103） 鉄鎌（III-2層中）

7 屋代遺跡群③b区集落跡 (図版12・13、70～73、77、78)

立地 自然堤防I群内。自然堤防上では比較的低い部分にあたり、②区集落との比高差はおよそ0.4～0.5mある。

範囲 ③b区北辺部に竪穴建物が集中し東西に帯状に広がるが、その範囲は不明。南北はほぼ無遺構地帯となる。

存続時期 13期～14期

遺構 竪穴建物跡8軒 鍛冶関連土坑2基 その他の土坑6基 性格不明遺構1基 溝跡7条 (③a区を含む)

集落の成立 ③b区内にみられる東西南北に伸びる溝は、集落の③a区の溝と一体のものと考えられる。その内、SD3215を切るSB3023の出土土器は10期～14期と幅をもつものであるが(図版140)、他の竪穴建物は13期～14期に属している。このことから集落の成立は13期前後と捉えられ、やはり溝が廃絶した後に形成されたものと考えられる。

集落の継続 13期のSB3022、3028および14期のSB3024、3027の配置からみて、各時期の建物は分散しており、特に増加する傾向はみられない。ただ、SB3028とその床下で検出されたSK3252およびSB3027からは多量の鍛冶関係遺物(図版154、155)が出土しており、この集落が鉄生産と大きく関わって存在していたことを示唆する。

集落の消滅 14期をもって以後の竪穴建物は確認できず、②区集落より早く廃絶している。③a区ともに中世において人の居住は認められない。

特記遺構 鍛冶関連土坑(SK3252)

特記遺物 鍛冶関連遺物(羽口、炉壁、椀型鍛冶滓等 SB3027、SB3028、SK3252) 軒丸瓦(SB3022)

8 屋代遺跡群④区～⑤区集落跡 (図版13～15、74～76、78～84)

範囲 北は⑥区がほぼ無遺構地帯となり、南も③b区集落との間に空間地帯がある。東西の広がりについては不明。

存続時期 13期～14期(中世に続く)

遺構 竪穴建物跡14軒 井戸跡3基 墓坑1基 その他の土坑31基 焼土址2基 溝跡9条

集落の成立 13期に属するSB4004が最も早い竪穴建物と考えられる(図版80)。これと時期が近いSB4503(13期～14期、図版76)からは多量の羽口、炉壁、鍛冶滓が出土しており(図版154)、鉄鍬(鋤?)の出土もみられる(図版151)。このように、④区集落は鉄製品生産に大きく関わるものと考えられ、③b区集落と共通した特徴をもつ。

地区中央部を南北に走る大規模な溝SD4504は水路と考えられる。③b区集落北側から低地部に向かい、高所域の⑤区に達すると思われるが、調査区外に入るためその延長部は不明である。方向からみて、中世面のSD5005(図版232)がこの段階まで遡る可能性をもつ。なお、この溝の埋土中からも多量の鉄生産関連遺物が多量に出土している(図版154)。鉄生産に関わっての廃棄場となっていたものと考えられ、13～14期の段階でSD4504は水路としての機能を失っていた可能性が高い。SB4004に切られる東西溝(SD4018、図版80)も含め集落成立以前に溝の掘削が行われていたものと考えられる。

集落の継続 ④区では14期にかけて竪穴建物の数は増加するが、点在した配置であり、集中する様子はみられない。

⑤区には竪穴状の遺構がみられるが(SB6061・SB6113、図版15)建物跡とは捉えられない。その他は土坑、

焼土址、かなり北に距離をおいて墓坑（SK5013、図版111）があるのみで、8期前半以前は伝統的な集落域であった一帯は、洪水後は居住域となっていないことがわかる。

明確に15期に属する建物跡は認められず、一端途絶えた可能性はあるが、④区東側を中心に中世においても集落が営まれる。

特記遺構 鉄生産関連竪穴建物（SB4004、SB4503）

特記遺物 鉄生産関連遺物（羽口、炉壁、鍛冶滓等 SB4004、SB4503、SD4504） 鉄鍬（SB4503） 銅椀（SB4201）

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

本節では古代2に属する各遺構について、各種別に図版とデータに基づいてその特徴と傾向に関する記述を行う。

1 掲載方法

報告の手順 記載はSB→ST→SK→SF→SX→SDの順で行い。それぞれにその特徴や傾向を示すデータを添え、図版に基づいて記述する。遺構の時期については、各遺構出土の土器様相で示し（第4章第1節）、遺構の切り合い関係等を加味した。

図版 検出された全遺構の平面形は1/500地区別全体図に掲載し、その中で集落を中心に遺構の密度が高い範囲は1/120割付図を作成した。

個別平面図の掲載は、SBについては遺物の出土状況、カマドの残存状況、堀方の状況を選択条件とし、STはほぼ全遺構を、SKは墓坑を優先した。それ以外の遺構については必要に応じ断面図を1/120割付図ごとに掲載した。

断面等を掲載できない遺構は、割付図中に遺構底部の標高を読み値（標高356.00m—〇〇cmの〇〇cmの部分）で表示した。

掲載順は該当する遺構が検出された更埴条里遺跡H地区から北上する形とした。

表化 紙面の関係上十分に図版に掲載できないものを含め、各遺構についてはその形状、堆積状況、遺物出土状況などに関するデータを盛り込んだ一覧表を作成した。

2 竪穴建物跡（SB、SKの一部）

(1) 概要

建物跡の概要 古代2に属するSB（一部SK）を付した遺構は更埴条里遺跡H地区から屋代遺跡群④区までで156軒が検出された。これらの遺構は大きく以下のように分類できる。

(I) カマドを有する、「竪穴住居跡」と考えられるもの

(II) 炉を有する、「竪穴住居跡」と考えられるもの 例：更埴条里遺跡K地区SB9015a

(III) 鉄生産などの工房に関わる可能性のあるもの 例：屋代遺跡群③区SB3027、SB3028

(IV) カマドを有せず、小規模で倉庫的な付属施設と思われるもの 例：更埴条里遺跡I地区SB831 屋代遺跡群①区SK138

掲載の方法 ここでは表5に示した竪穴建物跡のデータ項目に即して記述を行う。各遺構それぞれに触れることができないため、全体的な傾向を示す資料を提示していく。

(2) 竪穴建物の構築・使用に関して

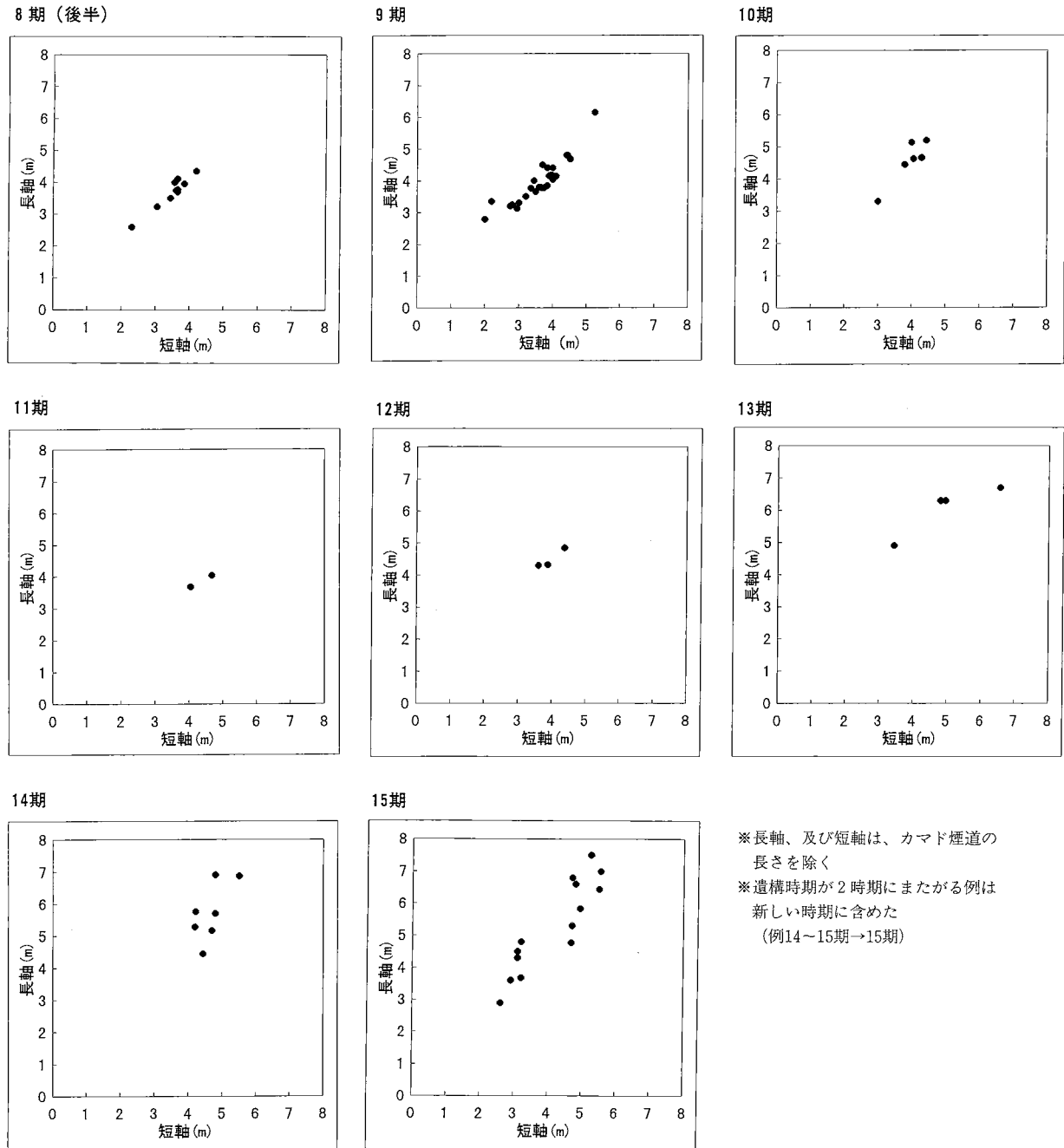


図13 竪穴建物 時期別長軸・短軸長さの相関 (古代2)

① 竪穴のプラン

平面形、断面形、カマド方位、長軸方位、規模 (長軸、短軸、深さ、面積) を示す。

平面形の変遷 平面形は方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の4つが主体となる。これらに当てはまらない形状を持つSB853 (図版20)、SB3022 (図版70)、SB3027 (図版72) などは不整形として分類した。

特に長方形については視覚的に明確なものを抽出し、他は方形としたが、長軸と短軸の長さの相関を示す図13を作成した。これによると8期後半～10期までは面積にかかわらず長軸と短軸はほぼ $Y = X$ に近い相関を示すのに対し、14期、15期は明らかに長軸と短軸の差が開く傾向を示す。資料数は少ないが13期もこの傾向がみられ、竪穴建物の平面プランは11期、12期を境界として方形→長方形という変遷をたどることがわかる。

以上は竪穴部分のみに関わるプランだが、更埴条里遺跡J地区では周溝をもつ竪穴建物が2軒確認され

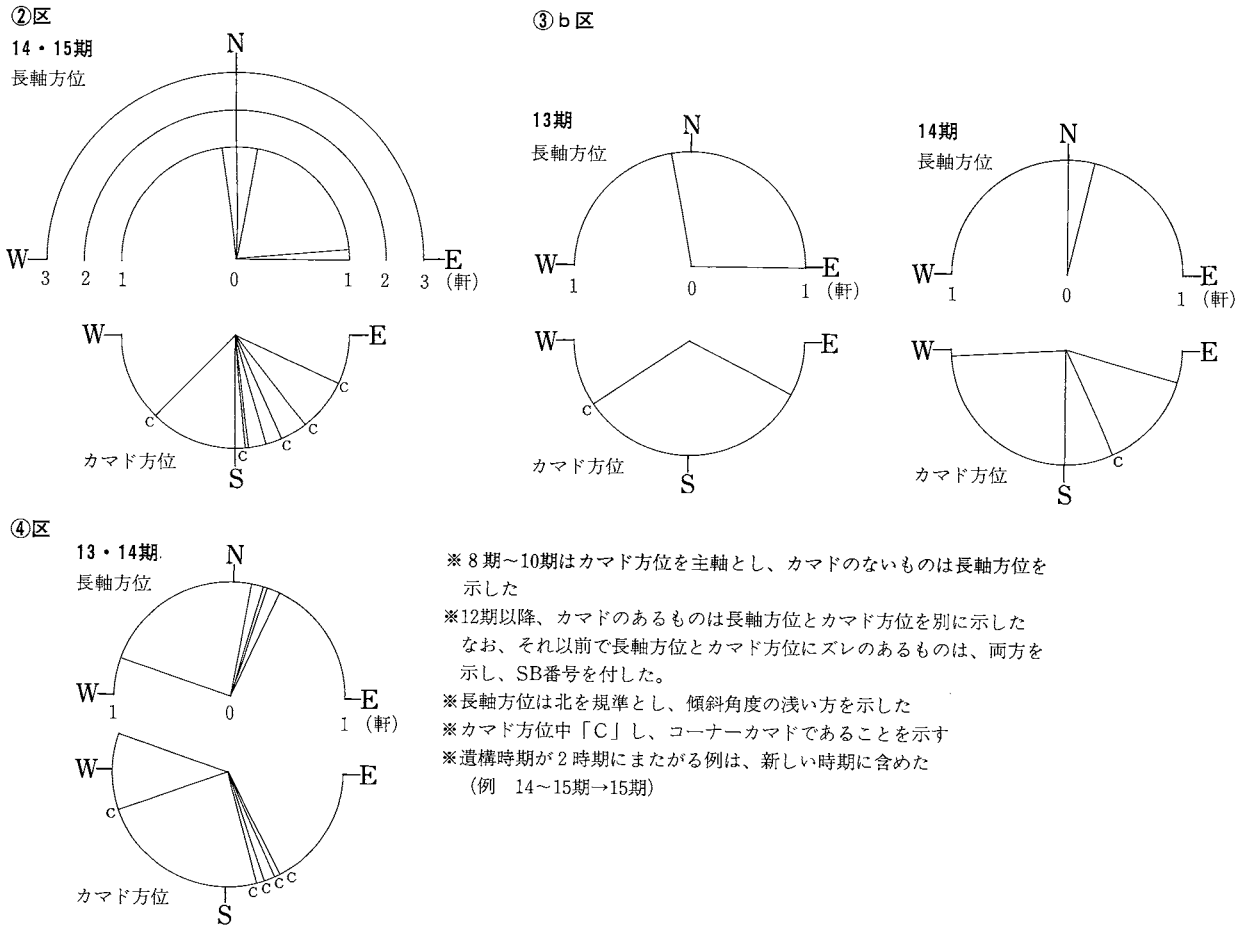


図15 時期別竪穴建物の主軸方位②(古代2)

た(SB1001・SB1002、図版90・91)。断続的な検出ではあるが、SB1001からもわかるように隅丸方形の竪穴に対し円形の周溝が掘られている。

②主軸方位

長軸方位とカマド方位 古代1期～8期前半の竪穴建物は、カマドが設置された壁と対面する壁を結んだ線を主軸として捉えることによってその傾向をつかむことができた(寺内1999)。同様に10期までは8期前半までと同様にして主軸とする方向が捉えられる。例えばカマド設置壁が短軸側としても、カマド方位は長軸方位とほぼ直行し、カマドが住居の軸と密接な関係にあったことが窺える。しかし後述するように、特に13期以降にみられるコーナーカマドの増加によって主軸をカマド方位との関連で捉えることが困難となった。よって図14・15では13期以降の竪穴建物に関して、長軸方位とカマド方位を別に示した。

集落別、時期別傾向 10期までの集落である更埴条里遺跡は主軸を南北におくものと東西におくものに大きく分かれる。特にH・I地区の8期後半と9期の住居は南カマドのSB807(図版28)を除いて北カマドと東カマドに大きく2分できる。一時期の集落と考えられるJ地区の住居はコーナーカマドのSB1003(図版92)をのぞいて主軸が東に統一されている。やや住居数は減少するが、K地区の10期までの住居も、やや特異なカマドを持つSB9051をのぞいて同じ傾向を示す。この段階での住居の主軸は旧条里畦畔の坪区画の方向を意識している可能性がある。

更埴条里遺跡K地区および屋代遺跡群の12期以降の集落は、図13に示した通り長方形の住居が主体となる。14期、15期が中心の①区と②区の住居の長軸方位はほぼ同じ傾向を示すが、④区の住居はこれらよりやや東に傾く傾向がみられる。

カマドの設置は10期までの竪穴建物とは大きく異なり、南壁および南東、南西コーナーが主体となる。

この結果、煙道と火床を結ぶカマドの軸方向（図18-A参照）は竪穴の長軸方位とは直交せず、大きなズレを生じさせている。

③規模

規模は竪穴の長軸、短軸、深さ、面積を示した。面積の計測はプランメーターを使用した。カマド張り出し部は計測から除外している。

面積の時期別変遷 図16-Aは計測可能であった竪穴建物の面積を時期別に示したものである。これによると、8期後半は規模の小さい2軒を除いて、10～15㎡の中に集中する。9期もその範囲の集中度が高いが、これ以降やや面積の大きい住居が出現し、13期以降は20㎡を越えるものが目立つようになる。これは図13で示したように、住居平面プランの長方形化と大きく関わるものと考えられる。

集落別傾向 ここでは、1時期の竪穴建物が比較的集中する集落を取り上げて面積の傾向をみることにする。

更埴条里遺跡I地区集落（図16-B） 8期後半の集落は突出して面積の小さいSB823（図版27、86）以外は10～15㎡の中に集中し、平均した規模の竪穴建物で構成されている。

軒数が急増する9期においてもこの範囲の集中度が高いが、これよりやや大きめの2軒（SB827=19.04㎡、図版20 SB870=18.2㎡、図版29）がみられ、さらに大規模なSB826（28.5㎡、図版20）がある。いずれもカマドを有する住居跡であるが、建物の規模に分化がみられる。

10期は建物数が激減するが、更埴条里遺跡K地区の資料（図16-D）を加味しても、9期以前と比べ比較的面積は大きい。

更埴条里遺跡J地区集落（図16-C） 小規模の住居2軒（SB1003=6.8㎡、SB1004=7.5㎡）、中規模の住居2軒（SB1001=11.76㎡、SB1002=12.76㎡）、大規模の住居1軒（SB1005=29.85㎡）に分離できる。

ここに性格不明の竪穴状遺構SX1001が加わるがデータからは除外してある。住居の切合はなく、1時期の小集落の住居のあり方を示す資料と考えられる。

屋代遺跡群①区集落（図16-E） 特に14期以降長方形の竪穴建物の出現とともに20㎡を越えるものが目立つ。これに対し15期は15㎡以下の小規模なものがみられる。この内SB10、SB12（図版51）、SK138（図版52、100）はカマドがなく、付属的な建物であったと考えられる。

屋代遺跡群②区集落（図16-F） すべて20㎡を越える建物で構成されている。①区にみられた小規模な建物跡については明らかでないが、SK1025（図版67）がこれに該当するかもしれない。

④掘方・床面の状況

掘方の状況 掘方の有無について多くは断面から判断し、表5にその旨を示した。平面的な記録があるものは優先的に個別平面図を掲載した。特徴的なものとしては、SB806（図版85）、SB1004（図版92）のように、壁際を全周溝状に掘り込むもの、SB865（図版89）のように壁際一部を溝状に掘り込むものなどがあげられる。全体的な傾向としてはカマド部を一端掘り下げてから埋め戻す例（SB872、図版89など）が多い。

床面の状況 床の構築法としては、以下のように大きく3分類ができる。

- (I) 掘方をもたず、地山（III-2層）を直接床とするもの
- (II) 掘方を埋め戻した土を堅固に叩いたもの
- (III) 地山あるいは掘方を埋め戻した土の上に部分的に土をのせ、堅固に叩いているもの

(I) は床面が軟弱な場合が多い。また、床面が平坦でないものも見受けられる。例：更埴条里遺跡K地区SB9049（図版94） 屋代遺跡群③区SB3027、SB3028（図版72、78）

また、部分的に堅固な床面とされている例が、屋代遺跡群の13期以降の竪穴建物に多くみられる。例：SB102（図版100） SB101（図版101） SB4003（図版106）

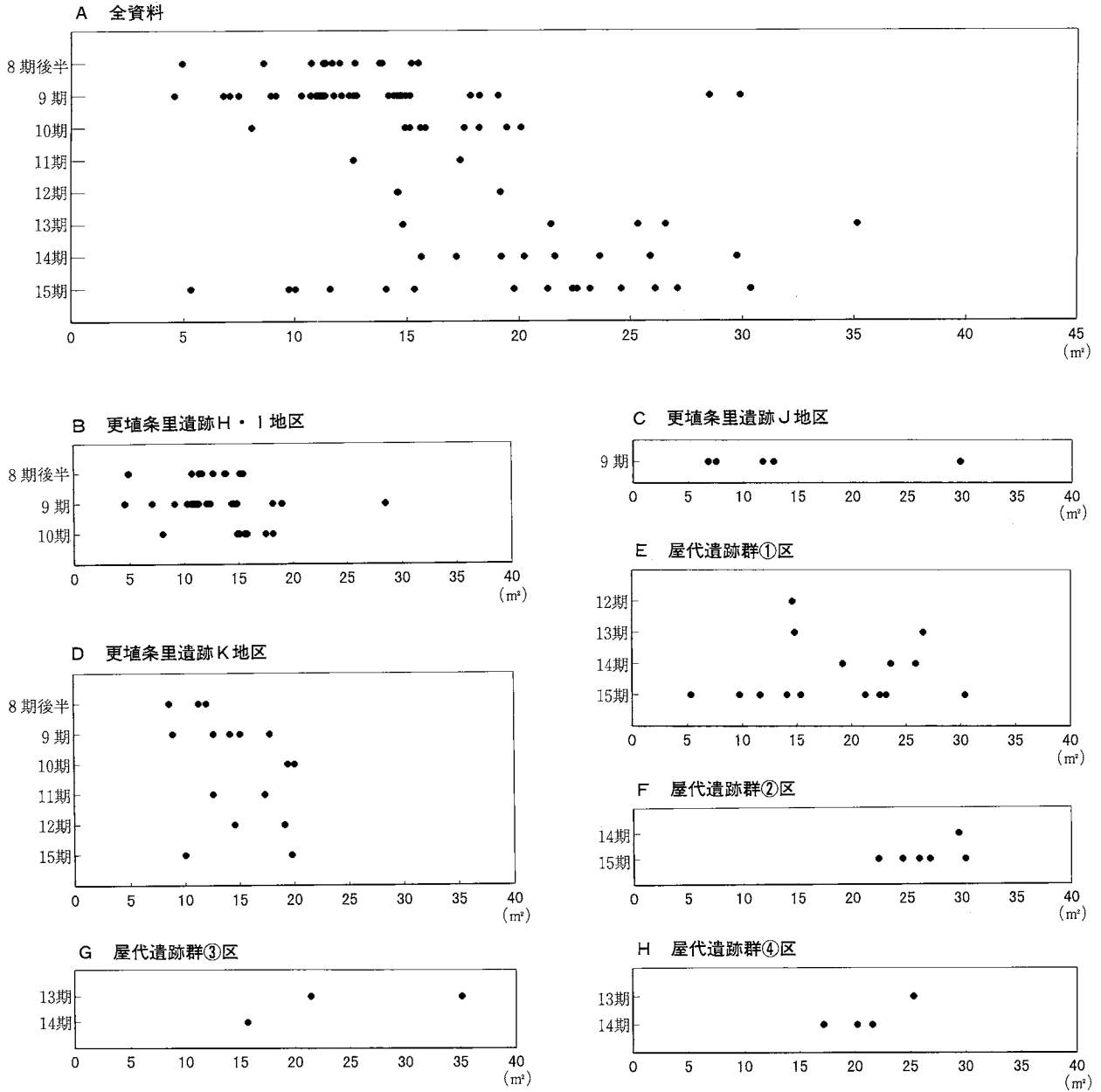


図16 竪穴建物の床面積（古代2）

(II) の場合も一部分を特に堅固にしているのが屋代遺跡群の13期以降の竪穴建物に多い。例：SB11 (図版51、55) SB40 (図版100)

(III) には更埴条里遺跡I地区SB808 (図版28、30)、屋代遺跡群④区SB4801 (図版83・84) などがあるが、例は多くない。

⑤壁・周堤・周溝・壁溝・棚状施設

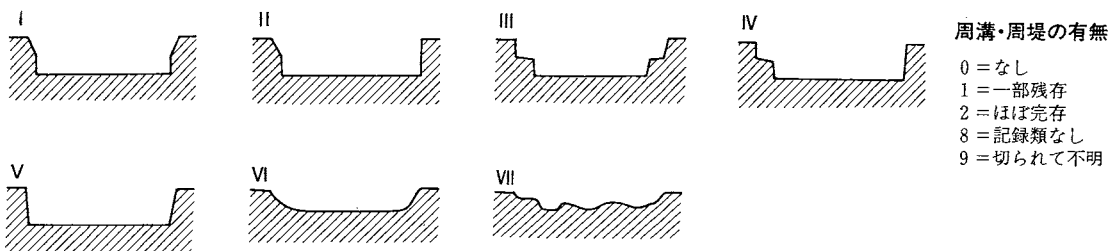


図17 竪穴建物の断面形分類図

竪穴建物の断面形 古代1編同様に周堤、周溝、棚状施設の有無について断面形で示した（図17）。

周堤・周溝 周堤の検出例はない。周溝は、更埴条里遺跡J地区集落のSB1001（周溝SD1012）、SB1002（周溝SD1013）の2例がある。断片的な検出ではあるが、SD1012はほぼ円形の周溝であることがわかる。溝底部のレベルは竪穴床面と比較すると同レベルおよび0.15mほど上位となる（図版90）。また、SD1013は部分的な検出となり、全周の状況は不明であるが、底部のレベルは竪穴床面に比べ0.4m近く高い。

壁溝 壁溝と考えられる例は屋代遺跡群②区集落に集中して認められる。SB101（図版101）、SB106（図版103）、SB108（図版102）は、カマド部を避けて壁溝が巡る様子を示している。いずれも浅い掘り込みで、特別ブロック等を含む埋土はみられない。3軒とも長方形のプランを呈し、カマドの位置がコーナー寄り、主柱穴が存在する点で共通している。

棚状施設 壁際に棚状の段差を持つ竪穴建物は3例ある。屋代遺跡群①区SB2（図版96）は、カマド正面の壁際に段差をもつ。左右両脇に柱穴を持ち、構造的には入口の施設と考えられる。同じく②区SB102（図版100）はコーナーカマドの横に段差を設けている。位置的にみて、調理等に関わる棚状施設と考えられる。

更埴条里遺跡K地区SB9051（図版95）は石組みカマド周辺を一段高くした特異な例である。南壁際に旧カマドと思われる火床が2カ所あり、新たなカマド構築に際してその部分を1段高くした可能性がある。

なお、屋代遺跡群①区SB22（図版98）は床面中央部に楕円状の段差を設けている。この段差脇に炉跡があることから考えて、工房のような特別な建物であった可能性がある。

柱の設置 古代2の竪穴建物床面で検出されたピットの中には、掘り込みが浅いため柱穴かどうか判断できないものが多くみられた。よって表5の柱穴は床面からの掘り込みの深さ、柱痕の有無、ピットの配置から判断した。（ ）内は主柱穴の数を示している。

主柱穴設置の変遷 特に後背湿地I群内の8期後半～10期に属する竪穴建物は、床面に柱穴が存在しないものが多い。また、柱穴状のピットがある場合も主柱穴としての配列があるものは少なく（更埴条里遺跡I地区SB807、図版85 SB865、図版89）、補助柱穴的なものと考えられる。竪穴外側で柱穴が検出される例は見あたらず、おそらく周堤に設置されたものと思われる。

これに対し自然堤防I群内の13期以降の集落では、床面に主柱穴の配列がある竪穴建物が増加する。特にプランが長方形となるものに目立ち、床面積の拡大傾向に対応する可能性がある。主柱穴は4本のものが多いが、屋代遺跡群②区集落のSB106（図版103）、SB107（図版69）、SB108（図版102）、SB109（図版67）などのように配列が4本の場合と類似していながら、主柱穴が2ないし3本の例も見受けられる。

なお、屋代遺跡群①区SB4（図版50、55）、SB12（図版51、55）のように主柱穴が1本の例もある。

この2軒はプランが他とは異なっており、住居以外の施設と考えられる。

（3）竪穴建物の付属施設

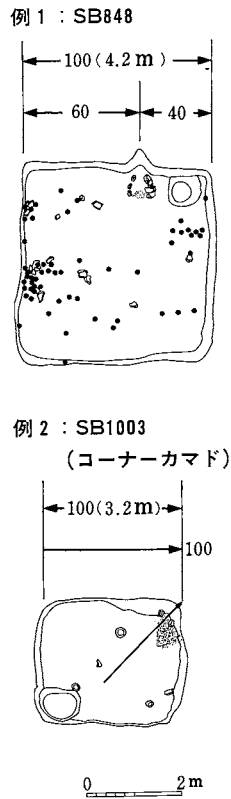
①カマド

カマドの設置については、煙道、袖などの施設が残存するものの他、コーナー部を含む壁際に火床等カマドが存在した痕跡が認められる場合を含めて表5に掲載した。カマドの作り直しがある場合は、最も新しいものをK1とした。

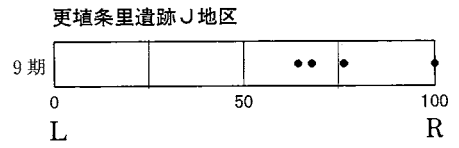
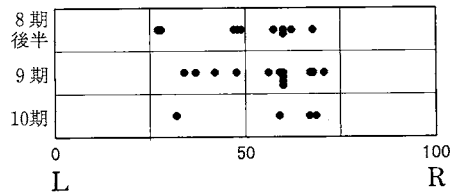
カマドの位置は設置壁での位置を竪穴のコーナーからの比率で示した「位置1」（図18-A）と、燃焼部と竪穴部壁の関係を示した「位置2」（図18-C）の2種類を提示した。

位置1（図18-B） 後背湿地内の8期後半～10期の集落においては、ほとんどが壁中央部を50として25～75の範囲にカマドが設置されている。比率的にみると中央より右側に偏る傾向がみられる。これは8期前

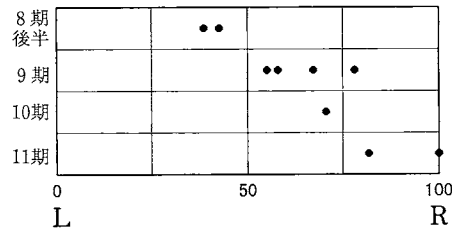
A. カマド位置1



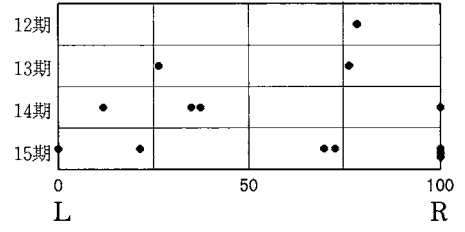
B. カマド位置1 集落・時期別傾向
更埴条里遺跡H・I地区



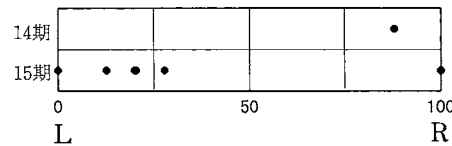
更埴条里遺跡K地区



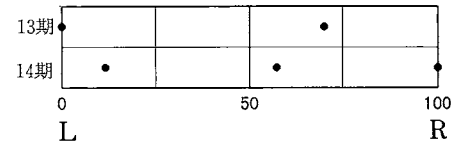
屋代遺跡群①区



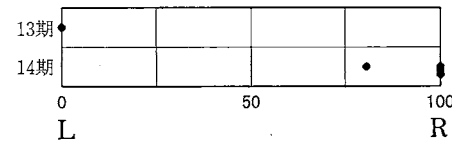
屋代遺跡群②区



屋代遺跡群③b区



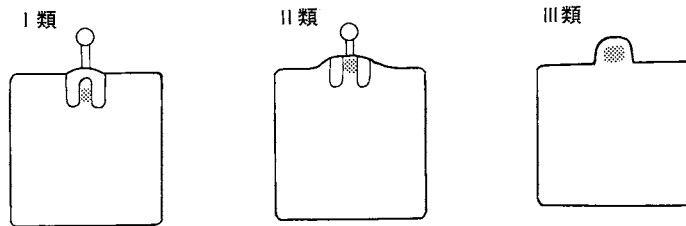
屋代遺跡群④区



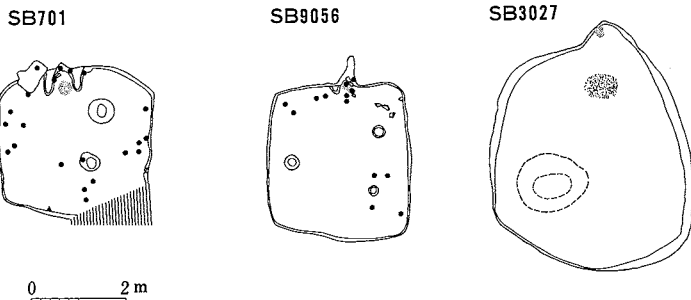
※火床の位置を中心に位置を示しているが明確な火床が残っていない場合は、ソデの配置等から、おおよその位置を示した。
※遺構時期が2時期にまたがる例は新しい時期に含めた。
(例 14~15期→15期)

C. カマド位置2

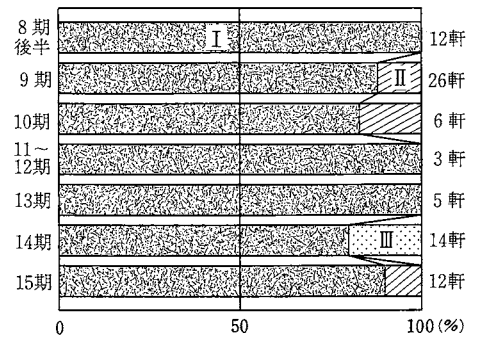
模式図



例



D. カマド位置2 時期別傾向 (全集落)



※資料数の少ない、11期、12期は一括して扱った。
※遺構時期が2時期にまたがる例は新しい時期に含めた。
(例 14~15期→15期)

図18 竪穴建物(住居)のカマド位置と時期別傾向(古代2)

半以前のカマドの位置とほぼ似た状況であるが、比較的左右への広がりがみられる。

12期以降の集落では25～75の範囲に集中する傾向はみられず、コーナー（南東および南西）に向かって移動していることがわかる。特に14期以降の顕著な点としてはコーナーカマドの増加があげられる。

このようなカマドのコーナー部への位置の偏りは、建物プランの長方形化と面積の拡大化および南カマドの主流化に呼応した現象と捉えられる。この段階でそれまでカマドを中心に構築された竪穴建物（住居）とは異なり、住居内に調理場以外のスペースが広がったことを示す。

位置2（図18-C、D） 8期前半以前と同様にI類からIII類が確認できる。その内主体は燃焼部が壁の内側にあるI類で、壁のライン上にかかるII類は9期～10期、15期に少数みられる。これはやはりI類の変形と捉えるのが妥当と思われる（寺内1999）。

燃焼部が壁外に突出するIII類は、例で示したSB3027（図版73）の他に明確な火床はないが、その可能性のあるものとしてSB3021（図版104）、SB3025（図版73）があげられる。これらは煙道を持たず、竪穴外に張り出してカマドが設置されているもので、II類の屋代遺跡群①区SB30（図版51）も類似した構造である。

SB3027では椀型鍛冶滓が出土するなど、鉄生産に関わる建物である可能性が高く、カマドの構造がこれと関連することも考えられるが、現時点では明確にできない。

袖の構築 カマドの袖が残存していた例は少ないが、構築状況についてはおおよそ以下のように3分類できる。

- (I) 土を盛って構築したもの（土）
- (II) 掘方に心材として礫を埋め込み、土を盛ったもの（土+礫）
- (III) 石組みによるもの（石組）

(I) は更埴条里遺跡H地区SB701（図版85）、更埴条里遺跡J地区SB1001（図版90）のカマド断面からその様子を窺うことができる。

(II) の例としては、更埴条里遺跡I地区SB859（図版88）、SB872（図版89）があげられるが、その他周辺に礫が廃棄されている例が多数見受けられる。

(III) も(II)と同様掘方に礫を埋め込んでいるが、土を盛った形跡が窺えない場合を判断の基準とした。礫の配列があり、断面の記録のないものも石組に含めたが、(II)の可能性をもつものもある。

この中で石組カマドの状況をよく示すものとして更埴条里遺跡K地区SB9051があげられる（図版95・PL6）。天井石も残しほぼ完形の状態で出土した。カマド設置部を一旦浅く掘り込み、掘方内に平石を立てて固定することによって袖を構築しており、中央部に支脚石がみられる。

貯蔵穴 主としてカマド脇に掘られたピットを、貯蔵穴の可能性のあるものと判断し分類した（図19）。分類は以下の通りである。I. 長方形あるいは方形である程度の深さを有するもの。II. 円形あるいは不整形の深い穴。III. 甕などを据える程度の窪地。IV. 浅い掘り込み内に円形の深い穴が存在する例。

更埴条里遺跡I地区のSB831（図版29・30）は小規模な竪穴建物であるが、床面中央に大きな円形の土坑状の掘り込みがあるだけで、他の施設は存在しない。時期は不明であるが、周辺の竪穴建物に付属する貯蔵用の建物の可能性が考えられる。

② 炉（カマド以外の火床）

カマド以外に床面に火床面（燃焼部）が存在する場合、その数および位置の概略を示した。壁際に認められ、カマドが存在した痕跡としての

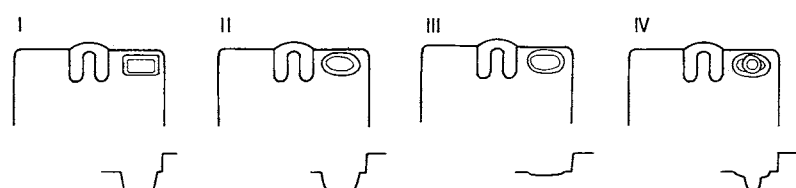


図19 カマド脇ピット（貯蔵穴？）分類図

可能性がある場合は、K2、K3などを付してある。

これに対し、床面中央付近に存在する場合は炉あるいは移動式カマドの使用などが想定できる。更埴条里遺跡K地区SB9015a（図版93、15期）、SB9045（図版94、15期）、屋代遺跡群①区SB22（図版98、時期不明）、SB40（図版100、15期）がこの例としてあげられる。この内、SB9015aとSB22は壁際コーナー付近にも火床があるが、ソデや煙道は確認できなかった。15期が主であることから、中世にかけての時期的な特徴と考えることもできる。しかしカマドが確認されている建物も多いため、建物の役割の違いや住居内での生業等の存在も想定できる。

③その他の付属施設

柱穴、カマド脇ピット（貯蔵穴）以外で床面に掘り込まれたピットは数多いが、その用途は不明である。その内特徴的なものを以下にあげる。

焼土、炭化物が堆積するピット ピットの埋土中に焼土層や炭化物層、あるいはブロックが多量に混入する例として、更埴条里遺跡I地区SB836内P1、P4（図版87）、SB844内P2（図版88）、SB852内P1（図版88）、K地区SB9015a内P1（図版93）、屋代遺跡群①区SB1内P12（図版96）などがあげられる。いずれもピット内で火を焚いた痕跡はみられず、炉などとは異なるものと考えられる。

この内SB9015aはすぐ脇に火床（炉あるいはカマド?）があり、灰溜ピットの可能性がある。しかし、SB836のP4は位置的にカマド掘方の可能性もあるが、他とはやや異なっており、SB852はカマドの存在が確認できない。また、SB844、SB1の場合はカマドから離れた場所に存在する。

(4) 竪穴建物の廃絶と遺物出土状況

①カマドの廃絶と遺物出土状況

カマドが完存する例は極めて希で、ほとんどが部分的な残存にとどまる。この点に関わって、表5ではカマドの残存状況を煙出口、煙道、天井、左右袖、支脚、火床について、周溝・周堤の有無を表わしたのと同様に、0～9の数字で示した（図17参照）。

これに加えて人為的な破棄行為の痕跡を探るため、カマド上の堆積物について、焼土ブロックの有無、土器・礫の有無、さらに周辺の袖石や心材としての礫の廃棄の有無について、同じく0～9に数字で示している。

カマドの残存度 煙出口が残存した例は皆無といってよく、一部煙道先がわずかにピット状に広がる状況がみられるだけである。これは検出面を低く設けた結果と考えられ、同様の理由で煙道の多くが部分的な検出にとどまっている。

天井は、カマドがほぼ完形で残った更埴条里遺跡K地区SB9051（図版95）以外認められない。

袖は、ほぼ完存したSB9051を含め、部分的に残る例は41軒あり、全体の約44%にあたる。しかし、これ以外はその痕跡を全くとどめない。

支脚が残存したのは更埴条里遺跡I地区SB804（図版22）、SB842（図版21）、SB859（図版88）、K地区SB9051（図版95）、屋代遺跡群①区SB21（図版99）の5例のみで、全体の約5%と極めて少ない。

火床は55軒で確認でき、全体の約60%と残存度が高い。これに対し袖、支脚が残存していながら火床が確認できないものが12軒ある。これはカマド（建物）の使用期間、使用法等様々な検討を必要とする点と言える。

カマドの廃棄 カマド上部の埋土は、焼土、炭化物ブロックを含む複雑な堆積である場合がほとんどで、その上を竪穴全体を埋める土が覆う。このことは建物（住居）廃絶に際して、カマドに対する破壊、埋め戻しという行為が行われていたことを示す。

更埴条里遺跡I地区SB823（図版86）、K地区SB9038（図版94）は火床上部を含めて竪穴全体が砂質土に覆われる。カマドを埋め戻した痕跡がない例としてあげられる。

遺物出土状況 カマド廃棄に関わって、土器等の廃棄状況はおおよそ以下のように大別できる。

（I）袖内側の火床上部を中心に廃棄する例。更埴条里遺跡J地区SB1004（図版92）、K地区SB9051（図版95）、屋代遺跡群①区SB2（図版96）、SB21（図版99）、②区SB109（図版104）などがあげられる。この内SB1004、SB21、SB109は袖石も一緒にまとめて廃棄した状況がみられる。

（II）袖の外側および貯蔵穴内に廃棄する例。更埴条里遺跡I地区SB844（図版88）、SB848（図版87）、SB859（図版88）、SB865（図版89）、J地区SB1003（図版92）、屋代遺跡群①区SB6（図版98）などがあげられる。

（III）袖の上も含め、その内側、外側一帯に廃棄する例。更埴条里遺跡I地区SB806（図版85）、J地区SB1001（図版90）などがあげられる。

（IV）遺物の廃棄がほとんどみられない例。更埴条里遺跡I地区SB823（図版86）、K地区SB9021（図版93）、屋代遺跡群①区SB28（図版99）などがあげられる。この内SB823は床面に火床、炭化物がある以外は袖も支脚も残らず、埋め戻された痕跡もない。一切が持ち去られたものと考えられる。

②竪穴建物の廃絶と遺物出土状況

埋土の分類 竪穴建物の廃絶に際して、竪穴が放置されたかあるいは人為的に埋め戻されたかを検討する資料として埋土の分類を行った（図20）。分類は、埋め戻しの可能性をもつブロック土を含む堆積層の有無（A）と建物の廃棄に伴って生じた可能性をもつ、床面直上～埋土中の炭化物・焼土・灰層の分類（B）の2点で行っている。

A. ブロック土堆積の有無と分類



B. 床面直上～埋土中の炭化物・焼土・灰層の分類

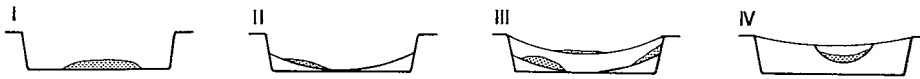


図20 竪穴建物の埋土分類図

埋土の状況 埋土についての記録がある132軒中最も多いのはI類で90軒を数える。これらの埋土のほとんどはIII-2層に対応あるいは類似する砂であるが、いくつかに分層される場合と単層の場合がある。

II類、III類が全体に占める割合は少ないが（II類6例、III類8例）、ひとつの傾向として、後背湿地I群の10期までの集落内にはほとんどみられず、更埴条里遺跡K地区以北の集落内に集中する点があげられる。

IV類は24例を数える。III-2層上に立地した古代の集落では、その地表面は砂地であるとともに、ほとんどの竪穴の壁も砂によって構成されていた。よって竪穴埋土にIV-1層、VI層などのシルトや粘土ブロックが混入する場合は埋め戻しである可能性が高い。ただ、ブロック混入の度合いに差があり、全てをそのように判断することはできない。逆にI類が全て自然埋没と捉えるのは困難で、遺構の密集度の高い更埴条里遺跡I地区においては9期に属するI類の竪穴が9期の竪穴に切られる例があり、この場合は埋め戻されていたと捉えることが可能である。

V類の確かな例としては、更埴条里遺跡J地区SB1004（図版92）がある。

炭化物・焼土・灰などの堆積 焼土や炭化物の堆積は、床面に認められるI類がほとんどである。この内更埴条里遺跡K地区SB9015aは、床面の広い範囲に炭化物が堆積し、炭化材もみられる。また、炭化種子（ササゲ近似種子）がまとまって出土している。J地区SB1004および屋代遺跡群③b区SB3022（図版105）床面でも炭化材が出土しており、これらは焼失家屋である可能性が高い。

II類に含まれるものの内、屋代遺跡群②区SB101（図版101）も焼失家屋である。壁際から床面の一部にかけて堆積した炭化物層（7～5層）を砂層（4層）が覆い、さらにその上から床面全面を覆う多量の炭化物や焼土を含む堆積（3層）がみられる。カマドの支脚は残らず、埋め戻した形跡があるため、火災ではなく焼却した可能性が高い。

床面・埋土中の遺物出土状況 個別図内では平面及び断面に遺物出土状況を示し、遺物図版に掲載されたものと照合できる場合はその番号を付した。それ以外は表5中に、記録に基づいて出土状況の概略、重要遺物を示している。

3 掘立柱建物跡 (ST)

(1) 概要

古代2の集落内で確認された掘立柱建物跡は、更埴条里遺跡I地区で10棟、K地区で2棟である。両地区とも多数のピットが検出されており、柱の配列は確認できなかったが、建物数はさらに多かったものと考えられる。なお屋代遺跡群①区では、中世に属する無数のピットに混じり、III-2層に近似する埋土をもつピットが検出されたが、数が少なく建物として認識できるものはなかった。

(2) 掘立柱建物跡の時期に関して

遺物を伴うことがほとんどなく、土器などからその時期を明確にすることはできない。よっておよその時期の判断する手がかりとなるのは、時期が明確な遺構との切り合い、配置、主軸方位などである。

切り合い・配置から 第2節で示したように、I地区の建物跡及びピットのほとんどは10期の竪穴建物が配置する範囲にはみられず、8期後半から9期の竪穴建物跡を切っている。このことから10期の集落に伴う建物である可能性が高い。

K地区の建物跡及びピットは13期以降の竪穴建物が配置する一帯にはみられず、8期後半～12期の竪穴建物を切っている。このことから13期以降の集落に伴うものである可能性が高い。

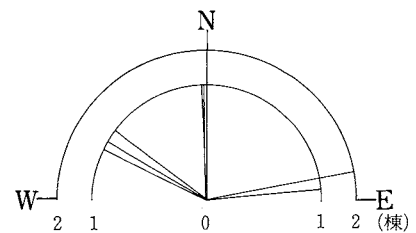
主軸方位から（図21） I地区の建物跡の内、長軸がほぼ南北方向のものとはほぼ東西方向のものは、坪割区画溝や竪穴建物の主軸方位とはほぼ一致する。これ以外に北西～南東に長軸方位をもつ3棟がみられる（ST817、818、819）。ST816のP1がST817のP1を切ることから（図版21）、後者の方が古いものと思われる。同様の主軸方位をもつ竪穴建物SB839（9期）、SB841、SB842（8期後半）が存在するため、これらと対応する可能性もある。

なお、K地区では確認できた棟数が少ないため、傾向をつかむことはできない。

(3) 規模・構造に関して

確認された掘立柱建物跡はすべて側柱である。ST811（図版108）、ST903（図版110）以外は梁間は1軒であり、住居的な構造をもつものはみられない。やはり倉庫的な建物と考えられそうである。ただ、ST815（図版109）は張り出し部分がみられ、やや役割を異にしていた可能性がある。

更埴条里遺跡I地区



更埴条里遺跡K地区

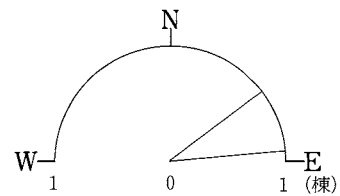


図21 掘立柱建物の主軸方位
(古代2)

4 墓坑・井戸・その他の土坑（SK）

(1) 概要

SK表示の遺構 古代1編同様に1辺が約2m以下の落ち込みについては、ほとんどSK表示で調査を行っている。このため、墓坑、井戸跡、廃棄土坑など多様な遺構が含まれる。

概要 古代2の特徴として、墓坑の存在が確認できた点があげられる。検出例がなかった古代1とは対照的である。これに対し焼土坑の数は減少する。その他、鍛冶関連の遺物が多量に廃棄された土坑などがあるが、多くはその用途が不明なものである。

掲載の方法 明確に墓坑と考えられるもの、特徴的な形状をもつものを主に個別図（1/60）に掲載した。調査段階で組み合わせが不明な柱穴に対してSK番号が付されていたものについては表示を行っていない。これらを含め個別図の掲載がない土坑は遺構分布図（1/500）あるいは遺構割付図（1/120）に平面図を掲載し、1/120図に坑底のレベルの読み値（356.00m—○○cmの○○cm）を表示した。井戸跡などは必要に応じて断面図を作成した。その他記載事項は表7に示した。

(2) 分類

大分類は『弥生・古墳時代編』、『古代1編』を踏襲する。その項目は以下の通りである。

I群・・・人為的な掘り込みの可能性が高いもの

II群・・・植物痕などの自然物に人手が加わったと考えられるもの

III群・・・自然の営力で落ち込みとなり、人での介入が認められないもの

IV群・・・上記以外、あるいはデータが少なく判断できないもの

大部分はI群に属すると考えられる。しかし、洪水砂層であるIII-2層中で同様の砂を覆土とすることから検出が困難で、かなり検出面を下げてから調査したため、形状や本来の深さが不明なものも多い。

I群内の分類 I群については古代2では以下のように分類した。

1類・・・井戸跡 円形を呈し、掘り込みが深く（IV層以下に到達する）水が湧いた可能性をもつもの

2類・・・いわゆる焼土坑 主に長方形を呈する。底部に炭化物が堆積、壁が焼成を受けて酸化（赤化）したものの。

3類・・・廃棄土坑 当初の用途は不明であるが、多量の土器片や礫などが廃棄された状況でみつかった土坑。規模、形態は多様である。

4類・・・墓坑 楕円形、長方形を呈し、人骨が埋葬された状態で出土したもの。人骨は確認できないが、副葬品と思われる遺物が出土したもの。

5類・・・用途不明の掘削坑

その他

(3) I群1類 井戸跡

概要 井戸跡と考えられる土坑は、特に後背湿地I群側の更埴条里遺跡で数多く検出された。I地区集落では7基認められるが、断面図が掲載できなかったSK8009（図版22）・SK8010・SK8031（図版28）・SK8152（図版27）は、湧水が激しく坑壁が軟弱なため完掘を断念したものである。

K地区集落でも7基が検出されている。J地区集落は1基であるが、9期の一時期の集落に伴うものである。このように各時期の集落に1基あるいは2基の井戸が存在していたものと考えられる。

これに対し、自然堤防側の屋代遺跡群では検出例が少なく、④区のSK4003・SK4194（図版81）・SK4227

(図版15)の3基である。この後、①区と④区の中世集落では井戸跡が多数確認されているため、あるいはこの中に古代2に遡るものが含まれるかもしれない。

井戸の配置 更埴条里遺跡I地区の井戸は全体に分散するが、K地区では南寄りに集まる傾向がみられる。これはI地区全体が後背湿地であるため、全面水が湧きやすいのに対し、K地区は自然堤防への転換点であるため、より低い後背湿地側を選択して掘削したものと思われる。これに対し屋代遺跡群の井戸は中世のものを含め、掘り込みが非常に深い(SK4227、図版16)。

構築法による分類 古代1同様に、A. 井戸上半部に大きな掘方を有する例(SK8083、図版24・SK8151、図版36・SK9256、図版43)とB. 大きな掘方を有しない例がみられる。

なお、井戸枠が確認されたものはなく、ほとんどが素堀りの井戸であったと思われる。

井戸の廃絶 ブロック土を含む複雑な堆積となるものが多く、埋め戻されたものと考えられる。特に更埴条里K地区SK9282(図版111)は、底部で曲物が出土し、埋土中部にはウシの各部の骨(標本番号143~149)が一括で出土した。井戸廃絶に伴う儀礼行為と考えられそうである。

(4) I群2類 いわゆる焼土坑

概要 古代1編で報告された焼土坑は、約1×0.7mの長方形、方形を呈し、深さが約30cmを主とする。壁が焼成によって酸化(赤化)し、底部に炭化物が敷き詰められたように集中する。これに類似するものは屋代遺跡群④区で2例確認できる。

古代2の焼土坑 SK4624(図版111)は壁が焼成により酸化する。底部に炭化物が敷き詰められたような状況はみられないが、ブロック状の焼土、炭化物が確認された。また、土器小片が出土した。SK4625(図版111)も壁が焼成により酸化し、底部には炭化物が敷き詰められたような状況がみられる。遺物の出土はない。

この2基は極めて近接した場所に存在し(図版75)、相互に関連する可能性がある。なお、SB4502のすぐ脇にあることから、この建物との関連も考えられる。

(5) I群3類 廃棄土坑

土器が廃棄された状態で出土した土坑は、更埴条里遺跡I地区SK8304(図版111)以外目立ったものは認められない。この他、更埴条里遺跡K地区SK9259(図版42、44)、屋代遺跡群③区SK3252(図版72、78)からは椀型鍛冶滓や羽口などが出土しており(図版155)、鍛冶関連の廃棄土坑と考えられる。特にSK3252は同じく鍛冶関連の遺物が出土したSB3028床下で検出されており、この建物に付属する可能性がある。

(6) I群4類 墓坑

概要 楕円形、長方形を呈し、人骨が埋葬されたと思われる状態で出土したものを墓坑と判断する。歯以外の骨は残存状況が悪いため、取り上げ可能であったものは分析を行い、個別図(図版111)中に標本番号を付した。取り上げが不可能であったものはその出土状況を示した。

墓坑はその性格上、埋葬後直ちに埋め戻されたと考えられる。この理由から埋土が地山のIII-2層と同質であるため、検出が難しく、検出面がかなり下がった段階で骨が出土したことによって確認された。よってその墓坑本来の深さについては不明である。

埋葬の状況 埋葬状況がよくわかるのはSK360(図版111)で、横臥位で膝を屈している。並列するSK358、SK359(図版111)も長軸が約1.4mと短く、屈葬であったものと思われる。なお、頭骨の状況や歯の出土状況からみても横臥位であった可能性が高い。これに対しSK46(図版111)は長軸が約2.3mと長く、頭骨

の状況からみても仰向けの伸展葬であったと思われる。頭部はSK8406（図版111）が東、他は全て北を向けて埋葬されている。

副葬品 SK8406では頭部右側に1点、腹部左脇に1点土器（図版145）が出土した。SK46も頭部右側に1点（図版145）みられる。また、SK5013（図版111）は頭部左上から左脇にかけ6点（図版146）が認められる。いずれも人骨出土レベルと同じであり、副葬されたものと考えられる。

土器の時期はSK8406が9期、SK46が15期前後、SK5013が13期である。

なお、更埴条里遺跡K地区SK9270（図版111）は、人骨は確認できなかったが土坑の形状と土器の出土位置からみて墓坑である可能性が高い。時期は13～14期に属する。

墓坑の配置 SK8406は更埴条里遺跡I地区集落の北側に位置する。SK46も屋代遺跡群①区の14期の集落の北側に位置する。SK5013も竪穴建物が存在する屋代遺跡群④区からかなり距離をおいた⑤b区北側にあり、SK358～360を含め集落の北側に墓を設ける傾向がみられる。ただ、SK9270が墓坑とすると更埴条里遺跡K地区集落の南側に位置することになる。

その他の墓坑 屋代遺跡群①区集落北側に円形の土坑が集中する範囲がある（図版60）。この一帯は中世において多数の円形土坑が集中する場所（図版198）である。その内、埋土がIII-2層に近似するものを抽出して古代2に属する遺構として捉えた。中世に属するものには焼骨が出土した例もあり、これらの土坑は墓坑である可能性が高い。この一帯に墓域が形成される初段階のものと考えられることができる。

(7) I群5類 用途不明の掘削坑

概要 I群の土坑中この5類が占める割合が最も高い。平面形、断面形、規模ともに多種多様である。これらの土坑に関するデータは表7に示したが、特徴的な形状をもつものを以下に記述する。

規模の大きい方形の土坑 更埴条里遺跡K地区集落にみられる、1辺が約2～2.5m、深さが約0.3～0.5mほどで、竪穴建物に比べて規模が小さい。SK9238・SK9248（図版38、43）、SK9234（図版47）がこれにあたる。遺物の出土はほとんどないが、SK9248底部には炭化物の堆積がみられる。

並列する長方形の土坑 更埴条里遺跡K地区集落のSK9249・SK9250（図版40）がこれにあたる。SK9251もこれに含まれる可能性がある。形状、規模ともに前述の墓坑に類似するが、出土遺物もなく断定はできない。

掘方を有する長方形の土坑 屋代遺跡群①区集落のSK131（図版52、55）がこれにあたる。長軸2.6m、短軸1.6m、深さ0.54mと比較的規模の大きな土坑である。掘り込んだ後、底部を埋め戻して平坦にした痕跡があり、竪穴建物の掘方のような状況がみられる。

5 焼土跡（SF）

明確な掘り込みをもたず、焼土が地山上に堆積した遺構が屋代遺跡群⑤b区に2基（SF5001・5002、図版15）確認された。SF5001は土器を1点（図版143）伴う。

6 鍛冶関連遺構

特に鍛冶関連の遺物が多量に出土した遺構をここに含め、第2節の各集落の中で触れた。竪穴建物跡では屋代遺跡群③b区集落のSB3027・SB3028（図版72）、④区集落のSB4004（図版80）・SB4503（図版107）があげられる。この内SB3028は床下で廃棄土坑SK3252が検出されている。

また、SB4503の床下で検出されたピットの内P15は壁が焼成により酸化している。性格は不明だが、鍛冶に関わる施設の可能性がある。

この他廃棄土坑として、鍛冶関連遺物が出土した更埴条里遺跡K地区SK9259があげられるが、周囲にこれと関わる施設が認められない。また、屋代遺跡群④区のSD4504からも多量の鍛冶関連遺物が出土しており、鍛冶に関わって集落内の廃棄場となっていたことがわかる。

なお、鍛冶炉と考えられる遺構は認められなかった。

7 性格不明の遺構 (SX)

竪穴建物や土坑とやや異なった形状をもつ性格不明な遺構3基をSXとして扱った。

更埴条里遺跡H地区SX701 (図版18、23) は不整形の浅い落ち込みである。坪割区画溝SD731をはさんでH地区集落の東外側に位置する。底部に若干炭化物の堆積がみられる他は特に遺物の出土がみられない。この遺構のすぐ南東脇で銅印 (「王強私印」) が出土したが、その関連は不明である。

更埴条里遺跡J地区SX1001 (図版35、36) は方形の浅い掘り込みである。形状・規模ともに竪穴建物跡に類似するが、床面は確認できず、底部が掘方状となる。集落内の建物配置からみて、竪穴建物跡であった可能性も考えられる。

屋代遺跡群③b区SX3021 (図版13) は不整形の浅い窪みで、底部に部分的に炭化物が集中している。集落に関わる遺構と思われるが、竪穴建物の集中域からやや距離をおいている。

8 溝・自然流路 (SD)

(1) 概要

SD表示の遺構 SDの表示は人工、自然を問わず、溝状の遺構全てに対し付している。

掲載方法 SDについては1/500遺構分布図および1/120遺構割付図での掲載のみとし、1/80断面図を添えている。記載事項は表10に示した。なお調査地区を越えて検出されているものについては、接合する場合も基本的に各地区に対応するSD番号を付している。

(2) 溝・自然流路の分類

大分類 SDの大分類は基本的に『古代1編』を踏襲する。分類は以下の通りである。

- I 群 人工的に開削された溝
 - 1 類 流水が認められるもの≒水路
 - 2 類 流水が認められないもの≒水路以外の溝
- II 群 自然流路を改修した溝
- III 群 自然流路
- IV 群 上記以外、判断できない溝状遺構

A. I 群 1 類 水路 I 群 1 類は人工的に掘削された水路を対象とし、細別は『弥生・古墳時代編』および『古代1編』に従う。分類基準の大枠は以下の通りである。

- a. 基幹水路・・・溝幅3m以上、b溝を分岐する。
- b. 幹線水路・・・溝幅1～2mと比較的広く、分岐する小溝を伴う。
- c. 支水路・・・bよりも溝幅が狭く、bに接続する。
- d. 補助的水路・・・溝幅数十cm以下、b・cに並行あるいは独立して存在する。

古代2の集落周辺においては遺構としての水田の存在は確認されていない。よって検出された水路群は現段階では灌漑用水路であったのか、他の目的のための水路であったのか明確にすることはできない。

基幹水路 更埴条里遺跡K地区南端部からJ地区北端部にあたる、南北約20mの範囲の中で検出された多数の溝 (図版6・7、38～40) は基幹水路的なものであった可能性が高い。自然堤防から後背湿地に向けて

傾斜する地点にあたり、北端のSD965は、近世以降の町田堰（SD943およびSD930・SD940、図版296）と流域を同じにしている。また、南側には南北方向の幹線水路が存在することから、後背湿地内へ送水する役割をもっていたと考えられる。しかし、溝幅2m前後の溝が多数切り合い、自然流路的な状況を呈していることから、基幹水路として管理されないまま廃絶したものと思われる。

屋代遺跡群④区SD4504（図版13・14）は、最大で幅3mを越える規模の大きな溝である。掘削時期の特定はできないが、埋土中から多量の鍛冶関連遺物が出土しており、集落成立後は廃棄場となっていたものと考えられる。④～⑤区集落の成立が13期以降であることからそれ以前と想定できる。

幹線水路 上記更埴条里遺跡の基幹水路から分流したと思われる溝が、更埴条里遺跡J地区西側からほぼ並行して南東方向に2本検出された（図版4・5・6）。北側の溝はI地区で東に蛇行し、地区外へ抜ける（SD1008→SD883→SD852）。南側の溝はかつてはH地区で東へ蛇行していたようだが（SD859→SD735・SD857→SD734）、後に南方向へ改修された状況が窺える（SD858→SD706→SD703）。改修された溝はH地区北側で分岐しており、西から来るSD708および北から来るSD801とつながっていたと考えられる。

なお、SD4018（図版80、84）はSD4504から分流したものと思われるが、やや規模が小さい。この溝は13期の竪穴建物（SB4004）に切られている。

支水路 更埴条里遺跡H地区SD741（図版4）、J地区SD1018（図版6）などは、上記幹線水路から分岐する支水路と考えられる。なお、補助的水路については明確に捉えられない。

B. I群2類 底部や埋土の状況から、流水があったとは判断し兼ねる溝をここに含める。用途としては、区画や畠の畝間等が考えられるが、不明なものも多い。

坪区画を踏襲する溝 更埴条里遺跡H地区からK地区南端で検出された、条里水田の坪区画畦畔に沿って掘削された溝があげられる（図版4～7）。南北大畦畔に対応するSD731、SD863、SD1011、SD996、東西大畦畔に対応するSD746、SD1021・SD1022が確認された。なお、更埴条里遺跡I地区では東西大畦畔が検出されなかったが、SD808がこれに対応する可能性をもつ。時期は、竪穴建物跡との切り合いから、8期後半～9期と考えられる。区画の目的は明らかにできないが、特に東西区画溝は竪穴建物との重複関係がみられず、集落の南北境界として意識されていたと思われる。

屋代遺跡群内の溝群 屋代遺跡群①区～③区で検出された東西および南北に巡らされた溝（図版8～13）は、埋土がIII-2層に類似する砂を主とし、底部に酸化鉄等が沈着した様子もないため、流水があったことを明確に判断することができない。区画溝と捉えることもできるが、竪穴建物の配置からみて集落との関連は窺えない。時期は14期の竪穴建物に切られるため、それ以前に掘削されたものであり、集落成立以前の可能性が高い。この内、②区のSD2235と③区のSD3002は圃場整備前の堰（SD2208、SD3001＝町裏堰、図版299・300）と検出範囲がほぼ重複している。このことから、基幹水路SD4504から分岐した幹線水路と捉えることもでき、分岐する溝も含め水路であった可能性が指摘できる。

竪穴建物を囲む溝（周溝） 更埴条里遺跡J地区集落SB1001の周溝SD1012（図版90）とSB1002の周溝SD1013（図版91）の2例が認められる。特にSD1012は残存状況がよく、住居を円形に囲んでいたことがわかる。なお、溝の深さは両者とも竪穴床面と比べかなり浅い。

畠作に伴う溝群 古代2においては、明確に畑作に伴う遺構は認められない。可能性のあるものとしては、更埴条里遺跡I地区のSD866・SD867・SD877～SD879（図版21）が耕作痕あるいは畝間のような遺構としてあげられる。ただ方向が北西―南東で、坪区画の溝とは一致せず、溝の配列もやや不規則である。8期後半の竪穴建物に切られるため、洪水直後と考えられる。

C. III群 自然流路 自然流路に含められるのは屋代遺跡群①区南端のSD23（図版8）である。これは現在の五十里川の旧河道にあたる。底部まで調査できなかったが、図版17に近世までを含めて断面図を示し

た。出土土器から図中11層以下がほぼ古代2に対応する堆積である。更埴条里K地区側では近世およびそれ以降の河道によって削られており、当時の河幅は不明である。

SD23はこれ以降徐々にその河道が変化しており、人工的な改修が行われた形跡は認められない。

引用・参考文献

- 寺内隆夫 1999 「第2章第4節 集落跡検出の遺構と遺物出土状況」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代1編—本文』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25—更埴市内その4—更埴条里遺跡・屋代遺跡群—弥生・古墳時代編—』
- 長野県教育委員会・更埴市教育委員会 1968 『地下に発見された更埴条里遺構の研究』

表5-1(1) 竪穴建物跡(SB)一覧(古代2)

更埴条里遺跡 H地区集落・I地区集落

遺構番号	位	遺構図版	時期	建 物 プ ラ ン										カ マ ド の 特 徴							
				遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	番号	設置壁
SB 701	H X I	Y24	9	85.18.4	隅丸方形	VI-99	N90° E			(3.28)	3.26	0.15	(10.95)	K1	N	42:58	I	0.08		土	
SB 702	H X I	Y19. 24	9	23.18.4	-	VI-99	-	(N7° W)	(4.58)	-	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB 801	I X I	T19 24	9	19.5	方形?	VI-99	N88° E	-	4.21	-	0.12	-	K1	E	60:40	I	-	-	-	石組み	
SB 802	I X I	T13~ 19	9	23.19.5	方形?	VI-99	N	N	4.00	-	0.32	-	K1	-	-	-	-	-	-	土+礫?	
SB 803	I X I	T8~ 14	9	23.19.5	隅丸方 形?	VI-99	-	(N)	3.42	-	0.38	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
SB 804	I X I	T4	8後	24.22.5	方形	VI-99	N90° E		3.95	3.85	0.38	12.70	K1	E	60:40	I	0.30		土?		
SB 805	I X I	O23~ T4	9	22.5	-	VI-99	N5° E	-	4.16	-	0.20	-	K1	N	-	I	-	-	?		
SB 806	I X I	O23 .24	10	22.5	方形?	VI-99	N90° E	N90° E	(3.65)	4.10	0.35	(15.18)	K1	E	59:41	I	0.18		土+礫?		
SB 807	I X I	O18. 19	9	85.28.5	方形?	VI-99	S	(S)	3.64	(3.40)	0.20	(11.18)	(K1)	-	-	I	-	-	?		
SB 808	I X I	O13 .14	9	30.28.5	不整形	II-99	N2° E	N2° E	4.30	(4.04)	0.18	(14.65)	K1	N	37:63	I	0.08		地山+ 礫?		
SB 809	I X I	O8~ 14	10	86.28.5	不整形	VI-99	-	N5° W	5.14	4.00	0.36	15.58	-	-	-	-	-	-	-		
SB 810	I X I	O8~ 14	9	28.5	-	VI-99	N80° E	-	-	-	0.30	-	K1	E	-	I	-	-	-		
SB 811	I X I	T18. 19	9	19.5	-	VI-99	-	-	-	-	0.18	-	-	-	-	-	-	-	-		
SB 812	I X I	T18~ 24	9	19.5	-	-	-	-	4.25	-	0.30	-	-	-	-	-	-	-	-		
SB 821	I X II	K10. 15	10	32.5	長方形	VI-99	N94° W	N10° W	4.62	4.06	0.15	14.89	K1	W	32:68	I	-	-	土+礫		
SB 822	I X II	K15. 20	9	27.5	-	VI-99	-	(N9° W)	4.30	-	0.13	-	-	-	-	-	-	-	-		
SB 823	I X II	P5	8後	27.5	隅丸方形	VI-99	N7° W	N7° W	2.60	2.30	0.14	4.95	K1	N	49:51	I	-	-	?		
SB 824	I X II	K5	8後	87.32.5	(方形)	VI-99	N17° W	-	4.10	-	0.10	-	K1	N	-	I	-	-	土+礫		
SB 825	I X II	P12~ 17	9	23.20.5	方形	VI-99	-	N7° W	3.78	3.76	0.27	12.10	-	-	-	-	-	-	-		
SB 826	I X II	P7~ 13	9	20.5	方形	VI-99	N90° E	N	4.68	4.52	0.19	28.50	K1	E	67.9:32.1	I	-	-	礫?		
SB 827	I X II	P12~ 18	9	20.5	方形	VI-99	N82° E	N82° E	4.68	4.52	0.19	(19.04)	K1	E	59.1:40.9	I	-	-	礫?		
SB 828	I X II	P7. 12	9	23.20.5	方形	VI-99	-	N6° W	3.78	3.67	0.18	(12.43)	-	-	-	-	-	-	-		
SB 831	I X II	K12	9	30.29.5	(方形)	VI-99	-	N4° W	(2.44)	2.35	0.38	-	-	-	-	-	-	-	-		
SB 832	I X II	K12 .13	9	36.31.5	方形	VI-99	N90° E	N3° E	4.50	3.70	0.18	(14.72)	K1?	E	60.7:29.3	I	-	-	礫?		
SB 833	I X II	K11~ 17	10	30.29.5	(方形)	VI-99	N91° E	(N91° E)	4.43	(4.4)	0.20	(17.53)	K1	E	-	-	-	-	礫?		
SB 834	I X II	K14	9	36.31.5	隅丸方形	VI-99	N1° W	N1° W	2.78	2.00	0.12	4.62	K1?	N	-	-	-	-	-		
SB 835	I X II	K13. 18	?	30.26.5	方形	VI-99	-	N2° W	2.48	2.10	0.14	4.58	-	-	-	-	-	-	-		
SB 836	I X I	T15. 10	9	87.19.5	方形	VI-99	N3° W	N3° W	4.14	4.10	0.26	14.39	K1?	N	56.1:43.9	I	-	-	-		

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物													住居廃絶か		遺物			切り合い関係		
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新		
		-	0	2	0	0	0	2	0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	おび'周囲で完形土器	I -		埋土中に土器片が多い				S K7005		
1	東壁付近	-	2	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		I -	I (炭化物集中はやや深む)	炭化物集中内に楕形鏡治淨。出土重量多い鉄滓。埋土中、床面付近に土器片多数						
-	-	-	-	-	1	III	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	灰捨て穴上部に礫、土器片。破壊後ソデ構築材投棄	I -		埋土上部に集中				SD801、SD802		
-	-	有	3	0	1	0	1	0	9	9	9	1	9	9	9	9	9	0		I -		埋土上部に微量				SB811		
-	-	有	3	0	0	0	0	0	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		IV I		微量の土器				SD817	SD804	
-	-	有	0	0	1	III	0	0	0	1	0	1	0	1	1	1	1	0	燃焼部に土器、支脚など	IV -		カマド前方中央部、掘方、埋土中に土器片多数					SD801	
-	-	有	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	火床上部炭化物に交じり多数の土器片	I -			灯明具	112	SB873	SD802、SK8009		
-	-	口	0	0	0	-	-	7 (床下ピット)	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1		I I		炭化物集中にとともに土器片多数	緑釉・灯明具・刀子	113・149			SD801、SD802	
-	-	有 (カマド下)	5(5)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	掘方中に土器が集中。破壊後ソデ構築材等持ち去り	I II		III上の堆積中より多数の土器片					SK8013	
-	-	有	0	0	2	III	0	1	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0		I -	I (埋土中にもみられる)	埋土中および床面全体で多数の土器	石帯				SB810	
-	-	(L)	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		IV I		埋土中、床面全域で多数の土器片。掘方にも有り					SB810	SB872
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	8	1	0	火床直上より土器	I -		床面、埋土から少量の土器片					SB808、SB809	
-	-	-	2(2)	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		I -		微量の土器	土鏝	147			SB802	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I ?	I (おび'痕跡か?)	焼土散布範囲に土器片集中	転用現	114				
-	-	有	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	微量	I -		床面、埋土から土器片多数	灯明具	114				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		IV -		壁際床面に土器片	土鏝	147				
-	-	有	0	0	1	0	0	床下土坑?	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	破壊後ソデ構築材等持ち去り	IV -								
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0		I -								
-	-	有	1	3	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I -		伊勢、楕形鏡治淨の出土重量が突出して多い					SB827	SK8111、30025
-	-	有	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	火床周辺に土器片多量	I -		床面、埋土中広範囲に土器片。羽口付釜形鏡治淨、重量多い。	盤状金具	149			SD878	
-	-	-	1	3	1	II	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	1	0	火床周辺に土器多い	I -		カマド脇ピット内に土器多い	刀子	149			SB825	
-	-	有	0	2	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I -		床面、埋土中広範囲に土器片	緑釉	116				
-	-	-	0	0	1	IV ?	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		IV -		ほとんどなし						
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	1	0		IV -		カマド前方床付近に散在						SB839
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	土師杯出土	IV -		微量散在	鍍金具	149				
-	-	-	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0		IV -								SB857
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		IV -		微量						
-	-	-	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1		IV I (P1上部)		土器片散在	布目瓦片・土鏝	147			SB864	

表5-(2) 竪穴建物跡(SB)一覽(古代2)

更埴条里遺跡 I地区集落

遺構番号	位	運	時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン								カ マ ド の 特 徴						
					平面形	断面形	カマド軸方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道長 (m)	袖などの 芯材	
SB 837	I	X I X II	T25. P21	9	23.19.5	隅丸方形	VI-99	-	N84° E	3.35	2.19	0.22	7.10	-	-	-	-	-	-
SB 838	I	X II	P11. 16		23.20.5	隅丸方形	VI-99	-	N	3.05	2.98	0.16	7.15	-	-	-	-	-	-
SB 839	I	X II	K12. 13	9	36.31.5	方形	VI-99	-	N41° W	4.18	3.96	0.10	14.90	-	-	-	-	-	-
SB 840	I	X II	P18. 19	8後	24.21.5	方形(やや不整)	VI-99	N88° E		3.77	3.65	0.23	11.68	K1	E	57.5:42.5	I	0.46	土+礫?
SB 841	I	X II	P13. 14	8後 ~9	24.21.5	長方形	VI-99	N110° E	N110° E	4.10	3.74	0.08	13.80	K1	E	56.5:43.5	I	-	土+礫
SB 842	I	X II	P14	8後	21.5	方形	VI-99	N114° E		3.50	3.44	0.11	(11.40)	K1	E	68.8:32.2	I	0.32	石組み
SB 843	I	X II	P9~ 015	9	24.21.5	方形	VI-99	N94° E		3.50	3.20	0.06	10.30	K1	E	48.7:52.3	I	0.14	礫?
SB 844	I	X II	P9	8後	88.21.5	長方形	VII-99	N3° W	N3° W	4.11	3.65	0.25	13.88	K1	N	37.1:62.9	I	0.72	土?
SB 845	I	X II	K21. 22	9	30.25.5	方形	VII-99	N13° W		3.65	3.50	0.25	11.34	K1	N	60:40	I	0.30	地山+礫?
SB 846	I	X II	K17. 22	10	30.25.5	隅丸長方形	VI-99	N92° E	N	4.45	3.80	0.08	15.10	K1	E	66.9:33.1	II	0.30	土+礫
SB 847	I	X II	K23		30.26.5	隅丸方形(やや不整)	VII-99	(N102° E)	N14° W	3.26	3.22	0.20	9.13	K1?	E S	-	-	-	-
SB 848	I	X II	K18. 23	8後	87.26.5	方形	VI-99	N92° E		4.35	4.20	0.30	15.18	K1	E	60:40	I	0.36	石組み
SB 849	I	X II	K18	10	30.26.5	方形	VII-99	-	N	4.66	4.30	0.32	18.20	-	-	-	-	-	-
SB 850	I	X II	P24	?	24.21.5	方形?	VI-99	-	-	3.15	-	0.12	-	-	-	-	-	-	-
SB 851	I	X I	T15	9	23.19.5	長方形	VI-99	N6° W	N7° E	4.00	3.45	0.16	11.28	K1	N	34:66	I	(0.36)	?
SB 852	I	X I X II	T10	9	88.22.5	方形(やや不整)	VI-99	-	N10° E	4.40	3.85	0.20	14.55	-	-	-	-	-	-
SB 853	I	X II	P6	8後 ~9	23.20.5	不整形	VII-99	-	N7° W	4.10	3.75	0.32	(10.21)	-	-	-	-	-	-
SB 854	I	X I X II	T25. P21	8後 ~9	19.5	方形	VI-99	N83° E		3.25	3.25	0.15	8.44	K1	E	45.2:54.8	I	-	-
SB 855	I	X I	T25	-	19.5	-	-	-	-	-	-	0.20	-	-	-	-	-	-	-
SB 856	I	X II	P11. 16	8後 ~9	19.20.5	(方形)	-	-	-	3.80	3.60	-	-	-	-	-	-	-	-
SB 857	I	X II	K14	8後 ~9	36.31.5	方形	VI-99	-	N89° W	3.12	2.94	0.10	9.17	-	-	-	-	-	-
SB 859	I	X II	P2.3. 7	8後	88.25.5	方形	V-99	N15° W		3.75	3.60	0.40	10.74	N		28:72	I	0.60	石組み
SB 860	I	X II	K16~ 22	8後	30.25.5	隅丸方形	VI-99	N88° E	N	(4.02)	3.60	0.16	(13.78)	E		47:53	-	0.22	礫?
SB 861	I	X II	K17	8後	30.25.5	隅丸方形	VII-99	N90° E		4.20	(3.80)	0.30	(15.48)	E		48:52	I	0.40	土+礫?
SB 862	I	X II	P2~8	8後	30.25.5	方形?	VI-99	-	(N9° W)	(4.04)	(3.0)	0.20	-	-	-	-	-	-	-
SB 863	I	X II	K18	8後	26.5	-	VI-99	-	-	4.30	(1.96)	0.18	-	-	-	-	-	-	-
SB 864	I	X I	T10	8後	19.5	(方形)	-	N		2.95	-	0.13	-	K1	N	62.2:37.8	(I)	-	-
SB 865	I	X I	O25. T5	9	88.22.5	長方形	VI-99	N85° E	N6° W	3.76	3.35	0.50	11.06	K1	E	67:33	I	0.40	地山+礫?
SB 866	I	X II	P7.8	9	23.20.5	(方形)	(IV-99)	-	(N6° W)	-	3.22	0.13	-	-	-	-	-	-	-

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの施設と遺物													住居施設が	遺物			切り合い関係	
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロンク土	焼土・炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	-	埋土下部、床付近に散在			SB854	
-	-	-	0	0	1	III	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-				SB856	
-	-	-	2	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	IV	-	椀形鍔治湾の出土重量が多い	鉄滓		SB832	SK8151
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	I	-	土器片集中	灯明具・鏝	117・150		
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	8	1	0	0	I	-	埋土中より土器片			SB842	
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1	1	0	0	I	-	床面直上に微量	越州窯青磁・刀子	118・149		SB841
-	-	-	0	3	1	III	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	I	-	埋土中に土器片				
-	-	有(ト)	0	0	2	II	0	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0		I	I (P2上部)	P1より完形土器、埋土中に土器片散在				
-	-	-	0	2	1	III	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	0	I	-	右袖周辺に土器片	南東側埋土中に集中			
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	8	1	1	1	I	-	火床部周辺、土器散在	埋土中および床面に集中			SB860、861
-	-	-	0	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		I	I (カマド跡か?)	床面微量、埋土内散在	白磁	118・149		
-	-	-	0	0	1	III	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	I	-	左袖脇、P1内に土器片集中、左脇に土器片	北壁付近埋土中に集中	灯明具・刀子	119・150	SB863
-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		IV	I	埋土および床面に土器片散在			SB863	SK8245
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	微量				
-	-	-	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	IV	-	破壊後ソデ構築材等持ち去り	床面付近に散在	緑釉	120	SB836
-	-	床下土坑	3(1)	0	2	0	0	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	I (P1上部・周辺、P4上部)	床面に散在、掘り方中より土器片	緑釉緑彩陶・灯明具	121		
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	ほとんどなし	刻書土器	121		
-	-	-	0	0	1	III	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	IV	I (K2か?)	完形土器廃棄	床面焼土集中周辺に土器片			SB837
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		IV	?					SB868
-	-	-	1	II	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	P1より微量の土器片、砥石	砥石	148		SB838
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	?	微量	布目瓦片・土鏝・刀子	147・151		SB834
-	-	-	0	-	-	-	-	-	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	I	-	焚口部周辺に土器片	埋土中に多数の土器片	灯明具	121	SB862
-	-	-	0	0	1	III	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	I	-	貯蔵穴?埋土に土器片、床面付近、埋土中に多数(緑釉含む)			SB861	SB861、864
-	-	-	0	-	-	-	-	-	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	1	IV	-	焚口部周辺に土器片	カマド前方床面、埋土中に帯状に土器片集中			SB846、860
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		I	-	埋土中に土器片				SB859
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		I	-	埋土中に土器片、床はき時に土器片検出	布目瓦片	147		SB848、849
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	0	9			I	-	微量				SB836
-	-	有	4(4)	-	1	III	0	-	0	1	0	0	1	0	1	8	1	0		IV	土層に焼土、下層に炭層	床面、掘方中に散在	灯明具	123		
-	-	有	-	-	1	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	ピット脇に集中				SB826

表5-(3) 竪穴建物跡(SB)一覽(古代2)

更埴条里遺跡 I地区集落

遺構記号	遺構番号	棟番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	遺構図版 図版番号	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴								
								平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道 長 (m)	袖などの 芯材		
SB	867		I	XII	P18. 23	9	20.5	(方形)	-	-	N4°W	(3.8)	(3.0)	-	(10.70)	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	868		I	XI	T25		19.5	-	-	-	-	-	0.32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	869		I	XI	T20		19.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	870		I	XII	K1~7	9	30.29.5	台形	VI-99	N85°E	N85°E	4.80	4.42	0.12	18.20	K1	E	60:40	I	-	-	?	
SB	872		I	XI	O9. 14	10	88.28.5	隅丸長方形 (やや不整)	VI-99	N96°E	N96°E	3.30	3.00	0.24	8.07	K1	E	68.6:31.4	I	0.16	-	土+礫	
SB	873		I	XI	T3.4	8後 ~9	22.5	-	VI-99	-	-	-	-	0.16	-	-	-	-	-	-	-	-	-

更埴条里遺跡 J地区集落

遺構記号	遺構番号	棟番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	遺構図版 図版番号	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴							
								平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道 長 (m)	袖などの 芯材	
SB	1001		J	XI	E9~ 15	9	90.33.6	隅丸方形	VI-91	N87°E	N87°E	4.15	3.90	0.34	11.76	K1	E	74.1:25.9	(I)	0.08	-	土+土器
SB	1002		J	XI	E19	9	91.33.6	隅丸方形	VI-91	N83°E	N12°W	4.40	4.00	0.44	12.76	K1	E	64.4:35.6	(I)	1.15	-	礫?
SB	1003		J	XII	A6.7	9	92.34.6	隅丸方形	VI-99	N115°E	N15°W	3.20	2.74	0.30	6.80	K1	ES	-	II	-	-	石組み
SB	1004		J	XII	U21. A1	9	92.34.6	隅丸方形	VI-99	N90°E	N	3.24	2.80	0.30	7.50	K1	E	76.5:23.5	II	-	-	石組み
SB	1005		J	XII	A14. 19	9	36.35.6	方形	VI-99	N82°E	N6°W	6.15	5.25	0.34	29.85	K1	E	(68:32)	(I)	1.14	-	-

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構記号	遺構番号	棟番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	遺構図版 図版番号	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴								
								平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道 長 (m)	袖などの 芯材		
SB	9015	a	K	X	K3.8	15	93.47.7	(隅丸方形)	(VI-99)	-	(N7°W)	4.82	-	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9015	b	K	X	K3.8	12	93.47.7	(隅丸方形)	(VI-99)	-	(N7°W)	4.24	-	0.06	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9016		K	X	K2~8	14~ 15	54.46.7	隅長方形	VI-99	-	N87°E	3.68	3.20	0.12	(10.04)	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9017		K	X	K13. 14	8後	46.7	長方形	VI-99	-	N89°W	4.00	3.56	-	12.01	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9020		K	IX	O24	10~	44.42.7	方形(やや不整)	VI-99	-	N6°W	2.84	2.72	0.21	6.61	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9021		K	X	K1.2	13~	93.47.7	隅丸長方形	VI-99	N108°W	N108°W	4.60	4.12	0.16	(15.16)	K1	W	37.6:62.4	I	-	-	石組み	
SB	9024		K	X	K14. 19	10~ 12	46.7	(方形)	VI-99	-	N	4.52	-	0.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9025		K	IX	O13	9	93.41.7	方形	VI-99	N90°E	-	4.03	4.00	0.22	14.16	K1	E	67.3:32.7	I	-	-	土+礫?	
SB	9026		K	X	K2	13~	54.47.7	(方形)	VI-99	-	N3°W	2.96	2.94	0.24	-	-	-	-	-	-	-	-	
SB	9029		K	DX	O25	9	54.45.7	(隅丸方形)	V-99	N7°W	-	3.84	-	0.37	-	K1	N	-	I	0.66	-	?	
SB	9030		K	X	K13~ 19	8後	54.46.7	隅丸方形	VI-99	N	-	3.24	3.05	0.30	(8.61)	K2?	N	38.6:61.4	I	-	-	-	
SB	9032		K	X	K11. 16	10~ 12	54.45.7	長方形	VI-99	-	N	4.38	3.18	0.18	13.48	-	-	-	-	-	-	-	-

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床 (炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物				切り合い関係	
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
		-	2	0	1	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	床残存範囲に微量	灯明具	123		
		-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	-	-	-	-	-	SB855
		-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	破壊後ソテ構築材等持ち去り	IV	-	微量				SK8322
		-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	焚口部周辺に大きめな土器片少量	I	-	床面壁際に微量、埋土中に散在	礫石		SB809	
		-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		I?	-					SB805、SD803

他の火床 (炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物				切り合い関係	
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
0	-	有	1	3	2	0	1	1	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	燃焼部内、ソテ外側に土器片多い。	I	-	P6中に多数の土器片				
0	-	有	0	0	0	0	0	0	(1)	1	0	0	0	0	0	1	1	1	燃焼部付近に多数の土器片	II	II	埋土中に土器片散在	転用礫	125	SD1014	
0	-	有	3	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	燃焼部周辺に土器片多数	IV	-	埋土中央部に土器片多い				
0	-	口	2(2)	0	1	III	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	0	燃焼部付近礫とともに土器片多数	V	I (焼失家屋か?)	埋土中に散在	灯明具	125		SK10024
0	-	有	0	0	0	0	0	0	(1)	1	0	0	0	0	0	0	0	0		IV	-	微量				

他の火床 (炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物				切り合い関係	
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼含ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
3	中央1、WSコーナー付近2	-	8(4)	2	2	0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I (炭化材を含む、焼失家屋か?)	I	北西部床面に炭化種子(アズキ近似種)が依伏礫物とともに多数出土	白磁	126	SB9015b	
-	-	-	-	-	1	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	南東部床付近に土器片集中				
-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	微量	灯明具	127		SB9015a
-	-	-	0	0	1	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I (おび*痕跡か?)	I	北壁際焼土、炭化物集中部に礫とともに土器片多数				
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I	-	床面に土器片散在				
-	-	-	0	0	1	III	0	0	0	0	0	1	1	0	1	8	1	0	燃焼部周辺に散在	-	-					SB9026
-	-	-	0	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		-	I	埋土下層中心に散在	朱墨礫	127		
-	-	有	2(2)	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1		I	-	埋土中に土器片				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9		-	-	床面に微量				SB9021
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	焼土中に土器片	III	-	埋土下層(III中)に土器片多い	灯明具	128		
-	-	-	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	火床右脇に完形土器	I	-	おび*に伴うと思われる廻り込み部に土器、上部埋土に礫集中				
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		I (おび*痕跡か?)	I	微量				

表5-(4) 竪穴建物跡(SB)一覽(古代2)

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構番号		位置			時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴							
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代○期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸方位	長軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	番号	設置壁	位置1左:右	位置2	煙道長(m)	袖などの芯材
SB	9033		K	X	K6.7	12	54.45.7	隅丸長方形	VI-99	-	N5°W	4.32	3.88	0.16	14.58	-	-	-	-	-	-
SB	9034		K	X	K6.7	8後	54.47.7	隅丸長方形	(VI-99)	-	N3°W	-	2.70	0.16	-	-	-	-	-	-	-
SB	9035		K	X	K2.7	12	54.47.7	隅丸長方形	VI-99	-	N7°W	4.85	4.38	0.18	(19.15)	-	-	-	-	-	-
SB	9038		K	X	K23.24	9	94.40.7	(隅丸長方形)	VI-99	N3°W	-	4.80	4.44	0.13	(17.80)	K1	N	55.2:44.8	I	-	石組?
SB	9041		K	X	P6.11		43.39.7	長方形	VI-99	-	N67°E	3.04	2.17	0.34	5.37	-	-	-	-	-	-
SB	9042		K	X	P11.12		43.39.7	-	-	-	(N67°E)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	9045		K	IX	O18~24	15	94.42.7	方形	VI-99	-	N	4.77	4.68	0.27	19.78	-	-	-	-	-	-
SB	9046		K	X	T5.P1.025.K21	8後	94.39.7	方形	VII-99	N14°W	-	3.70	3.64	0.36	11.30	K1	N	42.6:57.4	I	0.16	礎?
SB	9047		K	IX	T4~025	10	44.42.7	隅丸長方形	V-99	-	N4°W	5.07	(4.28)	0.42	(19.44)	-	-	-	-	-	-
SB	9049		K	IX	O19~25	10	94.42.7	長方形	VI-99	N3°W	N85°E	5.20	4.44	0.33	20.07	K1	N	61.5:29.4	I	-	礎?
SB	9051		K	IX	T9.10	9	95.38.7	方形	VI-99	N160°W(K3)	N5°E(K1.2)	3.84	3.84	0.22	(12.64)	K3	S	78.1:22.9	I	-	石組み
SB	9052		K	IX	T9		95.38.7	-	-	-	-	(3.44)	-	0.22	-	-	-	-	-	-	-
SB	9053		K	X	K16~22	11	54.45.7	長方形	VI-99	N84°E	N7°W	4.68	4.05	0.19	17.35	K1	E	81.8:18.2	I	-	-
SB	9054		K	X	K22	10~11	44.40.7	長方形	VI-99	N128°E	N10°W	4.05	3.68	0.12	(12.6)	K1	ES	-	I	-	礎?
SB	9056		K	X	K22~P3	9	95.40.7	やや台形	VI-99	N96°E	N96°E	3.30	3.00	0.15	8.94	K1	E	58:42	II	0.46	土+礎?
SB	9057		K	X	P8	10	44.40.7	-	-	N88°E	-	2.73	-	-	-	K1	E	-	I	-	礎?
SB	9082		K	IX	T3~9	8後~9	95.38.7	隅丸長方形	VI-99	N	-	4.36	(4.14)	0.28	(15.1)	K1	N	-	I	0.59	礎?
SB	9083		K	IX	T2.3	10	37.7	-	VI-99	-	(N)	(2.24)	-	0.16	-	-	-	-	-	-	-

屋代遺跡群 ①区集落

遺構番号		位置			時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴							
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代○期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸方位	長軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	番号	設置壁	位置1左:右	位置2	煙道長(m)	袖などの芯材
SB	1		I	VII	T23.Y3	14	96.56.8	隅丸長方形	VI-99	N135°W	N7°E	6.90	4.80	0.28	25.87	K1	W	11.8:88.2	I	-	礎?
SB	2		I	VII	Y7~13	15	96.51.8	隅丸長方形	IV-99	N90°W	N	6.80	4.70	0.36	23.19	K2?	W	21.3:79.7	I	-	土+礎?
SB	3		I	VII	X20	12~14	54.50.8	長方形?	VI-99	N97°W	N	3.80	-	0.32	-	K1	W	26.3:73.7	I	-	礎?
SB	4		I	VII	X25	14	55.50.8	隅丸長方形	VI-99	-	N85°W	-	3.30	0.40	-	-	-	-	-	-	-
SB	5		I	VII	X25	14	97.50.8	-	VI-99	N87°E	-	-	-	0.40	-	K1	E	-	I	0.20	土+礎?
SB	6		I	IX	B6	13	98.48.8	隅丸長方形(やや不整)	VI-99	N100°W	N5°W	4.90	3.45	0.40	(14.81)	K1	W	26.3:73.7	I	1.10	土+礎?
SB	10		I	VII	Y18	13~15	55.51.8	隅丸長方形	VI-99	-	N11°W	3.60	3.60	0.32	10.60	-	-	-	-	-	-
SB	11		I	VII	Y13.18	15~	55.51.8	隅丸長方形	VI-99	N130°W	N86°E	4.50	3.10	0.16	(15.35)	K2?	WS	-	I	0.15	礎
SB	12		I	VII	Y17~22	15~	55.51.8	長方形	VI-99	-	N80°E	4.80	3.20	0.10	14.10	-	-	-	-	-	-
SB	13		I	VII	Y17.22	13	97.51.8	隅丸長方形	VI-99	N90°E	N	6.30	4.80	0.24	(26.55)	K1	E	76.4:23.6	I	0.25	石組み

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物			切り合い関係				
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼土	廃絶状況、煙出し口遺物	煙	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新		
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I?	-	微量			SB9034.9035		
-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I?	-	微量			SB9033.9035	
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I?	I	床付近に散在	灯明具・土鏡	129・147	SB9034	SB9033	
-	-	有	0	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	-	-	I	-	埋土に土器片、床面は微量、椀形磨治漆の出土重量多い	緑釉・転用硯	129		SD960	
-	-	有	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-				SB9042		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-					SB9041	
2	ほぼ中央部	-	5(1)	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	埋土中に土器片多					
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	0	0	0	0	1	8	1	1	土器片が散在	-	I	-		刻書土器	130			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	微量。椀磨治漆の出土重量多い	鉄製箸・鎌・斧	150		SK9389	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	火床西側に土器片散在	-	I	-	上層、下層に破片散在	灯明具	131			
2	北壁付近	-	5(2)	0	0	-	-	-	0	0	2	2	2	2	0	2	1	0	焚口部に土器片集中	-	I	-	埋土、床面に散在			SB9052		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	-	-	I	-					SB9051	
-	-	-	2(2)	0	1	III	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	8	0	火床周辺に土器片	-	II	-	微量					
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	1	1	火床付近に散在	-	-	-	下層壁際を中心に土器片が多い	六角柱状石製品				
-	-	-	3	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	-	-	I	-	埋土中位に土器片が多い					
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	焚口部前方に破片投棄	-	-	-	埋土下位中央部に土器片多い					
-	-	-	5(2)	0	1	III	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	-	-	I	-	微量					
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	南東コーナーに土器集中					

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物			切り合い関係					
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼土	廃絶状況、煙出し口遺物	煙	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新			
-	-	-	9(4)	0	4	II	1	2	0	0	0	0	0	0	1	8	1	1	-	-	IV	I	埋土柱全体に土器片が多い、床面完形品の遺棄	灯明具・鉄製紡錘車・鎌	132・150				
1	西壁中央付近	-	6(4)	0	2	0	1	1(入口?)	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	焚口上部に土器片投棄	-	I	I	灯明具・転用硯	133	SD21				
-	-	-	0	0	2	III	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	-	-	I	-	微量				SB4		
-	-	-	2(1)	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	北東壁際埋土中に完形土器多い				SB3、SB5		
-	-	有	1	3	2	IV	0	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	-	-	II	-						SB4	
-	-	有	1	1	2	III	1	0	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	-	-	I	I							
-	-	有	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	III	II	微量				SB11. 30		
1	西壁付近	有	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1	廃絶後に土器の投棄	-	I	-	微量					SB10	
-	-	-	1(1)	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	微量					SB13、SD2	
-	-	-	4(4)	0	5	II	1	3	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	破壊後ソデ石を投棄	-	I	-	少量	灯明具・土鏡・鎌・刀子	135・147・151			SB12	

表5-(5) 竪穴建物跡 (SB) 一覧 (古代2)

屋代遺跡群 ①区集落

遺構番号		位	置	時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン								カ マ ド の 特 徴							
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道長 (m)	袖などの 芯材
SB	14	1	Ⅶ	Y22~E3	11~	51.8	-	(Ⅶ-99)	-	(N)	(7.0)	-	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	15	1	Ⅶ	Y23	12	55.51.8	長方形	Ⅶ-99	N85° E	N	4.30	3.60	0.20	(14.6)	K1	E	78.4:21.6	I	-	礎?	
SB	18	1	Ⅶ	Y10	15	63.57.8	長方形	Ⅶ-99	N130° E	N12° W	5.30	4.70	0.16	22.60	K1	E S	-	I	-	礎	
SB	21	1	Ⅸ	B4.5	14	99.49.8	長方形	Ⅶ-99	N95° W	N3° W	4.20	(3.8)	0.16	(19.2)	K1	W	34.9:65.1	I	0.13	石組み	
SB	22	1	ⅦⅣ	T20~P21	-	99.57.8	隅丸長方形	Ⅲ-99	N50° E	N	5.60	5.40	0.40	26.86	(K1)	(N E)	-	(I)	-	-	
SB	23	1	Ⅶ	U1~7	14	63.58.8	隅丸長方形	Ⅶ-99	N140° E	N4° W	5.70	4.80	0.28	(23.62)	K1	E S	-	I	-	礎?	
SB	24	1	Ⅶ	U12.17	12~14	55.58.8	(方形)	Ⅶ-99	N85° E	-	-	4.70	0.32	-	K1	E	-	I	-	石組み	
SB	25	1	ⅦⅩ	U22.A2	15	53.8	長方形	-	N143° E	N	3.60	2.90	0.08	(9.75)	(K1)	E S	69.8:31.2	(I)	-	-	
SB	27	1	Ⅶ	U21.A1	-	55.53.8	不整形	Ⅶ-99	-	(N90° E)	5.20	-	0.24	-	-	-	-	-	-	-	
SB	28	1	Ⅶ	U16	14~15	99.53.8	隅丸長方形	Ⅶ-99	N78° E	N12° W	6.60	4.80	0.44	30.36	K1	E	72.7:27.3	I	-	石組み	
SB	29	1	Ⅶ	U16.21	-	55.53.8	-	Ⅶ-99	-	(N108° W)	(4.8)	-	0.16	-	-	-	-	-	-	-	
SB	30	1	Ⅶ	Y19.24	14~15	55.51.9	-	Ⅶ-99	N142° E	-	3.80	-	0.16	-	K1	E S	-	II	0.60	石組?	
SB	33	1	Ⅶ	Y3~9	12~	56.8	-	Ⅶ-99	N146° E	-	5.40	-	0.20	-	(K1)	E S	-	(I)	-	礎?	
SB	34	1	Ⅸ	E14	15	54.49.8	隅丸長方形(やや不整)	Ⅶ-99	-	N10° W	4.30	3.10	0.20	(11.6)	-	-	-	-	-	-	
SB	40	1	Ⅶ	T3.4	15	100.61.9	(隅丸長方形)	Ⅶ-99	N137° E	N10° W	(4.7)	4.70	0.28	(21.28)	(K1)	E S	-	(I)	-	礎?	
SB	46	1	Ⅶ	U8	14	63.58.8	-	Ⅶ-99	N103° W	-	-	2.62	0.36	-	K1	W	37.3:62.7	I	-	礎?	
SK	138	1	ⅦⅣ	Y20.U16	15	100.53.8	隅丸長方形	V-99	-	N	2.90	2.60	0.38	5.33	-	-	-	-	-	-	

屋代遺跡群 ②区集落

遺構番号		位	置	時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン								カ マ ド の 特 徴							
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道長 (m)	袖などの 芯材
SB	101	2c	Ⅶ	D24.14	14	101.64.10	隅丸長方形	Ⅶ-99	N115° E	N10° E	6.87	5.50	0.56	29.75	K1	E	87.9:12.1	I	0.25	土+礎	
SB	102	2c	Ⅶ	D19	15	101.64.10	隅丸長方形	Ⅳ-99	N142° E	N	5.84	4.94	0.49	22.40	K1	S	20.3:79.7	I	-	石組み?	
SB	103	2c	Ⅶ	D18.23	15	101.64.10	(隅丸長方形)	Ⅶ-99	N164° E	-	5.60	-	0.56	-	K1	S	-	I	0.40	石組み	
SB	104	2c	Ⅶ	D18.23	15	77.64.10	(隅丸長方形)	V-99	-	(N85° E)	-	3.92	0.42	-	-	-	-	-	-	-	
SB	105	2c	ⅦⅣ	X23.D3	14~15	77.65.10	(隅丸長方形)	Ⅶ-99	N156° E	(N)	5.26	(4.08)	0.36	-	K1	E S	-	I	0.35	礎?	
SB	106	2e f	ⅦⅣ	Y21~E2	15	103.66.10	隅丸長方形	Ⅶ-99	N174° E	N	7.50	5.26	0.43	27.10	K1	S	20:80	I	1.30	土+礎	
SB	107	2e	V	T13~19	15	77.69.11	隅丸長方形	V-99	S	N	7.00	5.54	0.43	30.35	K1	S	27.8:72.2	I	0.75	?	
SB	108	2e	V	T21~Y2	15	102.68.10	隅丸長方形	Ⅶ-99	N175° E	N7° W	6.44	5.50	0.50	26.10	K1	S	12.6:87.3	I	0.45	石組み?	
SB	109	2i	V	S20	15	104.67.10	隅丸長方形	Ⅶ-99	N135° W	E-W	6.53	(4.18)	0.40	(24.6)	K1	W S	-	I	0.25	石組み?	
SB	130	2b	Ⅶ	K11.12	12~	63.62.9	-	Ⅶ-99	-	-	-	5.40	0.36	-	-	-	-	-	-	-	

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物			切り合い関係					
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	煙	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	微量						
-	-	-	5	0	3	IV	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0			I	-	少量						
-	-	-	2	4	4	II	1	2	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	破壊後ソデ石を遺棄		I	-	少量						
-	-	-	6(4)	1	2	0	1	1	0	1	0	1	1	2	0	1	1	0	火床周辺に土器片投棄		I	-	埋土上部北西壁際に集中						
3	N Eコーナー1(K17)、中央部2	-	5(4)	2	3	0	1	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-		III	I	少量	鎌	151				
-	-	-	4(5)	0	1	III	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1			III	-	埋土下部に破片が多い。	灯明具	136	SD19			
-	-	有	7	1	3	II	2	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1			I	I	少量						
-	-	有	1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0			-	I	微量					SK251	
1	中央部東壁寄り	有	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			I	I	微量						
-	-	有	4(4)	2	1	IV	0	0	9	9	0	0	1	0	1	1	0	0	破壊後ソデ石はほぼ抜き取られる		I	I	少量。楕形鍔治棒出土量多い				SB29		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			I	I	少量					SB28	
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	8	1	0			I	-	少量						
-	-	-	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	痕跡のみ		I	-	少量				SD19	SK218, 219, 220, 230, 235	
-	-	有	3	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			I	-	埋土壁際に散在。北半部に礫						
1	中央部南西寄り	-	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0			III	-	南東部壁際(カマド?)付近に多い	灯明具	137				
-	-	-	0	0	1	0	0	1	9	9	0	0	0	0	1	1	1	1	破壊後礫投棄		III	-						SB85	
-	-	-	4(4)	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			III	I	少量						

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か		遺物			切り合い関係				
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼礫	廃絶状況、煙出し口遺物	煙	ブロック土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新	
-	-	-	4(4)	0	3	0	0	2	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	煮炊き具の遺棄		III	I, II (焼失家屋)	床付近全面に遺棄	灯明具・鎌	137・151			
-	-	-	5(4)	0	3	0	2	1(入り口?)	0	0	0	0	0	0	1	8	1	1			I	-	埋土中壁際に多量					
-	-	-	3	0	3	IV	2	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	1			II	-	埋土下部に土器片が多い	鎌	151	SB104		
-	-	-	2	0	2	III	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			IV	I	少量					SB103
-	-	-	2	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	破壊後礫、土器片投棄		I	-	少量					
-	-	-	3(2)	壁溝	2	IV	1	0	0	1	0	1	1	0	1	1	0	0	破壊後、完形土器の投棄		III	-	埋土南東部(カマド周辺)に集	灯明具・鎌	139・151			
-	-	-	3(2)	0	2	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	破壊後、カマド構築材等すべて持ち去る?		IV	-	少量	灯明具	139			
-	-	-	5(3)	壁溝	3	II	2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	1			III	-	少量	灯明具	139			
-	-	-	5(3)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	破壊後、ソデ構築材の投棄		I	-	埋土全域に多量に土器片	灯明具	139			
-	-	-	0	10	1	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			I	I	少量					

表5-6) 竪穴建物跡(SB)一覽(古代2)

屋代遺跡群 ③b区集落

遺構番号		位 置		時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴								
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道 長 (m)	袖などの 芯材
SB	3021		3b	IV	P8	13~ 14	104.70. 13	-	VII-99	N106° E		-	-	0.18	-	K1	E	-	III	-	石組み?
SB	3022		3b	IV	P3.4	13~ 14	105.70. 13	隅丸方形 (やや不 整)	VI-99	N117° E	N90° E	6.70	6.56	0.44	35.13	K1	E	70:30	I	-	石組み?
SB	3023		3b	IV	P9.14	10~ 14	77.70.13	長方形	VI-99	-	N20° E	4.30	3.75	0.33	12.46	-	-	-	-	-	-
SB	3024		3b	IV	L16~ 22	14	105.71. 13	(隅丸方 形)	VI-99	N155° E	N13° E	-	6.00	0.47	-	K1	ES	-	I	-	石組み?
SB	3025		3b	IV	L20	13~ 14	78.73.13	-	VII-99	N93° W		5.28	-	-	-	(K1)	W	11.6:88.4	III?	-	石組み?
SB	3026		3b	IV	L23~ Q4		77.72.13	隅丸長方 形	(IV-99)	-	N73° E	3.75	3.30	0.46	8.67	-	-	-	-	-	-
SB	3027		3b	IV	L18~ 24	14	78.72.13	不整形	VI-99	S	N-S	5.28	4.20	0.22	15.64	K1	S	57.3:42.7	III	-	?
SB	3028		3b	IV	L18. 23	13~ 14	78.72.13	隅丸長方 形	VI-99	N124° W	N11° W	5.50	(4.70)	0.28	(21.42)	K1	WS	-	I	0.35	?

屋代遺跡群 ④~⑤区集落

遺構番号		位 置		時期	遺構図版	建 物 プ ラ ン							カ マ ド の 特 徴								
遺構記号	遺構番号	枝番号	仮地区	大地区	中地区	古代 O期	図版番号	平面形	断面形	カマド軸 方位	長軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	床面積 (㎡)	番号	設置壁	位置1 左:右	位置2	煙道 長 (m)	袖などの 芯材
SB	4003		4b	IV	H7	14	106.79. 14	(隅丸長 方形)	VI-99	N152° E	N15° E	5.94	-	0.18	-	(K1)	E	80.5:19.5	(I)	-	石組み?
SB	4004		4b	IV	C18~ 24	13	84.80.14	隅丸長方 形	VI-99	N111° W	N67° W	6.30	4.95	0.40	25.30	K1	WS	-	I	-	礎?
SB	4005		4b	IV	C14~ 19		80.14	-	-	-	-	3.15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SB	4006		4b	IV	C23	13~ 14	84.80.14	-	VI-99	N72° W		-	-	0.12	-	(K1)	W	-	(I)	-	礎?
SB	4007		4b	IV	C3.8		84.82.14	-	V-99	-	-	-	3.35	0.50	-	-	-	-	-	-	-
SB	4029		4e	I, IV	K21. D1		81.14	-	-	-	-	-	2.26	0.07	-	-	-	-	-	-	-
SB	4201		4c	I	X1.6. W5	14	106.83. 15	隅丸方形	V-99	N155° E	N9° E	5.16	4.70	0.22	(21.6)	K1	ES	-	I	-	石組み
SB	4501		4a	IV	G3.4		107.74. 14	-	-	N124° E		-	-	-	-	K1	ES?	-	-	0.80	土
SB	4502		4d	I, IV	V24~ B5	14	78.75.14	長方形	VII-99	N160° E	N17° E	5.76	4.22	0.34	20.22	K1	ES	-	I	-	石組み
SB	4503		4d	I	V5. W1.6	13~ 14	107.76. 15	方形	VII-99	N164° E	N24° E	4.44	4.44	0.22	17.20	K1	ES	-	I	-	土+礎?
SB	4801		4g	I	X2. S22		84.83.15	-	VI-99	-		-	3.68	0.14	-	-	-	-	-	-	-
SB	4804		4g	I	S21~ X2		83.15	-	-	-		(1.6)	(0.7)	0.14	-	-	-	-	-	-	-
SB	6061		5a	I	R7. 12		16.15	長方形	VI-99	N3° E		2.76	2.12	0.21	4.87	-	-	-	-	-	-
SB	6113		5a	I	R7. 12		16.15	-	VI-99	-		2.33	-	0.20	-	-	-	-	-	-	-

第3節 古代2の集落跡検出の遺構と遺物出土状況

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か	遺物			切り合い関係			
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼土	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロッキング土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
-	-	-	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	破壊後、ソデ構架材の投棄	I	-	少量。楕形鍛冶滓出土重量多い				
-	-	-	5	0	6	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	8	1	1	破壊後、ソデ構架材の投棄	III	I (炭化材含む)	灯明具・軒丸瓦・刀子	140・147・151			
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	少量				
-	-	有	1	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	破壊後、ソデ構架材の投棄	I	-	少量			SK3236	
-	-	-	1	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	1	破壊後、カマド構架材等すべて持ち去る?	I	-	少量				
-	-	有	1	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	II	-	少量				
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	破壊後、カマド構架材等すべて持ち去る?	I	I	床面南半部に土器片多い。古鉄楕形鍛冶滓出土重量多い			SB3028、SK3251	
-	-	-	5(4)	0	(1)	0	0	SK3252	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	破壊後、カマド構架材等すべて持ち去る?	I	I	床面西半に多い。床下土坑SK3252内より多量の鍛冶関係遺物	鉄製紡績車	151		S K3027

他の火床(炉)		構築施設			付属施設			カマドの廃絶と遺物											住居廃絶か	遺物			切り合い関係			
火床数	火床の位置	掘方	柱	その他	数	貯蔵穴?	灰捨て穴ほか	その他	煙出口	煙道	天井	左袖	右袖	支脚	火床	焼土ブロック	土器・礫	周辺に焼土	廃絶状況、煙出し口遺物	ブロッキング土	焼土、炭化物集中	カマド周辺以外	重要遺物	図番号	本住居より古	本住居より新
2	中央部	-	7	0	4	II	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	破壊後、土器片等の投棄	IV	I	埋土中に破片が多い	鉄滓			
-	-	有	3	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8	1	0	破壊後、礫土器片等の投棄	-	I	少量。多重量の羽口、炉壁	錐	151	SD4018	
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	微量				
-	-	-	1	0	0	0	0	0	9	9	0	0	0	0	0	8	1	1	-	IV	-	埋土中に破片多い。床面に散在	鉄、鉄滓			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	微量				
-	-	-	0	0	1	0	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	少量				
-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	1	ソデ部分に土器片	I	-	少量	灯明具・銅鏡・刀子	142・149・151		
-	-	-	2	0	3	0	3	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	-	-	-	微量				
-	-	有	4	0	4	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	破壊後、ソデ構架材の投棄	I	-	少量	灯明具・鎌	142・151		
-	-	有	1	0	3	0	3	床下ピット	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	破壊後、礫土器片等の投棄	I	-	埋土下層に多い。鉄製羽先、鍛冶関係遺物	羽口・鋤先	151		
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	II	-	少量				
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SB4801
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	少量			SB6113	
-	-	-	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	-	少量				SB6061

表6 掘立柱建物跡 (ST) 一覧 (古代2)

更埴条里遺跡 I地区集落

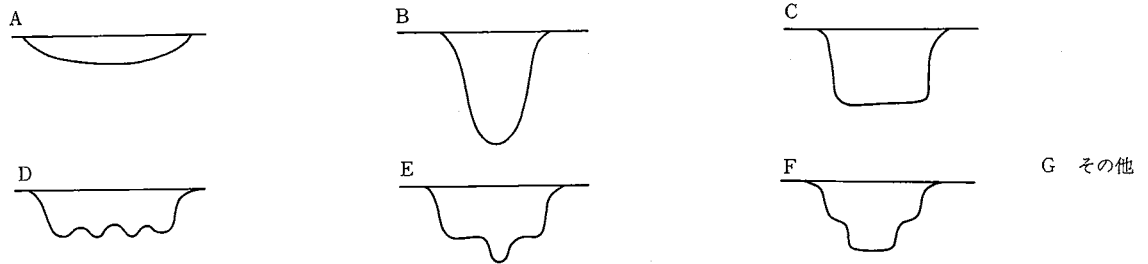
遺構番号	時期 古代 O期	根拠	位置		図版 図版番号	方位 棟方向	規模				構造			造		付属施設		
			仮地区	大地区			柱間数	桁	梁	庇	面積(含庇) (㎡)	柱配列	柱類型	掘方 平面形	柱間距離			
															最小~最大(m)		最小~最大(m)	
ST810	10?	切・配置	I	X II	K13.14	108.32.5	N-S	4×2	5.32	3.46	0	18.41	側	掘方	円	0.24(P2)	1.04~3.48	-
ST811	10?	切・配置	I	X II	K14	108.32.5	N2°W	3×2	3.97	3.66	0	14.53	側	掘方	円	-	0.84~2.24	-
ST812	10?	切・配置	I	X II	J8	108.26.5	N79°E	2×1	3.22	2.08	0	6.70	側	掘方+ 礎板	円	-	1.46~2.08	-
ST813	10?	切・配置	I	X II	P8~14	108.21.5	N79°E	2×2	4.20	3.42	0	14.36	側	掘方	円	-	1.02~2.5	-
ST814	10?	切・配置	I	X II	P12	109.20.5	N85°E	2×1	3.33	2.28	0	7.59	側	掘方	円・ 楕円	-	0.73~3.3	-
ST815	10?	切・配置	I	X II	P13.14	109.21.5	N3°W	4×3	4.12	4.40	0	22.99	側	掘方	円	-	0.56~4.4	-
ST816	10?	切・配置	I	X II	P19.20	21.5	N-S	1×1	2.94	1.94	0	5.70	側	掘方	円	-	1.94~2.94	-
ST817	10?	切・配置	I	X II	P19.20	109.21.5	N53°W	1×1	3.14	2.90	0	9.11	側	掘方	円	-	2.9~3.14	-
ST818	10?	切・配置	I	X II	P18	110.21.5	N60°W	1×1	3.36	2.52	0	8.47	側	掘方	円・ 楕円	-	2.52~3.36	-
ST819	10?	切・配置	I	X II	P12.13	110.20.5	N64°W	2×1	4.28	2.86	0	12.24	側	掘方	円・ 楕円	-	1.1~2.74	-

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構番号	時期	根拠	位置		図版 図版番号	方位 棟方向	規模				構造			造		付属施設		
			仮地区	大地区			柱間数	桁	梁	庇	面積(含庇) (㎡)	柱配列	柱類型	掘方 平面形	柱間距離			
															最小~最大(m)		最小~最大(m)	
ST903	13~	切	K	IX	017	110.41.7	N85°E	2×2	4.30	3.56	0	15.31	側	掘方	円・ 不整円	-	1.86~3.08	-
ST931	13~	切	K	IX	T13.14	110.38.7	N52°E	4×2	5.06	2.63	0	13.31	側	掘方+ 礎板	円・ 楕円	-	0.5~2.28	-

表7-1) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (古代2)

断面分類記号



更埴条里遺跡 H地区集落・I地区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器 時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 7161	H	X I X II	Y15. U11		23. 18. 4	円	C	1.05	1.05	0.78	用途不明	-	-	-	-	-	
SK 7162	H	X I	Y15		23. 18. 4	楕円	B	0.9	0.85	0.56	用途不明	-	-	-	-	-	
SK 7164	H	X II	U12		4	楕円	C	0.9	0.7	0.54	用途不明	-	-	-	-	-	
SK 7166	H	X II	U12		4	楕円	C	0.44	0.3	0.27	用途不明	-	-	-	-	-	
SK 7191	H	X II	U11. 16		18. 4	楕円	C	0.7	0.6	-	用途不明	-	-	-	-	-	
SK 8003	I	X I	T24		19. 5	楕円	C	0.96	0.92	0.17	浅い窪み	黄褐	10YR5/4	砂質シルト	マンガン含む		
SK 8009	I	X I	023. 24		22. 5	円		1.58	1.5		井戸か?	黄褐	10YR5/3	シルト質	砂、青灰色シルト混入		
SK 8010	I	X I	014		28. 5	楕円		1.08	0.82		井戸か?	暗灰黄	10YR5/2	シルト質	砂が混じる		
SK 8012	I	X I	T14		19. 5	楕円	C	0.78	0.45	0.23	柱状	黄褐	10YR5/4	シルト質	砂が混じる		
SK 8013	I	X I	018. 19	8~9	28. 5	楕円	A	(0.9)	0.78	0.14	浅い窪み	黄褐	10YR5/4		マンガン含む		
SK 8027	I	X I	024	8~9	24. 5	楕円	C	0.62	(0.56)	0.2	用途不明	黄褐	10YR5/4	砂質	上面に焼土堆積	上面より土器 12点	
SK 8029	I	X I	024		22. 5	楕円	A	1.1	0.68	0.1	浅い窪み	黄褐	10YR5/4	砂質	焼土粒子少量混入		
SK 8031	I	X I	014		28. 5	円		1.46	(1.36)		井戸か?	-	-	-	-		
SK 8035	I	X I	J18. 23		5	不整	D	3.5	1.35	0.14	浅い窪み	-	-	-	-		
SK 8036	I	X I	J18		5	楕円	A	0.68	(0.43)	0.29	浅い窪み	灰褐		砂質			
SK 8040	I	X I	T19	8~9	19. 5	楕円	C	0.72	(0.36)	0.34	用途不明	黄褐		砂質			
SK 8041	I	X I	T19		19. 5	楕円	A	0.73	0.68	0.07	浅い窪み	-	-	-	-		
SK 8048	I	X I	T19. 24		19. 5	楕円		1.95	(0.48)	0.26	用途不明	黄褐~暗 茶褐		砂質			
SK 8050	I	X I	T14		19. 5	楕円	C	(0.82)	0.77	0.32	用途不明	黄褐		砂質	IV層ブロックが混入 する		

表7-(2) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (古代2)

更埴条里遺跡 | 地区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	8051	I	X II	K17		29.5	楕円	C	1.47	1.4	0.22	用途不明	にぶい黄褐	10YR5/3			
SK	8057	I	X II	P13		20.21.5	円		1.4	1.38	0.3	用途不明	灰		粘質土	赤褐、暗褐色土ブロック少量含む	
SK	8083	I	X II	P18~24	9	24.21.5	円	F	2.65	2.65	2.33	井戸					
SK	8092	I	X II	P10		21.5	楕円	C	0.84	0.72	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	焼土、炭化物粒子混入。上部に礫	
SK	8093	I	X II	P9.10		21.5	楕円	C	0.74	0.52	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	褐鉄を多く含む。上部に礫	
SK	8097	I	X II	P3		26.5	楕円	E	1.37	1.08	0.75	用途不明	-	-	-	ブロック土多量混入	
SK	8106	I	X II	P22		20.5	楕円	C	1.28	0.92	0.48	用途不明	灰		粘質土	赤褐、暗褐色土ブロック少量含む	
SK	8107	I	X II	P6		20.5	不整形	B	0.8	0.8	0.36	柱穴状					
SK	8108	I	X II	P12	8~9	24.20.5	楕円		1.55	0.92	0.1	用途不明	-	-	-		
SK	8111	I	X II	P17	8後	24.20.5	楕円	F	1.3	1.28	1.58	用途不明	-	-	-		井戸か?
SK	8121	I	X II	P3		26.5	円	C	0.97	0.95	0.92	用途不明	-	-	-		ブロック土多量混入
SK	8122	I	X II	P3		26.5	円	C	1.15	1.13	0.68	用途不明	-	-	-		ブロック土多量混入
SK	8138	I	X II	K16		25.5		C	0.88		0.62	用途不明	-	-	-		
SK	8144	I	X II	P7		26.5	円	C	0.7	0.68	0.17	用途不明	-	-	-		
SK	8151	I	X II	K13	10C	31.5	楕円	B	1.9	1.7	1.84	用途不明	-	-	-		井戸か?
SK	8152	I	X II	K19.20	8後	27.5	円	B	1.38	1.34	1.46	用途不明	-	-	-		井戸か?
SK	8153	I	X II	K13		31.5	円	A	1.17	1.1	0.17	浅い窪み					
SK	8154	I	X II	K19	8~9	31.5	楕円	A	0.68	(0.64)	0.24	柱穴状					土器
SK	8156	I	X II	P11		20.5	楕円	A	0.85	0.78	0.24	用途不明	-	-	-		
SK	8157	I	X I	T20		19.5	円	C	0.9	0.9	0.2	用途不明	-	-	-		
SK	8158	I	X I	T20		19.5	円	C	0.68	0.68	0.52	用途不明	-	-	砂質 (III層)		
SK	8194	I	X II	K13.18		26.5	楕円		0.6	0.58		柱穴状					
SK	8211	I	X II	K7		29.5		A	1.62	(0.65)	0.15	用途不明	-	-	-		
SK	8234	I	X I	O20		25.5	楕円	B	0.8	0.78	0.5	用途不明	-	-	-		
SK	8235	I	X I	O20. K16		25.5	楕円	C	1.5	1.1	0.57	用途不明	-	-	-		
SK	8239	I	X II	P17.22		20.5	楕円	A	1.2	0.45	0.14	鹿糞土坑	灰		砂質	鉄分粒を含む	検定値 487.9g
SK	8241	I	X II	P18		20.5	楕円	A	1.1	0.68	0.18	用途不明	灰	5YR5/1	砂質	鉄分含む	
SK	8245	I	X II	K18		26.5	楕円		0.36	0.3		用途不明					
SK	8248	I	X II	P18		20.5	楕円	A	1.3	0.62	0.11	用途不明	灰	5YR5/1	砂質	鉄分含む	
SK	8250	I	X II	P23		21.5	楕円	A	0.46	0.36	0.18	用途不明	灰	5YR5/1	砂質	鉄分含む	
SK	8254	I	X II	P23		20.5	楕円	D	0.36	0.32	0.12	用途不明					
SK	8268	I	X II	K24. P4		27.5	楕円	A	0.68	0.5	0.15	浅い窪み	黄褐	10YR2/3	砂質	褐鉄を多量に含む	
SK	8280	I	X II	K23		26.5	円		0.43	0.43		柱穴状					
SK	8304	I	X II	P13	9	111.21.20.5	楕円	C	1.1	(0.9)	0.35	用途不明	-	-	-		
SK	8309	I	X II	P13	9~10	21.5	楕円	A	1.8	0.95	0.16	浅い窪み	-	-	-		
SK	8322	I	X II	K2.7		29.5	楕円	A	1.24	1.08	0.3	用途不明	-	-	-		
SK	8338	I	X I	O10		28.5	楕円		1.3	1.1	0.74	用途不明					
SK	8344	I	X I	O25		24.22.5	楕円	A	0.64	0.5	0.18	用途不明					炭化物層、焼土集中あり
SK	8345	I	X I	O25		22.5	楕円	C	0.82	0.68	0.34	用途不明	-		砂質		
SK	8365	I	X II	P7		20.5	楕円	D	1.06	0.38	0.09	浅い窪み	褐灰	5YR4/1	粘質土		
SK	8367	I	X II	P7.12		20.5	楕円	D	(0.82)	(0.7)	0.1	浅い窪み	褐灰	5YR4/1	粘質土		
SK	8375	I	X II	P14		21.5	楕円	A	0.82	0.76	0.07	浅い窪み	灰	5YR4/1	粘質土	鉄分、IV層土ブロックを多量に含む	
SK	8376	I	X II	P14		21.5	楕円	E	1.12	0.73	0.22	浅い窪み	灰	5YR4/1	粘質土	鉄分、IV層土ブロックを多量に含む	
SK	8395	I	X II	F23		31.5	不整		2.45	1.2	0.09	墓?	黒灰			炭灰を含む。骨出土	骨出土
SK	8399	I	X I	J25		5	楕円	A	1.13	0.95	0.21	用途不明	-	-	砂質	IV層ブロック混入	
SK	8406	I	X II	F21	9	111.5	方形		1.83	0.73	0.12	墓坑					骨出土
SK	8451	I	X II	K15	10	111.32.5	楕円	A	1.13	0.54	0.08	用途不明	褐	10YR4/4	砂質	炭化物、軽石、土器を含む	
SK	8456	I	X II	P8		20.21.5	楕円	C	0.86	0.8	0.28	用途不明	灰		粘質土	赤褐、暗褐色土ブロック少量混入	
SK	8457	I	X II	P8		20.5	楕円	C	1.15	(1)	0.7	用途不明	灰		粘質土	赤褐、暗褐色土ブロック少量混入	
SK	8458	I	X II	P8		20.5	楕円	A	1.28	1.06	0.18	用途不明	灰		粘質土	赤褐色ブロック混じる	
SK	30001	I	X II	P9.10		21.5	楕円	C	0.85	0.54	0.14	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	30004	I	X II	P8.9		21.5	楕円	A	0.85	0.64	0.1	浅い窪み	黒褐	10YR6/6	砂質		
SK	30008	I	X II	P10		21.5	円	D	0.26	0.24	0.1						
SK	30014	I	X II	P19		21.5	円	C	0.22	0.2	0.36						
SK	30027	I	X I	T10.15		19.5	楕円	B	0.6	0.71	0.3	柱穴状					
SK	30028	I	X I	T15		19.5	楕円	C	0.4	0.38	0.15	用途不明	-	-	-		III層中にIV層土ブロック、炭化物、焼土粒を含む
SK	30029	I	X I	T15		19.5	楕円	C	0.6	0.57	0.32	用途不明	-	-	-		III層とIV層の混合土
SK	30030	I	X I	T15		19.5	楕円	C	0.43	0.38	0.12	用途不明	-	-	-		III層中にIV層土ブロック、炭化物、焼土粒を含む

第2章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況I(古代2)

表7-(3) 墓坑・井戸跡・その他の土坑(SK)一覽(古代2)

更埴条里遺跡 I地区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	30033	I	XII	P2		26.5	円	E	1.05	1.05	0.56	用途不明	-	-	-	ブロック土多量混入	
SK	30034	I	XII	P7		24.20.5	楕円		(2.28)	1.18	0.2	用途不明	褐灰	10YR4/1~5/1	砂質	混入	
SK	30035	I	XII	P7		24.20.5	楕円		(1.95)	0.7	0.35	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質		

更埴条里遺跡 J地区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	10021	J	XII	A8		36.35.6	円	B	1.55	1.5	1.83	井戸					
SK	10022	J	XI	J8		6	方形	E	2.46	2.16	0.5	用途不明	灰白~灰黄	2.5Y7/1~7/2	細粒砂質シルト	下層部にIV-1.2層土ブロック含む	
SK	10023	J	XI	E18	8~9	33.6	楕円	A	2.5	1.5	0.22	用途不明	灰白~にぶい黄橙	10YR7/1~7/2	シルト質細粒砂	炭化物、焼土が混じる	
SK	10024	J	XII	A1		34.6	円		0.56	0.52	0.29	用途不明					

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	
SK	9001	K	IX	O11		41.7	円	C	0.9	0.84	0.14	用途不明			砂質	III層類似砂層		
SK	9002	K	IX	O11		41.7	円	C	0.94	0.92	0.2	用途不明			砂質	III層類似砂層		
SK	9003	K	IX	O11		41.7	円	C	0.96	0.92	0.34	用途不明			砂質	III層類似砂層		
SK	9004	K	IX	O12		41.7	円	C	1.2	1.2	0.1	用途不明			砂質	III層類似砂層		
SK	9005	K	IX	O12		41.7	円	C	1.2	1.18	0.14	用途不明			砂質	III層類似砂層		
SK	9006	K	IX	O16		41.7	円	C	1	1	0.38	用途不明	暗灰黄	2.5Y2/4	砂質	炭化物粒、赤色粒、黄色ブロックを多く含む		
SK	9008	K	IX	O22		41.7	楕円	C	0.9	0.82	0.28	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黄褐、褐灰砂質土がブロック混入。上層に炭混入		
SK	9011	K	IX	T7		37.7	楕円	B	0.9	0.86	0.17	用途不明	褐灰	10YR4/1	ブロック土	褐色土ブロックが混入		
SK	9056	K	IX	O17		41.7	楕円	C	0.76	0.7	0.2	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	炭化物粒、赤色粒を若干含む		
SK	9130	K	IX	T1	10C	37.9	楕円		0.55	0.5	0.16	用途不明				焼土を含む		
SK	9198	K	IX	T2		41.7	楕円	C	0.76	0.62	0.16	用途不明	にぶい黄橙	10YR6/4	砂質	炭化物混入		
SK	9200	K	IX	T2		41.7	楕円	D	0.88	0.65	0.14	用途不明	にぶい黄橙	10YR6/4	砂質	炭化物混入		
SK	9203	K	IX	T2		41.7	楕円		0.17	0.12								
SK	9212	K	IX	T14		38.7	楕円		8.5	8	0.15	用途不明	褐灰	10YR4/1		炭化物が点在		
SK	9232	K	IX	O10		16.45.7	楕円	E	1.26	1.04	0.4	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	粗粒砂	底部がシルト質、IV-1.2層土ブロック混入		
SK	9234	K	X	F18		47.7	方形	D	2.5	2.4	0.26	用途不明					側壁に炭化物層あり	
SK	9236	K	IX	O25		45.7	楕円	B	0.7	0.58	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/2	粗粒砂			
SK	9237	K	IX	T14		43.38.7	楕円	A	1.9	0.8	0.34	墓坑?	黄褐	10YR4/3	砂質			
SK	9238	K	IX	T14.15		43.38.7	長方	A	2.2	1.9	0.28	用途不明	黄褐	10YR4/3	砂質		獣骨出土	
SK	9239	K	IX	T14.15		43.38.7	楕円	D	0.7	0.6	0.14	浅い窪み	黄褐	10YR4/3	砂質			
SK	9247	K	X	K22		40.7	方形	D	0.68	0.46	0.21	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質			
SK	9248	K	IX	T10.15		43.38.7	長方	C	2.3	2.2	0.52	用途不明	黄褐~褐	10YR4/3~4/4	砂質	炭化物層を含む		
SK	9249	K	X	P8		40.7	長方	A	1.7	0.68	0.1	用途不明	灰		砂質			
SK	9250	K	X	P8		40.7	長方	D	1.9	0.8	0.22	用途不明	灰		砂質			
SK	9251	K	X	P8		40.7	楕円	F	1.16	0.5	0.21	用途不明	灰		砂質			
SK	9252	K	X	P1		39.7	長方	D	0.7	0.18	0.28	用途不明	褐	10YR4/4	砂質			
SK	9254	K	IX	T15		43.39.7	楕円	A	(1.5)	1.5	0.26	用途不明	黄褐~褐	10YR4/3~4/4	砂質			
SK	9256	K	IX	T10		43.39.7	円	F	2.6	2.6	1.85	井戸?						
SK	9257	K	IX	T10.15		39.7	不整				2.8	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	9259	K	IX	O14.19	8後	44.42.7	長方	C	1.42	1.2	1.42	廃棄土坑					竪穴関連遺物	
SK	9268	K	X	P2.3		44.40.7	楕円	C	1.76	0.86	0.25	墓坑?	黒褐~暗褐		砂質			
SK	9270	K	IX	T13	13~14	111.38.7	楕円		1.4	1.3	0.24	墓坑?					完形土器	
SK	9271	K	IX	T14.19		43.38.7	楕円	B	1.35	1.15	1.92	井戸						
SK	9282	K	IX	O24		111.42.7	長方	C	1.25	1	1.22	井戸					曲物・獣骨	
SK	9360	K	X	F22.23	10~11C	47.7	楕円	C	0.8	(0.6)	0.24	用途不明	にぶい黄褐		砂質			
SK	9388	K	IX	T5		43.39.7	円	B	1.1	1.1	2.5	井戸						
SK	9389	K	IX	O25.T5		44.39.5	楕円	B	1.94	1.58	2.68	井戸						
SK	9431	K	IX.X	T5~P6	8~9	44.39.7	正方	B	1.6	1.6	1.68	井戸?						
SK	9906	K	X	P4.9		16.7	円	B	1.56	(0.82)	2.42	井戸?						
SK	9919	K	IX	O8		44.42.7	楕円		9.5	8.5	0.27	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質			
SK	9921	K	IX	O13		42.7	楕円		0.8	0.7	0.23	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質			

表7-4) 墓坑・井戸跡・その他の土坑(SK)一覧(古代2)

屋代遺跡群 ①区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 46	1	Ⅶ	T17	15前後	111.59.9	楕円			2.3	1	0.22	墓坑	褐	10YR4/4	砂質(Ⅲ-2層近似土)	IV層土ブロック、黒色粒子が混じる	
SK 58	1	Ⅸ	E6		49.8	楕円	A		1.2	1.05	0.08	用途不明			砂質(Ⅲ-2層土)	炭化物を含む	
SK 131	1	Ⅶ	Y25		55.52.8	長方	D		2.6	1.5	0.56	用途不明					
SK 136	1	Ⅸ	E10	14	49.8	楕円	A		1.7	0.55	0.13	浅い窪み					
SK 140	1	Ⅶ、Ⅷ	Y20、U16		55.52.53.8	長方			2.1	(1.1)	0.18	用途不明	にぶい黄褐～褐	10YR4/3～4/2			
SK 150	1	Ⅷ	P21		57.8				0.7	0.55	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質(Ⅲ-2層近似土)	炭化物を多量に含む	
SK 151	1	Ⅷ	P21		57.8	楕円			0.8	0.65	0.15	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	炭化物を多く含む	
SK 152	1	Ⅷ	P21		57.8	長方			0.9	0.6	0.2	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	炭化物、IV層土ブロック含む	
SK 175	1	Ⅶ	Y5		57.8				(0.9)	(0.24)		用途不明					
SK 210	1	Ⅶ	Y4		56.8	楕円			6.5	6	0.24	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質	炭化物、IV層土ブロック含む	
SK 216	1	Ⅶ	Y4		56.8	楕円			5.7	(4.5)	0.15	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	下部に炭化物、粘土小粒を含む	
SK 218	1	Ⅶ	Y9		56.8	楕円			7	5	0.17	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質	炭化物、焼土粒、粘土小粒を含む	
SK 231	1	Ⅶ	Y9		56.8							柱穴状					
SK 232	1	Ⅷ	Y9		57.8	楕円			0.6	0.5	0.07	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	焼土、炭化物粒、灰黄褐粘土粒混じる	
SK 233	1	Ⅶ	Y4.9		56.8	楕円	F		0.58	0.52	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	IV層土ブロック、炭化物、焼土が混入	
SK 235	1	Ⅶ	Y8		56.8				0.65	(0.14)	0.35	用途不明			砂質	IV層土ブロック、炭化物が混じる	
SK 238	1	X	A2	15	55.53.8	楕円	A		0.8	0.68	0.24	用途不明	灰黄褐～暗褐	10YR4/2～3/3	砂質		
SK 245	1	Ⅶ	O21		60.9	円	A		0.86	0.86	0.1	墓坑?	灰黄褐	10YR4/2	シルト、細砂	炭化物、焼土粒を含む	
SK 248	1	Ⅶ	N25		60.9	楕円	A		1.34	1.22	0.04	墓坑?	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	小礫、鉄分を含む	
SK 250	1	Ⅶ	O21		63.60.9	円	F		1.2	1.2	0.18	墓坑?	褐	10YR4/4	砂質	赤褐土、炭化物を含む	
SK 251	1	X	A2	15	53.8	楕円	D		1.4	0.76	0.18						
SK 253	1	Ⅶ	Y19.24		51.8	楕円	B		0.9	0.7	0.38	用途不明	暗灰	5YR3/1～4/1	砂質	黄褐土粒を含む	
SK 278	1	Ⅶ	N24		63.60.9		A		1.24	(0.66)	0.18	墓坑?	暗褐～褐	10YR3/4～4/4	砂質	黄褐土粒を含む	
SK 279	1	Ⅶ	S4		63.60.9	円	A		0.9	0.9	0.12	墓坑?	暗褐～黄褐	10YR3/4～5/5	砂質		
SK 280	1	Ⅶ	N24～S5	9C～	63.60.9	円	A		1.4	1.4	0.3	墓坑?	暗褐～褐	10YR3/4～4/4	砂質	黄褐土粒を含む	
SK 304	1	Ⅶ	N25.021		60.9	円	A		0.9	0.9	0.12	墓坑?	明褐		砂	黄褐、灰褐土混じる	
SK 322	1	Ⅶ	N24.25		63.60.9	長方	F		2.04	0.64	0.32	墓坑?	褐	10YR4/4	砂質		
SK 325	1	Ⅶ	S4		60.9	不整	A		(1.72)	1.5	0.14	墓坑?	褐	10YR4/6	砂質	炭化物、焼土混じる	
SK 330	1	Ⅷ	U21		53.8	楕円	A		(0.6)	0.6	0.2	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質(Ⅲ-2層土)	IV層土ブロック含む	
SK 331	1	Ⅷ	U21		53.8	楕円	A		0.8	0.6	0.16	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質(Ⅲ-2層土)	IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK 333	1	Ⅷ	U16		53.8	楕円	A		1.6	1.05	0.2	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂(Ⅲ-2層土)	炭化物、焼土粒子混入	
SK 334	1	Ⅶ	N25		63.60.9	楕円	A		0.9	0.8	0.16	墓坑?	黄褐	7.5YR4/4	砂	灰褐色土混入、炭化物微量混入	
SK 358	1	Ⅶ	S15.T11		111.59.9	楕円	C		1.4	0.78	0.28	墓坑	暗褐	10YR3/3	砂質	灰褐土ブロック混入	骨(2029.2038)
SK 359	1	Ⅶ	T11		111.59.9	長方	C		1.52	0.68	0.24	墓坑	黒褐	10YR2/2	砂質	炭化物粒子混入	骨(2033)
SK 360	1	Ⅶ	T11		111.59.9	長方	C		1.98	1.1	0.16	墓坑	暗褐	10YR3/3	砂質	炭化物粒子混入	骨(7173)
SK 388	1	Ⅷ	U3		58.8	楕円			1.15	0.8	0.56	用途不明					
SK 402	1	Ⅷ	U3	14前後	63.58.8	楕円			2.16	1.5	0.54	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質(Ⅲ-2層土)	炭化物、焼土粒、IV層土ブロックを含む	
SK 460	1	Ⅷ	K17		62.9	楕円	A		0.9	(0.7)	0.22	用途不明	褐	10YR4/4	砂質	黄褐土ブロック、焼土、炭化物を含む	
SK 461	1	Ⅷ	K17		63.62.9	楕円	C		1.22	1.1	0.6	用途不明	にぶい黄褐～褐	10YR5/4～4/4	砂質		

屋代遺跡群 ②区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 1025	2	V	S24		67.10	長方			2.94	2.5	0.15	竪穴状					
SK 1029	2	V	X10		10	楕円	A		3.65	(2.3)	0.2	用途不明	にぶい黄褐	10YR5/3	砂質		
SK 1030	2	V	X15		10	不整	A		3	(1.72)	0.16	用途不明	にぶい黄褐	10YR5/3	砂質		
SK 1138	2	Ⅶ	O14		9	楕円	C		(0.81)	0.9	0.22	用途不明					
SK 1139	2	Ⅶ	O15		9	楕円	A		0.88	0.72	0.2	用途不明					
SK 1140	2	Ⅶ、Ⅷ	O15.K11		9	楕円	C		(1)	0.6	0.24	用途不明					

表7-(5) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (古代2)

屋代遺跡群 ③b区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	3022	3	V	E19		12	不整	G	0.9	0.14	0.16	用途不明	褐	10YR4/4	砂質 (III-2層土)	明黄褐、褐、黒色土ブロックを含む	
SK	3025	3	VI	A7		12	楕円	E	1.11	0.88	0.2	用途不明	灰黄褐	10YR6/2	細粒砂	褐灰、明黄褐土ブロックを含む	
SK	3236	3	VI	K25, L21, P5, 10, Q1	14	71.13	不整	A	(14.5)	9.4	0.3	浅い窪地	黒褐～にぶい黄褐	10YR2/2～4/2	砂質		
SK	3238	3	VI	L23, Q3		72.13	楕円	D	(4.1)	1.9	0.22	用途不明					
SK	3249	3	VI	L18		72.13	楕円		0.8	0.66		用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	炭化物、焼土粒含	椀形殿治跡
SK	3250	3	VI	L19	13～15前後	78.73.13	楕円	B	1	0.74	0.6	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	炭化物、焼土粒含	
SK	3251	3	VI	L18, 19		78.73.13	楕円	A	1.54	1.2	0.2	用途不明	黒褐～暗褐	10YR3/2～3/3	砂質	炭化物含む	
SK	3252	3	VI	L18, 23	11～13	78.72.13	楕円	G	1.36	0.96	0.5	廃棄土坑			砂質	炭化物、焼土粒含	羽口片出土

屋代遺跡群 ④～⑤区集落

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4003	4	IV	D6		81.14	楕円	E	1.24	(1.14)	1.86	井戸					
SK	4054	4	IV	C15		81.14	楕円	B	6.5	(6.5)	0.26	用途不明	にぶい黄褐	2.5Y5/4	砂質	灰色砂、黄褐土ブロックを含む	
SK	4067	4	IV	H17		79.14	長方		0.58	0.4		用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	シルト	黒褐砂、炭化物、焼土含む	
SK	4074	4	IV	H11		79.14		D	0.9	(0.6)	0.33	柱穴状			中粒砂 (III-2層近位土)	炭化物、焼土、IV層土ブロック含む	
SK	4077	4	IV	C23		80.14	長方	F	1.5	1.4	0.4	用途不明			砂質		
SK	4085	4	IV	H7	12～	79.14	楕円	E	0.76	0.58	0.24	柱穴状?	黒褐	10YR3/1	砂質	炭化物、焼土塊、IV層ブロック混入	
SK	4091	4	IV	C24	13～15	80.14			0.5	(0.3)		用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂 (III-2層土)	黄褐粘土粒、炭化物を含む	
SK	4100	4	IV	C14		81.14	円		0.6	0.6	0.21	用途不明	黒褐～灰黄褐	10YR2/1～4/2	ブロック土	III-2層土、IV層土、砂の混合	
SK	4101	4	IV	C23	14前後	80.14	楕円	C	1.2	0.75	0.35	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質 (III-2層土)	炭化物が混じる	
SK	4102	4	IV	C13, 14	15～	80.14	楕円	A	0.6	0.4	0.14	用途不明			粗粒砂 (III-2層土)	黒褐土、黄褐土、炭化物がブロック混入	
SK	4108	4	IV	C14		81.14						柱穴状					
SK	4109	4	IV	C4, 9		81.14	楕円		(2.5)	2	0.24	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	粘性土	IV層度にIII-2層土が混じる。土器片、礫が混入	
SK	4110	4	IV	C9		81.14	楕円		0.7	0.6	0.5	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質、粘性土	IV層土にIII-2層土、炭化物が混入	
SK	4112	4	IV	H7		79.14	楕円		0.94	0.72		用途不明			砂質 (III-2層土)	黄褐土、黒褐砂ブロック、炭化物混入	
SK	4114	4	IV	C9		81.14	楕円		(0.9)	0.4	0.4	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質 (III-2層土)	黄褐土ブロック、炭化物、焼土含む	
SK	4116	4	IV	C13		84.80.14	楕円	B	0.7	0.5	0.26	用途不明	黒褐	10YR2/1	粗粒砂	IV層土ブロック、焼土、炭化物粒を多量に含む	
SK	4120	4	IV	C13		80.14	楕円	J	0.8			用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	4122	4	IV	C19		80.14	楕円	A	1.09	0.79	0.1	用途不明	灰黄褐	10YR4/3	ブロック土	IV層とIII-2層の混合、炭化物含む	
SK	4194	4	I, IV	X21, D1		81.14	楕円		1	95	1.13	井戸	暗褐		砂質		
SK	4223	4	I	W16		83.15	長方	C	0.8	0.6	0.12	用途不明	暗灰黄褐		砂質	黄褐土ブロック、炭化物粒混入	
SK	4227	4	I	W15		16.15	円	G	0.96	0.88	(0.44)	井戸					
SK	4232	4	I	W20, 25		84.81.14	方形	C	0.6	0.55	0.5	用途不明	黒褐	10YR3/2	シルト	黄褐土ブロック含	
SK	4233	4	I	W25		84.81.14	円	B	0.3	0.3	0.46	用途不明	黄褐～黒褐	10YR4/6～3/2			
SK	4246	4	I	W5, X1		83.15	円		0.7	0.7		用途不明	黒褐～暗灰黄褐				骨 (6102)
SK	4249	4	I	W5		83.15	楕円		0.6	0.55	0.48	柱穴状	黒褐	10YR3/2			
SK	4250	4	I	W10		83.15	円	C	7	7	0.14	用途不明	灰黄褐				
SK	4257	4	I	W25		81.14			(1.2)	(0.35)	0.23	用途不明	黒褐	10YR3/2			
SK	4512	4	IV	G10		14	楕円	A	1.2	0.74	0.32	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂 (III-2層土)	灰黄褐砂、褐色ブロックが混入	
SK	4621	4	IV	B4		75.14	楕円		0.9	0.8	0.28	用途不明					
SK	4624	4	IV	B4		111.75.14	長方	C	1.1	0.76	0.35	焼土坑	褐灰	10YR4/1		炭化物、焼土、灰の混入	
SK	4625	4	IV	B4		111.75.14	長方	C	0.8	0.46	0.2	焼土坑	褐灰	10YR4/1		底部に炭の堆積層	
SK	4780	4	IV	B25		78.74.14	不整	D	3.1	2.84	0.34	用途不明	褐	10YR4/6	細粒砂	炭化物、焼土が混入	
SK	4782	4	IV	C6, 7		14	円	C	0.9	0.8	0.4	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	粘質土		
SK	5013	5	I	O1	13	111.15	楕円	D	1.9	7	28	墓坑	褐	10YR4/4	シルト (III-2層に近似)		骨
SK	5026	5	I	S18		15	方形	C	0.98	0.46	0.29	用途不明	褐	10YR4/4			
SK	5027	5	I	S18		15	楕円	C	1.08	0.54	0.46	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3			
SK	6113	5	I	R7		15	円	C	0.34	0.3	0.43	用途不明	暗褐	10YR3/3		褐色土ブロック含	

表8 焼土跡(SF)一覽(古代2)

遺跡	仮地 地区	遺構 記号	遺構 番号	大 地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	長さ (m)	短軸 (m)	深さ (m)
屋代遺跡群	5b	SF	5001	I	S21	15	屋外炉跡?	楕円	0.74	0.58	0.32
屋代遺跡群	5b	SF	5002	I	S21	15	屋外炉跡?	不整形	0.71	0.46	0.24

表9 性格不明遺構(SX)一覽(古代2)

遺跡	仮地 地区	遺構 記号	遺構 番号	大 地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	長さ (m)	短軸 (m)	深さ (m)	特記事項
更埴糸里遺跡	H	SX	701	XII	U10~16	18.4		楕円	2.9	1.6	0.14	
更埴糸里遺跡	J	SX	1001	XII	A3	36.35.6	竪穴建物跡方?	方形	3.7	(3.6)	0.28	
屋代遺跡群	3b	SX	3021	IV	U5	12	灰化物集中	不整形	2.2	1.7		中(473~480)

表10-1(1) 溝・自然流路跡(SD)一覽(古代2)

断面分類記号 A B C D E=その他



更埴糸里遺跡 H地区

遺構 記号	遺構 番号	仮地 地区	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色 係記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 703	9前後	H	X I ~ X IV	Y10~25.E5	23.18.4	水路	直線	E	北→南	76	2.6	0.1	黄灰			粗粒砂を含む	SD858→	
SD 704		H	X I . X III	Y25.E5	18.4	浅い窪み	不整形	A	北→西南西	5.8	1.6	0.16	灰			中粒→粗粒砂を含む		
SD 705		H	X I	Y25	4.18	浅い窪み	直線的	A	北→南	1.08	0.28							
SD 706		H	X I . X III	Y24.25.E4.5	18.4	水路	直線的	A	北北東→西南西	4.7	1	0.23					SD858→	
SD 707	9~	H	X III	E4.5.Y24.25.U11	18.4	水路	やや蛇行	A	北北東→西	3.5	0.6	0.18	灰			軽石粒、灰化物片を含む		
SD 708	9~	H	X III	E4.5	18.4	水路	直線	B	東→西	3.2	0.6	0.28	灰			IV層土ブロック含む		
SD 709	12	H	X III	E4.5	18.4	水路	直線	A	東→西	3.2	0.4	0.14	灰白			IV層土ブロック含む		
SD 710		H	X I	Y14	23.18.4	浅い窪み	一部屈曲	A	北東→南西	5.2	0.55	0.07	灰白			IV層土ブロック含む		
SD 712		H	X III	E4.5	4	水路?	直線的	A	東→西	3.3	0.5	0.06						
SD 731		H	X I ~ X IV	Y15~25.U21.A1	18.4	区画	ほぼ直線	A	北→南	25.5	0.7	0.07				朱里野区画対応		
SD 732		H	X I . X II	Y25.U11	18.4	水路?	直線	A	西→東	17.5	217	0.1						
SD 734		H	X II	U7~15.V6.11	4	水路	一部屈曲	B	北西→東	33	1.3	0.06					SD857→	
SD 735		H	X II	U7.8	4	水路	直線的	B	北→南東	4.3	1.5	0.12					SD859→	
SD 741		H	X II	U10	4	水路?	直線的	A	北西→南東	6	0.6							
SD 746		H	X II	E15.U11~15.V11	18.4	区画	直線	A	東→西	35	1.5	0.18				朱里野区画対応		

更埴糸里遺跡 I地区

遺構 記号	遺構 番号	仮地 地区	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色 係記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 801		I	X I	024.T4~24.Y4	19.22.5	水路	直線的	A	北→南	42	0.5	0.05				III層土質単層		
SD 802	9前後	I	X I	023.24.T4~24.Y4	22.5	水路	直線的	A	北→南	29	0.5	0.05				III層土質単層		
SD 803		I	X I	T3.4	22.5	水路?	直線的	A	北東→南西	8.1	0.55	0.08	黄褐			マンガンを含む		
SD 804		I	X I	F8.9	24.22.5	水路?	直線的	A	北北東→西南西	2.6	0.4	0.06				マンガンを含む		
SD 805		I	X I . X II	J23~25.F16.21	16.5	水路	一部屈曲	B	西→東	8	5	0.3	灰			マンガンを含む	→SD856	
SD 806		I	X I	J23.24	5	水路?	直線的	B	西→東	0.63	1.2					下部にマンガンを含む	→SD805	
SD 807		I	X I	J18.23	5	区画?	直線的	B	西→東	6.5	0.5	0.2	黄褐					

表10-1(2) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (古代2)
更埴糸里遺跡 I 地区

遺構 番号	遺構 時期	仮 地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色 略記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 808		I	X I, X II	J18~20, F13~18	16.5	区画	直線的	B	西→東	37	0.2	黄褐色		砂質			
SD 809		I	X I	J18	5	水路?	直線的	A	西→東	0.4	0.1			砂質			
SD 810		I	X I	J18	5	水路?	直線的	A	北→南	0.2	0.07			砂質			
SD 811		I	X I	J18	5	水路?	直線的	A	北→南	4	1	黄褐色		砂質			
SD 812		I	X I	J18	5	水路?	直線的	A	北→南	4	0.05			ややシルト質			
SD 813		I	X I	J18, 19	5	水路?	直線的	A	北→南	8	0.6			ややシルト質			
SD 814		I	X I	J18	5	水路?	直線的	A	西→東	3.3	0.5			砂質			
SD 816	8~9	I	X I	09	28.5	水路?	直線的	A	北→南	5.9	1.9			砂質			
SD 817		I	X I	T8~14	22.5	水路?	直線的	A	北→南	7.6	1.5			砂質			
SD 825		I	X I	024	22.5	?	直線的	A	北→南	3.6	0.6			砂質			
SD 852		I	X II	F25	5	水路	直線的	A	西→東	2.1	1.8			砂質			
SD 853		I	X II	F25	5	水路?	直線的	A	西→東	1.9	0.5			砂質			SD883→
SD 854		I	X II	K25	27.5	区画?	直線的	A	西→東	1.75	0.3			砂質			
SD 855	10前後	I	X II	K15, 20	27.32.5	区画	直線的	A	北→南	13.6	1.6			砂質		糸里畦畔対応	
SD 856		I	X II	F23, 24, K4~10	31.32.5	水路	直線的	A	西→東	5.6	1.15	灰青褐色	10YR4/2	砂質			SD805→
SD 857	9	I	X II	F1~22	24.20.25.5	水路	直線的	C	北→南	0.37	1.3	0.5	5YR6/1	砂質			
SD 858		I	X I, X II	04~20, K16, 21, P1~21	24.20.25.28.5	水路	一部屈曲	D	北→南	80	1.4	0.6		砂質			→SD706
SD 859		I	X II	P6~22	24.20.25.5	水路	直線的	A	北→南	20	1	0.3		砂質			→SD735
SD 861		I	X I, X II	010, 15, K11~21	28.29.5	水路部分	直線的	A	北→南	27	0.8	0.18		砂質			
SD 862		I	X II	F23, K3	31.5	水路?	一部屈曲	B	東→南	8.3	0.5	0.12		砂質			
SD 863		I	X I	09~25, T5~15	30.23.28.5	区画	直線的	A	北→南	44.5	1.5	0.3		砂質			
SD 864		I	X II	P24	21.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	(1.5)	0.38	0.08		砂質			
SD 865		I	X II	P19, 24	21.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	5.66	0.4	0.04		砂質			
SD 866		I	X II	P8~15	21.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	21.26	0.44	0.08		砂質			
SD 867		I	X II	P14, 15	21.5	浅い窪み	直線的	A	西→東	4.7	0.32	0.06		砂質			
SD 868		I	X II	P3	25.26.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	8.8	0.3	0.18		砂質			
SD 869		I	X II	P1~7	25.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	15	0.5	0.04		砂質			
SD 870		I	X I, X II	T5, P1~7	22.25.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	16.7	0.6	0.04		砂質			
SD 871		I	X II	P1, 2	25.5	浅い窪み	直線的	B	北→南	3	0.26	0.14		砂質			
SD 875		I	X I, X II	T5, P1	22.25.5	浅い窪み	やや蛇行	C	西→南	9	1	0.22		砂質			
SD 876		I	X I, X II	T5, P1	22.25.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	5.9	0.5	0.1		砂質			
SD 877		I	X I, X II	P19, 20	21.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	5.1	0.4	0.05		砂質			
SD 878		I	X II	P8~14	21.5	浅い窪み	一部屈曲	A	北→南	18.6	0.4	0.03		砂質			
SD 879		I	X I, X II	P13~15	21.5	浅い窪み	一部屈曲	A	北→南	15	0.3	0.05		砂質			
SD 880		I	X I, X II	05, K1	29.5	浅い窪み	直線的	A	西→東	8	0.4	0.1		砂質			
SD 883		I	X II	F13~19	5	水路	直線的	A	北→南	8	3.8	0.6	灰	砂質			
SD 884		I	X II	F23, 24	5	浅い窪み	一部屈曲	A	西→東	7.5	0.6	0.03	灰	砂質			SD1008→
SD 885		I	X II	F24	5	浅い窪み	直線的	A	西→東	3.5	0.55	0.03	灰	砂質			
SD 886		I	X II	K16~21	25.5	浅い窪み	直線的	A	北→南	8	0.2	0.04		砂質			

更埴糸里遺跡 J 地区

遺構 番号	遺構 時期	仮 地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色 略記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 1004		J	DK, X	6	水路?	一部屈曲	B	西→東	50	0.7	0.35			砂質			
SD 1005		J	DX	6	水路?	直線的	B	北→南	(23)	0.5	0.4			砂質			
SD 1007		J	X I	33.6	窪み	直線的	E	北→南	3	1.2	0.32			砂質			上部シルト、下部中散砂

表10-1(3) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (古代2)
更埴条里遺跡 J地区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	版 地 区	大地区	中地区	図版番号	区分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 1008	16.33.6	13~14	J	IX~XII	E4	16.33.6	水路	直線的	D	北西→南東	90	1.5	0.35	灰白	10YR8/1~7.5YR8/2	砂	下層部が粗粒となる		→SD883
SD 1011	16.33.6		J	XI	E4~24	16.33.6	区画	直線的	D	北→南	100	1.2	0.46	灰白	10YR8/1~8/2	砂	下層部に粗粒、軽石が目立つ	条里坪区画対応	
SD 1012	90.33.6		J	XI	E9~14	90.33.6	竪穴建物 周溝	湾曲	A		17.9	1	0.15	灰白		細粒砂~シルト	軽石、炭化物混入、下層部IV-1,2層土プロック混入	SBI001の周溝	
SD 1013	91.33.6		J	XI	E14	91.33.6	竪穴建物 周溝	一部湾曲	A		5.1	0.7	0.08	灰白		シルト	軽石、炭化物混入、IV-1,2層土プロック混入	SBI002の周溝	
SD 1014	33.6		J	XI	E14	33.6	区画?	直線的	A	北北西→南南東	5	0.65	0.15	灰白		シルト			
SD 1015	6		J	IX	Y19~24	6	水路?	直線的	B	北→南	5	0.8	0.3						
SD 1017	6		J	IX, XI	Y23, E3	6	水路?	直線的	A	北東→南西	6.2	0.9	0.16						
SD 1018	16.6		J	IX, XI	Y22, E2	16.6	水路	直線的	A	北東→南西	12	2	0.16	灰白	10YR8/1	砂質	IV-1,2層土プロック混入		
SD 1019	16.6		J	IX	Y17, 22	16.6	水路	直線的	A	北東→南西	2.5	2	0.25	灰白	10YR8/1~7/1	砂質	下層部に褐鉄分集積		
SD 1021	6		J	IX, X	Y2~10, U1~4	6	区画	一部湾曲		北西→東	(52.3)	0.9						条里坪区画対応	
SD 1022	6		J	IX, X	Y2~5, U1~4	6	区画	直線的	D	北西→東	(50)	1.2						条里坪区画対応	
SD 1023	6		J	IX	Y2, 3	6	水路?	一部湾曲	D	北西→東	8	0.7							
SD 1024	6		J	IX	Y7, 8	6	区画	直線的	D	北西→東	8	1.4							
SD 1025	6		J	IX	Y5	6	区画	湾曲		北西→南	(4.5)	0.3							
SD 1027	6		J	XI	J2~13	6	水路	直線的		北西→南東	(18.6)	1.9	0.28						
SD 1029	6		J	IX	Y3	6	水路	直線的		北西→南東	(18.6)	1.9	0.28						
SD 1030	6		J	IX	Y3, 4, U1, 2	6	区画?	直線的	E	西→東	1.8	0.5	0.14						
SD 1031	6		J	IX	Y2, 5	6	区画?	直線的	B	西→東	(15.3)	0.93	0.71						
SD 2001	16.6		J	IX, X	P16~22, T25	16.6	水路	直線的	A	西→東	(16)	1.8	0.15						
SD 2002	16.6		J	IX, X	T20~25, P16, 21	16.6	水路	直線的	A	南西→北東	(13)	1	0.15						
SD 2003	16.6		J	IX, X	T20, P16~22	16.6	水路	直線的	B	西→東	(19)	0.6	0.15						
SD 2004	16.6		J	X	P21, 22	16.6	水路	直線的	B	西→東	(11)	(1.2)	0.17						

更埴条里遺跡 K地区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	版 地 区	大地区	中地区	図版番号	区分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 944	38.39.7		K	IX, X	T14, 15, P11, 12	38.39.7	水路	直線的	B	西→東	40	2	0.4	褐灰		砂質			
SD 949	40.7		K	X	P12, 13	40.7	水路	直線的	E	西→東	16	1.4	0.15	褐灰		砂			
SD 950	39.40.7		K	IX, X	T15, P6~12	39.40.7	水路	直線的	E	西→東	21	1.1	0.16	灰		細砂	底面に粗粒砂が溜まり、傘大の礫が混在		
SD 951	38.7		K	IX	T10~15	38.7	水路	直線的	A	西→東	10	0.7	0.13						
SD 953	37.38.7		K	IX	T13, 14	37.38.7	水路	直線的	D	西→東	13	2.9	0.2						
SD 954	39.40.7		K	X	P7, 12	39.40.7	水路	直線的	A	西→東	6.3	0.4	0.06	黄褐	10YR5/6	砂	褐鉄分がプロック混入		
SD 955	39.40.7	10~11C	K	X	P11, 12	39.40.7	水路	一部湾曲	A	南西→北東	21	1	0.1						
SD 956	39.40.7		K	X	P8~13	39.40.7	水路	一部湾曲	E	南→東	11	1.4	0.11	褐灰		砂			
SD 957	39.40.7		K	X	P7~14	39.40.7	水路	傘や蛇行		西→東	27	2							
SD 958	39.7		K	X	P11	39.7	水路?	直線的		西→東	0.6								
SD 960	40.7		K	X	K23	40.7	水路?	直線的		南西→北東	6	2.5	0.2						
SD 965	39.40.7	15~	K	IX, X	T13~18, P6~12	39.40.7	水路	直線的		西→東	28	1.9	0.25	黄褐	10YR5/6	砂	褐鉄分が混入		
SD 966	37.38.7	9C	K	IX	T8~18	37.38.7	区画	直線的		北→南	1.4	0.8	0.24	黄褐	10YR5/6	砂	褐鉄分が混入	条里坪区画対応	
SD 968	40.7		K	X	P3~8	40.7	区画	湾曲		北→西	7.8	1.3							
SD 984	42.7		K	IX	O2~15	42.7	区画?	湾曲		北→西	23	0.6							

表10-1(4) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (古代2)
屋代遺跡群 ①区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	大地区	中地区	図面番号	区分	平面形	断面形	流路・清方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 15	55.50.8		VII	Y6~21		区分?	直線的	B	西北西→南	21	0.9	0.26	にぶい黄褐 ~灰黄褐	10YR4/3~ 4/2	砂	黄褐、灰褐土ブロック、炭化 物混入		
SD 16	50.8		VII	Y16.21		区分?	一部屈曲	B	南西→東	8.8	0.9	0.2	灰黄褐	10YR4/2	砂	炭化物粒子混入		→SD65
SD 19	57.58.59.8		VII. VII	Y1~10, U6~8, X5		水路	ほぼ直線的	D	西→東	68.9	1.5	0.14						
SD 20	51.8		VII	Y3~23		水路	直線的	A	北→南	28	0.8	0.13	暗褐	10YR3/4	砂質 (III-2層 似土)			
SD 21	51.8	12~ 14	VII	Y2~22		水路	直線的		北→南	28	0.8	0.17						
SD 23	17.8	13~ 14	IX, X	E23~25, A1, J2~5		旧五十里 川	ほぼ直線的	C	西→東	59.7	(8.0)	4					10層以下	
SD 34	49.8		VI	E5~10		水路?	直線的		東北東→西南西	35	1.6	0.35						
SD 51	63.57.8.9		VII	T19~25, Y5.10		水路?	直線的	B	北→南	28	0.6	0.5				底部にIV層土混入		
SD 60	9		VII	O19.20		区分?	直線的	A	西→東	5.5	0.7	0.24	暗褐	10YR3/4	砂	多量の炭化物を含む		
SD 64	60.9		VII	N24.25		水路?	一部屈曲	B	北東→南西	4.9	0.9	0.25						
SD 66	60.9		VII	N24		区分?	直線的	A	南西→北東	4.6	0.9	0.2	にぶい黄褐	10YR5/4	やや粘土質	酸化鉄が集積		
SD 85	58.8.9		VIII	U3.8		水路	直線的		西→東	68.9	1.5	0.87						SD19→
SD 107	58.8		VIII	U8~18		水路	直線的		北→南	16.4	0.4	0.59						

屋代遺跡群 ②区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	大地区	中地区	図面番号	区分	平面形	断面形	流路・清方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 2202	77.64.10		VII	D19.24		水路?	直線的	B	北→南	7.6	0.3	0.1	暗褐	10YR3/4	砂質			
SD 2203	77.64.10		VII	D14~24		水路?	直線的	A	北→南	21.5	0.4	0.1	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	鉄分、炭化物含む		
SD 2204	77.65.66.10		VII	X20.25, D5~24, I3.4		水路	直線的	B	北→南	35	0.9	0.52	にぶい黄褐 ~黄褐	10YR7/3~ 5/6	砂質			
SD 2232	69.10		V	T18.23, Y3		水路	直線的	A	北→南	19	1.4	0.26	黒褐~暗褐	10YR2/3~ 3/3	砂質 (III-2層近 似土)			
SD 2234	67.10		V	X8~10		水路	直線的		西→東	18.6	0.5	0.2						
SD 2235	77.67.68.10		V, VI	X8~10, Y6~8		水路	直線的	B	西→東	50	1	0.44	褐灰~灰黄 褐	10YR4/1~ 4/2	砂質 (III-2層近 似土)			
SD 2237	69.10.11		V	T3~23, Y3, O13~23		水路	直線的		北→南	67	1.6	0.5						
SD 2241	10		V	S18.23, X3.8		水路	直線的		北→南	21.5	0.9	0.32						
SD 2394	11		VI	K11~17		水路?	直線的	E	西→東	8	0.5	0.5	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質			
SD 2413	9		VII	N5.10		水路?	直線的	C	北→南	12	0.7	1.2	にぶい黄褐 ~褐		中粒砂~シルト			
SD 2485	9		VIII	K1.2		水路?	直線的		西→東	10								

表10-5) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (古代2)
屋代遺跡群 ③区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	大地区	中地区	図版番号	区分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色層記号	土性	埋蔵状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 3002			V, VI	E9, 10, A6, 7.	12	水路	直線的	A	西→東	(50)	1.2	0.2	褐灰~褐	10YR6/1~ 4/6	砂質 (III-2層近 似土)		(SD3003)	
SD 3018			IV	U18, 23	12	水路	直線的		北→南	(8.6)	1.5	0.16			砂質 (III-2層近 似土)			SD3215 →?
SD 3025			V	E8, 13	12	窪み	直線的	E	南西→北東	7.5	1.4	0.6	褐灰	10YR5/1	中粒砂			
SD 3041			VI	A7~22, F2, 7	12	水路	直線的	E	北→南	(37.8)	1	0.6	じぶい黄褐 ~明黄褐	10YR5/4~ 6/8	中粒砂~シルト			
SD 3042			V	E14~24	12	水路	直線的	C	北→南	(18.5)	1	0.2						
SD 3215			VI	P4~24, U4	77, 70, 12, 13	水路	直線的	B	北→南	45	1	0.4	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-2層近 似土)			
SD 3217			VI	P19, 20, Q11~13	70, 13	水路	直線的	D	西→東	8.5	2	0.96			砂質 (III-2層近 似土)			

屋代遺跡群 ④区

遺構 記号	遺構 番号	土器 時期	大地区	中地区	図版番号	区分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色層記号	土性	埋蔵状況ほか	特記事項	他地区との 接合
SD 4013			IV	C3~13	84, 80, 81, 14	水路?	一部屈曲	B	西北西→南南西	17.5	1.5	0.62	じぶい黄褐 ~黒褐	10YR4/3~ 3/2	砂質 (III-2層土 主体)	黒褐砂、IV層土ブロック混入		
SD 4014			IV	C9	81, 14	窪み	直線		北東→南西	2.8	1	0.23			砂質 (III-2層土 主体)			
SD 4015			IV	C9~15	81, 14	水路?	直線的	C	北西→南東	8	1	0.2			砂質 (III-2層土 主体)			
SD 4016			IV	C3, 8	82, 14	水路?	一部湾曲	A	北→南	8	0.6	0.15	黒褐	10YR3/2	砂質			
SD 4017			IV	C8	82, 14	窪み	直線的	D	西→東	3.2	0.8	0.55	黒褐	10YR2/2~ 3/1	砂質 (III-2層土 主体)	III-1, IV層ブロック、炭化物 が混じる		
SD 4018			IV	C17~24	84, 80, 14	水路	直線的	B	西→東	12	1.3	0.54	褐~暗褐	10YR4/3~ 3/4	砂 (III-2層土)			
SD 4019			IV	C9, 9, G5~24, L1~3	82, 14	水路?	直線的	B	西→東	(3.5)	0.8	0.8	灰黄褐	10YR4/2	砂 (III-2層土)	IV層土ブロック混入		
SD 4504		13前 後~	I, IV	H1, C2~21, W12~23	78, 74, 14	水路	直線的	D	南西→北	115	2.8	0.8	褐	10YR4/4	砂	灰黄褐色砂質土が塊状に入る		→ SD5005?
SD 4512			I, IV	W7~22, C2.	78, 74, 14, 15	水路	一部屈曲	A	南→北	37	1	0.12	灰黄褐	10YR4/2	砂質	暗褐土ブロックが混入		

第3章 古代2の遺物

第1節 土 器

1 古代の土器の分類

古代の土器の分類で一般的に用いられる方法は、土器を種類と器種とによって分類し、さらにその使用の場も加味したものである。ここでは、長野県埋蔵文化財センターが松本平地域の古代の土器を分類した方法（原1989、小平1990）をベースにしながら、善光寺平の古代の土器がより明確に把握できるよう論ずることとする。

(1) 土器の種類

素材、制作技術から以下のように分類される。

土 師 器：酸化焰焼成による軟質赤焼土器。ロクロ調整される。（甕類は、ロクロ調整の有無にかかわらず土師器と呼ぶことにする。）

非ロクロ土師器：酸化焰焼成による軟質赤焼土器。ロクロ調整されない。

黒 色 土 器：ロクロ調整の土師器の一種。器面に意図的に炭素を吸着させたもので、多くはへら磨き技法を伴う。ロクロ調整でへら磨きがなされているのに黒色でないものも黒色土器の中に含めてとらえる^(註1)。

黒色土器A・・・内面のみに黒色処理を施したもの。

黒色土器B・・・内外両面に黒色処理を施したもの。

須 恵 器：還元焰焼成による硬質灰色土器。窯による焼成でロクロ調整される。胎土、焼きの良好なDタイプと、やや不良なCタイプに分けられる。

軟質須恵器・・・須恵器の一種であるが、灰白色を呈し、胎土の緻密さと硬さがなく、明らかに胎土と焼きに質の低下がみられるもの。手触りは明らかに硬質の須恵器とは異なり、ぼそぼそ又はざらざらといった感じを示す。黒斑をもつAタイプと、もたないBタイプに分けられる。

灰 釉 陶 器：灰釉を施す硬質の陶器。

山 茶 碗：灰釉と同一の焼成であるが無釉の陶器。

緑 釉 陶 器：鉛釉を施す硬・軟質の陶器。

輸 入 陶 磁 器：中国製の青磁・白磁など。

(2) 器 種

形態と製作技法、更に同一器種内の法量により表11・12と図22・23のように分類する^(註2)。

(3) 使用の場における分類

食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類する。編年作成の関係上、食膳具は、食膳具1と食膳具2に分ける。

食膳具1：食膳に供する器。杯、碗、皿、高杯などの一般的に使用頻度の高い、大形でない飲食容器をさす。食膳具と呼ぶ場合は、食膳具1をさすこととする。

食膳具2：食膳に供する器の内、鉢や盤Aなどの大形のをさす。一部に非加熱の調理器具も含める。

煮炊具：食料を加熱加工する道具。甕、甑、羽釜など。

貯蔵具：食料を保存貯蔵しておく道具。壺、甕、瓶類など。

(4) 集計法

各遺構出土の土器については、「(3) 使用の場における分類」にそって各遺構毎に出土土器組成表を作り、出土遺物の全体像をつかめるようにした。SBはすべての遺構について、SK、SD等のその他の遺構については重要遺構のみを行った^(註3)。

この表に示される土器の集計法は、以下の基準に基づいている^(註4)。

- ① 個体数の計測は、器種が明確に認定できるものの口縁部又は底部が、8分の1以上残存しているものを1個体と数え集計した。また、口縁部又は底部が残存していないものについては、その個体全体の8分の1以上残るものについて1個体と数えた。特殊品、貴重品（大甕、緑釉陶器、輸入陶磁器、時代の判定に役立つもの）等は、上記の基準を満たさないものであっても1個体として数えた。これらを推定個体と呼び、総数を推定個体数と呼ぶことにした。推定個体数は口縁部又は底部両方をそれぞれ計測の対象としたため、実際の数量より多めになっている可能性はあるが、相対的な比較資料として大まかな傾向をつかむためには有効であろう。
- ② 各遺構の組成比の計算は、各遺構出土遺物を覆土一括として扱い、推定個体としたもの全ての重量を計測して行った。重量の計測は、原則として5グラム単位に計測し、少数第一位を四捨五入したため、100%にならないこともある。

2 各遺構出土土器

ここでの記載は、遺物の出土のあるSBについてはできる限り、その他の遺構については重要と考えたもののみを対象に行う。記載内容は、その遺構の年代を決定するために必要となった統計処理された基礎データと重要遺物についてである。ここでふれられなかった遺構の重要遺物については「第11章 成果と課題 第3節 重要遺物(土器)」の項に一覧表で提示してあるのでそこを参照願いたい。

各遺構の食膳具の組成比は、推定個体を基本資料として重量比であらわし、非ロクロ土師器：須恵器：黒色土器：土師器の順に示した。必要に応じて個体数比ものせてある。灰釉陶器をこの中に入れていないため合計が100%に足りない場合と、少数第一位を四捨五入するため合計が100%を越える場合がある。

灰釉陶器の型式については若尾正成氏の型式観（若尾1987、1988）に従っている。緑釉陶器の産地については、井上喜久男氏にご指導いただいたものである。分類は屋代遺跡群独自のものである。遺物の記載順はSB—SKとし、それぞれについて更埴条里遺跡—屋代遺跡群の順にしてある。各遺構出土土器の年代は、屋代遺跡群の編年観に基づき記載する。

(1) 竪穴建物跡(SB) 出土土器

A. 更埴条里遺跡

SB701 (図版112)

時期；古代9期 組成比；0：0：8：91 土師器杯A IIの口径平均；12.5cm 土師器杯A IIの器高平

表11 古代の土器 器種分類表 その1
食膳具

種類	器種名	器種説明
須恵器	杯A類	須恵器杯蓋を模倣し、杯として使用したもの。底部が須恵器杯蓋の天井部を意識しているため丸みもち、体部に屈曲点を持ってたちあがる。たちあがり方は、ますますぐなむのから、外傾するものまでバリエーションに富む。
	杯B類	須恵器杯身を模倣したもの。たちあがり部が内傾している点が杯A類と異なる。
	杯C類	丸底で口縁が丸く終わるものを基本とし、丸底基調でその他の分類に入らないものも含め多様な形態をもつ。特に口縁部の形態は複雑、多様である。平底か丸底か判断が難しいため、杯I類と判断がつかないものもある。
	杯I類	深い半球形のもので口縁端部が明らかに内わんするもの。丸底のものが多いが平底のものも含める。
	杯E4類	内面に腰をもち、たちあがり部が内わん傾向を示すもの。直線的なたちあがりの場合、腰部が明らかに丸みもち碗的な器形になるものも含める。内面の腰は下にあり、やや強めのもの、痕跡程度のもの等いろいろみられる。
	杯I類	平底で口縁が丸く終わるもの。平底か丸底か判断が難しく杯C類と区別がつかないものもある。
	杯I類	鈍い橙色の胎土をもち丸底の浅めの器形で、口縁端部がI字状に短くたちあがるもの。底部から体部にかけてへラ削りし、その他の部分はナデ調整される。
	高杯鉢	杯類に脚台をつけたもの。 口径に比して器高が高い深めの器。小型のものが多いが、やや大型のものも含める。形態は多様である。
	杯A	直線的に関く体部をもつ無台の杯。体部内面の見込部に指押さえの跡が残る。底部調整は①へラ切り、②手持へラ削り、③回転へラ削り、④静止米切り、⑤回転米切り等いろいろみられる。直径12.0cm以上のものが多いが、それより小さいものは杯Gと区別がつきづらいいものもある。胎土、焼きの良好なDタイプとやや不良なCタイプに分けられる。
	杯B	箱形の体部に高台を付した形態で、主に杯蓋Bと一部杯蓋Aともセットをなす。法量によりI、II、III、IV、V、VIと分類できる。
杯G	へラによる底部調整をもつ直径11.5cm以下の無台の杯。杯蓋Aとセットをなす。法量の大きめのものは、杯Aと区別がつきづらいいものもある。	
杯H	古墳時代からの伝統的な杯の系譜をひき、丸底で蓋受け部分を持ち、受け部から口縁部にかけてたちあがりをもつ。	
杯蓋A	内面にかえりをもつ蓋。主に杯Gと、一部杯Bと対応する。	
杯蓋B	内面にかえりをもたず、口縁端部を折り曲げる蓋。杯Bと対応する。	

器種名	器種説明
杯蓋H	古墳時代からの伝統的な杯蓋の系譜をひき、碗形の杯を伏せた形態に近い。杯Hの蓋になる。
皿A	扁平で直線的に関く体部をもつ無台の皿。皿Bの高台をはずした形態をもつ。
皿B	扁平で直線的に関く体部をもつ有台の皿。灰釉陶器・黒色土器の皿Bに類似する。
高杯	浅めの杯部に高めの脚台を付けた器。小型、中型がある。
高盤	高杯よりも浅く広めの杯部に、高杯より低く太い脚部を付けた器。
鉢D	口径13cm～17cm前後の口径の割に器高の深めな無台の器。「柄」と呼ぶ方が適切かもしれない。
鉢A	小さめの底部から体部は直線的に開き、頸部で緩く締まって口縁部で外反する鉢型の器。大小の法量がありクロクロナデ調整される。
杯A	須恵器杯Aの系譜のなかで考えられるが、灰白色を呈し、胎土の緻密さと、硬さが無く、あきらかに胎土と焼きに質の低下がみられるもの。手触りは、あきらかに須恵器杯Aとは異なり、ぼそぼそ、又はざらざらといった感じを示す。黒斑をもつAタイプと異なるBタイプにわけられる。須恵器杯Aにみられる体部内面の見込部に指押さえのあるものも大量に存在する。
杯A	ややわん曲しながらたちあがる体部を持つ無台の杯。須恵器杯Aのように体部内面の見込部には指押さえがみられぬめらかに曲線をえがいてたちあがる。法量によりI、IIに分けられる。底部調整には、いろいろなタイプがみられる。
杯・小碗	内わん気味に立ち上がる体部に高台を付したもの。法量により碗と小碗に分けられる。
皿A	口径12～13cm台前後で、器高が3.0cm以下の無台の皿。
皿B	直線的に伸びる扁平な体部に高台を付した皿。
盤B	足高高台を有する碗型、または皿型の器。法量によりIとIIに分かれる。盤B Iは碗の脚を伸ばした形態になり、盤B IIは皿Bの脚を伸ばした形態になる。
鉢A	口径は10cm台後半から20cm台中頃までで、黒色土器A杯AのB形態（器高5.0cm以上の深めのもの）を大きくした形のもの。素口縁であり片口をもつものもある。
鉢B	口径は10cm台後半から20cm台中頃までで、須恵器鉢Aと同じ形態のもの、片口をもつものもある。
杯・小碗	腰に丸みをもって立ち上がり、高台の付いた深碗状の形態をとる器。法量により碗と小碗に分けられる。
皿B	黒色土器A皿Bと同じ形態の皿。
耳皿	土師器耳皿と同じ形態を持つ皿。有台と無台のものがある。見込部に一孔穿孔するものもある。

表12 古代の土器 器種分類表 その2

食膳具

杯A 碗・小碗	体部がややわん曲しながら直線的に開く無台の杯。体部内面見込部に指押さえはみられない。底部調整は回転糸切未調整で、法量によりI、II、IIIに分けられる。内わんぎみに立ち上がる体部に高台を付したものを。法量により碗と小碗に分けられる。
盤B	足高高台を有する碗型又は皿型の器。法量によりIとIIに分かれるが、盤B Iは碗の脚を伸ばした形態になり、盤B IIは皿Bの脚を伸ばした形になる。
高盤	皿型(まれに杯型)の器に、径が大きく・高い脚台のついたもの。
皿A	口径12cm台前後で、器高3.0cm以下の無台の皿。法量によりI、II、IIIに分けられる。
皿B	直線的に伸びる扁平な体部に高台を付した皿。
耳皿	口径10cm以下の小さな皿の口縁部をつまみあげたもの。有台と無台の両者の存在が考えられるが、屋代遺跡では無台のもののみである。見込部に一孔穿孔するものもある。
盤A	高い脚台をもった口径30cm前後の大型の器。
鉢A	口径20~25cm前後の深めの器。口縁は内わんせず垂直に上方へ伸びる。
鉢B	口径20~25cm前後の深めの器。口縁は明確に内わんする。
碗A	体部にわずかに丸味をもち直線的に開く形態で台形あるいは三日月様の高台を付するもの。
碗B	口径に比して器高の高い深碗形態をとるもの。高台の形態は多様である。
皿	いわゆる丸皿。
段皿	いわゆる段皿。
耳皿	いわゆる耳皿で、有台と無台のものがある。

煮炊具

甕A	輪積み成形の後、外面をナデ調整する長胴甕。
甕B	輪積み成形の後、外面を刷毛目で調整する長胴甕。
甕C	体部外面をへら削りして薄く仕上げる甕。ケズリ調整する点では甕Hと同じだが、甕Hに比べ器壁ははるかに薄く、ケズリの方向も頸部に近くなるほど横方向となる。いわゆる武蔵型甕。
甕F	輪積み成形の後、外面をへら磨き調整する甕。壺形と甕形がある。
甕H	輪積み成形の後、外面をケズリ調整する長胴甕。ケズリ調整する点では甕Cと同じだが、甕Cに比べ器壁は厚く、ケズリの方向も縦方向が主体となる。
甕I	クロクろ成形で体部下半を中心にケズリ調整する甕。ケズリ調整以外にタタキ調整するものや、調整を行わずクロクろ調整のものもある。底部は丸底のもの平底のもの両者がみられる。いわゆる砲弾甕。
小甕A	輪積み成形の後、外面をナデ調整する小型甕。甕Aを小型化したもの。
小甕B	輪積み成形の後、外面をナデ調整する小型甕。甕Bを小型化したもの。

小甕C	甕Cを小型化した甕。高台がつくものもある。
小甕D	クロクろ調整した小型甕で、体部にカキ目又は回転糸切未調整のものをみられる。
小甕H	輪積み成形の後、外面をケズリ調整する小型甕。甕Hを小型化したもの。
鍋	クロクろ成形で、体部下半を中心にケズリ調整する。調整は甕Iとにるが、甕Iに比べ口径が広く、器高が低い鍋型を呈する。
甕	いわゆる甕型土器。単孔のものと多孔のものがある。
羽釜	いわゆる羽釜型土器。鍋がとぎれることなく一周するタイプと3・4ヶ所で切れるタイプがある。

貯蔵具

甕A	胴部外面にタタキ調整をもち、卵形の体部に長く外反する口頸部をもつもの。
甕C	胴部外面にタタキ調整をもち卵形の体部に強く外反する短い口頸部をもつもの。
甕D	胴部外面にタタキ調整をもち、平底で肩部に凸帯をもち耳状の突起を付するもの。いわゆる凸帯付四耳壺。耳は4個が圧倒的だが3個のものもある。
甕E	胴部外面にタタキ調整をもち、肩のはった広口の甕。須恵器鉢Aと形態的に似るがタタキ調整の有無で区別される。
樽瓶	横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付するもの。一般的呼称に従う。
平瓶	扁平な体部で、口縁部を天井の一方の端に付すもの。一般的呼称に従う。
壺	体部に注口を有する壺。一般的呼称に従う。
長頸壺A	体部から細い頸部が直立気味にのびるもので、体部が球状を呈するものという。
長頸壺B	口縁部で折り返し口縁部を作る。肩に把手の付くものなどがある。
短頸壺A	体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開くもの。
短頸壺B	クロクろ調整によって成形され、口縁部が直立して短く立ち上がるもの。口縁の立ち上がり方は内傾、直立、外傾とさまざま。松本平「総論編」で短頸壺Cとしていっているものを含む。
短頸壺D	クロクろ調整によって整形された小形の短頸壺。以下の3つのタイプに分けられる。①胴径に比して口径が大きいもの、②胴径に比して口径が小さい壺形のもの、③口径10cm前後で外反する口縁をもつ壺形の器
平瓶	クロクろ調整によって整形され、口縁部が強く外反し、口縁部を作るもの。
長頸壺	一般的呼称に従う。
小瓶	一般的呼称に従う。
短頸壺	一般的呼称に従う。
広口瓶	一般的呼称に従う。
瓶類	器面を丁寧に磨いた後、黒色処理を施した瓶類。有台のものと無台のものがある。

食膳具1

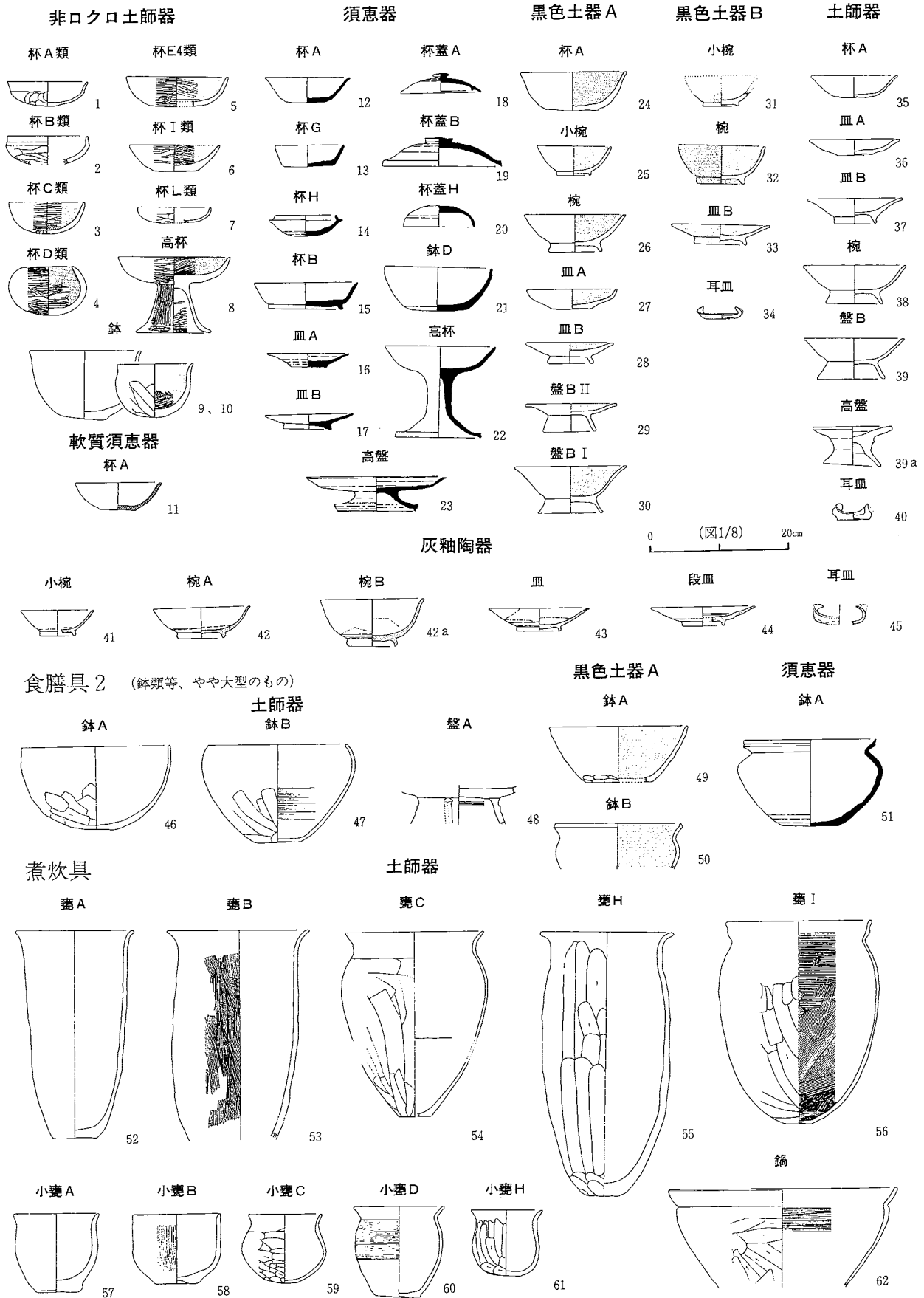
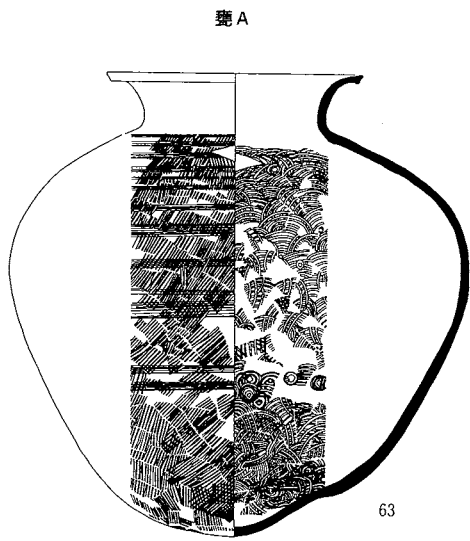
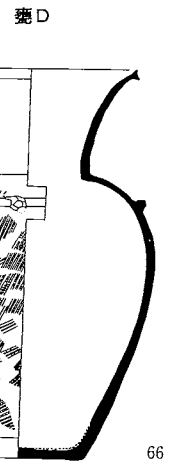
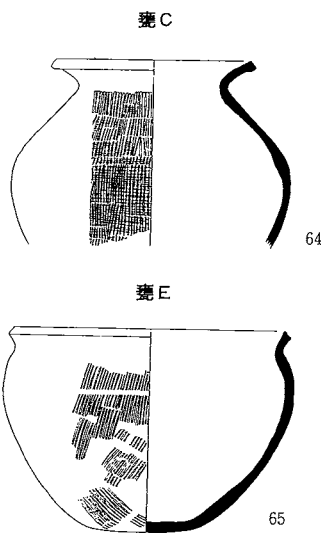


図22 古代の土器 器種分類1

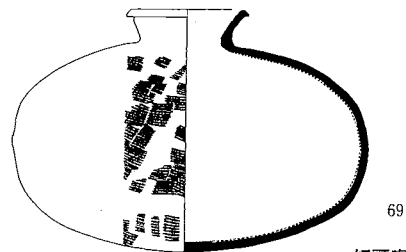
貯蔵具



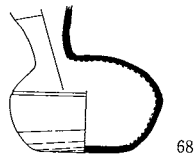
須恵器



横瓶



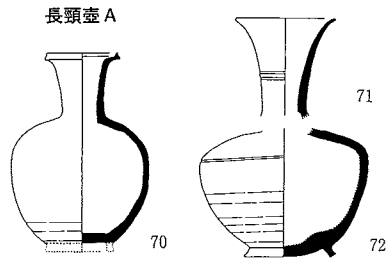
平瓶



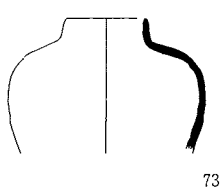
甗



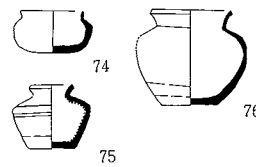
長頸壺 B



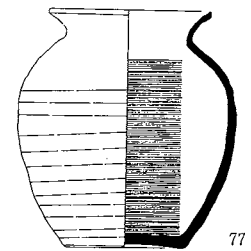
短頸壺 A



短頸壺 B

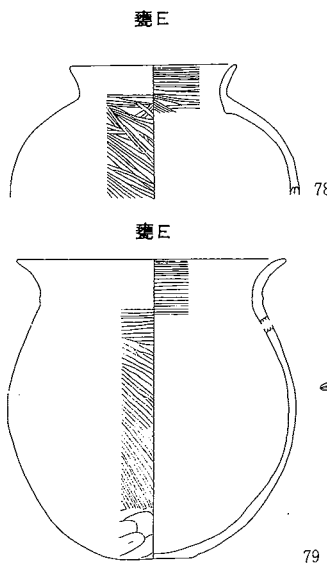


短頸壺 D

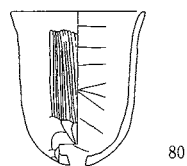


煮炊具

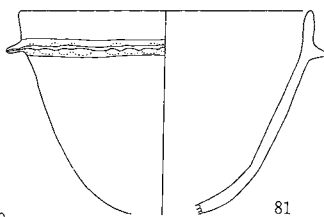
土師器



甑



羽釜



灰釉陶器

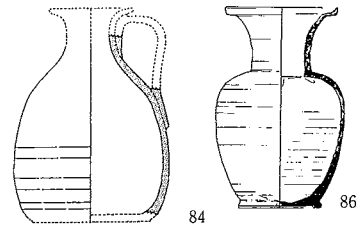
長頸壺



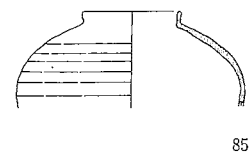
小瓶



瓶類



短頸壺



0 20 (図1/8) 40cm

図23 古代の土器 器種分類 2

均；3.4cm

SB702 (図版112)

時期；古代9期 組成比；0：0：6：94 土師器杯A IIの口径平均；12.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.4cm

SB801 (図版112)

時期；古代9期 組成比；0：0：17：82 土師器杯A IIの口径平均；12.7cm 土師器杯A IIの器高平均；3.5cm 1の黒色土器A椀には暗文がみられる。

SB802 (図版112) 時期；古代9期 組成比；0：0：67：33 1の黒色土器A杯Aには暗文がある。

SB803 (図版112)

時期；古代9期 組成比；0：0：35：65 土師器杯A IIの口径；10.9cm 土師器杯A IIの器高；2.5cm 2は土師器皿A IIである。

SB804 (図版112 PL13)

時期；古代8期後半 組成比；0：2：75：22 土師器杯A IIの口径平均；12.6cm 土師器杯A IIの器高平均；3.4cm III層検出である。6の黒色土器A椀には暗文がある。黒色土器Aの3・4・5・6には内面にミガキがない。また、黒色土器Aの1・2の内面のミガキは荒い。2の黒色土器A杯A IIの内面にはラセン状の沈線が巡っている。

SB805 (図版112 PL13)

時期；古代9期 組成比；0：0：39：61 土師器杯A IIの口径平均；12.4cm 土師器杯A IIの器高平均；3.8cm SB805とSB873の2軒が切り合っていたが、床面まで掘り進んだ段階での確認だったため遺物はSB805として一活して取り上げてある。切り合いからSB873の方が古いが、時期は似ており遺物の分離は難しい。1の黒色土器A杯A IIはすす付着土器である。

SB806 (図版113 PL13 巻頭図版3)

時期；古代10期 組成比；0：1：15：70 土師器杯A IIの口径平均；11.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 古代10期の標準資料である。20・23は緑釉陶器皿、20は猿投系、23は京都(洛西系)である。図化できない小片だが緑釉陶器がもう1片ある。4の土師器杯A IIは灯明具1である。21は無施釉の灰釉陶器椀で灯明具1でもある。見込には突起が残り、整形は丁寧さに欠ける。19の灰釉陶器も見込は同様であり、底部には糸切りの跡が残る。両者とも大原2号窯式又は虎溪山1号窯式である。

SB807 (図版113)

時期；古代9期 組成比；0：0：35：65 土師器杯A IIの口径平均；13.0cm 土師器杯A IIの器高平均；3.7cm 8の土師器皿A IIの底部調整は手持ちへう削りである。1と3は黒色土器A杯A及び鉢Bだが内面にミガキがない。

SB808 (図版114 巻頭図版3)

時期；古代9期 組成比；0：4：39：55 土師器杯A IIの口径；12.9cm 土師器杯A IIの器高；3.5cm 1は黒色土器A椀だが内面にミガキがない。

SB809 (図版114 巻頭図版3)

時期；古代10期 組成比；0：0：12：72 土師器杯A IIの口径平均；11.6cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 小片で図化できなかったが、緑釉陶器が3片みられる。そのうち1点は緑釉緑彩陶である。

SB810 (図版114)

時期；古代9期 組成比；0：1：25：62 土師器杯A IIの口径平均；12.3cm 土師器杯A IIの器高平均；3.9cm 5の灰釉陶器皿はつけがけで大原2窯式である。

SB811 (図版114) 時期；古代9期 組成比；0：0：52：41

SB812 (図版114)

時期；古代9期 組成比；0：0：24：65 土師器杯A IIの口径平均；12.6cm 土師器杯A IIの器高平均；3.6cm 5は灰釉陶器だが底部が意図的に割られており、底部縁辺加工土器に分類される。また、内面がつるつるしており墨痕はないものの転用硯の可能性もある。1は黒色土器Aだが内面にはミガキがみられない。

SB821 (図版114 PL13)

時期；古代10期 組成比；0：0：25：73 土師器杯A IIの口径平均；11.5cm 土師器杯A IIの器高平均；3.4cm 古代10期の標準資料である。7は土師器で灯明具1、1の黒色土器A椀も灯明具1であるが、底を使った珍しい例であり、こげあとが高台のへりにつく。内面には暗文も見られる。

SB822 (図版115)

時期；古代9期 組成比；0：0：33：67 土師器杯A IIの口径；12.8cm 土師器杯A IIの器高；4.0cm

SB823 (図版115)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：58：42 土師器杯A IIの口径；12.8cm 土師器杯A IIの器高；4.0cm III層検出である。図化できなかつたが内面にミガキがみられない黒色土器Aもみられる。

SB824 (図版115)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：86：14 土師器杯A IIの口径；13.6cm 土師器杯A IIの器高；3.6cm III層検出である。黒色土器Aだが内面にミガキがないものが多くみられる(1・2・3・4)。3の黒色土器A杯A又は椀には暗文がみられる。2の黒色土器A杯A IIの内面には螺旋状の沈線がみられる。

SB825 (図版115)

時期；古代9期 組成比；0：5：32：57 土師器杯A IIの口径；13.8cm 土師器杯A IIの器高；3.9cm 7は土師器盤B I、3は黒色土器A盤B Iである。8の灰釉陶器椀Aは大原2号窯式である。

SB826 (図版115 PL13)

時期；古代9期 組成比；0：1：25：68 土師器杯A IIの口径平均；12.3cm 土師器杯A IIの器高平均；3.5cm 古代9期の標準資料である。2の黒色土器A椀の底部外面には篋書がみられる。19の灰釉陶器椀Aはつけがけで、見込を丁寧にコテ状工具で調整しており大原2号窯式である。20の灰釉陶器皿はハケぬりだが、口径は13.1cmと小さく大原2号窯式前半である。東濃の北丘7号窯に類例が多い。

SB827 (図版116 巻頭図版3)

時期；古代9期 組成比；0：0：11：84 土師器杯A IIの口径平均；12.5cm 土師器杯A IIの器高平均；3.6cm 緑釉陶器が2点みられる(12・13)。13は猿投系である。4・8の土師器皿A IIはすす付着土器である。

SB828 (図版116)

時期；古代9期 組成比；0：2：23：75 土師器杯A IIの口径平均；12.7cm 図化できなかつたが緑釉陶器の小片が1片出土している。

SB832 (図版116)

時期；古代9期 組成比；0：0：31：64 土師器杯A IIの口径；11.5cm 土師器杯A IIの器高；3.6cm 古代9期のSB839に切られる。

SB833 (図版116)

時期；古代10期 組成比；0：0：15：85 土師器杯A IIの口径平均；11.4cm 土師器杯A IIの器高平

第3章 古代2の遺物

均；3.5cm 古代10期の標準資料である。

SB834 (図版117)

時期；古代9期 組成比；0：0：29：71 土師器杯A IIの口径；13.2cm 土師器杯A IIの器高；3.9cm

SB836 (図版117)

時期；古代8期後半～9期 組成比(重量比)；0：0：52：47 組成比(個体数比)；0：0：43：52 土師器杯A IIの口径平均；12.1cm 土師器杯A IIの器高平均；3.2cm 1は黒色土器A杯A Iだが内面にミガキがない。

SB837 (図版117)

時期；古代9期 組成比；0：0：20：80 土師器杯A IIの口径；13.2cm 土師器杯A IIの器高；4.1cm

SB839 (図版117)

時期；古代9期 組成比；0：0：20：72 土師器杯A IIの口径；13.0cm 土師器杯A IIの器高；3.3cm

SB840 (図版117)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：57：39 土師器杯A IIの口径；14.1cm 土師器杯A IIの器高；4.3cm III層検出である。1の黒色土器A杯A IIは灯明具1である。3の黒色土器A皿A IIには内面にミガキがない。

SB841 (図版117)

時期；古代8期後半～9期 組成比；0：0：0：100 土師器杯A IIの口径；12.8cm 土師器杯A IIの器高；4.4cm

SB842 (図版118) 時期；古代8期後半 組成比；0：0：66：34 III層検出である。

SB843 (図版118 PL13 巻頭図版3)

時期；古代9期 組成比；0：0：20：78 土師器杯A IIの口径平均；12.3cm 土師器杯A IIの器高平均；3.6cm 12は越州窯系青磁碗で、SD857出土例と接合する。高台は蛇の目高台で壘付部分は露胎だが、他は全面にオリーブ灰色の発色の良い釉が施釉されている。胎土は密で精良。外底重ね部分には重ね焼き用の灰白色の目跡が4ヶ所確認できる(推定は6ヶ所)。しかし、内面には目跡はない。外底部に目跡が残ることは問題を残すがその他の特徴は横田・森田分類(横田・森田1978)のI類に属するものと考えられる。小片のため実測できなかったが、緑釉陶器の輪花碗が1点みられる。14は土師器甕Iで、外面にはタキ痕、内面にはおさえ痕がみられる。

SB844 (図版118)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：53：47 土師器杯A IIの口径平均；12.4cm 土師器杯A IIの器高平均；4.4cm III層検出である。2は黒色土器Bとしたが内面、外面共にミガキはみられない。

SB845 (図版118)

時期；古代9期 組成比；0：2：44：52 土師器杯A IIの口径平均；12.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.9cm 1の黒色土器A杯A IIは内面にミガキがなく、暗文がみられる。

SB846 (図版118 PL13)

時期；古代10期 組成比；0：1：41：58 土師器杯A IIの口径平均；11.8cm 土師器杯A IIの器高平均；3.2cm

SB847 (図版118)

時期；古代9期又は15期も含めそれ以降 組成比；0：0：7：93 2は白磁IV類碗である。1は土師器杯A IIで薄手でしっかりしたつくりであり、白磁とは共伴しない。どちらかが混入と考えられるが、切り合いがなく、また、遺物も少なく断定できない。

SB848 (図版119~120 PL14)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：52：47 土師器杯A IIの口径平均；12.0cm 土師器杯A IIの器高平均；3.7cm 古代8期後半の標準資料である。灯明具1の出土が多い(11・12・23・24)。このうち11の黒色土器A小椀は高台も灯明用に使っている。この11と土師器椀の24は口縁部の割れ口のところに灯芯状のこびりつきがみられる。12の土師器杯Aは覆土出土で口径が10.5cmと小さく後出のもののようにみえるが、この時期の灯明専用器の可能性もある。見込部にすすのつかない部分がみられる。1の黒色土器A杯A IIは灯明具2で、口縁部の割れ口からすすが流れ落ちるようにしている。17・18の土師器杯A IIはすす付着土器、20の土師器杯Aと27の土師器耳皿は底部に焼成前の一孔が穿たれている。4の黒色土器A杯A IIには内面のミガキが口縁部のみしか施されていない。22は灰釉陶器皿でハケぬりであるが、口径が12.9cmと小さく大原2号窯式前半である。東濃の北丘7号窯に類例が多い。

SB849 (図版120)

時期；古代10期 組成比；0：0：27：71 土師器杯A IIの口径平均；11.2cm 土師器杯A IIの器高平均；3.1cm

SB851 (図版120 巻頭図版3)

時期；古代9期 組成比；0：0：17：77 土師器杯A IIの口径；12.0cm 土師器杯A IIの器高；3.6cm 3は猿投系の緑釉陶器椀である。

SB852 (図版120~121 巻頭図版3)

時期；古代9期 組成比；0：1：41：58 土師器杯A IIの口径平均；13.1cm 土師器杯A IIの器高平均；3.8cm 9の土師器皿A IIはすす付着土器、8の黒色土器A杯A IIは灯明具1で内面にはミガキがない。2の黒色土器A杯A IIにも内面にミガキがない。1の黒色土器A杯A IIには暗文がみられる。掘方出土の14は猿投系で、緑釉緑彩陶である。掘方出土の黒色土器A杯A(10)と椀(12)にも内面にミガキがない。12には暗文もみられる。

SB853 (図版121)

時期；8期後半~9期 III層検出である。組成比；0：2：48：48 1・3の黒色土器A杯A IIには内面にミガキがなく暗文がみられる。2は黒色土器A杯A又は椀だが、体部外面に絵の様な彫り込みがみられる。

SB854 (図版121)

時期；古代8期後半~9期 組成比(重量比)；0：0：51：49 組成比(個体数比)；0：0：45：55 土師器杯A IIの口径平均；12.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.8cm 9期のSB837に切られる。2は黒色土器A椀だが内面にはミガキがない。

SB855 (図版121) 時期；切り合いから古代8期後半~9期以降。遺物少。

SB856 (図版121)

時期；古代8期後半~9期 III層検出である。土師器杯A IIの口径；12.9cm 土師器杯A IIの器高；3.6cm 2の黒色土器A椀には暗文がみられる。

SB857 (図版121) 時期；古代8期後半~9期 遺物少。

SB859 (図版121)

時期；古代8期後半 組成比；0：0：63：35 土師器杯A IIの口径；13.0cm 土師器杯A IIの器高；

第3章 古代2の遺物

3.8cm III層検出である。2の黒色土器A杯A IIは灯明具1、1の黒色土器A椀も灯明具1で、口縁から高台部分に油状の流れが確認できる。また、灯明の跡と重なるため図化しなかったが、内面には「+」の暗文もあわせもつ。8の土師器甕Iの内面には青海波文がみられる。

SB860 (図版121) 時期；切り合いから古代8期後半 組成比；0：0：16：65

SB861 (図版122 巻頭図版3)

時期；古代8期後半 組成比；0：3：65：30 土師器杯A IIの口径平均；12.8cm 土師器杯A IIの器高平均；3.5cm 古代8期後半の標準資料である。8・10の黒色土器A椀には内面にミガキがない。また、7の黒色土器A杯A Iの見込部にミガキがみられない。1・2は軟質須恵器杯Aとしたが土師器杯Aにもみえる。小片のため図化できなかったが、緑釉陶器の小片が1片みられる。16の灰釉陶器は、施釉方法ははっきりしない。ただし、施釉の幅が狭い点はつけがけ的である。光ヶ丘1号窯式又は大原2号窯式である。

SB862 (図版122)

時期；古代8期後半 組成比(重量比)；0：0：45：55 組成比(個体数比)；0：0：50：50 土師器杯A IIの口径；13.3cm 土師器杯A IIの器高；4.1cm III層検出である。2は黒色土器A椀だが内面にミガキがない。また、内面に暗文のようなものがみえるが器面が荒れておりはっきりしない。

SB863 (図版122) 時期；切り合いから古代8期後半 組成比；0：0：36：64

SB864 (図版122)

時期；古代8期後半～9期 組成比；0：0：88：12 8期後半～9期のSB836に切られる。

SB865 (図版122～123)

時期；古代9期 組成比；0：8：31：55 土師器杯A IIの口径平均；12.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.7cm 古代9期の標準資料である。10の土師器杯A IIは灯明具1である。4の黒色土器A杯A IIには暗文がある。12の土師器椀も暗文をもつが花柄を意識して付けられている。緑釉緑彩陶に似た図柄のものがある。2の黒色土器A杯A IIには見込部のみに荒いミガキがみられる。13の灰釉陶器椀は釉はハケぬりであるが腰に丸みをもちやや内わんする器形で、光ヶ丘1号窯式又は大原2号窯式、1は軟質須恵器杯Aとしたが土師器杯A IIにもみえる。

SB866 (図版123)

時期；古代9期 組成比；0：0：35：65 土師器杯A IIの口径平均；12.6cm 土師器杯A IIの器高平均；4.0cm

SB867 (図版123)

時期；古代9期 組成比；0：0：33：67 土師器杯A IIの口径平均；12.1cm 土師器杯A IIの器高平均；4.0cm 1の黒色土器A椀の底部には一孔が穿たれている。内面にはミガキがみられない。3の土師器皿A IIはすす付着土器である。内面には全面にすすが付着しているが、外面は全くすすの付着がない。灯明具の下皿の可能性も考えられる。

SB868 (図版123)

時期；古代8期後半～9期 出土遺物は図化した土師器皿A II 1点のみである。III層検出である。

SB869 (図版123)

時期；古代8期後半～15期 組成比；0：0：93：7 III層検出である。図示できる遺物はあるが、時期を特定できる器種がない。

SB870 (図版123)

時期；古代9期 組成比；0：22：38：40 土師器杯A IIの口径；14.0cm 土師器杯A IIの器高；3.9

cm 1の黒色土器A碗は内面にミガキがみられない。3の土師器皿A IIは土師器にしたがほとんどの部分が黒色で軟質須恵器のようにもみえる。

SB871 (図版123) 時期；古代8期後半以降。出土遺物は図化した須恵器杯A 1点のみである。

SB872 (図版124)

時期；古代10期 組成比；0：0：15：82 土師器杯A IIの口径平均；11.9cm 土師器杯A IIの器高平均；3.1cm

SB1001 (図版124)

時期；古代9期 組成比；0：1：43：56 土師器杯A IIの口径平均；12.0cm 土師器杯A IIの器高平均；3.4cm 古代9期の標準資料である。15の土師器甕は非ロクロ、他の土師器甕(10・11・14)はロクロ使用である。

SB1002 (図版125 PL15)

時期；古代9期 組成比；0：1：22：62 土師器杯A IIの口径平均；12.2cm 土師器杯A IIの器高平均；3.7cm 古代9期の標準資料である。11と12の灰釉陶器碗Aと皿は転用硯で、ともに内面がつるつるしており墨痕が残る。12はつけがけの可能性が高い。見込部はコテ状工具で丁寧に整形している。13の灰釉陶器皿は施釉法は不明だが口径が小さく、口径に比して高台径も小さい形態で口縁端部に玉縁状口縁のなごりが残っている。両者とも大原2号窯式である。

SB1003 (図版125)

時期；古代9期 組成比；0：0：30：70 土師器杯A IIの口径平均；12.1cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 1は黒色土器Aだが内面にミガキはない。

SB1004 (図版125～126 PL15)

時期；古代9期 組成比；0：0：44：56 土師器杯A IIの口径平均；12.1cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 4の土師器杯A IIと8の土師器碗は、すす付着土器である。5の土師器杯A IIの内面には漆のこびりつきが見られる。3の黒色土器A碗には暗文が見られる。1の黒色土器A杯A IIには内面にミガキがない。12の土師器甕は白っぽい胎土で在地の甕とは違った胎土をもつ。

SB1005 (図版126 PL15)

時期；古代9期 組成比；0：2：0：77 土師器杯A IIの口径平均；12.7cm 土師器杯A IIの器高平均；3.4cm 古代9期の標準資料である。6の灰釉陶器碗Aは朱墨硯で内面に朱墨が付着している。施釉法はつけがけで見込部をコテ状工具で丁寧に整形している。5の灰釉陶器皿もつけがけで、口径は13.0cm。見込み部の整形も丁寧である。5・6共に大原2号窯式である。

SB9015a (図版126)

時期；古代15期 組成比；0：0：16：73 土師器杯A IIIの口径平均；8.9cm 土師器杯A IIIの器高平均；1.9cm 古代15期の標準資料である。3は白磁皿である。見込部に沈線が巡っている。SB9015覆土として取り上げた14・15・17・18は、この住居に属するものと考えて良い。その場合の土師器杯A IIIの器高平均は1.9cmである。

SB9015b (図版126 PL15)

時期；古代12期 組成比；0：0：30：70 土師器杯A IIIの口径平均；9.2cm 土師器杯A IIIの器高平均；2.9cm SB9015覆土として取り上げた16はこの住居に属するものと思われ、それも含めた土師器杯A IIIの器高平均は2.9cmである。

SB9016 (図版127) 時期；古代14～15期 組成比；0：0：47：53 4の土師器碗は灯明具2である。

SB9017 (図版127)

第3章 古代2の遺物

時期；古代8期後半 組成比；0：39：29：32 組成比（個体数比）；0：27：27：45 須恵器杯Aの質（実測個体数）；A+B=2個 > D=0個 4の土師器杯AⅢ、11の土師器羽釜は混入の可能性もある。

SB9020（図版127）

時期；切り合いから古代10期以降。組成比；0：5：47：33 組成比（個体数比）；0：7：36：36 Ⅲ層検出である。1の灰釉陶器はつけがけの可能性が高い。

SB9024（図版127）

時期；古代10～12期 組成比；0：9：44：47 土師器杯AⅡの口径；10.3cm 土師器杯AⅡの器高；3.3cm 1の黒色土器A椀には内面に暗文がみられる。2の土師器杯AⅡは朱墨硯である。

SB9025（図版127～128）

時期；古代9期 組成比；0：7：46：47 組成比（個体数比）；0：9：40：49 土師器杯AⅡの口径平均；12.7cm 土師器杯AⅡの器高平均；3.3cm 食膳具における土師器の比率が重量比でも、個体数比でも黒色土器をうわまわる段階の資料となる。遺物量は少ないが、古代9期の標準資料の1つにしている。

SB9026（図版128） 時期；切り合いから古代13期以降。遺物少。

SB9029（図版128）

時期；古代9期 組成比；0：1：17：72 土師器杯AⅡの口径平均；12.3cm 土師器杯AⅡの器高平均；4.0cm 3の土師器杯AⅡは灯明具1、15の掘方出土の黒色土器A杯AⅡには暗文がある。

SB9030（図版128・PL15）

時期；古代8期後半 Ⅲ層検出である。6の土師器小椀、8の土師器羽釜、10の土師器杯AⅡは、他の遺物群と出土場所が異なり、古代12期以降の混入の可能性が高い。1・2の黒色土器A杯AⅡと3の黒色土器A皿AⅡには、内面にミガキがみられない。4の黒色土器A皿AⅡには暗文がみられる。

SB9032（図版128 巻頭図版3）

時期；古代10～12期 組成比；0：0：34：64 土師器杯AⅡの口径；10.8cm 土師器杯AⅡの器高；3.5cm 図化できなかったが緑釉陶器の小片が出土している。

SB9033（図版129）

時期；古代12期 組成比；0：0：11：86 土師器杯AⅢの口径；10.2cm 土師器杯AⅢの器高；3.7cm

SB9034（図版129） 時期；Ⅲ-2層検出のため、古代8期後半である。組成比；0：0：82：15

SB9035（図版129）

時期；古代12期 組成比；0：10：51：33 組成比（個体数比）；0：18：34：45 土師器杯AⅢの口径平均；10.4cm 器高平均；3.1cm 口径10cm台の土師器杯AⅢと口径12cm台の土師器杯AⅡに法量分化がみられ、古代12期の標準資料である。7の灰釉陶器段皿は、口径13.7cmで高台径が広く虎溪山1号窯式である。1の黒色土器A小椀には、内外の口縁部下に黒色のこびりつきがみられ灯明具2に分類される。

SB9038（図版129 巻頭図版3）

時期；古代9期 組成比；0：1：17：70 土師器杯AⅡの口径平均；12.8cm 土師器杯AⅡの器高平均；3.9cm 7は猿投系の緑釉陶器椀である。底部全体が意図的に打ち欠かれており底部縁辺加工土器に分類される。4の灰釉陶器は内面がつるつるしており転用硯である。

SB9045（図版130）

時期；古代15期 遺物少。1の灰釉陶器椀Bは口径17.3cmで底部のつくりが厚く高台の張付面も広い。西坂1号窯式である。

SB9046 (図版130 PL15)

時期；古代8期後半 組成比；0：6：55：39 土師器杯A IIの口径平均；12.6cm 土師器杯A IIの器高平均；3.5cm III-2層検出で洪水後の遺物群である。7の土師器椀には暗文、4の黒色土器B皿Bには刻書がみられる。11は灰釉陶器手付水瓶である。掘方出土の8の灰釉陶器は黒笹14号窯式である。

SB9047 (図版130)

時期；古代10期 組成比；0：5：46：47 土師器杯A IIの口径平均；11.6cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 1の黒色土器A椀は、内面にミガキがなく暗文がある。

SB9049 (図版130~131 PL15)

時期；古代10期 組成比；0：0：44：54 土師器杯A IIの口径平均；11.5cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 8の灰釉陶器椀Aは灯明具1である。10の土師器甕は外面にタタキをもち、内面にはおさえ痕がみられる。

SB9051 (図版131)

時期；古代9期 組成比；0：2：32：61 土師器杯A IIの口径；13.2cm 土師器杯A IIの器高；4.1cm 1の黒色土器A杯A IIと2の黒色土器A盤B Iには暗文がみられる。8の灰釉陶器は稜椀である。11の土師器甕の内面には指頭痕がみられる。

SB9053 (図版131 PL16)

時期；古代11期 組成比；0：1：57：42 土師器杯A IIの口径平均；10.2cm 土師器杯A IIの器高平均；3.0cm 土師器杯A IIの口径が10cm台で、明瞭な法量分化はみられない。古代11期の標準資料である。

SB9054 (図版132) 時期；古代10~11期 組成比；0：16：26：58 土師器杯A IIの口径平均；10.7cm

SB9056 (図版132)

時期；古代9期 組成比；0：6：42：52 土師器杯A IIの口径；13.4cm 1の黒色土器A杯A IIの内面にはミガキがみられない。2は土師器皿A IIである。

SB9057 (図版132)

時期；古代10期 組成比；0：0：8：92 土師器杯A IIの口径平均；11.8cm 土師器杯A IIの器高平均；3.2cm 2の内面にはミガキがみられ、黒色は呈していないが黒色土器Aに分類される。

SB9082 (図版132)

時期；古代8期後半~9期 組成比；0：10：44：25 組成比(個体数比)；0：17：39：39 4の灰釉陶器皿は大原2号窯式である。

SB9083 (図版132)

時期；古代10期 組成比；0：18：52：30 土師器杯A IIの口径平均；11.3cm 土師器杯A IIの器高平均；3.3cm 1の黒色土器A小椀には内面にミガキがない。

B. 屋代遺跡群**SB1** (図版132~133 PL16)

時期；古代14期 組成比；0：1：23：46 土師器杯A IIIの口径平均；9.4cm 土師器杯A IIIの器高平均；2.1cm 古代14期の標準資料である。15・18の灰釉陶器には輪花がみられる。15の灰釉陶器椀Bは口径16.0cm、器高6.5cmであり、器高は高いものの高台は外へ伸び明和27号窯式的である。19の灰釉陶器椀、20の灰釉陶器段皿の高台も外方へ伸び明和27号窯式の要素が強い。1の黒色土器A杯A、2の黒色土器A椀は内面にミガキはみられない。土師器の可能性もある。16は内面に一部ミガキがあり、黒色土器A鉢の可能性もある。9の土師器杯A Iはすす付着土器、13の土師器小椀にはタール状のこびりつきがあり、灯明具2に分類される。

SB2 (図版133)

時期；古代15期 組成比；0：0：13：47 土師器杯AⅢの口径平均；9.8cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.9cm 古代15期の標準資料である。6の灰釉陶器碗は転用硯で内面見込部がつるつるし、墨痕が付着している。7はすす付着土器であるが、口縁部にすすの付き方の濃い部分が観察できる。1の黒色土器A碗は内面にミガキがみられない。

SB3 (図版133) 時期；古代12～14期 組成比；0：0：66：34

SB4 (図版134 PL16)

時期；古代14期 組成比；0：0：4：87 土師器杯AⅢの口径平均；9.7cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.4cm 古代14期の標準資料である。9の土師器小碗の内面にはミガキがある。黒色土器Aに分類するのが妥当かもしれない。

SB5 (図版134 PL16)

時期；古代14期 組成比；0：0：25：66 土師器杯AⅢの口径平均；9.9cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.2cm 1は黒色土器B小碗としたが、内面外面共にミガキがない。高台内部には黒色処理はない。

SB6 (図版134 PL16)

時期；古代13期 組成比；0：0：48：24 6・7の灰釉陶器碗Bは丸石2号窯式である。4の黒色土器A碗には内面にミガキがない。9は土師器盤A、8は土師器の短頸壺で、高台部分が欠損している。

SB10 (図版134) 時期；古代15期以降。組成比；0：0：75：7

SB11 (図版134)

時期；古代15期 組成比；0：6：15：79 土師器杯AⅢの口径平均；9.1cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.8cm

SB12 (図版134) 時期；古代15期 組成比；0：0：18：77 4は白磁Ⅱ類碗である。

SB13 (図版135 PL16)

時期；古代13期 組成比；0：0：19：80 土師器杯AⅢの口径平均；9.6cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.7cm 1の黒色土器B小碗の口縁部には油状のこびりつきが全周しており灯明具1に分類される。2の黒色土器A碗の内面には、みえずらく図化できないが、暗文状のものがみられる。

SB14 (図版135) 時期；古代11期以降 遺物少。

SB15 (図版135 PL16)

時期；古代12期 組成比；0：0：10：90 土師器杯AⅢの口径平均；8.9cm 土師器杯AⅢの器高平均；3.0cm 5は土師器杯AⅡであり、杯Aが大小2法量に分化している。遺物量は少ないが古代12期の標準資料としている。土師器杯AⅢの器高平均は3.0cmと高いものの口径平均は10cmを切っており、13期への過渡期の様相と考えられる。

SB18 (図版135 PL16)

時期；古代15期 組成比；0：2：7：82 土師器杯AⅢの口径平均；9.7cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.7cm 古代15期の標準資料である。6の土師器盤BⅠの内面に赤色顔料？が付着している。7の灰釉陶器碗Bの口径は15.3cm、器高は5.7cmで輪花をもち、底部は厚いつくりである。西坂1号窯式である。

SB21 (図版135～136)

時期；古代14期 組成比；0：0：44：51 土師器杯AⅢの口径平均；9.2cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.4cm 古代14期の標準資料である。7の土師器杯AⅢの体部には貫通した小孔がみられる。ワラ状のものが胎土内に混入しており、それが焼成によって消失したため小孔になった可能性もある。11の土師器鉢Aには片口が付く。10の灰釉陶器碗Bは明和27号窯式である。

SB22 (図版136) 1は白磁IV類碗である。

SB23 (図版136)

時期；古代14期 組成比；0：0：17：74 3の灰釉陶器碗の高台は外方へ伸びる。明和27号窯式にみられる特徴である。4の土師器杯AⅢは口縁部に灯芯状のこびりつきが付着し、灯明具1に分類される。

SB24 (図版136) 時期；古代12～14期 組成比；0：0：59：41

SB25 (図版136)

時期；古代15期 組成比；0：0：67：33 土師器杯AⅢの口径平均；9.7cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.1cm

SB28 (図版136) 時期；古代14～15期 組成比；0：0：22：74 4は土師器柱状高台皿である。

SB30 (図版136) 時期；古代14～15期 1の灰釉陶器碗Bは明和27号窯式である。

SB33 (図版136) 時期；古代12期以降。組成比；0：3：26：71

SB34 (図版136)

時期；古代15期 組成比；0：0：0：96 土師器杯AⅢの口径平均；8.9cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.0cm

SB40 (図版137 PL17)

時期；古代15期 カマド周辺を除いた覆土のみの組成比；0：0：15：85 土師器杯AⅢの口径平均；9.3cm 土師器杯AⅢの器高平均1.9cm カマド周辺からも多量に土器が出土している。カマド周辺出土土器の組成比は0：1：6：92 土師器杯AⅢの口径平均は9.2cm 器高平均は1.9cmである。図版ではSB40の20～30として示したものがこれにあたる。古代15期の標準資料である。7の土師器杯AⅢはすす付着土器である。13の土師器杯AⅢの口縁部には輪花状のつまみがみられる。

SB46 (図版137)

時期；古代14期 組成比；0：0：29：64 土師器杯AⅢの口径平均；9.0cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.5cm 古代14期の標準資料である。

SB101 (図版137～138 PL17)

時期；古代14期 組成比；0：1：0：93 土師器杯AⅢの口径平均；9.6cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.2cm 古代14期の標準資料である。1・4の土師器杯AⅢは灯明具1である。13の灰釉陶器は明和27号窯式である。14の土師器羽釜の鏝はとぎれており2ヶ所に把手のような形態でついている。

SB102 (図版138)

時期；古代15期 組成比；0：0：0：100 土師器杯AⅢの口径平均；8.0cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.7cm 1の土師器杯Aの底部には焼成前の穿孔がみられる。

SB103 (図版138)

時期；古代15期 組成比；0：0：16：84 土師器杯AⅢの口径平均；9.1cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.9cm

SB104 (図版138)

時期；古代15期 組成比；0：0：0：100 土師器杯AⅢの口径平均；9.4cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.8cm

SB105 (図版138 PL17)

時期；古代14～15期 組成比；0：0：12：88 1は手づくねのミニチュア土器である。6は土師器羽釜で鏝が3ヶ所に分割されてついている。

SB106 (図版139)

第3章 古代2の遺物

時期；古代15期 組成比；0：7：17：75 土師器杯AⅢの口径平均；9.4cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.0cm 1の土師器杯AⅢは灯明具1である。

SB107 (図版139 PL17)

時期；古代15期 組成比；0：0：0：100 土師器杯AⅢの口径平均；9.2cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.7cm 1の土師器杯AⅢは灯明具1、7の土師器椀は灯明具2である。

SB108 (図版139 PL17)

時期；古代15期 組成比；0：14：2：81 土師器杯AⅢの口径平均；8.5cm 土師器杯AⅢの器高平均；1.8cm 3の土師器小椀は灯明具1である。

SB109 (図版139)

時期；古代15期 組成比；0：0：0：100 土師器杯AⅢの口径平均；9.2cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.0cm 3の土師器杯AⅢは灯明具1である。

SB130 (図版139)

時期；古代12期以降 組成比；0：14：21：63 小片だが土師器杯AⅡ(3)と杯AⅢ(2)がみられる。4の軟質須恵器杯Aは混入である。

SB3021 (図版139 PL17)

時期；古代13～14期 組成比；0：0：30：34 3の灰釉陶器椀Bには漆?が付着している。

SB3022 (図版140 PL17 巻頭図版4)

時期；古代13期 組成比；0：8：34：45 土師器杯AⅢの口径平均；9.5cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.7cm 古代13期の標準資料である。7の土師器小椀は灯明具1。8の灰釉陶器椀Bは丸石2号窯式である。

SB3023 (図版140)

時期；古代10～14期 組成比；0：35：8：57 土師器杯Aの口径；10.5cm 土師器杯Aの器高；2.9cm

SB3024 (図版140)

時期；古代14期 組成比；0：2：14：78 土師器杯AⅢの口径；9.2cm 土師器杯AⅢの器高；2.3cm

SB3025 (図版140)

時期；古代13～14期 組成比；0：23：29：33 土師器杯AⅢの口径；9.0cm 土師器杯AⅢの器高；2.2cm

SB3027 (図版141 PL17・18)

時期；古代14期 組成比；0：4：39：61 土師器杯AⅢの口径平均；9.0cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.3cm 古代14期の標準資料である。1の小椀は内面にミガキがあり、黒色土器Aに分類した。3の椀は外面にもミガキがあり、黒色がとんだものと考え黒色土器Bに分類した。

SB3028 (図版141 PL18)

時期；古代13期 組成比；0：6：20：68 土師器杯AⅢの口径平均；9.7cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.7cm 古代13期の標準資料である。8の土師器杯AⅢは底部穿孔土器である。10の灰釉陶器段皿は口径が11.0cmと小さく、丸石2号窯式である。

SB4003 (図版141)

時期；掘方は古代14期 覆土は2の白磁の出土があるため古代15期～中世 掘方の土師器杯AⅢの口径平均；9.4cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.4cm

SB4004 (図版141～142 PL18)

時期；古代13期 組成比；0：1：40：56 土師器杯AⅢの口径平均；9.5cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.8cm 古代13期の標準資料である。25の灰釉陶器椀Bは丸石2号窯式である。

SB4006 (図版142) 時期；古代13～14期 遺物少。

SB4201 (図版142 PL18)

時期；古代14期 組成比；0：18：1：25 土師器杯AⅢの口径平均；9.8cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.4cm 古代14期の標準資料である。6の灰釉陶器椀Bは灯明具1で丸石2号窯式である。7の灰釉陶器椀Bは明和27号窯式、5は灰釉陶器小瓶である。この時期のものとしては珍しいものである。

SB4502 (図版142)

時期；古代14期 組成比；0：1：44：55 土師器杯AⅢの口径平均；9.2cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.3cm 4の土師器杯AⅢは灯明具1である。

SB4503 (図版142) 時期；古代13～14期 組成比；4：25：25：8

(2) 土坑 (SK) 出土土器

A. 更埴条里遺跡

SK9270 (図版145)

時期；古代13～14期 1の黒色土器A小椀の内面には、暗文状のミガキがある。2の灰釉陶器段皿は口径が12.2cmで丸石2号窯式である。

B. 屋代遺跡群

SK46 (図版145 PL18)

時期；古代15期前後 2は土師器杯AⅡ。4は土師器盤BⅡで灯明具1である。1は非ロクロの土師器、3は白磁皿で見込に文様が描かれている。

SK5013 (図版146 PL18)

時期；古代13期 組成比；0：0：22：37 土師器杯AⅢの口径平均；8.8cm 土師器杯AⅢの器高平均；2.7cm 古代13期の標準資料である。5の黒色土器A椀の内面のミガキは、同心円状の荒いミガキであり、通常のミガキ方とは違う。6の灰釉陶器椀Bは丸石2号窯式である。

註1 ロクロ調整でへら磨きがなされている破片で、黒色のものと、まったく黒色でないものがヒタリと接合することがまれにみられる。これは、土中において何らかの原因により黒色がとんでしまったことに起因するものであろう。したがって、ミガキがなされているものは本来的に黒色処理がなされていたと考えてこのように分類した。また、そのように考えることが編年上より明確な見通しを得られると考えたことにもよる。

2 図1、2に示した土器の出土遺構は表13に示したとおりである。

表13 古代の土器 器種分類表 出土遺構

1	SB6094	16	ST8新	31	SB64	44	SB8	59	SB6104	74	SD8044
2	屋代④区[弥生・古墳編]	17	SB9073	32	SC8002～8003	45	SX2	60	SB4516	75	SD7030
3	SD8044	18	SD7035	33	SB51	46	SB6118	61	SD8044	76	SK5148
4	SD8039	19	SB4223	34	SB41	47	SK6204	62	SD2456	77	SD3243
5	SB4217	20	SB8044	35	SB9050	48	SX13	63	SD8040	78	SD7065
6	SB4510	21	SD7030	36	SD22	49	SB6046	64	SD8032	79	SB6069
7	SD7065	22	SD7035	37	SD22	50	SB9078	65	SD7030	80	SB5092
8	SB6025	23	馬口Ⅱ8号住	38	SB9050	51	SD7035	66	屋代③区平安水田面	81	SB15
9	SB6069	24	SB3016	39	SB9050	52	SB8032 4～16層	67	SD7062	82	SB3006
10	SB5109	25	SB4009	39a	南宮4号溝	53	SB6027	68	SD8044の下	83	SB3008
11	SB4009	26	SB4504	40	SB47	54	SB6038	69	SD7030	84	SB9046
12	SB5033	27	SB9050	41	SB56	55	SB5079	70	SD8023	85	SD22
13	SD8049	28	SB54	42	SB9043	56	SB57	71	SD7030	86	田中沖Ⅱ54号住
14	SD8049	29	SB54	42a	SK5013	57	屋地ⅡY4号住	72	SX7037		
15	SD8040	30	SK9431	43	SB6007	58	屋地ⅡY4号住	73	SD7035		

第3章 古代2の遺物

- 3 出土土器組成表については、『古代1編』付録のフロッピーディスクにまとめて掲載した。
- 4 土器の個体数の集計法については、長野県埋蔵文化財センターが高速道篠ノ井遺跡で用いた方法を採用した。

引用・参考文献

小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書4 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター

原 明芳 1989 「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書3 吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター

横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』

若尾正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報No1』美濃古窯研究会

若尾正成 1988 「白瓷の光ヶ丘1号窯式と大原2号窯式について」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報No2』美濃古窯研究会

(財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内その4 篠ノ井遺跡群』

多治見市教育委員会 1981 『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』

第2節 土製品

1 瓦 (図版147 巻頭図版4)

古代2関連の遺構から出土した瓦は一覧表に示した4例である(表14)。布目瓦が多いが一点のみ軒丸瓦(巻頭図版4 図版147-4)がみられる。この軒丸瓦は古代13期のSB3022のカマド

表14 古代2の出土瓦一覧表

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構	遺物名	時期	PL
1	147	1	更埴条里	SB836	布目瓦	8期後半～9期	
2	147	2	更埴条里	SB857	布目瓦	8期後半～9期	
3	147	3	更埴条里	SB863	布目瓦	8期後半	
4	147	4	屋代	SB3022	軒丸瓦	13期	巻頭図版4

脇の床面にはりついた状態で出土した。雨宮廃寺跡出土例と文様が酷似している。表面の多くの部分と裏面の一部にすずが付着しており、特に裏面のすずの付き方は特異で幅約1cmで直径9cm程の円形を呈する形になっている。また、瓦全体に白濁した液体が塗布されている。カマド脇から出土すずの付着もみられることから、本来の瓦としての機能を果たさなくなった後、カマドの構築材として転用されたものと考えたい。

2 硯

更埴条里遺跡、屋代遺跡群双方から出土がみられる。出土数が少ないため一括して述べる。

(1) 朱墨硯

古代2関連では2例のみの出土である(表15)。古代1期から13～14期前後まで一定量の出土がみられており(図24)、古代全体を通して使用される。須恵器や灰釉陶器が多く使われる中、土師器が使われている例もみられる(SB9024-2)。

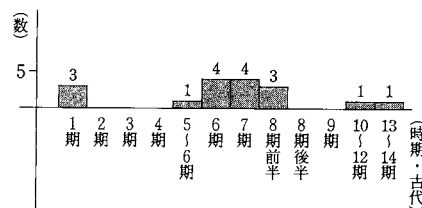


図24 朱墨硯 時期別推移

(2) 転用硯

朱墨硯以外のものを対象としている。古代2関連では7例の出土がみられる。古代1期後半から出土例がみられ、15期まで継続して一定量出土しており、古代全体を通して使用される(図25)。土器の種類は灰釉陶器に限られ(図26)、8期前半までが須恵器のみだったことと対比的である。日常的に使われる食膳具の中でも硬い器が使用されたためであろう。土師器や黒色土器には1例も確認例はない。器種からみた特徴は椀類が多く転用される点である(図27)。

灰釉陶器	
7点	100%

図26 古代2の転用硯 土器の種類

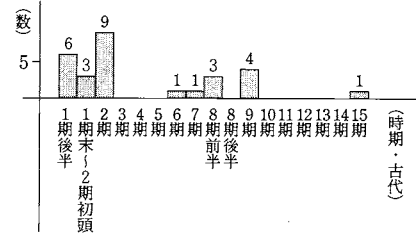


図25 転用硯 時期別推移

椀 A	椀 B	丸皿	段皿
4点 57%	各1点 14%づつ		

図27 古代2の転用硯 器種別割合

表15 古代2の硯一覧表

No	図版No	掲載No	遺物名	遺跡名	出土遺構	時期	土器の種類・器種	備考・特徴
1	114	5	転用硯	更埴条里	SB812	9期	灰釉陶器椀A	内面がつるつる 底部縁辺加工土器も兼
2	125	12	転用硯	更埴条里	SB1002	9期	灰釉陶器丸皿	内面がつるつる 墨痕あり
3	125	11	転用硯	更埴条里	SB1002	9期	灰釉陶器椀A	内面がつるつる 墨痕あり
4	127	2	朱墨硯	更埴条里	SB9024	10~12期	土師器杯A II	内面に朱墨
5	129	4	転用硯	更埴条里	SB9038	9期	灰釉陶器椀A	内面がつるつる
6	133	6	転用硯	屋代	SB2	15期	灰釉陶器椀B	内面見込部がつるつるして黒い
7			朱墨硯	屋代	SB6113	13~14期前後	灰釉陶器輪花丸皿	小片
8	146	7	転用硯	屋代	III-2層	8期後半以降	灰釉陶器椀A?	
9	146	8	転用硯	屋代	III-2層	8期後半以降	灰釉陶器段皿	

3 土 錘 (図版147 PL18)

古代2関連で、時期が特定できる出土状況を示したものは10点(屋代遺跡群2点、更埴条里遺跡8点)である(表16)。表16には図化できたもののみを示した。古代6期から8期前半に出土量が急増したが、8期後半以降は出土量は減るものの、一定量の出土が中世までみられている(図38で土錘の消長のグラフ掲載)。

表16 古代2の土錘一覧表

(重量はg 長さはcm)

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構	時期	重量	長さ	最大幅	最小幅	孔径	土器質	PL	備考・特徴
1	147	5	更埴条里	SB811	9期	5.1	4.4	1.2	0.6	0.5	土師質	PL18-1	完形
2	147	6	更埴条里	SB822	9期	90	6.1	3.6	2.3	1.3	土師質	PL18-3	完形
3	147	7	更埴条里	SB822	9期	88.2	6	3.9	2.4	1.2	土師質		欠損
4	147	8	更埴条里	SB822	9期	81.7		3.6	2.1	1.1	土師質		欠損
5	147	9	更埴条里	SB822	9期	80	6.4	3.5	2	1.3	土師質	PL18-4	完形
6	147	10	更埴条里	SB822	9期	78.6	6.5	3.5	1.9	1.3	土師質	PL18-2	完形
7	147	11	更埴条里	SB836掘方	8期後半~9期	74.2	7.6	3.5	1.6	0.9	土師質		完形
8	147	12	更埴条里	SB9035掘方	12期	19.3	4.8	2.4	1.1	0.8	土師質		一部欠損
9	147	13	屋代	SB13	13期	47.9		3.1	1.7	1.4	土師質		欠損
10	147	14	屋代	SD6001	13期前後	9.4		1.5		0.4	土師質	PL18-5	一部欠損

第3節 石器・石製品

1 概要 (図版148)

II・III層検出の遺構、および包含層より出土した石器・石製品は171点を数える。この内、伴出土器によって大別時期が限定できた資料は、古代52点、中世47点、近世6点にすぎない(表17)。

また、円礫、扁平礫、楕円礫、角礫などの搬入礫も多く認められた。ただし、調査地区毎に採取基準が異なっていたため、統計的な処理は行っていない。採取された礫の内、擦痕や刃物痕などが観察できたものは、1点のみである。

各器種の点数が少ないため、同一器種については中・近世に属する資料も含めて記述を行う。

III層堆積後では、砥石を除く石器・石製品の点数が減少する。基本的な生活用品から石を素材とした製品が姿を消して行く一方、硯・温石・五輪塔などの石製品が新たに登場する。

2 各器種の属性

A. 石 錘

扁平な楕円礫の両側縁に打ち欠きを有する石製品。土錘に比べ4点と極微量である。千曲川から離れた屋代遺跡群①区で3点出土した。重さは最小の完形品で130g、それ以外は欠損品であり最大は319gを計る。IV層中で見られた重さ50g前後の小型品は姿を消す。

B. 磨石・凹石・敲石

する、たたくなどの作業を想定できる資料で29点出土した。磨石、凹石の区分は最も頻繁な用法に基づいている。また、磨痕のある軽石は軽石製品の項に、石臼は次項にまとめた。IV層に比べ減少する。

C. 石 臼

12点を数える。中世(図版278-16)までは、IV層と同様、大型の円礫に深い凹みを有するタイプである。近世には新たなタイプ(図版314-1)が登場する。

D. 砥 石

鉄製品などを研ぐ作業が想定できる資料で73点が出土した。大・中・小の3タイプが存在すると思われるが、完形品の点数が少なく厳密な区分はできない(図28)。出土状況では、更埴条里遺跡I地区の竪穴建物跡に多い傾向がうかがえる(表17)。

E. 紡錘車

石製品は激減し、合計3点のみである。

F. 軽石製品

30点出土した。円盤状で中央に貫通孔のある例が古代8期以降の古代に2点、素材の形状を活かしたままで、擦痕の認められる例が25点ある。後者のう

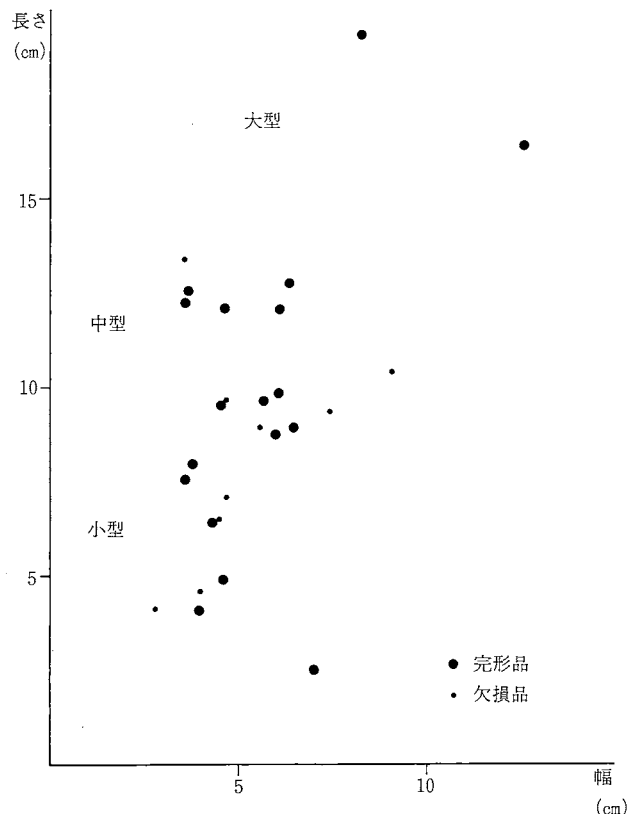


図28 砥石法量相関グラフ(古代8期後半~15期)

ち、一部に刃物痕が認められる例が中世に5点存在する。

G. その他の道具類

古代8期後半～15期では、六角柱状石製品と石帯が各1点、みがき石数点が見つかっている。中世では、硯、温石2点、石製円盤、五輪塔が見つかっている。

表17 古代2の遺構出土石製品一覧

更埴条里遺跡

遺構番号	大時期	小時期区分	石錘	石臼	磨石	凹石	敲石	台石	砥石	軽石製品	紡錘車	その他	備考
SB 801	古代2	9期			1								
SB 806	古代2	10期							3				
SB 808	古代2	9期			1							石帯1	
SB 809	古代2	10期							1				
SB 812	古代2	9期							2				
SB 828	古代2	9期			1				1				
SB 832	古代2	9期							2				
SB 839	古代2	9期					1						
SB 844	古代2	8期後半							1				
SB 847	古代2	—							1				
SB 851	古代2	9期							1				
SB 856	古代2	8期後半～9期							2				
SB 860	古代2	8期後半							1				
SB 865	古代2	9期							1				
SB 870	古代2	9期			1								
SB 872	古代2	10期							1				
SB 1001	古代2	9期			1				1				
SB 1002	古代2	9期							1				
SB 9015	古代2	12・15期								2			2軒重複
SB 9029	古代2	9期			1								
SB 9038	古代2	9期							1				
SB 9046	古代2	8期後半							2				
SB 9051	古代2	9期			1				1				
SB 9054	古代2	10～11期										六角柱状石製品	

屋代遺跡群

SB 1	古代2	14期							1				
SB 5	古代2	14期							1				
SB 13	古代2	13期				1							
SB 21	古代2	14期	1										
SB 27	古代2	?							1				
SB 33	古代2	?		1									
SB 34	古代2	15期							1				
SB 104	古代2	15期							1				
SB 106	古代2	15期							1				
SB 3022	古代2	13期							1				
SB 4003	古代2	14期								1			
SD 19	古代2	?							1				
SK 251	古代2	15期		1									
SK 4003	古代2	?							1		1		
		合計	1	2	7	1	1	0	28	7	1	2	50

第4節 金属製品・鍛冶関係遺物（古代2）

1 銅・青銅製品（図版149）

古代2関係で図示できた5点を表化した（表18）。他に更埴条里遺跡で名称不明の銅製品が1点ある。

表18 古代2の銅・青銅製品一覧表

（単位：cm, g）

図番号	写真番号	遺物名称	遺跡名	地区	中地区	層位	遺構	時期	長径	短径	厚さ	重量	備考
149-1	PL20-1	不明品	更埴条里	K	K11, 16		SB9032	10~12期	(3.1)	(1.9)	0	6.3	
149-2	巻頭図版4	銅印	更埴条里	H		III-2層		8期後半	3.1	3.0	0.4	61.9	長径、短径、厚さは印面のもの 高さ4.1cm
149-3	PL20-2	不明品	更埴条里	K		III層上面			(3.2)	2.5	0.2	2.3	
149-4	PL20-4	銅鏡	屋代	④	X 1, 6		SB4201	14期	(23.5)	-	0.1	21.2	
149-5	PL20-3	不明品	屋代	⑥			SB6113	13~14期前後	4.2	3.5	2	12.2	

A. 銅印（図版149-2 巻頭図版4）

更埴条里遺跡H地区III-2層より出土した。古代8期後半に属する。資料の遺存状況は完形で、現存高4.05cm、印側高0.45cm、印面は方形で縦3.0cm×横3.15cm、重量は61.9gを量る。鈕の形状は蒼紐有孔、印字は「王強私印」と陽刻される。輪郭は有郭、材質は青銅である。印面に赤色顔料の残存がみられる。9世紀代の古代印としては、長野市篠ノ井遺跡群に「大半（伴カ）□□」印、松本市三間沢川左岸遺跡に「長良私印」、佐久市長土呂町聖原遺跡に「伯万私印」（石印）、年代は未定であるが類似したものに、南佐久郡白田町清川に「物部楮丸」印、諏訪大社下社に社伝で大同年間（806~811）平城天皇下賜を伝える「売神祝印」がある。

B. 銅鏡（図版149-4 PL20）

屋代遺跡群で、古代14期に比定されるSB4201から出土している。口縁部と胴部の破片で2片に分離しているが、形状から同一個体と考えられる。口径（推定）は23.5cm、胴部の厚さは1mmである。口縁は肥厚し、玉縁状に顕著に外反する。成分分析の結果（『古代1編』に掲載）は以下のようなものである。

「厳密な意味では「佐波理」とはいえない。古代の佐波理鏡は“銅—錫”系の合金で、組成は銅80%、錫20%をとるのが一般的である。また、厚みも0.5mm以下と非常に薄い場合が多い。この銅鏡は、“銅—鉛—ひ素”系の合金であり、厚さも1mmと厚い。佐波理を目指して作ったもので時代もかなり下がろう。」

引用・参考文献 国立歴史民俗博物館 1996『日本古代印集成』

2 銭貨（図版149-6~9 PL20）

明確に古代2関係の遺構から出土した銭貨はSD950出土の3例のみである（表19）。このSD950は中世水田面の下で検出されているため、そこからの紛れ込みの可能性も考えられる。図版149-9は「隆平永宝」

表19 古代の銭貨一覧表

（単位：cm, g）

図番号	写真番号	貨幣名	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	出土地点	初鑄年	径	重量	備考
149-6		紹聖元宝	更埴条里	K	T15, P6, 7, 8, 11, 12	SD950	覆土	宋 1094	2.3	2.2	
149-7		元祐通宝	更埴条里	K	T15, P6, 7, 8, 11, 12	SD950	覆土	宋 1086	2.2	1.3	
149-8		開元通宝	更埴条里	K	T15, P6, 7, 8, 11, 12	SD950	覆土	唐 621	2.2	1.2	
149-9	PL20-5	隆平永宝	更埴条里	K			IV層	桓武 795	2.5	2.7	皇朝十二銭

で皇朝十二銭の一つである。『古代1編』に属するIV層から出土したが今回報告する。

3 鉄製品（図版149～153 PL20～22）

古代2関係の総数は220点で、出土地区と時期に分けて表20に示した。紙面の関係で中・近世にあたる部分もまとめてあるが、古代2の対象となるものは、古代8期後半から包含層のIII-2層上面の部分までである。また、図化できたものの観察表を表21に示した。以下、器種別にその特徴を記す。

表20 古代2、中・近世の鉄製品出土点数 器種別・地区別・時期（包含層）別

遺物名	地区	古代8期後半	8期後半～9期	9期	10期	10期～12期	12期	12期～14期	13期	13期～14期	14期	15期	13期～中世	15期～中世	III-2層	III-2層上面	III層	III層上面	中世	III-1層	近世以降	1-2層	カラン	不明	地区別総数	器種総数	
鐵	I地区	2															1							1	4	17	
	K地区				1												3		1								5
	①区														1										1		2
	②区										1				3												4
	④区																			1							1
	⑤区																		1								1
計		2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0	5	0	2	0	0	0	0	2			
鋤鉄先	④区									1					1				1							3	3
	計									1					1				1							1	2
釘	H地区														1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	
	I地区	3	3	2	3													1			1				1	18	
	J地区			1																						1	
	K地区			2	1										4		10	11	4		10			1	7	50	
	①区										2	2			6				1	1			7	2	21		
	②区	1									1				4						1	1	12	8	28		
	③区										2														2	4	
	④区	1							3	1					2	2					15				3	27	
	⑤区														1			8					7	3	4	27	
	⑥区														1						1					2	
	計		5	3	5	4	0	0	0	3	1	4	3	0	0	19	2	23	11	25	1	14	8	23	27		
刀子	I地区	4	1	8	9													2			1				4	29	
	J地区																									1	
	K地区			1											3		3								4	14	
	①区								1		1														1	2	
	②区											1													1	3	
	③区										1				2											3	
	④区								1		2				1	1					5					10	
⑤区														1			7					2		2	13		
計		4	1	9	9	0	0	0	3	0	3	2	0	0	7	1	13	0	10	1	1	2	2	13			
不明品	B,F,G,H地区																	2	1		3	5			1	12	
	I地区	3	3	20	9													7			8				4	54	
	J地区			1														1								2	
	K地区			1	1		2	1							6		8	3	7	1	4				9	43	
	①区										1	4			4	1								7	5	27	
	②区											2			1									3	5	12	
	③区														1						1			1	1	4	
	④区	1							1	1				2	1					5					1	12	
⑤区														1			8		4	1		6	1		21		
⑥区																				3					1	4	
計		4	3	22	10	0	2	1	1	1	1	6	2	0	14	1	27	4	24	2	16	11	12	27			
紡錘車	I地区																	1								1	
	K地区		1																							1	
	①区								2		4				1					1					1	9	
	③区								1																	1	
	④区												1							1						4	
	⑤区																	1		1						2	
計		0	1	0	0	0	0	0	3	0	4	0	1	0	2	0	2	0	3	0	0	0	0	1	1		
鐵	H地区																	1								1	
	I地区			1															2							3	
	J地区																				1					1	
	K地区		1			1		1							1		1	4							1	10	
	①区								1		2		2	2						1					2	10	
	②区											2														2	
	④区										1										1					3	
⑤区																								3	2		
計		0	1	1	0	1	0	1	1	0	3	2	2	2	1	0	7	4	4	1	0	1	0	5			
その他(少数器種)	F,I地区			4	5																					3	
	J地区																	1								1	
	K地区				3														6		1	1				2	
	①区												1		1					2	1			1	4	10	
	②区																								1	6	
	③区								2																	2	
	④区								1	1										3						7	
⑤区																								1	7		
計		0	0	4	8	0	0	0	3	1	1	0	1	0	7	0	8	0	6	1	3	4	2	13			
時期別総数		15	9	41	32	1	2	2	14	4	17	13	6	2	56	4	85	19	75	6	34	26	40	89		592	

第3章 古代2の遺物

表21-1 古代2の鉄製品一覧表

(単位: cm, g)

図番号	写真番号	遺物名	遺跡名	地区	中地区	出土遺構・層位	遺構時期	長軸	短軸	厚さ	重量	備考
149-10	PL21-22	刀子	更埴条里	I	O23.24	SB806 壁際	古代10期	(15.4)	2.1	0.5	13.2	身部先端欠
149-11	PL21-23	刀子	更埴条里	I	O23.24	SB806	古代10期	(15.5)	1.2	0.3	4.8	基部先端欠
149-12	PL21-24	刀子	更埴条里	I	O23.24	SB806	古代10期	(12.0)	1.3	0.4	4.6	身部、基部先端欠
149-13		刀子	更埴条里	I	O23.24	SB806 壁際	古代10期	(5.9)	0.9	0.4	2.6	同上
149-14	PL21-58	錐	更埴条里	I	O23.24	SB806 カマド周辺	古代10期	8.9	0.5	0.4	1.9	ほぼ完形
149-15	PL22-70	不明品	更埴条里	I	O23.24	SB806	古代10期	5.3	1.3	0.2	4.9	完形?
149-16	PL22-71	不明品	更埴条里	I	O13.14	SB808	古代9期	(4.3)	0.7	0.6	3.6	
149-17		不明品	更埴条里	I	T18.19.23.24	SB812	古代9期	3.2	4.7	4.8	4.6	
149-18	PL22-72	不明品	更埴条里	I	K10.15	SB821 床	古代10期	(3.1)	0.4	0.4	0.7	
149-19	PL21-65	燧金具	更埴条里	I	K11.12.16.17	SB833	古代10期	4.3	2.3	0.4	10.2	完形
149-20	PL22-73	不明品	更埴条里	I	P13.14	SB841	古代8期後～9期	2.8	0.5	0.5	0.9	
149-21		刀子	更埴条里	I	P12.13.17.18	SB827	古代9期	(5.3)	0.7	0.2	1.3	身部
149-22	PL21-25	刀子	更埴条里	I	P14	SB842 カマド周辺	古代8期後半	(7.3)	1.0	0.4	4.2	身部、基部先端欠
149-23	PL21-61	鑿状金具	更埴条里	I	P7.8.12.13	SB826	古代9期	5.1	1.3	0.9	12.3	完形
149-24	PL21-50	釘	更埴条里	I	T15	SB836	古代8期後～9期	(4.7)	0.6	0.6	5.3	下半欠
150-25		刀子	更埴条里	I	T25.P1	SB837	古代9期	(14.2)	1.1	0.4	3.8	身部一部欠
150-26	PL21-26	刀子	更埴条里	I	K18.23	SB848 床や上層	古代8期後半	(7.6)	1.2	0.5	8.2	身部、基部先端欠
150-27	PL21-27	刀子	更埴条里	I	K18.23	SB848 床や上層	古代8期後半	(15.7)	1.2	0.3	5.3	同上
150-28		刀子	更埴条里	I	K18.23	SB848	古代8期後半	(6.4)	1.8	0.4	5.5	同上
150-29		刀子	更埴条里	I	T10	SB852 床下	古代9期	(5.8)	0.9	0.2	1.5	同上
150-30		刀子	更埴条里	K	O13	SB9025	古代9期	(7.6)	0.7	0.3	3.8	同上
150-31	PL21-51	釘	更埴条里	I	P6	SB853	古代8期後～9期	(6.8)	0.5	0.5	1.2	下半一部欠
150-32		鎌	更埴条里	K	O24	SB9020	10期以降	(8.4)	0.8	0.4	7.5	身部、基部先端欠
150-33		鎌	更埴条里	K	K11.16	SB9032	古代10～12期	(2.5)	1.1	0.4	1.4	同上
150-34	PL20-7	鎌	更埴条里	I	P18.19	SB840 床	古代8期後半	16.3	2.3	0.3	22.8	完形
150-35	PL20-8	鎌	更埴条里	I	P18.19	SB840	古代8期後半	10.5	2.5	0.2	11.8	完形
150-36	PL22-74	鉄製箸	更埴条里	K	O24.25.T4.5	SB9047	古代10期	25.3	0.5	0.5	64.5	完形
150-37	PL20-9	鎌	更埴条里	K	O24.25.T4.5	SB9047 壁際 床	古代10期	18.1	5.2	0.2	28.4	完形
150-38	PL20-6	斧	更埴条里	K	O24.25.T4.5	SB9047 壁際	古代10期	9.0	4.0	2.6	100.9	有袋鉄斧 完形
150-39	PL21-52	釘	更埴条里	K	O19.20.24.25	SB9049	古代10期	14.6	1.1	1.0	23.5	完形
150-40	PL20-16	紡錘車	屋代	①	T23.Y3	SB1 床	古代14期	4.4		0.2	3.5	紡輪
150-41	PL20-17	紡錘車	屋代	①	T23.Y3	SB1	古代14期	5.6	0.6	0.3	13.5	紡輪
150-42		紡錘車(輪)	屋代	①	T23.Y3	SB1 床や上層	古代14期	(8.5)	0.4	0.4	2.5	紡輪一部欠
150-43		紡錘車	屋代	①	T23.Y3	SB1 壁際 床	古代14期	4.5	4.4	0.4	3.9	紡輪、紡輪の一部欠
150-44	PL21-43	鎌	屋代	①	T23.Y3	SB1 壁際 床	古代14期	(7.7)	1.7	0.2	2.0	基部一部欠
150-45		紡錘車	屋代	①	E6	SB6	古代13期	5.9	5.5	0.3	10.7	紡輪
151-46	PL21-44	鎌	屋代	①	Y17.22	SB13 床	古代13期	12.5	1.6	0.2	4.1	完形
151-47	PL21-32	刀子	屋代	①	Y17.22	SB13 床	古代13期	(10.9)	1.5	0.4	5.1	身部先端欠
151-48	PL21-55	釘	屋代	①	Y10	SB18	古代15期	(5.0)	0.4	0.7	1.6	下半欠
151-49	PL21-63	不明品	屋代	①	T3.4	SB40 P1	古代15期	6.2	0.9	0.6	8.8	
151-50	PL21-59	錐	屋代	①	T20.25.P16.21	SB22 床		(11.6)	0.8	0.7	6.5	先端一部欠
151-51	PL21-45	鎌	屋代	②	D18.23	SB103	古代15期	(9.9)	1.5	0.2	3.7	基部一部欠
151-52	PL21-46	鎌	屋代	②	Y21.22.E1.2	SB106 壁際	古代15期	(10.2)	1.9	0.2	3.8	身部、基部一部欠
151-53	PL20-12	鎌	屋代	②	D24.I4	SB101	古代14期	14.0	3.3	0.2	18.0	完形
151-54		刀子	屋代	②	S20	SB109	古代15期	(6.2)	0.9	0.3	1.6	身部
151-55	PL21-33	刀子	屋代	③	P3.4	SB3022	古代13期	(9.4)	1.2	0.4	3.0	基部一部欠
151-56	PL21-60	錐	屋代	④	C18.19.23.24	SB4004 床や上層	古代13期	11.6	0.6	0.4	6.6	完形
151-57	PL22-80	釘	屋代	④	C18.19.23.24	SB4004 壁際	古代13期	(7.5)	0.5	0.4	6.6	
151-58		釘	屋代	④	C18.19.23.24	SB4004	古代13期	2.7	0.5	0.7	2.1	
151-59	PL20-18	紡錘車	屋代	③	L18.23	SB3028	古代13期	4.2		2.0	2.9	紡輪一部欠
151-60	PL21-34	刀子	屋代	④	X1.6	SB4201	古代14期	(14.0)	1.8	0.4	9.3	身部一部欠、基部欠
151-61		刀子	屋代	④	V24.25.B4.5	SB4502	古代14期	(5.4)	1.3	0.4	3.2	身部、基部一部欠
151-62	PL21-47	鎌	屋代	④	V24.25.B4.5	SB4502	古代14期	(5.4)	2.0	0.3	3.7	身部、篋被部以下欠
151-63		不明品	屋代	④	V5.W1.6	SB4503	古代13～14期	5.0	2.1	0.1	13.4	
151-64		釘	屋代	④	V5.W1.6	SB4503	古代13～14期	(4.5)	0.5	0.3	1.6	下半一部欠
151-65	PL22-68	鋤鎌先	屋代	④	V5.W1.6	SB4503	古代13～14期	18.3	15.0		134.1	U字形、耳上部一部欠
151-66	PL22-75	不明品	更埴条里	I	P1.6.11.12.17.22	SD857	古代9期	5.2	2.1	0.5	6.1	
151-67		刀子	更埴条里	I	P1.6.11.12.17.22	SD857	古代9期	(7.2)	1.3	0.4	4.2	基部欠
151-68	PL21-28	刀子	更埴条里	I	P1.6.11.12.17.22	SD857	古代9期	(12.1)	0.8	0.3	5.2	身部一部欠
151-69	PL21-29	小刀	更埴条里	K	T15.P6.7.8.11.12	SD950		(19.0)	(1.6)	(0.5)	19.1	基部一部欠
151-70	PL21-37	鎌	更埴条里	K	T13.14	SD953		(7.1)	1.9	0.3	3.1	身部一部欠
152-71	PL21-48	鎌	屋代	①		SD23		15.8	4.3	0.3	17.1	雁股鎌、完形
152-72	PL20-19	紡錘車	屋代	④	G5.10.H1	SD4504	古代13期～中世	4.6	4.2	0.2	4.3	紡輪一部欠
152-73		不明品	屋代	④	G5.10.H1	SD4504	古代13期～中世	3.5	1.0	0.8	1.9	
152-74		不明品	屋代	④	G5.10.H1	SD4504	古代13期～中世	(2.4)	(1.5)	0.8	4.6	
152-75	PL21-53	釘	更埴条里	K	O16	SK9047		(3.6)	0.7	0.7	4.2	下半欠
152-76	PL21-38	鎌	更埴条里	K	T14.15	SK9238		5.4	1.7	0.5	3.9	雁股鎌、身部、基部一部欠
152-77	PL22-76	不明品	更埴条里	K	T14.15	SK9238		(2.8)	0.2	0.9	1.2	
152-78	PL20-15	紡錘車	更埴条里	K		SK9236	古代8～9期	(14.0)			14.3	紡輪一部欠
152-79	PL21-30	刀子	更埴条里	K		III-2層		(9.1)	1.1	0.3	3.5	身部、基部一部欠
152-80	PL21-31	刀子	更埴条里	K		III-2層		(5.5)	1.2	2.5	1.6	基部一部欠
152-81	PL21-66	燧金具	更埴条里	K		III-2層		4.0	0.8	0.4	3.3	ほぼ完形
152-82	PL21-54	釘	更埴条里	K		III-2層		(3.4)	0.4	0.4	1.6	下半一部欠
152-83		鎌	更埴条里	K		III-2層		(5.0)	0.8	0.2	7.6	身部一部欠
152-84		刀子	更埴条里	I		III-2層		(9.7)	0.9	0.3	4.9	身部、基部一部欠

表21-2 古代2の鉄製品一覧表

152-85		鎌	更埴条里	K		III-2層		(5.6)	5.6	5.4	1.3	下半一部欠
152-86	PL20-10	鎌	更埴条里	K		III-2層		(7.7)	2.4	0.1	7.7	刃部
152-87	PL20-11	鎌	更埴条里	I		III-2層		(6.4)	2.1	0.3	7.2	基部
152-88	PL21-41	鎌	更埴条里	H		III-2層		13.0	1.8	0.2	4.4	身部闊一部欠
152-89	PL21-39	鎌	更埴条里	I		III-2層		8.2	1.4	0.2	7.6	完形
152-90	PL21-40	鎌	更埴条里	K		III-2層		(4.0)	1.7	0.3	2.8	身部
152-91		紡錘車	更埴条里	I		III-2層		(3.3)	(2.2)	0.4	3.1	紡輪一部残存
152-92	PL21-42	鎌	更埴条里	I		III-2層		(8.4)	1.0	0.4	2.5	基部一部欠
152-93		不明品	更埴条里	H		III-2層		4.6	0.6	0.2	2.5	
152-94	PL21-62	楔状金具	更埴条里	K		III-2層		6.7	1.6	0.5	11.5	完形
152-95	PL22-77	釘	更埴条里	I		III-2層		4.0	0.4	0.4	1.4	完形
152-96		釘	更埴条里	K		III-2層		2.5	0.3	0.3	0.6	完形
152-97	PL22-78	鑊鉋	更埴条里	I		III-2層		(4.5)	0.6	0.2	1.3	下半一部欠
152-98		釘	更埴条里	K		III層上		(5.2)	0.5	0.5	2.7	脚部一部欠
152-99	PL22-79	鎌	更埴条里	K		III層上		18.0	0.4	0.4	5.8	完形
152-100		鎌	更埴条里	K		III層上		(4.3)	0.6	0.6	2.0	身部、基部一部欠
152-101	PL21-67	踏鉄	更埴条里	I		III~IV層		10.6	1.7	0.6	47.4	残存3/5
152-102	PL21-57	釘	屋代	②		III-2層		12.1	0.5	0.4	2.8	完形
152-103	PL21-56	釘	屋代	②		III-2層		10.3	0.5	0.5	1.7	完形
152-104	PL21-35	刀子	屋代	①		III-2層		(8.8)	1.7	0.3	4.3	身部
152-105	PL21-36	刀子	屋代	⑤		III-2層		(10.0)	1.5	0.4	6.7	茎部一部欠
152-106		刀子	屋代	④		III-2層		(7.8)	1.2	0.9	4.5	身部、茎部一部欠
152-107	PL21-64	芋引金具	屋代	④		III-2層		(7.6)	1.7	0.3	5.7	脚部一部欠
152-108		不明品	屋代	①		III-2層		5.0	1.6	0.2	3.7	
153-109		鎌	屋代	②		III-2層		(3.5)	(1.9)	0.2	1.6	刃部先端部
153-110	PL20-13	鎌	屋代	②		III-2層		(15.2)	3.2	0.3	17.3	基部一部欠
153-111	PL20-14	鎌	屋代	①		III-2層		21.8	4.6	0.3	(127.1)	完形、木質部残存
153-112		鎌	屋代	②		III-2層		(5.7)	2.6	0.2	4.3	基部
153-113	PL22-69	鋤鉋先	屋代	④		III-2層		24.8	17.0	2.2	287.1	U字形、耳上部一部欠、木質部残存
153-114	PL22-81	不明品	屋代	③		III-2層		28.6	2.7	2.6	417.3	
153-115	PL20-21	紡錘車	屋代	④		III-2層		8.4			4.7	紡輪両端部欠
153-116	PL20-20	紡錘車	屋代	①		III-2層		9.5			28.9	同上
153-117	PL21-49	鎌	屋代	⑤		III~IV層		(6.2)	4.0	0.2	4.6	雁股鎌、基部一部欠
153-118	PL22-82	不明品	屋代	②		層位不明		46.0		1.4	189.8	

A. 鎌

10点出土している。住居から出土したものでは、古代8期後半が2例（図版150-34・35）、10期が1例（図版150-37）、14期が1例（図版151-53）である。他はIII-2層出土である。各部の名称は図29^(註1)に基づく。古代の鎌の変化の方向は、基部に最大幅をもつものから刃部に最大幅をもつものへと変化していく。また刃部の形状は三日月状から半月状へと変化していく。刃部が細く茎部が太い形態は古い要素ということになる。8期後半の図版150-34・35はまさにその形態といえる。刃部も三日月状を呈している。逆に、14期の図版151-53は、刃部が太く、基部が細い特徴を持つため新しい形態といえる。刃部は半月状へと変化している。もう1点10期の例がみられるが（図版150-37）、これは刃部が太く基部が細い。さらに刃部の形状

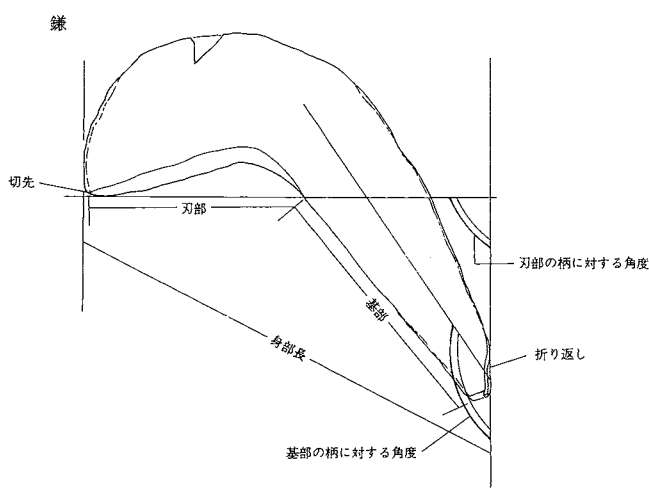


図29 鎌 各部の名称

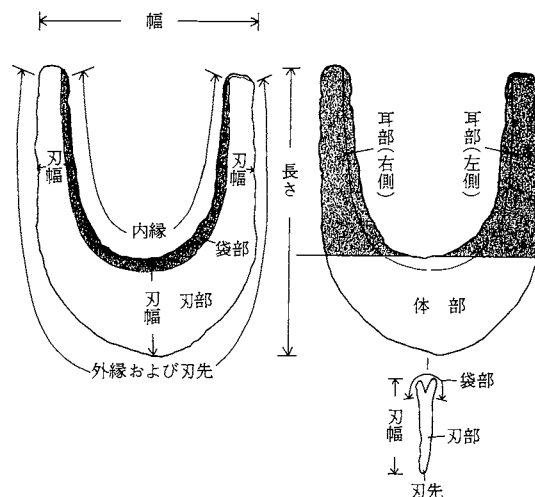


図30 鋤鉋先 各部の名称

は半月状であるため新しい要素といえよう。新しい要素が10期にはみえ始める例といえる。9世紀代までは古い要素をもち10世紀中ごろで新しい要素がそれらと入り混じり、10世紀後半以降は、新しい要素が主流となると考えておく。こういった視点で包含層出土例を観察すると、図版153-111は、刃部が細く基部が太い形態で刃部も三日月状を呈するため古く、同-110はその逆で刃部も半月状を呈するため新しいといえよう。なお111には、着柄部に木質部が残存している。着柄部の折り返しは、左右両方向がみられる。

B. 鋤鋏先

2点出土している。いずれもU字型鋤鋏先である。各部の名称は図30^(註2)に基ずく。図版151-65は13~14期のものである。内縁形も外縁形も共にU字状であり「II A類」(野村1990)に分類される。III-2層出土の図版153-113は、65にくらべ刃幅が広く、内縁部分に木質部が残存している。内縁形はU字状又はL状、外縁形はV字状で「II B類」(同)的である。

C. 釘

49点出土している。各時期からまんべんなく出土がみられる。14点を図化した。ほとんどが吉田川西分類(図31 小松1989)のIV a類で(24・31・48・64・98・102・103)、わずかにV a類(39・75)がみられる。「基部上端を叩き延ばし、その後単に曲げたもの」であるIV類は平安時代の中核タイプとされ、「基部上端を鑿を入れ叩き延ばし、その後折り曲げたもの」とされるV類は、平安時代にもみられるが、中世の中核タイプと推定されている。

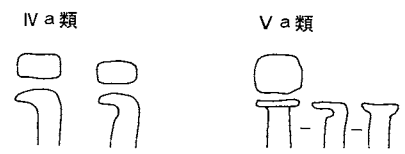


図31 釘の分類 (吉田川西分類)

D. 刀子

39点出土している。各時期からまんべんなく出土がみられる。25点を図化した。欠損品が多く、また使用減り、研ぎ減りが著しいため元来の姿をとどめていないものが多い。

E. 紡錘車

11点出土している。すべて図化した。13期以降の出土例が多い。土製紡錘車は8期後半以降1例も確認例がなく、鉄製品がほとんどをしめる状況となる。

F. 鍬

19点出土している。18点図化した。各時期、ほぼ均等に出土しているが、吉田川西分類(小松1989)にあてはめると「斧箭長根式」にあたるV類が図版152-93。いわゆる「鑿箭式」にあたるVI類が図版150-44・51・52。身部平面が長三角形かわずかに柳葉状を呈するVII類が図版151-46・62・88・89・90・92。雁股鍬にあたるVIII類が71、76、117である。

G. 不明品・その他

不明品が68点、その他が26点あるが、特徴的な資料を以下に列挙する。

- 苧引金具 図版152-107 III-2層から1点のみの出土である。脚部が一部欠損している
- 蹄鉄 図版152-101
- 鉄製箸 図版150-36 古代10期のSB9047から出土している
- 斧 図版150-38 古代10期のSB9047から出土している。完形の有袋鉄斧。
- 鍮鈹 図版152-97
- 燧金具 図版149-19、図版152-81 いずれも山型をしており、穿孔はみられない。

註1 吉田川西報告のものを引用した(小松1989)。以下形態変化の方向についても同書の考察を参考にしている。

2 野村 1990

3 小松 1989

引用・参考文献

小松 望 1989 「金属製品と鍛冶資料」『吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
 野村一寿 1990 「鉄製鋳・鋳先」『総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター

4 鉄生産関連遺物（古代2）

本項では、製錬作業や鍛冶作業（精錬鍛冶、鍛練鍛冶）に伴って排出され出土した古代関係の遺物の概要を述べる。具体的には鉄塊系遺物、鍛冶滓、製錬滓、羽口溶解物、羽口、炉壁、鍛造剥片、粒状滓等である。

A. 地区別・時期別出土状況

鍛造剥片、粒状滓を除いた鉄生産関連遺物の遺構内出土の重量を、地区別にまとめて集計したのが図32である。更埴条里遺跡I地区、K地区に鍛冶滓が多く、屋代遺跡群④～⑥区に製錬滓や羽口、炉壁が多いことがわかる。また、集落域である地区のほとんどから、何らかの形で鉄生産関連遺物が出土していることもわかる。表22には古代2の鉄生産関連遺物を地区別、時期別に分類集計してその出土状況を示した。これを見安いにグラフ化したものが図33である。

B. 鍛造剥片・粒状滓

発掘調査時に採取したサンプル土より検出された鍛冶関連微細遺物の状況を表23に示した。検出方法は採取土を水洗、乾燥させた後、工業用磁石（ピックアップ式）に磁着させ、篩にかけ、大きさ別に5段階に分類した（①類7.1mm以上、②4.1～7.0 ③2.1～4.0 ④1.6～2.0 ⑤1.1～1.5 ⑥0.5～1.0 ⑦0.4mm以下）。中世関係も同様である。表はその合計である。

C. 鍛冶関連遺構の鉄生産関連遺物（図版154-155 PL23）

表24に鍛冶関連遺構の遺物出土量を示した。図34に掲載した

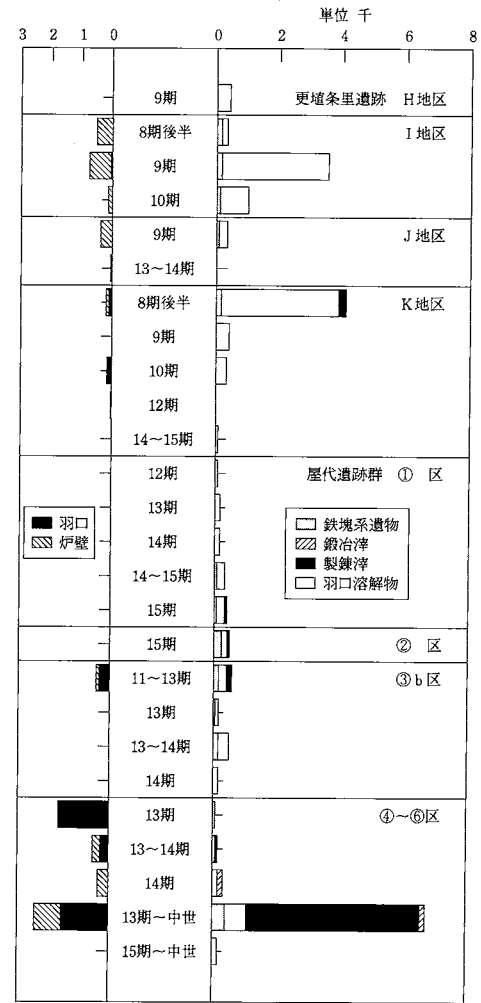


図33 古代2の鉄生産関連遺物出土状況（地区別・時期別）

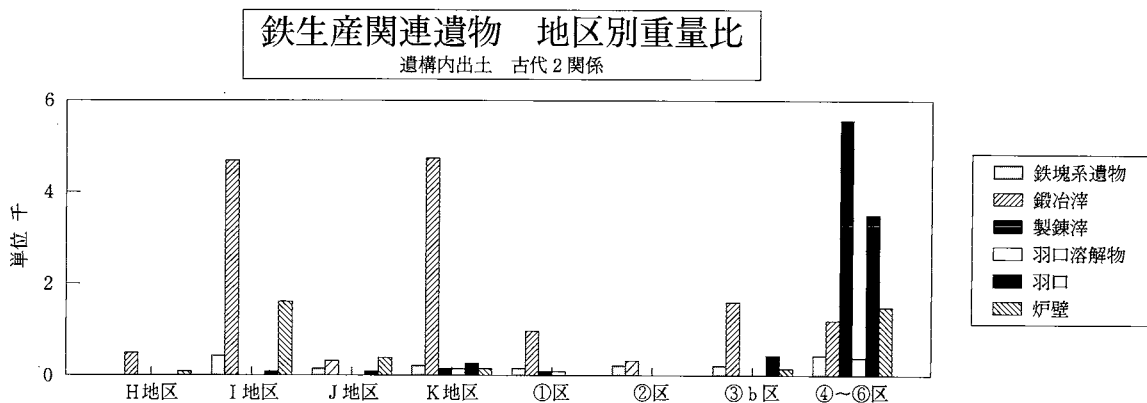


図32 古代2の鉄生産関連遺物 地区別重量比（鍛造剥片・粒状滓を除く）

第3章 古代2の遺物

表22 古代2の鉄生産関連遺物 地区・時期別出土量
遺構内出土

(単位：g)

遺物種類		鉄				粘土系		
地区	時期	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
H地区	9期		475.7			475.7		24.2
	計	0	475.7	0	0	475.7	0	24.2
I地区	8期後半	73.7	336.8			410.5		618.4
	9期	238.1	3409.8		3.1	3651	34.7	831.6
	10期	88.6	962.2			1050.8		108.8
	計	400.4	4708.8	0	3.1	5112.3	34.7	1558.8
J地区	9期	91.7	294.1			385.8		369.7
	13~14期						62.8	
	計	91.7	294.1	0	0	385.8	62.8	369.7
K地区	8期後半	160.6	3927.3	69.3	67.8	4225	189.8	53.4
	9期	4.2	466.5			470.7		7.4
	10期	13.9	326			339.9	44.1	18.6
	12期							29
	14~15期		26.3		15.3	41.6	12.6	
	計	178.7	4746.1	69.3	83.1	5077.2	246.5	108.4
①区	12期		29.5			29.5		
	13期		106.5			106.5		
	14期		98.6			98.6		
	14~15期	49	336.9			385.9		
	15期	51.5	358.9	31.7	27.5	469.6		
	計	100.5	930.4	31.7	27.5	1090.1	0	0
②区	15期	188.7	290.1			478.8		
	計	188.7	290.1	0	0	478.8	0	0
③b区	11~13期	56.3	579.3		29	664.6	392.4	142.1
	13期		221.5			221.5		
	13~14期	92.2	490.3			582.5	3.7	
	14期	27.6	266.7			294.3		
	計	176.1	1557.8	0	0	1762.9	396.1	142.1
④~⑥区	13期	69.9	13.9			83.8	1624.2	3.9
	13~14期		88		38	126	312.1	279.6
	14期	30	173.6		203.6			360.1
	13期~中世	285.9	744.7	5616.6	114.3	6761.5	1585.8	857
	15期~中世		138.4					
計	385.8	1158.6	5616.6	355.9	6971.3	3522.1	1500.6	

包含層出土

層位	地区	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
Ⅲ層	H地区	50.7	717.6			768.3		
	I地区	128.7	1199.1			1327.8	99.7	14.7
	J地区	86.3	275.2			361.5	19	
	K地区	37.1	335.8		14.7	387.6	213.5	97.8
	⑤b区	31.7	297.5		18.9	348.1		141.6
	計	334.5	2825.2	0	33.6	3193.3	332.2	254.1
Ⅲ層上面	K地区		24.7			24.7		
	計	0	24.7	0	0	24.7	0	0
Ⅲ-2層	H地区							9.6
	J地区				2.4	2.4		
	K地区	31.6	958			989.6	787	
	①区	106.4	235.8		20	362.2	73.3	
	③b区	11.4	147.6			159		
	④~⑥区	78.6	137.5		68.4	284.5	379.6	136.2
計	228	1478.9	0	90.8	1797.7	1239.9	145.8	
Ⅲ-2層上面	④~⑥区	32	505.5		29	566.5	234.8	325.6
合計		1157	9163.1	0	277.8	10597.9	3379	1125.4

表23 古代2の鍛造剥片・粒状滓等検出結果

遺構名	採取地点	採取土重量(g)	磁着物重量(g)	割合(%)	砂鉄・鍛造剥片(⑦類)		粒状滓			鍛造剥片			鉄滓片		
					重量(g)	割合(%)	重量(g)	同(%)	個数	重量(g)	同(%)	個数	重量(g)	同(%)	個数
SK9259	埋土	-			1.10	-				0.08	-	126	0.21	-	268
SB3027	カマド灰部	6,600	1.98	0.03	1.78	0.03				-	-	4	0.20	-	502
SB3028	埋土														
SK3252	埋土	13,700	112.19	0.82	36.31	0.27	0.01	-	90	7.26	0.05	12,891	68.61	0.50	2,991
SB4502	カマド灰部	7,300	0.10	-	0.09	-							0.01	-	16
SB4503	Pit. 3	8,900	0.10	-	0.10	-									
"	Pit. 5	8,200	0.31	-	0.31	-						1			2
"	Pit. 15	7,800	0.61	0.01	0.61	0.01									

表24 古代2の鍛冶関連遺構 遺物出土量

（単位：g）

出土遺物 遺構名	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	羽口	炉壁(鍛冶炉)	炉壁(製錬炉)	鍛造剥片	粒状滓
SK9259	22.1	3,965.8		55.6	189.8	13.7		0.08	
SB3027	42.5	226.4						—	
SB3028		221.5							
SK3252	56.3	351.7		29.0	392.4	142.1		7.26	0.01
SB4503		58.8		38.0	312.1	84.9		—	
SD4504	285.9	744.7	6,888.6	114.3	477.2	392.0	365.0		

構成図の作成、分析遺物の選択とその分析部分の選定にあたっては穴澤義功氏の指導を受け、それらの肉眼観察・計測・実測は当埋文センターで実施した。中世関係も同様である。実測図を掲載した遺物の観察表は表25に示した。各鍛冶関連遺構の出土遺物の説明にあたっては、分析結果（第10章 第1節）もふまえて記載する。

更埴条里遺跡K地区 SK9259 鉄塊系遺物、鍛冶滓、羽口溶解物、羽口、炉壁、鍛造剥片の出土がみられる。鉄滓片も268片出土している。このうち鍛冶滓の出土量が多い。図化した3点（図版155-24・25・28）は含鉄椀形鍛冶滓で精錬段階に伴うものである。鉄源は砂鉄である。鉄塊系遺物（図版155-26・27）は鉄源は砂鉄で、製錬中の溶鉄が比較的速い速度で凝固した26と比較的緩慢な速度で凝固した27がある。

屋代遺跡群③b区 SB3027 鉄塊系遺物、鍛冶滓の出土がみられる。このほか、鍛造剥片が4片、鉄滓片が502片検出できた。図化したのは含鉄椀形鍛冶滓で（図版154-1・2）、砂礫が固着している。鉄源は砂鉄である。

屋代遺跡群③b区 SB3028 鍛冶滓のみ出土している。3例図化した（図版154-3～5）。3・4については鉄源は砂鉄である。

屋代遺跡群③b区 SK3252 SB3028内に存在する遺構である。鉄塊系遺物、鍛冶滓、羽口溶解物、羽口、炉壁、鍛造剥片、粒状滓の出土がみられる。鉄滓片も多く2991片を数える。5点図化した（図版155-29～34）。29の羽口は先端部はなく2片接合された個体である。

屋代遺跡群④区 SB4503 鍛冶滓、羽口溶解物、羽口、炉壁が出土し、P5からは、鍛造剥片が1片、鉄滓片が2片出土している。3点図化した（図版154-9～11）。9は羽口で、先端に発泡しガラス質になった黒い滓が付着している。金色の雲母片やスサ痕もみられる。10は炉壁で片面が溶融しガラス状になっている。スサ痕が観察される。

屋代遺跡群④区 SD4504 鉄塊系遺物、鍛冶滓、羽口溶解物、羽口、炉壁が出土している。12点図化した（図版154-12～16、図版155-17～23）。SD4504の限られた地点に多量の鉄生産関連遺物が投棄されている。炉壁に鍛冶炉のほかに製錬炉がみられるように、製鉄関連の遺物（いわゆる製錬滓）が多いという点が特徴的である。13と17は製錬（流出）滓で鉄源は砂鉄である。13は流出した先端部の形状の滓である。17には金属の小粒がある。21の炉壁は赤褐色の柔らかい溶融面のある粘土で、耐火度は1060℃強と中程度の値を示す。22の羽口は先端部に溶融鉄滓が付着し、耐火度は1320℃と高い。

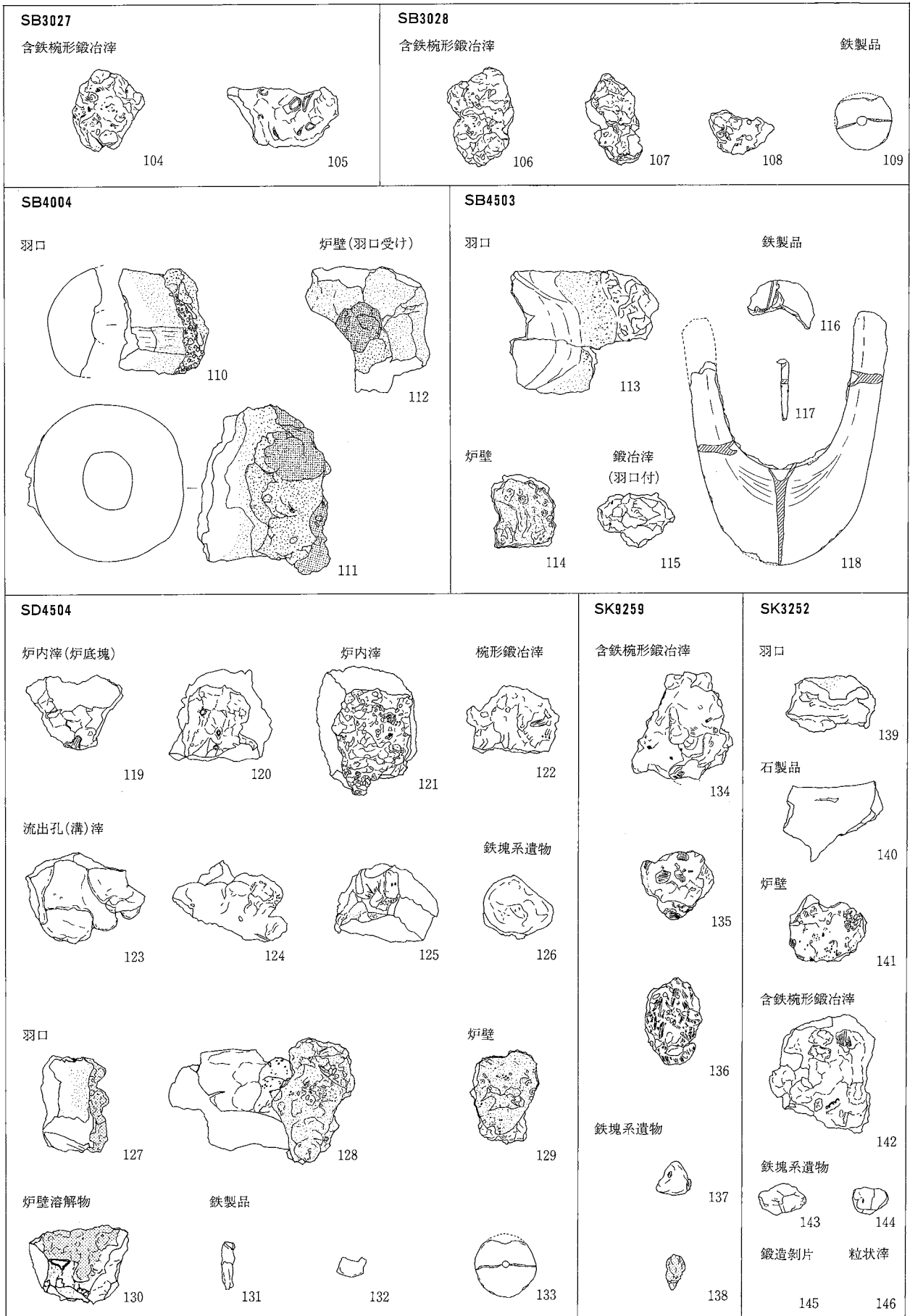


図34 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 鉄生産関連遺物構成図(古代2関係) S=1:4

表25 古代2の鉄生産関連遺物一覧表（構成図使用遺物）

(単位: cm, g)

構成図番号	図版番号	写真番号	遺物名称	地区	中地区	出土遺構	長軸・短軸・厚さ・重量	メタル度 磁着度	分析番号
34-104	154-1	PL23-1	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.19.23.24	SB3027	6.0×5.3×3.1 114.7	H (○) 8	96-49
34-105	154-2	PL23-2	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.19.23.24	SB3027	8.1×4.5×2.5 111.7	H (○) 8	
34-106	154-3	PL23-3	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.23	SB3028	7.3×4.9×1.5 75.4	H (○) 8	96-45
34-107	154-4	PL23-4	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.23	SB3028	6.4×4.4×3.1 97.8	M (◎) 8	96-44
34-108	154-5	PL23-5	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.23	SB3028	4.2×4.0×2.4 43.7		3
34-110	154-6	PL23-7	羽口	④	C18.19.23.24	SB4004	7.8×6.6×3.6 211.6		3
34-111	154-7	PL23-9	羽口	④	C18.19.23.24	SB4004	12.4×9.8×3.8 1008.6		3
34-112	154-8	PL23-8	炉壁(羽口受け)	④	C18.19.23.24	SB4004	10.3×8.1×7.6 358.9		2
34-113	154-9	PL23-10	羽口	④	V5.W1.6	SB4503	9.2×10.8×3.2 312.1		4 96-38
34-114	154-10	PL23-11	炉壁	④	V5.W1.6	SB4503	5.5×4.9×1.8 30.1		2 96-39
34-115	154-11	PL23-12	鍛冶滓(羽口付)	④	V5.W1.6	SB4503	5.8×4.1×2.4 41.4		3
34-119	154-12	PL23-16	炉内滓(炉底塊)	④	G5.10.H1	SD4504	7.1×5.5×4.4 186.0		2
34-123	154-13	PL23-18	流出孔(溝)滓	④	G5.10.H1	SD4504	6.7×8.8×2.2 209.7		4 96-41
34-121	154-14	PL23-17	炉内滓(炉底塊)	④	G5.10.H1	SD4504	7.6×6.7×6.3 322.7		2
34-124	154-15	PL23-19	流出孔(溝)滓	④	G5.10.H1	SD4504	9.9×7.1×4.7 320.4		4
34-125	154-16	PL23-20	流出孔(溝)滓	④	G5.10.H1	SD4504	7.4×5.7×6.2 232.1		3
34-119	155-17	PL23-21	炉内滓	④	G5.10.H1	SD4504	9.5×7.4×5.7 516.2		8 96-40
34-122	155-18	PL23-22	椀形鍛冶滓	④	G5.10.H1	SD4504	6.9×5.0×3.2 95.9		5
34-126	155-19	PL23-23	鉄塊系遺物	④	G5.10.H1	SD4504	5.2×4.7×3.4 74.9		5
34-127	155-20	PL23-24	羽口	④	G5.10.H1	SD4504	7.1×5.0×7.1 179.2		4
34-129	155-21	PL23-25	炉壁	④	G5.10.H1	SD4504	6.9×5.1×3.1 59.0		3 96-43
34-128	155-22	PL23-26	羽口	④	G5.10.H1	SD4504	13.5×9.3×2.6 345.8		5 96-42
34-130	155-23	PL23-27	炉壁溶解物	④	G5.10.H1	SD4504	7.4×5.7×6.6 193.0		4
34-134	155-24	PL23-31	含鉄椀形鍛冶滓	K	O14.19	SK9259	7.9×7.6×4.4 143.3	H (○) 8	95-77
34-135	155-25	PL23-32	含鉄椀形鍛冶滓	K	O14.19	SK9259	5.5×5.1×4.8 121.8	H (○) 8	95-78
34-137	155-26	PL23-33	鉄塊系遺物	K	O14.19	SK9259	2.6×2.5×1.7 16.6	L (●) 7	95-80
34-138	155-27	PL23-34	鉄塊系遺物	K	O14.19	SK9259	2.6×1.4×1.0 5.5	L (●) 7	95-81
34-136	155-28	PL23-35	含鉄椀形鍛冶滓	K	O14.19	SK9259	6.4×4.2×2.6 69.3	H (○) 8	95-79
34-139	155-29	PL23-36	羽口	③	L18.23	SK3252	6.5×4.3×1.8 56.9		2 96-48
34-140	155-30	PL23-37	石製品	③	L18.23	SK3252	7.2×4.5×5.5 189.5		3
34-141	155-31	PL23-38	炉壁	③	L18.23	SK3252	5.7×4.9×2.5 29.0		1
34-143	155-32	PL23-40	鉄塊系遺物	③	L18.23	SK3252	3.0×2.3×1.4 10.5		5
34-142	155-33	PL23-39	含鉄椀形鍛冶滓	③	L18.23	SK3252	8.7×7.6×5.0 316.9		5
34-144	155-34	PL23-41	鉄塊系遺物	③	L18.23	SK3252	2.6×2.0×1.3 7.8		4
34-145		PL23-42	鍛造剥片	③	L18.23	SK3252			96-46
34-146		PL23-43	粒状滓	③	L18.23	SK3252			96-47

第5節 木製品

古代2に属する木製品は、更埴条里遺跡K地区の井戸跡SK9282(図版111)出土の曲物底板1点である(図版148、PL19)。円形曲物の底板で全面が黒く塗布されているが、漆であるかどうかは不明である。

いわゆるクレゾコの曲物で、側部に1カ所側板接合用の木釘が残存する。表面には刃物痕がみられる。径19.2cm、厚さ0.5cm、木取りは柾目、樹種はサワラである。

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群Ⅲ-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2 窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1（中世）

第1節 概 観

遺構の検出層位 本章に掲載する遺構は、古代2の遺構と同様にⅢ-2層上面で検出されたものを主とするが、本来は洪水砂の上部が土壌化したⅢ-1層（第1章第3節2）に対応する遺構群と考えられる。自然堤防Ⅰ群内に限られ、Ⅲ-1層が明確ではない後背湿地Ⅰ群内では確認できなかった。なお、自然堤防Ⅱ群にあたる窪河原遺跡ではⅢ-1層に対応すると考えられる砂礫層の上層で中世の遺構を検出した。

遺構の選別 自然堤防Ⅰ群内の中世の遺構は、①埋土がⅢ-1層単層の堆積あるいはⅢ-1層ブロックを含む堆積のもの、②出土土器から中世に比定できるもの、以上の2点を主に選別の基準とした。

Ⅲ-1層を埋土とする遺構は切り合いの判定が難しく、特に密集度が高い集落内では遺構の前後関係をおさえることができなかった。また、遺物出土の少ない遺構が大部分を占めるため、出土土器等によって遺構の変遷を追うことは困難である。よって本章では中世という広い範囲の中で集落を概観し、可能な限りその変遷を示していくこととする。

遺構検出地区 上記①、②に該当する遺構は更埴条里遺跡K地区から屋代遺跡群⑥区にかけて検出された。なお、窪河原遺跡の地区分けは、調査された年度に基づいてそれぞれ、H2区（平成2年度）、H5区（平成5年度）、H6区（平成6年度）としている。

無遺構地区 更埴条里遺跡A地区～J地区においてはⅢ-1層が明確でなく、上記①、②に該当する遺構は検出されなかった（第1章第3節2参照）。

検出遺構数 竪穴建物跡14軒、掘立柱建物跡56棟、井戸跡91基、墓坑67基、集礫を有する火葬墓4基、火葬施設7基、その他の土坑537基、ピット多数、性格不明遺構4基、溝跡197条である。

第2節 中世の集落跡の概要

1 概 観（図版156～168）

後背湿地Ⅰ群集落の廃絶 洪水直後の後背湿地Ⅰ群内に形成された集落は古代10期をもって廃絶し、中世においては人が居住した痕跡がみられない。集落廃絶後に整備された水路網も埋没しており、中世の段階では機能していない。土壌化の進んだⅢ-1層が不明確である点が土地利用に関わるものと思われるが、遺構として確認することはできなかった。

中世集落の展開 中世に属する遺構は更埴条里遺跡K地区を南限とし、Ⅲ-1層が確認された自然堤防Ⅰ群（屋代遺跡群）および自然堤防Ⅱ群（窪河原遺跡）に展開する。この中で更埴条里遺跡K地区（図版156）、屋代遺跡群①区（図版157）、④～⑤区（図版163～164）の遺構密集度が高く、集落域となっていたことがわかる。竪穴建物跡も若干みられるが、主体は柱穴跡と考えられる無数のピット群であり、掘立柱建物が多数建設された様子が窺える。しかし、この内で建物跡として柱の配列が捉えられたのはごく一部にとどまり、全貌を把握するには至らなかった。建物跡やピットの切り合い、軒数からみても頻繁に立て替えが行

われたものと思われる。

墓域 上記集落内では、密集する遺構に混じって墓や火葬施設がみられるが、特に屋代遺跡群①f区(図版158)、窪河原遺跡H2区(図版168)、H5区(図版167)では墓坑あるいは火葬施設が集中している。いずれも集落からやや距離をおいた場所であり、中世における墓域の存在を確認することができる。

耕作域 屋代遺跡群②区、③区(図版158~162)では、古代15期までの集落が存在した範囲を含めて人が居住した形跡はない。この範囲の遺構は溝および土坑が主である。溝は水路の他に断片的ではあるが畠の畝間と考えられるものも認められる(SD2403~2409、図版158、SD3218・SD3229~3232、図版162)。また、窪河原遺跡H6区(図版166)に水田および畠、H2区北側に畠(図版168)が検出された。

墓域と耕作域については近接する集落の中で記述を行う

2 更埴条里遺跡K地区集落跡 (図版156、172~184)

立地 自然堤防I群から後背湿地I群に転換する地点。洪水直後の古代8期後半から15期を経て中世まで切れることなく集落が存続する唯一の地区である。

範囲 地区北側は近世以降の五十里川によって削平されているが、屋代遺跡群①区で検出されたSD23(旧五十里川)が境であったと思われる。南はIII-2層上面の酸化鉄分の集積によって確認された、水田状の区画が広がる。東西の広がり是不明。

遺構 竪穴建物跡(竪穴状遺構)3軒 掘立柱建物跡19棟 井戸跡1基 墓坑11基 その他の土坑44基 柱穴跡(ピット)多数 溝跡10条

集落の概要 地区中央部に並行する3条の南北溝と、中央のSD932に直行する東西溝SD933によってT字状の区画が成立している。SD933南側では遺構の密集度が高く、特に掘立柱建物の立て替えが頻繁に行われたことが窺える。しかし、確認できた建物跡からは、この区画に対応する整然とした配置は確認できない。また、区画溝に切られる竪穴状遺構(SB9027)と墓坑(SK9235)や、区画溝を切る建物跡(SB9022)やピット、軸方向を全く異にする掘立柱建物跡(ST940・ST941)も認められ、集落が何段階かに変遷したことがわかる。しかし、井戸は大規模なSK9205(図版264)1基が確認できただけで、長期に渡って使用されたものと考えられる。

掘立柱建物跡はST910(図版247)が総柱である以外は側柱のものが中心で、特に規模の大きなものは認められない。後述の屋代遺跡群①区とは異なり、屋敷地からはやや離れていた可能性がある。

また、集落内には墓が点在する。この内SK9134(図版175)、SK9153(図版172)からは火葬骨が出土した。SK9235(図版264)とSK9262(図版265)は木棺の存在が確認でき、SK9263・SK9269(図版265)もその可能性をもつ。なお、SK9390(図版265)、SK9933(図版178)、SK9487(図版265)は検出段階で明確に確認できず、骨の出土によって墓坑の存在が確認できた。埋土がIII-2層に近似していたものと考えられ、時期的には古代2に遡る可能性もある。

集落の時期 地区南側で検出されたSB9022(図版243)から出土した青磁(図版272)は13世紀に比定される。南北区画溝SD932はこの建物跡に切られるため、区画が行われたのはこれ以前と考えられる。井戸SK9205の青磁(図版274)が12世紀中頃から13世紀にあてられ、14世紀のすり鉢も出土している。井戸の遺物から考えて集落の成立時期はおおよそ12世紀以降と捉えることが可能である。

耕作域 地区南端部では水田跡と思われる区画がみられる。これはIII-2層上面に酸化鉄分が集積した状態で検出されたものである。古代2の段階でこの範囲は水路となっており(第2章第2節4)、これが廃絶した後に水田が営まれたものと思われる。しかし、南のJ地区では確認できず、広がり状況は不明である。中世の集落に伴うものである確証もないため、ここでは後背湿地に水田が営まれた可能性だけを指摘

するにとどめる。

特記遺構 木棺墓（SK9235、SK9262、SK9269）

特記遺物 青磁（SB9022）

3 屋代遺跡群①区集落跡（図版157・158、185～198）

立地 自然堤防I群内。洪水後は古代12期以降集落が成立し、15期にかけて存続している。

範囲 北は無遺構地帯、南はSD23（旧五十里川）が更埴条里遺跡K地区集落との境となる。西は遺構がまばらとなり、畠や墓が検出されているためほぼここが境となりそうである。東への広がり不明。

遺構 竪穴建物跡6軒 掘立柱建物跡25棟 井戸跡25基 墓坑11基 その他の土坑218基 ピット（柱穴）多数 溝跡28条

集落の概要 地区の南側および東側の広範囲が後世の削平を受けているが、極めて高密度で遺構が集中している。SB9・SB16（図版243）・SB17・SB31（図版244）・SB32（図版245）など支柱穴を有する竪穴建物跡もみられるが、検出されたピットの数からもわかるように、建物の主体となるのは掘立柱建物である。この内、四面庇をもつ総柱建物のST18（図版253）をはじめとして、ST16（図版252）、ST20（図版255）、ST36（図版258）など、規模の大きな建物がみられる。また、土間状の浅い竪穴が付属するST17（図版254）、ST35（図版258）、その他規模の小さい側柱建物など、作業場あるいは倉庫的な付属建物もあり、屋敷地として捉えることができる。

竪穴建物はSB17がST23に切られる他は、掘立柱建物との前後関係は不明である。また、SB20（図版244）、SK60（図版188）、SK158（図版191）など、支柱穴のない竪穴状遺構は、掘立柱建物に付属する可能性もあるが、柱穴を確認することができなかった。

集落内には井戸が点在する。また、南端部の河道（SD23～26）内で多数の井戸が検出されたが、これらは溝の埋土を掘り込んでいる。おそらく河道が南に移動した後に掘削されたものだろう。

集落内では、建物跡に混じり多数の墓が確認された。この内SK11（図版265）、SK27（図版266）、SK47（図版266）、SK59（図版187）からは焼骨が出土したが、それ以外は歯が主な出土物である。このことから、火葬墓と遺体を埋納する墓が混在していたものと考えられる。これらの墓は比較的遺構密集度の低い場所に存在するが、集落との明確な境は認められず、屋敷地内の墓と捉えることもできる。

集落の時期 集落北東部で検出されたL字状の区画溝SD39（図版193）から出土した青磁（図版273）は12世紀中頃から13世紀初頭に比定される。掘立柱建物跡ST21がこの溝と切り合うが、同様の埋土をもち、SD39の調査が先行した事情もあり、その前後関係は不明である。地区南端のSD23の9～10層（図版17）出土の青磁（図版272）もSD39と同じ時期に属し、最上層の1～2層出土の焼物も13世紀のものを主体とする（図版273）。SD23が埋没した後に形成されたと考えられるSD24、SD26（図版185）出土の焼物は、13世紀後半から14世紀前半に属する（図版273）。集落の時期もこの間で捉えることができるだろう。

墓域 集落北側にはやや距離をおいて火葬墓が1基（SK1、図版265）存在するが、さらにその北側に多数の土坑が集中する（図版198）。この内SK242、SK311～313からは焼骨片が出土しており、形状が類似することから、他の土坑も墓である可能性が高い。このように、集落から離れたこの一帯は墓域となっていたものと考えられる。

上記以外にかなり①区集落とは離れるが、③a～③b区内で火葬墓（SK3002・SK3003・SK3021・SK3289・SK3290、図版161）が検出されている。

耕作域 集落北西部に畠の畝間と考えられる溝の配列（SD4～10・13、図版157・158）があり、さらに西へ広がっていた可能性がある。位置的にみても①区集落に付属する耕作域と考えられる。

また、「1 概観」で触れたように②区～③区一帯も耕作域であったと考えられるが、北側に④区集落も存在することから、その所属は明確にできない。

特記遺構 4面庇のある総柱建物跡 (ST18)

特記遺物 鉄鐸 (SK551)

4 屋代遺跡群④～⑥区集落跡 (図版163～165、199～201、203～235)

立地 自然堤防I群内の低地から最高所におよぶ一帯。洪水後は古代13～14期にかけて集落が成立している。

範囲 南は③b区耕作域、自然堤防北端の崖を北の境とする。東西の広がり是不明。

遺構 竪穴建物跡(竪穴状遺構)4軒 掘立柱建物跡11棟 井戸跡79基 墓坑16基 火葬施設3基 方形土坑72基 廃棄土坑1基 その他の土坑226基 柱穴跡(ピット)多数 焼土址2基 性格不明遺構4基 溝跡58条

集落の概要 ④区中央部で断片的に検出された南北溝SD4513(図版204)・SD4009(図版208)・SD4208(図版213)は一体のもので、古代2の段階で成立した基幹水路SD4504(第2章第3節8)が改修されたものと考えられる。⑤区のSD5005(図版232、235)はこの延長と思われ、自然堤防北縁部に沿って東へ向かう。④b区中央ではこの分流と思われる東西溝SD4007・SD4008(図版205)が検出された。この水路に囲まれた④b区北半分から④c区間の遺構密集度が極めて高いことがわかる。自然堤防I群内でも最高所にあたり、この範囲を含めて東側一帯が中世集落の中心となっていたものと思われる。また、⑤b区東側で検出されたL字状の溝SD5001(図版228)は、水路区画内も一部をさらに区画したものと思われ、この内側にも集落が展開していた可能性がある。⑤b区は広範囲に渡って後世の削平を受けており、遺構の状況がつかめない。

建物の主体は、多数のピットの存在が示すように掘立柱建物である。繰り返し立て替えが行われたものと考えられるが、建物の全貌をつかむことはできない。この内水路区画内で確認した11棟は、主軸が水路の方向とほぼ合っている。なお、ST4004(図版260)は土間状の竪穴(SK4051)を伴い、①区集落のA群にみられたものと同じ構造である。SK4051中央部には炉が存在し、椀型鍛冶滓が出土している。この南西約4mの位置に、多量の鍛冶関連遺物が出土した、廃棄土坑SK4052(図版267、282)があり、ST4004は鍛冶関連の施設であったものと思われる。

集落内およびその周辺には墓が点在する。この内SK7003(図版269)、SF4501(図版267)、SK4113(図版207)は煙道状の構造を有する火葬施設と考えられる。この他SK4041(図版208)、SK5024(図版268)からは火葬骨が出土した。また、SK5005(図版268)、SK5002(図版235)、SK5071(図版233)、SK6159(図版268)、SK6233(図版268)等は土坑墓である。これらは水路区画内外に点在し、集中する傾向はみられない。しかし、木口痕の存在から木棺墓の可能性をもつSK4180(図版267)、SK4182(図版267)、SK4188(図版216)は近接している。

これらの木棺墓群周辺には、方形あるいは長方形の土坑(方形土坑)が多数検出されている。④区特有の遺構であるが、用途が明確にはわからない。規模が木棺墓に類似するものあり、墓坑の可能性もあるが、長さが4mを越すものも多く、その用途は判断し兼ねる。特に水路区画内に集中し、掘立柱建物跡やピット群と混在する。

井戸跡は④区～⑤区全域に点在するが、特に水路西側の⑤a区に集中する。ほとんどが素堀で、頻りに掘り込まれていた様子が窺える。この多数の井戸が集落とどのように関わっていたかは不明である。水路脇に集中している点から、水路が廃絶した後に水を求めて掘られたものとも考えられる。

集落の時期 南北方向の水路SD4009出土の青磁（図版273）は13世紀末～14世紀に比定される。また、この水路の延長であるSD5005出土の焼物もほぼ同時期に属する（図版274）。区画溝SD5001出土の焼物は13世紀から15世紀前半と幅をもつが（図版273）、上限はほぼ同じであり、掘削時期に開きはないものと思われる。このことから集落の時期もこの範囲で捉えることができるだろう。出土遺物で比較する限りでは、更埴条里遺跡K地区集落および①区集落よりやや集落成立時期が遅れる感がある。

なお、井戸跡出土の焼物は15世紀前後のものが多く（SK4201・SK4203・SK4585・SK5016・SK6118・SK6148・SK6280、図版275・276）、やはり水路が廃絶した後の掘削が主である可能性を示す。ただ、SK4600（図版207）出土の山茶碗（図版275）は12世紀の年代が与えられる。その他、SK4513（図版268）、SK4608（図版212）など規模の大きな掘り込みがみられる。古代2の旧水路SD4504に沿って配列しており、溝が埋没した後、集落成立に先行して水を求めた掘削が行われたものと思われる。

耕作域 集落周辺では畠作などに関わる遺構は確認できない。自然堤防北側の傾斜部にあたる⑥区では、北へ伸びる溝（SD8001・SD8010・SD8013、図版165、170）が検出された。堆積土の状況から水流があったことがわかり、水路として機能していたものと思われる。畝や畦などは確認できないが、この一帯が耕作域であった可能性もある。

特記遺構 鍛冶関連施設および廃棄土坑（ST4004・SK4051・SK4052） 木棺墓（SK4180・SK4182）

特記遺物 鍛冶関連遺物（羽口、椀形鍛冶滓、炉壁等） 青磁（金王満堂）

5 窪河原遺跡の集落跡（166～168、236～240）

立地 自然堤防II群内。H6区で確認された12世紀後半の珠洲甕（図版277）の出土層位は、自然堤防I群の最高所のIII層上面と比較し約2mの比高差がある。集落跡はその上層で検出された。

範囲 集落跡と考えられるH2区（図版168）は、南側に水路を境とし、北は畠が広がる。西は無遺構地帯となるため中心は東地区外に広がっていたものと思われる。

遺構 竪穴建物跡1軒 掘立柱建物跡1棟 柱穴跡（ピット）20基 墓坑15基 集礫を有する火葬墓4基 火葬施設4基 その他の土坑33基 焼土址14基 溝跡13条

集落の概要 建物跡は、炉を有する竪穴建物跡SB1（図版245）と掘立柱建物跡ST1のみである。他に柱穴跡と思われるピットも検出されたが、その数は少ない。その他は土坑、焼土址が点在する。

ST1南側の竪穴状の土坑SK16（図版269）からは焼物をはじめ、骨製品など多数の遺物が出土した。また、そのすぐ脇で検出されたSK17（図版269）からはウマの頭骨が出土している。

なお、北西部の張り出した調査区内でピット、墓（SK44）、焼土址が検出されているが、その広がり不明である。

墓域 窪河原遺跡内では多数の墓が認められる。SK14（図版269）、SK19（図版269）は土葬墓、SK20・SK21・SK22（図版269）・SK25は火葬墓であり、両者が混在して墓域となっていたいる様子がわかる。なお、SK40（図版270）は火葬骨上部および周辺を礫で覆ったものがある。

H5区では遺構のまとまりが2カ所みられる。その内西側（図版236）は土坑の集中であるが、東側（図版237）は墓域と考えられる。火葬施設（SK103・SK104・SK105、図版270）に囲まれる形で礫を積んだ火葬墓（SM102・SM103・SM104、図版271）が存在する。なお、SK101・SK102・SK106は火葬墓、SM101（図版270）は土坑墓で、H2区集落にみられた3種の埋葬法がこの墓域でも確認できる。

土坑の集中箇所が近接することから、この西側に別な集落が展開していた可能性がある。

集落の時期 H2区集落のSB1で出土した珠洲すり鉢（図版272）は13世紀に比定される。また、SK16で出土した焼物は13世紀から14世紀前半の間で捉えられる（図版276）ことから、集落の時期もこの範囲で捉え

られると思われる。

なお、H5区のSK109・SK113・SK116から出土した焼物(図版276)は13世紀～14世紀前半の間に属し、SM103出土の瓶子(図版276)は13世紀末～14世紀後半のものである。このことから、H5区集落?もH2区集落とほぼ時期を同じにするものと考えられる。

耕作域 H2区集落北側には畠跡が確認された。畝が集中する範囲の西側は無遺構地帯であるが、SD1、SD2が畝間の溝に類似することから、この範囲にも畠が広がっていた可能性がある。なお、畠を切る状態で墓坑SK30(図版270)が検出されている。

H6区は水路(SD1001)を伴う東西畦畔を境とし、南に水田、北に畠が検出された。さらに東西へ広がっていたと思われるが、H5区で畠は確認できなかった。また、水田は屋代遺跡群⑥区一窪河原遺跡間の立会調査区(図版2)では確認されていない。

なお、地区北側で畠を切る状態で火葬施設SM1001(図版271)が検出された。

第3節 中世の集落跡および周辺検出の遺構と遺物出土状況

1 掲載方法

報告の手順 記載は古代2同様にSB→ST→SK→SF→SX→SDの順で行う。検出数の多い遺構は、分類に応じて抽出して記載する。

遺構の時期は、各遺構出土の土器様相で示し(第5章第1節)、遺構の切り合い関係等を加味した。

図版 検出された全遺構の平面形は1/500地区別全体図に掲載し、その中で集落を中心に遺構密度が高い範囲は1/120割付図を作成した。

個別平面図の掲載は、SBについては支柱穴のある建物跡を主とし、STは全遺構、SKは墓坑および火葬施設を優先して掲載した。これ以外の遺構は必要に応じ割付図に対応する断面図を掲載した。

断面図を掲載できない遺構については、割付図中に遺構底部の標高の読み値で表示した。なお、掘立柱建物の柱穴跡と考えられるピットに対しては遺構番号は付さず、掘り込みが深かったものに対し標高の読み値を付した。また、断面観察によって柱の存在(柱痕)が確認できたものはスクリーントーンで示した(凡例参照)。

図の掲載順は遺構が検出された更埴条里遺跡K地区から北上する形とした

表化 特にSK、SDのように十分図版に掲載できないものを含め、各遺構についてはその形状、堆積状況、遺物出土状況などに関するデータを盛り込んだ一覧表を作成した。

2 竪穴建物跡(SB)

(1) 概要

調査段階でSB番号が付された、中世に属する遺構は11軒ある。その内、床面に支柱穴が確認されたものが7軒、竪穴外に検出されたものが1軒ある。また、5軒の床面に炉の痕跡が確認されたが、カマドの存在を明確に示すものはない。

中世集落においては建物の主体が掘立柱建物となり、炉のある竪穴建物を即住居と判断することはできない。しかし遺物の出土が少ないため、その用途については明らかにすることができなかった。また、掘立柱建物に付属する竪穴状遺構が存在し、柱穴の確認できなかったものがこれに該当する可能性もある。この点もふまえて集落別に記述を行う。なお、一覧表(表26)の形式は古代2に準じる。

(2) 各集落のSBの状況

更埴条里遺跡K地区集落 SB9022、SB9027、SB9031の3軒が検出された。

SB9022（図版243）は竪穴外に支柱穴を5本もつ竪穴建物である。南壁に煙道状の突き出しがあり、南西コーナーに棚状施設があるが、カマドの存在は確認できない。床付近から銅銭（図版281）が出土している。また、青磁（図版272）が出土した。時期は13世紀である。

SB9027（図版177）は竪穴状の浅い掘り込みである。支柱穴は確認できず、建物跡である確証はない。遺物の出土もみられない。SB9022に切られる南北区画溝SD932に切られるため、13世紀以前と思われる。

SB9031（図版174）も非常に浅い掘り込みで、北壁の立ち上がりは確認できなかった。ピットが集中する範囲にあるため、掘立柱建物に付属する可能性があるが、確認できなかった。

屋代遺跡群①区集落 SB9、SB16、SB17、SB20、SB31、SB32の6軒が検出された。

SB9（図版243）は床面に支柱穴6本が確認され、建物跡と判断できる。しかし、炉などの施設は認められず住居であった可能性は少ない。14世紀末～15世紀末にあたる古瀬戸（図版272）が出土しており、集落の中でもかなり新しい遺構といえる。

SB16（図版243）も4本の支柱穴があり、建物跡と考えられる。北壁に煙道状の張り出しがあり、焼土ブロックも検出されたが、カマドの存在は明確でない。出土した遺物はやや古く（図版272）、古代2の時期に近い。

SB17（図版244）は柱痕をもつ支柱穴が確認され、中央に炉が存在する。住居跡の可能性が高いが、遺物の出土がほとんどなく、時期の特定はできない。

SB20（図版244）は東側に張り出し部分をもつやや不整形の竪穴で、支柱穴が確認できない。周囲に多数のピットが検出されているが、本址との関連は不明である。ただ、掘立柱建物に付属するSK36（図版254）と比較すると、掘り込みがかなり深い。張り出し部分は入口と考えることもできる。

SB31（図版244）、SB32（図版245）は近接する竪穴建物で、規模もよく似ている。また、床面南東部に炉が存在する点でも共通し、同時期に存在した住居跡の可能性が高い。なお、SB32は柱を付け替えた形跡が認められる。

屋代遺跡群④～⑥区集落 SB4001、SB4002、SB5001、SB5002の4軒が検出された。

SB4001（図版213）は床状の硬化面が確認されたのみで、規模や形状はわからない。また、SB4002（図版210）は柱穴が確認できず、建物跡であるかは明確でない。

SB5001（図版245）は円形に近い、浅い掘り込みである。床面及び周囲に柱穴は検出されなかったが、床面北西部に炉と思われる火床が確認された。

SB5002（図版233）はSB5001のすぐ東側に位置する。大半が地区外であるため全容は不明だが、柱穴が確認された。

窪河原遺跡H2区集落 SB1（図版245）1軒が検出された。柱穴は床面、竪穴周囲ともに確認できなかったが、床面に炉が存在し、住居跡である可能性が高い。出土遺物は13世紀である。

3 掘立柱建物跡（ST）

(1) 概要

概観 中世の集落で確認された掘立柱建物跡は、更埴条里遺跡K地区で19棟、屋代遺跡群①区で25棟、④区で11棟、窪河原遺跡H2区で1棟である。しかし、これ以外に配列が認識できないピットが無数に検出されており、建物数は確認できた数をはるかに上回るはずである。このことは、集落内で建物の立て替えが繰り返し行われていたことを物語る。よって図版に掲載できたものだけでは、更埴条里遺跡・屋代遺

跡群の中世の掘立柱建物の特徴を知るには少なすぎるが、把握できた範囲で記載を行うこととする。

掲載方法 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の掘立柱建物跡は全て個別平面図を作成した。窪河原遺跡のST1はピットに関する調査データが不足しているため、1/120図版割付図に掲載にとどめた。

(2) 掘立柱建物の構築・使用に関して

①長軸方位 方位は桁行（長軸）方向で示した（図35）。

集落ごとの特徴 更埴条里遺跡K地区集落は、5°前後西に傾く1群が目立ち、15°前後西に傾く1群も見受けられる。前者は、集落内の区画溝の方向にほぼ対応するものである。この範囲に入らないものも多いが、それらの軸方向はばらつきがみられる。

屋代遺跡群①区集落では、北を中心として東西に5°前後傾く建物、およびそれとほぼ直交する軸をもつ建物の1群、西へ15°前後傾く建物、およびそれとほぼ直交する軸をもつ1群に分けられる。

屋代遺跡群④～⑥区集落は、上記の集落と比較して主軸がやや東に寄る傾向がみられる。これはおそらく集落を区画した水路に軸を合わせた結果と考えられる。

②建物の平面プラン

柱間数と面積 柱穴跡が主たる遺構となる掘立柱建物は、その用途を特定することが難しい。よって柱の配置や規模等の分類によって用途を類推する資料を提示することとする。

柱の配置は、I. 側柱とII. 総柱（一部総柱を含む）に分かれる。柱間は古代の建物と比べ、整然としないものが多い。よって柱間数は最大数を記した。ここに建物の面積を加味し、以下のように分類する。

- I群・・・小規模な建物。1×1間、2×2間の方形状のものに2×1間を含める。
- II群・・・長方形を呈する中規模のもの。柱間は3および4×1間、3および4×2間を主とする。
- III群・・・長方形を呈し、規模が突出して大きいもの。4×1間以上のものを主とする。
- IV群・・・III群以外の規模の大きなもの。庇を有する建物を含む。

掘立柱建物I群 側柱を主体とするが、更埴条里遺跡K地区ST933（図版248）のように間仕切り状になっている例もある。建物の用途としては倉庫の可能性があげられる。ただ、屋代遺跡群④区ST4004（図版260）は、竪穴状遺構（SK4051）を伴う。第2節で触れたように、SK4051中央部は鍛冶炉である可能性が高く、鍛冶作業用の建物と考えられる。

掘立柱建物II群 規模的にはI群をひと周り広げた程度のものである。更埴条里遺跡ST902（図版246）、ST937（図版250）、屋代遺跡群④区ST4002（図版259）、ST4010（図版262）、ST4011（図版263）のように、1部総柱あるいは間仕切り状になるものが見立つ。これらは居住用の建物だった可能性をもつが、ST4011が検出された範囲内で貼床状に堅固な部分と、火床および炭化物集中が確認された。他の建物は側柱であるが、屋代遺跡群①区ST35（図版258）のように竪穴状の遺構（SK177）を伴うも例があり、作業場的な用

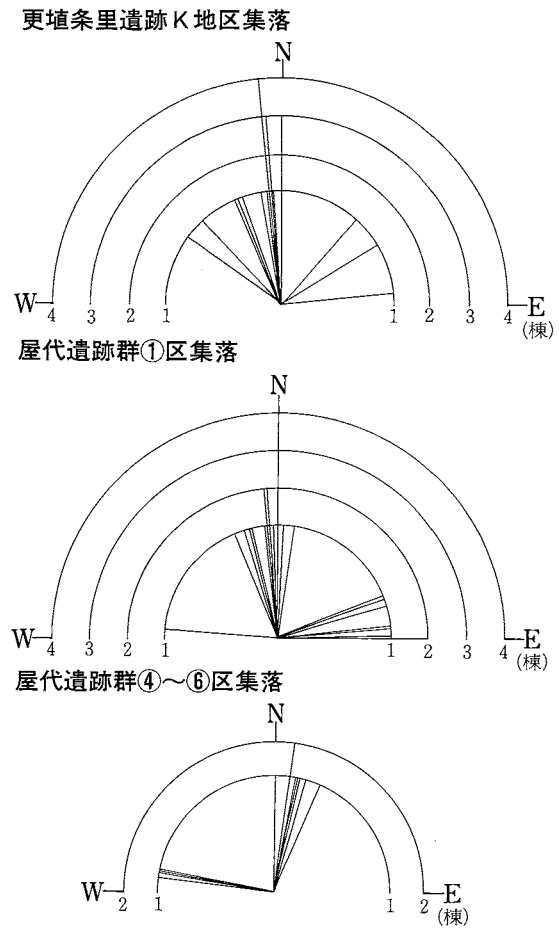


図35 掘立柱建物の主軸方位（中世）

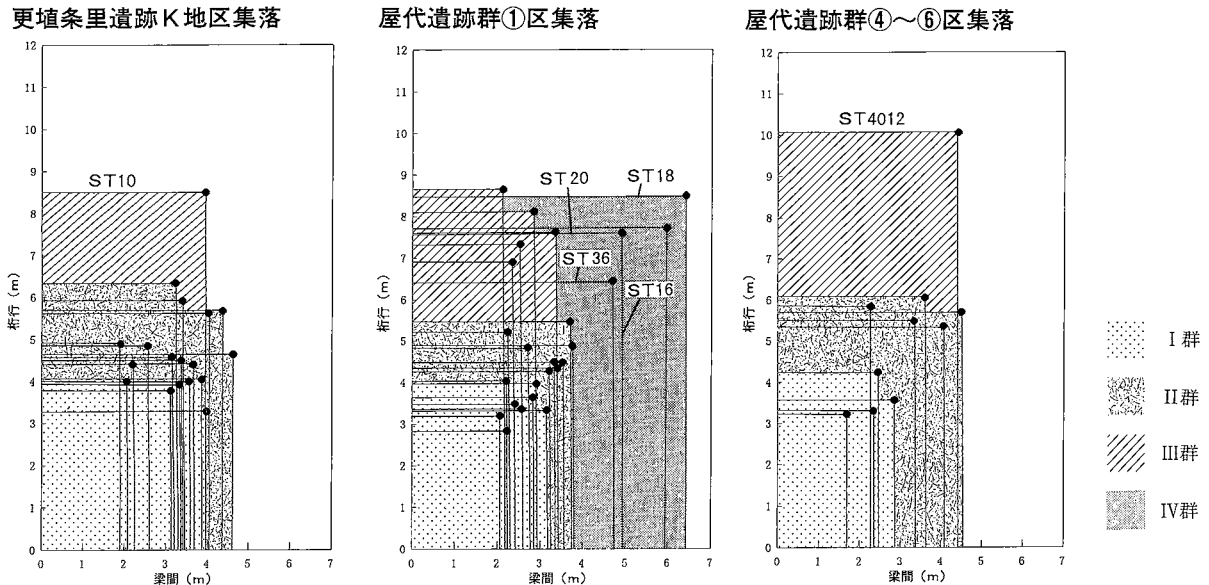


図36 掘立柱建物の面積（中世）

途を持つ建物もあったようだ。

掘立柱建物III群 桁行が7 mを越えるが、梁間が4 m前後の長方形を呈するものである。更埴条里遺跡K地区ST910（図版247）が唯一総柱で、他は側柱である。屋代遺跡群①区ST17（図版254）は浅い竪穴状遺構（SK36）を伴う。SK36は浅い掘り込みだが、底部が硬く叩き締められており、土間状となっている。I群、II群にみられたものと同様に作業場であった可能性が高い。ST17はST16のすぐ東脇に位置し（図版192）、同じくIII群に属するST31（図版257）はST20の南側に近接しており（図版193）、後述のIV群の建物に付設された状況がみられる。

掘立柱建物跡IV群 ここに含まれるものは、住居の可能性が高く、規模からみて集落の中心的な建物であった可能性が高い。

屋代遺跡群①区ST16（図版252）は側柱だが、北、西2面の庇をもつ。主柱穴には全て柱痕が残っている。ST18（図版253）は4面庇を持つ。北側1部を除いて総柱となり、主柱穴には礎板として石が入れられていた。このすぐ東脇で竪穴状遺構SK60（図版188）が検出された。状況からみて掘立柱建物に付属していた可能性があるが、柱は確認できなかった。ST20（図版255）は北半分に間仕切り状の柱が存在する。また、南側には床を支えたと思われる柱跡が認められる。ST36（図版258）はやや規模が小さめだが、総柱の建物である。

屋代遺跡群④区ST4008（図版261）は全体が検出できなかったため、図36中にはデータを載せなかった。しかし規模的にIV群に属するものと考えられる。

③柱の設置方法 中世に属する掘立柱建物跡の柱穴には直径の小さいものが目立つ。例えば屋代遺跡群①区ST20や④区ST4002の柱穴には直径が0.2mに満たないものもみられる。柱痕が残るものについては、その径を表27に示したが、ほとんどが0.2m以下であり、古代の掘立柱建物と比べかなり細い柱を使用していたことがわかる。礎板が検出される場合や柱痕が残る場合は断面から掘方の存在が確認できるが、柱痕が残らず直径が0.2mに満たない柱穴は掘方を伴うとは考えにくい。このような場合は、柱の打ち込みによる設置方法を考慮する必要があると思われる。これを建物構築技術の進歩を示す資料と捉えることも可能である。

④立て替えの状況 屋代遺跡群④区のST4005・ST4006（図版260）はI群に属するが、ほぼ同一の場所で検出された（図版208）。前後関係の特定はできないが、建物の位置と規模を踏襲して建て替えが行われた

状況を示す。屋代遺跡群①区集落東一帯で検出された多数のピットも、このような立て替えが繰り返行われたことを示すものだろう。

これに対し、屋代遺跡群①区に存在するIV群の建物周辺ではピットの数がまばらとなる(図版157)。これはその性格上比較的長期に渡って建物が維持されたことを示すものと思われる。

4 墓坑・井戸・その他の土坑 (SK・SFの1部・SM)

(1) 概要

対象となる遺構 SKで表示されたものは第2章掲載の古代2の遺構と同じである。他に坑内に火床面や焼土が検出されたことによりSF表示とされたものと、人骨が検出されたためSM表示されたものを含む。

概要 中世に属する遺構でSK表示のものは極めて多い。この内当初SK表示されていたが、断面観察から掘立柱建物跡の柱穴(ピット)と判断したものは除外した。用途不明のものが大半を占めるが、井戸および火葬施設を含む墓坑が多いことが特筆される。

掲載の方法 墓坑および火葬施設を中心とし、他は遺物出土状況に応じて個別平面図を作成した。規模に大小があるため、縮尺は1/80~1/20の幅をもたせている。個別図に掲載できないものは、1/500遺構分布図および1/120遺構割付図に掲載し、井戸を中心として1/80断面図を付した。

(2) 分類

大分類は第3章第3節4に準じ、I群内については以下のように分類した。

- 1類・・・井戸跡 円形(1部方形)を呈し、掘り込みが深く(XII層以下に到達する例もある)水が湧いた可能性をもつもの。井戸枠の存在が確認できるもの。
 - 2類・・・廃棄土坑 多量の土器片、礫、鍛冶関連遺物等が廃棄されたと考えられる状態で出土したもの。井戸跡も含む。
 - 3類・・・墓坑 円形、楕円形、長方形を呈し、人骨が埋葬された状態で出土したもの。窪河原遺跡で確認された礫を伴う墓(SM)を含む。
 - 4類・・・火葬施設 煙道状の施設を伴い、特有の形状をもつ土坑。底部および壁が被熱により酸化し、焼骨の出土がみられる。
 - 5類・・・用途不明の掘削坑。
- その他

(3) I群1類 井戸跡

概要 井戸跡は自然堤防I群内で多量に検出された。集落内の建物跡と混在するものもあるが、やや距離をおいた場所に多数掘削される例がみられる。屋代遺跡群④~⑤区は自然堤防I群内でも特に高所にあたるため、湧水点が低く、掘り込みが5mを越えるものが多数認められる。これらは検出面における完掘を断念し、記録をとどめた後、底部が確認されたXII層の縄文面において再調査を行った。底部に至るまでの断面が把握できなかったものは、その間を波線でつなぎ、断面図を作成した。また、屋代遺跡群①区南端のSD23(旧五十里川)河道内の井戸群は検出面においての確認が困難で、底部近くでの調査にとどまった。

構築法による分類 古代2の井戸同様にA.井戸上半部に大きな掘方を有するものと、B.大きな掘方を有しないものに分けられる。Aの例としては、更埴条里遺跡K地区SK9205(図版264)が特に大規模なものである。埋土下層から多数の板材が出土しており、井戸枠が設置されていたと考えられる。また、屋代

遺跡群①区SK65（PL27）は底部のみの検出であるが、Aに属すると思われ、井戸枠も確認された。この他、SK16（図版190、195）、SK62（図版188・189）、SK258（図版191、196）などが該当するが、これらは素堀である。

屋代遺跡群④区ではSK4513（図版268）がこれに該当する。非常に規模の大きなもので、井戸枠と考えられる角材（図版284）が出土した。なお、SK4600（図版207、209）は底部が確認できなかったが、これに属すると思われる。

この他の井戸はほぼBに属する。この内の多くが井戸上部から底部にかけてほぼ垂直に掘られている。これらは共通して掘り込みが深く、中には屋代遺跡群⑤a区SK6232（図版226、231）のように検出面からの深さが5mを越えるものがある。また、SK6057（図版229、231）は直径が50cm前後に対し、深さが検出面から3mを越える。このような井戸は古代においてはみられず、中世以降の井戸掘削技術を示すものと思われる。

Bに属する井戸は素堀を主とする。ただ、屋代遺跡群④区SK4201（図版216、218）からは板材が出土しており、井戸枠が存在した可能性をもつ。

井戸の廃棄 井戸内の堆積は埋め戻された状況を示すものがほとんどである。ただ屋代遺跡群⑤区では、砂質土の単層堆積のものがある（例 SK6119・SK6120、図版221・222）の例がある。これらは、断面の形状は他の井戸に類似するが、底部が平らな点と掘り込みが比較的浅い点で共通している。

遺物出土状況 井戸内の出土遺物の内最も多いのは曲物である（図版283～286）。これらは底部で出土するケースが多く、開削あるいは廃絶に伴っての儀礼として入れられた可能性がある。他に、板材、箸、草履など多様な木製品が出土した。また、骨、鉄製品、羽口、鍛冶滓などの鍛冶関連遺物が出土する場合もあり、廃絶後は多様なものが廃棄された状況が窺える。

（4）Ⅰ群2類 廃棄土坑

上記の通り、井戸も廃絶後は廃棄土坑的な様相がみられる。この他に更埴条里遺跡K地区SK9231（図版264）は、井戸SK9205の埋土を掘り込み、多量の礫が入れられている。土器等の出土はみられず、礫のみの廃棄であるが、その意図は不明である。

屋代遺跡群④区SK4052（図版267）からは多量の鍛冶関連遺物（図版282）が出土し、鍛冶に関わる廃棄土坑と判断できる。この土坑は鍛冶関連の建物跡と考えられるST4004（図版260）に近接する。

窪河原遺跡H2区SK16（図版269）は楕円形を呈する竪穴状の土坑で、中央部にピット状の掘り込みを有する。坑内からは、焼物（図版276）、骨製品（図版278）、鉄製品（図版280）、骨（台帳番号3049・3050）など多様な遺物が出土した。集落の西際に存在することから廃棄場となっていたものと思われる。

（5）Ⅰ群3類 墓坑

墓坑は非常に多数検出されているが、その形状と人骨の出土状況によって以下のように分類できる。

A・・・円形、楕円形の小規模な掘り込みで、火葬骨が出土したもの。

B・・・集礫がみられ、その下から火葬骨が出土したもの。火葬骨を収納する掘り込みがあるものとなないもの2種類が存在する。

C・・・長方形の掘り込みで、火葬を行っていない人骨が出土したもの。

D・・・Cと同様な掘り込みに、木棺を埋め込んだ痕跡があり、その内部で人骨が出土したもの。

A、Bは火葬墓、Cは土坑墓、Dは木棺墓という範疇で捉えられる。以下この順で記載を行う。

A 火葬墓1 土坑底部に火葬骨を集中して埋葬したものが主で、更埴条里遺跡K地区SK9153（図版172、

PL24)、屋代遺跡群①区SK11 (図版265、PL27)、窪河原遺跡H2区SK22・SK23 (図版269)、H5区SK102 (図版270)、SK110 (図版270) などがあげられる。

この他、屋代遺跡群①区SK27 (図版266、PL27)、SK252 (図版266、PL28)、SK242・SK311・SK312・SK313 (図版198、PL28) などは、埋土中で焼骨片が検出され、火葬墓と判断した。この内SK252は底部が被熱で酸化しており、焼土の堆積もみられる。やや形状が異なるが火葬施設であった可能性が残る。

なお、SK242・SK311～SK313周辺では同じ形状の土坑が集中し、それらを含め墓域と判断した。これ以外に集落から離れた屋代遺跡群③区では、埋土中に焼骨の混じるSK3002・SK3003・SK3021・SK3289・SK3290が点在している (図版161、PL29)。

B 火葬墓 2 窪河原遺跡で検出されたものを主とし、SM表示を行ったものを含む。

窪河原遺跡H2区SK40 (図版270) は南北約1.8m、東西約1.5mの範囲に礫が集中し、中央部礫下から火葬骨が出土した。火葬骨埋納に伴う掘り込みは確認できなかった。

窪河原遺跡H5区ではこれと類似する遺構が3基集中する (図版237、PL34)。SM102 (図版271、PL34) は南北約2m、東西約1.4mの楕円形の礫集中を主体部とし、礫下中央部に楕円形の掘り込みがある。掘り込み底部に敷き詰めた礫 (礫床) の上に火葬骨を乗せ、それを礫で囲み、さらにその上に礫をかぶせた状態となっていた。なお、主体部南側には張出し状の礫の配列があり、その中からも火葬骨が出土した。あるいは複数体の火葬骨を埋葬したのかもしれない。

SM103 (図版271、PL34・35) は、SM102のすぐ北側に位置する。やや礫が散乱した状態となり、集礫の原形は不明である。礫下中央部に掘り込みがあり、火葬骨が出土した。なお、そのすぐ北側にも火葬骨を伴う掘り込みがみられ、やはり複数体が埋葬された可能性がある。

SM104 (図版271、PL35) は上記2基のすぐ東側に位置する。SM103同様に礫が散乱した状態となり、原形は不明である。火葬骨を伴う掘り込みが認められ、底部にも礫が敷かれていた様子が窺える。

これ以外の例としては、屋代遺跡群①区SK47 (図版266、PL27) があげられる。楕円形の土坑中から多数の礫とともに焼骨片が出土した。墓坑を埋め戻した上部にかぶせた礫が坑内に落ち込んだ可能性がある。

C 土坑墓 人骨の出土状況から伸展葬と屈葬の2種が確認できるが、後者が主体となる。明確に伸展葬と判断できるのは、屋代遺跡群⑤区SK5005 (図版268、PL31) で、頭部をほぼ北に向けている。これ以外に屋代遺跡群①区SK44・SK57 (図版266) は坑内北端部で歯が出土しており、土坑の形状からみても伸展葬であった可能性がある。この2例も歯の出土位置からみて、頭部を北側に向けていたものと思われる。

屈葬に属するものの内、更埴条里遺跡SK9267・SK9390・SK9487 (図版265)、窪河原遺跡H2区SK14 (図版269) は頭部を北に向け、体は西向きとなる点で共通する。さらに頭部の方向を除けば屋代遺跡群⑤区SK6233 (図版268)、窪河原遺跡H5区SM101 (図版270) も体を右に向けて膝を屈している点で共通する。

以上の土坑墓は検出面から確認できた掘り込みが浅いため、墓坑の全容は不明だが、断面でみる限り掘方が存在した形跡は認められない。

屋代遺跡群⑤区SK5071 (図版233、PL32) は子供の骨が出土しており、骨格の位置関係からうつぶせで埋葬された可能性が指摘されている (第9章第6節)。また、SK6159 (図版268、PL32) も幼児骨を埋葬したものである。ともに銅銭 (図版281) が出土しており、骨とともに埋納されたものと思われる。

屋代遺跡群①区SK374 (図版267)、窪河原遺跡H2区SK19 (図版269)、SK30 (図版270) も土坑墓と思われるが、人骨の残存状態が悪く、埋葬の状況は明らかにできない。

D 木棺墓 木棺墓と考えられる遺構は、その検出状況から以下の通りに分けられる。

①長方形の土坑内に木棺と考えられる材が残存していたもの。更埴条里遺跡K地区SK9235 (図版264) は、

トレンチによって破壊された部分があるが、底板と側板の1部が残存していた。掘り込みの底部を埋め戻して木棺を設置した後、側板と坑壁の空間部を埋めた状況が断面からみてとれる。北側に頭部を置く伸展葬の状態の人骨が検出された。顔だけ西を向くが、骨全体が扁平になっていたことから土圧の影響を受けたものと思われる。ただ、人骨上部には蓋板は残存せず、断面でもその痕跡は確認できない。なお、底板の下に木棺の支えと思われる材の痕跡が確認された。他に比べ最も規模の大きな墓坑であるが、副葬品等は出土しなかった。

②掘方および断面の状況から木棺の存在が想定できるもの。更埴条里遺跡K地区に3例ある。

SK9262（図版265）は長方形の木棺状のプランが検出され、断面でも木質を含む土層が確認された。掘方内に木棺を設置した後、周囲を埋め戻したものと思われる。人骨は、頭部を北に向けた伸展葬の状態出土した。蓋板および副葬品は確認できなかった。

SK9263・SK9269（図版265）は、掘方を埋め戻して埋葬部を作った痕跡が認められる。断面に木質を含む土層はみられないが、上記の土坑墓にはみられない構造であることから、木棺の存在を推定した。SK9269の人骨は残存状況が悪いが、頭部を北側にした伸展葬と思われる。SK9262は埋葬部の幅が非常に狭く、人骨は膝をやや屈した横臥位の状況で出土した。なお、頭部は南側となる。

③長方形の土坑底部に木棺あるいはそれを支えたと思われる材の痕跡が認められるもの。屋代遺跡群④区に3例あるが、骨が出土したのは1例のみである。

SK4180（図版267）は底部南北の両隅に材の痕跡が確認された。短軸と並行することから、木棺側板の木口痕とも考えられるが、長軸方向にはその痕跡がみられない。木棺底部の支えの痕跡かもしれないが、骨が出土しておらず、断定はできない。

SK4182（図版267）は坑壁際長軸方向に木口状の痕跡がみられ、杭の跡も確認できる。骨の出土もみられることから、木棺が設置されていた可能性が高い。

上記以外にSK4188（図版216）底部にも類似した痕跡が確認されたが、骨の出土はみられない。

(6) I群4類 火葬施設

屋代遺跡群④区SF4501（図版267）、屋代遺跡群⑥区SK7003（図版269）、窪河原遺跡H5区SK103・SK104・SK105（図版270）、H6区SM1001（図版271）がこれに該当する。長方形または楕円形の土坑と直交するように煙道状の溝が掘られたものを主とするが、SK103はやや異なった形状をもつ。また、屋代遺跡群④区SK4113（図版208・209）は部分的な調査にとどまったが、同様の遺構と思われる。

SF4501、SK4113、SK7003、SM1001からは焼土、炭化物に混じって焼骨が出土した。この内、SM1001からは女性の骨がほぼ1体分検出された（第9章第6節）。これは火葬施設と墓坑が共用された例と考えられる。

SK103・SK104・SK105では骨の出土はみられないが、上記の火葬墓SM102・SM103・SM104を囲むように配置しており、これらに関わる施設と考えられる。

(7) I群5類 用途不明の掘削坑

概要 I群の土坑の内大半が5類に含まれ、その形状も多種多様である。これらのデータは表28に示すが、この内特徴的なものを抽出して以下に記述する。

方形土坑 方形、長方形を呈する土坑で、屋代遺跡群④区に集中する。平面プランおよび断面形は上記墓坑の内、木棺墓③によく似ており、それらの周辺に数多く配置している（図版213、216）。しかし、SK4215（図版216）などのように長軸が3mを越える大規模なものも存在する。図版220、PL30で示したように、

折り重なって検出される例もあるが、全体的に長軸が東西、南北ともにほぼ一定の方向となる傾向がみられる。

出土遺物はほとんどみられないが、SK4189 (図版213)、SK4184・SK4195 (図版216)、SK4221 (図版220)、SK4529・SK4530 (図版211) からは骨片および歯が出土した。また、SK4259 (図版213) からは鹿角が出土している。

南北に配列する土坑 屋代遺跡群①区では特に多数の土坑が検出されたが、SK186～SK196 (図版191) はほぼ南北方向に直線的に配列する。切り合いが認められ、全てが同時のものではないが、一定の方向性をもって掘削された可能性がある。

5 炉・焼土跡 (SF)

SF表示の遺構の内、屋代遺跡群④区SF4501は上記4の火葬施設に含めた。これ以外に同じく④区で2基 (SF4001・図版205、SF4502・図版207) が検出された。また、窪河原遺跡H2区では、集落の周辺を中心に16基が点在する。主として焼土ブロックの固まりであり、遺物をほとんど伴わずその用途は不明である。

6 鍛冶関連遺構

第2節4で触れたように、屋代遺跡群④区の竪穴状のSK4051を伴うST4004 (図版260) がこれに該当する。SK4051中央部には炉がみられ、椀型鍛冶滓が出土している。この建物の南西付近に、前記4-(4)で触れたSK4052 (図版267) がある。坑内からは多量の鍛冶関連遺物 (図版282) が出土しており、ST4004に関わる廃棄土坑と考えることができる。

7 性格不明の遺構 (SX)

屋代遺跡群④区SX4001 (図版205)、SX4003 (図版208) は全容が明らかではないが、ほぼ方形の浅い窪みである。SX4001は南北が約6.8mで、東西はそれを上回る広さを持ち、SX4003もこれに類似すると思われる。内部には特に施設等は見あたらないが、SX4003からは流動滓を主とする鍛冶関係の遺物が出土した。

SX4002 (図版200) は北側を開放したコの字の浅い窪みで、その範囲は南北が約8m、東西は4mを越える。何かの区画であった可能性があるが、内側ではSKが1基とピットが検出されたのみで、掘立柱跡の確認はできなかった。

屋代遺跡群⑥区SX8001 (図版235) も浅い窪みであるが、内部に礫が散乱し、それに混じって五輪塔の空輪 (図版278) が出土した。なお、ウマの歯等も出土している。

8 溝・自然流路 (SD)

(1) 概要

SDの表示は古代2と同様に溝状の遺構全てに付しており、その内容は多様である。SDの掲載方法は第3章第3節8に準ずる。

(2) 溝・自然流路の分類

SDの大分類とI群内の分類は第3章第3節8に準じる。

A. I群1類 水路

水路の分類基準の大枠についても第3章第3節8に従い記述を行う。

基幹水路 屋代遺跡群④区中央で断片的に検出された一連の溝SD4513（図版204）、SD4009（図版208）、SD4208（図版219）は、古代2の基幹水路SD4504の東側でほぼ同じルートをたどる。さらに⑤～⑥区ではこの延長と考えられるSD5005（図版232、235）が検出された。

図版232で示したように、⑤区においてSD5005の掘り込みは検出面から2mを越える深さである。これは、自然堤防I群内の最も高所にあたるためであり、水流を確保するためかなり大規模な掘削工事が行われたものと考えられる。これによって④区南側のSD4513の底部と比較し、およそ1.8mの比高差が設けられている。この後、自然堤防北端に沿って東へルートをかえている。

幹線水路 屋代遺跡群④区SD4008（図版205）は、上記の基幹水路から東に分岐したのと考えられる。SD4008埋没後にやや浅いSD4007が成立している。この東西水路は南北の基幹水路とともに、中世の④～⑥区集落の区画溝の役割も果たしている。

屋代遺跡群②区SD2209（図版159）は古代2のSD2235とほぼルートが同じである。暗褐色の単層堆積であるため、水路であったかは明確ではないが、第3章第3節8で触れたように幹線水路としての可能性がある。

支水路・補助的水路 幹線水路から分岐した状況が捉えられる遺構はない。畠等の耕作域と考えられる屋代遺跡群②区、③区では断片的に溝が検出されているが（図版158～160）、水路として明確に捉えることはできない。

自然堤防I群北端の傾斜面にあたる屋代遺跡群⑥区では、窪河原遺跡方面に伸びる溝が検出されている（SD8001・SD8010・SD8013、図版165）。窪河原遺跡H6区では水田および畠が広がるが（図版166）、これらの溝との対応関係は明らかにできなかった。

B. I群2類

集落内の区画溝 更埴条里遺跡K地区集落のSD932とSD933（図版156）、屋代遺跡群①区集落SD39は一定の範囲を区画するものと考えられるが、これらに対応する建物跡等の遺構配置をつかむことはできなかった。

屋代遺跡群⑤区SD5001（図版228）は、水路に囲まれた集落内の特定の範囲をさらに区画したのと考えられる。区画内は調査区外であるため不明である。また、SD6001（図版226）、SD6002（図版223）も1部分の検出であるが、区画溝と思われる。

畠作に伴う溝群 屋代遺跡群①区集落北西部（図版157）、②a・②b区（図版159）、③b区北東部（図版162）、にみられる浅い溝の並びは畠跡と思われる。III-2層上面の検出であるため、実際の深さは不明だが、畝間の可能性が高い。また、窪河原遺跡H2区（図版168）、窪河原遺跡H6区北半部（図版166）にも畠跡がみられる。いずれも畝間の様相を示す。

水田域と畠域の間の溝 窪河原遺跡H6区SD1001（図版166）は東西方向に伸び、東西大畦畔（SC1001）をはさんで南に小畦畔を伴う水田が広がり、北は畠域となる。幅は広い部分で5mを越えるため、水田の1部であった可能性もあるが、小畦畔による区画は認められない。水路の可能性もあるが断定はできない。

C. III群 自然流路 自然流路に含まれるのは屋代遺跡群①区集落南端の溝群である（図版157）。この内SD23は古代2の段階でその存在が確認できるが、図版17で示した断面図中1～10層が中世に対応する堆積であることが出土土器や木製品から判断される（図版272・273、283・284）。SD23が埋没した後、その北側に新たな支流状の流路SD24、SD25、SD26が形成されており、本流は南に位置を変えたものと考えられる。

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1（中世）

表27-1) 掘立柱建物跡（ST）一覧（中世）

更埴条里遺跡 K地区集落

遺構番号	位置		図版番号	方位 棟方向	規模					構造					付属施設			
	板地区	大地区			中地区	柱間数	桁 (m)	梁 (m)	庇 面数	面積 (含庇) (㎡)	柱配列	柱類型	掘方 平面形	柱直径		柱間距離		
														O×O		(m)	(m)	面数
ST901	K	IX	T2	246.172.156	N-S	2×1	3.92	3.32	0	13.01	側	掘方	円	—	1.86～3.32	—		
ST902	K	IX	021.T1	246.175.156	N4°W	2×2	4.40	3.66	0	16.10	一部総	掘方	円	—	1.84～3.66	—		
ST905	K	IX	06.11	246.180.156	N-S	—	3.70	—	0	—	側	掘方	円	—	—	—		
ST906	K	IX	03.4	246.181.156	N85°E	2×1	5.68	4.36	0	24.76	側	掘方	円	—	2.58～4.36	—		
ST907	K	IX	08～14	247.181.156	N8°W	3×1	5.92	3.38	0	20.01	側	掘方	円	—	1.84～3.38	—		
ST909	K	IX	019.20	247.176.156	N43°W	3×1	3.78	3.12	0	11.79	側	掘方	円、楕円	—	1.46～3.12	—		
ST910	K	X	K18.23	247.178.156	N7°W	4×2	8.50	3.94	0	33.49	総	掘方	円、楕円	—	1.1～2.44	—		
ST911	K	X	P1	248.174.156	N-S	4×1	4.90	1.90	0	9.31	側	掘方	円	—	0.96～1.9	—		
ST932	K	IX	014.19	248.176.156	N6°W	2×1	4.40	2.20	0	9.68	側	掘方	円、楕円	—	2.14～2.2	—		
ST933	K	IX	018.19	248.176.156	N24°W	2×2	3.28	3.98	0	13.05	一部 総?	掘方	円	—	1.66～3.98	—		
ST934	K	X	K17	249.178.156	N7°W	2×2	4.64	4.62	0	21.44	側	掘方	円	—	1.22～4.64	—		
ST935	K	X	P3	248.178.156	N22°W	2×2	4.00	2.06	0	8.24	側	掘方	円	—	0.54～2.9	—		
ST936	K	IX	T3.8	249.173.156	N6°W	4×1	4.58	3.14	0	14.38	側	掘方	円、楕円	—	0.8～3.14	—		
ST937	K	IX	T5.10	250.174.156	N19°W	3×2	5.62	4.02	0	22.59	一部総	掘方	円	—	1.3～4.38	—		
ST938	K	IX	020	249.177.156	N58°E	1×2	4.50	3.36	0	15.12	側	掘方	円、楕円	—	1.4～4.5	—		
ST939	K	IX X	021.K16	250.177.156	N7°W	4×1	4.84	2.56	0	12.39	側	掘方	円	—	1.2～2.56	—		
ST940	K	IX	020.25	250.177.156	N54°W	2×1	4.00	3.56	0	14.24	側	掘方+ 礎板	円	—	1.34～3.56	—		
ST941	K	IX X	T5.K21.P1	251.177.156	N42°E	2×1	6.34	3.22	0	20.41	側	掘形	円	0.1～0.12	2.7～3.8	—		
ST942	K	IX	06～12	251.180.156	N10°W	2×1	4.04	3.86	0	15.59	側	掘形	円	—	1.88～3.86	—		

屋代遺跡群 ①区集落

遺構番号	位置		図版番号	方位 棟方向	規模					構造					付属施設			
	板地区	大地区			中地区	柱間数	桁 (m)	梁 (m)	庇 面数	面積 (含庇) (㎡)	柱配列	柱類型	掘方 平面形	柱直径		柱間距離		
														O×O		(m)	(m)	面数
ST13	1	IX	E8	251.188.157	N8°E	2×2	3.34	3.14	0	10.49	側	掘方	円(1部 方形)	—	1.56～2.2	—		
ST14	1	IX	E8.9	251.188.190 .157	N86°W	1×1	3.20	2.06	0	6.59	側	掘方	円、不整 円	—	2.06～3.2	—		
ST15	1	IX	E9.10	252.190.157	N69°E	4×2	6.90	2.34	0	16.15	側	掘方	円	0.06～0.12	0.96～2.36	—		
ST16	1	IX	Y16.17	252.192.157	N84°E	3×1	7.70	4.90	2	36.90	側	掘方	円、楕円	0.12～0.18	2.28～3.96	—		
ST17	1	IX	Y17～23	254.192.157	N7°W	5×1	7.63	3.34	0	25.48	側	掘方	円、楕円	—	1.16～3.34	竪穴状遺構 S K36		
ST18	1	IX	E2.7	253.188.157	N-S	3×2	8.50	6.40	4	52.74	総	掘方+ 礎板	円	0.1～0.12	0.9～4.08	—		
ST19	1	IX	E6.7	254.187.157	N2°E	2×1	4.88	3.74	0	18.25	側	掘方	円、不整 円	0.08～0.1	2.34～3.74	—		
ST20	1	IX	Y13～19	255.193.157	N5°W	3×5	7.72	5.97	0	46.09	総?	掘方	円、楕円	—	1.05～5.97	—		
ST21	1	IX	Y9.10	255.193.157	N73°E	3以上× 2	(4.84)	2.70	0	—	側	掘方	円、不整 円	—	0.84～1.7	—		
ST22	1	X	U6	254.194.157	N6°E	3×2	3.64	2.82	0	10.26	側	掘方	円	—	1.1～2.5	—		
ST23	1	IX X	Y15.U11	254.194.157	N89°E	2×2	3.97	2.90	0	11.51	側	掘方	円、楕円	—	1.8～3.97	—		
ST24	1	IX	Y4～10	256.193.157	N68°E	2×1	4.50	3.32	0	14.94	側	掘方	円	—	3.32～4.5	—		
ST25	1	IX	Y21.22	256.187.188 .157	N90°E	1×2	3.48	2.40	0	8.35	側	掘方	円、楕円	—	1.16～3.48	—		
ST26	1	IX	Y22	256.188.157	N14°W	1×1	3.36	2.56	0	8.60	側	掘方	円、不整 円	—	2.56～3.36	—		
ST27	1	IX	E3	256.188.157	N-S	4×2	4.04	2.20	0	8.89	側	掘方	円、楕円	0.08～0.14	0.86～2.06	—		
ST28	1	IX	E10	256.190.157	N23°W	3×1	4.28	3.20	0	13.70	側	掘方+ 礎板	円	—	0.96～3.2	—		
ST29	1	X	A6	256.191.157	N5°W	3×1	2.83	2.22	0	6.28	側	掘方	楕円	—	0.74～2.22	—		
ST30	1	IX	Y14.15	257.193.157	N90°E	2×1	5.22	2.24	0	11.69	側	掘方	円	—	2.24～2.68	—		
ST31	1	IX	Y18.19	257.193.157	N85°E	3×2	7.34	2.52	0	18.50	側	掘方	円	—	0.9～3.66	—		
ST32	1	IX	Y19～25	257.190.193 .157	N15°W	4×1	8.12	2.84	0	23.06	側	掘方+ 礎板	円、不整 円	0.08(P3)	1.24～3.16	—		
ST33	1	IX	Y20.25	257.193.157	N6°W	2×1	4.48	3.52	0	15.77	側	掘方+ 礎板	円、楕円	—	1.96～3.52	—		
ST34	1	IX	Y24.E4	258.190.157	N18°W	4×1	8.65	2.12	0	18.34	側	掘方	円、楕円	—	1.28～2.4	—		
ST35	1	IX	Y24.25	258.190.157	N-S	3×1	4.34	3.40	0	14.76	側	掘方+ 礎板	円、楕円	—	0.76～3.4	竪穴状遺構 S K177		
ST36	1	IX X	Y25.U21	258.190.191 .157	N-S	3×2	6.44	4.68	0	30.14	総	掘方+ 礎板	円、不整 円	—	1.44～2.8	—		
ST37	1	X	U21.22	259.191.157	N3°W	5×1	5.46	3.68	0	20.09	側	掘方	円	0.05(P2)	0.8～3.68	—		

表27-(2) 掘立柱建物跡 (ST) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④~⑥区集落

遺構番号	位置			図版番号	方位	規模					構造					付属施設
	板地区	大地区	中地区			棟方向	柱間数	桁	梁	庇	面積(含庇)	柱配列	柱類型	竪方平面形	柱径	
						○×○	(m)	(m)	面数	(m ²)			最小~最大(m)	最小~最大(m)		
ST4002	4b	IV	C8.9.14	259.208.210.163	N83° W	4×2	5.36	4.04	1?	21.65	一部総	掘方	円.楕円	—	0.62~4.04	—
ST4003	4b	IV	C14	260.210.163	N12° E	5×1	5.84	2.26	0	13.20	側	掘方	円.楕円	—	0.82~2.26	—
ST4004	4b	IV	C14.15	260.210.163	N22° E	2×1	3.56	2.84	0	10.11	側	掘方	円	—	1.58~2.84	竪穴状遺構SK4051・鍛冶炉
ST4005	4b	IV	C18	260.208.163	N11° E	2×1	3.30	2.33	0	7.69	側	掘方	円	—	1.36~2.33	—
ST4006	4b	IV	C18	260.208.163	N7° E	2×1	3.22	1.68	0	5.41	側	掘方	円	—	1.22~3.22	—
ST4007	4b	IV	C18.23	261.205.208.163	N80° W	2×3	5.48	3.32	0	18.19	一部総	掘方	円.不整形	—	0.76~3.25	—
ST4008	4b	IV	C23.24	261.205.163	(N15° E)	—	—	—	0	—	側	掘方	円.楕円	—	—	—
ST4009	4c	IV	W19~25	262.213.163	N10° E	2×2	4.24	2.44	0	10.35	側	掘方	円.楕円	—	1.21~2.46	—
ST4010	4c	IV	X7.12	262.220.164	N82° W	2×3	5.70	4.48	0	25.54	一部総	掘方	円	—	0.7~3.78	—
ST4011	4c	IV	X1.12	263.220.164	N81° W	2×2	6.05	3.58	0	21.66	総?	掘方	円.楕円	—	1.65~3.22	—
ST4012	4c	IV	X11~22	263.216.164	N7° E	6×1	10.05	4.40	0	44.22	側	掘方	円.楕円	—	0.92~4.26	—

窪河原遺跡 H2区集落

遺構番号	位置			図版番号	方位	規模					構造					付属施設
	板地区	大地区	中地区			棟方向	柱間数	桁	梁	庇	面積(含庇)	柱配列	柱類型	竪方平面形	柱径	
						○×○	(m)	(m)	面数	(m ²)			最小~最大(m)	最小~最大(m)		
ST1	H2	VI	G10.H6	239.168	東-西	2×2	4.16	1.92	0	7.99	側	堀形	円	—	0.72~2.88	—

表28-(1) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

更埴条里遺跡 K地区

断面分類一表7参照

遺構記号	遺構番号	板地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色概記号	土性	堆積状況ほか	特記事項	
SK 9009	K IX	IX	T7			179.172.156	円		1.16	1.12		用途不明	褐~暗褐	10YR4/6~3/3				
SK 9134	K IX	IX	017			179.175.156	楕円		1.24	0.5		墓坑	褐~黒褐	7.5YR4/4~3/1				
SK 9153	K IX	IX	T2			172.156	円		0.38	0.38		墓坑				骨、骨粉	骨49~52(焼骨)	
SK 9164	K IX	IX	T2			172.156	楕円		0.84	0.42		墓坑					骨272	
SK 9205	K IX	IX	024.T4.5	12C中~14C		176.156	不整	F	4.4	4.3	2.9	井戸	オリープ黒、黒	5Y2/2、10YR3/1				木製品
SK 9206	K IX	IX	025			179.176.156	楕円	C	1.4	1	0.46	用途不明	黄褐~黒褐	10YR4/3~3/2			炭化物含む	
SK 9208	K IX	IX	020			177.156	楕円		1	0.9	0.22	用途不明						
SK 9210	K IX	IX	T15			179.174.156	不整	C	1.42	1.3	0.24	用途不明	黒~黒褐	10YR2/1~3/2				
SK 9211	K IX	IX	T15			174.156	楕円	C	1.4	1.1	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/1			炭化物含む	
SK 9213	K IX	IX	T13			173.156	楕円		0.84	0.78	0.14	用途不明						
SK 9214	K IX	IX	T18			173.156	楕円		0.9	0.66	0.09	用途不明						
SK 9215	K IX	IX	T8.13			173.156	楕円	C	1	0.9	0.98	用途不明						
SK 9216	K IX	IX	T8			173.156	円	D	0.62	0.6	0.34	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質			
SK 9217	K IX	IX	T8			173.156			0.8	0.75	0.19	用途不明						
SK 9220	K X	X	K18.23	13C		179.178.156	楕円	B	1.6	1.26	0.44	墓坑?	暗褐~黒褐	10YR3/4~3/2	砂質	炭層が入る		
SK 9221	K X	X	K23			178.156	円		0.74	0.7	0.1	用途不明						
SK 9222	K X	X	K18			178.156	楕円		0.8	0.7	0.11	用途不明						
SK 9224	K X	X	K3			183.156	円		0.7	0.7	0.2	用途不明						
SK 9225	K X	X	K2			184.156	楕円		1.2	1.1	0.1	用途不明						
SK 9227	K IX	IX	014~20			176.156	楕円		1.32	1.1	0.4	用途不明						
SK 9228	K IX	IX	023.T3			176.156	楕円		0.6	0.46	0.18	柱穴状						
SK 9229	K IX	IX	023			176.156	楕円		0.66	0.54	0.15	用途不明						
SK 9230	K IX	IX	013			176.156	楕円	G	0.72	0.62	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/2			黄褐土粒混入	
SK 9231	K IX	IX	T4			176.156	円		1.6	1.5		用途不明						
SK 9233	K X	X	P6			179.174.156	楕円	C	(4)	1.2	0.32	用途不明				ブロック土		
SK 9235	K X	X	K7			183.156	長方	C	2.3	1.3	0.78	墓坑					骨47~75(含歯)	
SK 9240	K IX	IX	T8			173.156	楕円	A	1.08	0.7	0.1	浅い窪み						
SK 9244	K X	X	K16	13C		179.177.156	不整	G	1.4	1.1	0.4	用途不明	暗褐~黒褐	10YR3/3~3/2			炭化物が混入	
SK 9246	K X	X	P3			179.178.156	長方	D	1.3	0.6	0.28	用途不明	黒褐	10YR3/2~3/1	砂質			
SK 9253	K IX	IX	T8			179.172.156	円	C	1.2	1.16	0.32	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質			
SK 9258	K IX	IX	023			176.156	長方		1.66	1.3		用途不明	暗褐		砂質			
SK 9260	K IX	IX	T5			174.156	円		0.8	0.76		用途不明						
SK 9261	K IX	IX	024			176.156	楕円		0.96	0.9		用途不明						
SK 9262	K X	X	P2.7			178.156	長方	A	1.97	1	0.28	墓坑					骨97~104(含歯)	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-(2) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

更埴条里遺跡 K地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	9263	K	X	K23		178.156	長方	A	1.6	0.4	0.1	墓坑	黒褐	10YR3/2	砂質	黄褐土、IV層、VI層土ブロックが混入	骨105~109
SK	9264	K	IX	018		175.156	円	A	0.7	0.7	0.1	用途不明					
SK	9266	K	IX	024		176.156	円		0.64	0.6	0.27	用途不明					
SK	9267	K	X	P2		178.156	長方	A	1.2	0.7	0.13	墓坑	黒褐	10YR2/3	砂質		骨110~112
SK	9269	K	X	P2		178.156	楕円	C	1.7	1.2	0.54	墓坑	灰黄褐	10YR4/2	砂質		骨113~142(含歯)
SK	9390	K	IX	T8		173.156	楕円		1.1	0.7		墓坑	暗褐		砂質		骨159~162
SK	9392	K	IX	T8		173.156	長方	D	0.82	0.68	0.26	用途不明	暗褐		砂質	炭化物混入	
SK	9487	K	X	K12.17		183.156			0.86	0.34		墓坑					骨163~165(含歯)
SK	9909	K	X	K21	13C後~14C前	179.177.156	不整	A	2.7	1.64	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	炭化物を多重に含む	
SK	9911	K	IX	T4		173.156	楕円	A	1.54	1	0.2	浅い窪み	黒褐	10YR3/2	砂質	炭化物が混入	
SK	9912	K	IX	024.T4		176.156	楕円	B	1.26	0.94	0.42	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	炭化物が混入	
SK	9913	K	IX	024		176.156	長方	A	1.7	0.9	0.1	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	9914	K	IX	024.T4		176.156	不整	A	2	1.7	0.16	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	9915	K	IX	024		176.156	長方	A	2.34	1.16	0.16	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	9916	K	IX	024		176.156		A	1.36	(0.5)	0.22	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	9917	K	IX	08		181.156	楕円		1.04	0.86	0.24	用途不明					
SK	9918	K	IX	08		181.156	楕円	D	1.1	1	0.32	用途不明	黒褐	7.5YR3/2		黄褐土ブロック含む	
SK	9920	K	IX	03		180.156	不整	D	0.8	0.74	0.26	用途不明	黒褐	7.5YR2/2			
SK	9922	K	IX	019		176.156	楕円	A	1.3	1.06	0.22	用途不明	黒褐	7.5YR2/2	砂質	炭化物含む	
SK	9924	K	IX	023.T3		176.156	楕円		0.9	0.8	0.18	用途不明					
SK	9925	K	IX	023.T3		176.156	楕円	C	0.7	0.6	0.24	柱穴状					
SK	9926	K	IX	024.25		179.176.156	楕円	C	1.4	1	0.44	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	9928	K	IX	018.23		176.156	楕円		(1.1)	1		用途不明					
SK	9933	K	X	K24		178.156			1.1	0.5		墓坑					

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	1	1	Ⅶ	T22		197.158	不整	A	1.62	0.66	0.16	墓坑	黒~黒褐	10YR2/1~3/2	砂質	骨片、炭化物、焼土混入	骨(焼片・4073)
SK	2	1	Ⅶ	Y3.8		197.157	不整	C	0.96	0.8	0.3	用途不明	暗褐~黒褐	10YR3/4~2/2	粗粒砂	炭化物、焼土が混入	
SK	3	1	Ⅶ	Y3		197.157	不整		1.4	0.6	0.23	用途不明	黒褐	10YR2/3~3/2	粗粒砂~細粒砂	粗粒砂、粘土ブロック混入	
SK	4	1	Ⅶ	T16		197.158	不整		0.9	0.7	0.24	用途不明			黄褐土、暗褐土の混合	下部に暗オリーブ砂混入	
SK	5	1	Ⅶ	T16		197.158	正方		1.12	1	0.19	用途不明			黄褐土、暗褐土の混合	炭化物が混入する	
SK	6	1	Ⅶ	T16		197.158	楕円		1.26	0.76	0.26	用途不明			黄褐土、暗褐土の混合	炭化物が混入する	
SK	7	1	Ⅶ	T16.17		197.158	長方		1.5	1.1	0.23	用途不明			黄褐土、暗褐土の混合	炭化物が混入する	
SK	8	1	Ⅶ	T16		197.158	長方		2.9	1.2	0.22	用途不明	暗褐	10YR3/4		炭化物片含む	
SK	9	1	Ⅶ	T17		197.158	楕円		0.76	0.5	0.09	用途不明	褐~黒褐	10YR4/4~3/1	砂質	III-1、2層砂の混合	
SK	10	1	Ⅶ	T21		197.158	円		1.24	1.2	0.32	用途不明	暗褐	10YR3/3		黄褐土ブロック、炭化物片が混入	
SK	11	1	Ⅶ	Y12		192.157	楕円	F	1.4	1.16	0.4	墓坑	黒褐~暗褐	10YR3/1~3/3	砂	灰、焼骨混入	焼骨・2040.3054.3059.7140
SK	12	1	Ⅶ	Y12		192.157	不整		1.5	1	0.19	用途不明					
SK	14	1	Ⅶ	Y24		195.190.157	楕円	C	1.7	(1.3)	1.18	井戸?					
SK	15	1	Ⅶ	Y22		188.157	円		0.85	0.85		用途不明					
SK	16	1	Ⅶ	Y23.24		195.190.157	円	G	2.96	2.55	1.62	井戸					
SK	17	1	Ⅶ	Y23.24		195.190.157	楕円	C	1.2	1.06	0.3	用途不明	黒灰	7.5Y4/1	砂質	赤色、灰色土ブロック含む	
SK	19	1	Ⅶ	Y23		189.188.157	楕円	C	0.96	0.74	0.24	用途不明	黒灰	7.5Y4/1	砂質		
SK	20	1	Ⅶ	Y23.E3		192.157	楕円	C	0.8	0.7	0.26	用途不明	黒灰		砂質		
SK	21	1	Ⅶ	Y23		192.157	楕円	C	0.86	0.72	0.12	用途不明	灰	7.5Y4/1~5Y4/1	砂質	炭化物、黄色土塊を含む	
SK	22	1	Ⅶ	Y23		189.188.157	楕円	G	0.98	0.8	0.3	用途不明	黒~黒灰		砂質		
SK	23	1	Ⅶ	Y23.E3		189.188.157	円	C	0.9	0.9	0.38	用途不明	黒灰~灰		砂質		
SK	24	1	IX	E3	13C	189.188.157	楕円	C	1.4	0.9	0.24	用途不明	黒灰				
SK	25	1	IX	E3		188.157	不整	A	1.5	1.38	0.14	用途不明	灰	7.5Y4/1	砂質	黄色土塊含む	

表28-(3) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	26	1	IX	E2.3		189. 188. 157	円	A	2.2	2.2	0.36	用途不明	黒		砂質		
SK	27	1	Ⅷ	Y21		188. 157	楕円	C	1.16	0.68	0.3	墓坑	黒～黒灰		砂質		骨(7133)
SK	28	1	IX	E2		188. 157	楕円		1.26	0.4		用途不明					
SK	29	1	IX	E6		188. 157	楕円	C	0.84	0.7	0.16	用途不明	暗灰		砂質		
SK	30	1	IX	E6.7		188. 157	円	C	0.9	0.86	0.16	用途不明	黒灰～暗灰		砂質		
SK	31	1	IX	E7		188. 157	楕円		0.8	0.7	0.18	用途不明					
SK	35	1	IX	E3		188. 157	円		0.7	0.7		用途不明					
SK	36	1	Ⅷ	Y18.23		188. 157	不整		2.7	2.6	0.13	土間?	黒褐	10YR2/2	砂	炭化物、黄褐土ブロックが混入する	ST17内施設
SK	37	1	Ⅶ	Y7		197. 157	楕円		0.84	0.7	0.14	用途不明			褐色砂と黒褐土の混合	焼土が微量混じる	
SK	38	1	Ⅶ	Y7		197. 157	楕円		0.8	0.7	0.19	用途不明	黒褐	10YR3/1	粗粒砂	焼土、にぶい黄褐ブロック、粘土ブロックが混入	
SK	39	1	Ⅶ	T18		158	円		1	0.9		墓坑?	黒褐	10YR2/2		炭化物、にぶい黄褐土ブロックが混入	歯 (2036)
SK	40	1	Ⅶ	Y1		197. 157	正方		0.9	0.9	0.26	用途不明	黒褐	10YR3/2	粗粒砂	褐色土ブロック、炭化物が混じる	
SK	42	1	Ⅶ	Y6		192. 157	不整		0.82	0.58	0.3	用途不明	黒褐	10YR2/2		褐色土、Ⅲ-2層砂ブロックが混じる	
SK	43	1	Ⅶ	X10		157			(0.55)	(0.4)		用途不明			Ⅲ-2層砂と黒褐土の混合	Ⅳ層土ブロックが混入する	
SK	44	1	IX	D5		187. 157	楕円	B	1.7	0.7	0.94	墓坑	暗褐～黒褐	10YR3/3～3/2	砂	黄褐土ブロックが混じる	骨片 (2027)
SK	45	1	IX	E2		189. 188. 157	楕円	A	(1.6)	1.64	0.26	用途不明	黒～黒灰		砂質		
SK	47	1	IX	E1		187. 157	楕円	D	1.12	0.7	0.38	墓坑					骨 (4076)
SK	48	1	Ⅶ	T18		197. 158	楕円		0.8	0.68	0.62	用途不明	黒褐	10YR2/3		炭化物、にぶい黄褐、褐色土ブロックが混じる	
SK	49	1	IX	D5		187. 157	円		0.23	0.21		墓坑?					土器、歯 (3043)
SK	50	1	IX	D10.E6		187. 157	円	C	0.72	0.65	0.18	用途不明	黒褐～暗褐	10YR2/3～3/3	砂質 (Ⅲ-1層主体)	Ⅳ層ブロック、炭化物が混入	
SK	53	1	IX	E8		188. 157	楕円	A	0.74	0.5	0.12	用途不明			砂質 (Ⅲ-1層土)	木炭片を含む	
SK	54	1	IX	E8		188. 157	長方	A	1.7	0.46	0.13	用途不明			砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅳ層土ブロックを含む	
SK	56	1	IX	E7		187. 157	楕円	C	0.9	0.8	0.28	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	炭化物を含む	刀子出土
SK	57	1	IX	D10		187. 157	長方	A	1.86	0.7	0.12	墓坑	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅳ層土ブロック混入	歯 (2030)
SK	59	1	IX	E1		189. 188. 157	円	A	0.54	0.5	0.14	墓坑?			砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅳ層土ブロック、炭化物を含む	骨片 (2037)
SK	60	1	IX	E3.8		189. 188. 157	正方	A	3.05	2.9	0.1	土間?	暗褐～黒褐	10YR3/3～3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)		
SK	62	1	Ⅶ	Y22.E2		189. 188. 157	楕円	F	2.82	2.7	2.26	井戸					
SK	64	1	IX	J1		157	正方	C	1.1	1.1	0.3	井戸?	暗灰黄	2.5Y4/2	粗粒砂	底にラミナ状の堆積	
SK	65	1	IX	E21.J1		157	F	(2.5)	(0.9)	1.35		井戸					曲物柄杓
SK	66	1	IX	D25.E21		157	円	C	0.8	0.65	1.06	井戸					
SK	67	1	IX	E22		189. 185. 157	楕円	C	1.08	1	1.82	井戸					
SK	68	1	IX	E22		185. 157	楕円	C	1.68	1.54	1.54	井戸?					骨 (2028)
SK	69	1	IX	E22		189. 185. 157	楕円	C	1.3	1.12	1	井戸					
SK	70	1	IX	E23		189. 185. 157	楕円	C	1.1	0.94	0.4	井戸	灰黄褐 善灰	10YR4/2、2.5Y4/1	砂	礫が多く入る	
SK	71	1	IX	J1		157	楕円	C	1.4	0.85	0.26	井戸?	黒		砂、シルト	腐食植物混入	
SK	72	1	IX	J2		157	楕円	C	1.3	0.85	0.13	井戸?	黒		砂、シルト	腐食植物混入	
SK	73	1	IX	E23		185. 157	楕円	A	1.2	0.8	0.24	井戸?	黄灰	2.5Y4/1	砂		骨 (5090)
SK	74	1	IX	E24		189. 186. 157	円	C	0.7	0.7	0.2	井戸?	灰黄褐～褐灰	10YR4/2～2.5Y4/1	砂	礫が入る	
SK	75	1	IX	E23		157	円	C	0.85	0.85	0.35	井戸?					
SK	76	1	IX	E24		186. 157	楕円	A	1.4	1	0.2	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂		
SK	77	1	IX	E25		186. 157	不整	A	1	0.7	0.18	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂		
SK	78	1	IX	E25		186. 157	楕円	A	0.94	0.7	0.2	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂		
SK	79	1	IX	E25.A21		157	円	C	0.9	0.85	0.35	井戸?	黒、オリープ黒	2.5Y2/1、7.5Y2/2	砂		
SK	80	1	IX	E20.25.A21		186. 157	楕円	C	1.34	1	0.3	井戸?	褐灰	10YR4/1	砂		

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-(4) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 81	1	X	A16.21			186.157	楕円		2.3	1.2		井戸?					
SK 82	1	Ⅶ	Y14			193.157	楕円		1.54	1.1	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	底部に炭化物集積層あり	
SK 82	1	X	A13			191.157	不整		1.1	1.1	0.59	井戸?					
SK 83	1	Ⅸ	E16.17			189.185.157	長方	C	1.5	0.94	0.3	墓坑?	灰黄褐、暗褐	10YR4/2.3/3	粗粒砂、シルト		
SK 84	1	Ⅸ	E8			188.157	不整	A	1	0.84	0.09	墓坑?					骨
SK 85	1	Ⅸ	E8			185.157	楕円	A	1.5	0.5	0.27	墓坑?					骨片 (3044)
SK 88	1	Ⅶ	Y4			196.193.157	長方	C	1.6	1.06	0.3	用途不明	にぶい黄褐~黒褐	10YR4/3~3/2	砂質	Ⅳ層土ブロック、炭化物混入。	
SK 89	1	Ⅶ	Y4			196.193.157		C	1	(0.76)	0.26	用途不明	暗褐~黒褐	10YR3/3~3/2	砂	Ⅳ層土ブロック、炭化物混入。	
SK 90	1	Ⅶ	Y9			196.193.157	円	C	1.2	1.2	0.86	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質?	Ⅳ層ブロックが多量に混入	
SK 91	1	Ⅶ	Y9			196.193.157	円	C	1.34	1.3	0.44	用途不明					
SK 93	1	Ⅸ	E9			190.157	楕円	A	0.9	0.62	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層土	Ⅳ層ブロックが混入する。	
SK 94	1	Ⅸ	E9			190.157	楕円	G	0.8	0.7	0.38	用途不明	暗褐	10YR3/4	Ⅲ-1層土	Ⅳ層ブロックが混入する。	
SK 95	1	Ⅸ	E9			190.157	円	C	0.6	0.6	0.24	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	Ⅳ層ブロックが混入する。	
SK 96	1	Ⅸ	E10			190.157	円	C	0.6	0.6	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	Ⅳ層ブロックが混入する。	
SK 97	1	Ⅸ	E5			190.157	楕円	C	0.7	0.58	0.3	用途不明	黒褐	10YR2/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物片を含まず	
SK 98	1	Ⅸ	E4			190.157	円	C	0.6	0.6	0.16	用途不明	暗褐	10YR3/4	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物片を含まず	
SK 99	1	Ⅶ	Y24			190.157	楕円	C	1	0.6	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	炭化物、炭土塊、Ⅳ層土ブロックを含まず	
SK 100	1	Ⅶ	Y25			190.157	楕円	A	0.96	0.9	0.3	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロックを含まず	
SK 101	1	Ⅶ	Y14			196.193.157	円	C	1.04	1.04	0.6	用途不明					
SK 102	1	Ⅶ	Y14			193.157	楕円	C	1.4	0.8	0.22	用途不明					
SK 103	1	Ⅶ	Y15			193.157	楕円	A	1.2	0.5	0.18	用途不明					
SK 104	1	Ⅶ	Y25			190.157	円	A	0.8	0.74	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 105	1	Ⅶ	Y25			195.190.157	楕円	A	1.16	0.84	0.2	用途不明	暗褐	10YR3/4	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 106	1	Ⅶ	Y25			195.190.157	楕円	A	1.6	0.94	0.14	墓坑	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/4	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	骨 (7129)
SK 107	1	Ⅶ	Y25			190.157	円	A	0.76	0.7	0.1	用途不明	褐灰	10YR6/1	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 109	1	Ⅶ	Y20			193.157	正	A	0.6	0.6	0.12	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 110	1	Ⅶ	Y20			193.157	楕円	A	(1.1)	1.04	0.1	用途不明	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロックが混入する。	
SK 111	1	Ⅶ	Y20			193.157	楕円	C	0.9	0.8	0.28	用途不明	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 112	1	Ⅶ	Y15.20			193.157	円	C	0.9	0.9	0.26	用途不明	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 113	1	Ⅶ	Y20			193.157	円	A	0.9	0.84	0.1	用途不明			Ⅲ-1層主		
SK 114	1	Ⅶ	Y20			193.157	楕円	A	0.84	0.76	0.06	用途不明	にぶい密褐	10YR4/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロックが混入する。	
SK 115	1	Ⅶ	Y20			193.157	楕円	C	0.46	0.3	0.22	柱穴状					
SK 116	1	Ⅶ	Y20			193.157	円	A	0.6	0.6	0.1	用途不明			Ⅲ-1層主	Ⅲ-2層砂が混入する。	
SK 117	1	Ⅶ	Y19			193.157	楕円	A	0.76	0.66	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 118	1	Ⅶ	Y19			193	円	E	0.73	0.72	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 119	1	Ⅶ	Y15.20			193.157	楕円	A	0.64	0.5	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 120	1	Ⅶ	Y15			193.157		A	(0.6)	0.68	0.16	用途不明	黒褐	10YR2/3	Ⅲ-1層主		
SK 121	1	Ⅶ	Y15			193.157	楕円	C	0.84	0.7	0.38	用途不明	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 122	1	Ⅶ	Y15			193.157	円	C	1.04	1	0.36	用途不明	暗褐	10YR3/4	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロック、炭化物が混入する。	
SK 123	1	Ⅶ	Y15			193.157	楕円		0.9	0.8	0.28	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主	Ⅳ層土ブロックが混入する。	
SK 124	1	Ⅶ	Y10~U11			196.194.157	円	D	2.3	2.3	0.74	井戸					
SK 125	1	Ⅶ	Y10.06			194.157	楕円	A	1	0.9	0.2	用途不明	黒褐、暗褐		砂質		
SK 126	1	Ⅶ	Y10			193.157	楕円	C	0.8	0.7	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 127	1	Ⅶ	Y15			193.157	楕円	A	0.8	0.7	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主		
SK 128	1	Ⅶ	Y15			193.157	楕円	A	0.7	0.6	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅳ層土ブロックが混入する。	

表28-(5) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	129	1	Ⅶ	Y10.15		193.157	円	A	0.86	0.84	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主体	IV層ブロック、炭化物が混入する	
SK	130	1	Ⅶ	Y25		195.190.157	長方	A	1.5	1.1	0.24	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロック入る	
SK	132	1	Ⅶ	Y20		193.157	楕円		0.9	0.8		用途不明	黒褐	10YR3/2	Ⅲ-1層主体		
SK	133	1	Ⅶ	Y20		193.157	楕円	A	0.75	0.7	0.1	用途不明					
SK	134	1	Ⅶ	Y25		190.157	楕円	C	0.8	0.7	0.64	用途不明					
SK	135	1	Ⅶ	Y25		190.157	楕円	A	1.2	0.96	0.18	用途不明	暗褐	10YR3/4	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロック入る	
SK	137	1	Ⅶ	Y20		193.157	楕円	A	1.7	1.56	0.04	用途不明	黒褐	10YR3/2		IV層土ブロック、灰混入	
SK	139	1	Ⅶ	Y20		193.157	長方		3.45	3.1	0.09	竪穴状	黒褐	10YR3/2	砂	炭化物粒子、灰、IV層土ブロック混入	
SK	142	1	Ⅶ	Y20		196.193.157	不整	B	1.1	1	0.34	用途不明	黒褐	10YR2/2~2/3	砂	炭化物、焼土粒子、IV層土ブロック混入	
SK	143	1	Ⅶ	Y20		193.157	円	C	1.08	1	0.4	用途不明	黒褐~灰黄褐	10YR2/2~4/2	砂質	IV層土ブロック、炭化物混入	
SK	144	1	Ⅶ	Y20		193.157	楕円		0.56	0.5	0.06	用途不明					
SK	153	1	Ⅶ	T19		158	楕円	B	1.31	1.05	0.4	用途不明					
SK	158	1	X	A6		195.191.157	長方	A	(2.5)	2.5	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV、VI層土ブロックを含む	
SK	160	1	Ⅶ	U12		194.157	円		0.76	0.74	0.17	用途不明					
SK	161	1	Ⅶ	U12		194.157	楕円	A	1	(0.8)	0.18	用途不明					
SK	162	1	Ⅶ	U12		194.157	楕円	A	1	0.7	0.13	用途不明					
SK	163	1	IX	E5		195.190.157	円	C	1.6	1.54	1.38	井戸?					
SK	164	1	IX	E4		190.157	不整	A	1.3	(0.7)	0.18	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	IV、VI層土ブロックが多量に混入	
SK	165	1	IX	E4		190.157	円	C	0.5	0.5	0.78	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	IV、VI層土ブロックが多量に混入	
SK	166	1	IX	E9		190.157	不整	A	1.16	0.7	0.24	用途不明			砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロックを含む	
SK	167	1	IX	E9		190.157	楕円	A	0.96	0.78	0.26	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	炭化物含む	
SK	169	1	X	A6		191.157	楕円	A	1.26	1.04	0.22	用途不明			砂質 (Ⅲ-1層土)		
SK	170	1	Ⅶ	Y23.24		193.157	楕円		0.9	0.6		用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	焼土ブロックあり	
SK	174	1	IX	E9		190.157	楕円	A	0.84	0.76	0.44	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK	175	1	IX	E9		190.157	楕円		0.7	0.4	0.08	用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3			
SK	176	1	X	A6		190.157	楕円	C	0.76	0.5	0.26	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	炭化物を含む	
SK	177	1	Ⅶ	Y24.25		195.190.157	長方	A	2.54	2.32	0.24	土間?					ST35内施設
SK	179	1	Ⅶ	P17.22		158	楕円		0.85	0.65		用途不明					
SK	182	1	X	A7		191.157	不整		1.9	0.8	0.27	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロック、炭化物含む	
SK	183	1	Ⅶ	U21		191.157		A	1.4	(0.8)	0.2	用途不明			砂質 (Ⅲ-1層土)	炭化物混じる	
SK	184	1	X	A1		191.157		A	0.92	(0.8)	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	185	1	X	A1		191.157		A	1.1	(1)	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	186	1	X	A7.12		191.157		C	1.2	(0.6)	0.32	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	187	1	X	A7		191.157		C	0.5	(0.2)	0.24	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロックを含む	
SK	188	1	X	A7		191.157		C	0.3	(0.2)	0.22	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロック、炭化物含む	
SK	189	1	X	A7		191.157		C	0.9	(0.4)	0.4	用途不明	暗褐~黒褐	10YR3/3~3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロック、炭化物含む	
SK	190	1	X	A7		191.157		A	1	(0.4)	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	191	1	X	A7		191.157		A	1.06	(0.44)	0.14	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2、IV-1層土ブロック、炭化物含む	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
 窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-(6) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	192	1	X	A2.7		191.157		A	1.7	(0.5)	0.24	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	193	1	X	A2		191.157		A	0.56	(0.4)	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロックを含む	
SK	194	1	X	A2		191.157		A	(0.72)	(0.44)	0.22	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質 (III-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	195	1	X	A2		191.157		A	(0.72)	(0.4)	0.2	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物、焼土を含む	
SK	196	1	X	A2		191.157		C	(0.8)	(0.5)	0.22	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV-1層土ブロック混入	
SK	197	1	X	A1		191.157	楕円	A	0.76	0.7	0.18	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	198	1	X	A1		191.157	楕円	A	0.7	0.6	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	199	1	X	A1		191.157	楕円	A	0.9	0.5	0.12	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	IV-1層土ブロックを含む	
SK	200	1	X	A6		191.157	正方	A	0.5	0.5	0.18	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	201	1	X	A6.7		191.157	長方	A	(1.1)	0.8	0.3	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (III-1層土)	III-2、IV-1層土ブロックを含む	
SK	203	1	X	A8		191.157		A	0.9	(0.6)	0.24	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	IV層土ブロックを含む	
SK	204	1	X	A8		191.157		A	(0.4)	(0.3)	0.28	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (III-1層土)	IV、VI層土ブロック、炭化物を含む	
SK	205	1	X	A6		191.157	楕円	A	0.96	0.7	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	炭化物、焼土ブロック混入	
SK	207	1	X	U1		194.157	不整		1.5	0.9	0.34	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (III-1層土)	IV層土ブロック、焼土、炭化物が混じる	
SK	211	1	X	A7.8		191.157	楕円	A	0.8	0.6	0.2	用途不明			砂質 (III-1層土)	炭化物、IV、VI2層土ブロック混入	
SK	212	1	X	A7.8		191.157		A	0.8	(0.5)	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV層土ブロック混入	
SK	213	1	X	A8		191.157		A	0.6	(0.4)	0.16	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (III-1層土)	炭化物を含む	
SK	214	1	X	A6		191.157	楕円	A	(1.2)	1.08	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2~2/3	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV-1.2層土ブロック混入	
SK	215	1	X	A7		191.157	楕円		0.7	0.56	0.15	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV-1層土ブロック混入	
SK	221	1	X	A6		191.157	不整		2.28	2.25	0.09	用途不明					
SK	222	1	IX X	E10. A6		190.157	楕円		1.64	1	0.17	用途不明	暗褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK	223	1	X	A7		191.157	楕円	G	0.7	0.6	0.24	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK	224	1	X	A7		191.157	楕円	F	0.9	0.64	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	III-2、IV層土ブロックを含む	
SK	225	1	X	A7		191.157		A	(1)	(0.4)	0.14	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (III-1層土)	IV-1層土ブロック、炭化物を含む	
SK	226	1	Ⅴ	U21		191.157	楕円	A	1	0.5	0.26	用途不明	暗褐	10YR3/3~3/4	中粒砂 (III-1層土)	III-2、IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK	227	1	Ⅴ	U16		194.157	円		0.9	0.84	0.17	用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	砂質 (III-1層土)		
SK	228	1	Ⅴ	U16		194.157	楕円		0.8	0.7		用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	砂質 (III-1層土)		
SK	229	1	Ⅴ	U16		194.157	楕円		0.6	0.5		用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	砂質 (III-1層土)		
SK	234	1	Ⅶ	Y15		193.157	楕円	A	0.6	0.5		用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	焼土、炭化物、にぶい黄土が混じる	
SK	241	1	Ⅶ	O21		202.198.158	円	C	0.9	0.9	0.24	墓坑?	黒褐	10YR3/2	細粒砂	赤褐色土を含む	
SK	242	1	Ⅶ	O21		202.198.158	円	C	1.18	1.18	0.32	墓坑?	暗褐	10YR3/3	砂質	赤褐色土、炭化物、焼土粒子を含む	骨 (焼片・6103)
SK	243	1	Ⅶ	O22		202.198.158	楕円	C	0.94	0.84	0.3	墓坑?	暗褐	10YR3/4	砂質~シルト	炭化物、焼土粒子を含む	
SK	244	1	Ⅶ	O22		202.198.158	楕円	C	0.9	0.7	0.22	墓坑?	暗褐	10YR3/3	細粒砂	炭化物を含む	
SK	246	1	Ⅶ	O22		202.198.158	楕円	C	1.2	1.1	0.42	墓坑?	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	細粒砂	薄いシルト層あり、炭化物混入	

表28-(7) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	247	1	Ⅶ	022		202.198.158	円	C	1.04	1.04	0.3	墓坑?	暗褐	10YR3/3~3/4	細粒砂	炭化物、軽石を含む	
SK	249	1	Ⅶ	021		202.198.158	円	C	0.64	0.6	0.28	墓坑?	暗褐	10YR3/3	砂質	黄褐土、炭化物、焼土粒を含む	
SK	252	1	Ⅸ	E15		186.157	楕円	A	1	0.6	0.07	墓坑	黒褐	10YR3/2	砂質	炭、焼土、骨片を含む	
SK	253	1	Ⅶ	Y19.24		190.157	楕円	B	0.8	0.64	0.36	用途不明	黒褐~褐灰	5YR3/1~4/1	砂質	黄褐土ブロックが混じる	
SK	254	1	Ⅶ	Y24		190.157	楕円	B	0.96	0.74	0.28	用途不明	褐灰	5YR4/1	砂質	黄褐土ブロック、炭化物を含む	
SK	255	1	X	A1		191.157	楕円	A	1	0.6	0.08	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロックを含む	
SK	256	1	X	A1		191.157	円	A	0.52	0.5	0.16	柱穴状?					
SK	257	1	X	A1		191.157	楕円	A	0.9	0.85	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロック、炭化物混じる	
SK	258	1	X	A1	13C~14C	196.191.157	楕円	F	2.8	2.5		井戸					
SK	259	1	X	A1		191.157	楕円	A	1.5	1.08	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロック、炭化物片を含む	
SK	260	1	Ⅸ	E15		186.157	楕円	A	0.46	0.1	0.16	浅い窪み	暗褐	10YR3/4	砂質 (Ⅲ-1層土)	焼土、炭化物を含む	
SK	262	1	Ⅶ	U21.A1	13C	191.157	楕円		1.1	0.84	0.19	用途不明					
SK	263	1	Ⅸ	E15		186.157	楕円	A	0.8	0.2	0.06	浅い窪み	暗褐	10YR3/4	砂質 (Ⅲ-1層土)	焼土、炭化物を含む	
SK	264	1	X	A1		191.157	不整	G	2.7	2	0.6	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV-1層土ブロックを含む	
SK	265	1	Ⅸ	E10		190.157	楕円	A	1.5	0.9	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質 (Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2層土が混入する	
SK	266	1	Ⅸ	E10		190.157	楕円	G	1.6	1	0.42	用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロックを含む	
SK	267	1	Ⅸ	E10		190.157	長方	C	0.98	0.8	0.2	用途不明	黒褐~暗褐	10YR3/2~3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロック、炭化物を含む	
SK	270	1	X	A1		191.157	楕円	A	1	0.6	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/2	細粒砂 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロックを含む	
SK	272	1	Ⅸ	E15	16C	186.157		A	2.2	(0.9)	0.28	用途不明	黒褐~灰黄褐	10YR3/2~4/2	砂質 (Ⅲ-1層土)		石、骨片
SK	281	1	Ⅶ	N24		158	不整	A	1.14	0.72	0.23	墓坑?	暗褐~褐	10Y3/4~4/4	砂質	IV層土ブロック、炭化物混じる	
SK	282	1	X	A1		191.157	円	A	0.8	0.76	0.14	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質 (Ⅲ-1層土)	IV層土ブロックを含む	
SK	283	1	Ⅶ	U21		191.157	長方		1.4	1	0.43	用途不明					
SK	284	1	Ⅶ	024		158	円	A	1.3	1.13	0.17	墓坑?	暗褐	10YR3/3	砂質	褐灰細粒砂混入	
SK	285	1	Ⅶ	024		158	円	C	1.93	1.86	0.43	用途不明					
SK	286	1	Ⅶ	024		158	円	C	1.23	1.23	0.22	墓坑?	暗褐	10YR3/3	細粒砂	黄褐土ブロック、炭化物を含む	
SK	287	1	Ⅶ	023		158		C	(1.26)	1.16	0.18	墓坑?	黒褐	10YR3/2	砂質	炭化物を含む	
SK	288	1	Ⅶ	023		158	楕円	D	1.38	1.23	0.22	墓坑?	暗褐	10YR3/3	細粒砂	黄褐土ブロック、小隕を含む	
SK	289	1	Ⅶ	019.24		158	楕円	C	0.94	0.76	0.18	墓坑?	暗褐	10YR3/3~3/4	細粒砂	炭化物、黄褐土ブロックを含む	
SK	290	1	Ⅶ	016		158	円		1.43	1.43		墓坑?	灰黄褐	10YR4/2	砂質	焼土粒子、鉄分を含む	
SK	300	1	Ⅶ	021		198.158	円	D	1.08	1.04	0.16	墓坑?	暗褐		砂	炭化物僅かに含む	
SK	301	1	Ⅶ	021		202.198.158	円	C	1	1	0.36	墓坑?	暗褐		砂	炭化物若干含む	
SK	302	1	Ⅶ	021		202.198.158	円	C	0.96	(0.9)	0.26	墓坑?	暗褐		砂		
SK	303	1	Ⅶ	T1		202.198.158	円	C	1.02	0.98	0.4	墓坑?	暗褐		砂	炭化物、焼土粒子を含む	
SK	305	1	Ⅶ	021		202.198.158	楕円	C	1.1	1.04	0.48	墓坑?	暗褐		砂	黄褐、灰褐土、炭化物、焼土粒子混入	
SK	306	1	Ⅶ	N25		202.198.158	円	C	1.32	1.3	0.52	墓坑?	暗褐~褐	10YR3/4~4/4	細粒砂		
SK	307	1	Ⅶ	N25		196.158	円	A	1.16	1.1	0.18	墓坑?	暗褐	10YR3/4	細粒砂		
SK	308	1	Ⅶ	021		202.198.158	円	C	0.84	0.84	0.3	墓坑?	暗褐	10YR3/4	細粒砂	褐色砂が混入	
SK	309	1	Ⅶ	N25		198.158		A	1.18	(0.7)	0.12	墓坑?	暗褐	10YR3/4	砂質		
SK	310	1	Ⅶ	N25		198.158		A	1.5	(0.72)	0.18	墓坑?	暗褐	10YR3/4	砂質		
SK	311	1	Ⅶ	021		202.198.158	円	C	1.2	1.18	0.34	墓坑?	暗褐		砂	炭化物、焼土粒子混じる	骨片 (3056)
SK	312	1	Ⅶ	021		202.198.158		C	1.4	(1.2)	0.26	墓坑?	暗褐		砂	炭化物、焼土粒子混じる	骨片 (5081.6102)
SK	313	1	Ⅶ	021		202.198.158	楕円	C	1.2	1.1	0.26	墓坑?	暗褐		砂	骨片 (白色粒子)、炭化物、焼土を含む	骨片 (4079.6116)
SK	314	1	Ⅶ	021		202.198.158	楕円	A	1.2		0.08	墓坑?	暗褐		砂	骨片 (白色粒子)、炭化物、焼土を含む	
SK	315	1	Ⅶ	021		202.198.158		A	1	(0.46)	0.1	墓坑?	暗褐		砂	骨片 (白色粒子)、焼土粒子を含む	
SK	316	1	Ⅶ	T1		202.198.158	円	C	0.9	0.86	0.28	墓坑?	暗褐		砂	炭化物微量混入	
SK	317	1	Ⅶ	T1		202.198.158	楕円	C	(0.8)	0.8	0.42	墓坑?	暗褐		砂	黄褐土、炭化物、砂子混入	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
 窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1（中世）

表28-⑧ 墓坑・井戸跡・その他の土坑（SK）一覧（中世）

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 318	1	Ⅶ	T1		202.198.158		楕円	C	1	0.9	0.38	墓坑?	暗褐～黄褐		粗粒砂	灰褐土、焼土粒子混じる	
SK 319	1	Ⅶ	T1		202.198.158		楕円	C	(0.8)	0.8	0.44	墓坑?	暗褐～黄褐		粗粒砂	黄褐土、炭化物、焼土粒子混じる	
SK 320	1	Ⅶ	N24		158			C	(0.7)	(0.33)	0.2	墓坑?	暗褐～褐	10YR3/4～4/6	砂		
SK 321	1	Ⅶ	N24		158		円	A	0.82	0.8	0.25	墓坑?	暗褐～褐	10YR3/3～4/4	砂質		
SK 323	1	Ⅶ	T6		203.198.158		楕円	G	1.34	1	0.4	墓坑?	暗褐	10YR3/2～3/4	細粒砂	黄褐土ブロック、焼土粒子を含まず	
SK 324	1	Ⅶ	T6		203.198.158		楕円	C	1.3	0.9	0.36	墓坑?	暗褐～灰黄褐	10Y3/3～4/2	砂質	黄褐土ブロック、炭化物粒混じる	
SK 327	1	Ⅶ	T1		203.198.158		楕円	C	1.2	0.84	0.34	墓坑?	暗褐		砂	炭化物、焼土粒子混じる	
SK 329	1	Ⅶ	T1		203.198.158		楕円	C	1.26	1.04	0.26	墓坑?	暗褐		砂	黄褐、赤褐土、炭化物、焼土粒子混じる	
SK 336	1	Ⅶ	O21		203.198.158		円	C	1	1	0.32	墓坑?	黒褐～暗褐	10YR3/2～3/4	細粒砂	炭化物含む	
SK 343	1	Ⅶ	O21		198.158		楕円	A	1.2	1.12	0.06	墓坑?	暗褐		砂質	粗粒砂、炭化物、焼土粒を含む	
SK 344	1	Ⅶ	O21		198.158			A	1	(0.34)	0.12	墓坑?	暗褐		砂質	炭化物粒子を含まず	
SK 352	1	Ⅸ	E9		190.157		楕円	A	1.5	1.3	0.14	用途不明	暗褐	10YR3/3	細砂(Ⅲ-1層土)	IV-1.2層土ブロック、炭化物混入	
SK 353	1	Ⅸ	E9		190.157		楕円	A	1.4	0.7	0.24	用途不明	暗褐	10YR3/3	細砂(Ⅲ-1層土)	IV-1.2層土ブロック、炭化物混入	
SK 354	1	Ⅸ	E9		190.157		楕円	A	1.9	0.94	0.24	用途不明	暗褐	10YR3/3～3/4	細砂(Ⅲ-1層土)		
SK 357	1	Ⅶ	T1		198.158		楕円	A	1	0.9	0.18	墓坑?					骨(2038)
SK 374	1	Ⅷ	U8		194.157		長方		1.2	0.8	0.21	墓坑?					
SK 375	1	Ⅷ	U8		194.157				1.4	(0.8)	0.22	墓坑?					
SK 376	1	Ⅷ	U8.13		194.157				1.36	(1)	0.15	墓坑?					
SK 377	1	Ⅷ	U13		194.157				1	(0.55)	0.41	用途不明					
SK 381	1	Ⅷ	U18		157				0.5	(0.3)	0.16	用途不明					
SK 382	1	Ⅷ	U18		157				(0.7)	0.4	0.37	用途不明					
SK 383	1	Ⅶ	T1		198.158		楕円		2	1.14		墓坑?					
SK 386	1	Ⅶ	T6		198.158		楕円	C	0.8	0.66	0.2	墓坑?	暗褐	10YR3/4	砂質(Ⅲ-1層土)		
SK 551	1	X	A6		191.157		不整		7.4	0.4		柱穴状	黒褐	10YR3/2	砂質(Ⅲ-1層土)	Ⅲ-2.Ⅳ.Ⅶ層土ブロック、炭化物含む	鉄錐出土

屋代遺跡群 ②区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 1005	2	Ⅶ	D23. I3		159		正方	C	1.9	1.82	0.35	用途不明	褐～黄褐		砂質		
SK 1006	2	Ⅶ	D24		159		円	A	0.54	0.51	0.13	用途不明	暗褐	10YR4/3	砂質	鉄分を含む	
SK 1008	2	Ⅶ	I3		159		不整	B	0.4	0.38	0.18	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	にぶい黄褐土、鉄分、軽石混入	
SK 1012	2	Ⅶ	D10		159		円	A	0.66	0.56	0.16	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	鉄分を含む	
SK 1021	2	V	Y8		159		円		3.85	3.7		井戸?					骨(352.353)
SK 1026	2	V	Y17.22		159		不整	A	7	5.8	0.12	浅い窪地	黒褐	10YR3/2	中粒砂		
SK 1027	2	V	Y17		159		不整		6	3.4		浅い窪地	黒褐		砂		
SK 1062	2	Ⅷ	F1		159		楕円	D	1.3	0.9	0.12	用途不明	暗褐	7.5YR3/4	中粒砂	炭化物集中あり、黒褐砂ブロック点存	
SK 1063	2	Ⅷ	A22		159		楕円		1.1	0.85		浅い窪地	暗褐	7.5YR3/4	細粒砂～中粒砂		
SK 1064	2	Ⅷ	A21		159		円	A	0.7	0.69	0.07	浅い窪地	暗褐	7.5YR3/4	細粒砂～中粒砂		
SK 1119	2	Ⅵ	K16.17		160		長方	C	1.35	1.15	0.46	用途不明	暗褐	10YR3/4	砂質		
SK 1138	2	Ⅶ	O14		158		楕円	C	1	0.7	0.23	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK 1139	2	Ⅶ	O15		158		楕円	C	0.85	0.7	0.21	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK 1140	2	Ⅶ	O15.K11		158		楕円	C	0.9	0.65	0.23	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		

屋代遺跡群 ③区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 3001	3	V	J8		161		円	B	1.37	1.35	1.8	井戸					
SK 3002	3	Ⅲ	Y20		161		不整	A	0.9	0.74	0.05	墓坑				灰、炭、焼土、骨片混入	骨(461)
SK 3003	3	Ⅲ	Y20		161		不整		0.5	0.1		墓坑				灰、炭、焼土、骨片混入	骨(462)
SK 3004	3	Ⅳ	U23		161		円	A	1.2	0.9	0.3	用途不明	褐～黄灰	10YR6/1～4/4	シルト		

表28-(9) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ③区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	3005	3	Ⅲ Ⅳ	Y20.25.U16		161	不整	D	5.4	3.3	0.15	浅い窪み	黒褐		砂質(Ⅲ-1層土)	黒褐、褐、灰黄褐ブロックが混入	
SK	3007	3	V	E18.23		161	不整	A	2.75	1.85	0.34	用途不明	黒褐		砂質(Ⅲ-1層土)		
SK	3009	3	Ⅲ	Y13		161	不整	A	1.44	0.95	0.07	浅い窪み	黒褐		砂質		
SK	3010	3	V	E18		161	不整	D	0.48	0.38	0.14	用途不明	褐～ 褐灰～ 黒褐	10YR4/6～ 6/1～3/2	中粒砂		
SK	3012	3	Ⅵ	F1.2		161	不整	D	5.3	3	0.14	浅い窪み			砂質(Ⅲ-1層土)		
SK	3013	3	Ⅵ	A14		161	円	D	7.4	6.4	0.06	浅い窪み	褐灰～ 黒	10YR6/1～ 4/6	シルト		
SK	3020	3	Ⅵ	A11		161	不整		2.45	1.8		浅い窪み	黒褐		砂		
SK	3021	3	Ⅲ	Y20		161	不整	D	1.08	0.84	0.1	墓坑?					骨(463)
SK	3023	3	V	J10		161	円	G	1.98	1.93	2.6	井戸					
SK	3233	3	Ⅳ	Q2		162	円	A	1.34	1.32	0.1	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	にぶい黄褐砂ブロック含む	
SK	3234	3	Ⅳ	L22.Q2		162	円	C	1.3	(0.88)	0.34	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3235	3	Ⅳ	Q6.11		162	円	A	1.27	1.24	0.15	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	にぶい黄褐砂ブロック含む	
SK	3239	3	Ⅳ	U2		161	正方	C	0.6	0.55	0.16	墓坑?	にぶい 黄褐～ 灰黄褐	10YR4/3～ 4/2	砂質	焼骨片、焼土粒、炭化物含む	
SK	3240	3	Ⅳ	U3		161	円	C	1.5	1.4	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3241	3	Ⅳ	U3.8		161	円	A	1.32	1.15	0.09	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3242	3	Ⅳ	U8		161	円	C	1.7	1.6	0.12	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3243	3	Ⅳ	U8		161	半円	G	1.28	0.76	0.17	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3246	3	Ⅳ	U9.14		161	長方	E	1.78	0.62	0.23	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3247	3	Ⅳ	P19		162	楕円	A	1.81	0.83	0.09	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質	灰黄褐砂混入	
SK	3248	3	Ⅳ	P8.13.14		162	円	A	1.16	1.03	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	3289	3	Ⅳ	U9		161	円	G	0.89	0.86	0.24	墓坑?	黒褐	10YR3/2	砂質	焼土、炭化物、骨片含む	骨(464～466)
SK	3290	3	Ⅳ	U2.3		161	不整	C	1.28	0.96	0.16	墓坑?	灰黄褐	10YR4/3	砂質	焼骨片、焼土粒、炭化物含む	骨(467～470)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4001	4	Ⅳ	D1		216.163			(1.1)	(1.1)	0.43	用途不明			砂質(Ⅲ-1層土)	ブロック混入	
SK	4002	4	Ⅳ	C5.10.D1.6		218.216.163	円	F	2.05	1.95	3.84	井戸	黒褐	10YR3/2～ 3/1			曲物
SK	4004	4	Ⅳ	C4		213.163	正方	C	1.97	1.1	0.77	用途不明	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土、黒褐土ブロックが多量に混入	
SK	4005	4	Ⅳ	C5.D1		216.163			2.27	(1.09)	0.34	方形土坑					
SK	4006	4	Ⅳ	C10		214.210.163	長方	C	1.96	1.07	0.45	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黒褐、黄褐ブロック混入	
SK	4008	4	Ⅳ	D1		216.163	長方	A	1.5	0.8	0.25	用途不明	黒～ 黒褐	2.5Y3/1～ 10YR3/3	砂質	黒褐、黄褐ブロック混入	
SK	4009	4	Ⅳ	D1.6	15C後～ 16C前	218.216.163	長方	C	2.85	(0.65)	0.31	用途不明	黒～ 暗褐	2.5Y3/1～ 10YR3/3	砂質	黄褐、褐色土ブロック混入	骨(焼片・4076)
SK	4010	4	Ⅳ	D1		216.163			0.9	(0.38)	0.24	用途不明	にぶい 黄褐～ 黒褐	10YR4/1～ 2.5Y3/1	砂	黒褐、黄褐ブロック混入	
SK	4011	4	Ⅳ	C10		210.163			(1.2)	(0.25)	0.18	方形土坑?			砂質(Ⅲ-1層土)		
SK	4012	4	Ⅳ	C10.D6		210.163			(2.2)	(1.2)	0.49	方形土坑					
SK	4013	4	Ⅳ	C5		213.163	楕円	A	1.67	0.8	0.27	用途不明	灰黄褐 ～黒		砂質(Ⅲ-1層土)	黄褐、黒色土ブロック混入	
SK	4014	4	Ⅳ	C5		213.163	楕円	A	1.31	0.85	0.2	用途不明			砂質(Ⅲ-1層土)		
SK	4015	4	Ⅳ	C5		215.213.163	長方	C	(1.17)	1.05	0.35	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂	黒色粒子混入	
SK	4016	4	Ⅳ	C10		213.163			1	(0.73)	0.44	用途不明	暗オ リーブ 褐、 黒褐			黄褐土、焼土ブロック混入	
SK	4017	4	Ⅳ	C10		210.163	長方	C	2.06	1.3	0.4	方形土坑			砂質(Ⅲ-1層土)	にぶい黄褐土ブロック、焼土、炭化物が混じる	
SK	4018	4	Ⅳ	C10		210.163	長方	A	1.6	1.2	0.34	方形土坑				上層砂質(Ⅲ-1層土)、下層黄褐土ブロック	
SK	4019	4	Ⅳ	C10		210.163	長方	G	(0.4)	(1.05)	0.3	方形土坑				黄褐土ブロック、炭化物粒子が混入	
SK	4020	4	Ⅳ	C10		210.163	長方	A	1.23	(0.8)	0.14	方形土坑	暗灰褐		砂質	黄褐土ブロック混入	骨(6115)?
SK	4021	4	Ⅳ	C5.10		213.163			(0.66)	0.8	0.27	方形土坑	黒褐	10YR2/2	砂質(Ⅲ-1層土)	IV層ブロック、炭化物片、焼土塊混入	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-10) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4022	4	IV	C10		210.163			(0.65)	0.66	0.07	方形土坑			砂質 (III-1層土)		
SK	4023	4	IV	C10		213.163			(1.4)	0.72		方形土坑			砂質 (III-1層土)	ブロック混入	
SK	4025	4	IV	C10		210.163	長方	C	(2.15)	1.24		方形土坑	暗灰黄褐		ブロック土	II-1層土、黄褐土ブロックの混合	
SK	4026	4	IV	C10		210.163		G	(1)	(1.15)	0.44	用途不明	黒褐～黄褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4027	4	IV	C14		210.163	楕円	A	1.45	(0.85)	0.3	用途不明	黒褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4028	4	IV	C9.14		210.163	楕円	A	18.4	10.5	0.16	用途不明	黒褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4029	4	IV	C14.15		214.210.163	楕円	A	1.8	1.45	0.46	墓坑	暗褐～黒褐		砂質		骨 (焼片、炭化物層中-1007)
SK	4030	4	IV	C15		210.163	長方	D	1.96	0.85	0.25	用途不明	黒褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4031	4	IV	C15		210.163	楕円	D	2.14	1.11	0.34	用途不明	黒褐～暗灰褐		砂質 (III-1層土)		
SK	4032	4	IV	C15		210.163	楕円	C	2.4	(1.15)	0.23	用途不明			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4033	4	IV	C15		210.163	正方		1.39	1.3	0.4	用途不明			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4034	4	IV	C14.15		210.163	長方	C	1.94	1.1	0.37	用途不明			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4035	4	IV	C9.14		210.163	円	A	1.31	1.22	0.24	用途不明	黒褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4036	4	IV	C4.9		213.163	円		1.5	1.41		井戸	黒褐～灰黄褐		砂質	黄褐土ブロック混入	
SK	4037	4	IV	C10.15		210.163	楕円	C	2.12	1.15	0.35	方形土坑			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4038	4	IV	C13	15C後	208.163		C	(2.08)	(2.2)	0.46	用途不明	黒褐	10YR3/2	中粒砂 (III-1層土)	IV層土ブロック、炭化物混入	
SK	4039	4	IV	C13		208.163		A	(1.75)	(0.85)	0.3	用途不明	黒褐	10YR2/1～3/1	砂質 (III-1層土)	IV、VI層土ブロック、炭化物が混入	
SK	4040	4	IV	C14		209.208.163	楕円	G	1.24	1.13	0.4	井戸	黒褐	10YR3/1	砂質	VI層土ブロック、炭化物が混入	草履、曲物
SK	4041	4	IV	C18		209.208.163	不整	G	0.65	0.61	0.17	墓坑?				炭化物、焼土、骨片が混入	銅製品、骨 (焼片・4077.4078)
SK	4042	4	IV	C10		210.163	正方	C	3.02	1.68	0.42	用途不明	黒褐		砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック、炭化物が混入	
SK	4043	4	IV	C10		213.163	楕円	A	0.8	(0.34)	0.26	用途不明			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4044	4	IV	C8.9.13.14		208.163	長方	C	1.25	1.15	0.54	用途不明	暗灰褐		砂質 (III-1層土)		
SK	4045	4	IV	C8.9.13.14		208.163	長方	G	1.65		0.36	用途不明	黒褐				
SK	4046	4	IV	C15		210.163	楕円	B	0.83	0.65	0.46	柱穴状			砂質 (III-1層土)	炭化物、焼土粒、IV層土ブロック混入	
SK	4047	4	IV	C19		210.163	楕円	C	1.53	0.96	0.26	用途不明	黒褐	10YR2/1	砂質 (III-1層土)	焼土粒、IV層土ブロック混入	
SK	4048	4	IV	C19		210.163	楕円	C	1.6	1.05	0.31	用途不明	黒褐	10YR2/1	砂質 (III-1層土)	IV、VI層土ブロック、炭化物、焼土粒が混入	
SK	4049	4	IV	C13.14		208.163	不整		1.3	1.05	0.25	用途不明			砂質 (III-1層土)	IV、VI層、黄褐土ブロック、炭化物が混入	
SK	4050	4	IV	C14		214.210.163	円		0.87	0.94	2.12	井戸?					
SK	4051	4	IV	C14		210.163	正方	D	1.9	1.72	0.27	土間?	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV層土ブロック混入	ST4004内施設、鍛冶炉
SK	4052	4	IV	C14		208.163	不整	A	0.93	0.51	0.97	鍛冶関連?	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	炭化物、鉄塊、焼土混入	製鉄?、羽口出土
SK	4053	4	IV	C18		208.163	長方	C	2	1.48	0.53	方形土坑					青磁
SK	4055	4	IV	C15		210.163			(1.45)	(0.77)	0.27	方形土坑?			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4056	4	IV	C14		208.163	長方		(1.35)	1.17	0.36	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック、炭化物片を含む	
SK	4057	4	IV	C14		210.163	正方		0.85	0.8	0.6	柱穴状	暗灰黄～灰黄	2.5Y5/2～10YR6/2	砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4058	4	IV	C19		210.163		G	(1.07)	(0.5)	0.28	用途不明	黄灰、黒褐	2.5Y4/1.10YR2/2	砂質 (III-1層土)	IV層土、VI層土ブロック炭化物混入	
SK	4059	4	IV	C23		208.163	正方	C	0.9	0.85	0.2	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質 (III-1層土)	IV層土、VI層土ブロック炭化物混入	
SK	4060	4	IV	C23		206.205.163	円	F	1.91	1.75	3.72	井戸					
SK	4061	4	IV	C19		210.163			(1.15)	(0.85)	0.1	用途不明			砂質 (III-1層土)	炭化物、IV層土、黒褐土ブロックを含む	
SK	4062	4	IV	C10		210.163	長方	C	1.75	(1.01)		方形土坑			砂質 (III-1層土)	ブロックを含む	
SK	4063	4	IV	C10		210.163	長方	C	3.65	(1.25)	0.29	方形土坑			砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロックを含む	
SK	4064	4	IV	C13.14		208.163	正方		(1.03)	1.16	0.25	用途不明			砂質 (III-1層土)	ブロックを含む	

表28-11) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4065	4	IV	H12		205.163	長方	A	1.33	1	0.3	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV層、III-2層ブロックを含む	
SK	4066	4	IV	H12.17		200.163	楕円	C	1.15	0.8	0.08	用途不明	黒褐	10YR2/2	砂 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物、粘土を含む	
SK	4069	4	IV	C23		205.163	長方		(0.93)	0.45		用途不明	黒褐	7.5YR3/2	砂質	炭化物、赤褐ブロック混入	
SK	4070	4	IV	C23		206.205.163	円	F	2.05	1.75	3.06	井戸					骨 (6116)、多量の鏡治関係異物
SK	4071	4	IV	C23		205.163	長方		1.05			用途不明	黒褐	7.5YR3/2	砂質	炭化物、暗褐ブロック混入	
SK	4072	4	IV	H17		200.163	円	C	0.75	0.7	0.25	用途不明	黒褐	10YR2/1	砂質 (III-1層土)	炭化物、焼土を含む	
SK	4073	4	IV	H17		200.163	楕円	C	0.82	0.36	0.23	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂 (III-1層土)	IV層、III-2層ブロック含む	
SK	4075	4	IV	C13		208.163	長方		1.43	0.92		用途不明	暗灰黄	2.5Y4/2		黄褐土、褐鉄ブロック含む	
SK	4076	4	IV	C14.19		210.163	長方	C	2.3	1.35	0.62	方形土坑			砂 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物、焼土粒が混入	
SK	4079	4	IV	C23.24		206.205.163	円	B	(0.86)	1.02	3.24	井戸					
SK	4080	4	IV	C18.19		208.163	円		1.03	1.25	0.12	用途不明					
SK	4082	4	IV	H8		205.163	長方		1.1	(0.6)		用途不明	黒褐	5YR3/1	砂質	炭化物、集積粘土ブロックが混入	
SK	4083	4	IV	C19		210.163	円	C	1.17	0.93	0.41	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物が混入	
SK	4084	4	IV	C14		210.163	楕円		0.82	0.62	0.21	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質	IV層ブロック、炭化物、焼土が多量に混入	
SK	4086	4	IV	C18.23		208.163	正方		1.15	1.05		用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物、焼土を含む	
SK	4087	4	IV	C23		208.163	円		0.65	0.65		用途不明	黒褐～にぶい黄褐	10YR3/1～4/2	砂質	IV層、III-1層ブロック、炭化物が混入	
SK	4088	4	IV	C19		208.163	長方	G	1.55	0.9	0.41	方形土坑			砂質 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物片、焼土含む	
SK	4089	4	IV	C13		209.208.163		C	(1.3)	(0.6)	2.76	井戸					5層堆積
SK	4090	4	IV	C14.19		208.163	楕円	A	1.45	1.07	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	下層にIV層ブロック混入	
SK	4092	4	IV	C8		213.163	長方	C	3.1	1.3	0.51	方形土坑	黒褐	10YR2/2	砂質	黄褐土、暗赤褐土ブロックが混入	
SK	4093	4	IV	C19		208.163				0.1		方形土坑	黒褐	10YR2/2	砂質 (III-1層土)	IV層ブロック、炭化物含む	
SK	4094	4	IV	C19		208.163	不整		1.03	0.75	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	IV層ブロックが多量に混入し、炭化物含む	鏡
SK	4096	4	IV	C14		210.163	円	B	0.63	0.7	0.38	用途不明	黒褐、にぶい黄褐	10YR3/1.5/3	混合土	炭化物を含む	
SK	4097	4	IV	C5		213.163	円	C	0.65	0.67	0.33	用途不明	黒褐	10YR3/2	粗粒砂 (III-1層土)	褐灰粘土ブロック、焼土、炭化物粒を含む	
SK	4098	4	IV	C15		210.163						用途不明			砂質 (III-1層土)	III-2層、IV層ブロック、炭化物が混入	
SK	4104	4	IV	C14		210.163			(1)	(0.7)	0.49	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂 (III-1層土)	黄褐土ブロック、炭化物が混入	
SK	4105	4	IV	C14		210.163			(1.25)	(0.35)	0.2	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	炭化物、IV層ブロック混入	
SK	4106	4	IV	C14		210.163			1.3	(0.5)	0.16	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック、炭化物が混入	
SK	4113	4	IV	C17		209.207.163		F	(0.75)	(0.3)	0.62	火葬施設					骨 (焼片 - 1003.6118)
SK	4115	4	IV	C8		208.163						方形土坑	暗褐	10YR3/3	砂質 (III-1層土)	黄褐土ブロック混入	
SK	4121	4	IV	C19		214.210.163	長方	C	2.05	1.53	0.48	用途不明				IV層土、III-1層土、黄褐土のブロック	
SK	4123	4	IV	C9		208.163	正方	G	0.65	0.55	0.33	用途不明					
SK	4125	4	IV	C9		213.163	楕円	C	0.55	0.42	0.24	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	粘土ブロックが混入	
SK	4126	4	IV	C9		210.163	不整	A	0.96	0.52	0.24	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	褐色土ブロック、炭化物が混入	
SK	4127	4	IV	C9		210.163	楕円	A	0.51	0.41	0.07	浅い窪み	暗褐	10YR3/3		粘土ブロック、炭化物が混入	
SK	4128	4	IV	D6		210.163	楕円	A	0.7	0.55	0.08	浅い窪み	暗褐	10YR3/4	砂質	粘土ブロックが混入	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1(中世)

表28-(12) 墓坑・井戸跡・その他の土坑(SK)一覧(中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4130	4	IV	C14		210.163						用途不明	暗褐	10YR3/3		粘土ブロック、炭化物が混じる	
SK	4131	4	IV	C14		210.163		A	(0.65)	(0.26)	0.16	浅い窪み	黒褐	10YR2/3		粘土ブロックが混じる	
SK	4133	4	IV	C10		210.163	楕円	E	0.56	0.42	0.3	柱穴状					
SK	4172	4	IV	C22		205.163	長方	F	0.65	0.25	0.3	用途不明	暗褐	10YR3/4	砂質	III-2層、粘土ブロックを含む	
SK	4173	4	IV	D1.6		216.163		C	(0.55)	(0.34)	0.21	用途不明	黒褐		砂質		
SK	4174	4	IV	C10		210.163	(円)		(0.4)	(0.4)	0.16	用途不明			砂質(III-1層土)	黄褐色ブロックが混じる	
SK	4175	4	IV	C10.D6		210.163			(1)	(0.7)	0.22	用途不明			砂質(III-1層土)	焼土、炭化物、粘土ブロックを含む	
SK	4178	4	IV	D1		216.163	楕円		(1.25)	(0.66)	0.42	用途不明					
SK	4179	4	I	W24.25		213.163	長方	C	1.9	1.75	0.06	方形土坑					
SK	4180	4	I	W25.C5		213.163	長方	C	1.85	1.15	0.54	墓坑					木口痕
SK	4182	4	IV	C5.D1		216.163	長方	C	2.33	1.4	0.46	墓坑	暗褐	10YR3/3	砂質		木口痕、杭痕、骨片(5096, 5097)
SK	4184	4	IV	D1		218.216.163		D	0.76	1.86	0.36	方形土坑(墓坑?)	暗褐	10YR3/3	砂質	IV層ブロック、骨を含む	骨片(6106)
SK	4185	4	IV	D1		216.163	長方	D	(0.87)	(0.89)	0.28	方形土坑	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	4186	4	I	X21.D1		216.163	円	D	0.9	(0.8)	0.3	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂質	IV層ブロックを含む	
SK	4187	4	I	W24~C5		215.213.163	楕円	C	3.1	1.45	0.42	方形土坑	灰褐~暗褐		砂質	シルトブロックが混入	
SK	4188	4	I	X21.D1		216.163		D	(0.9)	(0.84)	0.42	墓坑?					
SK	4189	4	I	W25.C5		215.213.163	長方	C	(1.76)	1.7	0.3	方形土坑	暗褐		砂質(III-1近似土)	灰褐シルト層がバンド状に入る	骨片(5098)
SK	4190	4	IV	C4		213.163		A	(1.2)	(0.9)	0.2	用途不明	暗褐		砂質	炭化物を含む	
SK	4191	4	IV	C4		213.163		F	(1.1)	0.7	0.08	用途不明	暗褐		砂質	炭化物を含む	
SK	4192	4	IV	D1		216.163			(1.15)	(0.73)	0.26	用途不明	暗褐		砂質	炭化物を含む	
SK	4193	4	I	W25.C5		213.163		C	(0.35)	1.05	0.08	方形土坑	暗褐		砂質		
SK	4195	4	IV	D1		216.163			1.1	(0.3)	0.09	墓坑?	暗褐		砂質	IV層土ブロックを含む	歯(6106)
SK	4196	4	I	W25.C5		213.163	長方	C	2.45	1.35	0.12	方形土坑	暗褐		砂質	IV層土ブロック、炭、焼土を含む	
SK	4197	4	IV	C5		215.213.163		A	1.66	(1.35)	0.3	方形土坑	暗褐		砂質(III-1近似土)	灰褐シルト層がバンド状に入る	
SK	4198	4	IV	C5		213.163		A	2.35	(0.81)	0.21	用途不明	暗褐		砂質	灰褐シルト層がバンド状に入る	
SK	4199	4	I	W25.C4.5		215.213.163	正方	C	2.4	2.35	0.44	方形土坑	暗褐		砂質(III-1近似土)	灰褐シルト層がバンド状に入る	
SK	4200	4	I	W24		213.163	楕円	B	(1.6)	1.6		井戸?	暗褐		砂質	大型の塊混入	
SK	4201	4	I	X21.22	14C後~15C前	218.216.164	円	B	1	0.94	2.45	井戸				黒色土ブロック、塊混入	箸、鎌、井戸枠、折敷底板
SK	4202	4	I	X21		216.164	不整	A	1.91	1.56	0.18	用途不明	灰黄褐	10YR4/2			
SK	4203	4	I	X16	15C中~後	218.216.164	円	B	1.32	1.25	1.64	井戸					
SK	4204	4	I	X16		218.216.164	円	B	1.35	1.35	1.98	井戸					曲物
SK	4205	4	I	X16		218.216.164	正方	C	1.6	1.07	0.42	方形土坑	黒褐	2.5Y3/1	砂質	黄褐色ブロックが多量に混入	
SK	4206	4	I	X16		218.216.164	正方	C	2.35	2.29	0.6	竪穴状	黒褐	10YR3/2	砂質	炭化物、焼土、粘土多量混入	
SK	4207	4	I	X16.21		216.164	楕円	D	1.47	1.15	0.31	用途不明	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック、炭化物混入	
SK	4208	4	I	X21		216.163	楕円	C	3	1.25	0.74	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4210	4	I	X12		220.164	不整	A	1.75	1.05	0.31	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	灰色砂を多く含む	
SK	4211	4	I	X21	13C~14C前	216.164	楕円	C	0.9	0.72	0.34	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4213	4	I	X21	14C	216.163	長方	A	3	1.74	0.21	方形土坑					
SK	4214	4	I	X11.16		220.164	長方	C	3.23	1.45	0.18	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4215	4	I	W15~X16		218.216.164	長方	C	4.25	1.72	0.42	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4216	4	I	X11		220.164	長方		16.5	1.2	0.4	方形土坑	黒褐	7.5YR3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4217	4	I	X11		220.164	長方		17.6	14.5	0.55	方形土坑					
SK	4218	4	I	X11.16		216.164	長方	A	3.45	1.5	0.28	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4219	4	I	X16		216.164	長方	C	3.3	1.4	0.31	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4220	4	I	X11		220.164	長方	A	2.56	2.46	0.27	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	
SK	4221	4	I	X11		222.220.164	長方	C	1.94	1.3	0.44	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐色ブロック混入	歯(1016)
SK	4222	4	I	W15		222.219.164	円	B	1.3	1.25	3.52	井戸					
SK	4224	4	I	W15		219.164	楕円	C	1.1	0.75	0.2	用途不明	黒褐				
SK	4225	4	I	W14		219.164	楕円	C	0.76	0.55	0.18	用途不明	暗灰褐		溶脱土		
SK	4226	4	I	W14		219.164	楕円	C	0.93	0.84	0.2	用途不明	灰黄褐		溶脱土	III-2層ブロック混入	

表28-(13) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK 4228	4	I	W19	15C	213.163	長方	A	2.28	1.75	0.19	方形土坑	黒褐	2.5Y3/1~3/2	砂質	黄褐土ブロックを含む		
SK 4229	4	I	W14.19		213.164	楕円	C	2.46	1.47	0.43	用途不明						
SK 4230	4	I	W15.20		222.219.164	円	B	1.15	1.14	0.55	井戸						曲物
SK 4231	4	I	W20		222.219.164	円		0.77	0.74	1.36	井戸?	灰褐		細砂			
SK 4234	4	I	W19.24		213.163	楕円		0.85	0.75		用途不明						
SK 4236	4	I	W25		215.213.163	長方	C	(2.05)	1.25	0.49	方形土坑	黒褐	10YR3/2				
SK 4237	4	I	W25		215.213.163	長方	C	(1.8)	(1.16)	0.32	方形土坑	黒褐~暗灰黄褐	10YR3/2~2.5Y4/2	砂質			
SK 4238	4	I	W24		215.213.163	長方	C	1.66	1.45	0.48	方形土坑	黒褐~暗褐	10YR3/1~3/3	砂質	黄褐土ブロック、炭化物混入		
SK 4239	4	I	X7.12		220.164	長方	C	2.5	1.74	0.22	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4240	4	I	X7		220.164	楕円	A	1.25	0.9	0.18	用途不明	黒褐					
SK 4241	4	I	X2.3		220.164	円		1.2	1.1		用途不明	黒褐		砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4242	4	I	W5~X6		222.219.164	長方	C	3.84	2.53	0.39	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4243	4	I	X6		222.220.164	長方	C	2.45	1.43	0.46	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4244	4	I	X7	12C中~13C初	220.164	楕円		1	0.8		用途不明	黒褐	10YR3/2		黄褐、黒色土ブロック、砂の混入		
SK 4245	4	I	X7		220.164	円	A	0.85	0.85	0.3	用途不明	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4247	4	I	X11		220.164			2.88	2.16	0.16	方形土坑	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4248	4	I	W5		219.164	円	C	0.65	0.6	0.14	用途不明	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック、炭化物混入		
SK 4251	4	I	W25.X21		216.163	円	B	0.95	0.9	0.27	柱穴状	黒褐~暗灰黄褐		砂	III-1層、黄褐土ブロック混入		
SK 4252	4	I	X21		216.163	楕円		(0.56)	(0.43)	0.22	用途不明						
SK 4254	4	I	X17.22		216.164	楕円		1.8	1.56		用途不明	黒褐		砂質	炭化物粒子混入		
SK 4255	4	I	W14		219.164	円	C	1.05	(0.86)	0.35	用途不明						
SK 4256	4	I	W9.14		219.164	楕円	C	1.07	0.92	0.32	用途不明						
SK 4258	4	I	W25		213.163			(0.97)	(0.32)	0.46	用途不明	黒褐	2.5Y3/2	砂質	黄褐土ブロック混入		
SK 4259	4	I	W25		215.213.163		C	2.01	(0.93)	0.5	方形土坑	灰黄褐~暗褐	シルト~砂質				鹿角 (6113)
SK 4260	4	I	W25		213.163			(0.8)	(0.46)	0.31	方形土坑						
SK 4398	4	I	W10		219.164	長方	A	0.85	0.43	0.34	用途不明						
SK 4399	4	I	X17		218.216.164	円	B	0.8	0.79	1.22	井戸			砂質		曲物	
SK 4400	4	I	X17		216.164	円	C	1.25	1.14	1.23	井戸?	黒褐	10YR2/2	細砂			
SK 4424	4	I	X12		220.164			(0.45)	0.43		井戸						
SK 4425	4	I	W20		213.164	楕円	B	0.36	0.32	0.4	柱穴						石製品
SK 4501	4	IV	G19	13C	203.199.163	長方	C	1.95	1.75	0.6	方形土坑	褐灰~灰黄褐	10YR4/1~4/2	砂質	黒褐砂質土 (III-1層土) 混入		
SK 4502	4	IV	G19.24		203.199.163	長方	C	2.15	(1.43)	0.44	方形土坑	灰黄褐	10YR4/2	砂質	黒褐砂、灰黄褐土ブロック混入		
SK 4503	4	IV	B23		203.201.163	楕円	F	2	1.75	1	水溜?						
SK 4504	4	IV	B23		203.201.163		C			0.22	用途不明	褐	10YR5/1	砂質	黒褐、褐砂質ブロック混入		
SK 4505	4	IV	G14		199.163	長方	A	2.18	1.73	0.18	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質			
SK 4506	4	IV	G19		203.199.163	長方	C	1.95	1.9	0.53	方形土坑	灰黄褐	10YR4/2	砂質	黒褐砂、灰黄褐土ブロック混入		
SK 4508	4	IV	G17		199.163	円		0.95	0.93		井戸	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐色砂が混入		
SK 4511	4	IV	G15		200.163				1.6	0.24	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	黒褐砂が混入		
SK 4513	4	IV	G9.10		204.163	不整	D	5.18	4.5	1.24	井戸						井戸枠、歯 (5100)
SK 4514	4	IV	G9~15		206.204.163					2.04	水溜?						
SK 4515	4	IV	G10		206.204.163	楕円	F	1.62	1.4	1.16	用途不明						
SK 4516	4	IV	G5.H1		206.204.163	円	F	1.43	1.35	1.6	井戸?	褐~灰黄褐	10YR4/1~4/2				
SK 4517	4	IV	G10		206.204.163	円	B	0.95	0.95	1.02	井戸?	褐灰~灰黄褐	10YR4/1~4/2				
SK 4518	4	IV	G10		204.163	楕円	C	1.4	1	0.6	用途不明	黄褐	10YR5/6		灰黄褐土ブロック混入		
SK 4519	4	IV	G10		204.163	円	A	(0.75)	0.7	0.16	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質			
SK 4520	4	IV	G10		204.163	楕円	A	0.8	0.62	0.23	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質			
SK 4521	4	IV	H1		204.163	楕円	A	0.5	0.43	0.2	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質			
SK 4522	4	IV	C16		207.163	円	A	1.01	0.9	0.23	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質			
SK 4524	4	IV	G10		204.163	楕円	A	0.55	0.37	0.18	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質			
SK 4527	4	I	W21		212.163	円	C	0.95	0.97	0.62	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入		

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-14) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4528	4	I	W21		212.163	楕円	D	1.15	1	0.28	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	下層に褐色差が混入する	
SK	4529	4	I	V20		214.211.163	正方	C	1.4	1.35	0.56	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロックが混入する	骨片
SK	4530	4	I	V20		214.211.163	正方	A	1.5	1.46	0.39	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロックが混入する	骨片 (2024)
SK	4531	4	I	V20		211.163	円	G	0.7	0.67	0.34	柱穴状	褐灰	10YR4/1	砂	褐色砂ブロックが混入する	
SK	4532	4	I	W16		214.212.163	正方	C	1.15	1.06	0.4	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロック、炭化物が混入	
SK	4533	4	I	W16		214.212.163	長方	C	2.05	1.55	0.5	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロック、炭化物が混入	
SK	4534	4	I	W16		214.212.163	長方	C	1.9	1.04	0.47	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロック、炭化物が混入	
SK	4535	4	I	W16		214.212.163	正方	C	1.9	1.67	0.48	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	褐、暗褐色土ブロック、炭化物混入	
SK	4536	4	I	V20		211.163	円	D	0.7	0.68	0.19	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質		
SK	4538	4	I	V20		211.163		D			0.18	柱穴状	灰黄褐	10YR4/2	砂質		
SK	4539	4	I	V20		211.163		C		0.65	0.37	柱穴状	灰黄褐	10YR4/2	砂質		
SK	4540	4	I	V15		211.163	円	C	0.9	0.8	0.26	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4541	4	I	V15		214.211.163	円	C	1.29	1.15	0.54	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロック混入	
SK	4542	4	I	V15	14C 11C後 ~12C	211.163	楕円	G	0.62	0.42	0.28	柱穴状	黒褐	10YR3/2	砂質		土器
SK	4544	4	I	W11		212.163	円	A	0.75	0.7	0.22	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4545	4	I	W11.16		212.163	円	C	0.95	0.85	0.31	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロックが混入	
SK	4546	4	I	W11.16		212.163	楕円	B	0.7	0.57	0.53	柱穴状	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土ブロックが混入	
SK	4549	4	I	W12		217.164	円	A	0.85	0.75	0.15	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質		
SK	4552	4	I	W11		214.212.163	円	C	1.29	1.2	1.93	井戸	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4553	4	I	W6.11		217.164	長方	A	2	0.7	0.1	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質		
SK	4554	4	I	W6		217.164	楕円	C	1.32	1.17	0.43	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4555	4	I	W6		218.217.164	円	C	1.16	1.11	2.31	井戸	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4558	4	I	W1.6		217.164	楕円	C	1.31	1.14	2.1	井戸	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4569	4	I	V20		211.163	円	A	0.8	0.79	0.17	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質		
SK	4573	4	I	W11		217.164	円	C	0.89	0.85	0.99	井戸?	褐	10YR4/4			
SK	4574	4	IV	G10		204.163	楕円	A	0.6	0.45	0.19	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質		
SK	4579	4	I	V10	古代14 ~15期	164		A	2.04	(0.86)	0.26	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	4580	4	I	W11		211.163	楕円	A	1.01	0.86	0.23	用途不明	褐	10YR4/4			
SK	4581	4	I	W11		212.163	楕円	A	1.05	0.73	0.22	用途不明	褐	10YR4/4			
SK	4582	4	I	V15		211.163	円	C	0.3	0.3	0.27	柱穴状	黒褐	10YR3/2	砂質	褐色土ブロック混入	土器
SK	4583	4	I	W6		217.164	楕円	A	1.59	1.41	0.33	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂	底部に灰黄褐土が混入する	
SK	4585	4	I	W6.11	14C末 ~15C	218.217.164	楕円	C	2.53	2.1	2.1	井戸	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	4586	4	I	W1		217.164	長方	C	1.76	0.96	0.41	方形土坑	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐色土ブロック、炭化物小粒子が混入	
SK	4587	4	I	W2		217.164	楕円	C	1.3	1.17	0.41	用途不明	黒褐	10YR3/2	砂質		
SK	4588	4	IV	G13		199.163	長方	A	2.05	1.1	0.17	方形土坑	灰黄褐	10YR4/2	砂質	灰黄褐、黄褐シルトブロック、黒褐砂混入	
SK	4589	4	I	W6.7	15C ~16C	218.217.164	円	F	1.2	1.17	0.8	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐色土ブロック、炭化物混入	
SK	4596	4	I	W11		214.212.163	楕円	C	1.4	0.93	0.41	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	暗褐色土、褐色土ブロックが混入	
SK	4598	4	IV	B5		211.163	不整	B	1.05	0.6	0.34	用途不明					
SK	4599	4	I	W22		214.212.163	円	C	1.03	1	0.35	井戸					
SK	4600	4	IV	C1.2.6.7	12C	209.207.163	楕円	F	6.33	5.2	1.8	井戸					
SK	4601	4	IV	C16.17		209.207.163	長方	A	2.5	(1)	0.46	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	褐、黒褐砂ブロックが混入	
SK	4602	4	IV	C16.17		207.163	長方	A	1.61	1.2	0.22	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4603	4	IV	C11~17		207.163	長方	A	1.45	1	0.2	方形土坑	褐灰	10YR4/1	砂質	褐色土ブロックが混入	
SK	4604	4	IV	C12		207.163	円	C	(1.43)	1.3	1.08	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂質	酸化鉄が強く沈着する	
SK	4605	4	IV	C12		207.163	楕円	C	(1.73)	1.35	1.12	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂質	酸化鉄が微量沈着する	

表28-(15) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ④区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	4606	4	IV	C7		207. 163		C		1.45	1.15	水溜?	褐～ 褐灰	10YR4/4～ 4/1	砂質が主		
SK	4607	4	IV	G19		203. 199. 163	長方	C	1.4	1.35	0.46	方形土坑	褐～ 灰黄褐	10YR4/1～ 4/2	砂質		
SK	4608	4	I	W17. 18		215. 212. 163	楕円	F	5.45	4.43	1.11	水溜?	黒褐～ 暗褐	10YR3/1～ 3/3	砂質		窟 (2023. 2034)
SK	4609	4	IV	C12		208. 163		B		1.04	1.13	井戸?	褐灰	10YR4/1	砂質		
SK	4610	4	IV	C7		209. 207. 163	正方	C	0.93	0.85	0.56	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐、褐灰土ブ ロックが混入	
SK	4611	4	I	W22		212. 163	楕円	A	0.53	0.43	0.23	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	褐、黒褐土ブ ロックが混入	
SK	4614	4		W11. 16		212. 163	楕円	A	0.5	0.36	0.1	浅い窪み	褐灰	10YR4/1	砂質	褐、暗褐土ブ ロック、炭の 小粒子が混入	
SK	4615	4	IV	C16		207. 163	円	A	0.64	0.71	0.24	用途不明					
SK	4616	4	IV	C16		207. 163	円	A	0.55	0.5	0.2	用途不明					
SK	4617	4	I	W21. 22		215. 212. 163	円	F	1.96	1.9	1.68	井戸	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐灰土が混 入、酸化鉄が 沈着	
SK	4618	4	I	W22		215. 212. 163	円	C	1.3	1.26	1.39	井戸?	灰黄褐	10YR4/2	砂質	褐灰土ブロッ ク、炭化物混 入	
SK	4619	4	IV	C7. 12		207. 163		C		1.43	1.31	水溜?					
SK	4620	4	IV	C16		207. 163	正方	C	1.08	1	0.7	用途不明					
SK	4628	4	I	W7		218. 217. 164	不整	F	1.36	1.15	0.98	用途不明	黒褐	10YR3/1	砂質	暗褐土、褐色 土ブロック混 入	
SK	4776	4	IV	G9		203. 201. 163	長方	A	1.7	0.85	0.23	用途不明			粘性土	底部に焼土堆 積あり	
SK	4777	4	IV	G8. 13		201. 163	楕円	A	1.07	0.46	0.18	用途不明	明褐～ にぶい 褐	7. 5YR5/6～ 5/4		炭化物がレン ズ状にはいる	
SK	4778	4	IV	G13. 14		201. 163	長方	B	1.1	0.85	0.48	用途不明	明褐 にぶい 褐	7. 5YR5/4		炭化物、酸化 鉄混入	
SK	4779	4	IV	G13. 14		201. 163	長方	A	1.9	1.15	0.2	用途不明	明褐	7. 5YR5/6		炭化物点在、 酸化鉄堆積	
SK	4801	4	I	X2		220. 164	円	A	1.05	1.04	0.47	井戸	暗褐	10YR3/3	砂	褐色シルトブ ロック混入	
SK	4803	4	I	X2		220. 164	楕円	C	0.94	0.5	0.31	用途不明	暗褐～ 黒褐		砂		
SK	4804	4	I	X2		220. 164	円	A	0.56	0.54	0.14	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4806	4	I	X2		222. 220. 164	円	A	0.86	0.8	0.14	井戸					
SK	4808	4	I	X2		220. 164	楕円	A	(0.76)	0.9	0.26	方形土坑	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4809	4	I	X1		220. 164	楕円	D	0.7	0.65	0.09	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4810	4	I	X1		220. 164	楕円	D	(0.5)	(0.65)	0.09	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4815	4	I	X1		220. 164	楕円	D	1.65	1.03	0.12	方形土坑	暗褐	10YR3/3	砂	灰黄褐砂ブ ロックが混入	
SK	4816	4	I	X1		220. 164		C	(0.5)	(0.4)	0.17	用途不明	暗褐～ 黒褐		砂		
SK	4818	4	I	R21		217. 164	長方	C	(0.8)	0.59	0.17	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂	礫を含む	
SK	4819	4	I	R21		217. 164	楕円	B	0.67	0.55	0.1	浅い窪み	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4820	4	I	R21		217. 164	円	C	0.7	0.7	0.26	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4821	4	I	R21. W1		217. 164	楕円	D	0.9	0.65	0.1	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4822	4	I	W2. 3		217. 164	長方	D	1.15	0.7	0.2	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4823	4	I	W2. 3		217. 164	楕円	D	1	(0.45)	0.24	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂		
SK	4824	4	I	R23		217. 164	長方	F	1.4	0.95	0.36	用途不明	暗褐	10YR3/3	砂	褐色シルト～ 砂質土ブロッ クを含む	
SK	4849	4	I	R23		217. 164	円	A	0.95	0.93	0.34	用途不明					

屋代遺跡群 ⑤区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	5001	5	I	016		241. 233. 164	不整	G	1.21	1.06	0.21	墓坑?	黒褐	10YR3/1	シルト質	褐色土ブロッ ク、焼土、炭 化物が混入	骨 (40884. 40886. 419 17. 42922. 491073)
SK	5002	5	I	N5. 01		235. 242. 165	楕円	G	1.52	0.64	0.1	墓坑	黒褐	10YR3/2	シルト質	III-1層近似 土、大骨片を 含む	骨
SK	5003	5	I	016		241. 233. 164	長方	C	1.76	1.47	0.17	墓坑?	黒褐	10YR3/2	シルト質	褐色土、赤色 粒を含む	骨 (29662)
SK	5004	5	I	07		165		A	(0.7)	0.75	0.21	用途不明	黒褐	10YR3/2	シルト質	褐色土が混入 する	
SK	5005	5	I	07		164. 165	不整	C	1.52	0.66	0.17	墓坑	黒褐	10YR2/3	シルト質	褐色土ブロッ クが混入	骨 (484049. 491072)
SK	5006	5	I	S13		225. 164	不整	G	2.09	1.13	0.28	用途不明	黒褐	10YR2/3	砂質	褐色土が混入	
SK	5007	5	I	S13		225. 164	正方		0.88	(0.76)		用途不明	黒褐	10YR3/2	シルト質	褐色土が混入	
SK	5008	5	I	S13. 14		225. 164			(0.71)	(0.61)		用途不明	黒褐～ 褐	10YR2/3～ 4/4	砂質	焼土、炭化物 を含む	
SK	5009	5	I	S13		225. 164	不整		(1.91)	(0.97)		用途不明	黒褐	10YR3/2	シルト質	褐色土、焼 土、炭化物含 む	
SK	5010	5	I	S9. 10		228. 164	不整	A	1.25	0.64	0.33	用途不明	黒褐	10YR2/3	シルト質	褐色土ブロッ クが混入する	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
 窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-(16) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ⑤区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	5011	5	I	S5. 10		228. 164	楕円	G	0. 87	0. 59	0. 31	用途不明	暗褐	10YR2/4	シルト質	炭化物、焼土粒が混入する	
SK	5015	5	I	S3		164	円	B	0. 82	0. 79	1. 5	井戸					
SK	5016	5	I	S14	15C	230. 225. 164	楕円	C	1. 52	1. 23	2. 58	井戸	にぶい蓋		シルト	炭化物を含む	
SK	5017	5	I	S22		225. 164	円		1. 05	0. 99		用途不明	黒		砂		
SK	5018	5	I	S14		231. 228. 164	楕円		(0. 95)	1. 03		井戸	黄褐	10YR5/6			
SK	5019	5	I	S14. 19		230. 225. 164	円	C	1. 44	1. 34	2. 04	井戸?	暗褐	10YR3/3	砂質		
SK	5020	5	I	S23		230. 225. 164	円	C	0. 91	0. 9	2. 17	井戸					骨 (4106), 石製円板
SK	5024	5	I	S23		225. 164	不整		(1. 41)	(0. 4)		墓坑					
SK	5025	5	I	S18		225. 164	円	C	0. 71	0. 66	0. 37	用途不明	暗褐	10YR3/3			
SK	5028	5	I	S19		225. 164	円	G	0. 86	0. 77	0. 2	用途不明	黒褐	10YR3/1		焼土粒を含む	
SK	5030	5	I	S10		228. 164	楕円	C	1. 08	0. 77	0. 23	用途不明					
SK	5031	5	I	S9. 10	15C	228. 164	不整	C	1. 22	0. 81	0. 41	用途不明					
SK	5032	5	I	S23		225. 164	楕円		1. 07	(0. 6)		用途不明	黒		砂		
SK	5034	5	I	S18. 19		225. 164	円		1. 19	(0. 61)		用途不明	黒褐	10YR3/2			
SK	5035	5	I	S23		225. 164	円	A	1. 1	1. 04	0. 29	用途不明				ブロック土の混合	
SK	5052	5	I	N14. 19		241. 232. 164	楕円	B	1. 29	1. 17	3. 14	井戸					
SK	5071	5	I	N25		241. 233. 164	不整	C	0. 52	0. 48	0. 15	墓坑					骨 (471032)
SK	5082	5	I	S11		224. 227. 164	円	C	0. 92	0. 91	0. 14	用途不明	褐灰	10YR5/1	シルト	明黄褐土ブロックが混入	
SK	5083	5	I	S11. 12		224. 164	円		1. 04	0. 86		井戸?	黒		砂		
SK	5104	5	I	S4		231. 228. 164	正方	B	1. 73	1. 73	2. 17	井戸					曲物
SK	5109	5	I	S18		225. 164	正方	C	1. 81	1. 77	0. 88	用途不明	黒		砂		
SK	5135	5	I	S24		225. 164			(0. 5)	(0. 4)		用途不明					
SK	5143	5	I	S11		224. 164	不整	B	0. 98	0. 85	0. 55	柱穴状					
SK	5146	5	I	S17		224. 164	円	C	0. 76	0. 73	0. 36	井戸					
SK	5169	5	I	S4. 5		228. 164	不整		2. 05	(1. 58)		墓坑?					骨 (8259)
SK	5176	5	I	O11		221. 233. 164	円		0. 62	0. 62		井戸					
SK	5425	5	I	S23		230. 225. 164	円	C	0. 95	0. 9	1. 63	井戸					
SK	6038	5	I	M15. 20		229. 164			(1. 32)	(0. 92)		用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質		
SK	6040	5	I	M20		231. 229. 164	楕円	B	1. 9	1. 62	1. 16	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	下層に黄褐土ブロックがマール状に混入	
SK	6049	5	I	R5		227. 164	正方		0. 88	(0. 7)		浅い窪み	褐	10YR4/4			
SK	6050	5	I	R5		227. 164	円		0. 8	(0. 68)		浅い窪み	褐	10YR4/4			
SK	6057	5	I	M19		231. 229. 164	円	C	0. 72	0. 63	0. 8	井戸					
SK	6068	5	I	M15. 20		229. 164	楕円	C	1. 66	1. 22	0. 38	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	黄褐土ブロックがマール状に混入	
SK	6069	5	I	M15		229. 164	不整	G	1. 5	1. 37	0. 8	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	下層に黄褐土がマール状に混入する	
SK	6086	5	I	R3		230. 226. 164	円		0. 5	0. 46		墓坑?	黒褐	10YR3/2			骨 (1002)
SK	6095	5	I	R8		226. 164	正方		1. 09	1. 08		井戸?	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6109	5	I	R10		230. 223. 164	円	F	1. 82	1. 77	1. 4	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	底部に褐色土ブロック混入	
SK	6115	5	I	R7		226. 164	正方	G	0. 96	0. 92	0. 27	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6116	5	I	R12		231. 226. 164	楕円		1. 4	1. 24		井戸					
SK	6118	5	I	R12	15C前	222. 221. 164	円	C	1. 1	1. 09	1. 84	井戸					
SK	6119	5	I	R12		222. 221. 164	楕円	C	1. 03	0. 83	1. 34	井戸?	黒褐	2. 5Y3/1	砂質		
SK	6120	5	I	R12		222. 221. 164	不整	C	0. 86	0. 76	1. 52	井戸?	黒褐	2. 5Y3/1	砂質		
SK	6121	5	I	R12. 17		222. 221. 164	円		1. 28	1. 22		井戸					
SK	6123	5	I	R13		231. 226. 164	円	C	0. 88	0. 8	1. 56	井戸?	黒褐	2. 5Y3/1	砂質		
SK	6126	5	I	R13		223. 164	長方	C	0. 84	0. 52	0. 18	用途不明	黒褐				
SK	6135	5	I	R13~18		221. 164	円	F	1. 18	1. 06	0. 52	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6137	5	I	R13. 18		223. 164	長方	C	1. 45	1. 11	0. 29	用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質		
SK	6140	5	I	R18		230. 223. 164	不整		1. 04	1		井戸					
SK	6141	5	I	R18		222. 221. 164	楕円		1. 9	1. 26		井戸					
SK	6142	5	I	R18		230. 223. 164	長方		(0. 78)	1. 14		用途不明	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6143	5	I	R18		223. 164	正方		0. 75	0. 74		井戸	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	骨 (2038, 2039)
SK	6144	5	I	R17		221. 164	正方		0. 95	0. 91		井戸	黒褐	2. 5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	

表28-17) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ⑤区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	6145	5	I	R17.18		221.164	楕円	G	1.66	1.23	1.06	井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6147	5	I	R17		221.164	円		1.1	1		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6148	5	I	R18.19	15C中～後	223.164	不整		1.33	1.26		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6150	5	I	R18.19		223.164	楕円		1.18	1.07		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6153	5	I	R19		223.164	長方		1.65	1.4		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6159	5	I	R14		223.164	長方	C	0.55	0.41	0.14	墓坑	黒褐	2.5Y3/1	砂質		骨 (2029.3041)
SK	6167	5	I	R13.18		230.223.164	不整	C	1.61	1.08	0.64	用途不明					
SK	6168	5	I	R18		223.164	正方		0.95	(0.25)		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6180	5	I	R17		221.164	円		0.95	0.87		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土、黒褐砂ブロックが混入	曲物
SK	6181	5	I	R17		221.164	不整		96	(0.75)		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6182	5	I	R17		221.164	円		1.16	1.13		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6187	5	I	R17.22		221.164	円		1.03	0.92		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6197	5	I	R18.23		223.164	不整		1.55	1.17		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6199	5	I	M20		229.164	楕円		(0.54)	0.54		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6200	5	I	M20		229.164	不整	C	0.53	0.49	0.24	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6201	5	I	M20		229.164			1.81	(1.05)		用途不明	灰黄褐	10YR6/2	砂質		
SK	6202	5	I	M15		229.164			0.5	0.63		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6203	5	I	M15		229.164	円	C	1.25	1.25	0.23	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6205	5	I	R10		223.164	正方	C	0.92	0.91	1.58	井戸?					
SK	6207	5	I	M15	13C～14C	231.229.164	円	F	1.55	1.32	1.63	井戸					
SK	6214	5	I	R17		221.164	円	C	0.8	0.75	1.32	井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6219	5	I	M20		231.229.164			1.09	(0.8)		井戸?					
SK	6220	5	I	M20		229.164	不整	G	0.89	0.83	0.37	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6221	5	I	M20		229.164	楕円	C	0.84	0.72	0.43	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6222	5	I	M20		229.227.164	円		0.53	0.53		井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6225	5	I	M15.20		229.164	楕円		1.64	(0.78)		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6226	5	I	M19		229.164	円	B	0.73	0.65	0.73	柱穴状	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6232	5	I	R8		231.226.164	正方		1.31	1.29		井戸					曲物
SK	6233	5	I	M25		227.164	楕円		(0.96)	(0.75)		墓坑	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロック、鉄分含	骨 (3043)
SK	6235	5	I	R2		226.164	円		0.82	0.75		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6236	5	I	R2	13C～14C前	231.226.164	楕円		1.25	0.99		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6237	5	I	R2		226.164	円		0.89	0.8		井戸?	褐～黒褐	10YR4/4～2.5Y3/1	シルト～砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6238	5	I	R2		226.164	円	C	0.59	0.57	0.5	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6241	5	I	R7		231.226.164	円	G	2.35	2.28	1.17	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6250	5	I	R7		226.164	長方		(0.86)	0.92		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6251	5	I	R7		226.164	円	F	0.55	0.51	0.54	柱穴状	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6259	5		N7								用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6271	5	I	R11		221.164	円	C	0.96	0.95	0.68	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6272	5	I	R11	15C前半	221.164	楕円		(0.85)	0.84		用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6276	5	I	R16		221.164	楕円		1.3	1.07		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6278	5	I	R16		221.164	楕円	G	0.97	0.82	0.53	柱穴状	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入し、黒褐土が柱痕状となる	
SK	6279	5	I	R16		221.164	不整	G	1.48	1.22	0.77	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6280	5	I	R16	16C後半	221.164	正方		1.87	1.76		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6281	5	I	R16		221.164	楕円	C	0.75	0.56	0.62	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6283	5	I	R16		221.164	楕円		(0.64)	0.88		井戸?	黒褐	2.5Y3/1	砂質	褐色土ブロックが混入する	
SK	6347	5	I	R7		226.164	長方		(0.52)	0.43		柱穴状	黒褐	2.5Y3/1	砂質	下層に褐色土ブロック混入	
SK	6411	5	I	M18		164	不整	B	0.85	0.82	(1.2)	井戸	黒褐	2.5Y3/1	砂質		
SK	6529	5	I	N7		232.164	円	C	1.42	(1.2)	0.84	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	砂質		

屋代遺跡群 ⑥区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	7003	6	I	I21		234.164.165	不整		1.13	0.96		火葬施設					骨 (1001)
SK	7004	6	I	I22.N2		234.164.165	不整	D	0.9	0.66	0.16	用途不明	暗褐	10YR3/4	砂	褐色土ブロックが混入	

第4章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III-2層上面検出の遺構と遺物出土状況2
窪河原遺跡の遺構と遺物出土状況1 (中世)

表28-(18) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

屋代遺跡群 ⑥区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	7005	6	I	N2		234.164.165	不整	D	0.73	0.45	0.09	浅い窪み	暗灰黄	2.5Y5/2	砂質	底部に褐鉄分が集積	
SK	7008	6	I	N2		234.164.165	円	C	0.35	0.25	0.1	柱穴状					
SK	7011	6	I	I21		234.165	楕円	D	0.77	0.51	0.41	用途不明					
SK	7012	6	I	N1		234.164.165	円		0.7	0.6		用途不明					
SK	8001	6	I	N4		235.165	円	C	1.08	1.01	0.7	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	ブロック混合	珪層砂、黄褐土、褐鉄ブロック	
SK	8002	6	I	N12		232.164	楕円	C	0.65	0.52	0.2	用途不明	暗褐	10YR4/3	砂質		
SK	8003	6	I	N7		232.164	楕円	A	0.43	0.3	0.04	浅い窪み	黒褐	10YR3/2		焼土、炭化物粒子が多量に混入する	
SK	8013	6	I	N3		234.164.165	円		0.75	0.71		用途不明					

窪河原遺跡 H2区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	1	H2	VI	G25		240.168	円		0.44	0.42		柱穴状					
SK	2	H2	VI	G25		240.168	円	A	0.4	0.38	0.12	柱穴状					
SK	3	H2	VI	G25		242.240.168	楕円	C	0.72	0.64	0.34	用途不明					
SK	4	H2	VI	G25		242.240.168	不整	D	1.36	0.86	0.32	用途不明					
SK	5	H2	VI	G19		240.168	楕円	C	0.3	0.14	0.1	柱穴状					
SK	6	H2	VI	G19		240.168	楕円	A	1.2	0.94	0.24	用途不明	褐～暗褐	7.5YR4/4～3/4		炭化物、砂混入	
SK	7	H2	VI	G10	13C	239.168	楕円		4	0.96	0.53	浅い窪地					
SK	8	H2	VI	G9		238.168	円	E	0.52	0.48	0.26	柱穴状	褐	7.5YR4/6	砂	炭化物混入	
SK	9	H2	VI	G9		238.168	円	C	0.6	0.56	0.32	用途不明	にぶい黄褐	7.5YR5/4	砂	炭化物混入	
SK	10	H2	VI	G9.14		238.168	楕円	G	1.32	0.94	0.44	用途不明	にぶい黄褐	7.5YR5/4	砂質		
SK	11	H2	VI	G9		238.168	楕円	B	0.6	0.4	0.55	柱穴状					
SK	12	H2	VI	G9		238.168	楕円	B	0.76	0.68	0.42	柱穴状	褐	7.5YR4/3		炭化物ブロック混入	
SK	13	H2	VI	G9		238.168	円		0.48	48		柱穴状	暗褐	7.5YR3/4		炭化物混入	
SK	14	H2	VI	G3		238.168	楕円	A	1.1	0.76	0.14	墓坑	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	小礫を含む	骨(3048.4072～4080.5081～5088)
SK	16	H2	VI	G10～H11	13C～14C前	239.168	楕円	D	5.1	3.6	0.5	廃棄土坑					骨(3049.3050). 遺物多い
SK	17	H2	VI	G10		239.168	楕円	A	0.8	0.6	0.19	墓坑?	暗褐	10YR3/3		炭化物粒子混入	骨(4069)
SK	18	H2	VI	G13		238.168	円		1.7	1.7		用途不明					
SK	19	H2	VI	G4		242.238.168	楕円	A	1.58	0.84	0.28	墓坑					骨(2023～2034)
SK	20	H2	VI	G3.4		242.238.168	楕円	C	0.8	0.66	0.52	墓坑?	にぶい黄褐	10YR4/3	粗粒砂～粗粒砂		骨(3052)
SK	21	H2	VI	G3.4		238.168	楕円	A	0.72	0.64	0.13	墓坑?	にぶい黄褐	10YR4/3		焼土、炭化物、骨片含む	骨(3053)
SK	22	H2	VI	G4		238.168	楕円	A	0.78	0.7	0.08	墓坑					骨(3058.3059)
SK	23	H2	VI	B23		238.168	楕円	G	1.14	0.5	0.12	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3		火葬に焼土ブロックを含む	
SK	24	H2	VI	G3.4		238.168	楕円		0.84	0.66		用途不明					
SK	25	H2	VI	G4		238.168	楕円	A	0.8	0.72	0.12	墓坑					骨(4061～4065)
SK	26	H2	VI	G3		238.168	楕円	A	0.38	0.32	0.12	用途不明					
SK	27	H2	VI	G3		238.168	楕円	C	0.9	0.48	0.18	用途不明					
SK	28	H2	VI	G4		238.168	楕円	A	0.64	0.48	0.18	用途不明					
SK	29	H2	VI	G4		238.168	楕円	A	0.78	0.6	0.16	用途不明					
SK	30	H2	VI	C11		168	楕円	A	1.2	0.6	0.12	墓坑?	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	茶褐腐植土ブロックを含む	骨(4070)
SK	31	H2	VI	G10		239.168	楕円	D	1.22	0.9	0.4	用途不明	暗褐～灰黄褐	10YR3/3～4/1		焼土、炭化物粒子、灰色ブロック混入	
SK	32	H2	VI	G10		242.239.168	楕円	C	0.7	0.6	0.46	用途不明	灰褐～暗褐	10YR4/1～3/3		炭化物粒子混入	
SK	33	H2	VI	G10		239.168	楕円	C	0.88	0.8	0.62	用途不明					
SK	34	H2	VI	G15		239.168	楕円	A	1.2	0.94	0.14	用途不明	暗褐	10YR3/3		焼土、炭化物粒子混入	
SK	35	H2	VI	G10		239.168	楕円	A	0.64	0.44	0.14	用途不明					
SK	36	H2	VI	H11		239.168	楕円	C	1.6	(1)	0.56	用途不明					骨(3054)
SK	37	H2	VI	G4		238.168	楕円	G	0.7	0.56	0.2	用途不明					
SK	38	H2	VI	G14.15		242.240.168	楕円	A	4.2	2.6	0.48	用途不明	褐	7.5YR5/4	砂		
SK	39	H2	VI	G15		239.168	楕円	D	2.26	1.54	0.42	墓坑	暗褐～明褐	7.5YR3/4～5/6	砂	焼土、炭化物混入	
SK	40	H2	VI	H21		240.168			1.75	1.4	0.17	礫床墓?					骨・3055.3056.3060
SK	41	H2	VI	G3		238.168	楕円	G	0.7	0.32	0.16	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3			
SK	42	H2	VI	G4		238.168	楕円		0.6	0.36		用途不明					

表28-10) 墓坑・井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (中世)

窪河原遺跡 H2区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	43	H2	VI	H21		240.168			(1)	(0.3)		用途不明					
SK	44	H2	III	U23		168	楕円	A	0.95	0.67	0.14	墓坑					骨 (3057)
SK	45	H2	VI	G15		239.168	楕円	F	1.42	1.04	0.46	用途不明	暗褐~褐	7.5YR3/4~5/6	砂	炭化物混入	
SK	46	H2	VI	G3		168						柱穴状					
SK	47	H2	VI	G10		242.238.168	不整	G	1	0.9	0.28	用途不明					
SK	48	H2	VI	G15		238.168	楕円		0.6	0.54	0.05	用途不明					
SK	49	H2	VI	G15		238.168	楕円	A	0.5	0.46	0.16	用途不明					
SK	50	H2	VI	G15		238.168	楕円		0.6	0.46	0.12	用途不明					
SK	51	H2	VI	G8		238.168	楕円		0.9	0.72		用途不明					
SK	52	H2	VI	G13.14		238.168	楕円		0.52	0.46	0.27	用途不明					
SK	56	H2	VI	G10		238.168	楕円		0.5	0.36	0.16	用途不明					
SK	58	H2	VI	B25		239.168	円		0.62	0.6		用途不明					
SK	59	H2	VI	B25		239.168	円		0.6	0.6		用途不明					
SK	60	H2	VI	H1		239.168	円		0.78	0.76		用途不明					
SK	61	H2	VI	H6		239.168			1.1	(0.7)		用途不明					

窪河原遺跡 H5区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SK	101	H5	V	J17		242.237.167	円	A	0.98	0.86	0.22	墓坑?					骨 (6105.7136)
SK	102	H5	V	J12		237.167	楕円	A	1.08	0.7	0.16	墓坑	褐	7.5YR4/4	砂		骨・5097.6102.6103
SK	103	H5	V	J12		237.167	不整	B	1.7	0.74	0.18	火葬施設?	褐	7.5YR4/3	砂	焼土、灰が混入	骨・5089.5090.5092.6106.6108.7135
SK	104	H5	V	J12		237.167	不整	G	1.46	1.18	0.33	火葬施設?	褐	7.5YR4/4	砂	焼土、灰が混入	骨・5098.7134.8142
SK	105	H5	V	J13		237.167	不整	G	1.1	1.06	0.23	火葬施設?	褐	7.5YR4/3	砂	焼土、灰が混入	骨 (6120.7123)
SK	106	H5	V	J13		242.237.167	楕円	A	0.94	0.84	0.19	墓坑?	褐	7.5YR4/4	砂		骨 (7126)
SK	107	H5	V	J6.11		237.167	楕円	A	1.7	0.94	0.24	用途不明	褐	7.5YR4/3		焼土、炭化物が混入	
SK	108	H5	V	J11		236.167	楕円	A	2	0.84	0.26	用途不明	黒褐	7.5YR3/2	砂	炭化物微量混入、石(軽石)混入	
SK	109	H5	V	I15.J11	13C~14C前	236.167	楕円	A	1.94	1.08	0.24	用途不明	褐	7.5YR4/3	砂	炭化物、焼土、玉砂利混入	硯
SK	110	H5	V	I5		236.167	円		1.1	1.06		墓坑					焼骨 (8147)
SK	111	H5	VI	L1		168	長方	A	1.03	0.55	0.16	用途不明					
SK	112	H5	V	I15		242.236.167	楕円	A	1.56	0.96	0.36	用途不明					
SK	113	H5	V	I15	13C~14C前	236.167	楕円	A	1.8	1.24	0.4	用途不明				炭化物混入	骨 (7133)
SK	114	H5	V	I14.15		236.167	楕円	C	(1.3)	1.1	0.54	用途不明					
SK	115	H5	V	I15.J11		242.236.167	楕円	A	3	2.6	0.16	用途不明					
SK	116	H5	V	I9~15	13C	242.236.167	不整	A	4.8	4.7	0.44	用途不明	褐	7.5YR4/3	砂質		
SK	118	H5	V	I15		236.167	楕円	C	0.57	0.35	0.3	用途不明					
SK	119	H5	V	I15		236.167		B	0.42	(0.23)	0.45	用途不明					
SK	121	H5	V	J6		236.167	楕円	A	1.6	1.5	0.24	用途不明				炭化物混入	
SK	122	H5	V	I15		236.167	楕円	A	1.14	0.9	0.2	用途不明	黒褐	7.5YR3/2		炭化物混入	
SK	124	H5	V	I15		242.236.167	楕円	B	1.4	1.12	0.9	用途不明					骨・7131.7140.凹石
SK	125	H5		I15		236.167	楕円	A	2.3	1.34	0.3	用途不明	黒褐	7.5YR3/2		灰色土、炭化物が混入	
SK	127	H5	V	I15		236.167	楕円	A	1.66	1.34	0.36	用途不明	暗褐			灰色土、炭化物が混入	
SK	130	H5	V	J6.11		236.167	不整	A	2.12	1.8	0.26	用途不明	黒褐			炭化物混入	
SM	101	H5	V	J17		237.167			1.14	0.64	0.04	墓坑					骨・1001~1020.2021.2022.7172~7130.8141.8143
SM	102	H5	V	J12		237.167			1.5	1	0.36	火葬墓					骨・5091.5093~5095.5099.6109.6110.6114~6117
SM	103	H5	V	J12	13C末~14C中	237.167			1.4	1.2	0.38	火葬墓					骨・4066.5096.6112.6113.7138
SM	104	H5	V	J12		237.167			1.6	1.3	0.48	火葬墓	褐	2.5YR4/3	砂質		骨・6111.6113.6118.7137

窪河原遺跡 H6区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	土器時期	図版番号	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SM	1001	H6	V	T1		166	不整	A	1.05	0.73	0.18	火葬施設					骨 (4067)

表29 炉・焼土跡 (SF) 一覧 (中世)

遺跡	地区	遺構記号	遺構番号	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	色調	土色鑑定号	土性	堆積状況ほか	特記事項
屋代遺跡群	4	SF	4001	IV	H7	205, 163	屋外炉跡?	楕円	0.7	0.35						
	4	SF	4501	IV	B5, C1	207, 163	火葬施設	不整	2.28	1.24	0.26	褐色	10YR4/1	砂質	黒褐色、にぶい黄褐色ブロックが混入	骨 (2026, 5086)
	4	SF	4502	IV	B10	207, 163	用途不明	不整	1.45	0.8	0.1	褐色	10YR4/1	褐色	炭化物粒を多量を含む	
窪河原遺跡	H2	SF	1	VI	B25	239, 168	用途不明	不整	0.44	0.4	0.06	暗褐色	10YR3/3	砂質	炭化物多量混入、炭化物混入	
	H2	SF	2	VI	G10, H6	242, 239, 168	用途不明	楕円	5.5	0.2	0.06					
	H2	SF	3	VI	G10, H6	239, 168	用途不明	不整	0.54	0.22	0.06	暗褐色、赤褐色	10YR3/3, 5YR4/6		炭化物、焼土粒子混入	
	H2	SF	4	VI	G10	239, 168	用途不明	不整	0.66	0.41	0.08					
	H2	SF	5	VI	G10	239, 168	用途不明	不整	0.63	0.38	0.06					
	H2	SF	6	VI	G10	239, 168	用途不明	楕円	0.24	0.16						
	H2	SF	7	VI	G8, 9	238, 168	用途不明	楕円	0.84	0.67	0.1	褐色	7.5YR3/4	細粒砂	焼土混入	
	H2	SF	9	VI	G25	240, 168	用途不明	楕円	0.79	0.38	0.3	褐色	7.5YR4/4			
	H2	SF	10	VI	G25	240, 168	用途不明	楕円	0.4	0.29	0.1	褐色	7.5YR4/6		焼土混入	
	H2	SF	11	VI	G20	240, 168	用途不明	不整	1.15	0.65	0.33	褐色~暗褐色	7.5YR4/4~3/3		炭化物、焼土混入	
	H2	SF	12	VI	G10	239, 168	用途不明	不整	0.64	0.42	0.1					
H2	SF	13	III	U25	168		用途不明	不整	0.5	0.3		暗褐色	7.5YR3/3	砂質	炭化物90%混入	
H2	SF	14	III	U23	168		用途不明	不整	0.31	0.31	0.13	暗褐色~赤褐色	10YR3/3~5YR4/6		炭化物、焼土粒子混入	
H2	SF	16	VI	G8, 9	238, 168		用途不明	不整	0.72	0.68						

表30 性格不明の遺構 (SX) 一覧 (中世)

遺跡	地区	遺構記号	遺構番号	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	色調	土色鑑定号	土性	堆積状況ほか	特記事項	
																	断面形状
屋代遺跡群	4	SX	4001	IV	H2, 3, 7, 8	205, 163		方形?	(7.4)	6.8	0.1	黒褐色	5YR3/1	砂質			
	4	SX	4002	IV	H11, 12, 17	200, 163	区画?	凹状	8.5	(6.45)	0.1	黒褐色	10YR2/1	砂質 (III-1, 2層土)	灰褐色、にぶい黄褐色、黒、灰黄褐色などのブロックが混入		
	4	SX	4003	IV	G8, 13	208, 213, 163		方形?	12.56	(2.88)							
	6	SX	8001	I	I24	241, 235, 165		楕円	2.72	1.76	0.24						五輪塔

表31 (1) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (中世)
 更埴条里遺跡 K地区

遺構記号	土器時期	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土色鑑定号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 901		K	J22, 01~6	180, 156	区画?	ほぼ直線的	直線的	北東-南西	14	0.6	0.15	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	酸化鉄を含む	
SD 931		K	015, 20, K16, 21, P1, 6	179, 177, 156	区画	直線的	直線的	北北西-南南東	37	0.96	0.22			III-1層土		
SD 932		K	T5, P1, 6, 015~25	174, 156	区画	直線的	直線的	北北西-南南東	35.5	0.9	0.16			III-1層土		土壌
SD 933		K	010~18, K6~11	179, 176, 156	区画	直線的	直線的	西南西-南	47	0.4	0.15			III-1層土		
SD 934		K	020, 25, T5, 10	176, 156	区画	直線的	直線的	北北西-南南東	23.2	0.6	0.1					
SD 937		K	P22	182, 156	区画?	直線的	直線的	北北西-南	4.3	0.4						
SD 938		K	P22	184, 156	区画?	直線的	直線的	西-東	3	0.96						
SD 947	古代15期~	K	T13, 18	173, 156	区画?	直線的	直線的	北北西-南	8.6	0.5	0.22			10YR4/4	黒褐色ブロックが混入	
SD 948		K	T14, 19	173, 156	区画?	直線的	直線的	北北西-南南東	6	0.5	0.1			10YR4/4	黒褐色ブロックが混入	
SD 9121		K	F5	174, 156	区画?	直線的	直線的	北北西-南南東	35.7	0.8	0.22					

断面分類一表10参照

表31-2 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (中世)
屋代遺跡群 ①区

遺構 記号	遺構 番号	土器時期	所在地 区分	中地区	図版番号	区分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 1	197.158		Ⅶ	T16~21	197.158	区画?	ほぼ直線的	A	西→東	11.5	0.6	0.12	褐	10YR4/4	Ⅲ-1層主体	Ⅲ-2層度が混じる	
SD 2	158		Ⅶ	S24.25	158	水路?	直線的		西→東	5	2.1	0.2	黒褐	10YR3/2	細粒砂~粗粒砂	ラミナあり、炭化物、Ⅳ層土プロック混入	
SD 3	158		Ⅶ	S24.25	158	水路?	直線的		西→東	5.3	0.8	0.19	黒褐~褐灰	10YR3/1~4/1	中粒砂	鉄屑、マンガンノズル、Ⅲ-2層土混じる	
SD 4	158		Ⅶ	X5	158	品?	直線的		北→南	2.5	0.4	0.1	砂質		砂質	Ⅲ-1層土が混じる	
SD 5	158		Ⅶ	X5	158	品?	直線的		北北西→南南東	2.8	0.4	0.1	砂質		砂質	Ⅲ-1、2層の混じり	
SD 6	158		Ⅶ	X5	158	品?	直線的		北→南	1.8	0.35	0.13	砂質		砂質	Ⅲ-1層土が混じる、炭化物が微量混入	
SD 7	158		Ⅶ	X4	158	品?	直線的	C	北→南	3.7	0.4	0.12	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主体(粗粒砂)	炭化物が微量混入	
SD 8	157		Ⅶ	X10	157	品?	直線的	D	北北西→南南東	5.5	0.35	0.1				Ⅲ-2層、黒褐土混合、暗褐土プロック混入	
SD 9	157		Ⅶ	X10	157	品?	直線的		北北西→南南東	6.5	0.4	0.12				Ⅲ-2層砂と黒褐土の混じり、炭化物が混入	
SD 10	157		Ⅶ	X9.10	157	品?	直線的	D	北北西→南南東	7.8	0.4	0.09				Ⅲ-2層砂と黒褐土の混じり、炭化物が混入	
SD 11	157		Ⅶ	X9.10	157	区画?	直線的	D	西→東	8.3	0.7	0.21	黒褐	10YR3/1	中粒砂	炭化物が混入	
SD 12	197.158		Ⅶ	Y1. X5	197.158	区画?	ほぼ直線的		西→東	4	0.94	0.25	黒褐	10YR2/2	中粒砂	炭化物が混入、Ⅲ-2層砂が混じる	
SD 13	157		Ⅶ	X9.15	157	品?	直線的		北北西→南南東	2.9	0.5	0.12	黒褐	10YR3/2	粗粒砂	炭化物が混入	
SD 14	192.157		Ⅶ	Y12	192.157	区画?	直線的	A	北→南	2.2	0.45	0.16	黒褐	10YR2/3	砂	炭化物、黄褐砂プロックが混入	
SD 17	192.157		Ⅶ	Y13	192.157	区画?	直線的		西南西→南	4.2	0.6	0.1					
SD 18	187.157		Ⅶ	X25. D5	187.157	区画?	一部で屈曲		北→南	10.5	0.4	0.24					
SD 23	12C中~13C初		Ⅶ	E23~25. A1. J2~5	186.157	区画?	やや蛇行		西→東	60	(7.6)						
SD 24	13C後~14C		Ⅶ	15. J1. 2. E18~24. A12~17	185.157	区画?	やや蛇行		西→東	65	2.2						1~10層面注文書付
SD 25	13C後~14C		Ⅶ	15. J1. E18~24. A12~17	185.157	区画?	やや蛇行		西→東	65	2.5	0.3					
SD 26	13C後~14C		Ⅶ	E21. 22	185.157	区画?	直線的		西→東	(16.5)	1.2						
SD 35	12C中~13C初		Ⅶ	E9~8. A1	190.157	区画	直線的		南西→北東	27.5	0.6	0.14					
SD 39	12C中~13C初		Ⅶ	Y5~15. V1	196.193.157	区画	一部で屈曲	E	東南東→南	22	2	0.44					
SD 50			Ⅶ	T23. 24	158	区画?	直線的		西→東	32	0.68	0.1					Ⅲ-1、2層砂の混入、炭土が混入
SD 52			Ⅶ	A6	191.157	区画?	直線的	A	南→北	5	0.48	0.13	暗褐	10YR3/3	Ⅲ-1層主体	Ⅲ-2、Ⅳ層プロックを含む	
SD 55			Ⅶ	A7	191.157	水路?	一部で屈曲		北→南	7	1.3	0.13	黒褐~暗褐	10YR2/3~3/3	Ⅲ-1層主体	Ⅲ-2、Ⅳ層プロック、炭化物を含む	
SD 59			Ⅶ	M19. 20. O13~19	158	水路?	ほぼ直線的	D	西→東	38.5	3.4	0.1	暗褐	10YR3/4	細粒砂		
SD 65			Ⅶ	R24. 25	158	区画?	直線的	B	西→東	4.75	0.9	0.25	暗褐	10YR3/4	砂		
SD 67			Ⅶ	T1	198.158	区画?	直線的		西北西→南	3.8	0.16	0.08	暗褐	10YR3/4	細粒砂		
SD 397			Ⅶ	E3. Y23	188.157	区画?	一部で屈曲		北→南南西	3	0.25	0.12					
SD 398			Ⅶ	E7. B	188.157	区画?	直線的		北→南	6	0.6	0.15					
SD 399			Ⅶ	E7	188.157	区画?	直線的		北→南	1.6	0.45						

表31-(3) 溝・自然流路跡(SD)一覽(中世)
屋代遺跡群②区

遺構記号	遺構番号	土器時期	仮地区	大地地区	中地区	図版番号	区分	平面形	断面形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 2222a	159	2 V	S19.24, X4.9	2 V			区画?	直線的	直線的	北→南	(20)	0.7	0.13	黒褐色		砂		
SD 2222b	159	2 V	S19.20	2 V			区画?	直線的	A	西→東	38.5	3.4	0.1	黒褐色		砂		
SD 2201	159	2 VII	D19.24	2 VII			区画?	直線的	A	北→南	(8)	0.3	0.2	暗褐色	10YR3/4	砂質		
SD 2209	159	2 V	X9~18, Y6~9	2 V			水路?	一部で屈曲		南西→東	(54)	(1.3)	0.2	暗褐色	10YR2/3	中粒砂~細粒砂		
SD 2211	159	2 V	X13.18	2 V			水路?	ほぼ直線的		北→南西	6	0.6		褐色		砂		
SD 2212	159	2 V	X8~13	2 V			水路?	直線的	A	北東→南西	(10)	0.8	0.09	褐色	10YR4/4	砂質		
SD 2213	159	2 V	X8~13	2 V			水路?	湾曲	D	西→南西	24	1.3	0.3	褐色	10YR4/4	砂質		
SD 2214	159	2 V	X8.13	2 V			水路?	直線的		北東→南西	(6.5)	1.8		褐色		砂		
SD 2219	159	2 V	X3, S19~23	2 V			水路?	ほぼ直線的		北北東→南南西	(25)	3	0.15	褐色		砂		
SD 2220	159	2 V	S18.23, X3	2 V			水路?	ほぼ直線的	D	北→南	(20)	3	0.15	黒褐色		砂		
SD 2221	159	2 V	S18.23	2 V			区画?	ほぼ直線的	A	北→南	(23)	3	0.15	黒褐色		砂		
SD 2223	159	2 V	X3.4	2 V			区画?	直線的	E	西→東	(4)	1.2	0.06	褐色		砂		
SD 2224	159	2 V	X8	2 V			水路?	直線的		西→東	(6)	1.1	0.15	褐色		砂		
SD 2225	159	2 V	X6.13	2 V			水路?	ほぼ直線的	A	北東→南西	(11)	0.8	0.06	黒褐色		砂		
SD 2226	159	2 V	S19.24	2 V			区画?	ほぼ直線的	B	北→南	(20)	1.2	0.02	黒褐色		砂		
SD 2228	159	2 V	S19.24	2 V			区画?	ほぼ直線的	A	北→南	(11)	0.5	0.1	黒褐色	10YR2/2~3/3	砂		
SD 2229	159	2 V	X4.5, Y1	2 V			区画?	直線的	B	西→東	(2.5)	0.5	0.05	黒褐色		砂		
SD 2230	159	2 V	X4.5	2 V			区画?	直線的	B	北→南	8.5	0.5	0.1	黒褐色		砂		
SD 2231	159	2 V	S24.25	2 V			区画?	直線的	A	北北東→南南西	(17)	1.5	0.6	黒褐色		砂		
SD 2233	160	2 V	T14~19, Y4	2 V			区画?	直線的	D	北→南	10	0.6		黒褐色		砂		
SD 2245	160	2 V	S4.9	2 V			水路?	直線的		北北西→南	13	0.8						
SD 2246	160	2 V	S5~10	2 V			水路?	ほぼ直線的		北北東→南南西	7	0.5	0.33					
SD 2247	160	2 V	S5~10	2 V			水路?	直線的	E	北東→南西	3	0.7	0.45					
SD 2248	160	2 V	S9	2 V			水路?	直線的	D	北→南	(4)	0.6	0.35					
SD 2250	159	2 V	S14	2 V			区画?	直線的	A	西→東	(11.5)	1.1	0.05			砂質(III-1層土)		
SD 2282	159	2 VI	Y5, U1.2	2 VI			区画?	直線的	A	西→東	(11)	0.6	0.15	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2283	159	2 VI	U2, 6.7	2 VI			区画?	直線的	A	西→東	4.8	0.35	0.05	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2403	158	2 VII	O3	2 VII			島?	直線的	A	西→東	3.2	0.5	0.08	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2404A	158	2 VII	J23	2 VII			島?	直線的	B	西→東	1.7	0.5	0.22	黒褐色		砂質		
SD 2404B	158	2 VII	J23	2 VII			島?	直線的	D	西→東	6.5	0.5	0.08	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2405	158	2 VII	J23	2 VII			島?	直線的	B	西→東	6.8	0.5	0.15	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2406	158	2 VII	J23	2 VII			島?	直線的	E	西→東	6.2	0.6	0.08	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2407	158	2 VII	J23	2 VII			島?	直線的	B	西→東	5.8	0.5	0.08	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2408	158	2 VII	J18	2 VII			島?	直線的	A	西→東	1.15	0.25	0.06	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2409	158	2 VII	J18	2 VII			島?	直線的	B	西→東	4.8	0.6	0.1	黒褐色	10YR2/3	砂質		
SD 2410	158	2 VII	J25	2 VII			島?	直線的	B	西→東	3.7	0.6	0.06	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 2411	158	2 VII	F21, 22, K1.2	2 VII			島?	直線的	A	西→東	0.8	0.3	0.13	黒褐色		砂質	にょい、赤褐色砂が混入	
SD 2420	158	2 VII	O11	2 VII			区画?	直線的	B	北→南	2.2	0.4	0.15	黒褐色		砂質		
SD 2421	158	2 VII	O11	2 VII			区画?	直線的	D	北→南	2	0.7	0.18	黒褐色		砂質		
SD 2422	158	2 VII	O12, 13	2 VII			区画?	直線的	B	北→南	2	0.7	0.18	黒褐色		砂質		

屋代遺跡群③区

遺構記号	遺構番号	土器時期	仮地区	大地地区	中地区	図版番号	区分	平面形	断面形状	流路・溝方向	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 3003	161	3 V	E18~23	3 V			区画?	直線的	E	北北東→南南西	9.5	1	0.1	黒褐色		砂質(III-1層土)	褐色、暗褐色砂の混合	
SD 3004	161	3 V	E14~24	3 V			区画?	直線的	E	北→南	11	1	0.14	黒褐色		砂質(III-1層土)	褐色、暗褐色砂の混合	
SD 3005	161	3 V	E14, 19	3 V			浅い窪地	直線的	E	北→南	(9)	1.6	0.07	黒褐色	10YR2/2	砂質		

表31-1(4) 溝・自然流路跡(SD)一覽(中世)
屋代遺跡群 ③区

遺構 記号	遺構 番号	土器時期	仮 定 区 区	中地区	図版番号	区分	平面形	断面 形状	添路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 3006	161	3 V	E14~19	E19	161	浅い窪地	一部で屈曲 直線的	A	南-北-東	17	1.5	0.08	黒褐色	10YR2/2	砂質		
SD 3007	161	3 V	E19	E19	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	北北西-南南東	5	2.2	0.05	黒褐色	10YR2/3	中粒砂		
SD 3008	161	3 VI	E15, A11	E15, A11	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	東-西	(5)	0.6	0.03	黒褐色	10YR2/3	中粒砂		
SD 3009	161	3 III	Y25	Y25	161	浅い窪地	やや蛇行	E	北-南	6	0.4	0.07			砂質(III-1層土)		
SD 3011	161	3 IV	U12, 17	U12, 17	161	浅い窪地	不整	E	北北東-南南西	(8.3)	1.9	0.1			中粒砂		
SD 3012	161	3 IV	U12, 17	U12, 17	161	浅い窪地	不整	E	北北東-南南西	(8.3)	1.9	0.1			砂質(III-1層土)		
SD 3013	161	3 III	Y15~24	Y15~24	161	区画?	直線的	A	西-東	3.4	1.3	0.06	黒褐色		中粒砂		
SD 3014	161	3 III	Y18	Y18	161	浅い窪地	一部で屈曲	A	南-北-北西	3.7	0.4	0.04	黒褐色		砂質		
SD 3015	161	3 III	Y23, 24	Y23, 24	161	浅い窪地	一部で屈曲	A	南東-北西-南東	2.6	0.44	0.07	黒褐色	10YR2/3	中粒砂		
SD 3016	161	3 III	Y23	Y23	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	北東-南西	4.5	0.5	0.08	黒褐色	10YR2/3	中粒砂		
SD 3017	161	3 V	E3, 4, 8	E3, 4, 8	161	浅い窪地	不整	E	北西-南東-南西	(14)	2.9	0.1	黒褐色	10YR2/3	中粒砂		
SD 3019	161	3 VI	A12~17	A12~17	161	浅い窪地	不整	E	南西-東-南西	(18)	1.7	0.08	黒褐色	10YR3/2	中粒砂		
SD 3020	161	3 VI	A13, 18	A13, 18	161	浅い窪地	不整	E	西-東-南	6.5	2.3	0.16	黒褐色		砂質(III-1層土)		
SD 3021	161	3 V	E24, 25	E24, 25	161	浅い窪地	直線的	A	北東-南西	6.4	1.7	0.16	黒褐色	10YR3/2	中粒砂		
SD 3022	161	3 IV	A4~10	A4~10	161	水路?	直線的	A	東南東-西北西	(8.5)	1	0.12	黒褐色		砂質(III-1層土)		
SD 3023	161	3 III	Y19, 20	Y19, 20	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	北-南	4	0.3	0.05	黒褐色	10YR3/2	中粒砂		
SD 3024	161	3 V	J5, 10	J5, 10	161	浅い窪地	直線的	A	北-南	(12.5)	1.2	0.15			砂質(III-1層土)		
SD 3026	161	3 VI	A3	A3	161	浅い窪地	直線的	A	西-東	(3.7)	0.5	0.04			砂質(III-1層土)		
SD 3027	161	3 VI	A2, 3	A2, 3	161	浅い窪地	直線的	A	北北東-南南西	(5.9)	0.7	0.08			砂質(III-1層土)		
SD 3028	161	3 VI	A2	A2	161	浅い窪地	直線的	A	北-南	(2.6)	0.5	0.1			砂質(III-1層土)		
SD 3029	161	3 VI	A1	A1	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	北東-南西	(5)	1.6	0.08			砂質(III-1層土)		
SD 3030	161	3 V	E14	E14	161	区画?	直線的	E	北-南	4.6	0.75	0.15			砂質(III-1層土)		
SD 3031	161	3 V	E18	E18	161	浅い窪地	直線的	E	西-東	3.4	0.5	0.1			砂質(III-1層土)		
SD 3203	162	3 VI	P9	P9	162	区画?	直線的	A	南-北-西	4.3	0.5	0.1			砂		
SD 3204	162	3 VI	F8, 13	F8, 13	162	浅い窪地	湾曲	A	北-南	12	1.8	0.1	黒褐色				
SD 3206	162	3 VI	P4, 9	P4, 9	162	区画?	直線的	A	北-南	5.6	0.8	0.1	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 3213	162	3 IV	L15	L15	162	区画?	直線的	A	西-東	5	0.5	0.1	黒褐色	10YR3/2	砂質		
SD 3216	162	3 VI	P19~25	P19~25	162	区画?	直線的	E	北西-南東	12.1	1	0.07	黒褐色	10YR3/1	砂質		
SD 3218	162	3 IV	L24, Q4	L24, Q4	162	区画?	直線的	C	北北西-南南東	3.3	0.4	0.1	灰黄褐色	10YR/2	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3219	161	3 III	Y8, 9	Y8, 9	161	浅い窪地	湾曲	E	北西-南東	3	1.7	0.1	黒褐色		砂		
SD 3220	161	3 III	Y4, 9	Y4, 9	161	浅い窪地	湾曲	E	北西-南東-南	10	1.6	0.06	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3221	161	3 III	Y9, 10	Y9, 10	161	浅い窪地	やや蛇行	E	北北東-南	6.8	1.3	0.03	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3222	161	3 III	Y10	Y10	161	区画?	直線的	A	北北東-南南西	4.2	0.6	0.08	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3223	161	3 III	Y10	Y10	161	区画?	直線的	A	北北東-南南西	8.7	0.5	0.1	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3224	161	3 III	Y10, 15	Y10, 15	161	区画?	直線的	A	北北東-南南西	5.3	0.55	0.05	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3225	161	3 IV	U2~12	U2~12	161	区画?	ほぼ直線的	E	北-南	13.5	1.6	0.14	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3226	161	3 IV	U9, 10	U9, 10	161	浅い窪地	ほぼ直線的	A	北東-南西	3	0.4	0.07	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3227	161	3 IV	V6	V6	161	区画?	直線的	A	西-東	2.4	0.3	0.05	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3228	161	3 IV	V6, 7	V6, 7	161	窪地	ほぼ直線的	A	北-南西	2.7	0.9	0.26	黒褐色	10YR3/1	砂質		灰黄褐色砂が混入
SD 3229	162	3 IV	L24, Q4	L24, Q4	162	区画?	直線的	A	北北西-南南東	6.6	0.3	0.1	灰黄褐色	10YR/2	砂質		
SD 3230	162	3 IV	L24, Q4	L24, Q4	162	区画?	直線的	A	北北西-南南東	5.8	0.3	0.1	灰黄褐色	10YR/2	砂質		
SD 3231	162	3 IV	L24	L24	162	区画?	直線的	A	北北西-南南東	2.7	0.3	0.1	灰黄褐色	10YR/2	砂質		
SD 3232	162	3 IV	L24	L24	162	区画?	直線的	A	北-南	1.4	0.25	0.05	灰黄褐色	10YR/2	砂質		
SD 3233	162	3 IV	P12~17	P12~17	162	浅い窪地	直線的	E	北東-南西	(10)	2.1	0.1	黒褐色	10YR2/2	砂質		
SD 3234	162	3 IV	Q8~14	Q8~14	162	浅い窪地	直線的	E	北東-南西	6	1.7	0.18	黒褐色	10YR2/1~2/2	砂質		暗褐色砂が混入
SD 3235	162	3 IV	Q8~13	Q8~13	162	水路?	直線的	E	北東-南西	3.6	1	0.4	黒褐色	10YR2/1~3/3	中粒砂		
SD 3236	162	3 IV	L19~25	L19~25	162	区画?	一部で湾曲	D	北-南-東	7.7	0.7	0.11			砂質		
SD 3237	162	3 IV	L19~25	L19~25	162	区画?	一部で屈曲	E	東-西-南	12	2.1	0.19			砂質		

表31-(5) 溝・自然流路跡 (SD) 一覧 (中世)
 屋代遺跡群 ③区

遺構 記 号	遺構 番 号	土器時期	版 地 区	大 地 区	中地区	図版番号	区分	平面形	断面 形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 3238		3 IV	3 IV		L22.23-Q3	162	区画?	湾曲	E	南東-北-西	18.5	0.7	0.06	黒褐色	10YR3/2	砂質	黒褐色(10YR2/3)砂が混入する	
SD 3239		3 IV	3 IV		L22.23	162	区画?	湾曲	A	南-北-西	8	0.4	0.06	黒褐色	10YR3/2	砂質	黒褐色(10YR2/3)砂が混入する	
SD 3304		3 IV	3 IV		Q8.9	162	浅い窪地	直線的		北東-南西	9.5	1.1	0.2	黒褐色	10YR2/1~2/2	砂質		

屋代遺跡群 ④~⑤区

遺構 記 号	遺構 番 号	土器時期	版 地 区	大 地 区	中地区	図版番号	区分	平面形	断面 形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅 (m)	深さ (m)	色調	土色帳記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 4002		4 IV	4 IV		C10.06	210.163	区画?	直線的	B	北西-南東	2.9	0.6	0.12			砂質(III-1層土)		
SD 4004		4 IV	4 IV		C18.19	208.163	区画?	直線的	A	西北西-東南東	7.6	0.5	0.1			砂質(III-1層土)		
SD 4005		4 IV	4 IV		C14.19	210.163	区画?	直線的	A	北北東-南南西	8	0.6	0.1			砂質(III-1層土)		
SD 4006		4 IV	4 IV		C14	208.163	浅い窪み	直線的	A	北北東-南南西	5	0.6	0.05			砂質(III-1層土)	IV層ブロック、炭化物を含む	
SD 4007		4 IV	4 IV		C22.23.H2.3	206.205.163	水路	直線的	B	西-東	10.25	2.6	0.54					
SD 4008		4 IV	4 IV		C22.23.H2.3	206.205.163	水路	直線的	B	西-東	9.65	3.55	1.1					
SD 4009		13C末~14C	4 IV		C8~18	209.208.163	水路	直線的	C	南-北	24.4	2.8	1					
SD 4010		4 IV	4 IV		H12	200.163	区画?	直線的		北西-南東	(1.3)	0.6	0.16			砂質(III-1.2層土)	IV層ブロック、炭化物が混入	
SD 4011		4 IV	4 IV		C4~14	213.163	区画?	やや蛇行	A	北北西-南	12	0.5	0.12	黒		砂質(III-1層土)		
SD 4012		4 IV	4 IV		C10	210.163	浅い窪み	直線的	E	西-東	1	0.21	0.07	黒		砂		
SD 4203		4 I	4 I		W10.15	219.164	区画?	直線的	B	北北東-南南西	13.7	0.9	0.13					
SD 4204		4 I	4 I		W10.15	219.164	区画?	直線的	B	北北東-南南西	11.6	1	0.23					
SD 4205		4 I	4 I		W9~19	219.164	浅い窪み	直線的	A	北北東-南南西	16.8	4.3	0.17					
SD 4207		4 I	4 I		W19	219.164	不明	直線的	C	西-東	2.6	0.8	0.34	灰黒褐色	10YR4/2	砂	酸化鉄ブロックを含む	
SD 4208		4 I	4 I		W3~19	219.164	水路	直線的	D	南-北	22	2	1.06					
SD 4210		4 I	4 I		W25	213.163	区画	直線的	B	北北東-南南西	3.55	0.6	0.4					
SD 4218		4 I	4 I		W19.20	213.164	区画?	ほぼ直線的	D	西-東	(10)	0.3				砂質		
SD 4219		4 I	4 I		X1~11	220.164	水路?	直線的		南-北	18.2	1.3	0.9					
SD 4220		4 I	4 I		X1.6	220.164	浅い窪み	直線的		北-南	4.2	1.3	0.3					
SD 4501		4 IV	4 IV		G12~18	199.163	浅い窪み	直線的	A	北西-南東	7	3	0.3	黒褐色	10YR3/1	砂質	下層に褐色砂が多く混入する	
SD 4502		4 IV	4 IV		G7~13	201.163	区画?	直線的		北西-南東	6	1.5	0.2			砂質(III-1層土)		
SD 4506		4 IV	4 IV		C10~17	207.163	水路?	直線的	A	北西-南東	19.4	4	0.15	褐色	10YR4/1	砂質		
SD 4509		4 IV	4 IV		B5.C1	209.207.163	区画?	直線的	E	西北西-東南東	11.8	0.8	0.3	黒褐色	10YR2/2	砂質		
SD 4510		4 I	4 I		V15~20.W16	214.211.163	区画?	直線的	A	西北西-東	18	0.8	0.3	褐色	10YR4/4	砂質	黒褐色が混入する	
SD 4511		4 I	4 I		V19.20.W16	214.211.163	区画?	直線的	A	西北西-東	17.6	1.2	0.3	褐色	10YR4/4	砂質	黒褐色が混入する	
SD 4513		4 IV	4 IV		C21.22.H1	206.204.163	水路	直線的	A	南西-北東	15	2	0.4	灰褐色	10YR4/1	砂質		
SD 4533		4 IV	4 IV		C11	207.163	水路?	直線的	A	西南西-東北東	5	0.5	0.12	黄褐色	10YR5/6	細粒砂	粘土が混入する	
SD 5001		13C~15C	5 I		M25.021.S5.10.T1.6	228.164	区画	ほぼ直線的		北北東-南南西	(14)	(5.18)						土壌
SD 5002			5 I		M21.S1~11	227.164	水路?	直線的	B	南-北	29.5	1	0.15	褐色	10YR4/1	砂質	下方に炭化物混入	
SD 5005		5~6 I	6 I		N6~22.I24.S5.J21.M4.9	241.232.235.1	水路	一部で屈曲	E	南-北	54	4	3					
SD 5016		5 I	5 I		S1~11	224.164	水路?	ほぼ直線的	E	南-北	19	1.8	0.6	褐色~灰白	10YR6/1~7/1	シルト~中粒砂		IBS06003 (6区画)
SD 6001		5 I	5 I		M22.23	230.228.164	区画	直線的	B	西北西-東南東	8.4	3.1	1.25					
SD 6002		5 I	5 I		R9.10	223.164	区画	直線的	A	西北西-東南東	3.6	1.1	0.2	黒褐色	10YR3/2			

表31-1(6) 溝・自然流路跡 (SD) 一覽 (中世)
屋代遺跡群 ⑥区

遺構記号	遺構番号	土器時期	仮地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土色層記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 7001			6 I	I21.N1	234.165	水路	一部で屈曲	B	南東→北西	15.5	0.8	0.15	黒褐色	10YR2/3	砂質	褐鉄プロックの集積	
SD 7002			6 I	I21.N1	234.165	水路	一部で屈曲	B	南→北	23.5	1.43	0.3	黒褐色	10YR2/3	砂質	褐鉄プロックの集積	
SD 7003			6 I	I16.21	234.165	水路?	一部で屈曲	A	南→北	9.5	0.84	0.09	明褐色	10YR3/3	砂	褐鉄分の集積	
SD 7004			6 I	N1.2	234.165	浅い窪地	一部で屈曲	A	西→東	4.4	0.95	0.1	褐→灰黄褐色	10YR4/4~4/2	シルト→砂	褐鉄分の集積	
SD 7005			6 I	N1.2	234.165	浅い窪地	不整	A	西→東	3.6	1.75	0.15	暗灰黄→黒褐色	2.5Y4/2~10YR3/2	砂質	中心に褐鉄分の集積層	
SD 7006			6 I	N2.7	234.165	水路?	直線的	B	南東→北西	3.7	0.9	0.15	黒褐色	10YR2/2	粗粒砂	酸化鉄分が混入する	
SD 7007			6 I	I22.23.N2	234.165	水路?	直線的	B	南東→北西	10.5	1.45	0.18	明褐色→灰黄褐色	10YR3/4~4/2	砂	褐鉄プロックが混入	
SD 7008			6 I	I22.N2.7	234.165	水路?	やや蛇行	B	南東→北西	1.4	2.1	0.36	明褐色→褐	10YR3/3~4/4	砂	酸化鉄分が混入する	
SD 7009			6 I	N1	234.165	浅い窪み	直線的	C	北→南	1.2	0.38	0.07	明褐色	砂質(III-1層土)	砂	底部に褐鉄分が集積	
SD 7010			6 I	I22.23	234.165	水路?	不整	B	南西→北東	4	(1.34)	0.3	明褐色	10YR3/4	砂	褐鉄分が混入する	
SD 7011			6 I	I21.N1	234.165	窪地	直線的	E	西→東	1.28	0.53	0.18	明褐色	10YR3/4	シルト	底部に褐鉄分が集積	
SD 7012			6 I	I17.22	234.165	浅い窪地	直線的	B	北→南	3.15	0.58	0.09	明褐色	10YR3/3	砂	底部に褐鉄分が集積	
SD 8001			6 I	I18.23.N2~12.D25	241.232.164	水路	一部で屈曲	D	南→北	55	1.8	0.77					土壌
SD 8002			6 I	N4	232.164	水路?	直線的		南西→北東	4	(0.2)						
SD 8005			6 I	N8~13	232.164	水路?	直線的		南西→北東	13	(1.8)						
SD 8006			6 I	N8~13	232.164	水路?	直線的		南西→北東	14	(1)						
SD 8007			6 I	I24	235.165	浅い窪み	直線的	E	北西→南東	2.5	0.82	0.11	褐色	10YR4/1	砂質(III-1層土)		
SD 8008			6 I	I24.25.J21	235.165	水路?	直線的	E	西→東	14	0.7						
SD 8009			6 I	I19~25.J16.21	235.165	浅い窪地		E	西→東	(18)	(1.5)	0.15	黒褐色	10YR3/2	砂質(III-1層土)	灰色砂、褐鉄分が混入	灰黄色層
SD 8010			6 I	I9.14	165	水路?	ほぼ直線的	E	南→北北東	(28)	1.5	0.51					
SD 8011			6 I	I10.J6.7	165	水路?	一部で屈曲		西→東	13.5	1.4	0.25					
SD 8012			6 I	I24.N4	235.165	区画	一部で屈曲		南→北	29	2.6						
SD 8013			6 I	D25.E21.I4~10.J1	165	水路?	不整	A	南西→北東	(14)	2.7	0.6					
SD 8017			6 I	I5.J1	165	水路?	不整	A	南東→北西	0.9	0.75	0.15					
SD 8052			6 I	北壁セクション	170	水路?		D	南→北			0.26					

窪河原遺跡 H2~H6区

遺構記号	遺構番号	土器時期	仮地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面形	流路・溝方向	全長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	色調	土色層記号	土性	堆積状況ほか	特記事項
SD 1			H2	A20.B16	169	溝?	直線的	A	西→東	(5)	1	0.23					
SD 2			H2	V21	169	溝?	一部で屈曲	A	西北西→東南東	(6)	0.5	0.08					
SD 3			H2	G9~15	239.168	区画?	直線的	B	北北西→南東	7.7	0.56	0.2					
SD 4			H2	G13~15	238.168	水路?	不整	A	南西→東南東	11.7	1.4	0.52					
SD 5			H2	G9~15	239.168	区画?	直線的	B	北北西→南東	6.2	0.42	0.15					
SD 101			H5	G12	169	水路?	直線的	A	南→北	(4)	1	0.25					
SD 102			H5	G24	168	水路?	一部で屈曲	A	西→東	(17)	0.9	0.06					
SD 103			H5	G24.L4.5	240.168	水路?	湾曲	D	南東→北	23.2	1.2	0.38					
SD 104			H5	G24.L4.5	240.168	水路?	ほぼ直線的	D	南東→北西	20.6	0.7	0.36					
SD 105			H5	G19.24	168	水路?	やや蛇行	A	西南西→北	1.1	0.5	0.04					
SD 106			H5	G24.L4.5	240.168	水路?	ほぼ直線的	C	南東→北	3.5	1	0.48					
SD 107			H5	F10.15.G5~11	168	区画?	直線的	A	西→東	10	1.15	0.25					
SD 108			H5	F10.15.J6.11	236.167	区画?	直線的	E	北北西→南	6.6	0.7	0.18	黒褐色	7.5YR3/2		酸化鉄分が集積	
SD 1001			H6	S19~25.T16.Y1.2	166	水路?	やや蛇行	E	北西→南東	32	7.5						

第5章 中世の遺物

第1節 中世の焼物・土製品

1 中世の焼物の分類

中世の焼物も古代の土器と同じように、焼物の種類と器種、更にその使用の場も加味して分類する。生産地が判明する場合は「～産」と記し、技術的に類似点が認められるが、産地が判明しない場合や断定しかねる場合は「～系」として記述する。

(1) 使用の場における分類

食膳具、煮炊具、貯蔵具、調理具、調度具に分類する。

食膳具：食物を盛る器（神仏も含める）

煮炊具：食物を加熱し、化学的加工を行う器

貯蔵具：食物を保存貯蔵しておく器

調理具：食物の物理的加工に使う器

調度具・その他

(2) 焼物の種類

生産地により次の3つに分類する。

A 在地産 B 搬入系 C 輸入陶磁器

さらにそれぞれについて、以下のように細分する。

A 在地産の焼物は、胎土と焼きの状態により

①須恵質 ②土師質 ③瓦質に分類する。

B 搬入系の焼物は、生産地の違いにより

①山茶碗 ②常滑産 ③中津川産 ④珠洲産 ⑤瀬戸・美濃産（古瀬戸、大窯）に分類する。

C 輸入陶磁器には、①白磁 ②青磁 ③青白磁がある。

(3) 器種

使用の場ごとに形態を中心にして分類すると以下のようなになる。

食膳具……碗類、皿類、カワラケ、鉢、その他

煮炊具……内耳鍋

貯蔵具……壺、甕、瓶類、その他

調理具……すり鉢、捏鉢、卸皿

調度具・その他……花瓶、香炉、火鉢

2 出土した中世焼物の概要

焼物を種類と器種により分類しながら、今回出土し実測できた中世の焼物の特徴および概要を以下に述べる。中世の焼物の図化にあたっては、遺構出土のものは極力図化した。包含層出土例については、特別な例をのぞいて紙面の関係で割愛したものが多い。掲載遺物のすべてについて市川隆之氏に実見していただき、そのコメントをもとに記載した。在地産の焼物の分類と年代観は市川1997に従い、在地産以外の焼物の分類と年代観については以下の文献を参考にした^(註1)。

輸入陶磁器……横田・森田1978、小野1982、森田1986、原1994、亀井1995

珠洲……………珠洲焼資料館1989、吉岡1994

常滑……………赤羽1984、中野1994

山茶碗……………田口1983、若尾1987、藤沢1990、野村1990

古瀬戸……………藤沢1984、藤沢1991、藤沢1995

大窯……………藤沢1986

(1) 在地産の焼物

A. 須恵質

a すり鉢

胎土には多量の細砂と少量の粗い砂粒を含む。底部は砂底で離れ砂が付着。外面は縦ハケの後にナデ。口縁部から内面は丁寧な器面調整の後に回転台ナデを施す。珠洲産のすり鉢を模倣して県内で生産された焼物だが、珠洲産とはロクロを使わない点で成形、調整方法が大きく異なる。窪河原遺跡SK16-5(図版276)が代表例。13世紀末にはみられ14世紀を中心として存在する。

B. 土師質

a 内耳鍋

平底筒型の胴体で、口縁内側2ヶ所に耳が付く。胎土には大量の細かな砂を含む。底部は砂が付着した砂底。胴部外面は縦ハケ調整後にナデ、内面はヨコハケの後にナデ、更に口縁部から内面を回転台ナデして仕上げる。調整は須恵質・瓦質すり鉢に共通する。屋代遺跡群SK5016-2(図版276)が代表例。14世紀末には登場し、15世紀代を中心に16世紀へと続く。本文で内耳鍋とのみ記した場合は土師質をさす。

b すり鉢

胎土は内耳鍋に類似するが、やや粗い砂も目立つ。瓦質すり鉢と識別が難しいものも多い。14世紀末～15世紀前半にかけて存在する。今回報告例にはない。

c 火鉢

形態は浅鉢型、球胴型等多様である。スタンプ文をもつもの、もたないものがある。今回報告例にはない。

d カワラケ

体部がやや湾曲しながら直線的に開く無台の杯形または皿形土器。ロクロ調整のものと非ロクロ調整の両者がみられる。胎土は基本的に非常に緻密なものが多く、色調は明褐色系、灰褐色系が多いが多様である。形態も口縁が内わんするもの、外わんするもの等多様である。これらはいくつかのタイプに分類され、時期的に変遷をおうことができる。

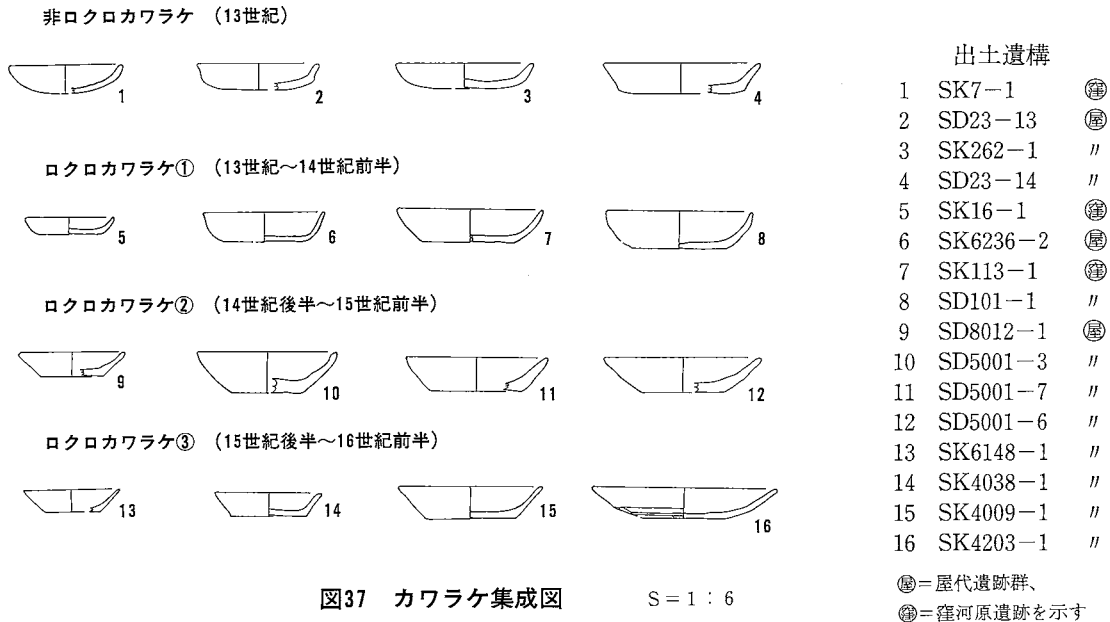
非ロクロカワラケ……………13世紀前半が主流で14世紀にはない^(註2)。(図37、上段)

ロクロカワラケ……………①13世紀～14世紀前半のカワラケは、底径が大きく、体部は内わん傾向を示

す。(図37、上から2段目)

②14世紀後半～15世紀前半のカワラケは、厚くて雑な作りで口縁先端も丸くて厚い(図37、上から3段目)

③15世紀後半～16世紀前半のカワラケは、精選された胎土の灰白色系と明白色系とがあり底径は大きく、口縁は外に開くタイプとなる。一方で明白色系の雑な作りの系統もある(図37、下段)



e 香炉

土器香炉。平底で体部は内わんし、底部には回転糸切り痕が認められる。中南信では出土例があまりなく東北信に散見され、古瀬戸の補完品として位置付く可能性があると考えられる。屋代遺跡群SK4589-1(図版275)に1例みられる。

C. 瓦質

a すり鉢

全体的に黒灰色を呈し還元炎焼成と考えられるが、焼成が不安定で須恵質すり鉢と比べると明らかに軟質。須恵質や土師質のすり鉢と識別しにくいものも含まれる。屋代遺跡群SD5001(図版274-11・12)に2例みられる。

b 内耳鍋

内外面が黒灰色を呈する。屋代遺跡群SD5001-13(図版274)は瓦質に近い。

c 火鉢

屋代遺跡群SD23-3層(図版273-12)から1点出土している。同じくSD5001-9(図版274)は火鉢又は香炉である。

(2) 搬入系の焼物

A. 山茶碗(東海系で無釉の灰釉系陶器)

a 碗・皿

胎土の粗い系統と胎土の均一な系統の2種類に分けられる。前者は猿投窯、常滑窯などの東海南部系のもの、後者は東濃地域を中心とした東海北部系のものである。碗の高台にはモミ痕が顕著に残るものが多

い。出土数は少ない。南部系としては屋代遺跡群SK262-2 (図版275)、北部系としては屋代遺跡群SD24-1・2 (図版273) にみられる。碗類が目立つが、皿としては屋代遺跡群包含層-6 (南部系 図版277) 等がみられる。

b 捏鉢

高台をもち内面に卸目をもたないが、珠洲産や在地産のすり鉢と同じ機能をもつ。数は少ない。中世前半期に出土は限られる。東海系捏鉢又は山茶碗系捏鉢等と呼称されている。屋代遺跡群SD24-8 (図版273)、更埴条里遺跡SK9220-1 (図版274) に出土例がある。

B. 常滑

a 壺・甕

口縁部や胴部の破片がみられる。口縁部形態はL字状 (屋代遺跡群SD23-22 図版273)、T字状 (屋代遺跡群SK4213-1 図版275) のものが多い。

b すり鉢

卸目がないのが東海系のすり鉢の特徴である。珠洲産や在地産は卸目が入るが、使い方は両者とも同じである。屋代遺跡群SD4009-2 (図版273) に1点みられる。

C. 中津川

a 壺

形は常滑と全く同じであるが、白い胎土をもつ点異なる。屋代遺跡群SB20-3 (図版272) に1例みられる。

D. 珠洲

a 壺・甕

壺・甕は少ないが窪河原遺跡の包含層から、珠洲初期の完形の甕が出土している (図版277-15)。

b すり鉢

壺・甕に比べすり鉢はやや多い。在地産すり鉢との違いは、ロクロ調整するところにあり、底部には静止糸切りが観察される。曲線をえがいた卸目をもつものもある (屋代遺跡群SK258-1 図版275)。更埴条里遺跡SK9909-1 (図版275) が代表例である。

E. 古瀬戸

a 四耳壺・香炉・瓶子・皿類・瓶類等

中国陶磁を模倣してつくられた施釉陶器である。多様な器種がみられ、前期様式としては四耳壺 (屋代遺跡群SD26-4 図版273)、中期様式としては香炉 (屋代遺跡群SD5001-8 図版273) と瓶子 (窪河原遺跡SM103-1 図版276)、後期様式としては縁釉小皿 (屋代遺跡群SB9-1 図版272)、卸皿 (屋代遺跡群SK4541-1 図版275等)、花瓶 (屋代遺跡群SK4585-2 図版275) などがあげられる。天目茶碗、平碗等の出土はない。近世の屋代遺跡群SD873 (図版312-6) からは、後期様式の深皿又は鉢が出土している。前期様式が12世紀末～13世紀後葉、中期様式は13世紀末～14世紀中葉、後期様式は14世紀後葉～15世紀後葉の年代が与えられている。

F. 大窯

a 皿類等

古瀬戸までの窖窯に代わって出現した半地上式の窯で焼かれた施釉陶器である。更埴条里遺跡から見込に印花文が押印された皿 (図版276 包含層-2)、屋代遺跡群から折縁皿 (SD8001-2 図版274) 等がみられる。15世紀末～16世紀代を中心とした年代が与えられている (一部17世紀にも残る)。

G. その他

越前の可能性のある壺または甕が2点出土している (図版276 更埴条里遺跡包含層-1、図版277 屋代遺跡群

包含層-8)。

(3) 輸入陶磁器

A. 白磁

a 碗・皿類

碗類には口縁部形態から小玉縁状のII類(屋代遺跡群SD23-9 図版272等)、大玉縁状のIV類(同-1 図版272等)、その他(同-20・21 図版273等)がみられる。皿類では口縁部が口禿のIX類(窪河原遺跡包含層-10 図版277)、その他がみられる。白磁は破片での出土がほとんどだが量的には多い。11世紀後半には出現しII類・IV類は12世紀代まで、見込が輪禿になるVIII類(今回は出土していない)は12世紀中～13世紀、IX類は13世紀中葉～14世紀中葉の年代が与えられている。

B. 青磁

a 碗類等

同安窯系が2点みられる(屋代遺跡群SD23-7 図版272、更埴条里遺跡SK9262-1 図版274)。ほとんどが龍泉窯系で量も多い。蓮弁文をもつもの(窪河原遺跡SK16-3 図版276等)、画花文をもつもの(屋代遺跡群SD23-6 図版272等)、双魚文をもつもの(同SD8010-2 図版274)、見込に「金王満堂」と型押されるもの(同SD5005-4 図版274)等がみられる。同安窯系と龍泉窯系の画花文をもつ一群(I-2類、I-4類)は12世紀中ごろ～13世紀初頭に多くみられ、蓮弁文をもつ一群(I-5類)は13世紀代に多くみられるとされる。今回出土例はこれらの時期のものが中心となっている。

C. 青白磁

今回の出土例にはみられない。

D. その他

窪河原遺跡包含層-12(図版277)に青花の可能性のある小片が1片みられる。

3 各遺構出土の焼物

遺物の記載順は、アルファベット順でSB—SD—SK—SM—SX—包含層とし、それぞれについて更埴条里遺跡—屋代遺跡群—窪河原遺跡の順である。

(1) 竪穴建物跡(SB)出土の焼物

A. 更埴条里遺跡

SB9022 (図版272 PL36)

1はロクロ調整のカワラケ(以後ロクロカワラケと呼ぶ)。2・3は龍泉窯系蓮弁文青磁碗(横田・森田分類のI-5-b類)である。2・3は13世紀の年代を示す。

B. 屋代遺跡群

SB9 (図版272 PL36・37)

1は古瀬戸後期様式の縁釉小皿で、口縁部に灯芯状のこびりつきがあり灯明皿として使われている。

SB16 (図版272)

2は白磁碗、外面にはへら状工具で釉を掻き取った跡がみられる。1は古代の土器である。

SB20 (図版272 PL37)

1は龍泉窯系青磁碗、2は在地産須恵質すり鉢、3は中津川産の壺で胎土は真っ白である。2には14世紀中ごろ～後半、3には13世紀後半の年代が与えられる。

SB5001 (図版272)

中世の遺構だが、目立った中世の焼物は出ていない。図化したのは古代の土器である。

C. 窪河原遺跡

SB1 (図版272) 1は珠洲産すり鉢である。13世紀。

(2) 溝・自然流路(SD) 出土の焼物**A. 更埴条里遺跡**

SD947 (図版272) 1は白磁碗である。

B. 屋代遺跡群

SD23 10層～1層 (図版272・273 PL36・38)

9～10層出土の1は白磁IV類碗、2は白磁II類碗、3の白磁碗には内面にすすが付着している。4は白磁皿、5は龍泉窯系青磁碗、6は龍泉窯系画花文青磁碗(I-4類)、7は外面にへら状の施文具により片彫り風の沈線を入れ、内面は櫛状施文具およびへら状施文具で花文を施している。同安窯系青磁碗である。8層出土の8は龍泉窯系蓮弁文青磁碗。5～9層出土の9・10は白磁II類碗、11はカワラケのようにみえるが不明である。3層出土の12は在地産瓦質火鉢?である。1～2層出土の13・14は非ロクロカワラケで15・16のロクロカワラケと共伴している。17は白磁IV類碗、18は白磁皿、19・20・21は白磁碗、22は常滑産壺である。22は13世紀前半、13・14は13世紀、15は15世紀後半の明白色系の胎土のものである。龍泉窯系青磁(5・6)は7の同安窯系青磁とともに12世紀中ごろ～13世紀初頭である。白磁はややそれに先行する。8は13世紀である。

SD24 (図版273 PL36)

1・2は北部系山茶碗である。1は薄手で玉縁口縁となり、2は見込中央部がへこんでいることが特徴となり、共に白土原1号窯式～明和1号窯式の段階である。13世紀後半～14世紀前半である。3は山茶碗系だがはっきりしない。4は白磁IV類碗、5は龍泉窯系蓮弁文青磁碗で13世紀。6の青磁皿も13世紀。7は珠洲産すり鉢。卸目はすりへって残っていない。8は山茶碗系捏鉢で13世紀後半～14世紀である。

SD26 (図版273 PL36)

1は薄手で玉縁口縁となる北部系山茶碗で、白土原1号窯式～明和1号窯式の段階で13世紀後半～14世紀前半である。2は口禿の白磁IX類皿。3は龍泉窯系蓮弁文青磁碗、13世紀。4は古瀬戸前期様式四耳壺、13世紀後半である。

SD39 (図版273) 1は龍泉窯系画花文青磁碗(I-4類)で12世紀中ごろ～13世紀初頭。

SD4009 (図版273) 1は龍泉窯系青磁碗、2は常滑産すり鉢で13世紀末～14世紀である。

SD5001 (図版273・274 PL36・37・38)

1～7はすべてロクロカワラケである。1はたちあがり内わん傾向を示し13世紀～14世紀前半、他は厚くて雑なつくりで、口縁端部も丸くつくられる。14世紀後半～15世紀前半のものである。2・3・5・6・7にはすすが付着している。8は古瀬戸中期様式の香炉。9は器面のへらミガキがなく精選された胎土をもつ在地産瓦質火鉢又は香炉である。10は輸入陶器で褐釉壺である。11・12は在地産瓦質すり鉢、14世紀末～15世紀前半。13の内耳鍋は瓦質に近い。14世紀末～15世紀。

SD5005 (図版274 PL36)

1のロクロカワラケは内わんしており13世紀～14世紀前半。2は白磁碗、3は龍泉窯系蓮弁文青磁碗、13世紀。4も龍泉窯系青磁碗で13世紀だが、見込部に「金玉満堂」と型押しされている。外面の高台部は意図的に打ち欠かされている。5は在地産須恵質すり鉢、14世紀。

SD8001 (図版274 PL37) 1は古瀬戸卸皿。2は大窯折縁皿で16世紀後半。

SD8010 (図版274 PL36)

1は白磁IV類碗。2は龍泉窯系青磁鉢で見込部に双魚文を貼付している(III-4-b類)。13世紀である。3は在地産瓦質鉢である。

SD8012 (図版274)

1はロクロカワラケで、胎土はきめ細かく底径が小さくななめにたちあがる。口縁の先端は丸くなり、口縁から下がややしぼむ形態となり14世紀後半～15世紀前半の特徴を示す。

SD8013 (図版274) 1は古瀬戸後期様式の卸皿である。

C. 窪河原遺跡

SD101 (図版274 PL38) 1はロクロカワラケで、内わんしており13世紀～14世紀前半である。

SD103 (図版274) 1はロクロカワラケである。

(3) 土坑(SK) 出土の焼物

A. 更埴条里遺跡

SK9205 (図版274 PL36)

1は青磁皿、2は龍泉窯系画花文青磁碗(1-2類)で、12世紀中ごろ～13世紀初頭。3は常滑産壺、13世紀。4は珠洲産壺、13世紀～14世紀。5は在地産須恵質すり鉢、14世紀。6は珠洲産すり鉢、13世紀～14世紀である。

SK9220 (図版274) 1は山茶碗系捏鉢、13世紀である。

SK9244 (図版274) 1は非ロクロカワラケ、13世紀である。

SK9262 (図版274 PL36) 1は外面に縦の櫛描きがあり、同安窯系青磁碗である。

SK9909 (図版275 PL37)

1は珠洲産すり鉢、13世紀後半～14世紀前半である。内面の卸目はきっちりとついでおり、あまり使用した感じを受けない。

B. 屋代遺跡群

SK24 (図版275 PL36) 1は龍泉窯系青磁碗で底部縁辺が意図的に破壊されている。13世紀。

SK49 (図版275) 1は白磁皿で内面に櫛状工具による沈線が入れている。

SK258 (図版275)

1は珠洲産すり鉢で、内面の卸目が曲線状となっている。13世紀前半。2・3は在地産須恵質すり鉢で14世紀である。

SK262 (図版275 PL38)

1は非ロクロカワラケで、13世紀。2は南部系山茶碗で作りが雑で口縁は肥厚していない。谷迫間2号窯式～浅間窯下1号窯式に併行する時期である。

SK272 (図版275)

1は大窯皿で16世紀。2はやや年代が新しいが肥前系陶器天目茶碗又は丸碗で、胎土は緊密である。

SK4009 (図版275 PL38)

1は明白色系を有する胎土が悪いロクロカワラケで、15世紀後半～16世紀前半である。

SK4038 (図版275 PL38)

1はロクロカワラケで、薄くシャープなつくりで体部外面は直線的にのび口縁の先端は尖っている。更に内面見込部のおさえがきちんとされず、だらだらと立ち上がるタイプで、15世紀後半である。

SK4201 (図版275)

1は珠洲産すり鉢で、底面には静止糸切りの跡がみられる。14世紀後半～15世紀前半である。2も珠洲産すり鉢で口縁先端が水平に作られる。14世紀後半の特徴である。

SK4203 (図版275 PL38)

1はロクロカワラケである。底部の糸切りをへら状工具で消している。精選された胎土で15世紀中ごろ～後半に位置付く。2は常滑産甕又は壺の胴部小片である。押印がみられる。

SK4211 (図版275 PL38) 1は内わんするロクロカワラケで、13世紀～14世紀前半。

SK4213 (図版275) 1は常滑産甕で口縁がT字状をなす。14世紀。

SK4228 (図版275)

1・2はロクロカワラケである。灰白色系で精選された胎土をもち15世紀に位置付く。

SK4244 (図版275 PL36) 1は龍泉窯系画花文青磁碗(I-4類)で、12世紀中ごろ～13世紀初頭。

SK4254 (図版275) 1はロクロカワラケである。

SK4501 (図版275) 2は龍泉窯系蓮弁文青磁碗で、13世紀。1は古代の土器である。

SK4513 (図版275) 1は白磁碗である。

SK4541 (図版275) 1は古瀬戸後期様式の卸皿、2は在地産須恵質すり鉢で14世紀である。

SK4542 (図版275) 1は白磁II類碗である。

SK4585 (図版275) 1は白磁碗、2は古瀬戸後期様式の花瓶である。

SK4589 (図版275)

1はロクロカワラケであるが、深い器のため土器香炉の可能性もある。15世紀～16世紀。

SK4600 (図版275)

2は南部系山茶碗で谷迫間2号窯式～浅間窯下1号窯式に併行する。1は古代の土器である。

SK4849 (図版275) 1は内耳鍋である。

SK5016 (図版276 PL38)

1はロクロカワラケで、精選された胎土をもち15世紀に位置付く。2は内耳鍋で15世紀中ごろである。

SK5031 (図版276) 1・2はロクロカワラケで、2は15世紀後半である。

SK6118 (図版276) 1は珠洲産すり鉢で、胎土に粒状骨針と泥岩の破片が入る。15世紀前半。

SK6148 (図版276 PL38)

1はロクロカワラケで、精選された胎土をもち15世紀中ごろ～後半である。

SK6207 (図版276)

1・2とも在地産須恵質すり鉢で、1は口縁部内側が尖る形態で13世紀。2は瓦質にみえる部分もある。13世紀～14世紀である。

SK6236 (図版276)

1・2共に内わんするロクロカワラケで、13世紀～14世紀前半。胎土は共に精選されている。1は灰白色で例外的な色調を示す。2はにぶい橙色である。

SK6272 (図版276 PL38) 1はロクロカワラケで、15世紀後半。

SK6280 (図版276) 1は内耳鍋で、浅い鉄鍋を模倣したタイプである。16世紀後半。

C. 窪河原遺跡

SK7 (図版276 PL38) 1は非ロクロカワラケで、13世紀。

SK16 (図版276 PL38)

1・2は内わんするロクロカワラケで13世紀～14世紀前半。3は龍泉窯系蓮弁文青磁碗、13世紀。4は

常滑産壺で口縁がT字状をしており、14世紀前半。5はほぼ完形の在産須恵質すり鉢、13世紀末～14世紀前半。

SK109 (図版276) 1は内わんするロクロカワラケで、13世紀～14世紀前半。

SK113 (図版276) 1は内わんするロクロカワラケで、13世紀～14世紀前半。

SK116 (図版276)

1は北部系山茶碗で、高台端部に靱殻痕が付着している。薄手のつくりで白土原1号窯式以降のものである。13世紀後半以降。2は龍泉窯系蓮弁文青磁碗である。13世紀。

SK130 (図版276) 1はロクロカワラケである。

(4) 墓 (SM) 出土の焼物

A. 窪河原遺跡

SM103 (図版276 PL37) 1は古瀬戸中期様式の瓶子である。

(5) 不明遺構 (SX) 出土の焼物

A. 屋代遺跡群

SX4001 (図版276 PL36)

1・2は白磁碗である。1は高台部が意図的に打ち欠かれており、更に底部外面に読み不明の墨書がみられる。

SX8001 (図版276) 1はロクロカワラケである。

(6) 包含層出土の焼物

A. 更埴条里遺跡 (図版276 PL37)

1は格子目の押印があり、越前?の壺または甕である。2は大窯皿であり見込に印花文がみられる。3は非ロクロカワラケで内面を中心にするより黒い油状のしみこみがあり、灯明皿として使われている。13世紀である。4は龍泉窯系青磁碗で高台部が意図的に破壊されている。13世紀である。5は北部系山茶碗で、白土原1号窯式～明和1号窯式である。

B. 屋代遺跡群 (図版277 PL36)

6は南部系山茶碗の皿で浅間窯下1号窯式～窯洞1号窯式に併行する。7は白磁皿。8は越前?又は常滑?の瓷器系焼きしめ陶の壺又は甕の胴部小片である。押印がみられる。9はロクロ整形で底面が回転ヘラキリされている。中世の焼物であるが、底面ヘラキリは長野県内ではみられず外来系の焼物である。京都のヘソカワラケの可能性、又は北陸・越後系統の可能性が考えられる。見込中央部にヘソ状の盛り上がりがあり、その上部と口縁の内外面とに厚いすすのこびりつきがみられる。灯明皿としての可能性も考えられるが中央部のすすの付き方に不自然さが残る。

C. 窪河原遺跡 (図版277 PL36・37)

10は口禿で白磁IX類皿である。13世紀中ごろ～14世紀前半。11は龍泉窯系画花文青磁碗 (I-2類) で、12世紀中ごろ～13世紀初頭。12には牡丹 (唐草) の文様があり、類似した文様は16世紀後半の青花にある。ただし、類例ではこれほど丁寧なものではなく全体の釉調や胎土は肥前系磁器 (17世紀後半以前) に似る。しかし、肥前系磁器には牡丹文は少ない。どちらとも断定しかねる小片である。13は志野皿である。14は土師器だが分厚い作りで用途不明である。15はほぼ完形の珠洲産甕である。底径は小さく、肩が球状に張り出す体部をもつ。口縁は嘴頭状に屈折して引き出されており、口頸部は「5」の字状に長く外反す

横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

若尾正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報 No1

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原故摩堂遺跡発掘調査報告書』

第2節 石器・石製品、ガラス製品、骨角製品

1 石器・石製品

(1) 概要 (図版278、表33)

中世に限定できる資料は、石錘2点、石臼3点、磨石3点、凹石2点、敲石2点、砥石12点、軽石製品11点、硯1点、温石?1点、五輪塔2点、その他2点である。砥石などを除き、さらに石製の生活用具が減少する。

古代2の時期にも存在する器種については、詳細を第3章第2節に記載した。

(2) 中世の石製品

古代の遺構や包含層には見られず、中世の遺構から見つかった資料には硯、五輪塔などがある(表33)。磨石には、棒状礫の両端に顕著な磨り痕の認められる資料が新たに見られるようになる(図版278-7)。

A. 硯、その他

図版278-14は窪河原遺跡出土の硯である。小型であるとともに整形が雑であり、実用品ではない可能性が高い。9は温石の破片と思われる。表面に刻みが施されている。

B. 五輪塔

風輪が更埴条里遺跡I地区と屋代遺跡群⑥区で1点ずつ見ついている。後者では、火葬墓が点在してお

表33 中世遺構出土石製品一覧

更埴条里遺跡

遺構番号	大時期	小時期区分	石錘	石臼	磨石	凹石	敲石	台石	砥石	軽石製品	紡錘車	その他	備考
SK 9244	中世								1				
SK 9926	中世								1				

屋代遺跡群

SD 23	中世		1	1					1	4			
SD 24	中世		1		1		1						
SD 26	中世												
SD 4007	中世					1							
SD 4008	中世								1				
SD 4009	中世						1		1	1			
SD 4504	中世								2				
SD 5001	中世					1			1	2			
SD 5002	中世											温石 1	
SD 5005	中世								1	5			
SD 8001	中世									1			
SK 3	中世								1				
SK 22	中世								1				
SK 62	中世								1				井戸
SK 124	中世					1							井戸
SK 142	中世					1							
SK 165	中世								1				
SK 4017	中世								1				方形土坑
SK 4202	中世											硯 1	
SK 4225	中世											温石? 1	
SK 5024	中世											石製円盤(模造鏡?)	墓
SK 5104	中世								1	1			井戸
SK 6148	中世								1				井戸
SK 6272	中世					1							
SK 8013	中世											加工途上品 1	
SX 8001	中世											五輪塔風輪	

窪河原遺跡

SD 101	中世					1								
SK 7	中世								1					
SK 107	中世								1					
SK 109	中世											硯 1		
SM 104	中世						1						墓	
			合計		2	3	3	3	2	0	18	13	7	51

り、墓地に付属していたものであろうか。ただし、敲打痕が顕著で形も整っておらず、未製品の可能性もある。

2 ガラス製品 (図版278)

屋代遺跡群⑤b区Ⅲ-1層対応土中から平板小片のガラスが1点出土している。遺構に伴わず時代の限定ができないため本編に掲載した。色は紺色で重量は0.86gを計る。本来は円形に近い板ガラス状のもの1部と考えられるが、全容は不明である。成分分析については資料番号4として、『古代1編』にその結果と考察を掲載した(小泉好延・小林紘一1999)。これによると、ソーダ石灰ガラスに分類でき、「古代ガラス」とすると、比較的亜鉛濃度が高い事例とする所見を得ている。

屋代遺跡群では18点のガラス玉が出土しているが、遺構出土のものは5世紀～9世紀と幅がある。また、ガラス片が出土した屋代遺跡群⑤b区の7世紀後半に属する竪穴建物からガラス玉の鋳型が出土しており(宮島1999)、孔内にはソーダ石灰ガラスが付着していた。このことから当時の集落付近にガラス玉生産を行った工房が存在した可能性が指摘でき、ガラス玉となる素材も保有されていたことが予想される。平板小片の板状ガラスが玉生産のための素材であったとすれば時期は7世紀後半まで遡るが、現時点では断定が困難である。

引用・参考文献

- 小泉好延・小林紘一 1999 「第7章第3節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したガラス材質分析」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26—更埴市内その5 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代1編 本文』
- 宮島義和 1999 「第5章第5節 玉関係遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26—更埴市内その5 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代1編 本文』

3 骨角製品 (図版278)

骨角製品は2点確認できる。1は屋代遺跡群①区旧五十里川河道SD23中世層から出土した。表面を丁寧に調整した算盤玉状を呈し、中央に径0.8cmの孔をあけている。動物の角を加工したものと思われるがその用途は不明である。

2は窪河原遺跡H2区SK16から出土した。骨の一部を短冊状に剝離させ、表裏を丁寧に調整し、一端を剣先状に加工している。他端中央には穿孔の跡がみられるが、十分には貫通していない。形状からみて、筭(こうがい・かんざし)と考えられる。SK16からは13世紀～14世紀前半に属する焼物が出土しており、時期的にはこの範囲に含まれるものと思われる。

第3節 金属製品・鍛冶関係遺物（中世）

1 銅・青銅製品（図版279 PL40～42）

中世関係で図の提示できた3点を表化した（表34）。層位的に明確に中世と断定できるものはこの3点のみである。2は不明品であるが、片面に細長い二等辺三角形のおりこみが6個みられる。欠損部分も含めると8個になる。3は鈴である。上方に長方形のつまみがつき、下方には2枚の銅板を接合させて細長いすきまが設けられる。すきまの両端は孔になる。内部に珠はないため音はしない。

表34 中世の銅・青銅製品一覧表

（単位：cm, g）

図版番号	写真番号	遺物名称	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	長径	短径	厚さ	重量
279-1	PL40-1	不明品	屋代	⑤	N25.O21.S5.10.T1.6	SD5001	(10.0)	0.5	0.4	6.4
279-2	PL40-2	不明品	窪河原		G14.15	SK38	4.9		1.4	17.4
279-3	PL40-3	鈴	窪河原		T9	包含層	4.3		2.3	35.9

2 銭 貨（図版279 PL40）

中世関係で図の提示できた54点を表化した（表35）。遺構出土例はすべて図化し、包含層例は同一の貨幣名をもつもののみ一部割愛した。また、中世関係であっても攪乱出土や他時代への明らかな混入のものも割愛した。割愛したものを含めると総数は112点になる。図化できなかったものも含めても北宋銭が圧倒的に多い。貨幣名でみると「開元通宝」が12点、「元豊通宝」と「元祐通宝」が7点、「大観通宝」と「皇宋通宝」が6点ずつみられる。特筆すべきものとして、SD5001出土の「貨泉」（図版279-7）があげられる。1996年刊行の『最新日本考古学用語辞典』（柏書房）によると、「貨泉」は新の王莽が西暦14年から発行した貨幣で、日本列島でも30余ヶ所で発見されているという。弥生後期と中世の遺跡からの出土が多い。また、藤沢高広氏のご教示によると、岡谷市榎垣外遺跡から3枚が黒色土中から単独で発見され、塩尻市吉田若宮遺跡では中世の備蓄銭の中からみつまっている。長野県内ではそれらについて3遺跡目の発見になる。「貨泉」は東日本ではあまり発見されておらず、備蓄銭以外で単独で出土した本例は貴重なものといえよう。

3 鉄 製 品（図版280～281 PL41～42）

中世関係の総数は185点で、出土地区と時期にわけて表20に示した。中世関係の対象となるのは表20のⅢ層、Ⅲ層上面、中世、Ⅲ-1層にあたる部分である。また、図化できたものの観察表を表36に示した。窪河原遺跡SK16出土の鉄製品は11点と多く、特殊な形態のものが多いため写真図版では一括して掲載した（PL42）。以下、器種別にその特徴を記す。

A. 鎌

8点出土しているが、全形のは図版281-109のみである。刃部は太く基部が細い形態をもち、身部において「く」の字状屈曲により刃部、着柄部の分離が明確になってきている。

B. 釘

60点出土している。図化したのは4点である。図版280-77・85は吉田川西分類で中世の中核タイプと推定されているVa類である。基部上端に鑿を入れ叩き延ばし、その後折り曲げてある。

C. 刀子

表35 中世の銭貨一覧表

整理番号	図版番号	写真番号	貨幣名	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	初鑄年	径(cm)	重量(g)	備考
1	279-4	PL40-4	開元通宝	更埴条里	K	P6	SB9022	唐 621	2.3	2.2	
2	279-5	PL40-5	大観通宝	更埴条里	K	O25.K21	SB9027	宋 1107	2.4	3.3	
3	279-6	PL40-6	開元通宝	屋代	④	C2.H2.3	SD4007	唐 621	2.4	2.6	
4	279-7	PL40-7	貨泉	屋代	⑤	N25.O21. S5.10.T1.6	SD5001	新 14	2.3	2.4	
5	279-8	PL40-8	元祐通宝	屋代	⑤	N21.S1.6.11	SD5002	宋 1086	2.4	2.8	
6	279-9	PL40-9	元豊通宝	屋代	⑤.⑥	N8.9.13.14.17. 18.22.I24.25	SD5005	宋 1078	2.3	3.1	
7	279-10	PL40-10	元豊通宝	屋代	⑤.⑥	J21.N4.9	SD5005	宋 1078	2.5	3.1	
8	279-11	PL40-11	元祐通宝	屋代	⑤.⑥	J21.N4.9	SD5005	宋 1086	2.4	2.9	
9	279-12	PL40-12	聖宋○宝	屋代	⑥	D25	SD7013		2.2	1.2	1/3欠
10	279-13	PL40-13	○宋通宝	屋代	⑥	I18.23. N2.3.7.12	SD8001		2.5	0.9	半欠
11	279-14	PL40-14	天○通宝	屋代	⑥	I18.23. N2.3.7.12	SD8001		2.5	2.4	
12	279-15	PL40-15	政和通宝	窪河原			SD102	宋 1111	2.5	3.6	
13	279-16	PL40-16	至和通宝	窪河原			SD107	宋 1054 ~55	2.4	3.3	
14	279-17	PL40-17	不明	窪河原			SD107		2.2	2.6	
15	279-18	PL40-18	祥符元○	窪河原		G10.H6	SF02		2.5	1.9	1/3欠
16	279-19	PL40-19	開元通宝	窪河原		G10.H6	SF02	唐 621	2.5	3.1	
17	279-20	PL40-20	聖宋通宝	窪河原		G20.25	SF08	宋 1101	2.4	3.8	
18	279-21	PL40-21	元豊通宝	窪河原		G20.25	SF08	宋 1078	2.4	3.5	
19	279-22	PL40-22	紹○元宝	窪河原			SF14		2.6	2.5	1/3欠
20	279-23	PL40-23	○○○宝	窪河原			SF14			0.6	2/3欠
21	279-24	PL40-24	開元通宝	更埴条里	K	O24.T4.5	SK9205	唐 621	2.4	2.9	一部欠
22	279-25	PL40-25	熙寧元宝	屋代	①	E3	SK24	宋 1068	2.2	1.4	1/3欠
23	279-26	PL40-26	宣和通宝	屋代	①	E16.17	SK83	宋 1119	2.4	3.4	
24	279-27	PL40-27	大観通宝	屋代	①	E16.17	SK83	宋 1107	2.4	2.2	
25	279-28	PL40-28	天聖元宝	屋代			SK3021	宋 1023	2.5	1.1	1/3欠
26	279-29	PL40-29	聖宋元宝	屋代			SK3021	宋 1101	2.3	1.7	
27	279-30	PL40-30	○宋○宝	屋代	④	C23	SK4060			1.4	半欠
28	279-31	PL40-31	元豊通宝	屋代	④	W24.25.C4.5	SK4187	宋 1078	2.4	2.5	
29	279-32	PL40-32	○寧元宝?	屋代	④	X21	SK4202		2.3	2.6	
30	279-33	PL40-33	不明	屋代	④	X11	SK4220		2.5	2.2	半欠
31	279-34	PL40-34	元豊通宝	屋代	④	W6.11	SK4585	宋 1078	2.4	3	
32	279-35	PL40-35	紹聖○○	屋代	④	W7	SK4628		2.5	1.2	半欠
33	279-36	PL40-36	不明	屋代	④	R23	SK4849		2.4	2.1	
34	279-37	PL40-37	天○通宝	屋代	⑤	N25	SK5071		2.6	3.2	
35	279-38	PL40-38	大平通宝	屋代			SK6057	宋 976	2.4	2.9	
36	279-39	PL40-39	皇宋通宝	屋代	⑤	R14	SK6159	宋 1039	2.5	2.2	
37	279-40	PL40-40	永樂通宝	屋代	⑤	R14	SK6159	明 1408	2.5	3.5	
38	279-41	PL40-41	聖宋元宝	窪河原		G10	SK07	宋 1101	2.6	3.1	
39	279-42	PL40-42	祥符元宝	窪河原		G10	SK07	宋 1008	2.5	3.8	
40	279-43	PL40-43	大観通宝	窪河原		G10	SK07	宋 1107	2.4	3.3	
41	279-44	PL40-44	祥符元宝	窪河原		G15	SK39	宋 1008	2.1	2.2	
42	279-45	PL40-45	元祐通宝	窪河原		I15	SK127	宋 1086	2.4	3.2	一部欠
43	279-46	PL40-46	熙寧元宝	窪河原	VI	FR08		宋 1068	2.4	3	
44	279-47	PL40-47	元符通宝	窪河原	VI	FT07		宋 1098	2.5	3.9	
45	279-48	PL40-48	元祐通宝	窪河原	VI	GR06		宋 1086	2.4	3.8	
46	279-49	PL40-49	大観通宝	窪河原	VI	GS08		宋 1107	2.4	3.7	
47	279-50	PL40-50	大観通宝	窪河原	VI	GT06		宋 1107	2.5	3.4	
48	279-51	PL40-51	開元通宝	窪河原	VI	GT15		唐 621	2.5	3.1	
49	279-52	PL40-52	天○通宝	窪河原	VI	GR07			2.5	2.9	1/3欠
50	279-53	PL40-53	元豊通宝	窪河原	VI	GQ07		宋 1078	2.5	3.5	
51	279-54	PL40-54	熙寧元宝	窪河原	VI	GA09		宋 1068	2.4	4	
52	279-55	PL40-55	開元通宝	窪河原	VI	H6		唐 621	2.5	3.6	
53	279-56	PL40-56	景德元宝	窪河原	VI	HA07		宋 1004	2.5	3.3	
54	279-57	PL40-57	開元通宝	窪河原	VI	GQ07		唐 621	2.5	3.1	

表36 中世の鉄製品観察表

(単位: cm, g)

図版番号	写真番号	遺物名	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	長軸	短軸	厚さ	重量	備考
280-58	PL41-20	不明品	更埴条里	K	O25.K21	SB9027	(7.2)	0.5	0.4	2.9	
280-59		釘	更埴条里	K	O25.K21	SB9027	(7.2)	0.6	0.5	5.9	
280-60		不明品	屋代	①	U11.16	SB17	2.5	1.0	0.5	0.8	川鉄テクノロジーサーチ成分分析
280-61	PL41-1	斧	屋代	①	U11.16	SB17 床	8.4	5.4	2.6	89.9	有袋鉄斧、完形
280-62	PL41-10	鎌	屋代	①	E4.5	SB20	(8.4)	4.2	0.4	7.2	雁股鎌、身部先端一部欠
280-63	PL42-26	鉄環	屋代	⑤	O11.12.16.17	SB5002 床	5.3	1.0	0.5	35.2	完形
280-64		鎌	屋代			SD24	(4.0)			1.2	身部、基部一部欠
280-65		不明品	屋代			SD24	3.2	1.4	0.4	1.2	
280-66	PL41-11	鎌	屋代	⑤	N25.O21.S5.10.T1.6	SD5001	(6.9)	1.1	0.2	4.3	基部一部欠
280-67	PL41-12	鎌	屋代	⑤・⑥	N8.9	SD5005	(5.6)	0.6	0.4	1.9	身部、基部一部欠
280-68	PL42-28	不明品	窪河原		G12	SD101	7.0	0.3	0.3	3.4	ねじりあり、先端突る、完形
280-69	PL41-18	毛抜き	窪河原			SD107	8.1	1.6	0.5	7.9	完形
280-70	PL41-15	釘	更埴条里			SK9025	4.6	0.7	0.8	13.7	下半一部欠
280-71	PL42-25	不明品	更埴条里	K	K21	SK9909	(4.1)	0.5	0.4	1.8	
280-72	PL42-24	不明品	更埴条里	K	O24.T4.5	SK9205	(3.2)	(3.2)	0.4	4.9	
280-73		不明品	屋代	①	E3.8	SK60	(4.0)	0.3	0.3	0.4	上端部欠
280-74	PL41-5	刀子	屋代	①	E24	SK74	(5.5)	0.6	0.2	0.6	凶右(刀子鞘)3.1g
280-75	PL41-6	刀子	屋代			SK179	(10.2)	1.7	0.3	4.6	身部、基部一部欠
280-76	PL41-7	刀子	屋代	④	C19	SK4121	(15.4)	1.6	0.4	12.0	基部一部欠
280-77	PL41-16	釘	屋代	④	C14	SK4040	(5.9)	0.4	0.4	1.1	下半一部欠
280-78		不明品	屋代	④	C14	SK4052				3.5	
280-79	PL41-8	刀子	屋代	④	X11.16	SK4218	(5.4)	1.1	0.3	2.6	身部、基部一部欠
280-80		紡錘車	屋代	①	Y4	SK88	(5.0)		0.3	9.8	紡輪一部欠
280-81	PL41-21	鉄鐸	屋代			SK551	8.0	1.7	0.1	8.8	完形
280-82	PL41-4	小刀	屋代	①	E7	SK56	29.1	2.2	0.7	68.5	完形
280-83	PL41-9	小刀	屋代	④	X21.22	SK4201	(24.5)	2.4	0.4	29.5	基部一部欠
280-84	PL41-13	鎌	屋代	④	C23	SK4059	(8.9)	5.1	0.4	7.9	雁股鎌、基部一部欠
280-85	PL41-17	釘	屋代	④	C19	SK4121	(6.5)	0.6	0.4	2.9	下半一部欠
280-86	PL42-27	不明品	屋代	④	W16	SK4535	4.1	1.2	0.3	3.3	
280-87		鎌	屋代	④	X21.22	SK4201	(3.1)	(4.0)	0.1	3.2	刃部片
280-88	PL41-2	鋤鎌先	屋代	④	V15	SK4582	(17.3)	(4.7)	1.7	85.6	U字形、耳部
281-89	PL41-22	不明品	窪河原			SK3	(10.6)	0.8	0.3	11.1	先端三又状、先端部一部欠
281-90	PL42-31	不明品	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	10.8	0.8	0.7	18.0	完形?
281-91	PL42-32	不明品	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	11.5	0.9	0.8	13.2	木質部残存、完形?
281-92	PL42-36	錐	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	11.9	0.7	0.7	12.7	完形
281-93	PL42-37	不明品	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	10.2	1.0	0.8	24.9	完形
281-94	PL42-38	錐	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	10.3	0.9	0.8	18.5	完形
281-95	PL42-35	毛抜き?	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	(3.0)		0.2	1.2	上半部欠
281-96	PL42-33	刀子	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	(7.5)	0.9	0.3	4.0	身部、基部一部欠
281-97	PL42-34	刀子	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	(9.7)	1.5	0.3	10.7	同上
281-98	PL42-39	脚部	窪河原		G10.15.H6.11	SK16				35.6	
281-99	PL42-40	不明品	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	(8.7)	(4.3)	0.3	41.2	
281-100	PL42-41	鉄鍋	窪河原		G10.15.H6.11	SK16	(11.8)	(7.9)	0.3	43.8	口径28.0cm
281-101	PL41-23	不明品	窪河原		I15	SK125	11.2	0.8	0.7	43.7	先端三又状、先端ごく一部欠
281-102	PL41-19	毛抜き?	窪河原		I15	SK125	(3.9)	0.9	0.5	1.3	下半部欠
281-103		錐	窪河原		G14.15	SK38	(9.1)	0.5	0.4	4.6	一部欠
281-104	PL42-30	錐	窪河原		I15.J11	SK115	9.5	0.7	0.6	18.9	完形
281-105	PL42-29	不明品	窪河原		G15	SK34	5.1	0.3	0.3	1.7	完形
281-106		不明品	窪河原		J6.11	SK130	(6.2)	(2.9)	0.3	13.6	
281-107		鑄造製煮炊具?	窪河原		I15	SK118	(3.0)	(3.3)	0.4	7.2	
281-108	PL41-14	燧金具	屋代			III-1層	4.5	0.7	0.4	1.4	完形
281-109	PL41-3	鎌	窪河原		M24	UM19	(22.1)	3.8	0.4	71.9	刃部一部欠

26点出土している。図化したのはこの内の6点である。欠損品が多く、使用減り、研ぎ減りが著しいという特徴をもち、本来の姿をとどめていないものがほとんどである。図版280-74の右側に図化したのは鞘にあたる。

D. 鏃

16点出土し、この内5点図化した。図版280-62・84は雁股鏃である。84は身部に三角形の透をもつ。

E. 錐

4点図化した（図版281-92・94・103・104）。いずれも断面が方形を呈し、細く先端が尖る特徴をもつ。

F. 不明品

57点出土している。図化したものはこの内の17点だが、特徴的な形態をもつものが多い。図版280-58は上方の端部に円形の孔が穿たれ、舌のような形状をする。図版280-72は、形状が裁縫用の筥に似ており、下端に刃が付くため筥状工具の可能性はある。図版280-68は一端が尖り、ねじれをもっている。図版281-105は先端が二股に分かれ尖る。図版281-89・101は、長さは違うものの似た形態をしている。先端部の一端は三つ又状に別れ、鋭さをもつ。反対の一端は細長く終息する。図版281-90・91も似た形態をもち、先端部の一方が直角に曲がり尖る。91には木質部の付着がみられる。図版281-99は欠損部以外の縁辺に沈線が巡る。

G. その他

36点出土している。特徴的な資料を以下に列挙する。

鉄鍋（図版281-100）と**脚部**（図版281-98）

鉄鍋は内耳鍋と同一の形状をもつ。脚部は何らかの容器に付着するものであろう。

鋤鍬先（図版280-88） U字型で耳部のみ残存している。

小刀（図版280-82・83） 83は井戸からの出土である。

鉄鐸（図版280-81）

一枚の鉄板を筒状に丸めて作られる。上下の口径に差があるためわずかに台錐状となる。合わせ目はやや開き気味になる。舌はなく、舌を固定する罅や穿孔はみられない。

斧（図版280-61） 有袋鉄斧の完形品である。竪穴住居の床面から出土している。

紡錘車（図版280-80）

毛抜き（図版280-69、図版281-95・102）

燧金具（図版281-108） 山形の変形した例である。

4 鉄生産関連遺物（中世）

本項では、製錬作業や鍛冶作業（精錬鍛冶、鍛錬鍛冶）に伴って排出され出土した中世関係の遺物の概要を述べる。

A. 地区別・遺構別出土状況

鍛造剥片、粒状滓を除いた鉄生産関連遺物の重量を地区別に集計したのが図39である。屋代遺跡群④～⑥区に集中して出土していることがわかる。表37には、地区別・遺構別に分離集計して鉄生産関連遺物の出土状況を示した。これをもとに、わかり易くグラフ化したものが図40である。SKからの出土が多いことがわかる。

B. 鍛造剥片・粒状滓

発掘調査時に採取したサンプル土より検出された鍛冶関連微細遺物の状況は、表38のとおりである。中世関係はSK4052のみである。

C. 鍛冶関連遺構の鉄生産関連遺物（図版282 PL42）

表39に鍛冶関連遺構の遺物出土量を示した。中世関係ではSK4052のみである。実測図を掲載した遺物の観察表は表40に示した。図41に構成図を掲載したが、その作成及び分析遺物の選択とその分析部分の選

表37 中世の鉄生産関連遺物 地区・遺構別出土量
遺構内出土

(単位：g)

遺物種類		鉄 滓				粘 土 系		
地区	遺構	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
K地区	S B		51.2		2.2			
	S D	25.2	80.1				30.3	7.9
	S K	34.8	553					16.9
	計	60	684.3	0	2.2	0	30.3	24.8
H地区	S K		65.6					
	計	0	65.6	0	0	0	0	0
①区	S B	45	336.4		9.6			
	S D	62.6	95.3		29.1			411.2
	S K		34.3		6.9			
	P		127.9					286.3
	計	107.6	593.9	0	45.6	0	0	697.5
④～⑥区	S B						20.2	21.3
	S D		370.9		15.4		567.7	
	S K	388.1	2197.9		339.3		1794.5	825.4
	S X	91.7	453.6		21.7		15.6	170.6
	P	83.6						
	計	563.4	3022.4	0	376.4	0	2398	1017.3

包含層出土

層位	地区	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
III-1層	H, I, J地区		28.7				28.4	91.1
	K地区	9.2					45.1	41.6
	①区	58.5	290.8		30			
	⑤～⑥区		359.6		48.2		126.4	4.3
計		67.7	679.1	0	78.2	0	199.9	137

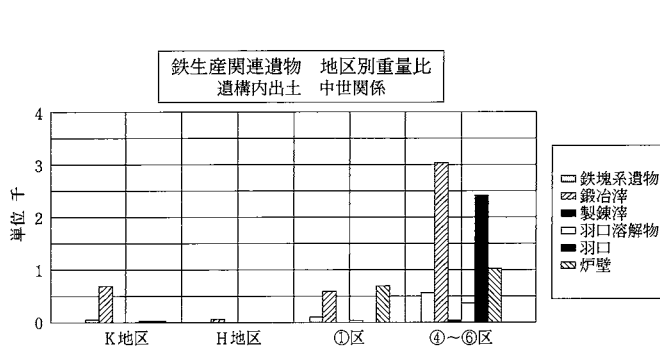


図39 中世の鉄生産関連遺物地区別重量比
(鍛造剥片・粒状滓を除く)

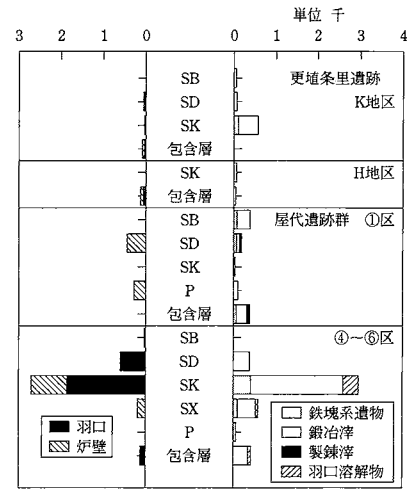


図40 中世の鉄生産関連遺物
出土状況(地区別・遺構別)

表38 中世の鍛造剥片・粒状滓等検出結果

遺構名	採取地点	採取土重量(g)	磁着物重量(g)	割合(%)	砂鉄・鍛造剥片(⑦類)		粒 状 滓		鍛 造 剥 片		鉄 滓 片			
					重量(g)	割合(%)	重量(g)	同(%)	個数	重量(g)	同(%)	個数	重量(g)	同(%)
SK4052	埋土	14,000					5.63		1,823	146.78	200,169	363.48		60,915

表39 中世の鍛冶関連遺構 遺物出土量

(単位：g)

出土遺物 遺構名	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	羽 口	炉壁(鍛冶炉)	炉壁(製錬炉)	鍛造剥片	粒状滓
SK4052	237.6	1,706.2	46.4	255.4	1,526.5	147.9		146.78	5.63

定にあたっては穴澤義功氏の指導を受けた。出土遺物の説明にあたっては分析結果(第10章第1節)もふまえて記載する。

屋代遺跡群④区SK4052 鉄塊系遺物、鍛冶滓、製錬滓、羽口溶解物、羽口、炉壁、鍛造剥片、粒状滓が出土している。他に鉄滓片も60915片出土している。19点図化した（図版282）。2は椀形鍛冶滓（製錬滓）である。黒赤色発泡し孔の壁面に繊維痕がつく。金属の微粒が存在する。鉄源は砂鉄である。6は椀形精錬鍛冶滓である。黒色発泡し粗末な滓である。金属小粒が存在する。鉄源は砂鉄である。8は鉄塊系遺物である。鍛冶加工は受けていない。鉄源は砂鉄である。11は先端部の羽口片である。鉄滓の付着はなく、細かい礫を混合している。耐火度は1230℃強で高い。17も羽口である。先端部に溶融滓が付着する。耐火度は高くないと推定される。

表40 中世の鉄生産関連遺物一覧表（構成図使用遺物）

（単位：cm, g）

構成図番号	図版番号	写真番号	遺物名称	地区	中地区	出土遺構	長軸・短軸・厚さ・重量	メタル度	磁着度	分析番号
41-147	282-1	PL42-1	流出孔（溝）滓	④	C14	SK4052	5.2×3.9×1.9 41.8		3	
41-148	282-2	PL42-2	椀形鍛冶滓			SK4052	3.9×3.8×2.2 46.4		4	96-02
41-149	282-3	PL42-3	椀形鍛冶滓			SK4052	4.1×3.3×3.1 38.6		4	
41-150	282-4	PL42-4	椀形鍛冶滓			SK4052	4.2×3.9×3.4 32.5		4	
41-151	282-5	PL42-5	椀形鍛冶滓			SK4052	4.5×2.7×2.5 33.3		4	
41-152	282-6	PL42-6	含鉄椀形鍛冶滓			SK4052	3.4×3.0×1.1 12.9		8	96-01
41-153	282-7	PL42-7	鉄塊系遺物			SK4052	6.0×3.9×2.5 53.8		5	
41-154	282-8	PL42-8	鉄塊系遺物			SK4052	2.3×1.6×1.3 5.5	H (○)	6	96-03
41-155	282-9	PL42-9	鉄塊系遺物			SK4052	3.9×2.7×2.0 26.0		5	
41-156	282-10	PL42-10	鉄塊系遺物			SK4052	3.2×3.0×2.5 26.5		5	
41-157	282-11	PL42-11	羽口			SK4052	7.3×6.6×3.2 134.1		3	96-04
41-158	282-12	PL42-12	羽口			SK4052	9.2×5.5×2.6 173.7		3	
41-159	282-13	PL42-13	羽口			SK4052	7.9×7.6×2.7 181.3		4	96-05
41-160	282-14	PL42-14	羽口			SK4052	6.7×3.9×3.0 86.4		4	
41-161	282-15	PL42-15	羽口			SK4052	6.3×2.8×2.1 68.7		3	
41-162	282-16	PL42-16	羽口			SK4052	4.6×3.5×2.6 65.3		2	
41-163	282-17	PL42-17	羽口			SK4052	7.1×3.2×2.9 56.0		2	
41-164	282-18	PL42-18	金床石（破片）			SK4052	6.3×4.4×1.8 50.0		3	
41-165	282-19	PL42-19	炉壁（鍛冶炉）			SK4052	10.1×3.6×2.2 59.3		4	

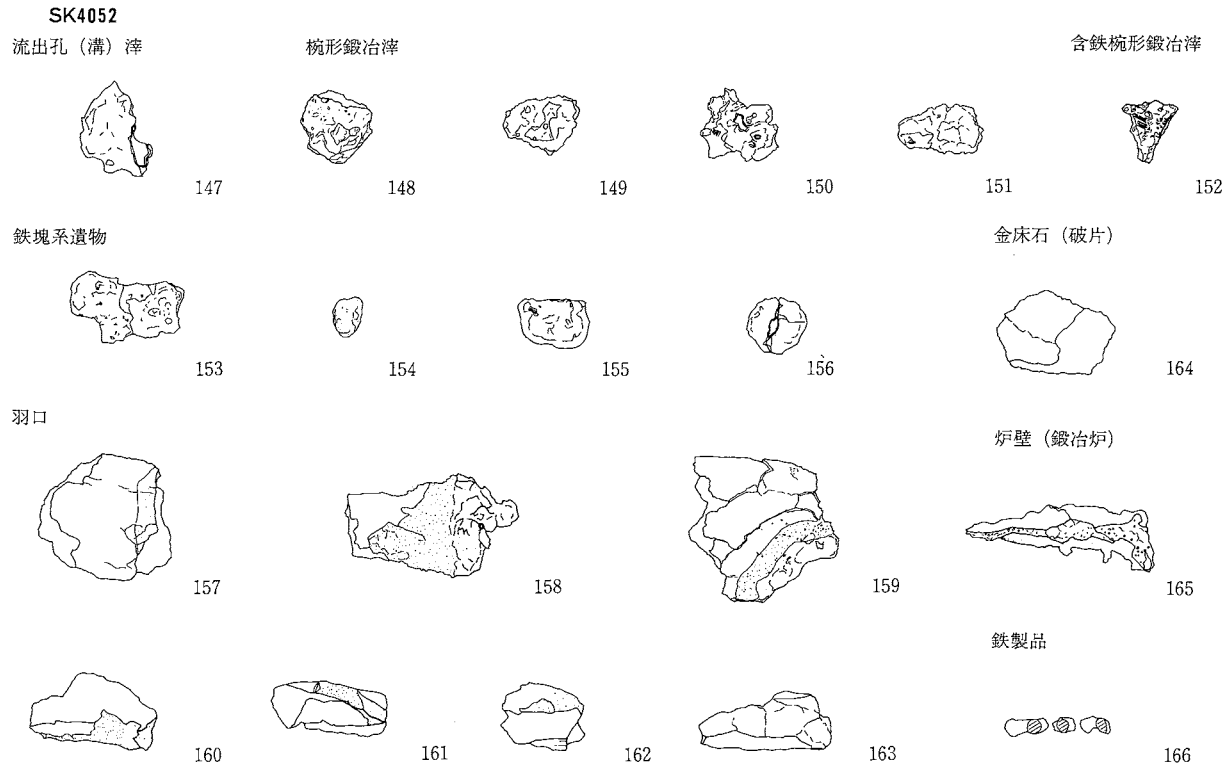


図41 屋代遺跡群 鉄生産関連遺物構成図（中世関係）

S = 1 : 4

第4節 木製品

1 概要

中世に属する木製品は、井戸跡、流路跡から多数出土した。『古代1編』においては旧河道内から出土した大量の木質遺物に対し、1. 木製遺物（木製品）、2. 木製品製作過程の遺物、3. 自然木に大別して報告を行った。中世の遺物はほとんどが1の木製品に属し、一部2の製作過程に生じた屑と考えられるものが認められる。

2 木製品

(1) 木製品の分類

項目は基本的に『古代1編』を踏襲するが、該当する遺物が認められないものは除外する。なお、食事具という分類を新たに加える。分類項目とそれぞれに該当する品目は以下の通りである。

1. 木形 斎串
2. 農工具 刀子柄 鎌柄
3. 容器 曲物（底板・側板） 蓋 皿 その他
4. 服飾具 下駄 草履
5. 食事具 箸
6. 建築部材 井戸枠
7. その他 雑具 部材 木札状木製品 棒状木製品

(2) 木製品の解説

1. 木形

木形という分類に該当するのは11、12の2点である（図版283、PL43）。双方ともに上端をやや山形（圭頭状）に加工し、両側面に2対の切り欠きを施している。下端が欠損しているが、上端が圭頭、下端が剣先状となり、墨書頭が特に認められないものを『古代1編』では斎串という範疇で捉えており、この2点もそれに該当する。

中世においてはこのような側面上部に2対の切り欠きを施す例が多く、呪符木簡にも同様の加工が認められる場合が多い（宮島義和1999）。特に11のように上部から鋭角に切り落とす加工方法は中世特有のものであり、斎串に仏教的な要素が付け加わって成立した可能性も指摘されている（西本安秀1998）。

2. 農工具

刀子柄 14（図版283、PL43）49（図版286、PL44）2点ともに刀身部が残存する。茎に目釘を通して柄と固定するものであるが、49は蔓状のものが巻き付けられており、木片を挿入し締め付けを強固にしている。刀身の幅も広く、刀子というよりは小刀と呼ぶにふさわしい。

鎌柄 39（図版285、PL44）は茎部と刃の一部が残存する。茎部先端を折り返して柄に固定する形式のものであるが、上端部に目釘を通した孔も認められる。柄は持ち手となる部分の表面を丁寧に削り調整してある。

なお、13（図版283）も木口先端より切り込みが施されており、鎌等の柄であった可能性が高い。

3. 容器

曲物 井戸を中心に円形曲物の底板が多数出土している。古代にみられた周囲に段差をもつ、いわゆるカキゾコはみられず、全てクレゾコの形態となる。この内35 (図版285)、52 (図版286) は側部に側板を接合した釘の痕跡がみられない。蓋等の別の用途も考えられるが、近世の曲物にみられるように側板の外側をさらにタガ状の側板で締めて固定したことも考えられる。1 (図版283) は楕円形の底板であるが、同様に木釘痕は認められない。

なお、15 (図版283) は非常に小型のものだが、並列する小孔がみられる。おそらく表面に側板を置き、底部からカバ等で緊縛したものと思われる。

曲物柄杓 31 (図版284) は底板と側板に分離してあるが、柄杓である。側板の残存状況が悪く、柄を装着した部分を抽出して図化した。底板側部には木釘痕がみあたらず、これも側板周囲をタガで固定していたものと思われる。

折敷 40 (図版285、PL44) は方形曲物の底板、いわゆる折敷と考えられる。側部には木釘痕がみられず、表面縁辺部にケビキ状の溝が施されている。おそらくこの溝に側板を設置したものと考えられるが、底板との接合法は不明である。角を丸く削り、装飾的な加工をおこなっている。

蓋 47 (図版286、PL44) は中央に柄孔状の穿孔がみられ、縁辺部を削り扁平に仕上げている。柄孔は把手を装着したものと考えられ、ある種の容器の蓋と考えるのが妥当であろう。なお、3 (図版283、PL43) は半分が欠損しているが、中央部に穿孔痕がみられる。蒸籠の底板と考えることもできるが、被熱の痕跡がなく、やはり蓋として機能した可能性が高い。

皿 4 (図版283、PL43) は大部分が欠損しているが口縁部の加工がみられ、皿の一部と考えられる。全容は不明であるが、方形の皿であった可能性が高い。内面全体が炭化している。

その他 19 (図版284、PL43) は木の内部を削り抜いた容器と考えられるが、非常に特殊な遺物である。外面は炭化しているが、内面には漆状の付着物が残存している。欠損部の断面を観察したが木目が確認できなかったため、底部に残存する炭化していない部分を同定した結果はサワラであった。しかしその下より再び炭化面が現れたため、サワラと同定された部分は本体部とは別なものであると考えられる。このことから、この容器は外面を故意に炭化させ、底部に別な素材を接着させていた可能性が高い。内部の付着物は未鑑定であるが、漆だとするとそれにかかわる容器 (柄杓?) 等の用途が考えられる。

4. 服飾具

下駄 18 (図版283、PL43) はやや破損が激しいが、楕円形の連歯下駄である。つま先の緒孔が中央部にあけられている点に特徴がある。

草履 38 (図版285、PL44) は樹皮を加工したもので、緒孔が3カ所みられる。歯を装着した痕跡がないことから草履とした。しかし長さが15.2cmと小型であり実用できたかどうかは疑問である。

6. 食事具

箸 41 (図版285、PL44) はその形状から箸と考えられ、「食事具」の分類を新たに設けた。同じくSK4201から出土した42 (図版285、PL44) は一端が欠損するが、同様の加工が行われている。また、16・17 (図版283、PL43) もこれに類似する。

7. 建築部材

井戸枠 32・33・34 (図版284、PL43)、43・44 (図版285・286、PL44) は全て井戸から出土した、組み合わせ用の加工がみられる部材である。この内、32・33は大きめの角材であり、あるいは住居等の柱が廃棄された可能性もある。34は両端木口を柄杓に加工している。43は円孔を穿ち、そこに丸木材が組み合わされている。44は接合部に丁寧な加工を施し、円孔があけられている。

8. その他

雑具 23・24 (図版284、PL43) は一端に小孔がつけられている。特に小孔が並列する23は類似するものが古代にもみられ、欠損した片側にも同様の小孔があったものと考えられる。『古代1編』では浮子の可能性を指摘した。

部材 20 (図版284、PL43) は表裏、木端ともに丁寧な削り調整を行っている。用途は不明であるが、柄状の作り出しがみられることから、何かに組み合わせた部品と考えられる。

木札状木製品 サイズに大小の差はあるが、6・7・9・10 (図版283)、21・22・25～27、29・30 (図版284) をここに含めた。この内6は両端が欠損するが59.4cmを計る。幅は2.3cmでほぼ均一に成形されている。7、27は片面に削り調整を行っている。

棒状木製品 5 (図版283) はケヤキの芯持ち材を棒状にしたものである。木口両端が水平になっているが、原形を保っているかは断定できない。28 (図版284) は削出しによって棒状に加工したものである。

3 木製品製作過程の遺物

(1) 概要

木製品を製作する過程で生じた不要の部分を『古代1編』では「屑」という分類で捉え、木材加工の状況を把握する資料とする試みを行った。以下中世の遺物の中でこれに該当するものの記載を行う。

(2) 中世の屑の解説

切屑 44・45 (図版286) は表面に丁寧な削り調整を行った板材の断片である。成形過程での切断作業によって生じた不要部分と考えられる。双方とも片側木口は斧等による荒い切断面であるが、一端は平滑な切断面となっており、鋸の使用が想定できる。

8 (図版283) はヤマグワの芯持ち材の周囲を削り、角材状にしたものである。残存状態が悪く、切断面の状況が把握できないが、切屑と捉えた。

参考文献

- 西本安秀 1998 「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『考古学論集』下巻
宮島義和 1999 「第5章第7節 木質遺物」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』
宮島義和 1999 「短冊状木製品の初歩的研究」『国史学』第167号

表41 中世の木製品一覧表

図版 PL	報告 番号	分類	名称	遺跡	仮地区	出土遺構	木目	最大長・径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	形状の特徴
283・43	1	容器	曲物底板	更埴	K	SK9205	柁目	(17.3)	(3.7)	0.9	ヒノキ	表裏に刃物痕
283	2	容器	曲物底板	更埴	K	SK9205	板目Ⅱ	(16.8)		1.1	サワラ	
283・43	3	容器	蓋?	更埴	K	SK9205	柁目	(13.3)		0.7	サワラ	中央部に穿孔あり 蓋 あるいは蒸籠か
283・43	4	容器	皿	更埴	K	SK9205	柁目	(25.4)	(8.5)	0.4	サワラ	方形の皿か? 表面全 面が焦げ
283	5	その他	棒状木製品	更埴	K	SK9205	芯持ち	51.1		4.2	ケヤキ	
283	6	その他	木札状木製品	更埴	K	SK9205	柁目	(59.4)	2.3	0.45	ヒノキ	
283	7	その他	木札状木製品	更埴	K	SK9205	追柁目	(18.5)	5.7	1.3	—	
283	8	屑	切屑	更埴	K	SK9205	芯持ち	(18.2)	6.3	6.3	ヤマグワ	
283	9	その他	木札状木製品	更埴	K	SK9205	柁目	10.0	0.9	0.5	—	一端を斜めに平面削 り
283	10	その他	木札状木製品	更埴	K	SK9205	柁目	10.3	1.9	1.1	—	
283・43	11	木形	斉串	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	(96.8)	7.2	1.7	針葉樹	
283・43	12	木形	斉串	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	(12.8)	2.6	0.7	モミ属	
283・43	13	農工具	柄	屋代	①	SD23	削出し	26.8	2.0	1.7	カヤ	一端木口から切り込 みあり。柄か?
283・43	14	農工具	刀子柄	屋代	①	SD23	芯持ち	(23.4)	2.4	1.7	ヤナギ属	
283・43	15	容器	曲物底板	屋代	①	SD23	柁目	(9.2)		0.4	針葉樹	
283・43	16	食事具	箸	屋代	①	SD23	削出し	(13.7)	0.7	0.5	サワラ	
283・43	17	食事具	箸	屋代	①	SD23	削出し	(10.0)	0.7	0.5	サワラ	
283・43	18	服飾具	下駄	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	23.4	13.1	2.0	トチノキ	
284・43	19	容器	漆壺?	屋代	①	SD23		器高8.2	底径6.1		(サワラ)	器内に漆状堆積物
284・43	20	その他	部材	屋代	①	SD23	追柁目	14.1	6.2	1.6	カヤ	
284	21	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	斜め	7.3	6.2	0.3	サワラ	
284	22	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	柁目	9.0	2.8	0.25	—	
284・43	23	その他	雑具	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	(8.4)	3.2	0.5	サワラ	浮子か?
284・43	24	その他	雑具	屋代	①	SD23	柁目	4.9	3.3	0.65	サワラ	
284	25	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	8.2	3.2	0.25	サワラ	
284	26	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	柁目	15.2	4.0	0.4	—	
284	27	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	柁目	(15.3)	2.8	0.45	—	
284	28	その他	棒状木製品	屋代	①	SD23	削出し	20.2		1.2	—	
284	29	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	板目Ⅰ	(20.4)	2.7	1.2	ヒノキ	
284	30	その他	木札状木製品	屋代	①	SD23	柁目	(25.6)	4.1	1.0	スギ	
284	31	容器	曲物柄杓	屋代	①	SK65	柁目 (底板)	底板径8.8		底板厚0.6	底板・針葉樹 側板・ヒノキ	側板に柄装着用孔あ り
284・43	32	建築部材	井戸枳材	屋代	④a	SK4513	芯持ち	(63.5)	17.8	14.0	モミ属	
284	33	建築部材	井戸枳材	屋代	④a	SK4513	芯持ち	(37.0)	13.7	14.0	モミ属	
284・43	34	建築部材	井戸枳材	屋代	④a	SK4513	追柁目	117.2	7.5	5.2	モミ属	
285	35	容器	曲物底板	屋代	④b	SK4002	柁目	19.5		1.8	サワラ	
285・44	36	容器	曲物	屋代	④b	SK4040	柁目 (底板)	底板径23.0 側板径24.3	側板幅 (4.7)	底板厚0.6 側板厚0.5	サワラ	側板はタガか?
285	37	容器	曲物底板	屋代	④b	SK4040	柁目	22.8		0.9	ヒノキ	
285・44	38	服飾具	草履	屋代	④b	SK4040		15.2	8.8	0.9	樹皮	草履としては小型
285・44	39	農工具	鎌	屋代	④c	SK4201	削出し	24.1	2.7	2.3	サワラ	
285・44	40	容器	曲物底板	屋代	④c	SK4201	柁目	28.8	(15.5)	0.9	サワラ	折敷。側板結合孔な くケビキ線のみ
285・44	41	食事具	箸	屋代	④c	SK4201	削出し	20.7	0.7	0.5	サワラ	
285・44	42	食事具	箸	屋代	④c	SK4201	削出し	(16.6)	0.7	0.5	サワラ	
285・44	43	建築部材	井戸枳材	屋代	④c	SK4201	板目Ⅰ	(56.5)	14.0	4.5	ヒノキ	ホゾ孔に木栓
286・44	44	建築部材	井戸枳材	屋代	④c	SK4201	板目Ⅰ	(63.0)	15.6	5.8	サワラ	
286	45	屑	切屑	屋代	④c	SK4201	板目Ⅱ	37.7	19.2	2.6	サワラ	板材切屑か?
286	46	屑	切屑	屋代	④c	SK4201	斜め	23.0	6.8	2.2	サワラ	板材切屑か?
286・44	47	容器	蓋?	屋代	④c	SK4204	板目Ⅰ	19.6		1.4	サワラ	中央部ホゾ孔
286	48	容器	曲物底板	屋代	④c	SK4399	板目Ⅱ	22.0		1.5	ヒノキ	
286・44	49	農工具	刀子	屋代	④d	SK4230	芯持ち?	(23.8)	4.0	2.0	散孔材	
286	50	容器	曲物底板	屋代	④d	SK4230	柁目	23.4		1.3	ヒノキ	
286	51	容器	曲物底板	屋代	④d	SK4424	追柁目	(19.0)		0.8	サワラ	
286・44	52	容器	曲物底板	屋代	⑤a	SK6180	柁目	23.0		1.4	サワラ	
286	53	容器	曲物底板	屋代	⑤a	SK6232	柁目	18.0		1.1	サワラ	
286・44	54	容器	曲物底板	屋代	⑤a	SK6232	板目Ⅱ	18.0		1.2	サワラ	片面に漆状の塗り
286	55	容器	曲物底板	屋代	⑤b	SK5490	板目Ⅱ	18.2		1.3	ツガ属	

第6章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群Ⅲ層上面検出の遺構と遺物出土状況 窪河原遺跡Ⅱ層検出の遺構と遺物出土状況（近世）

第1節 概 観

遺構の検出層位 本章に掲載するのは、Ⅲ-1層が確認できなかった更埴条里遺跡J地区以南ではⅢ-2層上面、更埴条里遺跡K地区以北においてはⅢ-1層上面で検出された遺構を主とするが、本来はⅡ層に対応する遺構群と考えられる。なお、窪河原遺跡はトレンチ調査区内において更埴条里遺跡・屋代遺跡群のⅡ層に対応する層位内で検出された遺構を対象とする。

遺構の選別 更埴条里遺跡・屋代遺跡群における近世の遺構は、①遺構の埋土がⅡ層土の単層堆積であるもの、またⅢ層土に混じってⅡ層ブロックが確認できるもの、②出土遺物によって近世に比定できるもの、主として以上の項目に基づいて選別を行った。

遺構検出地区 上記①、②に該当する遺構は更埴条里遺跡B地区～屋代遺跡群⑥区にかけて検出されており、窪河原遺跡を含め非常に広範囲におよぶ。なお、更埴条里遺跡A地区では該当する遺構の確認はできなかった。

掲載の方法 更埴条里遺跡・屋代遺跡群は1/500遺構分布図での掲載を基本とし、土坑、掘立柱建物跡について各調査地区別に1/60個別図を作成した。なお、調査区内で検出された圃場整備前の用水路（堰）および溝についてはSD番号を付し、時期不明の畦畔状の遺構も含め1/500遺構分布図中でスクリーンによって示した。窪河原遺跡は1/2000のトレンチ調査区内遺構分布図を作成した。また、SDについては1/80断面図を付した。

検出遺構数 掘立柱建物跡1棟 柵列および杭列跡6条 焼土址2基 井戸跡7基 その他の土坑156基 溝跡49条 畦畔15条

第2節 近世遺構群の概要

1 概 観

遺跡全体を通して、近世に属する遺構には集落の存在を示すものは確認できない。後背湿地Ⅰ群内のⅡ層中からは高密度のプラントオパールが検出されており、ほぼ全域が水田化されていたとみられる（第9章第2節1）。この一帯で検出された遺構は水田耕作に関わるものである可能性が高い。

自然堤防Ⅰ群内については水田化されていたことを示す資料が乏しいが、屋代遺跡群①区で検出された畦畔状の区画が近世まで遡る可能性もある。しかし、現代まで水田化がみられなかった最高所域（屋代遺跡群⑤区）を中心として検出された遺構は非常に少ない。

窪河原遺跡ではトレンチによる断片的な調査にとどまったが（H2区、H6区）、水田・畠および水路の存在が確認された。

2 後背湿地 I 群内の遺構 (図版287～296)

(1) 概要

後背湿地 I 群内では土坑を主とした多数の遺構が検出されたが、その中でも特に低地部分にあたる更埴条里遺跡 B 地区～G 地区に集中する。遺構の主体は土坑であるが、1 部柵列、溝跡なども確認できる。

微高地部にあたる更埴条里遺跡 H 地区以北は土坑の数が極端に減少し、溝跡、柵列、掘立柱建物跡が点在するのみである。

(2) 低地部の遺構 (更埴条里遺跡 B 地区～G 地区)

土坑列 低地部分で検出された多数の土坑の規模と形状は多様である。しかし、各地区を通してその配置をみると、全域に点在するのではなく、南北に带状に広がる傾向がみられる。特に更埴条里遺跡 G 地区では、地区中央部に南北方向の柵列跡 (SA601・SA602) が検出されているが、土坑は 1 部を除いてほぼすべてがこの西側に集中する。このことから、これらの土坑はある一定の使用目的をもって特定の範囲内に掘削されたものであると考えることができる。

溝跡 溝は低地部分で 5 条確認され、方向は東西のものと、北西—南東のものに 2 分できる。検出面からの掘り込みが浅く断片的な状況で、全容が把握できないものがほとんどである。この内 SD301 (図版289・290) は D 地区、E 地区に渡ってそのつながりが確認され、さらに地区外へ伸びていく様子が窺える。

遺構の時期 出土遺物が少ないため、ほとんどの遺構の時期の特定はできない。この内更埴条里遺跡 G 地区 SK6393 (図版292) からは 19 世紀前半の焼き物 (図版313) が出土した。また、F 地区 SD501 出土の焼き物は 18 世紀中頃～後半に属し、SD502 出土のものは 17 世紀～19 世紀前半と幅がある (図版312)。これらの遺構の年代は II 層中から出土した遺物の年代幅 (図版313) とほぼ一致する。

(3) 微高地部の遺構 (更埴条里遺跡 H 地区～K 地区)

柵列による区画 微高地内は溝および土坑が点在するが、大部分は無遺構地帯となる。この内更埴条里遺跡 I 地区西側に南北方向の柵列 (SA801・SA802・SA803)、掘立柱建物跡 (ST801、図版310)、土坑 3 基が検出された (図版294)。H 地区北端部の土坑 (図版293) も含め、配置の状況からみて柵列によって地区内が東西に区分されていた様子が窺える。

溝跡 I 地区北側および K 地区南側で東西の水路跡が検出された。SD873 (図版294) は蛇田堰、SD930・SD940・SD943 (図版296) は町田堰に相当する。また、K 地区北側の SD909・SD991 は五十里川の旧河道である。この他 H 地区、J 地区でも断片的に小規模な溝跡が検出されている。

遺構の時期 旧水路の SD873 と SD940 からは古いもので 17 世紀後半の焼き物 (図版312) が出土している。両者は現代の遺物も含むためスクリーントーンで示したが、掘削時期は不明であり、時代が遡る可能性がある。また、H 地区の南北溝 SD733 からは 19 世紀の焼き物 (図版312) が出土した。

3 自然堤防 I 群内の遺構 (図版297～304)

(1) 概要

屋代遺跡群①区～⑤区では、後背湿地 I 群の微高地部と同様に土坑と溝が点在する他は無遺構の範囲が多くを占めている。ただ、自然堤防北端外側の傾斜部にあたる⑥区では土坑がやや集中して検出されており、高所部とはやや異なった状況となる。

(2) 高所部の遺構

畦状の痕跡 屋代遺跡群①区では南北に1条とそれに交差する2条の畦状の痕跡が検出された（図版297）。時代を決定する資料がないためスクリーントーンによる表示とした。軸方向が圃場整備以前の畦畔とは検出面から考えて時代が遡るものと考えられ、この一体が水田域であった可能性を示す。

溝 跡 スクリーントーンで示した、屋代遺跡群②区SD2208（図版299）、SD3001（図版300）は水路跡である。この内SD3001は町浦堰にあたる。また、屋代遺跡群①区では中世の五十里川河道が埋没した後に形成された流路（SD27・SD31、図版297）が確認された。この他③b区と④区において掘り込みの浅い溝状の遺構が断片的に検出されている。

遺構の時期 水路跡のSD2208・SD3001ともに近世の焼き物が出土しているが（図版312・313）、現代の遺物を含む堆積土をもつ。SD27出土の焼き物は16世紀末～18世紀後半と時代幅が広く、SD31出土の焼き物も17世紀前半と18世紀前半のものがみられる（図版312）。

(3) 傾斜部の遺構

溝 跡 屋代遺跡群⑥区では土坑の他に、平面的な調査はできなかったが、北壁においてII層に対応する溝の存在が確認された（SD8053・SD8054、図版170）。断面の状況から窪河原遺跡の方向に伸びていたものと思われるが、そのつながりは確認できなかった。

遺構の時期 ⑥区SK7001から近世の焼き物（図版313）が出土した他は、時代を特定できる遺物の出土はみられなかった。

4 窪河原遺跡の遺構

(1) 概 観

近世の遺構については、試掘トレンチの段階で水田・畠・水路跡のみであったため、調査期間との兼ね合いから平面調査は行わなかった。

近世と捉えた層はII-3層からIII-1層直上の層（註一トレンチの深さによって直上層まで達している地点は少ない）である。II-3層の洪水砂は善光寺地震のものと思われる砂脈を切っており、上層からは明治時代の陶磁器が出土していることから、19世紀後半の堆積である。一方、III-1層との境の時期については不明瞭な点が残る。H6区では、15世紀代の磁器を包含する層より上層にある大規模な砂層を目安とした。H2、H5区では、微高地上は前述の砂層を基準とした。H2区の旧河道内は、トレンチの達した層位では16世紀以降の遺物のみが出土している。このことから、II-3層以下のII層全体を大略近世と捉えている。

検出された遺構とその位置は、図版305に示した。

水田跡5面以上、畝状遺構（畠跡）5面以上、水路11条、水田内の並行溝5条である。

水田は、離水した旧河道内に広がり、畝状遺構は主に自然堤防II群上に存在する。

(2) 水 田 跡

H6区 旧河道Bの埋没後、13・14世紀代から水田化される。近世の可能性のあるII-3～II-5層（第1章第3節参照）の間に畦畔が認定できる水田はII-4層上面の1面である。この時期には、洪水砂による旧河道の埋没が進んでおり、調査区の中央やや南よりにのみ畦畔が存在する。中世に水田であった南地区の北側部分に畝状遺構（畠跡）が進出する。

H2トレンチ調査区 第14トレンチでの陶器片（図277-13）の出土状況から、旧河道Dが埋没し、水田化されるのは16世紀前後であったと考えられる。

11トレンチでは畦畔の存在から4面以上の水田跡が認められる。また、第2トレンチでは水路の作り替えが最低5回(SD8~12)は認められる。度重なる洪水による埋没後、水路や畦畔、田面が作り直されたと考えられる。

(3) 溝 (SD)

水路 一丁田堰の前身と考えられる水路などが確認された。

一丁田堰は旧河道Dの凹地を縫うように設置されている。SD22は一丁田堰の最古段階を示す。第16トレンチ内で上位から3面目の畦畔・水田面に対応しており、4面目の水田造成時以前には水路として形状を整えられていなかったと考えられる。SD22以前の流路は第14トレンチで、SD22下層に検出されたが、掘削深度が浅く明確になっていない。現状では、一丁田堰の開削時期は、第14トレンチ出土陶器片(図277-13)との層位関係から少なくとも16世紀以降と考えられよう。SD21はSD22を改修した水路で、圃場整備の段階まで継続使用されていた水路である。

水田内並行溝 第11、13トレンチで確認されたSD13~SD17がこれにあたる。19世紀後半直前の水田跡でのみ見つかっている。埋土は水田耕土と変化がなく、用途は不明である。

(4) 畝状遺構 (畝跡)

H2区、H6区の自然堤防II群上の全てで確認された。自然堤防上のため堆積が薄く、H6区では3面が確認されたが、他地区との対比は難しい。II-3層(砂層)直下の畝状遺構のみが全域で対比可能である。

第3節 近世の遺構と遺物出土状況

1 掲載方法

報告の手順 記載はST→SA→SK→SDの順で行う。なお、窪河原遺跡で検出された水田、畝の状況については第2節4の記述に委ねる。

図版 更埴条里遺跡・屋代遺跡群で検出された全遺構の平面形は1/500遺構分布図に掲載し、STおよびSKについては各地区ごとに抽出して1/60個別図を作成した。

表化 個別図版に掲載できないものも含め、各遺構についてはその形状、堆積状況、遺物出土状況などに関するデータを盛り込んだ一覧表を作成した。

2 掘立柱建物跡 (ST)

掘立柱建物跡は更埴条里遺跡I地区で1棟検出された(図版294、310)。確認できたのは桁行部分と考えられる柱穴跡であり、柱間は3間である。建物の全容は不明だが、おそらく側柱建物と考えられる。

検出面からの掘り込みは浅いが、2基の柱穴に柱痕が確認できる。この一帯は水田域の可能性が高く、耕作に関わる施設的な建物と思われる。

3 柵列跡 (SA)

SA表示の遺構 木杭や径10~50cmのピットが列状に検出され、建物にならないと判断した遺構をSAとして表示した。

遺構の状況 SAは更埴条里遺跡において6条検出された。この内、G地区のSA601・SA602(図版292)

とI地区のSA801・SA802・SA803（図版294）はそれぞれ一体のものと考えられる。両者は南北に軸方向をもち、その延長線西側に土坑や掘立柱建物跡が集中する。また、C地区のSA201（図版288）は北東方向に軸がふれるが、やはりその延長線西側に土坑が集中する。おそらくこれらの柵列は断片的に検出されたのみで、実際はさらには長く設置されていたものと考えられる。

4 井戸跡・その他の土坑（SK）

(1) 概要

近世の遺構の内、最も検出数が多いのがSKである。特に後背湿地I群内の低地部では、南北に帯状に分布する土坑がみられる。遺物が出土したものが少なく、井戸以外は用途の特定が困難である。図版307～311では各調査地区ごとに、平面形、断面形、遺物出土状況等を対象に抽出して個別平面図を示した。

(2) 分類

大分類は第2章第3節4に準じるが、大部分がI群に属するものと考えられる。I群内の分類は以下の通りである。

1類・・・井戸跡 円形または方形を呈し、掘り込みが深く水がわいた可能性をもつもの。

2類・・・木柵をもつ土坑 円形を呈し、坑壁および底部に円形の木柵が残存するもの。また、掘方の観察から木柵が存在した痕跡が認められるもの。

3類・・・用途不明の掘削坑。

その他

(3) I群1類 井戸跡

井戸跡と考えられる遺構は屋代遺跡群②区で2基、⑥区で2基検出された。これらは図版311に個別平面図と断面図を掲載した。全て素堀であるが、掘り込みの状況から①尖底状になるもの（SK1133・SK7001）、②平底状になるもの（SK1134・SK8005）に区分できる。

遺物はほとんどみられないが、SK7001から近世のホウロクが出土している（図版313）。

(4) I群2類 木柵をもつ土坑

掘方中に円形の木柵を設置し、坑壁との空間を埋め戻したと思われる土坑である。更埴条里遺跡H区で2基、屋代遺跡群②区で3基確認され、図版310、311に個別図を掲載した。この内、SK1001は底部に底板の破片が残存する。おそらく桶状の器を設置したものと思われ、用途としては水溜あるいは肥入れ等が考えられる。

(5) I群3類 用途不明の掘削坑

上記以外は全てここに含まれる。特に更埴条里遺跡B～G地区で検出された多数の土坑は、配列の状況からみて一定の目的をもって掘削されたものと思われるが、形状や規模が多様であり、遺物の出土もほとんどみられないことから、用途の特定はできない。この内、C地区SK206からは曲物が3点出土した（図版314）。おそらく土坑の使用目的に関わる遺物と考えられる。

5 溝・自然流路 (SD)

(1) 概要

溝跡はII層対応の遺構の他、更埴市域の昭和40年代の圃場整備以前の水路(堰)跡が検出されたため、資料として全て1/500遺構分布図に示している。なお、水路跡の内現代の遺物を含む層をもつものについては、スクリーントーンによる表示により他の遺構と区別している。

(2) 溝・自然流路の分類

SDの大分類とI群内の分類は第2章第3節8に準じて記述を行う。

A. I群1類 水路

水路の分類基準の大枠は第2章第3節8に従う。

基幹水路 更埴条里遺跡I地区SD873(旧蛇田堰、図版294)、K地区SD930・SD940・SD943(旧町田堰、図版296)、屋代遺跡群②区SD2208(図版299)、③区SD3001(旧町浦堰、図版300)、窪河原遺跡SD21・SD22(旧一丁田堰、図版305)は圃場整備以前の水田灌漑用の主要水路である。この内II層対応の遺構と考えられるのはSD943とSD22であるが、他に近世の焼き物等が出土したものもあり、その掘削時期の上限については不明である。

幹線水路 更埴条里遺跡B地区～G地区にかけて南北に検出された溝跡(SD201・SD203)は、基幹水路であるI地区SD873(旧蛇田堰)から取水し、南の水田に灌漑を行うための水路跡である。II層対応の遺構で、この溝に対応するものは確認されていない。

支水路 更埴条里遺跡C地区SD202・SD204(図版288)、J地区SD1001・SD1002・SD1003(図版295)などの東西方向の溝は、幹線水路とのつながりは確認できないが、支路的な役割をもっていた可能性がある。

B. III群 自然流路

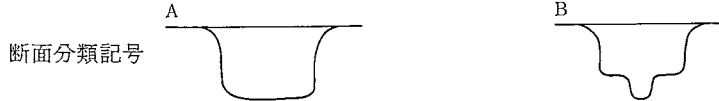
更埴条里遺跡K地区北端部のSD990・SD991、旧五十里川に対応する自然流路である。この内、SD909は現代の遺物を含む層によって構成される。その下層部にあたるSD991からは漆器椀が1点出土した(図版314)。屋代遺跡群①区では古代2～中世にかけての河道が検出されているが、近世に対応するSD27の段階では本流が南に移動し、中世までの河道は埋没しきった状態となっている(図版17)。この北側には支流状のSD31が検出された(図版297)。

第6章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III層上面検出の遺構と遺物出土状況
窪河原遺跡II層検出の遺構と遺物出土状況 (近世)

表42 掘立柱建物跡 (ST) 一覧 (近世)

遺構番号	遺跡	仮地区	大地区	中地区	図版番号	棟方向	柱間数 ○×○	桁(m)	梁(m)	庇面数	面積 (㎡)	柱配列	柱類型	竪方 平面形	柱直径 最小~最大 (m)	柱間距離 最小~最大 (m)
ST801	更埴条里遺跡	I	X I	03.8	310.294	N	3×?	4.60	-	0	-	側	掘方	円	0.3~0.4	1.5~1.64

表43 柵列跡 (SA) 一覧 (近世)



遺構番号	遺跡	仮地区	大地区	中地区	図版番号	類別	列方向	規模(m)	材径・柱径 (m)	材・柱穴 平面形	柱穴 断面形	材・柱穴深さ(m)	材間距離(m)
SA201	更埴条里遺跡	C	XVI	Q15	288	水田区画?	N28° E	3.04	0.2~0.35	円・楕円	-	0.06~0.11	0.55~0.8
SA601		G	XIV	P4	292	水田区画?	N8° W	3.95	0.24~0.38	楕円・不整形	A	0.06~0.12	0.75~0.9
SA602		G	XIV	K19.24	292	水田区画?	N	9.35	0.25~0.45	円・楕円	-	0.06~0.11	0.7~1.8
SA801		I	X I	T24	294	水田区画?	N	3.74	0.16~0.26	円・楕円	-	0.04~0.14	0.36~0.7
SA802		I	X I	T19.24	294	水田区画?	N	3.60	0.35~0.6	楕円	A・B	0.12~0.2	0.75~0.85
SA803		I	X I	T14.19	294	水田区画?	N	5.20	0.35~0.6	円・楕円	-	0.08~0.16	0.65~1.5

表44-(1) 井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (近世)
更埴条里遺跡 B地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	2001	B	XVII	B4	307 287	楕円	E	1.00	0.80	0.62	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2002	B	XVII	B4	307 287	円	C	1.50	0.98	0.60	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2003	B	XVII	B4.9	307 287	円	C	0.93	0.26		用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)		
SK	2004	B	XVII	B9	307 287	円	C	1.44	1.20	0.58	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2005	B	XVII	B9	307 287	円	D	1.36	1.02	0.32	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2006	B	XVII	B14	307 287	円	C	1.36	1.10	0.47	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2007	B	XVII	B14	307 287	正方形	C	1.44	1.27	0.47	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2008	B	XVII	G5	287	円	C	0.46	0.39	0.40	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2009	B	XVII	B19	307 287	長方形	C	1.46	1.10	0.50	用途不明	灰褐		粘土質シルト (II層土)	III-2、IV層土ブロック混入	
SK	2010	B	XVII	B7	287	円		1.38	1.17	0.08	用途不明				壁面に木質部分あり	

更埴条里遺跡 C地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	201	C	XVI	Q15	288	円	C	0.97	0.90	0.54	用途不明	灰白	7.5Y4/1	粘性シルト	III層砂ブロックが混じる	
SK	202	C	XVI	Q23	288	楕円	C	1.17	0.78	0.45	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	203	C	XVI	Q22	288	円	C	1.05	1.01	0.45	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	204	C	XVI	Q18	307 288	不整形	C	2.42	1.50	0.70	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	206	C	XVI	Q2	307 288	円	C	2.06	1.89	0.86	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	曲物
SK	207	C	XVI	L23	307 288	楕円	C	2.04	1.40	0.76	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	208	C	XVI	L17.18	308 288	長方形	D	1.50	1.00	0.74	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	209	C	XVI	L18	288	楕円	B	0.46	0.36	0.20	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	210	C	XVI	L18	288	円	A	0.64	0.58	0.20	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	211	C	XVI	Q8	288	楕円	C	1.84	1.35	0.52	用途不明			粘土質シルト (II層土)	グライ化がみられる	
SK	213	C	XVI	L25	288	円	A	0.65	0.62	0.11	用途不明	褐灰、 にぶい橙	7.5YR4/1.6/ 4	シルト、 細砂ブロック		
SK	214	C	XVI	L25	308 288	楕円	C	1.72	0.94	0.59	用途不明	褐灰、 明褐灰、 にぶい橙	7.5YR4/1.6/ 4.7/1	粘土、シルト、 細砂ブロック		
SK	215	C	XVI	L19~25	288	楕円		1.56	0.86	0.23	用途不明			II、III、IV層土 ブロック		

表44-(2) 井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (近世)

更埴条里遺跡 D地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK 3003	D	XVI	B6	289	楕円	A	1.44	0.62	0.08	用途不明	明黄褐	2.5Y6/6	砂質	I層土がブロック混入		
SK 3005	D	XVI	B6	289	楕円	A	0.82	0.65	0.11	用途不明	黄灰	2.5Y5/1	砂質	明黄褐砂マーブル状に混入		
SK 3006	D	XVI	B12	308 289	長方形	D	1.70	1.13	0.70	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	明黄褐砂、暗褐粘質土ブロックが混入		
SK 3007	D	XVI	B12.17	289		B		(1.28)	0.52	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	明黄褐砂、暗褐粘質土ブロックが混入		
SK 3008	D	XVI	B17	289		A	1.30	(1.3)	0.42	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	明黄褐砂、暗褐粘質土ブロックが混入		
SK 3009	D	XVI	B17	289	楕円	B	0.98	0.57	0.44	用途不明						
SK 3010	D	XVI	G2	289	円	A	0.46	0.46	0.12	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	砂質	褐灰、にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3011	D	XVI	G1	289	楕円	C	0.90	0.64	0.40	用途不明	褐灰	10YR4/1	やや砂質	にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分混入		
SK 3012	D	XVI	F10	289	円	A	1.30	1.27	0.18	用途不明	褐灰	10YR4/1	砂質	にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分混入		
SK 3013	D	XVI	F10	289	円	C	0.85	0.85	0.52	用途不明	褐灰	10YR4/1		にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分混入		
SK 3014	D	XVI	G2	308 289	楕円	D	1.47	1.22	0.55	用途不明	褐灰	10YR4/1	やや粘質	灰黄褐、にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分が混入		
SK 3015	D	XVI	G11	289	不整形	A	1.08	1.02	0.10	用途不明	褐灰	10YR5/1	やや砂質	黒褐土、にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3016	D	XVI	G7	289	円	C	1.79	1.43	0.40	用途不明	褐灰	10YR4/1		黒褐土、にぶい黄褐、灰黄褐砂質土ブロック混入		
SK 3017	D	XVI	F20	308 289	不整形	F	1.58	1.18	0.36	用途不明	褐灰	10YR4/1	やや砂質	暗褐、黒褐土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入		
SK 3018	D	XVI	G21	308 289	楕円	C	1.91	1.03	0.56	用途不明	褐灰	10YR4/1		黒褐土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分混入		
SK 3019	D	XVI	G22	289	円	A	0.52	0.46	0.05	用途不明	灰黄褐	10YR5/2		にぶい黄褐砂質土が混入		
SK 3020	D	XV	V22	289	円	G	0.27	0.25	0.10	用途不明	灰黄褐	10YR5/2	やや砂質	褐鉄分が混入		
SK 3021	D	XVI	B2	289	円	A	1.10	0.99	0.14	用途不明	灰黄褐	10YR5/2		にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3022	D	XVI	B2.7	289	楕円	A	0.92	0.70	0.15	用途不明	灰黄褐	10YR5/2		にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3023	D	XVI	B2~8	289	円	A	0.67	0.55	0.13	用途不明	灰黄褐	10YR5/2		にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3024	D	XVI	B3.8	289	円	A	0.47	0.36	0.07	用途不明	灰黄褐	10YR5/2		にぶい黄褐砂質土ブロックが混入		
SK 3025	D	XVI	B8	289	円	D	0.63	0.55	0.27	柱穴状	褐灰	10YR4/1		にぶい黄褐砂質土、黒褐土がブロック混入		
SK 3026	D	XVI	B12	289	円	C	0.80	0.66	0.38	用途不明	褐灰	10YR4/1		にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分混入		
SK 3027	D	XVI	B14	308 289	長方形	C	1.31	0.94	0.46	用途不明	褐灰	10YR4/1	やや粘質	灰黄褐、にぶい黄褐砂質土、黒褐土ブロック、褐鉄分が混入		
SK 3028	D	XVI	B20	289	円	C	0.75	0.70	0.26	用途不明	褐灰	10YR4/1	やや砂質	にぶい黄褐、灰黄褐砂質土ブロック、褐鉄分混入		

更埴条里遺跡 E地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK 4001	E	XV	K8	290	円	C	1.60	1.48	0.59	用途不明	暗褐				黄褐砂質土、暗褐土ブロック、褐鉄分が混入	
SK 4002	E	XV	K23~P4	308 290	楕円	D	2.50	1.35	0.85	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)	褐色、暗褐粘質土、IV、III-2層ブロック混入		
SK 4003	E	XV	K4.9	290	楕円	D	0.34	0.10		用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)	III-2、IV層土ブロック混合		
SK 4004	E	XV	K9	290	楕円	D	1.28	0.70	0.20	用途不明					III-2、IV層土ブロック混合	
SK 4005	E	XV	K9	290	不整形	D	1.17	0.62	0.25	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)	暗褐土、IV層土、褐色細砂ブロックが混入		
SK 4006	E	XV	K9	290	不整形	D	0.73	0.28	0.12	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)	黒褐粘土、褐色細砂ブロックが混入する		
SK 4007	E	XV	K9	290	円	A	0.48	0.41	0.05	用途不明				II、IV層ブロックの混合	III-2層細砂が底部に層状に混入する	
SK 4008	E	XV	K14	290	楕円	C	0.70	0.59	0.20	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質	黒褐粘土、褐色細砂ブロックが混入する		
SK 4009	E	XV	K14	308 290	不整形	C	1.45	1.30	0.60	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質	黒褐粘土、褐色細砂ブロックが混入する		
SK 4010	E	XV	K24	309 290	円	C	1.33	1.19	1.00	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	細砂	黒色粘土、にぶい黄褐土、褐色粘質土ブロックが混入		
SK 4011	E	XV	K10	309 290	長方形	D	1.50	0.83	0.75	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)	黒褐粘土、褐色細砂、暗褐粘質土ブロックが混入		
SK 4012	E	XV	K10	290	円	A	0.44	0.43	0.10	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)			
SK 4013	E	XV	K10	290	円	A	0.37	0.36	0.04	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)			
SK 4014	E	XV	K20	290	円		1.10	1.07	0.76	用途不明						
SK 4015	E	XV	K25.L21	290	楕円		1.26	0.95	0.31	用途不明						
SK 4016	E	XV	P5	290	楕円	A	0.37	0.25	0.10	用途不明	褐灰	10YR5/1	砂質 (II層土)			
SK 4017	E	XV	P20	309 290	楕円	B	1.37	0.97	0.93	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	細砂 (II層近似土)	黒褐粘土、暗褐粘質土、にぶい黄褐細砂ブロック混入		

第6章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群III層上面検出の遺構と遺物出土状況
窪河原遺跡II層検出の遺構と遺物出土状況 (近世)

表44-(3) 井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (近世)

更埴条里遺跡 E地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	4018	E	XV	P20	290	円	A	0.38	0.32	0.08	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	細砂 (II層近似土)	にぶい黄褐砂(III-2層近似)ブロックが混入	
SK	4019	E	XV	P19.20	290	楕円	C	1.77	1.30	1.10	用途不明			ブロック土	灰黄褐、にぶい黄褐細砂、黒褐粘土、暗褐粘質土ブロック	
SK	4020	E	XV	P25	290	円	B	1.42	1.20	1.10	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土ブロック、褐鉄分を含む	
SK	4021	E	XV	P25	309 290	正方形	A	1.11	0.97	0.58	用途不明	褐灰	10YR5/1	細砂	にぶい黄褐、褐色砂、黒褐粘土ブロックが混入	
SK	4022	E	XV	P25	290	円	C	0.25	0.22	0.08	用途不明					
SK	4023	E	XV	P19	290		C	(1.4)	(0.65)	0.56	用途不明			ブロック土	灰黄褐、にぶい黄褐細砂、黒褐粘土、暗褐粘質土ブロック	
SK	4024	E	XV	U10	289 290	円	D	1.47	1.47	0.56	用途不明			ブロック土	灰黄褐、にぶい黄褐細砂、黒褐粘土、暗褐粘質土ブロック	
SK	4025	E	XV	Q21.V1	290	楕円	B	1.46	1.23	1.05	用途不明					
SK	4026	E	XV	L1	290	楕円	C	1.27	1.03	0.53	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4027	E	XV	L6	290	円	C	1.62	1.55	0.58	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4028	E	XV	L6	290	円	A	0.32	0.28	0.05	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト質		
SK	4029	E	XV	L6	290	正方形	C	1.55	1.38	0.80	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4030	E	XV	L6	290	楕円	A	0.65	0.50	0.11	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト質		
SK	4031	E	XV	L16	290	楕円	C	1.76	1.47	0.65	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4032	E	XV	L21.Q1	290	円	C	0.79	0.77	0.62	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4033	E	XV	Q1	290	楕円	A	0.67	0.47	0.70	用途不明	褐灰	10YR5/1	シルト	黄褐細砂ブロックが混入	
SK	4034	E	XV	Q1	290	楕円	C	1.58	1.38	0.90	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4035	E	XV	Q7	290	正方形	A	0.16	0.16	0.05	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト質		
SK	4037	E	XV	Q19	309 290	正方形	D	1.25	1.20	0.76	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4038	E	XV	K15~L16	290	円	B	1.82	1.71	0.87	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4039	E	XV	L16	290	円	C	1.22	1.20	0.95	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト	黒褐、にぶい黄褐粘土、にぶい黄褐砂質土ブロック、褐鉄分が混入	
SK	4040	E	XV	Q22	290	円		0.33	0.33	0.11	用途不明					
SK	4041	E	XV	Q6.7	290	楕円		1.62	0.73	0.70	用途不明					
SK	4042	E	XV	Q8	290	楕円		1.43	0.84	0.72	用途不明					
SK	4043	E	XV	Q22	290	円	A	0.53	0.51	0.14	用途不明	灰黄褐	10YR4/2	シルト質	黒褐粘質土、にぶい黄褐ブロックが混入	
SK	4044	E	XV	K5	290	円	C	(1.12)	1.02	0.46	用途不明					

更埴条里遺跡 F地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	5004	F	XV	A19	291	円	B	0.40	0.33	0.11	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	粘性土	オリーブ褐色砂質土混入	
SK	5005	F	XV	A19	291	楕円	A	0.70	0.50	0.15	用途不明	黒褐	2.5Y3/1	粘性土	オリーブ褐色砂質土混入	
SK	5007	F	XV	A25	291	円	G	0.64	0.55	0.05	用途不明			II層土		
SK	5008	F	XV	A24	291	円	A	0.40	0.36	0.06	用途不明			II層土		
SK	5011	F	XIV	U19	309 291	円	A	0.38	0.36	0.11	用途不明	黄灰		粘性土(II層土)		
SK	5012	F	XIV	U19	309 291	円	A	0.40	0.32	0.12	用途不明	黄灰		粘性土(II層土)	オリーブ褐色砂質土混入	
SK	5013	F	XIV	U19	309 291	円	A	0.50	0.43	0.16	用途不明			II層土		
SK	5014	F	XIV	U19	291	楕円	A	0.40	0.30	0.09	用途不明	黄灰		粘性土(II層土)		
SK	5018	F	XV	F4	291	円	A	0.31	0.28	0.05	用途不明			II層土		
SK	5022	F	XV	A14	291	円	C	0.54	0.46	0.07	用途不明	黒褐	10YR3/1	粘性土	オリーブ褐ブロック混入	
SK	5023	F	XV	A14	291	円	C	0.43	0.41	0.10	用途不明	黒褐	10YR3/1	粘性土	オリーブ褐ブロック混入	
SK	5025	F	XV	A8	291	円	C	0.42	0.40	0.10	用途不明			II層土		

表44-(4) 井戸跡・その他の土坑 (SK) 一覧 (近世)

更埴条里遺跡 G地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK 6001	G 6001	G	XIV	U4	292	楕円	A	0.90	0.56	0.14	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6002	G 6002	G	XIV	P25	292	楕円	A	0.66	0.46	0.11	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6003	G 6003	G	XIV	P9	292	楕円	C	(0.65)	0.40	0.11	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6004	G 6004	G	XIV	P4	292	楕円	A	0.88	0.70	0.16	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6005	G 6005	G	XIV	P3	292	楕円	A	0.71	0.46	0.07	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6006	G 6006	G	XIV	P3	292		G	(0.73)	0.98	0.06	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6007	G 6007	G	XIV	P3	292	不整形	A	0.90	0.54	0.11	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6008	G 6008	G	XIV	K18	292	円	C	0.51	0.45	0.13	用途不明	暗青褐		粘質シルト(II層土)	グライ化が著しい	
SK 6009	G 6009	G	XIV	K9	292	不整形	C	0.01	0.44	0.21	用途不明			粘質シルト(II層土)		
SK 6010	G 6010	G	XIV	P22	292	円	C	1.18	1.12	(0.9)	井戸?			II、III-2、IV層土が混在	III-2層土はブロック状	
SK 6011	G 6011	G	XIV	K2	309 292	不整形	C	1.02	0.95	0.55	用途不明			II、III-2、IV層ブロックの混合		
SK 6012	G 6012	G	XIV	K1	292	円	A	0.30	0.30	0.03	浅い窪み			III-2層		
SK 6013	G 6013	G	XIV	K1	292	円	C	0.43	0.43	(0.67)	柱穴状			II層土	III-2層ブロック混入	
SK 6014	G 6014	G	XIV	K13	292	楕円	A	0.74	0.54	0.10	用途不明			II層土		
SK 6015	G 6015	G	XIV	K13	292	楕円	D	0.53	0.32	0.08	浅い窪み			II層土		
SK 6016	G 6016	G	XIV	K13	292	円	C	0.70	0.65	0.12	用途不明			II、III-2、IV層土の混合		
SK 6017	G 6017	G	XIV	K12	292	円	A	0.59	0.58	0.12	用途不明			II、III-2層土混合		
SK 6018	G 6018	G	XIV	K13	292	円	A	0.58	(0.42)	0.09	浅い窪み			II、III-2層土混合		
SK 6019	G 6019	G	XIV	K13	292	不整形	A	1.09	0.83	0.08	浅い窪み			II層土	III-2層ブロックが混在	
SK 6020	G 6020	G	XIV	K13	292	不整形	A	1.06	(0.69)	0.07	浅い窪み			II、III-2層土混合		
SK 6022	G 6022	G	XIV	P7	292	円	G	0.33	0.25	0.08	用途不明			II層土		
SK 6023	G 6023	G	XIV	P7	292	円	G	0.22	0.21	0.12	用途不明			II層土		
SK 6024	G 6024	G	XIV	P7	309 292	楕円	D	1.35	0.83	0.34	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土がブロック状に混じる	
SK 6025	G 6025	G	XIV	P13	309 292	楕円	G	1.37	0.73	0.51	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土がブロック状に混じる	
SK 6026	G 6026	G	XIV	P14	292	円	C	0.50	0.49	0.07	用途不明			II層土		
SK 6027	G 6027	G	XIV	P23	309 292	楕円	G	1.12	0.70	0.26	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土がブロック状に混じる	
SK 6028	G 6028	G	XIV	P23	292	円	C	0.60	0.55	0.26	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土がブロック状に混じる	
SK 6029	G 6029	G	XIV	U3	292	円	A	0.49	0.43	0.10	用途不明			ブロック土	II、III-2、IV層土がブロック状に混じる	
SK 6030	G 6030	G	XIV	U3	292	円	C	0.43	0.40	0.13	用途不明			II層土		
SK 6031	G 6031	G	XIV	U3	292	円	C	0.24	0.20	0.11	用途不明			II層土		
SK 6032	G 6032	G	XIV	U3	292	楕円	D	1.00	0.60	0.15	用途不明			ブロック土	II、III-2層ブロックの混合	
SK 6033	G 6033	G	XIV	U4	292	楕円	D	0.90	0.59	0.15	用途不明			ブロック土	II、III-2層ブロックの混合	
SK 6393	G 6393	G	XIV	L2	292	楕円	G	2.03	1.37	0.59	用途不明					

更埴条里遺跡 H地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK 7001	H 7001	H	XI	Y9	310 293	円	C	1.30	1.26	0.42	用途不明	灰オリーブ	5Y6/2	ブロック土	II、III-2、IV層ブロックの混合	木質部残存
SK 7002	H 7002	H	XI	Y9	293		D	1.17	(0.37)	0.15	用途不明	灰オリーブ	5Y6/2	ブロック土	II、III-2、IV層ブロックの混合	
SK 7003	H 7003	H	XI	Y9	310 293	円	C	1.52	1.47	0.70	用途不明	灰オリーブ	5Y6/2	ブロック土	II、III-2、IV、VI層ブロックの混合	木質部残存

更埴条里遺跡 I地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK 8001	I 8001	I	XI	J23	310 294	円	G	1.42	1.28	0.54	用途不明	黄褐		砂質		
SK 8002	I 8002	I	XI	J23	294	円	A	1.03	1.00	0.24	用途不明	黄褐		砂質		
SK 8011	I 8011	I	XI	J23	294	楕円	C	0.63	0.46	0.37	用途不明	暗灰黄	2.5Y5/2	シルト質	砂が混じる	

第6章 更埴条里遺跡・屋代遺跡群Ⅲ層上面検出の遺構と遺物出土状況
 窪河原遺跡Ⅱ層検出の遺構と遺物出土状況(近世)

表44-(5) 井戸跡・その他の土坑(SK)一覧(近世)

更埴条里遺跡 J地区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	10001	J	IX	Y2	295	円	B	0.80	0.80		井戸?			ブロック土	Ⅱ、Ⅲ-2、Ⅳ、Ⅵ層土ブロックの混合	
SK	10005	J	X	U18	310 295	円	C	0.85	0.80	0.25	用途不明			ブロック土	Ⅱ、Ⅲ-2層ブロックの混合。焼土、炭化物含む	
SK	10009	J	XⅡ	A11	295	円	B	1.00	1.00	(0.5)	井戸?			ブロック土	Ⅱ、Ⅲ-2、Ⅳ、Ⅵ層土ブロックの混合	

屋代遺跡群 ①区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	206	1	Ⅶ	P21	310 297 298	円	C	1.74	1.70	0.53	用途不明					天保通宝

屋代遺跡群 ②区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	1001	2	Ⅶ	D24.25	310 299	円	C	1.32	1.30	0.43	水溜?	灰白	10YR7/1	砂質		木質部残存
SK	1002	2	Ⅶ	D24	310 299	円	C	1.70	1.66	0.50	水溜?	灰白	10YR7/1	砂質		木質部残存
SK	1004	2	Ⅶ	D19.24	311 299	円	C	1.55	1.53	0.60	水溜?	灰白	10YR7/1	砂質		木質部残存
SK	1133	2	Ⅶ	02	311 298	円	B	0.94	0.87	1.64	井戸?			ブロック土	灰黄褐、黒褐土、にぶい黄褐砂の混合	
SK	1134	2	Ⅶ	J21.22.01	311 298	円	C	1.15	1.12	2.06	井戸					

屋代遺跡群 ③区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	3244	3	Ⅳ	U9	300	楕円	B	0.80	0.46	(0.55)	柱穴状	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	褐灰砂粒子を含む	
SK	3245	3	Ⅳ	VG.7	300	円	B	0.78	0.76	0.90	用途不明	にぶい黄褐	10YR4/3	砂質	褐灰砂ブロックを含む	

屋代遺跡群 ⑤区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	5014	5	I	S10	303		A	2.50	0.70	0.35	用途不明	オリーブ	5Y5/4			
SK	5040	5	I	N24	303	円	G	0.52	0.50	0.54	用途不明	にぶい黄褐	10YR5/4~4/3		焼土粒を含む	
SK	5082	5	I	S11	303	円	A	0.94	0.91	0.14	井戸?					

屋代遺跡群 ⑥区

遺構記号	遺構番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	平面形	断面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	仮分類	色調	土色帳記号	土性	堆積状況	特記事項
SK	7001	6	I	N1	311 303	正方形	B	1.41	1.38	1.25	井戸?					
SK	8004	6	I	I23.24	311 304	方形	C	1.25	1.12	0.76	用途不明					
SK	8005	6	I	I19	311 304	円	C	1.24	1.10	0.94	用途不明					
SK	8007	6	I	I20	304	円	C	0.78	0.73	0.44	用途不明	灰黄褐	10YR4/2			
SK	8008	6	I	J11	311 304	円	F	2.12	1.94	0.62	用途不明	黒褐	10YR3/2		黒褐土ブロック、Ⅲ-2層砂、灰色土が混入	
SK	8009	6	I	I9	304	楕円	C	2.10	1.65	0.86	用途不明					
SK	8024	6	I	I10	304			(2.0)	(1.8)							

表45 薄・自然流路 (SD) 一覧 (近世)

遺構 遺構 記号	遺構 番号	仮地区	大地区	中地区	図版番号	仮分類	平面形	断面 形状	流路・溝方向	全長(㎡)	最大幅(㎡)	深さ(㎡)	色調	土色 帳記号	土性	堆積 状況	特記事項
薄 里 遺跡	SD 201	B-G	XIV-XVII	K1-G8	287~292	圃場整備前用水 水路?	直線的	-	南-北	500.50	(9.5)	-	-	-	-	-	-
	SD 202	C	XVI	Y8~10, W6.7	288	水路?	直線的	-	西-東	37.50	1.80	-	-	-	-	-	-
	SD 203	B-C	XVII-XVIII	K15~Q8	287, 288	圃場整備前用水 水路?	直線的	-	南-北	127.00	5.00	-	-	-	-	-	-
	SD 204	C	XVI	P20, Q16	288	水路?	直線的	-	西-東	9.50	1.25	-	-	-	-	-	-
	SD 301	D,E	XV, XVI	A5, 10, B1, V4~22	306, 289, 290	水路?	直線的	A	北東-南西	20.00	2.00	0.20	灰灰	2.5Y4/1	砂質	-	18c 雑物 17~19c 雑物
	SD 501	F	XV	A19, 20	291	水路?	直線的	B	西-東	8.00	0.40	0.10	-	-	-	-	-
	SD 502	F	XV	A8, 9	291	水路?	直線的	A	西-東	10.50	0.70	0.06	-	-	-	-	-
	SD 702	H	XI	Y9, 10	306, 283	水路?	一部屈曲	B	北-西-南	6.00	1.20	0.25	-	-	-	-	-
	SD 733	H	XII	U12~23	293	水路?	直線的	A	北-南	(22.0)	1.50	0.07	-	-	-	-	-
	SD 873	I	XI, X, XII	F17~25, J23~25, O3	294	旧町田堰	直線的	A	西-東	59.00	4.00	0.82	-	-	-	-	-
	SD 1001	J	X, XI	E3~5, U21~24	295	水路?	直線的	A	西-東	45.00	0.60	0.08	-	-	-	-	-
	SD 1002	J	XI	E2~4	295	水路?	直線的	A	西-東	12.00	0.40	0.07	-	-	-	-	-
	SD 1003	J	X, XII	U19~24, A1, 2	295	水路?	直線的	A	西南西-東北東	26.00	0.40	0.05	-	-	-	-	-
	SD 930	K	IX, X	P6~11, T15~20	296	旧町田堰	やや蛇行	A	西南西-東北東	36.70	1.30	0.24	-	-	-	-	-
	SD 940	K	IX, X	P6~11, T15~20	296	旧町田堰	やや蛇行	A	西南西-東北東	36.70	1.30	0.39	-	-	-	-	-
	SD 943	K	IX, X	P6~11, T15~20	296	旧町田堰	やや蛇行	A	西南西-東北東	36.70	1.80	0.20	-	-	-	-	-
	SD 909	K	IX, X	J22~25, F11~18	296	旧五十里川	やや蛇行	-	西南西-東北東	61.50	12.30	(1.34)	-	-	-	-	-
	SD 991	K	IX	J15~20, F11, 16	296	旧五十里川	やや蛇行	E	西-東	23.00	3.60	0.67	-	-	-	-	-
	SD 27	1	IX, X	E19~25, J1~8, A12~22	297	自然流路	やや蛇行	E	西-東	64.60	1.70	0.85	-	-	-	-	-
	SD 31	1	IX, X	D25, E18~22, A12~18	297	水路	やや蛇行	E	西-東	64.60	3.00	0.67	-	-	-	-	-
	SD 38	1	VI-X	Y9~25, U6~21, E4~15	297	畦畔跡?	水路	-	南北N12°W	南北48.2	東西19.5	0.70	-	-	-	-	-
	SD 2208	2	V, VI	X5~23, Y1~5U1, 2	299	圃場整備前用水	一部屈曲	-	南西-東	87.00	1.50	0.22	-	-	-	-	-
	SD 2210	2	V, VI	X23, D3	299	水路	一部屈曲	-	西-東	11.00	0.50	0.16	-	-	-	-	-
	SD 3001	2	V, VI	E5~18, A1~10	300	旧町田堰	湾曲	A	東-南西	68.00	4.50	0.47	-	-	-	-	-
	SD 3010	3	IV	Y25, E5, 10	300	旧町田堰	直線的	A	北-南	15.50	1.20	0.13	-	-	-	-	-
	SD 3202	3	IV	P3, 4, 5	301	区画?	直線的	B	西-東	20.20	0.35	0.20	-	-	-	-	-
	SD 4001	4	IV	C8~10	302	区画?	直線的	A	東-西	16.12	0.58	0.08	-	-	-	-	-
SD 4003	4	IV	C10, 15	302	区画?	直線的	A	東-西	5.88	0.50	0.10	-	-	-	-	-	
SD 4201	4	I	X1~16	303	区画?	直線的	A	北-南	19.60	1.00	0.08	-	-	-	-	-	
SD 4518	4	I	W3, 8	303	水路?	湾曲	C	南-北	6.14	1.48	0.40	-	-	-	-	-	
SD 8053	6	I		170	水路	水路	A	南-北?	-	(3.15)	0.25	灰灰	10YR5/1	砂質	落着ブロックが混入	16~18c 雑物	
SD 8054	6	I		170	水路	水路	D	南-北?	-	(2.45)	0.46	暗灰黄~灰	2.5Y4/1~5/1	シルト~細砂	粗砂混入、ラミナあり	17c 雑物	
SD 8055	6	I		170	水路	水路	C	南-北?	-	1.75	0.72	暗灰黄~灰	2.5Y5/2~4/1	シルト~細砂	粗砂混入、ラミナあり	17c 雑物	
SD 7	7	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	1.20	0.45	灰	-	-	-	-	
SD 8	8	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	1.50	0.45	灰	-	-	-	-	
SD 9	9	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	1.45	0.65	灰黄~黄	-	-	-	-	
SD 10	10	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	1.25	0.50	灰黄	-	-	-	-	
SD 11	11	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	1.30	0.25	灰黄	-	-	-	-	
SD 12	12	IV		305	水路	水路		南西-北東	-	2.00	0.32	灰黄	-	-	-	-	
SD 13	13	IV		305	水路	水路		南-北	0.94	0.34	0.24	-	-	-	-	-	
SD 14	14	IV		305	水路	水路		南-北	(1.0)	0.42	0.24	-	-	-	-	-	
SD 15	15	IV		305, 306	水路	水路		南-北	0.65	0.16	0.14	-	-	-	-	-	
SD 16	16	IV		305	水路	水路		南-北	0.50	0.14	0.14	-	-	-	-	-	
SD 17	17	IV		305	水路	水路		南-北	300.40	4.40	1.30	-	-	-	-	-	
SD 21	21	I~V		305, 306	旧-丁田堰	やや蛇行	B	南-北	2.80	0.90	-	-	-	-	-	-	
SD 22	22	V		305, 306	旧-丁田堰	水路		北-南?	1.35	0.53	0.53	暗黄~ に濃い黄褐色	10YR3/4~5/3	軽石含む	軽石含む	16~18c 雑物	
SD 25	25	II		305	水路	水路		北-南?	0.90	0.48	0.48	に濃い黄褐色	10YR4/3	小礫含む	小礫含む	16~18c 雑物	
SD 26	26	II		305	水路	水路		北-南?	198.00	6.00	-	-	-	-	-	-	
SD 27	27	II, V		305	旧-丁田堰支流	やや蛇行		南-北	-	-	-	-	-	-	-	-	

第7章 近世の遺物

第1節 近世の焼物

1 近世の焼物の分類

近世の焼物も中世の焼物と同じ方法（第5章第1節参照）で分類する。在地産陶器としては松代焼（SD991-1、SD3001-3・5）が少量ある（図版312・313 以下同じ）。他に産地は限定できないものの在地産土器もある（SK7001-1、屋代遺跡群包含層-12）。主体を占めるのは搬入系の焼物である。主に以下のものがあげられる。

瀬戸美濃産陶器（本業焼）、瀬戸美濃産磁器（新業焼）、肥前産陶器（唐津）、肥前産磁器（伊万里）。

2 各遺構出土の焼物

近世の焼物の図化にあたっては遺構出土のものは極力図化した。包含層出土例については特別な例を除いて紙面の関係で割愛したものが多。特に表土や攪乱から小破片であるが多くの近世の焼物が出土している。掲載遺物については、すべて市川隆之氏に実見していただき、そのコメントをもとに記載した。その他、焼物の分類と年代観は以下の文献を参考にした。

全体……市川1997、井汲1993

瀬戸美濃産陶器（本業焼）……藤沢1987、1988、1989、田口1993、檜崎他1990

瀬戸美濃産磁器（新業焼）……田口1993、瑞浪陶磁資料館1993

肥前産陶器（唐津）……大橋1989

肥前産磁器（伊万里）……西田・大橋1988、大橋1989

遺物の記載順はSD—SK—包含層の順とし、それぞれについて更埴条里遺跡—屋代遺跡群—窪河原遺跡の順である。

(1) 溝・自然流路（SD）出土の焼物

A. 更埴条里遺跡

SD501（図版312 PL47・48）

1は瀬戸美濃産陶器拳骨茶碗で、18世紀中ごろ。3は瀬戸美濃産陶器碗である。2は肥前産磁器陶胎碗で18世紀後半である。

SD502（図版312 PL47・48）

1は肥前産陶器呉器手碗で17世紀後半。3は京焼系肥前産陶器碗で17世紀。京焼系の白色系の釉がかかっている。両者とも高台径が狭く高い。2は瀬戸美濃産陶器灰釉丸碗で、18世紀末～19世紀前半である。高台は低い。

SD733（図版312 PL47） 1は肥前産磁器湯呑碗で19世紀。

SD873（図版312）

1は肥前産陶器呉器手碗で17世紀後半。7・8・10は肥前産磁器碗である。7は青磁釉が施され、17世

紀。8は丸紋が付けられ18世紀後半。10は外面には鉄釉が施され、内面には呉須絵がある。17世紀前半。瀬戸美濃産陶器には2・3・4がある。2は丸碗で17世紀後半。3は志野皿で17世紀。焼成不良のためか胎土が黒い。4は仏飯で灰釉が施され、18世紀前半。9は瀬戸美濃産磁器小椀で銅版印刷による文様が施されている。近代のものである。5・6は前時代のもので、5は白磁皿、6は古瀬戸後期様式の深皿又は鉢である。

SD940 (図版312 PL47)

1は産地不明の磁器で、見込に沈線で文様帯をつくり暗赤褐色の釉をかけ、沈線間の釉を輪禿状に削っている。釉を輪禿に削るのは17世紀後半～18世紀初頭の肥前系磁器に多い技法である。

SD991 (図版312 PL36・47・48)

1は在産陶器の松代焼碗で、白色粒子を多く含む胎土で白濁した釉が施されている。19世紀前半。2は肥前産磁器陶胎碗で、18世紀後半。3は前時代のもので龍泉窯系蓮弁文青磁碗である。

B. 屋代遺跡群

SD27 (図版312 PL36・47・48)

1・3は肥前産陶器である。1は碗で高台部が意図的に破壊されている。外面底部にみられる渦巻はヘラ状工具によるロクロの回転痕である。17世紀後半以降。3には見込に鉄絵が描かれている。16世紀末。6・7は肥前産磁器陶胎碗で、ともに18世紀後半。2は瀬戸美濃産陶器丸碗で17世紀後半～18世紀前半。前時代のものとなるが、4は古瀬戸前期様式末～中期様式前半の瓶子肩部小片、5は山茶碗系捏鉢、8は龍泉窯系蓮弁文青磁碗である。

SD31 (図版312 PL48)

1・2は瀬戸美濃産陶器である。1は仏飯で18世紀前半。2は天目茶碗で17世紀前半。3は瀬戸美濃産磁器摺絵碗で、呉須による型紙絵付がみられる。近代のものである。

SD2208 (図版312 PL47)

1は肥前産陶器砂目積み皿で、高台の外表面は削り込まれていない。内面に顕著に砂目積みの痕跡がみられ、17世紀前半である。

SD3001 (図版313 PL47・48)

1・2は瀬戸美濃産陶器灰釉碗で、ともに18世紀後半。4は瀬戸美濃産陶器蓋である。底面に貫通しない小孔がみられる。7は瀬戸美濃産磁器小椀で近代以降のものである。6は肥前産磁器仏飯で18世紀後半～19世紀中ごろ。3・5は在産陶器の松代焼で白石粒子を多く含む胎土で、白濁した釉が施されている。3は碗、5は片口であり共に19世紀前半である。

(2) 土坑 (SK) 出土の焼物

A. 更埴条里遺跡

SK6393 (図版313 PL48) 1は瀬戸美濃産陶器土瓶で、外面に瑠璃釉が施されている。19世紀前半。

SK7001 (図版313) 1は在産土器のホウロクである。

(3) 包含層出土の焼物

A. 更埴条里遺跡 (図版313 PL47・48)

1・2・5・7は瀬戸美濃産陶器である。1は灰釉碗。外面の底部内部まで施釉されるタイプで18世紀後半以降。2は志野菊花皿で、17世紀。5・7は天目茶碗で、5は口縁部のたちあがり長くなっており、17世紀。7は口縁端部が玉縁の形態をとり18世紀である。4は瀬戸美濃産磁器紅皿。内面には紅を塗

第7章 近世の遺物

るため文様はない。19世紀。3・6・8は肥前産磁器である。3は仏飯で18世紀末～19世紀前半。6は青磁鉢である。高台が蛇の目凹高台？風で18世紀後半以降である。8は碗で見込にはコンニャク版で五弁花文が、高台底部には渦福がみられる。18世紀後半である。

B. 屋代遺跡群 (図版313 PL47・48)

9は瀬戸美濃産磁器広東碗。19世紀。ただし胎土は肥前産磁器的である。10は瀬戸美濃産陶器鎧茶碗で、18世紀末～19世紀初頭。11は肥前産陶器皿で16世紀末である。12は灯芯状のこびりつきはないが、形態から在地産灯明皿で、幕末～近代にかけてのものである。

C. 窪河原遺跡 (図版313 PL47)

13は肥前産陶器丸碗で、高台径が小さく高台が高い特徴をもつ。17世紀である。

引用・参考文献

- 市川隆之 1989 「第6章第3節遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 市川隆之 1997 「第7節3 近世の遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内 その3 石川条里遺跡 第1分冊』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 井汲隆夫 1993 「第2部江戸のやきもの」『新宿内藤町遺跡に見る江戸のやきものと暮らし』新宿内藤町遺跡調査会
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 田口昭二 1993 『美濃窯の焼物 特集 写真で見る美濃焼の歴史』多治見市教育委員会
- 西田宏子・大橋康二 1988 『別冊太陽 古伊万里』平凡社
- 檜崎彰一他 1990 『尾呂』瀬戸市教育委員会
- 藤沢良祐 1987 「本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』
- 藤沢良祐 1988 「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VII』
- 藤沢良祐 1989 「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VIII』
- 瑞浪陶磁資料館 1993 『企画展 明治・大正・昭和のやきもの 富士を写す』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書』

第2節 金属製品 (近世)

1 銅・青銅製品 (図版313 PL48)

近世関係で図の提示できた2点を表化した(表46)。この中で明確に近世関係の遺構に伴ったものはSD4201出土の煙管のみである(図版313-1)。図化していないものに、煙管4個体、不明品3個体があるが、ほとんどが攪乱や表土からの出土である。

表46 近世の銅・青銅製品一覧表

(単位: cm, g)

図版番号	写真番号	遺物名称	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	出土位置	長径	短径	厚さ	重量
313-1	PL48-1	煙管(火皿、雁首)	屋代	④	X1.6.11.16	SD4201		5.2	1.7	0.1	7.1
313-2	PL48-2	鐔	屋代	⑤a			表採	5.2	3.7	0.5	45

2 銭 貨（図版313 PL48）

近世関係で図の提示ができた7点を表化した（表47）。明確に近世関係の遺構に伴ったものはSD991（更埴条里遺跡、図版313-3）の「正隆元宝」とSK206（屋代遺跡群、図版313-4）の「天保通宝」の2点のみである。他はすべて「寛永通宝」で図示したものを合わせて21点出土している（更埴条里遺跡12点、屋代遺跡群9点）。表土や表土付近の包含層、攪乱等からの出土が多い。図版313-9の「寛永通宝」は孔が円形を呈している。

表47 近世の銭貨一覧表

整理番号	図版番号	写真番号	貨幣名	遺跡名	地区	中地区	出土遺構	出土地点	初鑄年	径(cm)	重量(g)	備考
1	313-3	PL48-3	正隆元宝	更埴条里	K		SD991		金 1161 ~78	2.4	3.0	
2	313-4	PL48-4	天保通宝	屋代	①	P21	SK206		1832		17.2	長径4.9 短径3.2
3	313-5	PL48-5	寛永通宝	更埴条里	B			I層	1636	2.4	4.2	
4	313-6	PL48-6	寛永通宝	更埴条里	F			II層上	1636	2.3	2.6	
5	313-7	PL48-7	寛永通宝	更埴条里	H				1636	2.3	2.3	
6	313-8	PL48-8	寛永通宝	屋代	⑤b				1636	2.8	3.7	
7	313-9	PL48-9	寛永通宝	屋代				不明	1636	2.3	3.1	孔が円形

3 鉄製品・鉄生産関連遺物

近世以降の層位から出土した鉄製品の総数は60点である（表20）。これらは古代・中世の遺物が混入したと考えられる例がほとんどで、図化し資料化できたものは1点もない。また、鉄生産関連遺物については、表48に地区別・遺構別の出土量を示した。SDと1層からの出土がすべてであり、明確に鉄生産関連の遺構に伴うものはない。

表48 近世の鉄生産関連遺物 地区・遺構別出土量
遺構内出土

(単位：g)

遺物種類		鉄				合計	粘土系	
地区	遺構	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物		羽口	炉壁
I地区	SD		115		6.7		14.9	46.15
①区	SD						12	
④区	SD				6.1			
	計	0	115	0	12.8	0	26.9	46.15

包含層出土

層位	地区	鉄塊系遺物	鍛冶滓	製錬滓	羽口溶解物	合計	羽口	炉壁
1層	K地区		137.4					
	計	0	137.4	0	0	0	0	0

第3節 石器・石製品

確実に近世に属する資料は、石臼2点、砥石2点のみである（図版314、表49）

表49 近世遺構出土石製品一覧（時期不明1点含む）

屋代遺跡群

遺構番号	大時期	小時期区分	石錘	石臼	磨石	凹石	敲石	台石	砥石	軽石製品	紡錘車	その他	備考
------	-----	-------	----	----	----	----	----	----	----	------	-----	-----	----

更埴条里遺跡

SD	991	近世							1	1			
----	-----	----	--	--	--	--	--	--	---	---	--	--	--

屋代遺跡群

SD	31	近世							3	3			
SD	3001	近世		2						2			
SD	4201	近世				1				1			
SK	206	近世							1	1			

更埴条里遺跡

SK	9147	不明			1					1			
			合計	0	2	1	1	0	0	5	9		18

第4節 木製品

近世に属する木製品は、更埴条里遺跡C地区SK206、K地区旧五十里川河道SD991出土のものが該当し、いずれも分類上は容器に含まれる。以下それらに関する記述を行う。

曲物 SK206からは底板の個数で3点の曲物が出土した（図版314・1～3、PL49）。1、2については側板の破損が激しかったため、綴じ合わせの状況がわかる部分を図化した。

1のみ底板に側板を接合した木釘の存在が確認され、側板にもその貫通孔が残る。なお、底板片面に黒色塗彩がなされている。

3はほぼ完形で残存しており、側板の周囲に曲物製のタガをかぶせた状況がわかる。底板に木釘痕はみられず、タガは周囲の補強とともに、底板と側板の固定の役割を果たしていたものと思われる。2も同じ構造であったと考えられ、側板の破損が激しいが、タガがほぼ完形で残存している。なお、側板内側にはケビキ線が認められる。

漆器椀 4（図版314、PL49）はSD991出土の椀で、内外面に赤漆を塗布している。口縁部、高台部ともに欠損しており、法量等についての全容は不明である。

表50 近世の木製品一覧表

図版PL	報告番号	分類	名称	遺跡	地区	遺構	木目	計測値 (cm)	樹種	形状の特徴
314・49	1	容器	曲物	更埴	C	SK206	柾目(底板)	底板径20.6 底板厚0.8 側板幅(11.7) 側板厚1.0	サワラ	底板片面塗り、細かな切り痕
314・49	2	容器	曲物	更埴	C	SK206	柾目(底板)	底板径20.0 底板厚1.1 タガ幅(12.4) タガ厚0.9	底板ヒノキ 側板サワラ	側板内面にケビキ線
314・49	3	容器	曲物	更埴	C	SK206	柾目(底板)	底板径23.5 底板厚1.0 側板幅17.6 側板・タガ厚1.0	底板サワラ 側板ヒノキ	
314・49	4	容器	椀	更埴	K	SD991		底径5.6 器高(2.5)		内外面に赤漆塗彩

第8章 自然災害痕跡

第1節 古代8期（9世紀後半）から近世における自然災害痕跡

この時期に、更埴条里遺跡、屋代遺跡群、窪河原遺跡で確認された自然災害痕跡には、洪水砂による耕地や居住地の被覆と地震にともなう砂脈が存在する。

1 洪水痕跡

(1) II・III層に見られる洪水砂堆積

III層の洪水 III層そのものが9世紀後半の洪水砂であり、旧河道の一部（屋代遺跡群⑥区）から自然堤防I群（屋代遺跡群）、後背湿地I群（更埴条里遺跡）のほぼ全域を被っている。

II層の洪水 II層に含まれる洪水砂は、自然堤防I群から後背湿地I群では明確でなくなり、もっぱら旧河道（屋代遺跡群⑥区～窪河原遺跡）と自然堤防II群（窪河原遺跡）で見られる。

窪河原遺跡H6区水田域の断面（図版2）では、砂の堆積後に新たな畦畔や水路、耕作面を再整備した跡が4面認められる。また、畦畔脇にだけ砂層が残存する面が1面存在する。明確に砂層と耕土層が分離できなかった層を含めると、耕地となったIII-1.8層上面（13～14世紀）～II-3層上面（19世紀後半）の堆積は約2.1mに達している。

(2) 9世紀後半の大洪水

III層（洪水砂）の特徴については、第1章第3節4で触れてあるので、ここでは、主に災害の状況とその対処について、洪水と人との関わりを中心に取り上げる。また、竪穴建物跡や溝内に堆積した砂の状況については、『古代1編』に図・写真を掲載してあるので、参照していただきたい。

時期 洪水砂によって被覆された竪穴建物跡と、洪水砂層上から掘り込まれた竪穴建物跡には、ともに古代8期の土器を伴う例が存在する。年代推定の決め手となる灰釉陶器では、洪水直前段階に光ヶ丘1号窯式と黒笹90号窯式が圧倒的に多く、大原2号窯式の資料がわずかに含まれている。これに対し、洪水直後の遺構では大原2号窯式が増加する傾向が認められる。このことから、洪水発生の時期は9世紀第4四半期と推定される（『古代1編』参照）。

洪水砂の範囲 千曲川流域については、上流域の佐久平～中流域の善光寺平で同時期と推定される洪水砂が確認されている（第1章第3節4）。今回の調査範囲では、窪河原遺跡を除く地区で確認されており、旧河道内の屋代遺跡群⑥区で約1.6m（図版2）、自然堤防背面の屋代遺跡群③区で約0.5m、後背湿地I群南端の更埴条里遺跡A地区で約0.1m（図版1）の堆積が認められる。

洪水の状況 洪水が押し寄せた状況を示す痕跡としては、以下の例があげられる。

a. 屋代遺跡群⑥区旧河道Aの堆積状況 III-2層が明瞭に分層でき、①千曲川本流が増水して水田化していた旧河道Aに侵入、水田面の土を巻き上げながら東流して厚い砂層を残した段階、②旧河道中央付近で①に堆積した砂層を切り込んだ流路が形成され、粗砂→シルトを繰り返して堆積していった段階、③上記の流路を完全に埋没させ、旧河道A全体を埋めつくした段階、に大別した。①～③間の時間幅は不明であ

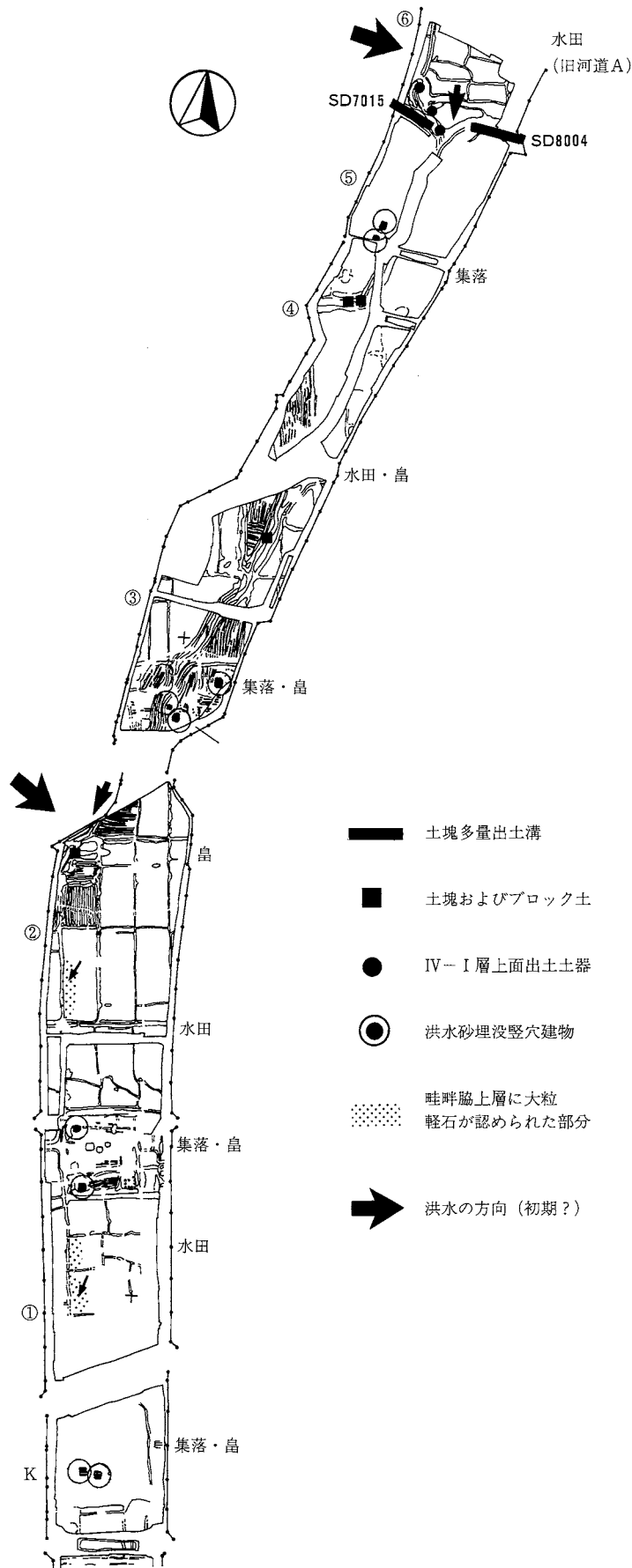


図42 屋代遺跡群における洪水被害（Ⅲ層関係）

る。また、遅くとも③段階には自然堤防を越え、集落や水田に被害を与えている。

b. 屋代遺跡群②区幹線水路分岐点の状況 分岐点の一方にブロック状の土砂が多量に堆積していた(PL49)。これは、押し流されてきた土砂が水門などの障害物によって滞り、堆積した可能性がある。土砂は南側の傾斜がきつく北側が緩やかであり、流れの方向は北から南であったと推定される(『古代1編』図版226)。

c. 屋代遺跡群①区～更埴条里遺跡C地区南北大畦畔付近の状況 これらの地区では、南北大畦畔の東側に沿って粒径の大きい(親指の爪先大～握り拳大)軽石が砂層上部にたまっており、砂層そのものも東側が厚くなっていた。この場合、洪水は標高の低い東側から押し寄せ、大畦畔上部で乗り越えられなかった軽石が一旦堆積したものと考えられる。ただし、砂はより上部にも及んでいる。

d. 屋代遺跡群⑥区Ⅳ-1層上面での杯類出土状況 この地区では、Ⅳ-1層上面検出の畦畔上や水路分岐点脇に杯を置いた状況が見られ、水田や水路に対する祭祀の跡と考えられる。これらの杯類は大きく破損しておらず、また、SC7001上や水路(SD7014)脇の不安定な位置に置かれていたにも関わらず、畦畔下や水路へ転落することなく砂を被っている。また、SC7008上の土器は若干破損し、畦畔下に滑り落ちた状況を示しているが、2枚重なった状況は維持していた(図43-B、PL49)。このことは、洪水が旧河道Aを襲ったごく初期の段階や流路化した地点を除くと、全般に緩やかに水かさを増して砂を堆積してゆき、地表面にあった遺物が破損したり、押し流されたりしなかったことを示していよう。また、SC7008上の土器が東側に転落して

いることから、旧河道A内の洪水の流れは、西から東であったと考えられる。

e. **水田面の状況** 『古代1編』で示した通り、洪水砂被覆直前の状況には犁などによる耕作痕をとどめた田面があり、代掻き終了段階と推定される。また、田面に稲株跡が認められないことから、洪水を被った季節は初夏であった可能性が高い。

以上の状況から、洪水は、1. 旧河道内を東流しながら増水し、2. 自然堤防I群への侵入は、北から南へ水路を逆流していったこと（ただし、洪水の主流は馬口遺跡北側から東南へ向かうと考えられる『総論編』）、3. 水路からさらに増水し水田面に溢れた後は、標高の低い東側から標高の高い西側へ徐々に範囲を広げていったこと、4. 旧河道内の初期の堆積と、流路状になった地点を除いては、緩やかに堆積が進む溢流氾濫であったこと、5. 季節は初夏であった可能性が高いこと、などを指摘することができよう。

洪水への対処 次に、洪水に遭遇した人々がどのような処置をとったかについて、痕跡を探ってみる。

a. **集落北側の溝内出土の土塊について** 一つには、屋代遺跡群⑤～⑥区の集落北側の水路内で、砂層下部から出土した多量の土塊（図43、『古代1編』図版228）をあげることができる。大きさは長径40～60cm程度で、比較的類似した大きさを示している。溝底部に密着して出土した例はなく、土塊下にも洪水砂が入り込んでいる。分布は基幹水路SD4514が集落北側で分岐し、旧河道A境を流れる位置（SD7015、SD8004）に集中する。同じSD4514であっても、集落南側から集落中央にかけては極端に少ない状況が見られる。

このように土塊分布は、旧河道Aに面する集落境が中心である。推測の域はでないが、洪水当初、北側低地からのオーバーフローに対して、集落を守るために水路脇・集落側に土嚢？（土塊）を積んだものの、それを上回る洪水規模であったため、一部が溝内に滑り落ちた痕跡。と見ることが可能であろう。

b. **竪穴建物跡の状況について** 『古代1編』でも述べたように、洪水を被った時期に機能していた竪穴建物を特定することはできない。床面近くまで砂が達している場合でもカマドの破壊などが認められた例があり、洪水前に集落が廃絶していたと考えるのが妥当であろう。しかし、更埴条里遺跡K地区では、洪水後直ちに竪穴建物が建てられており、洪水時の短期間のみ集落が断絶していたとは考えにくい^(註1)。

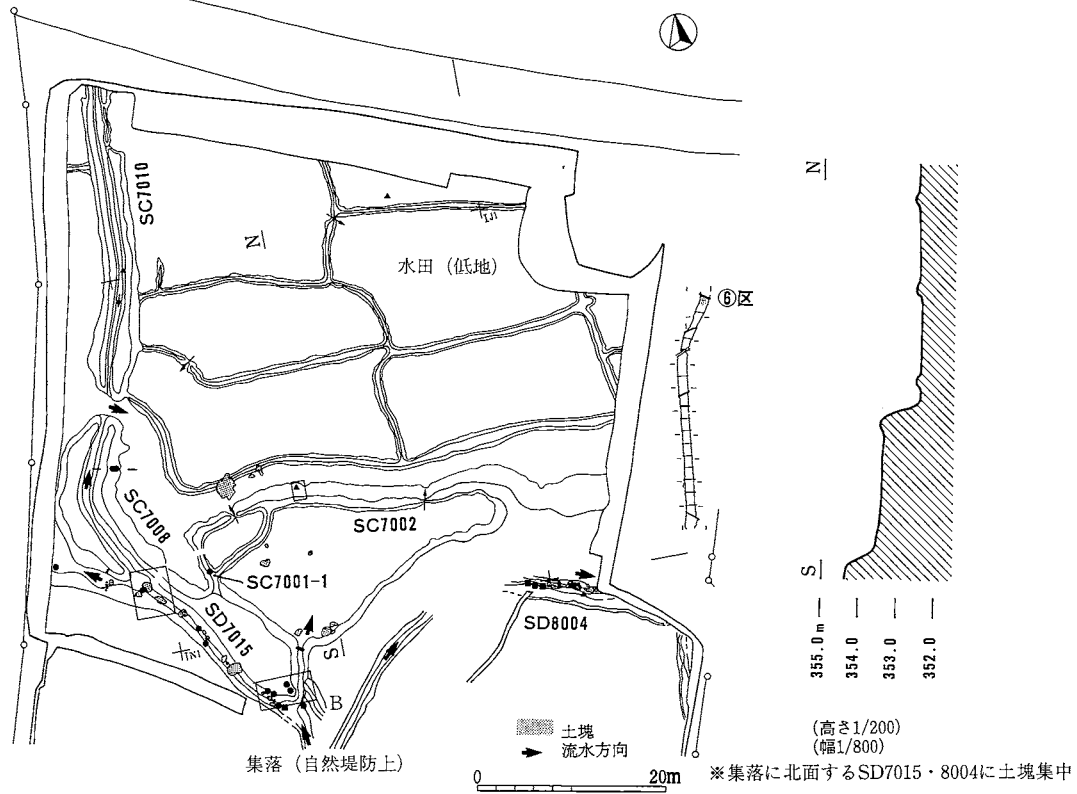
洪水の時期が初夏に確定できるとすると、竪穴建物が機能していなかった可能性が高く^(註2)、家財道具の大半は、検出できなかった平地式の建物に移されていたと考えられる。さらに、洪水が徐々に水かさを増して行く溢流氾濫であれば、集落に被害が及ぶ前に道具類を持ち出すことも充分可能であったと推定される。いずれにせよ、こうした推定の前提となる洪水の状況や、沖積地での竪穴建物の季節性の問題など、解明しておかなくてはならない点が多々ある。

洪水後復旧 埋没した家屋を掘り返し、家財道具などを取り出した痕跡は判然としていない。水田域では、更埴条里遺跡H～J地区にかけて大畦畔脇に溝が掘られており、坪区画を復元しようとした痕跡が認められる。ただし、I地区には集落が成立しており、水田としての全面復旧はならなかったと考えられる。I地区北東側の集落隣接地では、III層上からIV層上部にかけて砂と旧耕土を攪拌した痕跡がある。上面での遺構検出はならなかったが、耕地を確保するための行為であったのかも知れない。

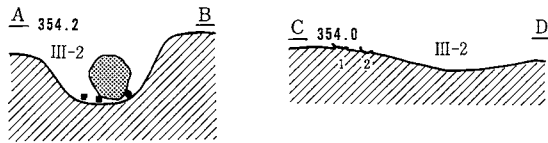
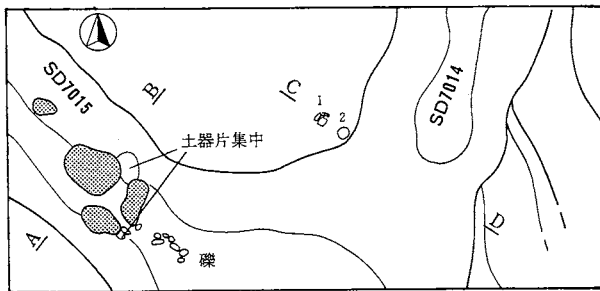
このように、一部の地区では洪水直後から集落・水田（畠）の復旧や新たな配置にとりかかっている。しかし、大半の地区では集落が再編成されるまでに一定の時間を要しており、さらに自然堤防側の旧水田地帯はいったん畠として再開発され、本格的な水田化は近世にいたるまで明確ではない。

窪河原遺跡の状況 窪河原H5区で基盤の砂礫層を試掘した。この礫層中からは、弥生時代から9世紀代にかけての遺物（図43-D）が多量に混入しており、それより新しい遺物は皆無であった。このことから、この砂礫層は9世紀代に河川隣接の集落を削り込み、砂礫とともに下流へ押し流した痕跡と考えられる。ただし、今回の調査では、III層の堆積を引き起こした洪水との関係を明確にすることはできなかった。

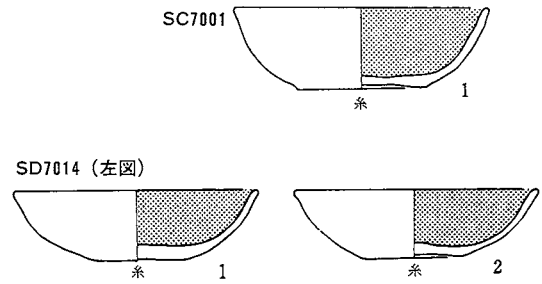
A. 屋代遺跡群⑥区水路内土塊等出土状況



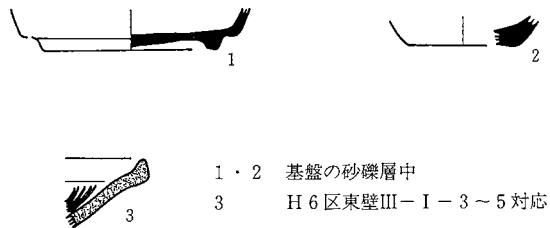
B. 水路分岐点の土塊と遺物出土状況



C. IV-I層上面出土土器



D. 窪河原遺跡出土土器



E. 窪河原遺跡検出の砂脈

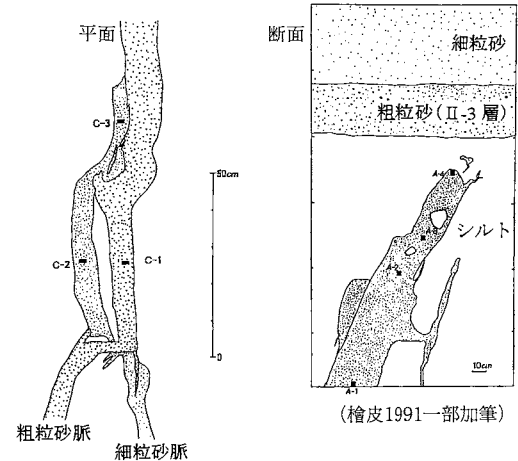


図43 自然災害関連遺構と遺物

(3) 中・近世の洪水

この時期の洪水痕跡は、自然堤防Ⅰ群（屋代遺跡群）から後背湿地Ⅰ群（更埴条里遺跡）では確認されていない。洪水性の堆積物が薄かったため、後世の耕作によって痕跡をとどめていない場合も想定できる。耕作面を明確に被覆するような洪水被害は、この時期に開発が進展した窪河原遺跡の自然堤防Ⅱ群上と旧河道内に集中している。

近世以降については、松代藩などにより詳細な洪水記録が残されている（半田光1988）。ただし、今回の調査では、時期決定できる資料が乏しく、どの洪水砂層がいつの洪水に比定されるかは不明である。ここでは、洪水砂層の確認できた地点と厚さについて触れておく。

a. 13～14世紀代の砂層 窪河原遺跡H2・H6区の自然堤防Ⅱ群上の畝状遺構と、H6区の旧河道B上の水田面を被覆する。H6区断面（図版3）では最大で40cmほどの堆積が認められる。

b. 16世紀以前の砂層 窪河原遺跡H6区の水田面の凹地でのみ確認された。aよりは上層、また、15～16世紀代の青磁（図45-3）の出土した層よりは下層にあたる。最大厚で5cm程度である。

c. 16～19世紀の砂層 比較的大規模な砂層の堆積が2回認められる。屋代遺跡群⑥区（II-Y6-9層）～窪河原遺跡H6区（II-U6-5層）に存在し、16cm～40cmほどの堆積が認められる。窪河原遺跡の旧河道CやD側では、耕地の開発が及んでいないため災害とは認定できないが、この時期に急速に埋没したものと考えられる。旧河道Dを埋積した砂層よりやや上層で17世紀代の陶器（図版277-13）が出土している。

旧河道C・Dでは、17世紀から19世紀の洪水砂層が数枚確認されている。

d. 19世紀中葉以降の砂層 屋代遺跡群⑥区から窪河原遺跡の全域でII-3層とした砂層が確認されている。善光寺地震によると推定される砂脈を削っており、19世紀中葉以降と考えられる。上層より明治時代の焼き物が出土しており、それ以前の可能性が高い。旧河道C・D側で厚く、窪河原遺跡12トレンチで最大厚50cmほどに達する。これに対し、古くから離水していた旧河道A（屋代遺跡群⑥区）上では10cmほどの堆積にとどまっている。可能性の1つとしては、善光寺地震の山崩れによって堰き止められた犀川が決壊して起こった洪水が考えられ、調査区近隣の雨宮地区では若宮付近まで突き上げた記録されている（半田照1988）。しかし、この時期にはたびたび千曲川も洪水を起こしており、現時点ではいつの洪水であるかは特定できない。砂の組成分析などによる供給源の判定については、今後の課題としておきたい。

2 地震痕跡

(1) 善光寺地震（1847年）に比定される砂脈

地震痕跡 善光寺地震に比定される砂脈は、窪河原遺跡から屋代遺跡群で検出されている。この内、自然堤防Ⅰ群上にある屋代遺跡群では砂脈が細く、挫折型砂脈（寒川1992）があるなど不明確であった。そのため、調査はもっぱら窪河原遺跡を中心に断面観察を行った^(註3)。また、ここに掲載した砂脈については、松代地震観測所による報告がすでに刊行されている（楡皮1991）（図43-E）。

時期の認定 窪河原遺跡の全域を被う洪水砂層（II-3層）によって砂脈の上部を削られており、この層より上層で明治時代以降の焼き物が出土している。

窪河原遺跡第5トレンチにおいて、17世紀の可能性を持つ磁器が出土した層を突き破って砂脈が上昇している。このことから、17世紀以降、19世紀後半以前の砂脈と考えられる。この時代において液状化現象を起こすような大規模な地震としては、1847年の善光寺地震が最も有力である。

砂脈の範囲 窪河原遺跡H2区の自然堤防Ⅱ群上が最も明瞭で、数も多い（PL50）。個々の砂脈の幅も太い例（約10cm）が多い。次に多く見られるのが、窪河原遺跡のトレンチ調査区内である。窪河原遺跡H6区から屋代遺跡群にかけてはしだいに砂脈が細くなり、数も減少する。このように、比較的新しい時代の千曲

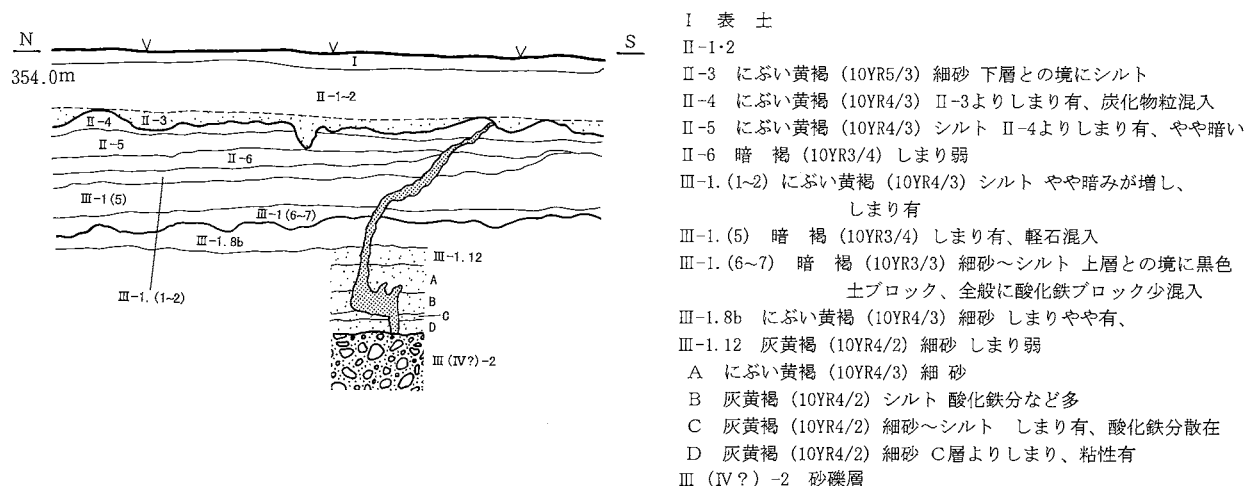


図44 窪河原遺跡H2区東壁断面 (1/80)

川氾濫原であった窪河原遺跡側に多く、古くからの自然堤防 I 群側には少ない傾向が読みとれる。

砂脈の特徴 松代地震観測所の見解では、細かい砂で構成された砂脈を粗い砂で構成された砂脈が切っており、少なくとも砂の上昇は2度あったとされている。また、上部に向かって細粒化する粒度分化が認められた、と報告されている。

- 註1 これまでの長年の調査においても、更埴市内では生活の状態を残したまま砂に埋もれた竪穴建物跡は見つかっていない。また、傍証として屋代遺跡群における竪穴建物のリフォーム状況を見ると、古代8期前半に限っても2～3軒の切り合い関係がある上、1軒の中でもカマドの作り替えが2～5回認められるなど、短期間に頻繁に改築がなされていたと考えられる。
- 2 竪穴建物と平地建物の季節的な利用については、時代が異なるものの中筋遺跡の調査などで指摘されている(大塚1988)。また、更埴条里遺跡、屋代遺跡群では竪穴建物の床面が周辺の水田面(古墳～条里水田面)よりも低くなる。このため、水田に水を入れる季節には地下水位が上昇し、水没する可能性が高い。実際、今回の調査では調査区を4m以上の止水用矢板で囲い、さらに排水用のトレンチを全周させたにも関わらず、田植え期には浸透圧によって湧いた地下水により、竪穴建物が水没する事態があった。こうした状況を見ると、水田域内の集落では田植え期に竪穴建物が機能していたとは考えづらい。
- 3 この間の詳細な経緯は『古代1編』に掲載した。

参考文献

大塚昌彦 1988 「X まとめ」『中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書』
 寒川 旭 1992 『地震考古学』中公新書1096
 寺内隆夫 1999 「第4章 自然災害痕跡」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代1編—』
 西山克己 1996 「長野県における地震跡」『発掘された地震痕跡』埋蔵文化財研究会ほか
 半田照彦 1988 「第六章第6節 地震による災害」『更埴市史』第二巻 近世編
 半田光昭 1988 「第六章第1節 千曲川と災害」『更埴市史』第二巻 近世編
 檜皮久義(地震観測所) 1991 「松代付近の遺跡の発掘現場で見られた地震跡」『気象庁地震観測所技術報告』第11巻
 松代藩文化施設管理事務所 1998 『善光寺地震—松代藩の被害と対応』

第9章 微化石と動・植物遺体の分析

第1節 II・III層を対象とした環境の復元

II・III層から採取した資料を元に、9世紀第4四半期～近世にかけての自然環境復元、水田・畠の開発状況、および人々に利用された動・植物などに関する分析を本章にまとめた。また、縄文時代～近世に至る全時期の概略については第1章第3節に、『古代2、中・近世』に関わる総合的な見解は第11章第5節に掲載した。

分析のねらい 第1点は自然環境復元のためのデータを得ることである。9世紀第4四半期の洪水砂堆積により、自然堤防I群以南の環境は大きく変化したと考えられる。一方、周辺山間地での開発が活発化する時期でもある(清水製鉄遺跡)。中世以降は旧河道内や自然堤防II群へも耕地開発の手が延び、自然環境に与える人間活動の影響がさらに強まったことが予想される。このように、開発の進展と環境変化の関係が注目される点である。

ただし、古代とは異なり動植物遺体を包含した良好な堆積層がないため、旧河道上部水田土壌や井戸底部の堆積物を利用した。

第2点は耕地に関する点である。第1点めと重なる部分が多いが独立項目としておく。洪水後、一時的に壊滅状態となった水田地帯において、その後の水田再開発の状況や畠開発の進展が中心となる。

第3点は食材リストの作成である。カマドおよびその周辺でサンプリングされた土壌の水洗選別により、食料として利用された動・植物を洗い出すことを目的とする。

第4点は、木製品、建築材の材料を復元するとともに、そこから導き出せる利用材の変化をとらえる。また、微化石の分析などと総合し、植生の復元も目的とした。

第5点として人骨の形質的な特徴を明らかにすることを加えた。

分析方法 限られた資料を活かすため、また、『弥生・古墳編』、『古代1編』と一貫した共通課題の解明をめざして、以下の分析を実施した。依頼先と分析は各項に記した。実施した分析は、植物珪酸体(プラント・オパール)、花粉、珪藻、種実、木材、貝、獣骨、人骨である。掲載順は微小なものから大型資料の順とし、最後に人骨に関する分析を掲載した。また紙数の関係上、全分析データを掲載できていない。

未掲載の分析データについては長野県埋蔵文化財センターが保管している。また、資料は長野県立歴史館で保管されており、一部は各分析先で標本として保管している。

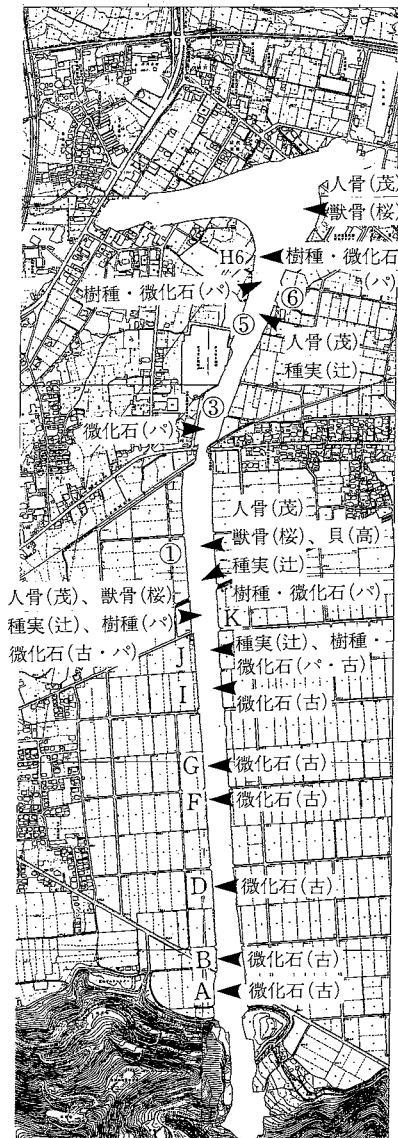


図45 環境復元・動植物遺体分析地点
()内は分析担当者頭文字

第2節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析

1 更埴条里遺跡 I～III層における微化石分析

株式会社 古環境研究所

松田隆二・金原正子

(1) 目的

ここでは、仁和の洪水層堆積以後の更埴条里遺跡における稲作をはじめとする農耕と当時の堆積環境について、プラント・オパール（植物珪酸体）分析、花粉分析および珪藻分析から検討を行った。

(2) 試料

試料は、A地区のA地点（III層）、B地区のB地点（I層、II層、III層）、D地区のD地点（II層、III層）、F地区のF地点（I層、II a層、II b層、III層）、G地区のG地点（III層）、G'地点（I層、II層、III層）、H地区のH地点（II a層、II b層、III層）、東壁（I層、II層、III層）、I地区のI地点（I b層、II層、III層）、I'地点（II層、III層）、北壁（I層、II層、III層）、蛇田堰北地点（II層、III層）、蛇田堰南地点（III層）、J地区のJ地点（I層、II a層、II b層、III層）、K地区のK地点（I a層、I b層、I c層）において採取された52点である。このうち、プラント・オパール分析にはすべての地点の試料が、花粉分析と珪藻分析にはI地区北壁の試料が分析の対象となった。

(3) 方法

①プラント・オパール分析

弥生・古墳時代編第4章第2節1に示した。

②花粉分析

試料約1ccに5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。水洗後、0.5mm篩で礫などの大きな粒子を取除き、沈殿法を用いて砂粒を除去する。25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。水洗後、氷酢酸で脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。再び氷酢酸を加えて水洗する。沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成する。

検鏡は、プレパラート作成後直ちに生物顕微鏡下300～1000倍で行った。プレパラート全面を操作し、出現するすべての種類について同定・計数した。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本と対比しながら行った。

③珪藻分析

試料約1gに30%過酸化水素水を加え加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後、水を加え1時間後に上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回繰り返す。残渣のうち細粒分を回収し、乾燥後マウントメディア（封入剤）で封入しプレパラートを作成する。

光学顕微鏡下600～1000倍で観察し、珪藻殻200個体について同定を行った。なお、珪藻殻が200個に満たない試料については、プレパラート全面を精査した。

なお、試料標本とプレパラートは、すべて株式会社古環境研究所に保管されている。

(4) 分析結果

① プラント・オパール分析

結果を図46・47、表51～53に示す。機動細胞起源のプラント・オパールについて同定を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科の各分類群が検出された。イネはI層（I a層、I b層、I c層）、II層（II a層、II b層）、III層のすべてにおいて高い密度である。ヨシ属は一部の調査区のII層とIII層で高い密度である。ウシクサ族は各層とも部分的に検出されるが低い密度である。タケ亜科はほとんどの試料で検出されている。I地区のII層とIII層では高い密度である。

② 花粉分析

結果を図48、表54に示す。検出された花粉・胞子は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉20、シダ植物胞子2形態の計44分類群である。III層では花粉がほとんど検出されない。II層では樹木花粉は少なく、草本花粉の占める割合が高い。樹木ではコナラ属コナラ亜属が多いが、上位になるに

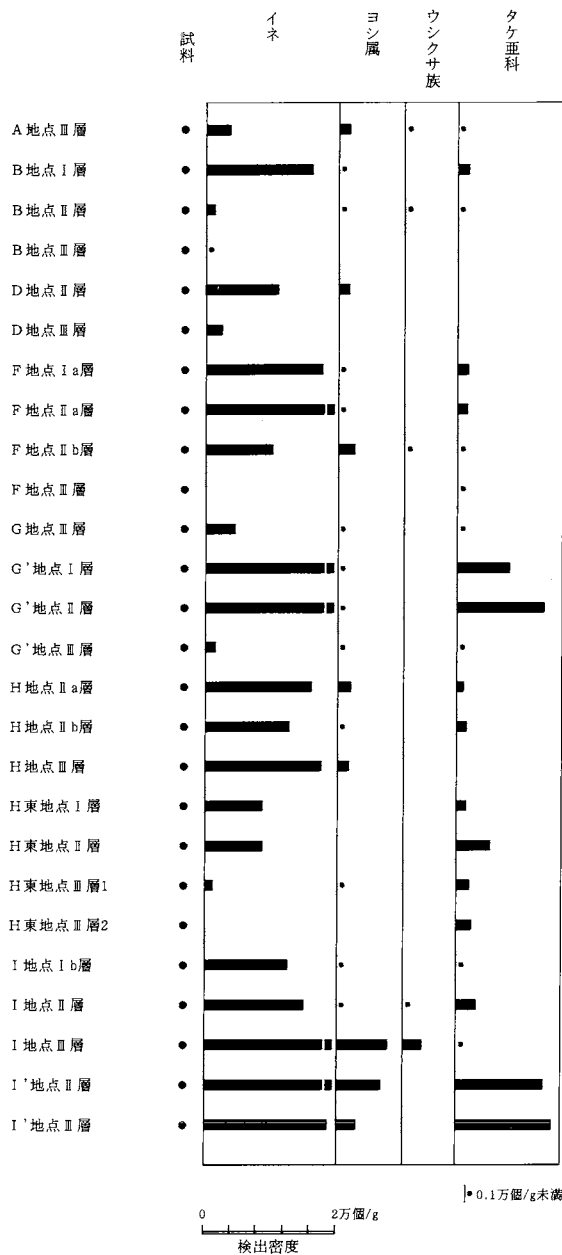


図46 更埴条里遺跡 I～III層におけるプラント・オパール分析結果(1)

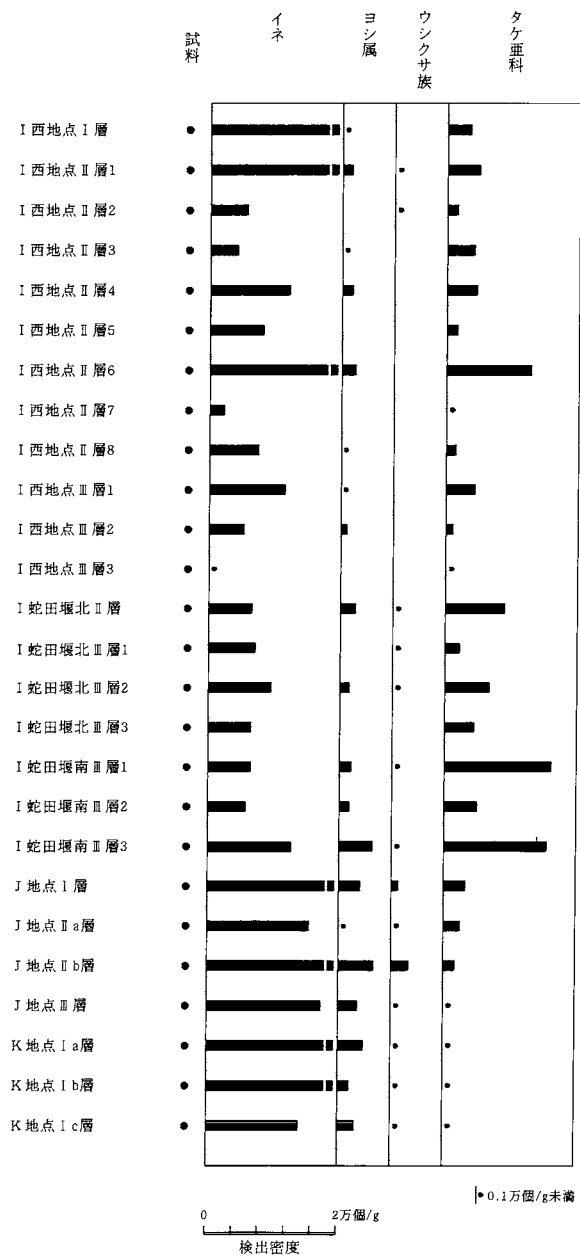


図47 更埴条里遺跡 I～III層におけるプラント・オパール分析結果(2)

表54 更埴条里遺跡 I 地区西壁地点における花粉化石産出表

分類群														
学名	和名	I	II-1	II-2	II-3	II-4	II-5	II-6	II-7	II-8	III-1	III-2	III-3	
Arboreal pollen 樹木花粉														
<i>Abies</i>	モミ属			1					1					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	86	5	1	2	4	5	2				1	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	20	3	1	2	4	1							
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科														
<i>Juglans</i>	クルミ属		2	1			1	1						
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1			1	2			1					
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	2	2	5	4								
<i>Corylus</i>	ハシバミ属				2									
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ	1	2	2	3	2		1						
<i>Castanea-Castanopsis</i>	クリーシイ属	1	2	3	2			1	1	1				
<i>Fagus</i>	ブナ属			1	2				1	1			1	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	26	17	36	23	22	4	7	10	6			2	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	5	5	5	1			1						
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1				2			1					
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			3	6		3		1					
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1	1					1						
<i>Aescidus turbinata</i>	トチノキ					1			1		3			
<i>Acer</i>	カエデ属								1					
Oleaceae モクセイ科														
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科				1									
Arboreal-Nonarboreal pollen 樹木・草本花粉														
Moraceae-Urticaceae クワ科-イラクサ科					6	4	6	7	4	9	3	3	2	1
Nonarboreal pollen 草本花粉														
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1				1			1					
Gramineae イネ科		168	58	159	24	55	8	16	11	17	4	8	2	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	6	2	4	3	2								
Cyperaceae カヤツリグサ科		12	12	33	13	9	1	6	8	10			2	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	1	3	1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae アカザ科-ヒユ科		9	9	7	4	7	2	3	2	1	1		1	
Caryophyllaceae ナデシコ科		9	29	25	10	4	5	1	4	1				
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	1	1	1				1	1					
Cruciferae アブラナ科		16	20	19	9	33	22	7	15		2	6	1	
Umbelliferae セリ科			1		1	2	1	1	1	2			1	
Solanaceae ナス科			1	1							1		1	
Labiatae シソ科							3	1	1	1	1	1		
Valerianaceae オミナエシ科			1											
Lactuoidae タンポポ亜科		5	19	13	6	5	7	5	7	10				
Asteroideae キク亜科		4	5	6	1	2		2	2		1	1	1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	15	10	34	15	20	13	16	16	22	8	3	1	
Fern spore シダ植物胞子														
Monolate type spore 単条溝胞子		8	4	14	20	9	19	7	12	2	3	4		
Trilate type spore 三条溝胞子		42	19	9	8	3	5	4	1		1			
Arboreal pollen 樹木花粉		145	42	58	49	46	12	15	15	12	1	4	0	
Arboreal-Nonarboreal pollen 樹木・草本花粉		0	0	6	4	6	7	4	9	3	3	2	1	
Nonarboreal pollen 草本花粉		247	169	305	88	139	63	60	67	65	17	22	7	
Total pollen 花粉総数		392	211	369	141	191	82	79	91	80	21	28	8	
Unknown pollen 未同定花粉		3	3	6	3	8	3	2	1	1	0	3	0	
Fern spore シダ植物胞子		50	23	23	28	12	24	11	13	2	4	4	0	

標種群の *Pinularia acrosphaeria* や *Pinularia viridis* などが特徴的に出現する。また、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* なども出現している。

(5) 古代、中・近世から現代にかけての農耕と環境

III層は洪水堆積層であり、本遺跡の全域に堆積している。ここではE地点とF地点を除く各地点でイネのプラント・オパールが検出されている。A地点とG~J地点においては非常に高い密度である。このことから、洪水発生後すぐに水田の復旧が行われていたことが理解される。なお、花粉化石と珪藻化石の検出量はごく少量である。ただし、浮遊生指標種群の珪藻が出現することから、珪藻や花粉が溶出あるいは分解される環境であったと推定される。

II層もほぼ全域に堆積しており、ほとんどの地点でイネのプラント・オパールが高い密度で検出されて

表55 更埴条里遺跡 I 地区西壁地点における珪藻化石産出表

種群は、小杉 (1988) および安藤 (1990) による

分類群	標群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
<i>Achnanthes lanceolata</i>	K	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
<i>A. linearis</i>	W	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>A. spp.</i>	?	1	2	-	2	1	3	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1		
<i>Amphora ovalis</i>	W	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>A. ovalis</i> var. <i>libyca</i>	W	-	2	-	-	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>A. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Bacillaria paradoxa</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Caloneis bacillum</i>	W	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. lauta</i>	W	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>C. silicula</i>	W	5	9	-	-	1	4	3	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. spp.</i>	?	3	2	-	-	1	1	3	3	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Cocconeis placentula</i>	W	9	4	4	3	2	4	2	3	-	-	-	-	1	-	1	-	1	2	2	1	6	1	-	1	2	2	2	-	1	2	1		
<i>Cyclotella comta</i>	W	3	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3	4	4	2	-	1	1	2	2		
<i>C. kuetzingiana</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Cymbella aspera</i>	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. cuspidata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. lanceolata</i>	W	3	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. tumida</i>	W	-	3	4	2	5	4	7	4	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	2	2	1	-	-	2	1	4	-	1	-	1			
<i>C. turgidula</i>	K	1	-	2	1	3	2	2	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
<i>C. spp.</i>	?	2	3	5	4	-	-	3	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	
<i>Diploneis finnica</i>	W	-	-	-	1	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>D. ovalis</i>	W	1	-	-	1	-	1	3	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>D. yotukaensis</i>	W	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>D. spp.</i>	?	-	2	-	-	1	3	4	3	5	-	-	2	1	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	
<i>Epithemia sorex</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. turgidula</i>	W	-	-	-	-	5	2	10	10	-	1	2	-	2	2	5	1	3	8	5	-	3	2	8	-	4	1	1	2	2	1	8	8	
<i>E. zebra</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. spp.</i>	?	-	-	3	8	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Enucelia lunaris</i>	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. nipponica</i>	W	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. pectinalis</i>	W	4	2	-	2	4	-	4	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1	2	-	-	-		
<i>E. pectinalis</i> var. <i>minor</i>	O	2	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. praerupta</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>E. spp.</i>	?	2	2	3	-	5	3	4	-	-	1	-	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Fragilaria brevistriata</i>	N	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>F. pinnata</i>	N	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>F. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Frustulia</i> spp.	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema affinis</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	3	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-	
<i>G. clevei</i>	W	-	-	-	1	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>G. constrictum</i>	W	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>G. gracile</i>	O	3	1	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>G. olivaceum</i>	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>G. parvulum</i>	W	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>G. spp.</i>	?	5	6	1	-	2	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
<i>Gyrosigma acuminatum</i>	W	2	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	20	4	-	-	2	-	7	3	-	-	-	2	3	-	1	-	2	1	-	-	2	-	-	6	1	-	1	-	2	2	2	2	
<i>Melosira ambigua</i>	N	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	
<i>M. distans</i>	N	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>M. granulata</i>	N	1	-	5	4	1	3	5	2	2	3	1	5	2	-	-	-	2	-	-	3	4	-	1	1	6	10	1	2	-	2	13	7	
<i>M. italica</i>	N	3	1	-	5	2	-	9	3	1	2	6	2	-	1	2	3	-	1	3	2	7	-	3	4	3	-	4	2	1	11	8	8	
<i>M. undulata</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>M. varians</i>	N	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>M. spp.</i>	?	-	-	2	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	1	-	-	2	
<i>Navicula bacillum</i>	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. confervacea</i>	W	26	25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. cuspidata</i>	W	2	5	2	2	-	1	-	2	-	-	-	1	5	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. elginensis</i>	O	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. mutica</i>	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. pupula</i>	W	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. viridula</i>	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>N. spp.</i>	?	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Neidium iridis</i>	O	2	5	2	1	-	3	-</																										

参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、p.73-88.
- 金正明 1993 「花粉分析法による古環境復元」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店、p.248-262.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27、p.1-20.
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追求のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20、p.81-92.
- 中村 純 1973 『花粉分析』古今書院、p.82-110.
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13、p.187-193.
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号、p.21-30.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9、p.15-29.
- 藤原宏志 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12、p.29-41.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17、p.73-85.

2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析

パリオ・サーヴェイ株式会社
田中義文・辻本崇夫

古代末～中・近世の分析調査は、更埴条里遺跡では、K地区井戸内の埋積土で行っている。屋代遺跡群①区では、旧五十里川(SD23)の旧河道埋積物を分析しているほか、⑥a区では基本土層のIII層より上位、③a区では井戸の埋積物について分析調査を実施している。また窪河原遺跡では、自然堤防II群相当層の分析調査を実施している。今回は紙数の関係上全ての結果を掲載できないため、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析結果のうち、代表的な地点を選択した(図50～56、表56・57)。

旧五十里川の埋積過程 屋代遺跡群①区では、旧五十里川堆積物(試料番号11～38)を削ってSD27の埋積物が堆積する。旧五十里川堆積物は、III層、SD27はII層にそれぞれ相当する。旧五十里川の埋積物における珪藻化石群集は、*Achnanthes lanceolata*(好流水性種、中～下流性河川指標種群(安藤、1990))、*Navicula capitatoradiata*(好流水性種)、*Cocconeis placentula* var. *euglypta*(好流水性種、付着性種)などが検出され、特に上位では*Fragilaria pinnata*、*Nitzschia palea*などの好汚濁性種(Asai and Watanabe, 1995)が多産する。このような群集組成から、河道内は基本的に流水域であったが、埋積が進むにつれ富栄養化したと推測される。一方、SD27では、下部は*Navicula cryptocephala*、*Navicula pupula*、*Nitzschia palea*など富栄養水域に多い種が多産するが、上部になると*Navicula elginensis* var. *neglecta*(好流水性種)等の産出がめだつ。このことから、埋積開始当初は富栄養で淀んだ水域であったが、埋積が進むにつれて流水の影響も受けるようになったと考えられる。

花粉分析結果をみると、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属など草本類の割合が高く、水生植物(ミズアオイ属、サンショウモなど)も多産する。また、植物珪酸体ではヨシ属やウシクサ族が多産することから、周辺はイネ科草本や水生植物を主体とする草地であったと考えられる。

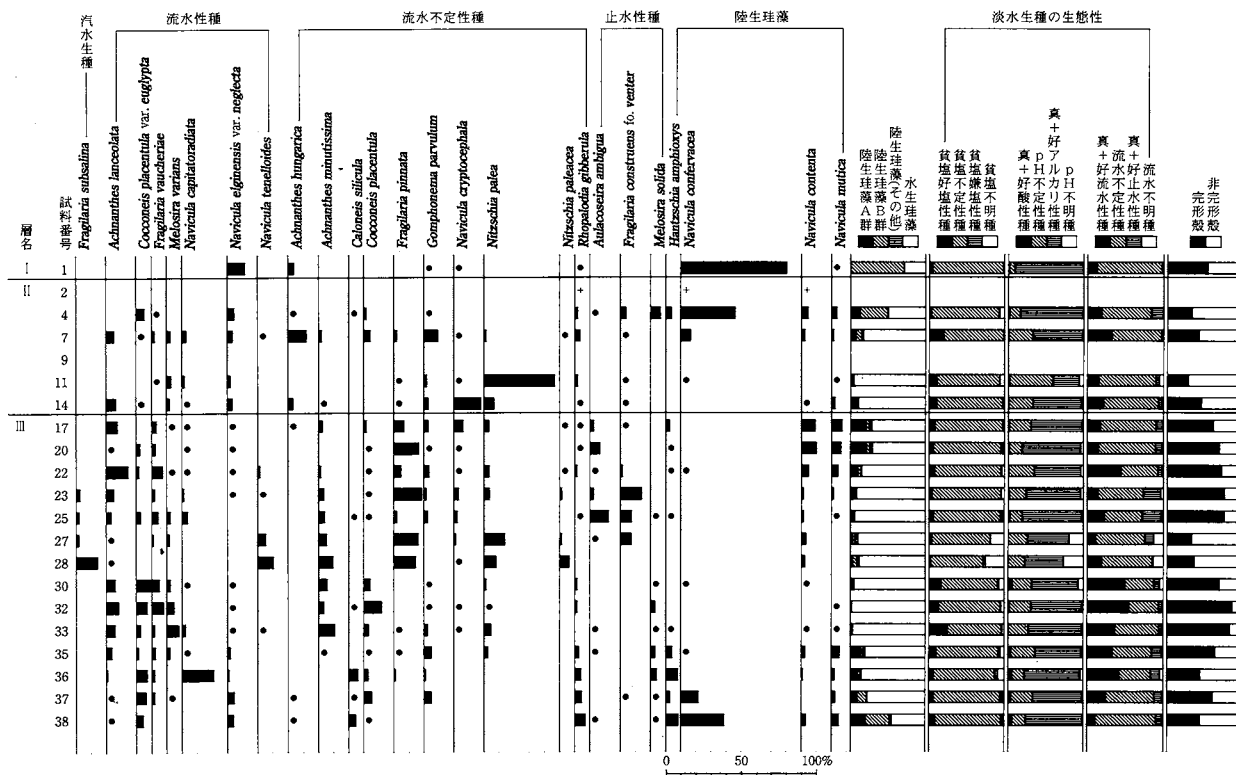


図50 屋代遺跡群①区の主要珪藻化石群集の層位分布

汽水—淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

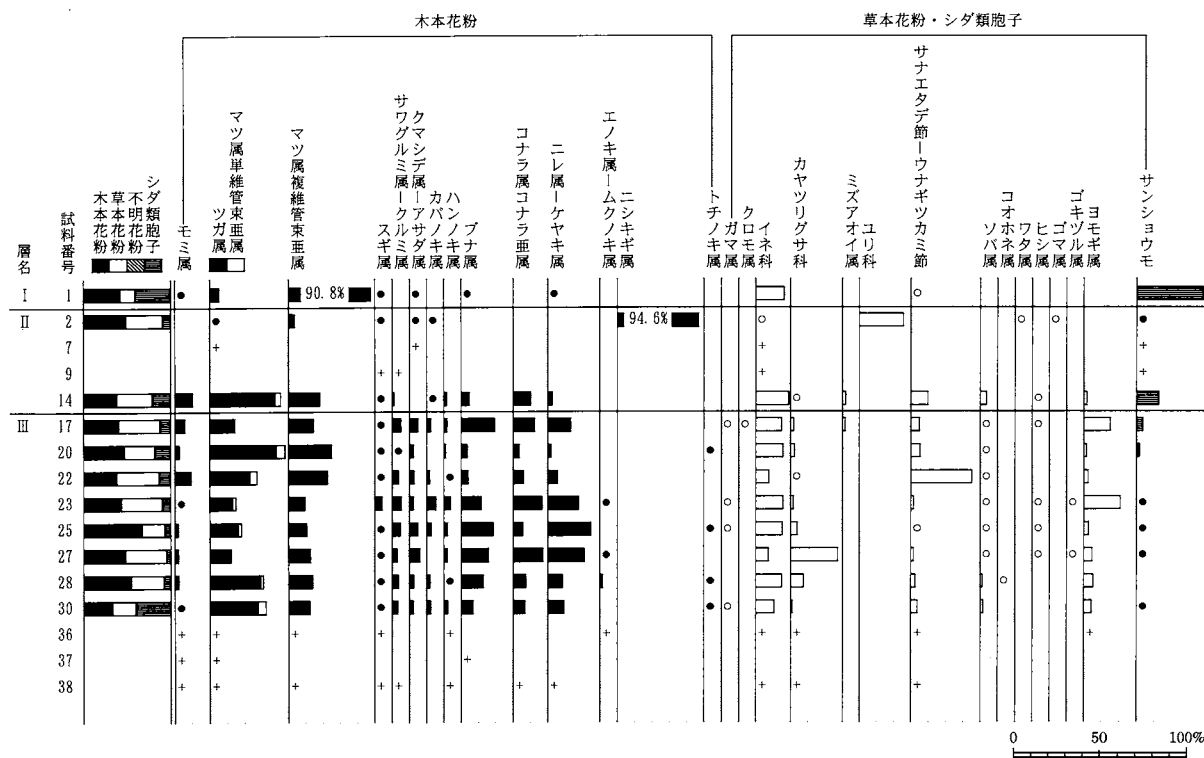


図51 屋代遺跡群①区の主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

草本類やシダ類の出現状況を見ると、イネ科は比較的安定して出現するが、カヤツリグサ科、ユリ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、サンショウモなど極端に高い試料もある。これらは局地性を反映しているものとみられ、ごく近くに母植物が生育していたと考えられる。特にユリ科やサナエタデ節—ウナギツカミ節は虫媒花で、花粉生産量が少ないことから、母植物自体が堆積物中に取り込まれた可能性もある。

⑥a区の古環境 ⑥a区では、おもに古代の水田について調査を実施しているが、III層より上位の層に関しても分析調査を行った。珪藻化石群集をみると、III層は砂を主体とした洪水層であり、二次化石と思われる珪藻化石が多く検出されることから、洪水の際に流されてきたものと考えられる。一方、花粉化石や植物珪酸体では、全体的に保存状態は悪いが水生植物の検出がめだつ。これらは大部分が洪水の際に周囲から流されてきたものであると思われるが、⑥a区は窪河原遺跡（自然堤防II群に立地）に近いことから、屋代遺跡群の他の地区とくらべ、近くに水生植物が多くみられる環境下にあったとも考えられる。⑥a区ではII層、I層は水田層とされる。イネ属の植物珪酸体が多産し、*Navicula confervacea*が多産することから、富栄養化の進んだ水田域が推定される。

自然堤防II群の形成過程と古環境 窪河原遺跡が立地する自然堤防II群は、中世以降の遺構が検出されたことから、中世以前は河川の影響を受けていたが、それ以降離水し安定したと考えられる。水田造成以前の珪藻化石群集をみると、*Achnanthes lanceolata*（中～下流性河川指標種群（安藤、1990））などの流水性種の産出がめだち、またさまざまな環境に生育する珪藻が混在する。このことから、検出された各微化石の現地性は低く、洪水によって集水域から運ばれた堆積物と考えられる。なお、この傾向は花粉化石群集でも見られる。木本花粉に着目すると、際立って多い種類が無いが、これも花粉化石の現地性が低く、さまざまな場所からもたらされた結果と考えられる。このような傾向は川田条里遺跡をはじめ、長野盆地に分布

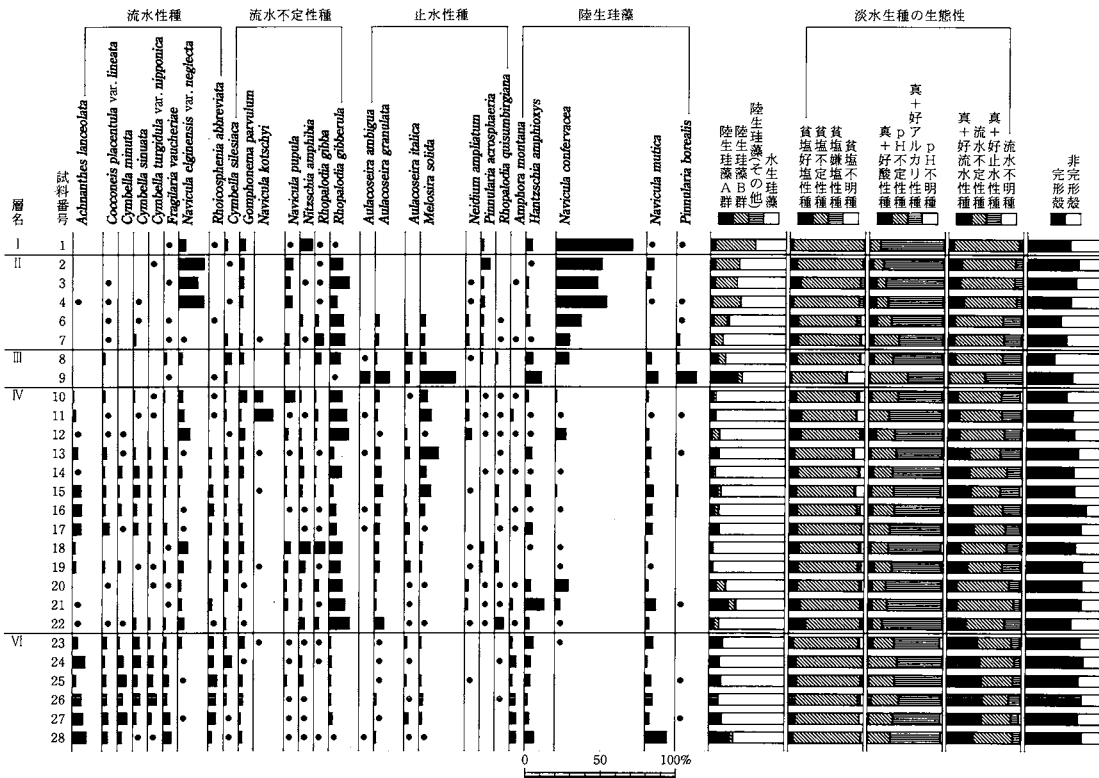


図52 屋代遺跡群⑥a区の主要珪藻化石群集の層位分布

淡水水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水水生種の生態性の比率は淡水水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

する各遺跡の花粉分析結果にしばしば見られる。一方、草本花粉化石や植物珪酸体に着目すると、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ヨシ属、ヒシ属、フサモ属など水生植物が多産するが、これらは河川沿いに生育していたものに由来すると考えられる。水田造成後の堆積層のなかでも、西壁南4と西壁南2に関しては、水田造成以前と同様な組成であるが、西壁南8では陸生珪藻が多産する。このような傾向は、同じく水田造成後に相当する畑作土（試料番号101、102）でもみられる。したがって、水田造成後の堆積層の上位ではしばしば乾燥する状況であったと考えられる。今回の分析調査結果では、水田耕作土、III-1.10層中位、III-1.6a層は洪水堆積物、III-1.5a層と畑作土が乾燥した状況と2つに分かれる。それぞれ土地の利用状況が異なっていたと考えられるが、詳しくは別項で述べる。

井戸埋積物からみた古環境 屋代遺跡群③a区の井戸（SK3001、3023）は、化石の保存が全体的に悪く、珪藻化石に着目すると、さまざまな生態性の化石が混在する。このことから、井戸の埋積過程で、壁面や表土が崩落してしたため、地山に含まれていた化石が流入した可能性が強いと考えられる。

一方、更埴条里遺跡K地区では、集落に伴う井戸が検出されている。珪藻分析結果をみると、陸生珪藻

表56 窪河原遺跡試料採取層準

資料番号	層名	備考	資料番号	層名	備考	資料番号	層名	備考
1	III-1.8b層上部		19	III-1.11層中部		37	III-1.10層上部	
2	III-1.8b層下部		21	III-1.11層下部		38	III-1.10層中部	
4	III-1.5a層		32	III-1.6a層下部		39	III-1.10層中部	
5	III-1.2a層		33	III-1.8a層	水田	40	III-1.10層中部	
12	III-1.6a層		34	III-1.8a層下層（上位）		101	III-1.8b層	畑？
13	III-1.8a層	水田	35	III-1.8a層下層（下位）		102	III-1.8b層	畑？
16	III-1.11層上部		36	III-1.10層上部				

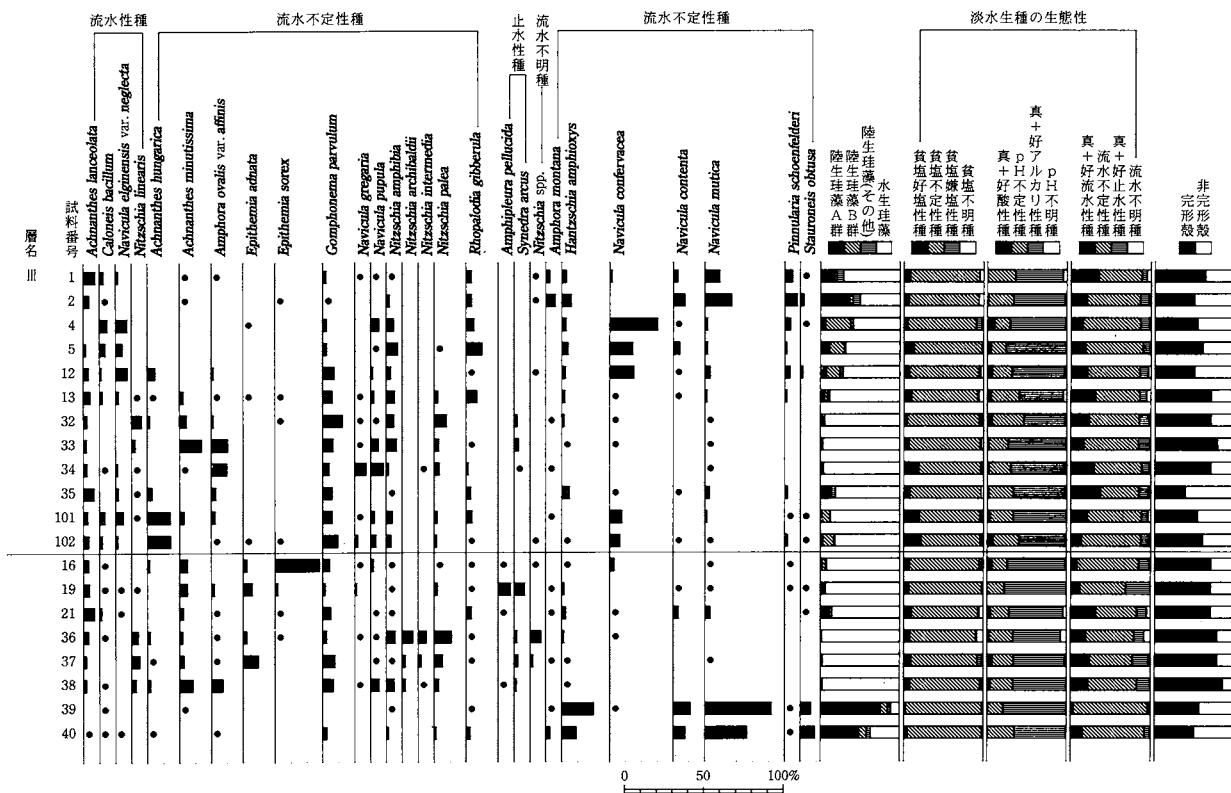


図53 窪河原遺跡の主要珪藻化石群集の層位分布

汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

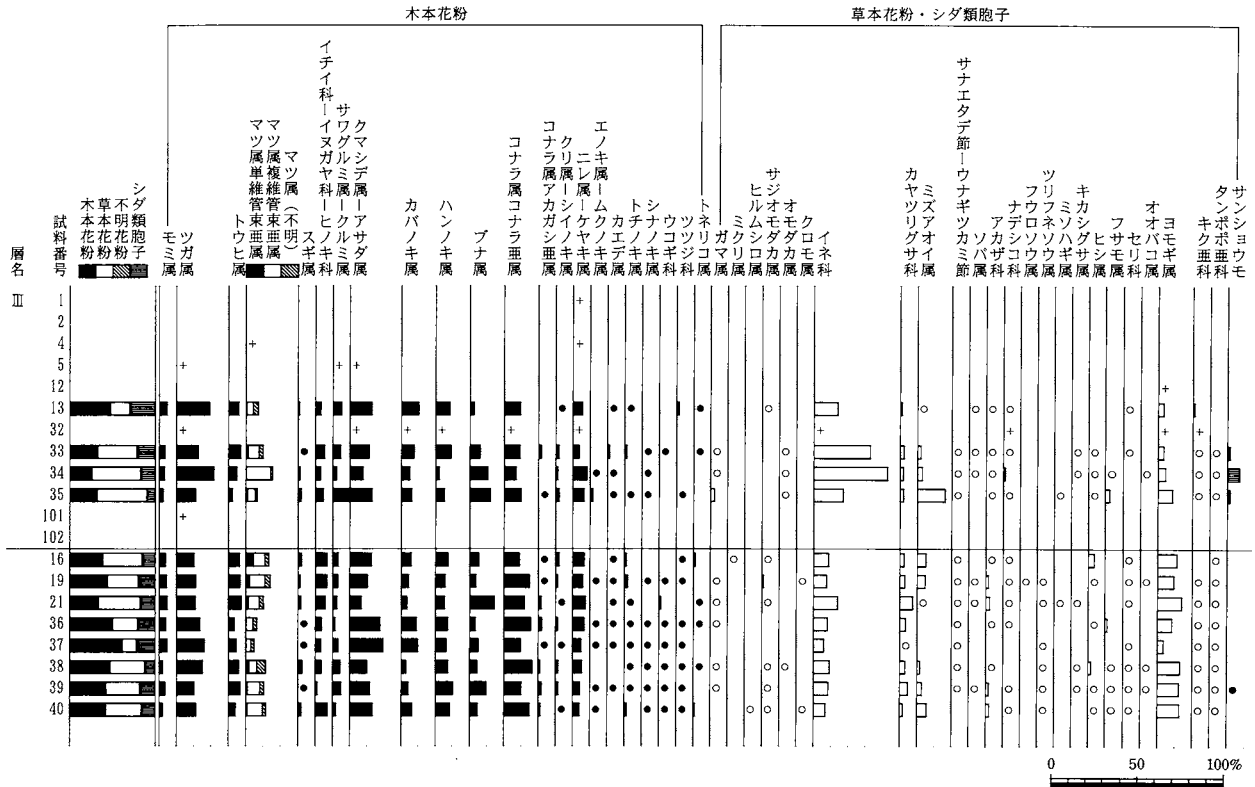


図54 窪河原遺跡の主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表57 窪河原遺跡の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	4	5	12	13	32	33	34	35	101	102	16	19	21	36	37	38	39	40
イネ科葉部短細胞珪酸体																					
イネ族イネ属		6	1	6	9	21	-	1	1	17	-	3	-	-	-	-	3	-	-	-	-
キビ族		-	-	-	3	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		12	3	5	2	6	8	-	-	11	1	-	-	-	1	-	3	2	4	-	3
ヨシ属		8	5	1	14	3	2	-	2	17	-	2	4	1	4	1	8	1	2	1	-
ウシクサ族コブナグサ属		-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属		7	1	10	4	7	-	1	3	13	2	3	1	1	1	2	8	1	1	4	2
イチゴツナギ亜科オオムギ族		2	-	3	3	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科		7	4	10	15	15	3	1	6	8	-	8	11	-	-	1	3	-	1	-	1
不明キビ型		9	2	5	13	9	2	1	1	26	5	2	3	-	3	-	13	2	1	4	6
不明ヒゲシバ型		3	-	2	7	2	5	-	1	6	-	2	-	-	-	-	7	2	1	2	3
不明ダンチク型		3	2	7	8	11	5	1	1	19	2	3	1	-	1	-	14	5	4	5	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体																					
イネ族イネ属		10	6	30	37	74	5	7	17	25	5	6	4	1	1	4	1	2	-	1	-
タケ亜科		9	2	13	5	11	4	1	4	6	4	1	2	-	-	1	7	2	-	2	-
ヨシ属		2	3	-	3	5	1	2	2	2	5	3	2	-	1	-	2	3	2	1	1
ウシクサ族		15	5	17	10	17	1	1	5	4	3	-	3	1	4	1	3	2	-	1	3
シバ属		1	-	4	3	2	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
不明		12	8	15	16	28	5	1	3	17	3	5	1	-	2	5	9	8	3	1	2
合計																					
イネ科葉部短細胞珪酸体		57	18	49	79	74	25	5	15	121	10	23	20	2	10	4	59	13	14	16	18
イネ科葉身機動細胞珪酸体		49	24	79	74	137	16	13	31	54	21	15	12	2	8	11	22	18	6	6	6
総計		106	42	128	153	211	41	18	46	175	31	38	32	4	18	15	81	31	20	22	24
組織片																					
イネ属珪酸体		-	-	-	2	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-
イネ属短細胞列		4	-	4	1	10	-	1	1	8	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ススキ属短細胞列		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明組織片		-	-	-	47	91	4	-	12	29	11	2	9	7	10	7	29	6	7	5	8

がやや多くみられ、その他流水性類や小規模な止水域に特徴的な種類も検出される。現段階では、井戸内の環境を指標する種類がどれに相当するか判断がつかない。おそらく、当時の表土や壁面の土壌が崩落して埋積が進んだため、これらに含まれていた珪藻化石が流入したものと考えられる。一方、木本花粉化石では、ブナ属が多く、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、ツガ属などが検出され、これらが後背山地などに

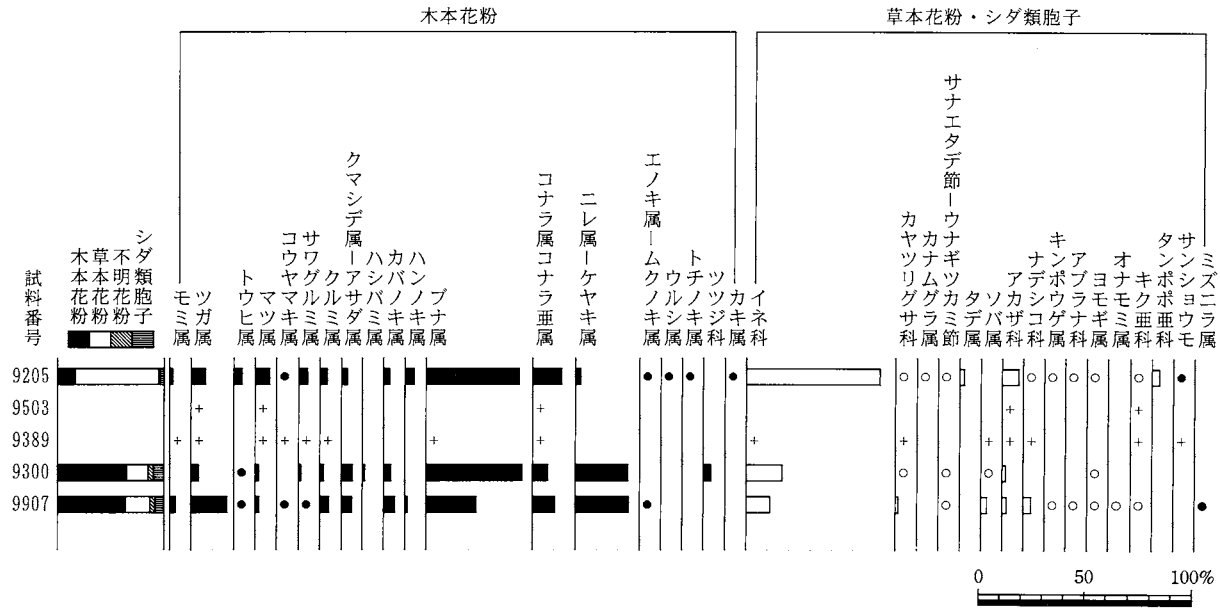


図55 更埴条里遺跡K地区井戸の主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

生育していたと考えられる。先に述べた地点と比較すると、針葉樹花粉が少なくまた優占種がはっきりしているが、これは花粉化石が反映している植生範囲の違いによるものと考えられる。先に述べた地点はいずれも河川埋積物のため、集水域が広く広域的な植生を反映しているが、反対に井戸埋積物の場合、局地性が高く狭い範囲の植生を反映していると考えられる。また、J地区やK地区の基本土層では花粉化石が検出されていないことから、地山から供給された可能性は低く、当時の植生を反映しているものと考えられる。草本花粉化石や植物珪酸体のうち栽培種についてみると、花粉化石ではイネ科、植物珪酸体ではイネ属の多産が目される。植物珪酸体では、イネの類に形成される珪酸体のほか、珪酸体が組織の中で連なっている状態で検出されるものもある。このことから、稲穂や稲藁が集落内に持ち込まれ、利用されていたことが伺われる。これらは生活資材として、さまざまな用途に使われていたと考えられ、これらの一部が井戸の埋土に混入したものと考えられる。

森林植生 平安時代末以降の森林植生変遷は、花粉分析結果を見る限り、近世まで大きく変わっていなかったと考えられる。すなわち、自然堤防上ではタケ類やウシクサ属などからなる草地が大部分で、クルミ、ナラ類、ニレ、ケヤキ、シデ類などの河畔林も成立していたと考えられる。また後背の山地では、ブナ属やナラ類などの広葉樹が主体であったと考えられるが、モミやツガなど温帯針葉樹も分布していたと考えられる。森林植生に大きな変化がみられるのはII層の上部からであり、マツ属の急激な増加が特徴である。これは周辺でマツの二次林や植林が増加したためと見られるが、この傾向は野尻湖周辺の花分析結果（那須、野尻湖花粉グループ、1992など）をはじめ、北信地域において普遍的にみられる傾向である。

栽培植物 III層以降になると、栽培植物の種類数がさらに増えて、ワタやゴマの花分析化石が検出されるようになる。ワタもゴマも暖地の植物であるため、長野盆地ではあまり栽培に適しているとは思えないが、かつて栽培されていた可能性がある。

稲作の様態と土地利用 屋代遺跡群の①区と⑥a区で確認されている水田層は、I層やII層に相当する。これらの共通した傾向としては、富栄養な水域に多産する珪藻化石が多産する点と、イネ属由来の植物珪酸体が非常に多い点あげられる。水質の変化は施肥などの影響が考えられることから、現在に近い様態で水田耕作が行われるようになったと推定される。窪河原遺跡では、III-1.5a層とIII-1.6a層、水田、畑

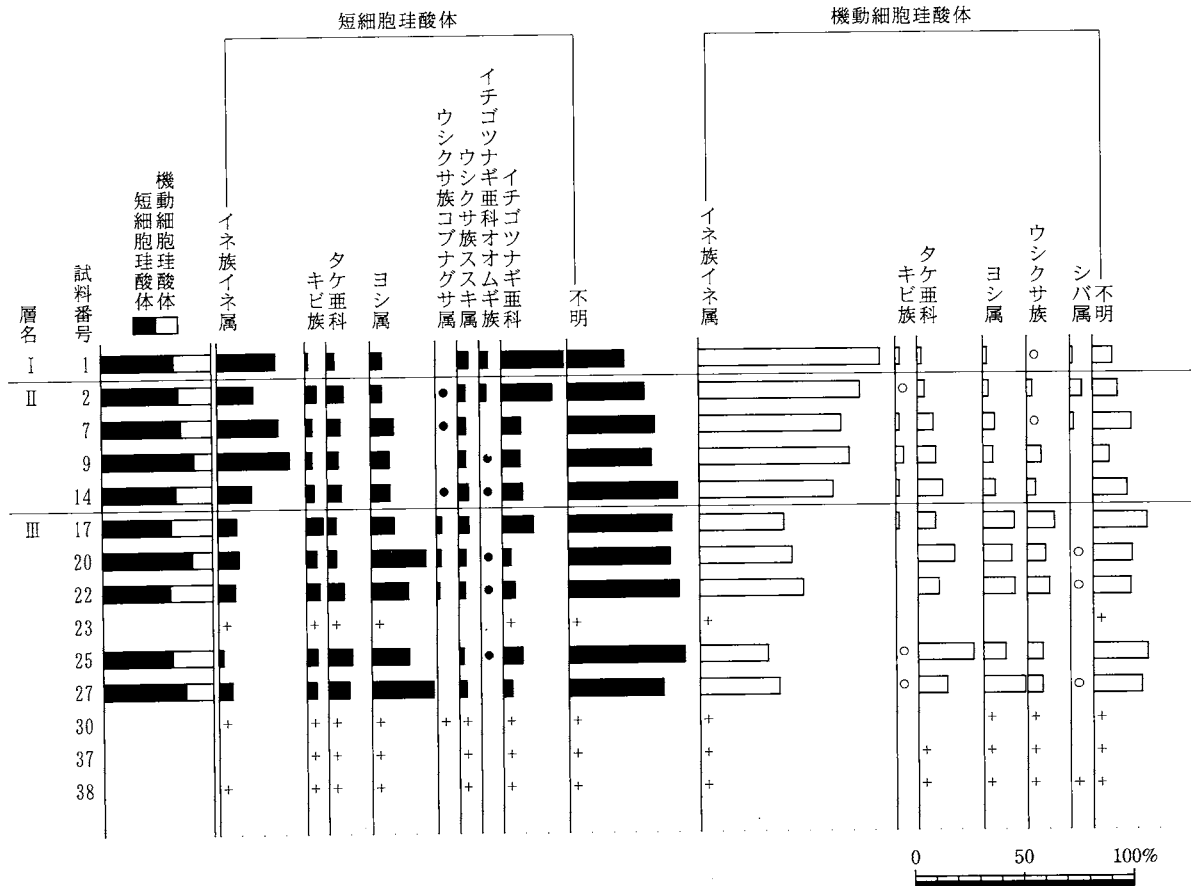


図56 屋代遺跡群①区の植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

作土、III-1.10層中位がIII層に相当する。III-1.10層中位は、イネ属の植物珪酸体が非常に少ない。水田造成以前の窪河原遺跡は、氾濫の影響を強く受けていることから、耕作期間が短いなどの理由でイネ属珪酸体が少なかったものと考えられる。一方、水田造成後の堆積環境をみると、水田層 (III-1.8a層) とIII-1.6a層は洪水堆積物、III-1.5a層と畑作土が乾燥した状況と2つに分かれる。また、イネ属の植物珪酸体をみると、III-1.6a層で多く検出され、III-1.5a層でもやや多い。これらの層位的関係をみると、まず洪水堆積物を利用して水田化され、その後自然堤防II群が安定すると乾田化されたように思われる。イネ属の検出量をみると、III-1.8a層、6a層、5a層の順に多くなっており、時代が新しくなるにつれて、収量や耕作期間が長くなってきたことが伺われる。以上より、水田造成後は氾濫の影響を受けにくくなり、自然堤防が固定化したと考えられる。このため地表面が乾燥状態となり、稲作と併用して畑作も行われるようになったと考えられる。

引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、p.73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophylic and saproxenous taxa, Diatom, 10, p.35-47.
- 那須孝悌・野尻湖花粉グループ 1992 「野尻湖周辺における最終氷期の古植生の古気候変遷」『月刊地球 野尻湖周辺の自然史—最終氷期以降の古環境—』p.50-55、海洋出版株式会社.

第3節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代2・中世・近世の大型植物遺体群

国立歴史民俗博物館 辻 誠一郎

国立歴史民俗博物館 住田 雅和

国立歴史民俗博物館 辻 圭子

はじめに

ここでは『古代1編』に掲載することができなかった、主としてカマドから産出した大型植物遺体群、および中世・近世の主としてカマドから産出した大型植物遺体群の検討の結果を報告する。大型植物遺体群は、発掘調査時に現地で取り上げられたものと、ブロックで採取された堆積物を水洗選別して得られたものとの二通りがある。ここで検討された大型植物遺体群は、基本的には長野県埋蔵文化財センターに保管されているが、一部は国立歴史民俗博物館に標本として登録・保管されている。標本としての有用性から、いずれ一か所で登録・保管することになっている。

なお、発掘調査時に現地で取り上げられた大型植物遺体は集中してまとまっていたものや肉眼で留意されたものに限られ、包含していた堆積物の量は計測されていない。一方、水洗選別に供された堆積物の大半は取り上げた状態の重量および体積が計測されている。

(1) 植物遺体群の産出状況

A. 現地で取り上げられた植物遺体群

現地で取り上げられた植物遺体群の多くはカマド遺構からのものである。大型植物遺体群の組成を表58に示した。時期を問わず、同定できた植物遺体群の内容には、イネをはじめ数種の穀類の炭化胚乳がふつうに含まれるという共通性が認められる。同定できた穀類の分類群と産状・部位は次のようである。イネ：炭化胚乳、炭化穎。コムギ属：炭化胚乳、近似種押麦状炭化胚乳。オオムギ：炭化胚乳。キビ：炭化胚乳。このほか穀類であるかどうか不明であるが、イネ科炭化胚乳もカマドや覆土からまれに産出した。これら以外の分類群の種類は少なく、イネ科のエノコログサ属炭化穎、カヤツリグサ属炭化果実、ホタルイ属果実、ナデシコ科種子、カナムグラ果実、オナモミ炭化偽果、タデ属炭化胚乳・果実、アカザ属種子、アブラナ科種子、マメ科炭化種子といった草本類と、木本類のサルナシ炭化種子、スモモ核、サクラ属核であった。屋代遺跡群①区SD23の流路内のみ、これら以外にギシギシ属果実、ヤナギタデ果実、ヒシ果実、オニグルミ核、モモ核、バラ科核、トチノキ種子といった多種類の草本・木本類が産出した。これらのうちマメ科炭化種子は、更埴条里遺跡K地区SB9015aの3試料からおびただしい量が採取された。いずれも集中してひとまとまりになっていたものである。

植物遺体群の組成からは、少なくともイネ、コムギ属、オオムギ、キビといった穀類、およびマメ科(後述するようにササゲにもっとも近似する)は食料として栽培されていた分類群であったと見られる。これらのほとんどは炭化した状態で産出しており、カマドにくべられた稲・麦藁など植物体本体に付着していたためか、何らかの意図的な行為によって果実そのものがくべられたため、燃焼による炭化で残りえたものであろう。カマド内の残留物の植物珪酸体の検討によって藁が一緒にくべられたかどうかは明らかになるだろう。

マメ科炭化種子についてはあとで詳しく記載するが、取り上げられた量が乾燥総量で約300gにも達し、一度にこれだけの炭化種子が集中して産出したのは珍しい。現時点ではササゲにもっとも近似するとして

表58 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 現地取り上げ大型植物遺体産出表

遺 跡	産出遺構	産出地点	時 期	産出した大型植物遺体
更埴条里 遺跡	SB9069	カマド内	古代6期	イネ科炭化類S(34)
	SB9070	カマド炭化	古代6期	ナデシコ科種子S(53)
	SB9073	覆土	古代6期	コムギ属炭化胚乳S(35) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(35) マメ科炭化種子S(35)
	SB9078	カマド前床	古代6期	サルナシ炭化種子S(39)
	SB9071	カマド炭化	古代6～7期	イネ炭化胚乳S(49) エノコログサ属炭化類S(48)
	SB9071	掘方	古代6～7期	イネ炭化胚乳M(20) イネ炭化籾S(20) コムギ属炭化胚乳S(20)
	SB9071	P1	古代6～7期	イネ炭化胚乳S(19)
	SB9071	—	古代6～7期	イネ炭化胚乳S(12) タデ属炭化果実S(12)
	SB9072	カマド炭	古代7期前半	イネ科炭化胚乳S(37) イネ炭化胚乳S(37)
	SB9084	床面下掘方	古代7期前半	イネ炭化胚乳S(24) イネ炭化籾S(24) カヤツリグサ属炭化果実S(24)
	SK9930	曲物 No.2	古代8期以前	スモモS(18)
	SB9050	カマド前灰	古代8期前半	不明種子S(66)
	SB9037	カマド内炭	古代8期前半	マメ科炭化種子S(32)
	SK9218	2層	—	イネ炭化胚乳S(30) コムギ属炭化胚乳S(30) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(30)
	SK9238	下部より上	古墳8期以降	イネ炭化胚乳S(22)
	SK9256	井戸	古代8期後半 ～15期	イネ炭化胚乳S(8,9) イネ炭化籾S(8,9) キビ炭化胚乳S(8) オナモミ炭化偽実S(7) コムギ属炭化胚乳M(8) マメ科炭化種子S(8)
	SK9256	7層下	古代8期後半 ～15期	イネ炭化胚乳S(6) コムギ属炭化胚乳S(6,61,62) オオムギ炭化胚乳S(62)
	SK9256	7層	古代8期後半 ～15期	イネ炭化胚乳S(28) コムギ属炭化胚乳M(28) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(28)
	SK9256	—	古代8期後半 ～15期	コムギ属炭化胚乳S(26,27)
	SD702	—	近世	スモモS(17)
	SK9203	1層	古代8期後半 ～15期	イネ炭化胚乳S(64) キビ炭化胚乳M(64)
	SK9259	—	古代8期	イネ炭化胚乳S(6) コムギ属炭化胚乳S(1,6)
	SB1002	カマド燃焼	古代9期	コムギ属炭化胚乳M(2,3) タデ属炭化胚乳S(51) 不明炭化種子S(38)
	SB1002	覆土③	古代9期	イネ科炭化胚乳S(29) イネ炭化胚乳S(29) コムギ属炭化胚乳S(4,29) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(29) オオムギ炭化胚乳S(29)
	SB1003	カマド灰層	古代9期	コムギ属炭化胚乳S(36) タデ属果実S(52)
	SB1003	カマド火床	古代9期	イネ炭化胚乳S(44) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(46) ホタルイ属S(45)
	SB1003	カマド内	古代9期	イネ炭化胚乳S(42) イネ炭化籾S(42) アカザ属種子M(40,42) アブラナ科種子S(42) 不明炭化種子S(42)
	SB9083	カマド火床	古代10期	不明炭化種子(31)
	SB9015a	—	古代15期	イネ炭化胚乳M(11,13) コムギ属炭化胚乳S(13) 不明炭化胚乳S(11) マメ科炭化種子M(53,59,60,70.)
	SK9210	—	中世	イネ炭化胚乳S(5) コムギ属炭化胚乳S(5,10,14,15) マメ科炭化種子S(10) 不明炭化果実S(14,15)
	SK9220	1層	13世紀	イネ炭化胚乳S(21) コムギ属炭化胚乳S(58) マメ科炭化種子S(21)
	SK9220	2層	13世紀	イネ科炭化胚乳S(25) イネ炭化胚乳S(25,55) コムギ属近似種押麦状炭化胚乳S(25) マメ科炭化種子S(25)
屋代 遺跡群	SB74	—	古代8期前半	イネ炭化胚乳S(85)
	SB5006	骨集中	古代6期	カナムグラ果実S(82)
	SD23	流路	中世	コムギ炭化胚乳S(78) オニグルミ核S(ク762,763,K18) ヒメクルミ核S(ク768) ギンギン属S(79) ヤナギタデ果実S(80) パラ科核S(84) モモ核M(略) トチノキ種子S(68,69,70,71,72,73) ヒシ果実S(74)
	SK6116	井戸	中世	炭化モモ核S(略) モモ核S(略)
	⑤b区 包含層	—	—	サクラ属核S(75)

産出数が10以下ならS、以上ならMと記載。()内の番号は整理番号

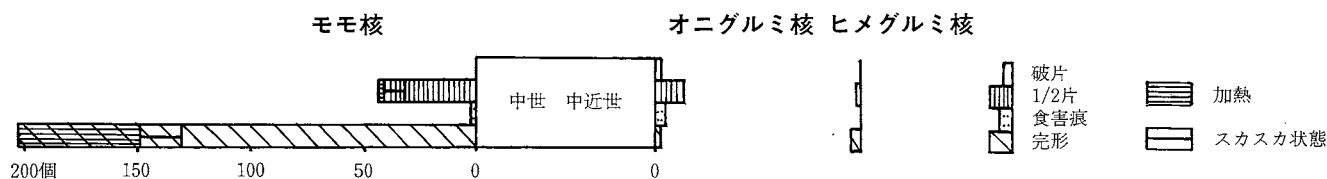


図57 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近世のモモ核とクルミ属核の産出状況

おきたいが、収穫物が偶然か意図的な行為で焼かれたものとみなすことができる。

古代では著しい産出量であったモモ核とクルミ属核は、屋代遺跡群①区SD23（旧五十里川）の流路内のみから多数産出している。その内訳は図57に示した通りである。また、主要なものの形態を図59に示した。中・近世のモモ核は総数247個に達し、完形で加熱を受けたもの54個、軽くスカスカの状態になっているもの18個、2分の1に割れているもの43個のうち加熱を受けたもの3個と軽くスカスカの状態のもの9個が含まれる。これらのうち軽くスカスカの状態になっているものは、その原因は不明であるが、古代においてはあまり見られなかった産出状況である。クルミ属はオニグルミとヒメグルミに同定される。ヒメグルミは古代では産出しなかったものである。

B. 水洗選別で得られた植物遺体群

現地で採取した堆積物試料はそれぞれ重量・体積を計測したのち、0.25mmのふるいで水洗選別を行った。

選別した植物遺体は実体顕微鏡下で観察され、同定された。

同定された大型植物遺体群の組成を表59に示した。現地で取り上げられた植物遺体群と同様に、主としてカマドからの大型植物遺体群であるため、燃焼によって炭化した遺体が多いことが特徴である。組成では、イネとコムギ属の炭化胚乳をふつうに含むこと、アカザ属とタデ属の炭化した種子・果実をふつうに含むことが共通点としてあげられる。イネとコムギ属以外の穀類であるキビ、アワ、オオムギも産出するがまれである。

現地で採取された大型植物遺体群と異なる点は、穀類やマメ科のように栽培されたとみられる植物群外に、人為的な攪乱が著しい場所に多いいわゆる雑草あるいは人里植物とされる植物群の種子・果実が多いことである。これは水洗選別によって植物遺体群を抽出したためで、肉眼では容易に見つけ出せない小さな種子・果実が検出されたことによるだろう。とくにカヤツリグサ科のホタルイ属やスゲ属、タデ属の数種、ナデシコ科の産出は目立っている。おそらく住居周辺の植生を構成していた植物群に由来するものと考えられ、居住域とその周辺が人為によって攪乱を受けた景観であったことを物語っていると言えよう。ただ、タデ属やアカザ属、ヒユ科植物の種子・果実は穀類と同様に燃焼を受けて炭化した状態で産出しており、また食料となりうるもので、生活文化を考える上では利用植物の範疇に入れて考慮しておく必要があるだろう。

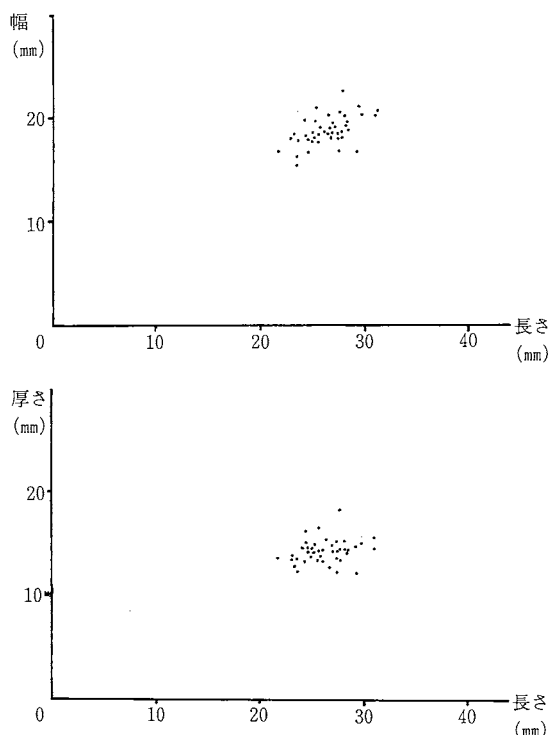
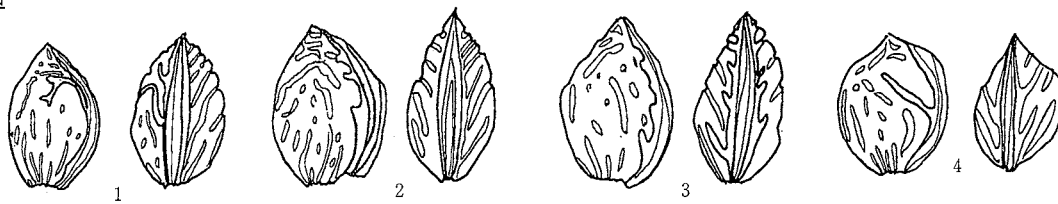


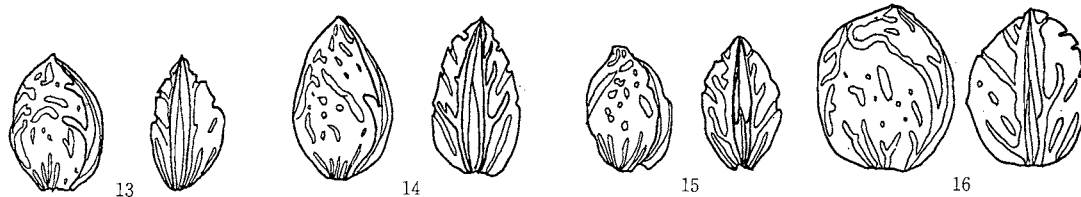
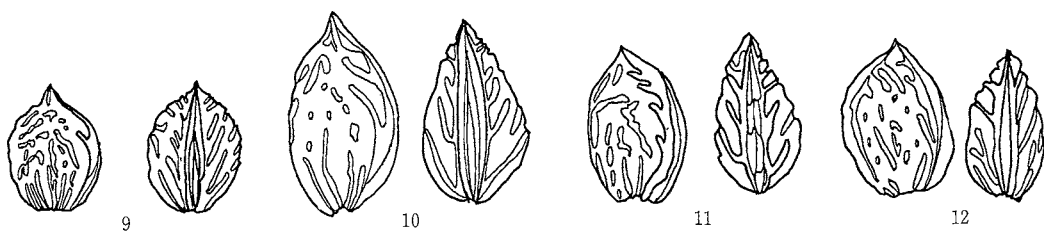
図58 屋代遺跡群 古代2・中世のモモ核のサイズ分布 (SD23、SK6116)

モモ核

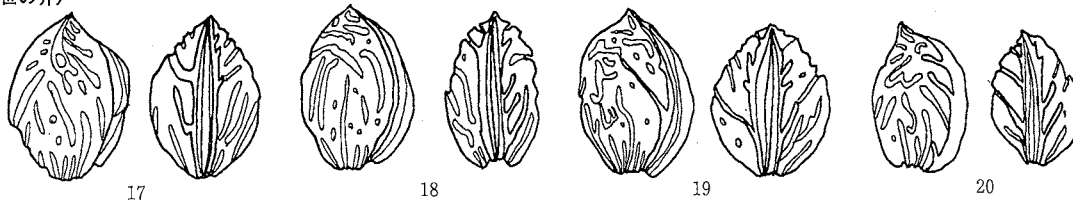
中世



中近世

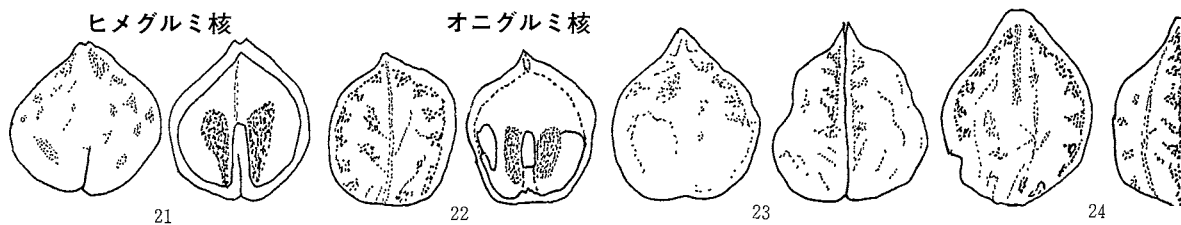


中世の井戸



ヒメグルミ核

オニグルミ核



10mm

図59 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近世のモモ核とクルミ属核の概形

(2) 注目すべき植物群

A. コムギ属 (図60-9~14)

炭化胚乳が産出した。形態的に異なる2つの型と、コムギ属近似種押麦状炭化胚乳が識別された。

A型 (図60-9~11)：長さ3.4~5mmで、短い個体では側面観が短楕円形、長い個体では楕円形である。断面の概形は円形で、全体の概形は円柱形である短い個体の幅は比較的大きく、概形は短い円柱形となる。基部は斜めに60°ほどの角度で切れ、円形の胚の跡が残る。これは胚乳の6割ほどの径を有し、比較的深いクレーター状を呈する。胚跡の基部から先端までは明瞭な溝が形成される。溝の左右の断面は円弧状である。

B型 (図60-12、13)：長さは4~7mmで、側面観はやや四角形状の長卵形である。横断面は凸レンズ形、縦断面は楕円形である。基部には長楕円形の胚の跡がある。これは胚乳の幅の3割強の幅をもつ。胚跡の裏面には基部から先端までやや不明瞭な溝が形成される。溝の部分のみが円弧状にえぐられる。

コムギ属近似種押麦状炭化胚乳 (図60-14)：長さは5~5.4mmほどの大型の炭化胚乳である。大きさや胚跡の形状から上述のコムギ属B型であると思われる。側面観は短楕円形で、厚さはほぼ均質である。縁は押しつぶされたためにできたかのような不規則な波状の突起をもつ個体である。厚さが均質であること、それが変形による可能性があることから、加工されたコムギ属の種子であることが示唆される。

B. オオムギ (図61-15~17)

炭化胚乳が産出した。長さ5.1~6.8mmで、側面観では先端が尖り、基部はやや平坦な卵形ないし短卵形である。横断面は凸レンズ形、縦断面は凸レンズ形~涙滴形である。基部には楕円形の胚の跡がある。その幅は胚乳の幅の4分の1から5分の1で、浅いクレーター状である。胚跡の裏面には基部から先端まで溝が形成される。この溝はやや幅広く、その左右も溝に向かって浅いV字谷状となる。

C. イネ (図60-3~8)

炭化胚乳がふつうに、また炭化穎がまれに産出した。炭化胚乳は、側面観が楕円ないし短楕円形の短粒形で、まれに長楕円形の長粒形の個体が認められる。長さは3~7mmで、その大半は4~5mmである。

D. キビ (図61-18)

炭化胚乳が産出した。概形は球形で、長さ1.9~2.4mmで、先端がやや尖る。基部に短楕円形の胚の跡が残り、その周囲はU字状の浅く窪む溝となる。

E. イネ科 (図60-1、2)

炭化胚乳がふつうに、また炭化穎がまれに産出した。大きさの異なる類型が含まれる。そのうちやや大型で棒状の個体は、横断面が円形で、概形はやや反り返った棒状を呈し、長さは3.7~5mmである。全体に縦方向に緩い稜が走る。基部が斜めに70°ほどの角度で切れ、そこに胚の跡が残る。胚は胚乳の横断面とほぼ同じ大きさであったと類推される。

F. マメ科 (図61-21~28)

多量の炭化種子が古代15期の竪穴建物跡(更埴条里遺跡K地区SB9015a—図版93参照)から産出した。床面の3か所から取り上げられた炭化種子の総量と大きさは次の通りである。試料No.59、乾燥総量180g、長さ4~9(平均5.8)mm、幅2~5(平均3.1)mm。試料No.60、乾燥総量72g、長さ4~9(平均6.0)mm、幅3~9(平均4.0)mm。試料No.79、乾燥総量36g、長さ5~8(平均6.7)mm、幅4~5(平均4.3)mm。これらの内、虫食いの穴が認められるものも多く含まれていた。

今回産出した炭化種子には次の4型が認められた。

A型 (図61-21、22)：長さは6mm以上で、腎臓型。臍の長さは粒長の2分の1以上である。すべてが炭化しており、種皮の最外層が残っているものと残っていないものがある。種皮の最外層の表面は円形状につ

ながる網目状紋を呈する。子葉は中央にまで達する。

B型 (図61-23、24)：長さは6 mm以上で、俵型。臍が片方に偏る。臍の部分がほとんど残っていない種子の臍状部では発芽口の穴が見られる。すべてが炭化しており、種皮の表面が横に裂けて筋状を呈する。子葉は中央にまで達する。

C型 (図61-25、26)：長さは6 mm以下で、腎臓型。臍の長さは粒長の4分の1程度で、すべてが炭化しており、外側に盛り上がる。種皮の最外層の表面はやや光沢があり、横方向に伸びる網状紋を呈する。最外層がはがれたものの表面は、円形状につながる網目状紋を呈する。子葉は中央まで達する。

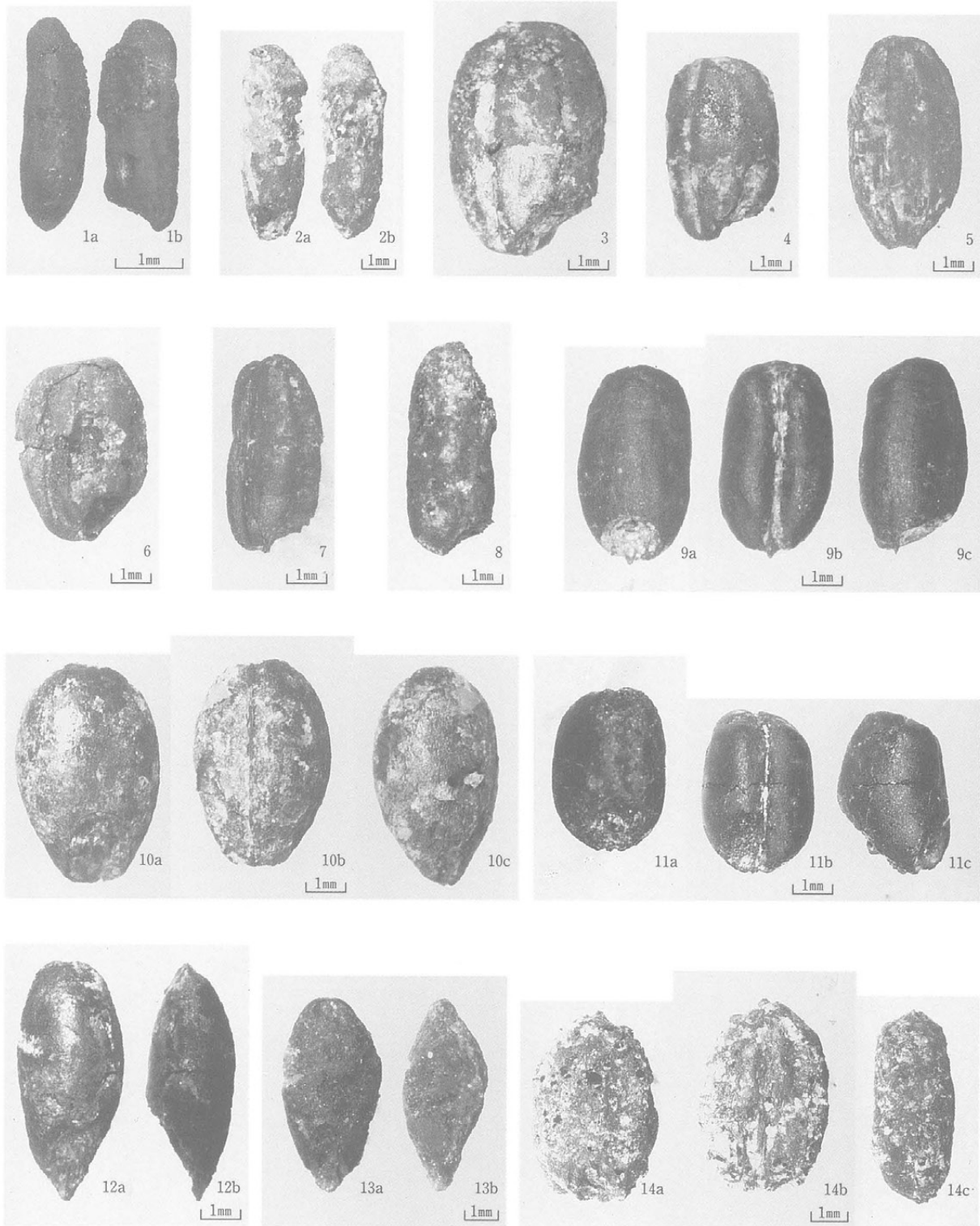
D型 (図61-27、28)：長さは6 mm以下で、俵型。臍は片方に偏る。すべてが炭化しており、種皮の表面は横方向に裂けて筋状を呈する。子葉は中央にまで達する。

備考：マメ科種子は燃焼によって変形し、特に乾燥状態より水でふやかした状態の種子の変形は著しい。形態的に近似するツルマメ、ケツルアズキ、アズキ、ササゲ、ダイズのいずれについても大きな変形が認められる。上記のような4型の変異は同一種内で確認される。したがって、産出した炭化種子は単一種の可能性が高い。また、種子の大きさ、臍の形、種皮表面の彫紋、子葉の形（種子中央にまで達する）の比較から、アズキ属のササゲに最も近似する。

マメ科種子は日本各地の縄文時代以降の遺跡から多数の産出記録がある。たとえば、梅本・森脇（1983）によって鳥浜貝塚の縄文時代前期遺物包含層からケツルアズキとリョクトウが、また、西田（1975）によって桑飼下遺跡の縄文後期遺物包含層からアズキが報告されている。前田（1987）は記録されているマメ科種子全般について考察を行っている。最近、松本（1994）は鳥浜貝塚と桑飼下遺跡から産したマメ科種子を再検討した際、マメ科種子は形状、臍の形、種皮などによってマメ科として同定されやすいものの、乾燥しただけの種子、水を含ませた種子、煮た種子それぞれを燃焼によって炭化させたものはそれぞれ変化の仕方が異なることを示した。その上で、鳥浜貝塚から産したマメ科種子をヤブツルアズキに、また桑飼下遺跡から産したマメ科種子をアズキに同定している。マメ科種子の同定にはさらに形態学的な基礎研究が望まれ、これまでに報告された遺跡出土のマメ科炭化種子を合わせて慎重な再検討がなされることを期待したい。

引用文献

- 前田和美 1987 『マメと人間—その1万年の歴史』379頁 古今書院
- 松本 豪 1994 「鳥浜貝塚、桑飼下遺跡出土のマメ類について」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号 93-97頁 筑波大学歴史・人類学系
- 西田正規 1975 「植物種子の同定」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』244-249頁 平安博物館
- 梅本光一郎・森脇 勉 1983 「縄文期マメ科種子の鑑定—鳥浜貝塚出土のリョクトウ類」『鳥浜貝塚 1981年・1982年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3』42-46頁 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館



1a・b. イネ科炭化胚乳 No.17 SB5064カマド脇
 2a・b. イネ科炭化胚乳 No.37
 3. イネ炭化胚乳 (10)BYS㉔b SB3031床下焼土
 4. イネ炭化胚乳 No.13
 5. イネ炭化胚乳 No.20
 6. イネ炭化胚乳 No.25
 7. イネ炭化胚乳 No.26
 8. イネ炭化胚乳 No.42

9a～c. コムギ属A型炭化胚乳 (27)BYS㉔b SB4004覆土
 10a～c. コムギ属A型炭化胚乳 No.35
 11a～c. コムギ属A型炭化胚乳 (27)BYS㉔b SB4004カマド横施設
 12a・b. コムギ属B型炭化胚乳 No.3
 13a・b. コムギ属B型炭化胚乳 No.2
 14a～c. コムギ属近似種押麦状炭化胚乳 No.46

図60 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近世のモモ・クルミ類以外の大型植物遺体 1



(21~28)

- 15a~c, 16a~c, オオムギ炭化胚乳 No.62
 17a~c, オオムギ炭化胚乳 No.29
 18, キビ炭化胚乳 No.64
 19, アカザ属炭化種子 No.40
 20, アブラナ科炭化種子 No.42
 21a・b, 22, 23a・b, 24, 25a・b, 26,
 マメ科炭化種子 No.60 (SB9015a)
 27a・b, 28, マメ科炭化種子 No.59 (SB9015a)

図61 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近世のモモ・クルミ類以外の大型植物遺体 2

第4節 木製品・炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦・田中義文

試料 試料は、木製品や自然木など88点（試料番号66～70、73～144、149～168）と、炭化材9点である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表60、61に記した。

樹種同定の方法 各木製品や自然木から、5mm角程度のブロックを採取して同定用試料としたが、完形品などブロックの採取が困難な場合には、木製品から直接切片を作成した。ブロック試料は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柂目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。これらの切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

樹種同定結果 木製品および自然木の樹種同定結果を表60に、炭化材の樹種同定結果を表61に示す。保存状態が悪いため種類の同定に至らなかった試料については、観察できた範囲で結果を記した。その他の試料は、針葉樹9種類（モミ属・ツガ属・トウヒ属バラモミ節・トウヒ属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・カヤ）と広葉樹10種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ケヤキ・ヤマグワ・イスノキ・ヌルデ・トチノキ・チドリノキ・タラノキ）に同定された。なお、紙面の関係から、木材組織の記載および写真図版は割愛した。

木製品の用材 木製品は、曲物（側板・底板）・井戸枠・箸・下駄、・齋串・刀子柄・折敷・切屑等に分類される。樹種を見ると、多くの製品で針葉樹材の利用が目立ち、とくにサワラの利用が多い。同様の結果は、第2水田対応層～第5水田対応層から出土した木製品の樹種同定結果でも認められている（高橋・辻本、1999）。これらの結果から、引き続きサワラを中心とした針葉樹材が様々な用途に用いられていたことが推定される。

曲物の用材 曲物では、サワラとヒノキを中心とし、スギ、ツガ属、種類不明の針葉樹が各1点認められる。このことから、基本的にはヒノキ属（ヒノキ・サワラ）を選択していたことが推定される。曲物のうち、側板8例は、全て底板と一緒に出土している。種類構成を見ると、底板と側板の2点ともサワラが利用された例が4例、底板の樹種は一定ではないが側板がヒノキとなる例が3例、底板がヒノキ、側板がサワラとなる例が1例であった。

曲物は剥ぎ板を作り、それを輪にして樹皮などで止めて製作する。したがって、曲物の材としては割裂性が高く板材が作りやすいこと、輪にするときの曲げに対して強いことが必要である。民俗事例では、トウヒが最も適し、次いでヒノキ、スギ、シラベ、ヒメコマツ、サワラ、ヒバとされている（成田、1996）。遺跡からの出土例を見ると、江戸遺跡などでトウヒ属の出土例が知られているが、全体的にはヒノキ属の利用が多い（島地・伊東、1988；伊東、1991；松葉、1997）。このことから、古くはヒノキが最も適材とされ、本遺跡でもヒノキ属を主として利用していたことが推定される。また、民俗事例ではヒノキとサワラを区別しているが、今回の結果を見る限りでは明確な区別は見られない。ただし、ヒノキ属以外の種類は、全て底板に認められていることから、底板にのみ選択されていた可能性がある。

井戸枠の用材 井戸枠は、中世、近世、時期不明に分かれる。樹種同定結果を見ると、中世ではツガ属、ヒノキ、サワラ、近世は3点全てがモミ属、時期不明にはサワラ、モミ属、トウヒ属、種類不明の針葉樹、ヤマグワが見られた。種類不明も含めて、ほとんどが針葉樹材であり、広葉樹はヤマグワ1点のみであっ

表60 木製品・自然木の樹種同定結果

試料番号	報告番号	台帳番号	遺跡	仮地区	遺構	器種	時期	樹種
115		308	更埴	K	SK9282	曲物底板	古代2	サワラ
116		308	更埴	K	SK9282	曲物側板	古代2	サワラ
127	1	270	更埴	K	SK9282	曲物底板	古代2	サワラ
136	32	20075	屋代	④a	SK4513	井戸枠材	中世	モミ属
133	33	20069	屋代	④a	SK4513	井戸枠材	中世	モミ属
135	34	20074	屋代	④a	SK4513	井戸枠材	中世	モミ属
132	43	20071	屋代	④c	SK4201	井戸枠材	中世	ヒノキ
134	44	20070	屋代	④c	SK4201	井戸枠材	中世	サワラ
131		20068	屋代	④b	SK4040	井戸枠材	中世	ツガ属
140		222	更埴	K	SK9205	井戸枠材	中世	トウヒ属
141		20076	屋代	⑤a	SK6118	井戸枠材	中世	サワラ
142		20077	屋代	④d	SK4222	井戸枠材	中世	サワラ
143		20078	屋代	④c	SK4201	井戸枠材	中世	サワラ
144		20079	屋代	④c	SK4201	井戸枠材	中世	モミ属
137		249	更埴	K	SK9205	井戸枠材	中世	ツガ属
86	18	20012	屋代	①	SD23	下駄	中世	トチノキ
112	31	20059	屋代	①	SK65	曲物柄杓側板	中世	ヒノキ
111	31	20059	屋代	①	SK65	曲物柄杓底板	中世	針葉樹
124	36	20067	屋代	④b	SK4040	曲物側板	中世	サワラ
120		20057	屋代	⑤a	SK4204	曲物側板	中世	サワラ
93	1	218	更埴	K	SK9205	曲物底板	中世	ヒノキ
99	2	166	更埴	K	SK9205	曲物底板	中世	サワラ
92	3	220	更埴	K	SK9205	曲物底板	中世	サワラ
79	15	20003	屋代	①	SD23	曲物底板	中世	針葉樹
103	35	20018	屋代	④b	SK4002	曲物底板	中世	サワラ
123	36	20067	屋代	④b	SK4040	曲物底板	中世	サワラ
87	37	20016	屋代	④b	SK4040	曲物底板	中世	ヒノキ
102	47	20044	屋代	④c	SK4204	曲物底板	中世	サワラ
126	48	20058	屋代	④c	SK4399	曲物底板	中世	ヒノキ
74	50	20042	屋代	④d	SK4230	曲物底板	中世	ヒノキ
75	51	20049	屋代	④d	SK4424	曲物底板	中世	サワラ
104	53	20045	屋代	⑤a	SK6232	曲物底板	中世	サワラ
90	54	20029	屋代	⑤a	SK6232	曲物底板	中世	ヒノキ
128	55	20031	屋代	⑤b	SK490	曲物底板	中世	ツガ属
91		20036	屋代	⑤a	SK4204	曲物底板	中世	ヒノキ
119		20057	屋代	⑤a	SK4204	曲物底板	中世	サワラ
78	12	20009	屋代	①	SD23	斎串	中世	モミ属
108	4	201	更埴	K	SK9205	皿	中世	針葉樹
100	40	20046	屋代	④c	SK4201	折敷	中世	サワラ
76	38	20024	屋代	④b	SK4040	草履	中世	樹皮
68	14	20053	屋代	①	SD23	刀子柄	中世	ヤナギ属
67	49	20056	屋代	④d	SK4230	刀子柄	中世	広葉樹(散孔材)
82	16	20010	屋代	①	SD23	箸	中世	サワラ
85	41	20039	屋代	④c	SK4201	箸	中世	サワラ
66	11	20055	屋代	①	SD23	斎串	中世	針葉樹
130	19	20020	屋代	①	SD23?	漆蓋?	中世	サワラ
84	13	20002	屋代	①	SD23	柄	中世	カヤ
69	39	20054	屋代	④c	SK4201	鎌柄	中世	サワラ
107	8	239	更埴	K	SK9205	切屑	中世	ヤマグワ
80	45	20073	屋代	④c	SK4201	切屑	中世	サワラ
81	46	20072	屋代	④c	SK4201	切屑	中世	サワラ
95	6	205	更埴	K	SK9205	木札状木製品	中世	ヒノキ
98	21	20062	屋代	①	SD23	木札状木製品	中世	サワラ
97	25	20061	屋代	①	SD23	木札状木製品	中世	サワラ
96	29	20060	屋代	①	SD23	木札状木製品	中世	ヒノキ
106	30	20064	屋代	①	SD23	木札状木製品	中世	スギ
83	23	20022	屋代	①	SD23	雑具	中世	サワラ
77	24	20004	屋代	①	SD23	雑具	中世	サワラ
105	20	20007	屋代	①	SD23	部材	中世	カヤ
94	5	217	更埴	K	SK9205	棒状木製品	中世	ケヤキ
73	52	20027	屋代	⑤a	SK6180	曲物底板	中世	サワラ
129		20013	屋代	①	SD23	曲物底板	中世	サワラ
109	3	501	更埴	C	SK206	曲物底板	近世	サワラ
110	3	501	更埴	C	SK206	曲物側板	近世	ヒノキ
117	2	98	更埴	C	SK206	曲物底板	近世	ヒノキ
118	2	98	更埴	C	SK206	曲物側板	近世	サワラ
121	1	116	更埴	C	SK206	曲物底板	近世	サワラ
122	1	116	更埴	C	SK206	曲物側板	近世	サワラ
149		2	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
150		5	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
151		7	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
152		14	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
153		19	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	ヤナギ属
154		20	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	チドリノキ
155		22	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	サワラ
156		23	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
157		24	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	チドリノキ
158		25	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層上部	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
159		27	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	広葉樹(散孔材)
160		29	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	ツガ属
161		30	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	ヤナギ属
162		36	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	チドリノキ
163		43	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	モミ属
164		46	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	トウヒ属バラモミ節
165		47	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
166		48	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	ツガ属
167		49	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	コナラ属コナラ亜属コナラ節
168		50	窪河原	H6	Ⅲ-1.10層中位	自然木	中世	チドリノキ

た。この結果から、針葉樹材を選択的に利用していたことが指摘できる。時期別に見ると、中世と近世で種類構成に違いが認められることから、時期によって用材が異なっていた可能性がある。しかし、点数が少ないため、詳細は不明である。

針葉樹材が多く利用されている背景には、木理が通直で割裂性の高い種類が多く、加工が容易であること、比較的多いサワラやヒノキは耐水性も高いこと等が挙げられる。

その他の木製品の用材 曲物と井戸枠を除く木製品は、点数が少ないが、針葉樹材、とくにサワラの利用が多い点では、曲物や井戸枠の用材と一致する。広葉樹材の利用を見ると、刀子柄のヤナギ属と散孔材、下駄のトチノキ、棒状品のケヤキと、前述の井戸枠のヤマグワ5点のみである。このうち、刀子柄は同定を行った2点とも広葉樹材であったことから、広葉樹材が選択されていた可能性がある。

自然木の樹種 III-1.10層上部の自然木にはヤナギ属、サワラ、チドリノキ、III-1.10層中位の自然木にはツガ属、ヤナギ属、チドリノキ、モミ属、バラモミ節、クヌギ節、コナラ節が認められた。ヤナギ属とチドリノキは、周辺の河道沿いなどに生育していたことが推定される。一方、ツガ属、モミ属、バラモミ節などは、周辺の山地斜面などに生育していたことが推定される。これらの針葉樹については、木製品にも多数利用されているのが確認されていることから、伐採木などの可能性も考えられる。クヌギ節、コナラ節は、花粉分析結果から、自然堤防や山地の林縁部などに生育していた可能性が指摘されている（田中・辻本、1999）。

炭化材の樹種 炭化材は中世の建跡から出土したものが主であり、構築材などの一部と考えられる。樹種はクヌギ節、コナラ節、ヌルデ、タラノキ、ケヤキ、ヒノキ属が見られ、広葉樹材の利用が目立つ。この結果は、本遺跡の7世紀末の住居構築材にケンボナシ属が多い結果（高橋・辻本、1999）とは異なる。しかし、SB101やSB1004で認められたクヌギ節やコナラ節は、佐久盆地で行われた古代の住居構築材の樹種同定で多数の確認例があり（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994、1995など）、今回の結果とも一致する。これらの構築材は、花粉分析の結果（田中・辻本、1999）を考慮すれば、遺跡周辺に生育していた種類を利用したと考えられる。

表61 古代・中世の炭化材樹種同定結果

遺跡	仮地区	遺構	出土位置・試料名	時期	樹種
更埴	J	SB1004	No. 1	9期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
更埴	J	SB1004	No. 2	9期	ヌルデ
更埴					草本類
更埴	J	SB1004	No. 3	9期	タラノキ
更埴	J	SB1004	No. 4	9期	タラノキ
屋代	⑥	SX7032	I-11, 16炭化物	古代	草本類
屋代	②	SB101		14期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
屋代	②	SB101		14期	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
窪河原	H 2	SB1	炭化物・種子	中世	ヒノキ属

引用文献

伊東隆夫 1991 「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II」『木材研究・資料』26 p.91-189、京都大学木材研究所。

川村恵洋 1983 「曾根遺跡出土木材の識別」『新大演報』16 p.75-82。

松葉礼子 1997 「溜池遺跡出土木製品の樹種同定」『一地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書7-2-溜池遺跡 第II分冊』

第9章 微化石と動・植物遺体の分析

p.1-30、帝都高速度交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会。

成田壽一郎 1996 『曲物・籠物』205p、理工学社。

パリノ・サーヴェイ株式会社 1993 「自然科学分析（花粉・材）」『いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊 久世原館・番匠地遺跡 第I篇 一概要・附篇一』p.74-88、福島県いわき市・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団。

パリノ・サーヴェイ株式会社 1994 「過去の植物利用について」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 東下原。大下原・竹花・舟窪・大塚原 一長野県小諸市東下原。大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書一』p.613-624、小諸市教育委員会。

パリノ・サーヴェイ株式会社 1995 「第1号住居址出土の炭化材の樹種」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集 三子塚遺跡群 十石坂上遺跡 一長野県小諸市十石坂上遺跡発掘調査報告書一』p.12-13、小諸市教育委員会。

高橋 敦・辻本崇夫 1999 「木製品・自然木、炭化材の樹種」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 一更埴市内その5 一 更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡） 一古代1編一 本文』p.333-337、日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター。

田中義文・辻本崇夫 1999 「古代の環境と土地利用」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 一更埴市内その5 一 更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡） 一古代1編一 本文』p.294-299、日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター。

島地 謙・伊東隆夫編 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』296p、雄山閣。

第5節 屋代遺跡群・窪河原遺跡出土貝類遺存体

千歳サケのふるさと館 高橋 理

屋代遺跡群および窪河原遺跡の古代後半から中世の遺構より、貝類が出土している（表62・63）。出土した貝類は次のとおりである。

古異歯目 Paleoheterodonta

カワシンジュガイ科 Margaritiferidae

カワシンジュガイ *Margaritifera laevis*

イシガイ科 Unionidae

イシガイ *Unio douglasiae*

ほかイシガイ科の大型種

屋代遺跡群・窪河原遺跡ともに古異歯目のイシガイあるいはカワシンジュガイと同定された。常に流水のある環境であったことを示していると考えられる。

表62 屋代遺跡群出土貝類

番号	遺跡名	仮地区	時期	遺構	出土地点	出土動物遺存体	部位	数量	備考
40	屋代	①a	中世	S D 2 3	旧五十里川	古異歯目 Paleoheterodonta spp.	殻皮	3	

表63 窪河原遺跡出土貝類

番号	遺跡名	仮地区	時期	遺構	出土地点	出土動物遺存体	部位	数量	備考
46	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	イシガイ科 Unionidae sp. 大型種	右? 殻皮	1	
48	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	カワシンジュガイ <i>Margaritifera laevis</i> ?	右 殻皮	1	
49	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	カワシンジュガイ <i>Margaritifera laevis</i> ?	左右 殻皮	1	
50	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	カワシンジュガイ <i>Margaritifera laevis</i> ?	右 殻皮	1	
55	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	イシガイ科 Unionidae sp. 大型種	左? 殻皮一部	1	
56	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 1層	イシガイ <i>Unio douglasiae</i>	右 殻皮	1	左殻皮もあるか?
45	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 0層	イシガイ <i>Unio douglasiae</i>	右 殻皮	1	同一個体?
45	窪河原	H 6	中世		Ⅲ-1. 1 0層	イシガイ <i>Unio douglasiae</i>	左 殻皮	1	

参考文献

清水義雄ほか 1997 「魚介類」『見る知る 信州の自然大百科』p.196-213 郷土出版社

波部忠重監修 1983 学研生物図鑑『貝I』・『貝II』 学習研究社

第6節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡から出土した古代2および中世の人骨

京都大学霊長類研究所 茂原信生

はじめに

更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡は、長野県更埴市にある遺跡で、隣り合った場所に位置する一連の遺跡である。今回の人骨の報告では、これらの遺跡を一括して扱うことにする。

これらの遺跡は上信越自動車道長野線の建設工事にともない、平成3年から平成7年にかけて長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。遺跡は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、および平安時代・中世に属する複合遺跡である。今回報告する人骨の属する年代は、古代2（古代8期後半～15期）から中世にかけてのものであり、多くは中世に属するもので、墓として検出された遺構出土のものを主とする。

人骨の計測はマルチン（馬場、1991）にしたがい、歯の計測法は藤田（1949）にしたがった。歯の形成状態や萌出年齢はUbelaker（1989）にしたがって年齢を判断した。

1 出土人骨の特徴

人骨の記載は時代別に行う。グリッドの時代が不明のものもあり、今回の報告からは除外した。

(1) 更埴条里遺跡出土の人骨

この更埴条里遺跡から出土した人骨は、中世の木棺墓・土坑墓から出土している。中世の木棺墓は善光寺平での発見例は少なく、同じ更埴市の石原A遺跡から知られているにすぎない。人骨の保存状態はどれも非常に悪いが、歯の残っている個体がある。

A 古代2～中世人骨

①SK8406出土人骨（古代9期）

骨の保存状態は悪い。四肢骨や頭蓋骨はまったく残っておらず、歯だけが出土している。

歯 上顎歯は左第2・第3大臼歯の2本、下顎歯は左第2小臼歯の1本で、合計3本が出土している。他に下顎大臼歯片と思われるものが少数出土している。第3大臼歯は2咬頭性で退化傾向が目立つ。第3大臼歯がやや咬耗しているので、成人には達しているものと思われる。性別は不明である。

この個体は、成人には達していると思われるが、性別は不明である。

②SK9153出土人骨（中世）

焼かれた人骨が出土している。四肢骨骨幹には波形の亀裂が多数見られるので、この個体は軟部をつけたまま焼かれたものである。完全に灰化していないで黒味を帯びている部分も見られる。火葬の火にむらがあったことになる。頭蓋骨片と若干の四肢骨が残っているだけである。

頭蓋骨 頭蓋骨は1片しか見られない。部位など詳細は不明である。

歯 歯は上顎の第2大臼歯と、下顎切歯と思われる歯根だけである。エナメル質は脱落している。

四肢骨 橈骨近位部、尺骨、大腿骨後面・遠位関節部、脛骨近位部、椎骨片、指骨などが確認できる。大腿骨の粗線は幅を持った稜状に発達している。骨はそれぞれ頑丈そうで、少なくとも成人には達していたであろう。

本人骨は性別、年齢は不明である。一体分のものとしてはごく少なく、また頭蓋骨は小さな破片が1点出土しただけである。何等かの理由で取り残されたものであろう。

③SK9164出土人骨（中世）

保存状態は悪く、歯だけしか残っていない。

歯 上顎歯は残っておらず、下顎歯は右の中切歯と第1大臼歯、左は中切歯から第1小臼歯までの合計6本がある。切歯は咬耗しておらず切縁結節が顕著であり、第1大臼歯の咬耗もほとんど見られない。第1小臼歯や下顎犬歯の歯冠がほぼ完成しているため、この個体は6歳前後と推測される。第1大臼歯の咬頭と溝の型はY5型である。

下顎の犬歯歯頸部付近に石灰化の荒れが認められる。エナメル質減形成であるが線状までにはいたっていない。エナメル質減形成は、歯冠の形成される胎児期から15歳程度までの成長期に、何らかのストレス、たとえば栄養不良とか病気などによって石灰化不全が起こり、それが後まで線状、あるいは窩状に残るものである。

④SK9235出土人骨（中世）

中世の木棺墓から骨片が少数と歯が出土している。骨片は細片で特記することはない。

歯 上顎歯は左の側切歯を除く15本、下顎歯は左の側切歯と右の犬歯、および左・右の第1小臼歯から第3大臼歯までの12本、合計27本が残っており、他に歯の細片が少数出土している。上顎の中切歯はシャベル型である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第2・第3大臼歯が+4型である。咬耗度はほとんどが象牙質の露出したモルナー（1971）の3度であるが、第1大臼歯は4度、上顎の右第3大臼歯は2度である。モルナーの3度でも、象牙質の露出は小さいものが多い。したがってさほど高齢ではない。

エナメル質減形成や齲蝕（虫歯）は隣接面にも見られない。第3大臼歯の咬耗が少ないことと、他の歯の咬耗が少ないことを考え合わせると、成人ではあるが20歳代の青年程度であろう。

この個体は、性別は不明であるが、年齢は20歳代と推測される。

⑤SK9262出土人骨（中世）

四肢骨や頭蓋骨は残っておらず、歯だけが出土している。2体分が混在する。

歯 上顎歯が左・右の中切歯・側切歯、左犬歯、および左・右の小臼歯、さらに左の第1・第2大臼歯の11本、下顎歯が左・右の第1大臼歯までと右の第2・第3大臼歯の14本、合計25本が残っている。他に上顎の右側切歯と上顎の左・右の犬歯が出土している。正確に言えば2個体が混ざっており、この2個体はかなり大きさの違う個体である可能性がある。どの歯がどちらの個体のものかは明らかではない。可能性としては、大きな上顎犬歯を持った個体と、一回り小さな上顎犬歯を持った個体がほとんど同じ位置で埋葬されていたということになる。ほとんどの歯は小さな犬歯を持つ個体に属するものであろう。

下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第1・第2大臼歯とも+5型であり、第3大臼歯はX5型である。上顎の中切歯は顕著なシャベル型である。側切歯もシャベル型である。

上・下顎の側切歯の歯頸部近く、ならびに下顎犬歯と第1小臼歯に線状のエナメル質減形成が観察される。これらが形成されたのは、4～6才ころと推測される。

この木棺墓には少なくとも2体が埋葬されていたことになる。発掘時に2個体の歯はほとんど同じ位置から取り上げられている。大きな犬歯の個体は男性であり、その他は小さな歯を持つ女性の可能性がある。

⑥SK9263出土人骨（中世）

中世の木棺墓から出土している。歯と四肢骨の一部が出土しているが、四肢骨の保存状態は悪く断片的である。

歯 上顎歯は、右犬歯と第2小臼歯の2本、下顎歯は左・右の切歯、左の犬歯片と右犬歯から第1大臼歯までの9本、計11本が残っており、他に歯種不明の破片がある。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯

がY5型である。前歯部の咬耗はやや進んでおり、モルナーの4度であるが、臼歯部はさほど咬耗していない。これらではごく小さな象牙質が露出しているだけのモルナーの3度である。とくに下顎右第1小白歯にはほとんど咬耗はない。この原因は何か特殊な咬合によるものである可能性があるが、今のところ不明である。エナメル質減形成や齶蝕は隣接面にも見られない。

四肢骨 左大腿骨骨幹遠位部が残っているが、それ以外の骨には胫骨らしいもの、あるいは大腿骨らしいものが含まれるが断定は出来ない。大腿骨はさほど太くはなく、後面の粗線はやや発達しているようであるがそれ以上は不明である。

この個体は性別は不明で、年齢は咬耗から考えて子供ではないという程度がわかるにすぎない。

⑦SK9267出土人骨 (中世)

頭蓋骨の一部、歯、および四肢骨の一部が出土している。頭蓋骨は、右の側頭骨から後頭骨にかけて残っているが保存状態は悪い。土圧でつぶれている。頭頂部の骨はあまり厚くない。

歯 上顎歯が右側のすべての歯と左の臼歯の13本、下顎歯が右の中切歯から第2大臼歯までと左の第1小白歯から第2大臼歯までの11本、合計24本が残っている。上顎の中切歯・側切歯はシャベル型である。側切歯の舌側近心辺縁隆線に斜切痕がみられる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が+5型である。咬耗は軽度で、どの歯もごく小さな象牙質の露出が見られるモルナーの3度で、上顎の第3大臼歯には象牙質の露出は見られない2度である。上顎の第3大臼歯の歯頸部に象牙質に達するC2の齶蝕が見られる。下顎の犬歯に線状および窩状のエナメル質減形成が観察される。これが形成された時期は、6歳前後である。

四肢骨 左肩甲骨関節部、左胫骨近位骨幹部、第1指末節骨を含む足指骨数点が残っている。肩甲骨の関節窩は、一部が破損しているにしても狭く短い。足の第1指はかなり小さい。胫骨は細く、扁平である。

この個体の年齢は不明だが、成人には達していたと思われる。四肢骨は女性的である。詳細は不明である。

⑧SK9269出土人骨 (中世)

歯だけが出土している。

歯 上顎歯は、右側切歯から第2大臼歯までと左の中切歯、第1および第2小白歯と第1大臼歯の10本、下顎歯は右が側切歯から第3大臼歯までと、左が側切歯から第2小白歯までと第2・第3大臼歯の13本、合計23本が残っている。他に細片が数点出土している。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯が+4型、左第2大臼歯がやはり+4型で、第3大臼歯は退化形で一定の形態をしていない。咬耗はほとんどが象牙質の露出したモルナーの3度で、第1大臼歯は4度である。エナメル質減形成は観察されず、また齶蝕は歯冠歯頸部にもみられない。

この個体は成人であるが性別は不明である。

⑨SK9390出土人骨 (中世)

頭蓋骨の一部、歯、および四肢骨の一部が出土しているが保存状態は悪い。

頭蓋骨 頭蓋冠の一部、右側頭骨下顎窩、および右下顎体の一部が確認出来る。下顎では第1大臼歯から第3大臼歯までの歯槽がみられる。下顎体は比較的厚く、筋突起から続く外側結節はやや発達している。

歯 上顎歯が左犬歯、右第2小白歯の2本、下顎歯が右犬歯から第2小白歯までと左中切歯の4本、合計6本が残っている。咬耗はいずれもモルナーの3度である。エナメル質減形成は明瞭ではないが、歯冠の荒れはどの歯にも見られる。

四肢骨 大腿骨、および胫骨と考えられる部位が出土しているが、表面が剥離したりして詳細は不明である。さほど細くはない。

この個体は第3大臼歯が萌出しているので少なくとも成人に近い、あるいは成人に達しており、歯の大きさや下顎骨から男性の可能性が高い。

⑩SK9487出土人骨（中世）

頭蓋骨、四肢骨などが出土している。

頭蓋骨 頭蓋骨は後頭部から頭頂部にかけてが確認出来る。側頭線はさほど発達しておらず明瞭ではない。前額はやや後方に傾斜みである。乳様突起の幅は大きいが厚みはさほどではなく、男性と女性の間形である。乳突上溝が認められる。ラムダ縫合の外板の縫合は鋸歯状が明瞭であり、さほど高齢ではないことを示している。頭蓋は右前方部からの土圧を受けてやや変形しているが、頭蓋最大長は180ミリはあったと推測される。外耳道骨腫などの病変は認められない。

歯 上顎歯は、右中切歯、左・右側切歯、左犬歯、右第2小白歯、右第1大臼歯の6本、下顎歯は左の側切歯から第3大臼歯までと右の犬歯から第3大臼歯までの13本、合計19本が残っている。上顎中切歯は舌側面の窪んだシャベル型で斜切痕様の溝が基底結節上を走っている。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY5型、第2大臼歯および左第3大臼歯が+4型で、右第3大臼歯がX型である。右第3大臼歯は退化形で小さい。どの歯でも象牙質が露出しており、咬耗度はほとんどがモルナーの3度で、上顎の第1大臼歯と下顎の右の第1大臼歯がモルナーの4度である。齶蝕は隣接面を含む歯冠、歯頸部ともにならない。エナメル質減形成は線状のものは見られないが、上・下顎の犬歯の歯頸部近くに窩状のものが認められる。これらが形成されたのは6才前後であろう。

四肢骨 右(?)上腕骨および橈骨と尺骨、左右大腿骨骨幹、左右の脛骨および腓骨の骨幹が出土している。大腿骨の上部外側の殿筋隆起が発達している。上部は扁平のようである。上部横径は35.2mmである。後面の粗線はさほど発達していない。脛骨は太く頑丈で、後面の鉛直線は中央付近に達している。

この個体は四肢骨の頑丈さ、ならびに歯の大きさから判断すると男性の可能性が高い。第3大臼歯の咬耗がごくわずかであるのでさほど高齢とは思われず、壮年程度であろう。

⑪その他の人骨

他に更埴条里遺跡K地区からヒトのものと思われる焼骨が出土している。頭蓋骨片と四肢骨片である。特記することはない。

B 古代1の人骨補遺

ここでは古代1編で報告した遺構出土人骨について追加報告を行う。

①SK9285出土人骨

歯だけが残っている。上顎歯はなく、下顎の右第1小白歯と左第2小白歯の2本が残っている。どちらも咬耗はやや進んでいて、象牙質の比較的大きく露出したモルナーの3である。

この個体は性別・年齢ともに不明である。

更埴条里遺跡出土人骨のまとめ

一部の個体が中世の木棺墓・土坑墓から出土している。中世の木棺墓は善光寺平での発見例は少なく、貴重なものである。残っているのは歯が主である。軽度なエナメル質減形成が見られる。齶蝕は隣接面摩擦も含めてきわめて少ない。縄文時代人では頻度が低かった上顎中切歯のシャベル型が、この歯の残っているほとんどの個体で確認できる。この時期になると、渡来系の影響が広く浸透していることを示しているのであろう。

(2) 屋代遺跡群出土人骨

A 古代2の人骨

①SK46出土人骨（古代15期前後）

保存状態は悪く、歯の破片と四肢骨片が残っているだけである。四肢骨片は細片で詳細は不明である。

歯 細片化しており、歯種が同定できるものはないが、下顎の大白歯がみられる。比較的咬耗が進んでいる。詳細は不明である。

②SK358出土人骨（古代2）

歯が残っている。上顎歯は右が中切歯、犬歯と第2小白歯、第1・第2大白歯、左が中・側切歯、第1小白歯と第1大白歯、下顎歯は右は中切歯から第2大白歯、左は側切歯から第2大白歯までで、合計22本が残っている。上顎の中切歯は、現代日本人に典型的な舌側（内側）がくぼんだシャベル型である。左・右の第1大白歯の近心舌側面にカラベリ結節が見られる。下顎の大白歯の咬頭と溝の型は+5型と+4型である。咬耗は少なく、象牙質の露出は下顎第1大白歯に小さなものが見られるだけである。第2大白歯の咬耗はごく軽度なので、この個体は第2大白歯が萌出する12歳からやや上程度の年齢であろう。

③SK359出土人骨（古代2）

歯が出土している。細片化したものも含めて、永久歯だけと思われる。上顎は右の側切歯から第2大白歯まで、左は大白歯が2本、下顎は右が第1小白歯から第2大白歯まで、左が犬歯から第2大白歯までで、合計17本である。上顎第2切歯は軽度のシャベル型である。第1大白歯はやや咬耗しているものの、第2大白歯は咬耗しておらず他の永久歯にも咬耗は見られないので、この個体は7～8歳程度と推定される。下顎の大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯が左右ともY5型、第2大白歯がX5型である。歯の大きさは現代人女性の平均値（樫田；1959）より小さいものが多く、女性の可能性が高い。

この個体は7～8歳程度の女性である可能性が高い。

④SK360出土人骨（古代2）

保存状態は悪く、顔面は失われている。顔を右に向けて埋葬されていた。頭部は土圧を受けて左右方向につぶれている。

頭蓋骨 頭蓋冠の右半が残っている。耳の後ろの乳様突起は基部が残っており比較的大きい。側頭線に続く耳道上稜はさほど発達していない。下顎骨は大きい。下顎の右大白歯部の歯槽は閉鎖しており、大白歯は生前に失われていたと思われる。

歯 ごく一部しか残っていない。埋葬後失われたものもあるが、多くは生前に脱落していた可能性がある。残っている歯は、上顎右第2大白歯、左第2小白歯、下顎右第1小白歯の歯冠である。上顎の第2小白歯は舌側咬頭が摩耗して象牙質が露出しているが、第2大白歯には象牙質の露出はない。歯冠に歯石が沈着しているので、この歯と咬合する反対側の下顎歯が早期に脱落していた可能性がある。

この個体は年齢は比較的高い（熟年）と推測される。性別は男性の可能性が高い。

⑤SK5013出土人骨（古代13期）

頭蓋骨が残っているが保存状態は悪く、土圧で左右方向につぶれている。顔面や歯は残っていないが頭蓋冠と側頭骨が残っており、左を向いて埋葬されていたことが知れる。

頭蓋骨 乳様突起の基部が残っているがさほど大きくない。耳道上稜も発達していない。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。

この個体の性別・年齢は不明である。

B 中世人骨

①SK1出土人骨（中世）

一握りほどの人骨と思われる焼かれた骨が残っている。頭蓋骨片、四肢骨骨端があり、骨端には骨幹と向き合った面が自然面として観察されるので、骨幹とまだ癒合していなかったものと推測される。ヒトの

上腕骨か大腿骨の近位骨頭であろうから、癒合の年齢に照らして判断すると10歳代の少年に属するものであろう。

②SK8出土人骨（中世）

歯が残っている。上顎は右の中・側切歯と第1小白歯、左は側切歯から第1小白歯までと第1大白歯の頬側半、下顎は左の側切歯から第1大白歯までで、合計12本が確認できる。下顎第1大白歯の咬頭と溝の型は+5型である。咬耗はやや進んでおり、下顎の第1大白歯では頬側の咬頭頂部分に象牙質の露出が見られる。また、中切歯は切縁に象牙質が見られるが側切歯には見られない。したがってさほど高齢ではなく、20歳代程度であろう。

性別は不明である。

③SK11出土人骨（中世）

焼かれた人骨である。わずかな頭蓋骨片と四肢骨片である。焼かれたイノシシの右側頭骨が混在している。

頭蓋骨 数センチの大きさの頭蓋骨片が6点出土している。一点は左の前頭骨の眼窩部である。他のは後頭骨の一部と頭蓋冠の一部であろう。厚さは普通である。

四肢骨 右鎖骨遠位半、上腕骨遠位部、橈骨遠位端、中手骨、大腿骨骨幹と遠位端の一部、胫骨、腓骨遠位端、第2頸椎歯突起、などがみられる。大腿骨の後面の粗線はよく発達しており、幅を持った稜状に張り出している。柱状大腿骨に属するであろう。全体の形態から判断して成人にはなっていたであろう。鎖骨は焼けて収縮していることを考えても細い。

この個体は四肢骨の細さから判断して女性であろう。年齢は成人であろうと思われるがそれ以上は不明である。

④SK44出土人骨（中世）

歯だけが残っている。

歯 下顎の左第1大白歯、あるいは第2大白歯である。頬側の咬頭頂にわずかに象牙質の露出がみられる程度の咬耗である。さほど高齢ではない。性別は不明である。

⑤SK57出土人骨（中世）

この個体も歯が残っているだけである。

歯 下顎の左・右第1大白歯、右第2および第3大白歯である。第1大白歯の咬耗はごくわずかであり、第2および第3大白歯には咬耗はみられない。したがって、この個体は現代人の第2大白歯が萌出する平均年齢の12歳には達していないと思われる。第1大白歯の咬耗の少なさから考えると7歳前後であろう。

性別は不明である。

⑥SK4195出土人骨

少数の骨片と歯が1本残っている。骨は小さくてきゃしゃな下顎の正中部の破片があるが、歯槽は確認できない。他は細片で観察できない。歯は下顎の左第1小白歯である。近遠心径が6.5ミリ、頬舌径が7.7ミリである。やや咬耗しており、咬頭頂に象牙質の露出が見られる。性別などの詳細は不明である。

⑦SK5001出土人骨

四肢骨の一部が残っているが、他の部分は残っていない。四肢骨も保存状態は悪く、観察に耐える部分は少ない。

四肢骨 右上腕骨遠位3分の2、寛骨片、左大腿骨近位半、および右大腿骨近位部片が出土している。上腕骨の遠位端は失われている。上腕骨はさほど太くなく、三角筋粗面の発達状態も普通である。大腿骨の骨質は厚いが、さほど太くはない。右大腿骨では上部外側の殿筋隆起がやや発達しており、殿筋下溝が形

成されている。粗線の状態は不明である。

⑧SK5005出土人骨

骨の保存状態は悪い。頭蓋骨の一部、歯、および四肢骨片が出土している。

頭蓋骨 右側頭骨錐体と右上顎骨、および右下顎骨が残っている。右の外耳道の出口（外耳孔）付近の後面にわずかだが骨の増殖がみられる。外耳道骨腫であろう。下顎骨体は縄文時代人的で前方と後方の高さの差が小さい。下顎枝は広くて低い。

歯 上顎歯は右の中切歯から第2大臼歯までの7本、下顎歯は右側切歯から第3大臼歯までの7本の合計14本が残っている。上顎の歯にはすべて線状のエナメル質減形成が認められる。とくに中切歯のエナメル質減形成は顕著で広い溝状になっている部分がある。この歯に見られる線状の痕跡は形成の時期から判断して生後2年ほどの時期に形成されたものである。この個体の離乳時期などの影響も考えられる。

この個体の性別は不明である。成人には達していたと思われる。外耳道骨腫ならびに強度のエナメル質減形成がみられる。

⑨SK5071出土人骨（中世）

頭蓋骨の一部と四肢骨片、および肋骨片が出土している。骨としては比較的しっかりして保存されているが、後述のように、この個体は若いので骨として残っている部分は少ない。出土状況から考えて、うつぶせで埋葬された可能性がある。

頭蓋骨 頭頂骨と後頭骨と思われる骨の一部が残っている。骨質は薄く、鋸歯状の縫合は明瞭で外板でも内板でも癒合はまったくみられない。かなり若い個体である。

体幹骨 一部の肋骨が残っている。非常に細く、若い個体であることを推測させる。

四肢骨 上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、胫骨ならびに腓骨の骨幹が残っている。骨端はすべて失われている。大腿骨の骨幹は近位部が欠けているが、長さは推定で130～140ミリほどである。また、橈骨の骨幹の長さは約86ミリである。

この個体は生まれて間もない新生児であろう。性別は不明である。

⑩SK6159出土人骨（中世）

保存状態は悪い。歯の一部は残っており、頭蓋骨の一部が残っているが、他は破片化している。

頭蓋骨 左・右の側頭骨錐体部だけが出土している。特記すべきことはない。

歯 乳歯列である。上顎の左乳中切歯、乳犬歯、ならびに左・右の第1および第2乳臼歯、下顎の左第1乳臼歯の合計7本の乳歯が残っている。他に永久歯の上顎の左第1大臼歯と下顎の右第1大臼歯の歯根が形成途中である。これらから判断するとこの個体の年齢は5歳前後であろう。エナメル質減形成はみられない。

この個体は5歳前後である。性別は不明である。

⑪SK6233出土人骨

骨の保存状態は悪い。頭蓋骨、歯、四肢骨の一部が残っている。寛骨の一部と左右の大腿骨・胫骨とが残っている。顔面を右に向けて埋葬されていたと推測される。頭蓋は土圧を受けて左右方向にややつぶれている。

頭蓋骨 頭蓋骨の残りは比較的よい。眼窩上半から後頭部までが残っている。軽度の外耳道骨腫が外耳道の前壁と後壁にみられる。乳様突起は小さく、耳道上稜はごくわずかに膨隆する程度である。下顎枝は縄文時代人のように低い。頭蓋最大長は大きめにみても170ミリには達しておらず、かなり小さい頭蓋骨といえよう。

歯 上顎歯は左右とも切歯部から第2大臼歯までが残っている。第3大臼歯は未萌出か、あるいは萌出後

脱落したかは不明である。歯は非常に小さい。下顎歯では右は第1大臼歯が生前に脱落しており、左は第3大臼歯が齶蝕で歯根だけが残っている。右の第3大臼歯は萌出後脱落したものであろう。咬耗はあまり進んでおらず、象牙質の露出がない歯（小臼歯）もある。第2大臼歯はあまり咬耗していないのでさほど高齢ではなく、年齢は高くても壮年程度であろう。

四肢骨 多くは細片化している。上腕骨遠位骨幹は細い。大腿骨は近位の骨幹が残っている。細く、後面の粗線はごくわずかに張り出しているだけである。上部は扁平で、外側に殿筋隆起がやや張り出している。脛骨後面の鉛直線はかなり上方から起こっており、かつ強く発達しているようである。脛骨の近遠位骨端が癒合しており、成人と思われるので、この個体は四肢骨の細さから判断して女性であろう。

この個体は女性と思われる。年齢は歯の摩耗から判断して壮年程度であろう。

C 中世の井戸から出土した人骨

①SK68出土人骨（中世井戸）

中世の井戸の遺構から出土したもので、歯だけが出土している。

歯 下顎左第2小臼歯、および第2大臼歯の歯冠と他に10数点の歯の破片が残っている。第2小臼歯では小さな象牙質の露出がみられ、さらに頰側咬頭が斜めに大きくすり減っているが、第2大臼歯の咬耗は象牙質が露出するほどではない。さほど高齢ではなからう。

②SK6143出土人骨（中世井戸）

四肢骨片だけがごく一部残っている。保存状態は悪い。人骨かどうか不明である。一部獣骨が混在している。

D グリッド取り上げ、その他Ⅲ層出土の人骨

①SN1人骨（5b-25587）

乳歯ならびに乳歯の植立した下顎骨の正中中部が出土している。下顎の第2乳臼歯は形成途中と思われ、咬耗は下顎の乳切歯部にしか見られないので、この個体は生後まもない1歳程度であろう。性別は不明である。エナメル質減形成は見られない。

この個体のものと思われる四肢骨片が出土している。右大腿骨近位部骨幹と椎骨などである。詳細は不明である。

②N16人骨（5b-04109）

ヒトの歯が1本出土している。上顎左の第2小臼歯である。咬耗しているが象牙質の露出はない。歯冠の中央付近に軽度のエナメル質減形成が見られる。

③出土地点不明人骨（5b-29670）

焼けたヒトの骨である。頭蓋骨片が3点でいずれも頭蓋冠のものと思われる。詳細は不明である。

④出土地点不明人骨（5b-26619）

遺構が不明確であるが、火葬墓出土のものである可能性が高い。一握りほどの焼かれた骨である。椎体、距骨関節面、寛骨の坐骨部、頭蓋骨片などが確認できる。詳細は不明である。

屋代遺跡群出土人骨のまとめ

屋代遺跡出土の人骨では火葬骨はさほど多くない。保存状態はさほどよくないものが多いが、歯の残りは比較的よい。外耳道骨腫と思われるものが2例（SK5005、SK6233）にみられた。外耳道骨腫は縄文時代では宮城県の沿岸地方の遺跡から出土する人骨に高頻度で見られる形質であり、現代人では海女等に多くみられるという。冷水刺激で形成が促される特徴である。屋代遺跡群では冷水刺激を受けるような漁師のような仕事も考えられないでもないが、その点の解析は今後の問題であろう。エナメル質減形成は中世の人骨に一例（SK5005）が見られるだけであるがかなり強い石灰化不全である。咬耗は縄文時代人にみられ

るようには進んでいないが、下顎骨の形態は縄文時代人的な下顎枝が広くて低いものが見られる。また、大腿骨の上部外側に殿筋隆起が顕著なものがあり、大腿骨は扁平で、このような傾向は女性に見られることが多い。高齢の個体は少ない。

(3) 窪河原遺跡出土人骨

屋代遺跡群に含まれる窪河原遺跡は、出土遺物から判断して中世（13世紀）と考えられている。

①GT14グリッド出土人骨

ヒトの左大腿骨骨幹近位半が残っている。表面は侵食によってあれているが太く男性的である。後面に粗線があることは確認できるが状態は不明である。扁平大腿骨である。年齢は不明である。

②SK14出土人骨

ほぼ全身が残っている。屈葬である。保存状態は悪い。

頭蓋骨 頭蓋骨はおもに頭蓋冠であり、顔面は失われている。眉弓はやや発達しており、男性的な印象を与える。外後頭隆起は比較的発達していて、プロカのIII型程度である。頭蓋冠の骨はやや厚めである。乳様突起は大きい。

歯 下顎歯が右は第2切歯から第2大白歯まで、左は側切歯と第1小白歯の合計8本が残っている。第3大白歯は萌出後に消失したようである。少なくとも成人には達していたであろう。

この個体は、成人で男性の可能性が高い。

③SK19出土人骨

2体分の人骨が出土している。また、下顎骨が3体分出土しているのでさらに増える可能性がある。

頭蓋骨1 骨の保存状態は比較的よい。頭蓋冠、下顎骨、歯が残っている。頭蓋冠は普通の大きさであり、骨はさほど厚くない。外後頭隆起は発達しておらずプロカのI型である。乳様突起も発達していない。両耳幅は117ミリである。頭蓋骨の縫合は内板の癒合が進んでおり、外板でも矢状縫合の一部は癒合している。下顎骨はきゃしゃであるが、前歯部の歯槽縁は前方に著しく張り出している。オトガイ隆起は普通であり、オトガイ三角もさほど目立たない。しかし、歯槽縁は肥厚していて年齢を感じさせる。

歯の咬耗は少なく、下顎小白歯では象牙質の露出はないが、切歯と犬歯では切縁や尖頭の象牙質が露出しモルナーの3度である。咬耗だけからみるとさほど高い年齢ではないように思われるが、左の第3大白歯部に小さな歯槽痕しかみられず、また左第2大白歯は生前に失われていたものと思われることを考えあわせるとさほど若くはないと判断される。

下顎歯は左の第1大白歯までの歯槽が確認され、右の大白歯部は失われている。切歯から犬歯部の舌側には歯石の著しい沈着がみられる。

この頭蓋骨1は女性の可能性が高い。年齢は比較的高く熟年程度であろう。

頭蓋骨2 歯の咬耗が進んでいる点で頭蓋骨1と異なっている。頭蓋骨は鋸歯状の縫合が明瞭である。土圧で前頭部がややひしゃげている。頭蓋冠の骨は厚くない。乳様突起は小さい。また側頭線につながる耳道上稜は発達していない。また、外後頭隆起も小さい。下顎骨は左・右の犬歯の間の下顎体が残っていて、オトガイ隆起やオトガイ結節が比較的発達しており、オトガイ三角が明瞭である。

歯 下顎歯は左・右の犬歯、ならびに第2・第3大白歯までと右の第1小白歯までの計9本、上顎歯は左の中・側切歯、第2小白歯及び第3大白歯、右は犬歯、第1小白歯及び第1大白歯から第3大白歯までの計9本、合計18本が残っている。第2大白歯、第3大白歯や犬歯には象牙質の露出はみられないが、上顎の切歯や小白歯、また下顎の切歯、犬歯、ならびに小白歯は著しく咬耗している。モルナーの4～5程度である。上顎の第3大白歯はかなり小型化して退格的で3咬頭性となっており、咬耗はほとんどない。

上顎第2・第3大臼歯には歯石の沈着がみられる。下顎左第1大臼歯の咬頭と溝の型はY5型である。

上顎小臼歯は咬耗が顕著であるほかに遠心歯頸部に大きな齶蝕が観察される小臼歯の歯冠には強度の線状のエナメル質減形成が観察される。

この頭蓋骨は女性のもので推測され、年齢もさほど高齢ではなく壮年程度であろう。エナメル質減形成、虫歯が観察される。

四肢骨 左・右大腿骨、左右脛骨と腓骨片、ならびに足根骨片が出土している。同一個体のものであると思われる。後面の粗線はやや発達しており、幅を持った稜状に突出している。殿筋隆起はやや外側に張り出している。上横径が29.9ミリ、上矢状径が21.8ミリで扁平大腿骨である。脛骨の後面の鉛直線は鈍であり、断面はヘリチカのIV型に近い。骨間縁は比較的鋭い。

この四肢骨は女性のものであると思われる。上記のどちらの頭蓋骨のもので同一かは断定できない。

③SK21出土人骨

乳歯が1本出土しているだけである。上顎の左第1乳切歯歯冠である。まったく咬耗していないし、形成途中であるので、誕生直後の新生児であろう。性別は不明である。

④SK22出土人骨

焼かれた骨が比較的多量に出土している。全量は約650グラムである。左右の側頭骨錐体、頭頂骨、後頭骨鱗部、上顎骨口蓋部、左下顎骨筋突起部などの頭蓋骨と、四肢骨片（橈骨片、足根骨片など）が残っている。すべて焼かれているが黒色から灰白色までいろいろな程度がある。どちらかといえば低温で焼かれた暗い色のものが多い。四肢骨の残量は少なく、1個体分のごく一部と考えられる。

歯槽部は退縮しており、生前にはすでに歯はあまり植立していなかった可能性を示唆している。外後頭隆起はよく発達していたと思われる。下顎骨筋突起の内側稜はあまり発達していない。内板の縫合は癒合しているものがみられる。

この個体は明瞭に重複する部分がないので一個体分の焼骨と思われる。生前の歯の消失が激しかったと思われる、かなりの年齢に達していたものと思われる。性別は不明である。

⑤SK25出土人骨

焼かれたヒトの骨である。頭蓋骨片、上腕骨遠位部骨幹、橈骨骨幹、足根骨、指骨などの四肢骨片などがある。量としてはさほど多くなく、全量で約600グラムほどである。この量は、ふつうの成人の火葬骨の全量（約2000～2300グラム；茂原・松島1996）の1/4程度にすぎず、火葬骨の取り残しかあるいは他の骨は土中で消失したものと思われる。後頭骨鱗部は黒化している。外後頭隆起部はかなり厚い。下肢の距骨は黒化する部分と焼かれていない部分があるので、さほど高い温度で焼かれたものではないと思われる。性別は不明である。

⑥SK30出土人骨

骨の保存状態はさほど悪くはないが、頭蓋骨が残っているだけである。ほぼ仰向けの状態（口蓋を上に向けている）。頭蓋冠の骨は非常に薄い。縄文時代人によく見られるような前頭縫合遺残（メトピズム）が見られる。眉上隆起はほとんど発達しておらず、前額部は立っている。女性的な頭蓋骨であるが年齢が若い可能性もある。

歯は、左の上顎歯が第2切歯から第2小臼歯までの4本が残っている。切歯と犬歯は象牙質の露出したモルナーの3度の咬耗だが、小臼歯には象牙質の露出はない。第2切歯の遠心舌側隆線基部に斜切痕がある。

この個体は、若い個体と推測される。前額部の形態などから女性と考えられる。

⑦SK40出土人骨

焼かれたヒトの大腿骨骨幹、尺骨骨幹、寛骨片、椎骨体、頭蓋骨片などが出土している。焼かれていない骨もあるようだが混入の可能性が考えられる。同一個体かどうか不明である。全体で約500グラムである。

大腿骨後面の粗線は幅を持った稜状に発達しており、骨質も厚い。残っている椎骨体に加齢変化の骨棘はみられない。

この個体は成人であろうが、性別は不明である。

⑧SK44出土人骨

ヒトの乳歯歯冠で、上顎の左第1・第2乳切歯と左・右の乳犬歯である。乳犬歯の歯冠は形成途中であり歯冠も完成していない。歯の形成の時期から判断して、誕生直後に死亡した新生児であろう。性別は不明である。

⑨SK110出土人骨

焼かれたヒトの骨である。一握り程度の量であり一体分にはとても及ばない。

四肢骨片が多く、脛骨後面栄養孔部、中足骨遠位端がある。頭蓋骨片はごく少数で歯根片も含まれる。波形の亀裂がみられるので軟組織がついたままで焼かれたものであろう。骨の頑丈さから成人には達していると考えられるが、性別は不明である。

⑩SM101出土人骨

この遺跡の人骨のなかでは、比較的よく保存されている個体である。

頭蓋骨 顔面が残っている。眉弓は発達しておらず、したがって眼窩上隆起も明瞭ではない。前額部は垂直に近い。乳様突起は大きく、内外的にも厚い。下顎骨は頑丈である。筋突起は厚いが内突起稜はあまり発達していない。オトガイ隆起はさほど顕著ではない。オトガイ結節は目立たない。筋突起から続く外側隆起がよく発達している。ウィルヒョウの上顔示数は現代関東地方人よりやや小さい(森田:1950)が、他の時代のものよりも大きい。すなわち高顔である。鼻根部はくびれておらず平坦な顔である。

歯 上顎の側切歯は退化的な矮小歯である。下顎の第3大臼歯は左右とも水平知歯で、第2大臼歯の遠心面に向かって植立している。上顎の中切歯はシャベル型である。上・下顎の犬歯にエナメル質減形成がみられる。どの歯も咬耗して象牙質が露出しているが第2小臼歯ではごく小さい露出である。咬耗は下顎第1大臼歯はモルナーの4度、第2大臼歯はモルナーの3度である。切歯の舌側には歯石の沈着がみられるが齶蝕はない。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は咬耗のため判別できない。歯の大きさは上顎の第2切歯のぞいては現代日本人(権田:1959)とさほど変わらない大きさである。

四肢骨 四肢骨の骨端の一部が失われていて不完全ではあるが、おもな長骨はすべて出土している。

上腕骨の太さは普通である。三角筋粗面はさほど発達しているわけではない。尺骨の骨間縁はよく発達しているが橈骨の骨間縁はさほど発達していない。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。また、耳状面の周りに妊娠痕はみられず、耳状面も高くない。大腿骨は殿筋隆起はさほど発達していない。後面の粗線は幅はないが稜状に張り出していて、中央部付近の矢状径は28.9ミリ、横径は28.5ミリで断面示数は101.4となり柱状大腿骨である。脛骨後面の鉛直線はよく発達しており、中央付近を越えて遠位に達している。従って中央付近の断面はヘリチカのIV型である。栄養孔位の矢状径は38.1ミリ、横径は24.6ミリで、断面示数は64.6で中脛脛である。骨間縁は非常によく発達している。

この個体は男性である。年齢はさほど高くなく壮年程度と思われる。

⑪SM102出土人骨

全量で約1500グラムの火葬骨である。この個体が1体分とすると、全体の半分以上が骨として残っていることになる。椎骨の椎体には加齢変化である骨棘の形成がややみられる。頸椎体にも棘状の引っ張りか

形成されている。大腿骨後面の粗線は幅を持った稜状である。骨幹には波形の細かな亀裂が多数認められるので、軟組織のついたまま焼かれたものである。

南端覆土から右の側頭骨錐体が出土している。これは先の個体のものと重複している。単独で採集されているため別個体である。これ以外の部分に重複はみられないのでこの個体は混入の側頭骨を除いて1個体分と考えて差し支えなからう。

この個体の全量は、ヒトの一体分の全火葬骨重量約2000～3000グラムよりさほど少ないわけではなく、火葬されたほぼ全量を含んでいると考えられる。

性別・年齢は不明である。

⑫SM103出土人骨

火葬骨である。灰化の程度の進んでいるもの（白っぽいもの）と進んでいないもの（暗い色のもの）とがある。詳細は不明である。

⑬SM104出土人骨

焼骨である。灰化するまで焼かれているものは少ない。周辺の骨とあわせて、全量は約350グラムである。頭蓋骨片、脛骨片などの四肢骨片である。後頭部の骨は厚く男性的である。

⑭SM1001出土人骨

焼骨である。一体分のかなりの部分の骨が残っている。火葬骨の全重量は約1100グラムである。この重量は、茂原・松島（1996）が報告している火葬人骨の重量で考えると、成人女性の一体分の骨の火葬重量のほぼ2/3に当たる。全身の骨はほぼ灰白色に焼かれており、むらがない。火葬の技術の高さを物語るものである。四肢骨には波形の亀裂が多くみられ、軟組織がついているうちに焼かれたことを示している。

頭蓋骨 頭蓋冠を含め顔面以外はほとんど残っている。ただし乳様突起の基部は残っていない。頭蓋冠の骨質は薄い。頭蓋の縫合は鋸歯状が明瞭で比較的若いことを示している。ほとんどの骨が細片化しているなかで、下顎骨はほぼ完全な形である点は非常に特異的である。オトガイ隆起は比較的発達しており、またオトガイ結節も目立つ。それぞれは小さいながらもオトガイ三角を形成している。外側結節はさほど発達していない。下顎自体はきゃしゃであり、筋突起もさほど大きくない。角前切痕は、右側にはないが左側には存在する。

歯 上顎の右第2小白歯の歯槽は閉鎖しており、生前に脱落していたものと思われる。下顎骨の歯槽をみると抜歯はないが、左・右の第3大臼歯は脱落していたらしく歯槽が閉鎖している。ただし、第3大臼歯の萌出するスペースが十分にあるとはいえ、先天的に欠如していた可能性もある。上顎でも同じ事がいえる。上顎左第2小白歯と下顎大臼歯の近心半の歯冠が残っている。ともにほとんど咬耗しておらず、かなり若い個体であることを示している。

四肢骨 脛骨は焼かれて収縮していることを割り引いても細い。

この個体は、女性と考えられる。第2大臼歯が萌出しており、骨端も癒合しているので成人であろう。椎体に加齢変化などがみられないのでさほど高齢ではない。小白歯に咬耗がほとんどみられないことや頭蓋骨の縫合などを考えるとむしろ若い個体（青年程度）の可能性がある。

窪河原遺跡出土人骨のまとめ

集礫を有する火葬墓から出土しているものがある。焼かれた骨が多いが、高温で焼かれたものは少なく、どの焼骨もかなり黒化しただけの部分が多い。中には焼けていない部分も残るほどである。大腿骨は扁平なものが見られる。歯には齶触が見られたり、エナメル質減形成が見られるものもある。縄文時代人にしばしば観察される前頭骨のメトピズム（前頭縫合遺残）が観察された（SK30）。顔面の残った個体もあ

表64 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡から出土した古代2・中世の人骨の概要

	遺構	補番	時代	性別	年齢	主な特徴
更埴条里遺跡	SK8406		古代9期	不明	成人	
	SK9153		中世	不明	成人	焼骨、一部のみ
	SK9164		中世	不明	幼児(6歳前後)	歯のみ、軽度のエナメル質減形成
	SK9235		中世	不明	青年(20歳代)	シャベル型中切歯
	SK9262	No.1	中世	男性	成人	木棺墓、エナメル質減形成、シャベル型切歯
		No.2	中世	女性	成人	木棺墓
	SK9263		中世	不明	子供ではない	木棺墓
	SK9267		中世	女性?	成人	木棺墓、エナメル質減形成
	SK9269		中世	女性	成人	歯のみ
	SK9285		中世	不明	不明	歯のみ
	SK9390		中世	男性	成人	
	SK9487		中世	男性	壮年	軽度のエナメル質減形成
	BKS-K②区		中世	不明	不明	焼骨
屋代遺跡群	SK358		古代2	不明	12~13程度	少年、カラベリ結節
	SK359		古代2	女性	7~8歳	
	SK360		古代2	男性	熟年	歯石の沈着
	SK5013		古代13期	女性?	不明	左向きの埋葬
	SK46		古代15期前後	不明	不明	四肢骨片
	SK8		中世	不明	青年(20歳代)	歯のみ
	SK001		中世	不明	10歳代	焼骨
	SK011		中世	女性	成人	焼骨、イノシシ頭蓋混在
	SK44		中世	不明	不明	歯のみ(高齢ではない)
	SK57		中世	不明	幼児	7歳前後
	SK4195		中世	不明	不明	細片と歯
	SK5001		中世	女性?	不明	殿筋下溝
	SK5005		中世	不明	成人	外耳道骨腫、エナメル質減形成
	SK5071		中世	不明	新生児相当	うつぶせで埋葬?
	SK6159		中世	不明	乳幼児	5歳前後、乳歯列
	SK6233		中世	女性	壮年	外耳道骨腫、歯が小さい
	SK68		中世(井戸)	不明	不明	歯のみ
	SK6143		中世(井戸)	不明	不明	獣骨混在
	SK6204		不明	不明	壮年	
	25グリッド	No.2	不明	不明	不明	四肢骨?
窪河原遺跡	GT 14		中世	男性?	不明	扁平大腿骨
	SK 14		中世	男性?	成人	屈葬
	SK 19	No.1	中世	女性	熟年	歯石多し
	SK 19	No.2	中世	女性	壮年	齶歯、エナメル質減形成
	SK 21		中世	不明	新生児相当	乳歯形成中
	SK 22		中世	不明	成年	焼骨、比較的高齢
	SK 25		中世	不明	不明	焼骨
	SK 30		中世	女性	成人	比較的若い、メトピズム
	SK 40		中世	不明	成人	焼骨(全量の約1/4)
	SK 44		中世	不明	新生児相当	
	SK110		中世	不明	成人	焼骨
	SM101		中世	男性	壮年?	集積墓、平坦な顔で高顔、エナメル質減形成
	SM103		中世	不明	不明	集積墓、焼骨
	SM104		中世	男性?	不明	焼骨
	SM1001		中世	女性	青年	焼骨、咬耗少ない。

り、それでは縄文時代人とは異なる平坦な顔で高顔である。

2 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土人骨の特徴 (古代2～中世人骨に関するまとめ)

遺跡全体としては、更埴条里遺跡から13体、屋代遺跡群から19体、窪河原遺跡部分から15体の合計47体分の人骨が確認された。これ以外にも出土しているが、細片化していたりして十分な観察が出来なかった。

一部の個体が中世の木棺墓・土坑墓から出土している。中世の木棺墓は善光寺平での発見例は少なく、貴重なものである。他には焼かれているものが多い。焼かれ方は軟組織が付いたまま火葬されたものである。焼かれていない骨の保存状態は一般にさほどよくない。しかし、歯、特に歯冠部分がよく残っている場合が多い。エナメル質減形成は頻度が高いとはいえないが軽度のものはしばしば観察された。咬耗は縄文時代人ほどではないが、下顎骨は下顎枝が幅広く低いものが多く見られた。縄文時代の北村遺跡で観察されたような大腿骨上部の殿筋隆起の張り出しがよく観察され、やはり女性の人骨に多い点は北村遺跡と似た傾向である。これは、採集などの行動に伴って発達する形質のようである。また、海岸部の縄文時代人に高頻度に出現する外耳道骨腫が2例で見られた。これが習慣的なものと関係するかどうかは今後の課題であろう。

縄文時代人では頻度が低かった上顎中切歯のシャベル型が顕著でほとんどの個体で確認できる。この時期になると、長野県にも渡来系の影響が広く浸透していることを示しているのであろうが、一方で下顎骨の形態などに古い形を残しており、複雑な変化の様相、すなわちモザイク的に変化していく様が窺える。

この貴重な標本を観察する機会を与えてくださった長野県埋蔵文化財センターの方々には厚く感謝いたします。また、人骨の写真の整理の際には獨協医科大学の櫻井秀雄氏、ならびに霊長類研究所の木下実氏のお世話になった。心から感謝いたします。

表65 屋代遺跡群・窪河原遺跡の古代2・中世の人骨の上顎歯の計測値と比較試料 (単位:mm)

遺跡名	No.	性別	左右	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考	
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l		
屋代遺跡群	SK358	古代2		右	9.1	7.1			8.0	7.5			6.9	8.8	10.8	11.3	9.9				
	SK359	古代2	女性?	右	9.3		7.2	6.1	7.3	8.3	7.8	8.7	6.2	8.6	10.6	11.3	9.2	11.1			
				左			6.6								10.2	11.4	9.3	11.1			
	SK360	古代2	男性	左									7.1	9.6			10.2	11.9			
	SK8	中世		右	8.8		7.3		7.7	8.6	7.2	9.2	7.0	9.1	10.2	11.7	9.9	12.1			
SK5005	中世		右	8.5	7.3	6.7	6.5	7.7	8.6	7.5	9.6	7.0	9.1	10.2	11.7	9.9	12.1				
SK6159	中世		左											11.2	12.1						
SK6233	中世	女性	右	8.1		6.4	6.1	6.4	7.3	6.6	9.0	6.2	9.1	9.0	10.8	8.4	11.0				
窪河原遺跡	SK6204	不明		右	7.8	6.6	6.2	5.9	6.5	7.3	6.3	8.7	6.4	9.0	8.9	10.7	8.2	10.1			
	SK15	中世	女性	右					7.8	7.3					10.7	12.4	9.4	10.8	8.3	9.9	
	SK30	中世	女性	右										8.5							
	SM101	中世	男性	右	8.8	7.5			8.1	8.3	7.2	9.3					9.9	12.4			
				左	8.7	7.7			8.5	8.3	7.1	9.6	7.3	9.1	9.8	12.4	12.1				
平均値				右	8.6	7.1	6.9	6.3	7.7	7.9	7.1	9.2	6.8	9.1	10.2	11.6	9.4	11.4	8.3	9.9	
江戸時代人 (Brace, 1982)	江戸	男性		右	8.2	7.4	6.8	6.5	7.7	8.5	7.2	9.6	6.9	9.5	10.5	11.6	10.0	11.7	9.5	11.3	
現代日本人 (禮田, 1959)	現代	女性		右	8.3	7.0	6.7	6.3	7.9	8.6	7.4	9.5	6.8	9.2	10.4	11.4	9.9	11.5	9.7	11.6	
		男性		右	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79	
中世日本人 (鈴木, 酒井, 1957)	現代	女性		右	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50	
		男性		右	8.68	7.18	7.15		8.22		7.40	9.61	6.94	9.55	10.68	11.74	9.69	11.76			石膏模型
関東地方縄文人 (松村, 1989)	縄文	男性		右	8.46	7.41	7.18	6.83	7.64	8.19	6.97	9.40	6.52	9.17	10.16	11.71	9.22	11.59	8.23	10.88	石膏模型
		女性		右	8.25	7.08	6.70	6.41	7.40	7.89	6.77	9.16	6.24	8.88	9.92	11.40	8.94	11.20	8.09	10.43	

表66 屋代遺跡群・窪河原遺跡の古代2・中世の人骨の下顎歯の計測値と比較試料

(単位:mm)

遺跡名	性別	左右	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3		備考		
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l			
屋代遺跡群	SK358	古代2	右	5.6	5.5	5.2	6.0	7.1	7.3	7.6	7.2	7.2	8.2	11.4	10.9	11.0	10.0				
			左			6.1	6.0	7.1	7.1	7.5	7.7	7.5	8.1	11.1	10.5	10.7	9.8				
	SK359	古代2	女性?	右						6.9	7.8	7.0	8.1	11.8	10.9	11.3	10.4				
			左					6.3		6.9	7.9	7.1	8.0	11.9	10.9	11.5	10.3				
	SK360	古代2	男性	右						7.4	8.4										
				左			5.9	5.8	7.3	7.3	7.5	8.2	7.4	8.8	11.0	10.5					
	SK8	中世		左										11.2	11.1						
	SK44	中世		左										11.7	11.1	12.0		10.3	10.2	M2の可能性もある	
	SK57	中世		右																	
	SK5005	中世		右			5.8	6.6	6.4	7.9	7.3	8.1	7.8	9.0		10.9	11.3	10.2	10.1	9.4	
	SK6159	中世		左										12.0	11.2						
	SK6233	中世		右			5.3		5.6	5.7	6.5	6.3	7.9	6.3	8.1		9.7	9.3			
				左			5.1		5.6	5.7	6.6	6.4	8.1	6.1	8.4	10.1	10.0	9.5	9.3		
	SK68	中世(井戸)		左									7.5	8.8		11.1	10.3				
SK6204	不明		左																		
窪河原遺跡	SK15.19	中世	女性			5.5		6.0		6.9								10.5	9.7		
			左			5.4		6.1						11.9	10.9	10.1	9.7				
	SM101	中世	男性			6.3	7.4	7.8	7.0	8.2	6.7	8.6	6.7	8.6	11.0	11.3	11.9	11.0			
平均値					5.6	5.4	5.8	6.0	6.7	7.2	7.1	8.0	7.0	8.4	11.4	10.9	11.0	10.2	10.3	9.8	
江戸時代	江戸時代	男性	右	4.9	5.7	5.8	6.4	6.7	7.7	7.2	8.0	7.3	8.4	11.6	11.0	11.3	10.6	10.7	10.1		
			左	5.0	5.1	5.6	5.8	6.4	7.2	6.8	7.4	6.9	8.1	11.1	10.7	10.9	10.4	10.5	9.9		
現代日本人	現代	男性	右	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.81	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28		
			左	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02		
中部日本人	現代	男性	右	5.65		6.28		7.21		7.28	8.13	7.13	8.51	11.53	10.98	10.80	10.57			石膏模型	
			左	5.65		6.19		6.89		7.34	7.77	7.19	8.27	11.16	10.67	10.60	10.25			石膏模型	
関東地方縄文人	縄文時代	男性	右	5.28	5.94	5.78	6.27	6.85	7.66	6.93	7.95	6.98	8.40	11.59	11.19	10.94	10.51	10.47	9.94		
			左	5.19	5.70	5.69	6.19	6.58	7.33	6.71	7.74	6.76	8.24	11.26	11.01	10.65	10.24	10.15	9.65		

表67 窪河原遺跡出土の頭蓋骨の計測値と比較試料

(単位:mm)

Martin	計測項目	中世		縄文時代		古墳時代		中世		現代	
		屋代(窪河原)		津雲貝塚		西日本		材木座		関東地方人	
		SM101	清野(1925)	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
43	上顔幅	107.0	109.0	103.8				105.5	100.1	103.8	100.1
44	両眼窩幅	96.3	102.0	97.6				100.0	94.7	97.2	94.1
45	頬弓幅		143.2	132.8	134.8	121.7		134.8	124.6	132.9	124.9
46	中顔幅	101.5	103.6	100.8	102.6	98.4		101.8	95.4	98.6	93.5
47	顔高	118.4	115.8	103.3	118.2	112.4		115.8	105.1	123.8	115.0
48	上顔高	71.7	67.0	63.1	68.7	65.1		64.7	61.6	70.7	67.1
47/46	ウィルヒョウ顔示数	116.7						113.9	109.4	125.4	123.3
48/46	ウィルヒョウ上顔示数	70.6	67.7	62.8	68.7	67.0		65.6	64.1	71.8	82.0
50	前眼窩間幅	16.0	19.2	18.2	20.0	17.7		19.1	18.2	17.8	17.4
	前眼窩間示数(50/44)	16.6	18.7	18.8	19.5	18.1		19.2	19.8	18.3	18.5
51	眼窩幅	42.7	43.5	41.6	43.0	41.5		43.1	40.7	42.7	41.1
52	眼窩高	32.3	33.5	33.0	34.7	33.6		33.7	32.9	34.3	33.8
	眼窩示数(52/51)	75.6	76.5	81.0	80.6	81.5		78.2	79.9	80.4	82.4
54	鼻幅	24.7	26.6	25.4	26.0	25.4		26.6	24.7	25	24.5
55	鼻高	52.3	48.6	45.2	51.1	46.9		51.1	46.9	52	49.0
	鼻示数(54/55)	47.2	54.5	56.1	50.7	53.2		52.1	52.6	48.4	50.2
55(1)	梨状口高	37.3		31.0	31.0	28.7		30.0	27.8	30.6	28.0
57	鼻骨最小幅	9.4	9.2	8.8	7.9	7.2		8.0	7.9	7	7.1
63	口蓋幅	36.7	40.3	38.1	38.1	38.3		41.0	38.3	40	38.4

参考文献

馬場悠男 1991 「人骨計測法」『人類学講座別巻1 人体計測法』江藤盛治編集；159-358.
 Brace, C.L. & M. Nagai 1982 Japanese Tooth Size: Past and Present. Amer. J. Phys. Anthropol., 59:399-411.
 藤田恒太郎 1949 「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61；1-6.
 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』43(1)；151-163
 平本嘉助 1977 「日本人身長の時代的変化」『自然科学と博物館』44(4)；169-172
 城一郎 1938 「古墳時代日本人骨の人類学的研究」『人類学輯報』1；1-333
 清野謙次・宮本博人 1925 「津雲貝塚人骨の人類学的研究. 第二部、頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41(3、4)；1-104
 Matsumura, H. 1989 Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population. J. Anthropol. Soc. Nippon, 97(4)；493-512.
 Molnar, S. 1971 Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. Amer. J. Phys. Anthropol., 34：175-190.
 森田茂 1950 「関東地方人頭蓋骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集3』1-59

第6節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡から出土した古代2および中世の人骨

茂原信生・松島和己 1996 「中村中平遺跡（長野県飯田市）から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片」『飯田市美術博物館研究紀要』6；137-151.

鈴木尚・林都志夫・田辺義一・佐倉朔 1956 「頭骨の形質」『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』日本人類学会編 岩波書店；75-148

鈴木誠・酒井琢朗 1957 「現代樺太アイヌ歯牙および口腔の形態学的研究」『人類学輯報』18；303-346.

Ubelaker, D.H. 1989 The estimation of age at death from immature human bone. in "Age Markers in the Human Skeleton" edit. by M.Y. Iscan, Charles C. Thomas Publisher, Springfield, 55-70.

写真（図62～64）の説明

図62：窪河原遺跡出土の人骨 1

1) SK14人骨の頭蓋骨右側面 2) SK14人骨下顎骨咬合面観 3) SK19-1人骨左側面 4・5) SK19-1人骨下顎骨左側面と咬合面 6・7) SK19-2人骨の頭蓋骨と下顎骨の右側面 8) SK19-3人骨の下顎骨前方部前面

図63：窪河原遺跡出土の人骨 2

1)～8)はSK19人骨の四肢骨であるが、個体は特定できていない。1) 右脛骨 2) 右大腿骨 3) 左大腿骨 4) 左脛骨 5) 右脛骨 6) 大腿骨 7) 脛骨 8) 腓骨 9) SK30人骨頭蓋骨前面

図64：窪河原遺跡出土の人骨 3

1)～5)はSM1001の焼かれた人骨。6)～10)はSM101人骨。1) 前頭骨 2) 下顎骨右側面 3) 上顎骨口蓋面 4) 下顎骨左側面 5) 下顎骨上面観 6・7) SM101人骨の頭蓋骨前面と下顎骨の咬合面観 8) 右大腿骨 9) 左大腿骨 10) 左脛骨

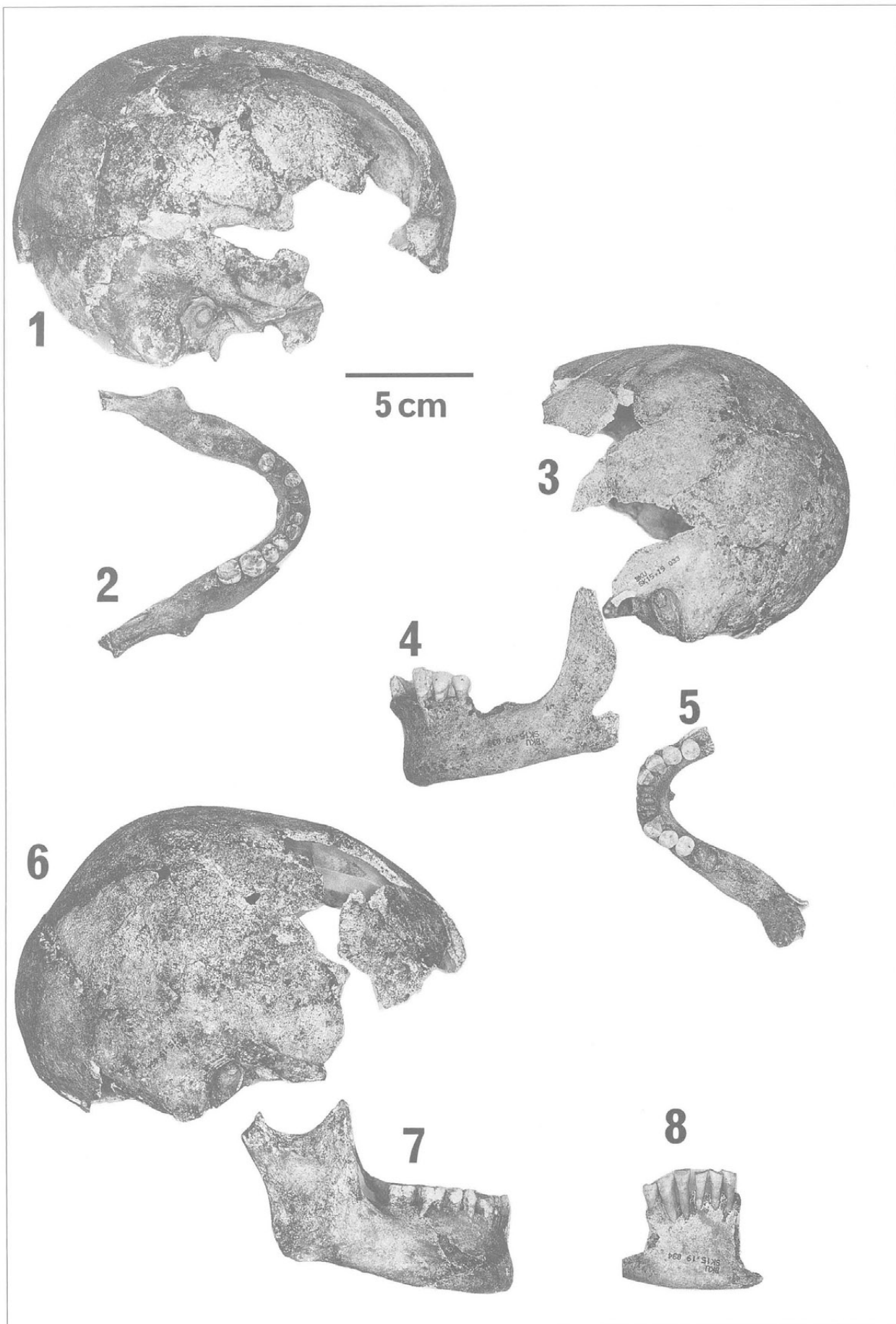


図62 窪河原遺跡出土の人骨 1

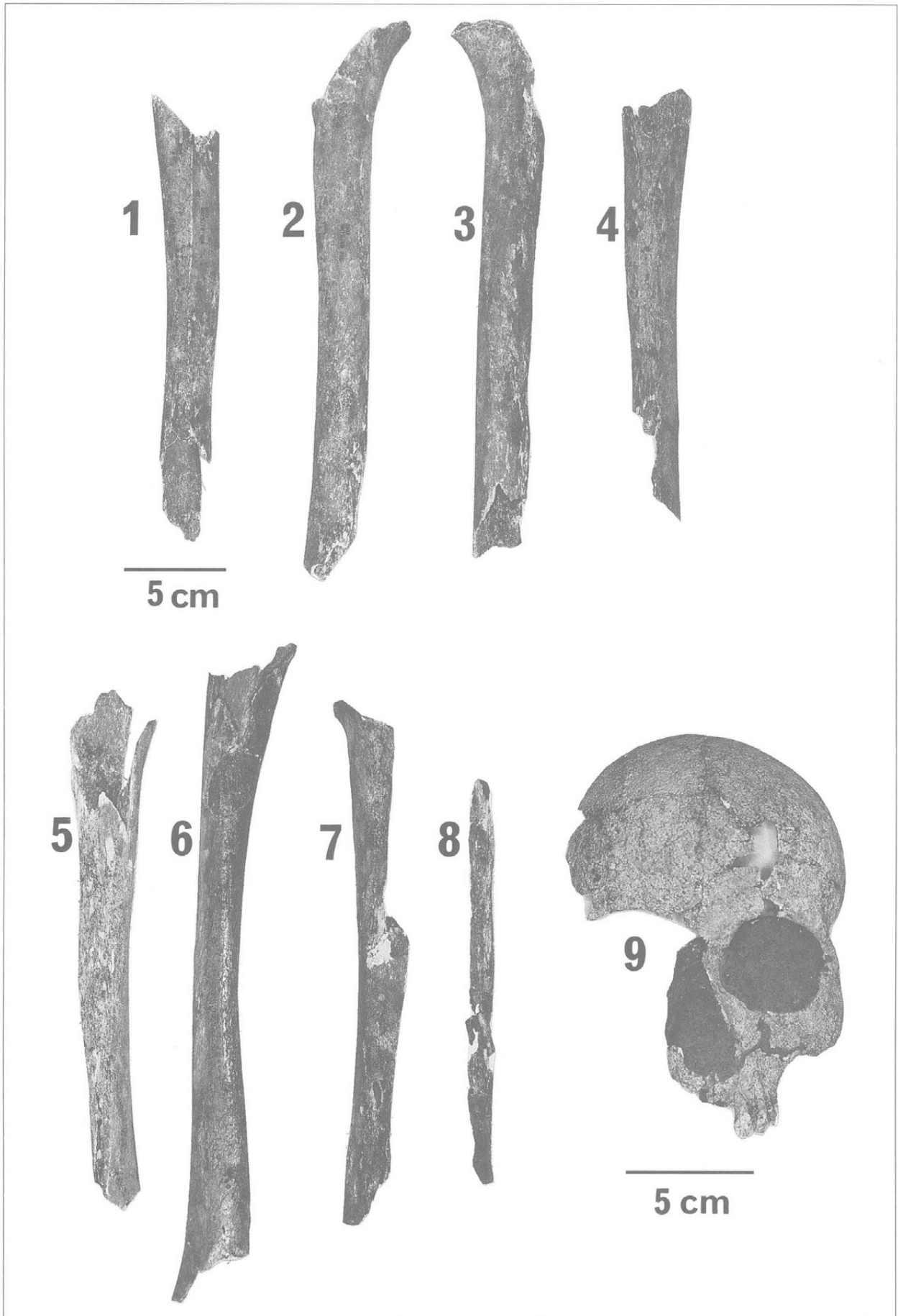


図63 窪河原遺跡出土の人骨 2

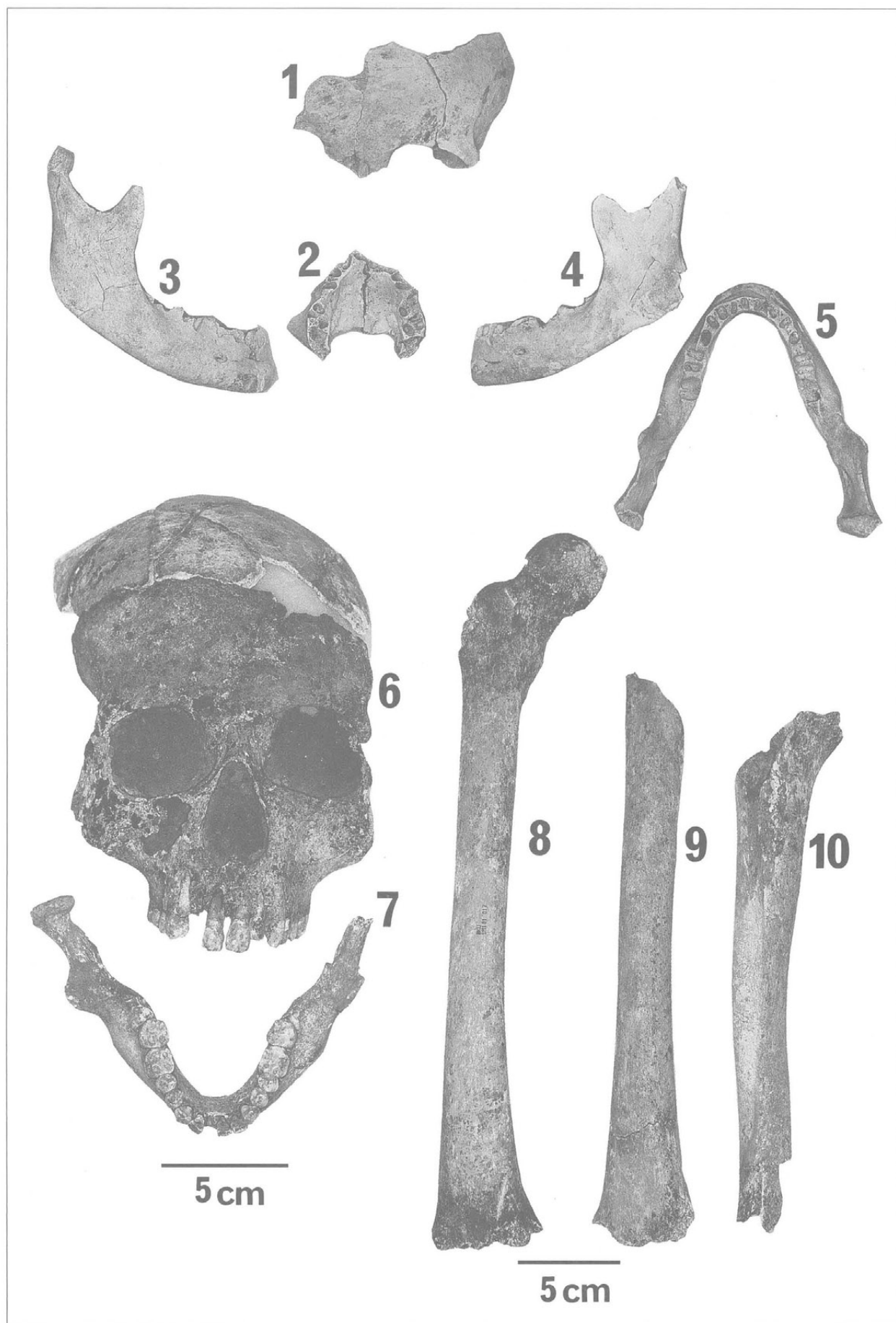


図64 窪河原遺跡出土の人骨 3

第7節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の 古代2・中世・近世の脊椎動物遺存体

獨協医科大学第1解剖学教室 櫻井秀雄

芹澤雅夫

京都大学霊長類研究所

茂原信生

1 はじめに

更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡は長野県更埴市にある遺跡で、平成3年から平成7年にかけて上信越自動車道の建設工事に伴って、長野県埋蔵文化財センターによって発掘・調査された。この遺跡は縄文時代から江戸時代に至るまでの層を含んだ複合遺跡である。すでに刊行されている『古代1編』には古代8期の洪水砂層以前までの報告をしており、本編ではそれに続く時代層より出土した動物骨に関する報告である。

2 更埴条里遺跡出土の脊椎動物遺存体

保存状態は悪く、骨格の残りは悪い。発掘された主なものは歯である。焼骨も出土している。出土したものは以下の3目4科4種である。小型の哺乳類は出土していない。

(1) 出土獣骨リスト (表68)

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

(2) 出土獣骨の特徴

A. ウマ *Equus caballus*

ウマは33点が出土している。多くは歯であり、歯以外は中節骨の1点にすぎない。ただし破片のみで歯種の判定出来ないものも多い。

B. ウシ *Bos taurus*

50点が出土している。歯以外では、距骨が3点、上腕骨1点、橈尺骨が2点、脛骨が3点、踵骨が2

点、足根骨1点、頭蓋骨(側頭骨錐体と後頭顆)が2点の計14点で残る36点が歯である。ただし破片のみで歯種の判定出来ないものも多い。

C. ニホンジカ *Cervus nippon*

ごく少量である。出土した部位はおもに角で、加工痕の見られるものもある。

D. イノシシ *Sus scrofa* (ブタの可能性もある)

SB9035、SB9029、SB9047の3カ所から出土している。出土部位は下顎骨と中手骨(あるいは中足骨)2点である。

E. イヌ *Canis familiaris*

左下顎骨後半部の一例が出土している。縄文時代犬よりやや大きい。第4小臼歯から第2大臼歯までで咬耗はほとんどないので生後1年以内のものであろう。

表68-(1) 更埴条里遺跡出土の獣骨 遺構別一覧

標本番号	補番	坂地区	遺構記号	遺構番号	層位、グリッド	時代番号	土器時期	動物種	部位	左右	上下	状態	備考
2		I	SB	804		古代2	8期後半	ウシ	歯	不明	下	I	F 切歯片、歯種不明
3		I	SB	804		古代2	8期後半	ウシ	歯	不明	不明		F 歯種不明
6		I	SB	804		古代2	8期後半	ウシ	歯	不明	下	I	F 歯種不明
203		I	SB	804		古代2	8期後半	ウシ	歯	右	上	P3~M3	C 5本
276		I	SB	806		古代2	9期	不明	四肢骨	不明			F 焼骨
11		I	SB	809		古代2	10期	ウシ	歯	左	上	P3	F
12		I	SB	824		古代2	8期後半	ウシ	歯	右	下	M3	C
13		I	SB	824		古代2	8期後半	ウシ	歯	左	上	M	F 歯種不明
14		I	SB	826		古代2	9期	不明	四肢骨	不明			F 焼骨
18		I	SB	863		古代2	8期後半	ウシ	歯	左	上	M2、M3	F 他破片少数
24		K	SB	9029		古代2	9期	イノシシ	下顎骨+歯	右	下	dp4、dIX2?	C 下顎体正中部
25		K	SB	9033		古代2	12期	ニホンジカ	角	不明			F
26		K	SB	9035		古代2	12期	ニホンジカ	下顎骨+歯	左	下	P4~M3	C
27		K	SB	9035		古代2	12期	イノシシ	下顎骨	不明			F
28		K	SB	9035		古代2	12期	イノシシ	歯	不明	不明		F 歯種不明
28		K	SB	9035		古代2	12期	ニホンジカ	歯	右	下	I1	F
29		K	SB	9035		古代2	12期	イノシシ	歯	不明	不明		F 歯種不明
31		K	SB	9035		古代2	12期	イノシシ	中手骨	左		第IV	C
34		K	SB	9035		古代2	12期	イノシシ	中手あるいは中足	不明		第2あるいは第5	C カットマーク
35		K	SB	9035		古代2	12期	ウマ	歯	左	上	M	F 歯種不明
36		K	SB	9047		古代2	10期	イノシシ	下顎骨	不明			F
38		K	SB	9049		古代2	10期	ニホンジカ?	中足骨?	不明			F カットマーク
40		K	SB	9054		古代2	10~11期	不明					F 焼骨
41		K	SB	9054		古代2	10~11期	不明					F 焼骨
166		H	SD	703		古代2	9期前後	不明	歯	不明			F
167		H	SD	703		古代2	9期前後	ウマ	歯	右	下		F 4本以上
168		H	SD	704		古代2		ウマ	歯	不明			F 2本
169		H	SD	704		古代2		ウマ	歯	不明	下		F 歯種不明
170		H	SD	706		古代2		ウマ	歯	右	上	P	F 歯種不明
172		H	SD	707		古代2	9~10期	ウマ	歯	不明	下		F 歯種不明、多数
273		I	SD	855		古代2	10期前後	ウシ	歯	不明	上		F 歯種不明
176		I	SD	873		近世~		ウシ	歯	不明	上		F 歯種不明
178		K	SD	932		中世		ウマ	指骨	不明		中節骨	F
184		K	SD	991		近世		ウマ	歯	不明	下		F 歯種不明
185		J	SD	1011		古代2		ウシ	歯	左	下	M3	C
186		J	SD	1022		古代2		ウマ	歯	不明	上		F 歯種不明
88		K	SK	9238		古代2		ウマ	歯	右	上	M2	C 89と同一個体
89		K	SK	9238		古代2		ウマ	歯	右	上	M3	C
90		K	SK	9238		古代2		ウマ	歯	左	上	P3~M1	C, F 3本
92		K	SK	9259		古代2	8期後半	ウシ	脛骨	右			F 骨髄
93		K	SK	9259		古代2	8期後半	ニホンジカ	角	不明			F カットマーク
94		K	SK	9259		古代2	8期後半	ニホンジカ	角	不明			F
95		K	SK	9259		古代2	8期後半	ニホンジカ	角	不明			F カットマーク
96	1	K	SK	9259		古代2	8期後半	ウシ	歯	左	下	M3	C
96	2	K	SK	9259		古代2	8期後半	ニホンジカ	角	不明			F
143	1	K	SK	9282		古代2		ウシ	橈尺骨	右			C
143	2	K	SK	9282		古代2		ウシ	距骨	右			C
143	3	K	SK	9282		古代2		ウシ	踵骨	右			F
143	4	K	SK	9282		古代2		ウシ	脛骨	右			F
144	1	K	SK	9282		古代2		ウシ	歯	左	上	M2、M3	C
144	2	K	SK	9282		古代2		ウシ	歯	右	上	P3、M2、M3	C
144	3	K	SK	9282		古代2		ウシ	歯	左	下	P2、P3、M2、M3	C
144	4	K	SK	9282		古代2		ウシ	歯	右	下	M1~M3	C
144	5	K	SK	9282		古代2		ウシ	歯	右	上	P3、I	C 切歯2本、
145		K	SK	9282		古代2		ウシ	足根骨	右		C+IV	C
146		K	SK	9282		古代2		ウシ	上腕骨	左			F 骨髄
147		K	SK	9282		古代2		ウシ	距骨	左			C
148	1	K	SK	9282		古代2		ウシ	橈尺骨	右			C
148	2	K	SK	9282		古代2		ウシ	距骨	右			C

表68-(2) 更埴条里遺跡出土の獣骨 遺構別一覧

標本番号	補番	仮地区	遺構記号	遺構番号	層位、グリッド	時代番号	土器時期	動物種	部位	左右	上下	状態	備考	
200	2	H						ウマ	歯	右	下	I 2	C	他破片多数、切歯咬耗ごく軽度、若い
200	1	H			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	左	上	M 1	F	
201		H						ウマ	歯	右	下		F	破片・歯種不明(2本)
202		H						ウマ	歯	不明	下		F	破片・歯種不明
205		I			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明
207		I			Ⅲ層、K9	古2-中世		ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明
208		I			Ⅲ層、F24	古2-中世		ウマ	歯	右	下	P 3、I 1	C	
209		I			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	右	上	M	F	歯種不明
261		I						ウシ	歯	不明	上		F	破片・歯種不明
263		I			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明
271		I			Ⅲ層、F24	古2-中世		ウシ	歯	不明	不明		F	歯種不明
281		I			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	不明	不明		F	歯種不明
282		I			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	不明		F	歯種不明
284		I			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	不明		F	歯種不明
210		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	左	上	M	F	歯種不明
212		J			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明
213		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	不明	下		F	歯種不明
214		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	不明	不明		F	歯種不明
216		J			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	不明		F	歯種不明
217		J			Ⅲ層	古2-中世		ウシ	歯	不明	不明		F	歯種不明
218		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	左	下		F	歯種不明
219		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	不明	下		F	歯種不明
221		J			Ⅲ層	古2-中世		ウマ	歯	不明	下		F	歯種不明
223		J						ウマ	歯	右	下		F	破片・歯種不明
286		J			Ⅲ~Ⅳa層	古代?		ウマ	歯	左	下		F	
231		K						不明						
232		K						ヒト?	四肢骨				F	焼骨
233		K						ウマ	歯・骨	不明			F	歯種・部位不明
235		K			I層落込み	現代		ウシ	歯	不明	上		F	歯片
237		K						ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明
238		K						不明					F	焼骨
239		K			Ⅲ-1層	中世		ニホンジカ	角				F	自然脱落・カットマーク
240		K			Ⅲ-2層、KM20	古代2		ウマ	歯	不明	不明		F	歯種不明
241		K			Ⅲ-2層、T108	古代2		ウシ	歯	左	下	M 3		
242		K			Ⅲ-2層、TM09	古代2		不明	四肢骨	不明			F	焼骨
249		K			K13			ウシ	歯	左	上		F	破片・歯種不明
252		K			K16			イヌ	下顎骨+歯	左	下	P4~M2		
254		K			Ⅲ-1層、PH08	中世		ウマ	歯	不明	上		F	歯種不明
267		K			Ⅲ-2層、KC17	古代2		ウマ	歯	右	上	P 4 ?	C	
270		K			落込み			ニホンジカ	歯	不明	不明		F	歯片
259		不明						ウシ	歯	不明	上		F	歯種不明

3 屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体

(1) 出土動物骨リスト (表71)

出土した動物は鳥類と哺乳類とである。哺乳類は古代遺跡から一般的に出土する種類である。鳥類は2目2科で哺乳類は4目6科6種ある。

哺乳綱 Mammalia

霊長目 Primates

オナガザル科 Cercopithecidae

ニホンザル *Macaca fuscata*

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ(あるいはブタ) *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

鳥綱 Aves

(種不明)

(2) 動物遺存体の出土状況

出土した動物骨の保存状態は一様ではない。出土した地点の土壌が大きく影響しているものと思われるが、保存状態の良いものとかかなり骨質の劣化したものが混じり合う様相である。概して縄文期の出土獣骨に比べ全体に骨質の劣化がみられ、全体の同定結果にも反映している。同定の対象となった出土骨は332点である。このうち同定できなかったものが167点を占める。不明骨については縄文編報告時と同様に台帳番号に沿って多数の骨をひとまとまりで1点として計算している。出土骨の全体量からすると同定された骨はかなりの少量である。時代順に出土動物種を並べるには時代の区切りが判然としない。また、時期別の判断材料になるほどの量がないことから出土骨全体を一括して仕分けしてみたところ、以下のような結果であった。最も出土骨の多かった動物はウマで81点検出された。ニホンジカが次いで20点で、ウシ、イノシシがそれぞれ8点ずつ出土している。イヌは6点検出された。ニホンザルとトリは各1点ずつ出土している。焼かれている骨は97点(29%)あった。

ヒトの火葬骨も細片で入り混じっている。

(3) 出土状況と種別の特徴

A. ニホンザル

ニホンザルは右大腿骨の骨頭部分が出土している。同じ遺構付近の骨を検索したが、これ以外の部分は認められなかった。焼かれてはいない。他の部分は消失したと思われる。現生の標本に比較して特に大きさの違いは見られない。

B. イヌ

イヌは6点出土している。出土部位は頸椎が1点、歯の残る左側の上顎骨が2点、そして歯が残る右の下顎骨が1点と左右の上腕骨が1点ずつである。このうち保存状態の良かった左上顎犬歯と右下顎骨と第1大白歯、さらに左上腕骨について計測を行った。計測結果は以下のようである。焼かれた骨はなかった。

左上顎犬歯	近縁心径	歯根部分で	9.9ミリ
		エナメル質で	9.8ミリ
右下顎骨	下顎体高(M1部)		22.7ミリ
	下顎体厚(〃)		11.8ミリ
下顎第一大臼歯	近縁心径		18.9ミリ
	頬舌径		7.8ミリ
左上腕骨	最大長		152.19ミリ
	骨頭—遠位端		149.4ミリ
	近位端幅		26.8ミリ
	遠位端幅		33.3ミリ

この上腕骨の長さを長谷部(1952)の型区分にあてはめてみると、中大級の小さい方に相当している。日本在来犬である縄文時代犬のオスは中小級(上腕骨長121ミリ~135ミリ)でありそれと比較するとかなり大

きいことになる。

日本在来犬は時代をおって大きくなる傾向を示しているが、このイヌはそれ以上に大きい。時代を詳細に調査する必要があるだろう。

C. イノシシ

イノシシは8点が検出された。側頭骨の一部の破片が1点と遊離歯が6点見ついている。もう1点は左の上腕骨遠位部が出土した。このうち焼かれていたのは側頭骨と歯1点の2点だけである。

D. ニホンジカ

20点が検出された。このうちの7点が角で、保存の良い3点を写真版に掲載した。加工痕の認められたものが1点あった。角の先端から約7センチの部分で近位部分に鋭利な道具で削り落とそうとした切断面が多数見られる。切断面には黒く焼けた後が見られる。角以外では下顎骨2点と距骨が3点良好な状態で出土している。頭蓋骨の破片は見つかっていない。他の部分の出土骨は小破片が多い。焼かれている骨は前述の角を含め5点であった。

E. ウシ

8点の骨が出土している。いずれも焼けていないこともあり、状態は悪い。左下顎骨が1点出土していて、歯も植立状態ではあったが骨体部分の傷みがひどく計測するには至らなかった。この他に残存部分の多かった骨は右の肩甲骨で近位の関節部分の出土が見られた。さらに左の中足骨は骨幹部分が出土している。

F. ウマ

古代2・中・近世遺構内から出土した動物骨で最も多かったのがウマである(81点)。古代1の遺構においてもウマの出土量は最も多かったが、同様の状況となった(茂原・櫻井他1999)。他の動物と同様保存状態は悪い。81点のうち71点が歯である。歯のうちで歯種を同定できたものは32点で、あとは歯冠部分が破損した破片である。歯種から判断できる最少個体数は3であった。歯以外の頭部は下顎骨も含めて検出されていない。四肢の長骨も出土していない。骨端部分や緻密質の保存状態が比較的良好であった中手骨1点と中足骨2点について計測を行った(表69)。林田ら(1957)の体高推定式で体高を計算してみると、130.1センチであった。御崎ウマや木曾ウマなどの中型馬の体高に相当する(表70)。古代1遺構から出土したウマの計測値の範囲内(表69)であり、同等の体格のウマであったと思われる。

表69 屋代遺跡群 古代2・中世・近世遺構から出土したウマ中足骨の計測値(単位=mm)

略号はDriesch(197)にしたがっている。

標本番号	種名	左右	骨名	GL	GLC	Bp	Bd	箱番号	林田の方法 推定体高(cm)
1015	ウマ	右	中足骨	262		47	48	6	130.1
7138	ウマ	左	中足骨				47	6	
06113	ウマ	左	中足骨	271		48	48	1	134.4
07135	ウマ	左	中足骨	245		45	43	188	121.8
09173	ウマ	右	中足骨				43	130	
13250	ウマ	左	中足骨	253			41	140	125.7
16313	ウマ	右	中足骨	267		51	45	153	132.5
16315	ウマ	左	中足骨	264		48	45	153	131.0
18343	ウマ	左	中足骨	228		49	49	142	113.6
19376	ウマ	左	中足骨	274		49	52	160	135.8
22421	ウマ	左	中足骨	257		50	43	206	127.6
25485	ウマ	右	中足骨	266		50		206	132.0
30593	ウマ	左	中足骨	259		47		232	128.6

表70 在来馬の四肢骨計測値 (西中川 1991) 単位=cm

		トカラウマ		御崎馬		木曾馬	
		male	female	male	female	male	female
中足骨	最大長	23.80	23.87	25.46	26.45	0	29.96
	近位端幅	4.18	4.12	4.87	4.91	5.28	5.13
	遠位端幅	4.30	4.13	4.74	4.76	5.10	5.01

G. トリ

左上腕骨が1点出土しているが、骨の状態から判断するとごく近世のものか現生の骨が混入したものと思われる。種は不明である。また焼かれた骨ではない。

表71-1) 屋代遺跡群出土の獣骨 遺構別一覧

台帳番号	仮地区	出土遺構・グリッド・基本層位	出土地点	時代番号	土器編年	種名	骨名	部位	左右	上下	状態1	状態2	c	p	h	pe	ps	s	ds	de	カッター、骨格器ほか	備考	備考2	
4075	1	SB1	覆土中	古代2	14期	不明																		
7130	1	SB5	貼床中	古代2	14期	不明																		
6118	1	SB6		古代2	13期	ウマ	歯片				f												鉄製品NO.1	
6109	1	SB21		古代2	14期	不明																		
4070	1	SB28	カマド	古代2	14~15期	不明																		
6107	1	SB32		中世		不明																		
3059	3	SB3022	炭化物集中②	古代2	13期	不明																	0359?	焼骨
3060	3	SB3022	炭化物集中②	古代2	13期	不明																	0360?	焼骨
5088	4	SB4503		古代2	13~14期	不明																		土倉浸
6114	4	SB4003	掘方	古代2	14期	ニホンジカ	角片	先端部			f													焼骨
1001	1	SD23		中世		イヌ	上腕骨		l		c		1											
1004	1	SD23	中世層	中世		イヌ	上顎骨+歯片	C.P3	l	u	f													
1005	1	SD23	中世層	中世		イヌ	頸椎		rl		f													
1006	1	SD23	中世層	中世		ニホンジカ	角片				f													加工品
1007	1	SD23	中世層	中世		イヌ	上顎骨+歯片	M2	l	u	f													
1008	1	SD23	中世層	中世		ニホンジカ	角				f													解体痕 加工痕あり
1009	1	SD23	中世層	中世		ウマ	歯片	I2	l	u	c		1											
1010	1	SD23	中世層	中世		ウマ	歯片	M3	r	l	f													
1011	1	SD23	中世層	中世		イヌ	下顎骨+歯	P3-M2	r	l	f													歯あり
1012	1	SD23	中世層	中世		ヒト	下顎骨+歯	歯		l	f													人間、虫歯あり
1013	1	SD23	中世層	中世		ウマ	肩甲骨		l		f				1									
1014	1	SD23	中世層	中世		ヒト	大腿骨		l		f						1	1	1					
1015	1	SD23	中世層	中世		ウマ	中足骨		r		c		1											破片あり
1016	1	SD23	中世層	中世		ウマ	中手骨		r		c		1											
1018	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	中手骨		r		f					1	1	1						
1019	1	SD23	最下砂層	古代2		ニホンジカ	角坐部				f													
1020	1	SD23	最下砂層	古代2		ニホンジカ	距骨		l		c		1											
2021	1	SD23	最下砂層	古代2		ニホンジカ	距骨		r		c		1											
2022	1	SD23	最下砂層	古代2		ウシ	距骨		r		f													解体痕
2023	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	歯片				f													破片2あり
2023	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	歯片	M1	r	l	f													破片2あり
2023	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	歯片	M2.M3	r	u	f													破片2あり
2024	1	SD23	最下砂層	古代2		ニホンジカ	角片				f													細片あり
2025	1	SD23	最下砂層	古代2		不明																		細片あり
4063	1	SD23		古2~中世		不明																		細片あり
6119	1	SD23		古2~中世		不明																		
6120	1	SD23	最下砂層	古代2		不明																		焼骨
7121	1	SD23		古2~中世		不明																		焼骨
7122	1	SD23		古2~中世		不明																		焼骨
7123	1	SD23		古2~中世		不明																		焼骨
7124	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	尺骨		l		f						1							
7125	1	SD23		古2~中世		ウマ	歯片	臼歯	l	l	f													焼骨
7134	1	SD23		中世		トリ	上腕骨		l		c		1											現生のもの?
7135	1	SD23		中世		ウマ	歯片	P2	r	u	f													
7138	1	SD23	最下砂層	古代2		ウシ	下顎片																	

表71-(2) 屋代遺跡群出土の獣骨 遺構別一覧

台帳番号	仮地区	出土遺構・グリッド・基本層位	出土地点	時代番号	土器編年	種名	骨名	部位	左右	上下	状態1	状態2	c	p	h	dh	pe	ps	s	ds	de	カ17-9 骨格器ほか	備考	備考2
7138	1	SD23	最下砂層	古代2		ウシ	下顎骨+歯片	P3-M3	l	l	f													
7138	1	SD23	最下砂層	古代2		ウマ	中足骨																	
7139	1	SD23		中世		ニホンジカ	角片				f											加工品	焼骨	
7139	1	SD23		中世		ウマ	歯片	I2	l	l	f													
7139	1	SD23		中世		イヌ	上腕骨	縦半分	r	r	f				l									
3045	1	SD24		中世		ウマ	歯片	I1	l	u	f													焼骨
3045	1	SD24		中世		ウマ	歯片	I1	r	u	f													焼骨
3045	1	SD24		中世		不明																		焼骨
3047	1	SD24		中世		不明																		焼骨
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	M2	l	u	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	M3	r	l	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	P4	r	l	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	M3	f	l	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	P4	l	u	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	M1	l	u	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	臼歯	l	u	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	臼歯	l	u	f													
3051	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片	M2	r	l	f													
3052	1	SD24		古2~中世	15期-中世前	ウマ	歯片				f													微細片多数
5084	1	SD24		中世		ウマ	歯片	上顎歯		u	f													
6104	1	SD25		近世		不明																		
3041	1	SD27		近世		不明																		焼骨
3046	1	SD27		近世		ウマ	歯片	M3	l	l	f													歯(1)あり
3042	1	SD27		近世		不明																		
5088	1	SD30		近世		ウマ	歯片	I2	r	l	f													焼骨
4061	1	SD31		近世		ウマ	歯片				f													
5085	1	SD31		近世		不明																		焼骨
7128	1	SD31		近世		不明																		焼骨
1013	3	SD3241	覆土中			ウマ	歯片				f													
1005	4	SD4007		中世		ウマ	歯片	P4	r	u	f													
1008	4	SD4007		中世		ウマ	歯片	下顎歯		l	f													細片多数
1009	4	SD4007		中世		不明																		
1010	4	SD4007		中世		ウマ	歯片	I2	l	l	f													その他の破片多数
4079	4	SD4007	攪乱西	中世		ウマ	歯片	M1	l	u	f													
4079	4	SD4007	攪乱西	中世		ウマ	歯片	M1	r	u	f													
4079	4	SD4007	攪乱西	中世		ウマ	歯片				f													
4080	4	SD4007	攪乱東	中世		ウマ	歯片				f													
1012	4	SD4008		中世		ウマ	歯片				f													細片あり
1004	4	SD4009		中世		ウマ	歯片				f													
1020	4	SD4200				不明																		
31704	5b	SD5001		中世		イノシシ	歯片	M2	l	u	f													
12344	5b	SD5005		中世		不明																		細片多数あり
2026	4	SP4501	焼場後	中世		不明																		焼骨
5086	4	SP4501	第3検出面	中世		不明																		炭化物碎片
4073	1	SK1		中世		ヒト																		細片あり
2040	1	SK11		中世		不明																		焼骨
3054	1	SK11		中世		不明																		細片あり
3059	1	SK11		中世		イノシシ	側頭骨																	細片あり
3059	1	SK11		中世		不明																		細片あり
7133	1	SK27		中世		不明																		焼骨
2036	1	SK39		中世		ウマ																		細片あり
2027	1	SK44		中世		ヒト																		細片あり
2034	1	SK46		古代2	15期前後	ヒト																		細片あり
7136	1	SK46		古代2	15期前後	ヒト																		焼骨
4076	1	SK47		中世		不明																		
3043	1	SK49		中世		ウマ																		細片あり
2030	1	SK57		中世		ヒト																		細片あり
2037	1	SK59		中世		不明																		焼骨
2028	1	SK68		中世		ヒト																		
5090	1	SK73		中世		ウマ	歯片				f													
3044	1	SK85		中世		不明																		
6101	1	SK85		中世		ヒト	歯片				f													
7129	1	SK106		中世		ウマ	歯																	
6103	1	SK242		中世		不明																		焼骨
3056	1	SK311		中世		不明																		焼骨
6102	1	SK312		中世		不明																		焼骨
5981	1	SK312		中世		不明																		焼骨
4079	1	SK313		中世		不明																		焼骨
6116	1	SK313		中世		不明																		焼骨
2029	1	SK358		古代2		ヒト	歯片				f													
2032	1	SK358		古代2		ヒト	歯片				f													一部土含浸
2033	1	SK359		古代2		ヒト	歯片				f													一部土含浸
7137	1	SK360		古代2		ヒト																		
2038	1	SK374		中世		ウマ	歯片	M2	l	l	f													歯の破片多数あり
2038	1	SK374		中世		ウマ	歯片	P4	l	l	f													歯の破片多数あり
2038	1	SK374		中世		ウマ	歯片	M1	l	l	f													歯の破片多数あり
2038	1	SK374		中世		ウマ	歯片				f													歯の破片多数あり
2038	1	SK374		中世		ウマ	歯片				f													歯の破片多数あり
352	2	SK1021		中世		ニホンジカ	角片				f													

表71-(3) 屋代遺跡群出土の獣骨 遺構別一覧

台帳番号	仮地区	出土遺構・クワッド・基本層位	出土地点	時代番号	土器編年	種名	骨名	部位	左右	上下	状態1	状態2	c	p	h	d	e	s	d	s	d	e	カマク、骨格器ほか	備考	備考2				
4061	3	SK3002	第2検出面	中世		不明																		0461?	焼骨				
4062	3	SK3003	第2検出面	中世		不明																			0462?	焼骨			
4063	3	SK3021		中世		ヒト																			0463?	焼骨			
3042	3	SK3236	第2検出面	古代2	14期	不明																			焼骨				
4064	3	SK3289	第2検出面	中世		不明																			0464?	焼骨			
4065	3	SK3289	第2検出面	中世		不明																			0465?	焼骨			
4066	3	SK3289	第2検出面	中世		不明																			0466?	焼骨			
4081	3	SK3289		中世		不明																			0481?	焼骨			
4067	3	SK3290	第2検出面	中世		不明																			0467?	焼骨			
4068	3	SK3290	第2検出面	中世		不明																			468?	焼骨			
4069	3	SK3290	第2検出面	中世		ヒト																			0469?	焼骨			
4070	3	SK3290	第2検出面	中世		不明																			470?	焼骨			
4076	4	SK4009		中世		不明																				焼骨			
6115	4	SK4020		中世		不明																				焼骨			
1007	4	SK4029	炭化物層中	中世		不明																				焼骨			
4077	4	SK4041	攪乱内	中世		不明																			SK4041横	焼骨			
4078	4	SK4041		中世		不明																				焼骨			
6116	4	SK4070		中世		不明																				焼骨			
1003	4	SK4113		中世		不明																					焼骨		
6118	4	SK4113		中世		不明																					焼骨		
5097	4	SK4182	埋土1	中世		ヒト																				焼骨			
5096	4	SK4182	底たちわり	中世		不明																					焼骨		
5098	4	SK4189	埋土	中世		不明																					焼骨		
6106	4	SK4195		中世		ヒト	歯片					f														人歯、土含			
6106	4	SK4195		中世		ヒト	歯片					f														人歯、土含			
1016	4	SK4221		中世		ウマ	歯片	P3	l	u	f															カマク	焼骨		
6113	4	SK4259		中世		不明																				焼骨			
5100	4	SK4513		中世		不明																							
2024	4	SK4530		中世		ウマ	中節骨	縦半分				f				1	1	1	1	1									
2034	4	SK4608	底部	中世		ウシ	歯片					f																	
2023	4	SK4608		中世		ウマ	歯片	M1	l	u	f																		
2023	4	SK4608		中世		ウマ	歯片	M1	r	u	f																		
2023	4	SK4608		中世		ウマ	歯片	臼歯	r	u	f																		
2023	4	SK4608		中世		ウマ	歯片					f																	
41917	5b	SK5001		中世		ヒト																							
40884	5b	SK5001		中世		ヒト																							
491073	5b	SK5001		中世		ヒト																							
4126	5b	SK5002		中世		不明																							
29662	5b	SK5004	下遺構	中世		不明																							
491072	5b	SK5005		中世		ヒト																							
484049	5b	SK5005		中世		ヒト																							
491080	5b	SK5005		中世		不明																							
4106	5b	SK5024	墓の土	中世		不明																							
471032	5b	SK5071		中世		ヒト																							
8259	5b	SK5169		中世		不明																							
2038	5a	SK6143		中世		不明																							
2029	5a	SK6159		中世		ヒト																							
3041	5a	SK6159		中世		ヒト																							
3043	5a	SK6233		中世		ヒト																							
3043	5a	SK6233		中世		ヒト																							
1001	6a	SK7003		中世		不明																							
4078	1	III層		古2-中世		ウマ	歯片					f																	
1011	2	III層	第2検出面	古2-中世		ウシ	歯片	M3	r	u	f																		
3049	2	III層		古2-中世		ウシ	歯片					f																	
2023	2	III層		古2-中世		ウマ	歯片	I2	l	l	f																		
1018	2	III層		古2-中世		ウマ	歯片					f																	
2038	2	III層		古2-中世		ウマ	歯片		l			c	1																
1020	2	III層		古2-中世		種不明	歯片					f																	
2037	2	III層		古2-中世		種不明	歯片					f																	
1018	4	III層		古2-中世		ウマ	歯片	臼歯	l	u	f																		
1018	4	III層		古2-中世		ウマ	歯片	M2	r	u	f																		
1018	4	III層		古2-中世		ウマ	歯片					f																	
2022	4	III層		古2-中世		ウマ	歯片					f																	
26619	4b	III層	火葬墓内	古2-中世		ヒト																							
1014	4	III層		古2-中世		ウマ	歯片					f																	
4109	5b	III層		古2-中世		ヒト	歯片	P2	r	u	f																		
25586	5b	III層		古2-中世		不明																							
37836	5b	III層		古2-中世		不明																							
26617	5b	III層		古2-中世		不明																							
44976	5b	III層	東西1/2北	古2-中世		イノシシ	歯片	I2	r	l	f																		
44973	5b	III層	東西1/2北	古2-中世		不明																							
39879	5b	III層		古2-中世		ウシ	肩甲骨		r		f																		
29663	5b	III層	1検	古2-中世		ウマ	歯片	P3	r	l	f																		

第7節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の古代2・中世・近世の脊椎動物遺存体

表71-(4) 屋代遺跡群出土の獣骨 遺構別一覧

台帳番号	仮地区	出土遺構・グリッド・基本層位	出土地点	時代番号	土器編年	種名	骨名	部位	左右	上下	状態1	状態2	c	p	h	d	e	s	d	e	カトマツ、骨格器ほか	備考	備考2
28649	5b	Ⅲ層		古2-中世		ニホンジカ	趾骨		r		f											一部炭化	焼骨
19479	5b	Ⅲ層		古2-中世		ヒト	歯片				f												
29670	5b	Ⅲ層		古2-中世		ヒト	頭蓋骨片				f												
18443	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
18445	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
18447	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
19466	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
19469	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
19471	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
19472	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
20481	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
22526	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
25588	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	細片あり
25591	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
25596	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
26614	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
29665	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
29669	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
29671	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
29673	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
30688	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
30692	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
36803	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
36812	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
37822	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
39877	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
41912	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	
44977	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
45981	5b	Ⅲ層		古2-中世		不明																	焼骨
4064	1	Ⅲ層	5a層	古2-中世		ウマ	歯片				f												細片多数
4065	1	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ウマ	歯片				f												細片あり
4066	1	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ウマ	歯片				f												細片多数
4080	1	Ⅲ層		古2-中世		ウマ	歯片				f												細片あり
5094	1	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ウマ	歯片				f												
2039	1	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	
4072	1	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	
4077	1	Ⅲ層		古2-中世		ウマ	歯片				f												
2036	2	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ウマ	歯片		r	u	f												
2033	2	Ⅲ層		古2-中世		種不明	歯片				f												
3048	2	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		種不明	歯片				f												
2026	2	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		不明																	
4073	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ヒト																	焼骨 473?
4077	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ヒト																	焼骨 477?
4074	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ヒト?																	474?
4075	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ヒト																	焼骨 475?
4076	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		ヒト																	焼骨 476?
4078	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		不明																	焼骨 478?
4079	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		不明																	焼骨 479?
4080	3	Ⅲ層	第2検出面	古2-中世		不明																	焼骨 480?
3044	3	Ⅲ層	第3-1	古2-中世		ウマ	歯片				f												
2034	3	Ⅲ層	炭化物集中1	古2-中世		不明																	炭化物集中1 焼骨
2030	4	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		ウマ	歯片				f												北はずれ細片あり
1019	4	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	焼骨
3057	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		イノシシ	上腕骨		l		f						1	1					
2025	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		イノシシ	歯片				f												焼片、歯あり 焼骨
2027	5a	Ⅲ層	攪乱	古2-中世	-	ニホンザル	大腸骨		r		f				1								加工品
2021	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		ニホンジカ	下顎骨	切歯部			f												
2022	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		ニホンジカ	中足骨		l		f							1	1				
2021	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	焼骨
2023	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	
2024	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	焼骨
2025	5a	Ⅲ層	第1検出面	古2-中世		不明																	焼片、歯あり 焼骨
2028	5a	Ⅲ層	攪乱	古2-中世	-	ニホンジカ	中手or中足骨				f								1				細片あり 焼骨、若年
2027	5a	Ⅲ層	攪乱	古2-中世	-	ニホンジカ	楔骨		l		f								1	1			解体痕
2028	5a	Ⅲ層	攪乱	古2-中世	-	ニホンジカ	C+IV足根骨		r		f												細片あり
2027	5a	Ⅲ層	攪乱	古2-中世	-	ニホンジカ	趾骨		l		c		1										焼骨
11336	5b	Ⅲ層	中央やや北	古2-中世		不明																	土含浸、細片多数
33757	5b	Ⅲ層	中央部東側耕作跡床	古2-中世		不明																	
34765	5b	Ⅲ層	中央部東側耕作跡床	古2-中世		不明																	
35797	5b	Ⅲ層		古2-中世		ニホンジカ	歯片		?	?	f												
34675	6a	Ⅲ層		古2-中世		ウマ	中手骨		l		f							1	1	1	1		破片多数

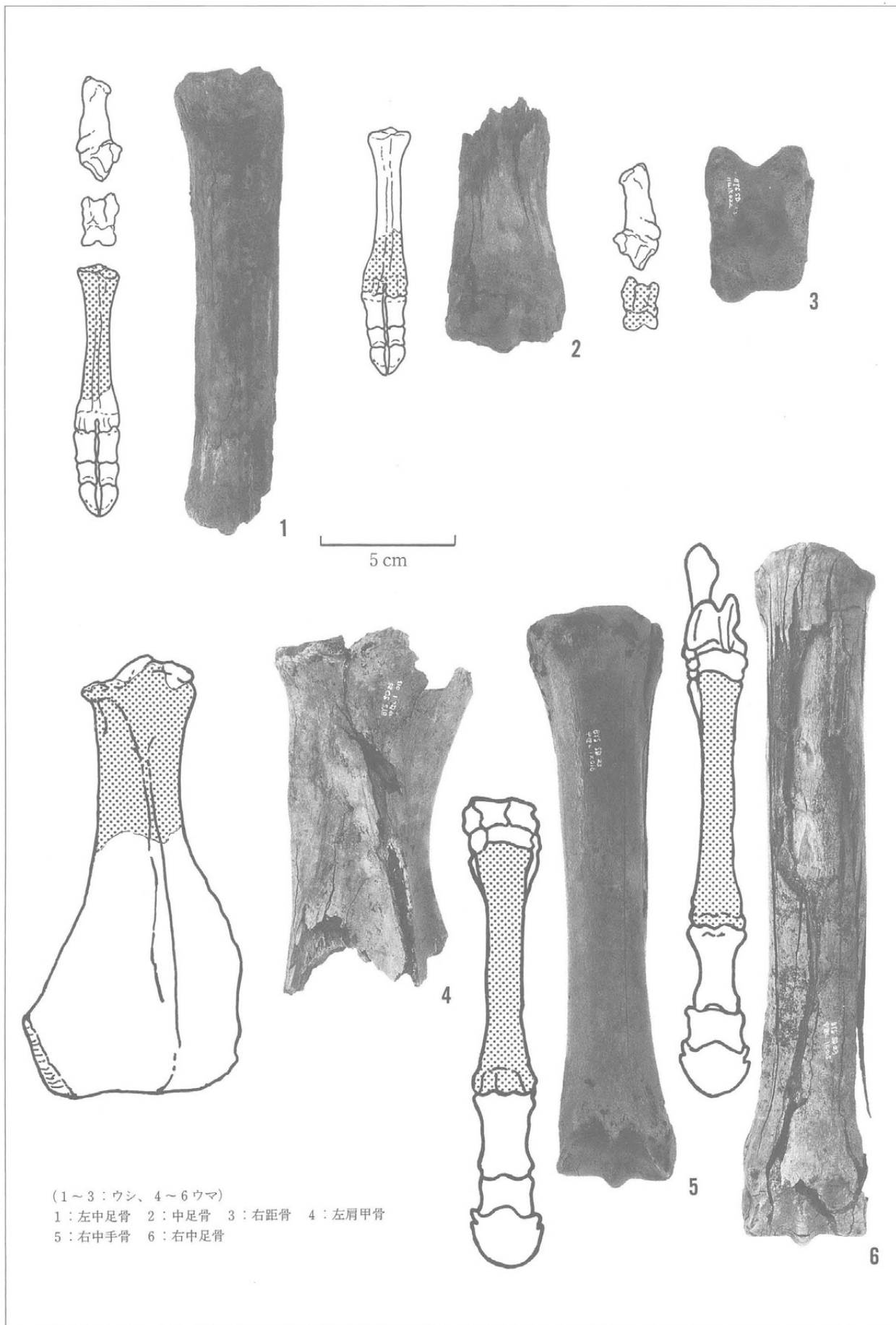


図65 屋代遺跡群出土のウシ・ウマ

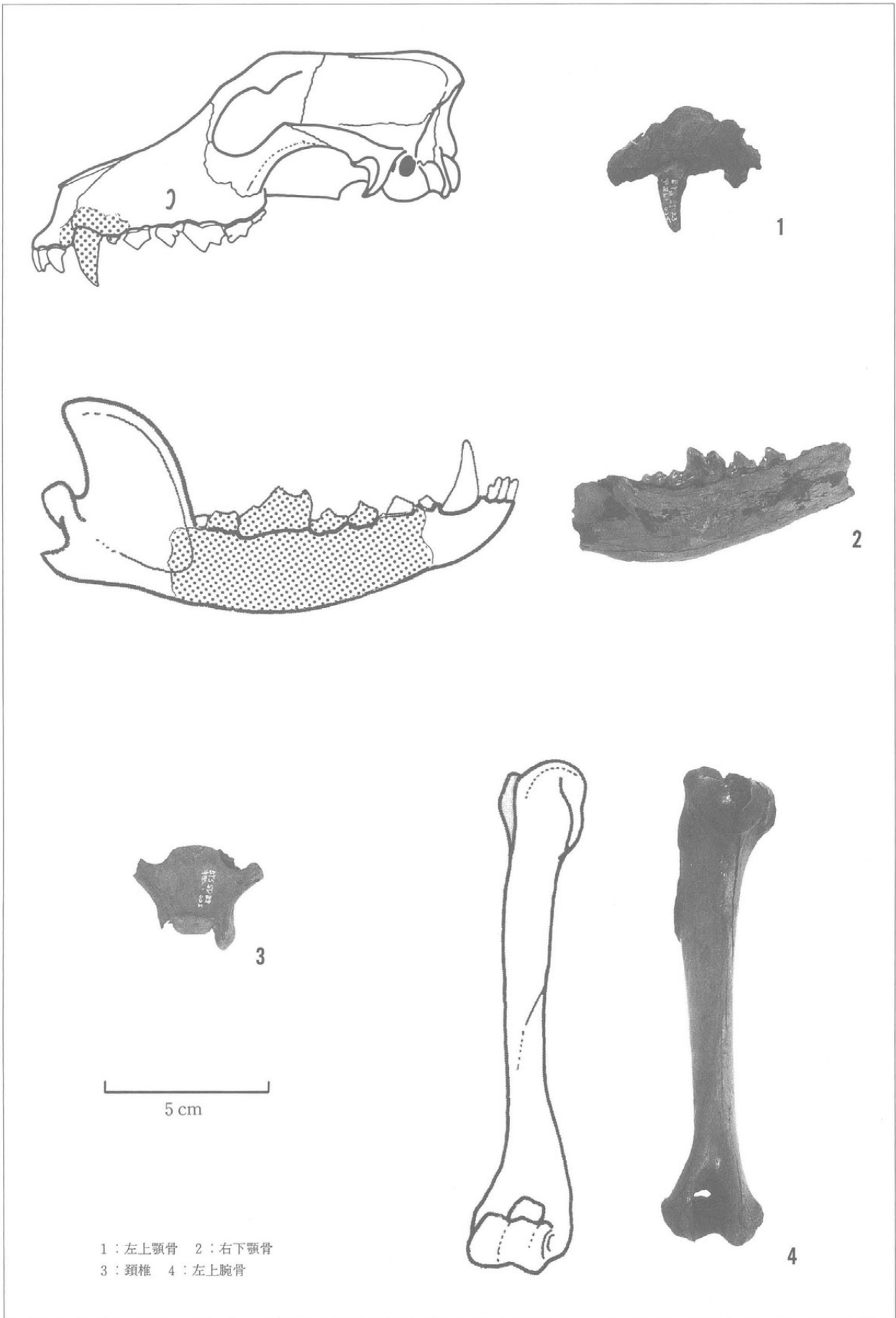


図66 屋代遺跡群出土のイヌ

4 窪河原遺跡出土の脊椎動物遺存体

(1) 出土脊椎動物のリスト (表72)

哺乳綱 Mammalia

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

(2) 出土脊椎動物遺存体の特徴

この遺跡から出土した脊椎動物遺存体は3種類である。哺乳動物と鳥類である。哺乳動物ではウマ *Equus caballus* とイヌ *Canis familiaris* の2種が出土しているがいずれも完形はなく破損している。また、トリの骨が含まれるが、現代のものである可能性が非常に高い。

A. GS12グリッド出土動物骨

ウマの左寛骨が残っている。腸骨、恥骨、坐骨の端がいずれも破損している。詳細は不明である。

B. SD104出土動物骨

ウマの撓尺骨の尺側半が残っている。中央付近に大きめのえぐれがあり、人為的な解体痕(カットマーク)と思われる。

C. SD106出土動物骨

ウマの右脛骨骨幹が残っている。特記すべきことはない。

D. SK17出土動物骨

ウマの上顎骨と上顎歯が出土している。上顎歯は第2小臼歯から第3大臼歯までのすべてが残っている。また、上顎切歯と思われる切歯が3本(左第1切歯、第3切歯、および右第3切歯)がある。頭蓋骨では右側頭骨錐体と骨片が少量出土している。歯冠は短く咬耗しており、年齢は高いと推測される。第1大臼歯は中央のエナメル稜が消失するほど咬耗している。

E. SK36出土動物骨

ウマの歯の破片が出土しているが、歯種は不明である。

F. SK40わき出土動物骨

ウマの基節骨が残っているが、保存状態はよくなく表面はあれている。

G. SK110出土動物骨

トリの長骨が3本出土しているが、骨質や破損状態から判断して現代のもの可能性が高い。

H. 礫層最下部動物骨

ウマの下顎歯右第2大臼歯が残っている。

I. Z出土動物骨(出土位置不明)

ウマの上顎左第4小臼歯と思われる。

J. III-1. 10層上部出土動物骨

イヌの右上腕骨骨幹が出土している。さほど大きなイヌではない。縄文時代から続いている在来日本犬程度で、現生のシバイヌほどの大きさであろう。

表72 窪河原遺跡出土の獣骨 遺構別一覧

台帳番号	補番	仮地区	出土場所	時代番号	土器時期	種名	骨名	部位	左右	上下	状態1	状態2	c	p	h	d	pe	ps	s	ds	de	備考	
8144	23	H5	SD104	中世		ウマ	橈尺骨	骨幹	不明				F					1	1	1		尺骨半のみ、カットマーク?	
8145	24	H5	SD106	中世		ウマ	脛骨	骨幹	右				F					1	1	1			
3049	66, 67	H2	SK16	中世	13C~14C前	不明	骨	尾骨					F									4点、同一種と思われる	
4068		H2	SK17	中世		ウマ	寛骨		右				F									ほぼ完形	
4069	1	H2	SK17	中世		ウマ	上顎骨+歯	P2?M3	左右	上			F									歯はそろっている	
4069	2	H2	SK17	中世		ウマ	歯	I2, I3	左	上			C										
4069	3	H2	SK17	中世		ウマ	歯	I3	右	上			C										
4069	4	H2	SK17	中世		ウマ	頭蓋骨	側頭骨錐体	右														
3054		H2	SK36	中世		ウマ	歯	切歯片	不明	不明			F									咬痕なし	
3055		H2	SK40わき	中世		ウマ	指骨	基節骨	不明				C										
5100		H5	SK110	中世		ウマ	歯	P4	左	上			C									NO. 44	
7132	36	H5	SK110	中世		トリ	上腕骨等															現代のものである可能性がある	
8147	1	H5	SK110	中世		ウマ	上顎骨+歯	P3-M2	右	上												2と同一個体、他に頭蓋骨片	
8147	2	H5	SK110	中世		ウマ	上顎骨+歯	P3, M1-M3	左	上												1と同一個体	
8147	3	H5	SK110	中世		ウマ	上顎骨+歯	P3-M2	右	上												4と同一個体	
8147	4	H5	SK110	中世		ウマ	上顎骨+歯	P2-M2	左	上												3と同一個体	
8147	5	H5	SK110	中世		ウマ	歯	I2	左	上			C										
2037		H6	Ⅲ-1, 10 層上部	中世		イヌ	上腕骨		右				F					1	1	1		骨端欠	
4071		H2	北調査区 畑面直上	中世		ウマ	上腕骨		左				F						1	1	1	1	
8146		H5	燧層最下部	平安以前		ウマ	歯	M2	右	下													
8146		H5	燧層最下部	平安以前		ウマ	歯	M2	右	下			C										若い
4068		H2	GS12グリ ッド			ウマ	寛骨		左				F									恥・坐・腸骨の端が破損	
5100	44	H5	Z			ウマ	歯	P4	左	上													

5 まとめと考察

本節で扱った獣骨の状況は、縄文時代から古代初期までの出土骨と比べて量・質ともに違いが見られた。同定された骨でみるとイノシシ・ニホンジカが少なく、ウシ・ウマが多い。部位の判明しない不明骨中の破片はウマと考えられるものも多く結果として表われていないが、潜在量としてはウマが多数を占めると思われる。焼けている骨の少ないことは、保存されず消失した骨が多いことを示しているとも考えられるが、古代初期のウマはやはり焼けていない骨が多いにも関わらず、かなり良好な保存状況であった。屋代遺跡群①区SD23やSD24からは保存状態の良好な骨がまとまって出土しており、出土地点・出土層の状態による違いは出土動物相を考える上で重要な要素である。また、ウシ・ウマについては生業の変化に伴い、単に住居内の食料としてだけでなく、飼育・労役や交通の手段であったことを考えるならば、イノシシやニホンジカの利用廃棄の形態との違いが出土の傾向に影響しているのではないだろうか。全時代を通しての検討は総論編で報告したい。

参考文献

Driesch, A. von den 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1:1-137
 林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告No.6』146-156
 西中川駿 1991 「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書』P.197
 斎藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法。私家版（東京）』1-138
 櫻井秀雄・茂原信生 1993 「北村遺跡出土の哺乳動物遺存体」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 北村遺跡』403-443
 茂原信生・櫻井秀雄・今野 渉 1999 「上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編』342-378。

写真の説明

図65・66の写真に添付されている図のシャド一部は写真のおおよその部位を示す。
 参照図の縮尺は図版の縮尺と一致しない。

第10章 手工業生産物に関する成分分析

第1節 金属製品成分分析

1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土 鉄製品・鉄滓・羽口等の分析・調査

川鉄テクノロジー株式会社 分析・評価センター

埋蔵文化財調査研究室 岡原 正明

伊藤 俊治

はじめに

更埴条里遺跡および屋代遺跡群より出土した鉄滓、鉄塊、鉄製品および羽口について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依頼がありました。

調査の観点として、鉄滓については、

①製鉄原料の推定、②製鉄工程上の位置付け、③観察上の特記事項など、

鉄塊と鉄製品については、

①残存金属の確認、②金属鉄成分の分析、③加工状況や観察上の特記事項など、

また、羽口については、

①耐火度、②胎土成分、③観察上の特記事項など、を中心に調査しました。

その結果についてご報告いたします。

(1) 調査項目および試験・検査方法

A. 調査項目

表73に分析対象とした資料とその分析項目を記載した。

B. 重量計測と磁着度調査

計重は天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入してあります。また磁着度調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し、感応検査により、「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで調査項目の表または個別調査結果の文中に表示しました。

C. 外観の観察と写真撮影

各種試験用資料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。必要に応じ試料の切断箇所や切断面の写真も追加しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

D. 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行いました。分析方法は分析結果記載の表78・79の一覧表の下に一緒に示してありますので、ご参照下さい。この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。また、羽口に使用

表73 資料および調査項目一覧表

資料番号	総(分析)番号	構成図番号	資料の性格	遺跡名	地区	出土位置	重量(g)	磁着度	メタル度	外観写真	成分分析	組織写真	X線回折	EPMA	X線透過	耐火度	備考
8	95-77	134	含鉄橢形鍛冶滓	更埴	K	SK9259	242.5	弱	なし	○	○	○	○				
9	95-78	135	含鉄橢形鍛冶滓	更埴	K	SK9259	120.5	中	なし	○	○	○	○				
10	95-79	136	含鉄橢形鍛冶滓	更埴	K	SK9259	68.4	稍強	なし	○	○	○	○				
11	95-80	137	鉄塊系遺物	更埴	K	SK9259	16	弱	あり	○断	○	OM		OM	○		
12	95-81	138	鉄塊系遺物	更埴	K	SK9259	5	弱	あり	○断		OM		OM	○		
13	96-01	152	橢形鍛冶滓、錆化	屋代	④b	SK4052	12.6	稍弱	なし	○	○	○	○				
14	96-02	148	橢形鍛冶滓	屋代	④b	SK4052	46	弱	なし	○	○	○	○				
15	96-03	154	鉄塊系遺物	屋代	④b	SK4052	5	強	あり	○断	○.EP	OM.L,C		OM.L,C	○		
16	96-04	157	羽口	屋代	④b	SK4052	133.5	弱	—	○	○	○ 実				耐	
17	96-05	159	羽口	屋代	④b	SK4052	180.5	弱	—	○	○						
50	96-38	113	羽口	屋代	④d	SB4503	311.2	弱	—	○	○						
51	96-39	114	炉壁	屋代	④d	SB4503	29.6	弱	—	○	○						
52	96-40	121	炉内製錬滓	屋代	④d	SD4504	515.2	稍弱	なし	○	○	○	○				
53	96-41	123	流出滓滓、製錬滓	屋代	④d	SD4504	209.3	稍弱	なし	○	○	○	○				
54	96-42	128	羽口	屋代	④d	SD4504	344.8	弱 先端部	なし 弱	○	○						耐
55	96-43	129	炉壁	屋代	④d	SD4504	58.6	弱	—	○	○						耐
56	96-44	107	含鉄橢形鍛冶滓	屋代	④d	SB3028	96.7	強	あり	○断	○	OM ○		OM	○		
57	96-45	106	含鉄橢形鍛冶滓	屋代	③b	SB3028	74.9	稍強	なし	○	○	○	○				
58	96-46	145	鍛造剥片③	屋代	③b	SK3252	4片	稍強	—	○		○					
59	96-47	146	粒状滓⑥	屋代	③b	SK3252	6粒	稍強	—	○		○					
60	96-48	139	羽口	屋代	③b	SK3252	137.6	弱	—	○	○						
61	96-49	104	含鉄鍛冶滓	屋代	③b	SB3027	114	強	なし	○	○	○	○				
62	96-50		鉄器(釘)	屋代	①	SB1	10.5	稍強	なし	○							図なし
63	96-51		鉄器(釘)	屋代	④c	SB4217	8.7	強	あり	○		OM.L,C		OM.L,C	○		古代1編
64	96-52		鉄器(釘)	屋代	⑤b	SB5047	3.5	強	あり	○	○	OM.L,C		OM.L,C	○		弥生・古墳編
65	96-53		鉄器(釘)	屋代	①d	SB21	6.2	稍弱	なし	○							図なし
66	96-54		鉄器(釘)	屋代	⑤b	SB5021	10.7	強	あり	○		OM.L,C		OM.L,C	○		古代1編
67	96-55		鉄器(釘)	屋代	①f	SB41	5	稍強	なし	○							古代1編
68	96-56		鉄器(釘)	屋代	⑤b	SB5127	8.2	強	あり	○	○	OM.L,C		OM.L,C	○		古代1編

(「構成図番号」等、一部埋文センターで付け加えた。)

1. 分析番号、遺跡名、出土位置および資料の性格は貴センターの記録によりました。
2. MC反応とはメタルチェックによる残存金属の反応の強弱を意味します。
3. 外観写真の(断)は資料の切断箇所や切断面の写真も追加撮影したものです。
4. 成分分析の(EP)はEPMAによる微小金属部分の定量分析を行ったものです。
5. 組織写真の(実)は実験顕微鏡による観察、写真撮影を指します。
6. 組織写真やEPMAで(L)は資料の長手方向を、(C)は断面方向を言います。また、(M)は金属部分の観察を指します。
7. 調査項目・その他で(耐)は耐火度を示します。

されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析しました。鉄塊系遺物や滓に残存している微少な金属部分の分析はEPMAに付属する特性X線分光分析装置(EDX)を用いて行いました。分析項目は、鉄塊や鉄製品18成分、鉄滓や鍛造剥片等は18成分、羽口12成分です。

E. 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)します。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、溶融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察を行い、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ実体顕微鏡による観察も行いました。

F. X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定するものです。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定されます。装置の使用や測定条件は表74に示してあります。

G. EPMA(X線マイクロアナライザー)による観察

高速電子線を200μmφ程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行いました。装置の使用や測定条件は表74に示してあります。

H. 耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土を使用していたのかを判断するた

めに試験しました。この調査もJIS規格『耐火れんがの耐火度の試験方法』に準じて実施しました。(表75・76)。

1. X線(放射線)透過試験

X線発生装置を用い最適のX線強度を選択して、写真撮影を行います。同一のX線強度と照射時間の場合には、照射される物質の質量が重い程、また寸法が厚い程X線が吸収され写真上では黒くなり、その反対ではX線が簡単に透過する関係上白く写ります。したがって、凹凸や異種金属が共用されているとか錆で金属部分が薄くなっている場合でも状況が濃淡で判別できます。試験条件は表74に示してあります。

(2) 各分析条件および装置一覧

各分析条件と装置は以下の通りです。

表74 各分析条件および装置一覧

F. X線回折測定

①測定装置

理学電気株式会社製ガイガーフレックス (RAD-IIA型)

②測定条件

① 使用X線	Co-K α (波長=1.79021Å)
② K β 線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50kV・35mA
④ スキャンング・スピード	2°/min.
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D. S. スリット	1°
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

G. EPMA (X線マイクロアナライザー)

測定条件

測定装置：島津製作所製 EPM-810

i) 加速電圧	20kV
ii) 試料電流	0.02 μ A
iii) EBS像倍率	×400
iv) ライン分析速度	μ m/cm
v) ビーム径 (定量時)	約50 μ m ϕ
vi) 積算時間 (定量時)	10sec

測定結果

別添のEBS像及び、定量分析結果を御参照下さい。

I. X線(放射線)透過試験

①試験装置：(株)理学電気製 RF250EGS-2

②試験条件

①焦点・フィルム間距離	900mm
②電流・電圧	110kvp・5mA
③露出時間	0.2~0.3min
④使用フィルム	フジ #50
⑤現像条件	5分・28°C

表75 耐火度試験結果 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群)

分析番号	耐火度 (SK)	色調	膨張・収縮	試験錐の状況
更埴条里遺跡 95-75	01a	茶色	膨張	発泡
屋代遺跡群				
96-15	5a	茶色	膨張	普通
96-21	01a	茶色	膨張	普通
96-23	03a+	茶色	膨張	普通
96-29	03a+	茶色	膨張	普通
96-30	02a+	茶色	膨張	普通
96-34	02a	茶色	膨張	普通

(備考) 試験条件：酸業プロバン炉法

表76 ゼーゲルコーン温度比較表

温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号	温度 (°C)	コーン番号
600	022	940	08a		3		23
650	021		08	1.160	4a	1.580	26
670	020	960	07a		4	1.610	27
690	019		07	1.180	5a	1.630	28
710	018	980	06a		5	1.650	29
730	017		06	1.200	6a	1.670	30
750	016	1.000	05a		6	1.690	31½
790	015a		05	1.230	7		31
	015	1.020	04a	1.250	8	1.710	32½
815	014a		04	1.280	9		32
	014	1.040	03a	1.300	10	1.730	33
835	013a		03	1.320	11	1.750	34
	013	1.060	02a	1.350	12	1.770	35
855	012a		02	1.380	13	1.790	36
	012	1.080	01a	1.410	14	1.825	37
880	011a		01	1.435	15	1.850	38
	011	1.100	1a	1.460	16	1.880	39
900	010a		1	1.480	17	1.920	40
	010	1.120	2a	1.500	18	1.960	41
920	09a		2	1.520	19	2.000	42
	09	1.140	3a	1.530	20		

注：コーンは正確な温度の測定をするものではない。耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上の温度表が使われる。

(3) 分析結果

分析結果は表77・78・79・80に示した通りです。

表77 化学成分分析結果 (EPMAによる金属部分の定量分析)

(W t %)

分析No	構成図No	遺物種類(名称)	出土遺構	C	Si	P	S	Ca	Mg	Al	Ti	V	O	Fe
96-03	154	鉄塊系遺物	SK4052	<0.01	0.01	0.55	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	99.39

表78 鉄生産関連遺物関係 化学成分分析結果

単位% (m/m)

分析No	構成図No	遺物種類(名称)	出土遺構	成分																	
				T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C.W.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu
95-77	134	含鉄桶形鉄治滓	SK9259	56.8	0.27	49.05	26.31	2.39	12.40	2.52	1.39	0.87	2.90	0.14	0.422	0.022	0.34	0.57	0.17	0.089	0.003
95-78	135	含鉄桶形鉄治滓	SK9259	49.9	1.95	14.31	52.66	4.66	10.20	2.68	3.20	1.66	2.89	0.19	0.85	0.220	0.18	0.15	1.40	0.100	0.020
95-79	136	含鉄桶形鉄治滓	SK9259	62.7	0.33	55.21	27.82	1.91	8.24	1.39	0.52	0.50	1.16	0.08	0.257	0.048	0.18	0.33	0.19	0.097	0.008
95-80	137	鉄塊系遺物	SK9259	39.2	1.14	8.21	45.29	4.98	22.80	5.69	1.41	0.83	1.17	0.07	4.170	0.012	0.80	0.45	0.67	0.066	0.006
96-1	152	桶形鉄治滓・銹化	SK4052	62.2	0.53	60.48	20.96	1.11	9.06	1.85	0.43	0.36	2.40	0.11	0.485	0.007	0.17	0.35	0.16	0.084	0.002
96-2	148	桶形鉄治滓	SK4052	46.0	0.42	47.85	12.00	0.57	61.70	6.14	1.76	1.48	6.15	0.28	0.376	0.032	0.55	1.06	0.07	0.170	0.003
96-40	121	炉内製錬滓	SD4504	43.6	0.66	49.35	6.55	0.22	16.60	6.36	1.18	2.93	14.2	0.57	0.203	0.087	0.49	0.56	0.03	0.400	0.001
96-41	123	流出溝滓・製錬滓	SD4504	42.4	0.33	48.04	6.76	0.23	17.10	6.37	0.96	2.97	15.7	0.58	0.220	0.079	0.46	0.61	0.03	0.420	0.001
96-44	107	含鉄桶形鉄治滓	SB3028	60.5	0.48	52.42	27.55	2.10	11.40	2.35	0.70	0.47	0.18	0.07	0.222	0.001	0.31	0.59	0.13	0.019	0.004
96-45	106	含鉄桶形鉄治滓	SB3028	57.0	0.36	59.43	14.93	0.84	16.00	3.95	1.74	0.58	0.29	0.07	0.214	0.001	0.63	0.97	0.07	0.009	0.006
96-49	104	含鉄鉄治滓	SB3027	53.7	0.44	27.13	45.99	4.11	15.30	3.12	0.71	0.47	0.27	0.13	0.325	0.001	0.41	0.47	0.32	0.012	0.005

〔分析方法〕はJISに準拠し、以下の方法で行いました。
 T.Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法
 M.Fe : 臭素メタノール分解-EDTA滴定法
 FeO : ニクロム酸カリウム滴定法 Fe₂O₃ : 計算
 C : 燃焼-赤外線吸収法
 CaO, MgO, MnO, Cr₂O₃, Na₂O, V, Cu : ICP発光分光分析法
 SiO₂, Al₂O₃, CaO, MgO, TiO₂, P₂O₅, K₂O : ガラスビード蛍光X線分析法
 *CaO, Mg, MnO, は含有率に応じてICP分析法または蛍光X線分析法で分析しています。

表79 羽口・炉壁関係 化学成分分析結果

単位% (m/m)

分析No	構成図No	遺物名	出土遺構	成分															
				SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	TiO ₂	MnO	C	T.Fe	Igross	C.W				
96-4	157	羽口	SK4052	66.4	15.7	0.49	0.43	0.67	1.52	1.04	0.12	0.25	5.33	4.88	3.11				
96-5	159	羽口	SK4052	69.5	16.5	0.32	0.57	0.52	1.59	1.15	0.12	0.11	5.42	1.22	1.06				
96-38	113	羽口	SB4503	62.6	19.7	2.60	0.71	2.26	1.39	0.73	0.13	0.21	4.20	3.22	2.05				
96-39	114	炉壁	SB4503	61.1	19.0	3.01	1.58	2.07	1.51	0.92	0.22	0.18	5.67	1.96	1.37				
96-42	128	羽口	SD4504	69.9	17.5	0.32	0.53	0.68	1.54	1.07	0.13	0.11	4.82	1.57	1.04				
96-43	129	炉壁	SD4504	61.4	18.0	3.15	1.58	2.21	1.36	0.90	0.13	0.18	5.56	2.36	1.45				
96-48	139	羽口	SK3252	62.6	18.4	1.96	0.97	1.60	1.32	0.88	0.10	0.14	4.98	4.23	2.60				

〔分析方法〕はJISに準拠し、以下の方法で行いました。
 SiO₂, Al₂O₃
 CaO, MgO, TiO₂ : ガラスビード蛍光X線分析法
 MnO, Na₂O
 K₂O, T, Fe
 C : 燃焼-赤外線吸収法
 C.W. : カールフィッシャー法
 Igloss : 重量法

表80 鉄器・鉄塊関係 成分分析結果

単位% (m/m)

分析No	遺物種類(名称)	出土遺構	備考	成分															
				C	Si	Mn	P	S	V	Cu	Ca	Mg	Al	Ni	Ti	Cr	Fe		
96-52	鉄器(釘)	SB5047	弥生・古墳編	0.1	0.08	0.15	0.12	0.012	0.003	0.75	0.005	0.001	0.005	0.04	0.002	0.001	残		
96-56	鉄器(釘)	SB5127	古代1編	0.71	0.03	0.01	0.006	0.009	0.001	0.15	0.02	0.004	0.011	0.01	0.012	0.001	残		

(4) 個別資料の解析結果について

特定フォーマットにより記述したが、資料数が多いため紙数の都合により、長野県埋蔵文化財センターの方で表81・82「調査・考察結果のまとめ1・2」として一覧表に編集したものである。

表81 調査・考察結果のまとめ1

No	送着号(分析番号) 資料の性格 出土遺構 図版No 写真図版No 構成図No	外観写真	X線透過 写真	化学成分分析	組織写真	X線回折	E PMA	耐火度 試験	資料の 性 格 (再定価)
8	95-77 含鉄樹形遺物 SK9259 図版155-24 PL23-31 図34-134	80×60×50mmの全体に凹 凸のある黒色発泡粗粒な 樹形遺物で、2~3枚重 なり、重量感あり、MC 反応なし、磁着度弱		T.Fe: 56.8%、FeO: 49.1%と多、Fe ₂ O ₃ : 26.3%、M.Fe: 0.27%、造洋成分は 17.2%と少、TiO ₂ : 2.00%、V: 0.089 %、Cu: 0.003%、鉄源は砂鉄の可能性が 高、C.W.: 2.39%、Fe ₂ O ₃ と水との化合 物で鉄族の一種であるオキシ水酸化鉄が若 干存在するものと推定	灰白色腐状のウスタイトと ファイヤライトの短冊結 晶、白い粒の金属鉄あ り、加工中に混在し錆化さ れずに残っていたもの、後 続の写真の不定型(結晶で ない)部分は鉄が酸化して 出来たオキシ水酸化鉄	強いウスタイトの ピーク、中程度の ファイヤライト、 ウルボスピネル、 弱いマグネタイト とオキシ水酸化鉄 の存在を示すピー クが検出		樹形精 錬遺物	
9	95-78 含鉄樹形遺物 SK9259 図版155-25 PL23-32 図34-135	55×50×50mmで木炭片の 噛み込みあり、小型では あるが重量感を有する。 割れ面は錆化鉄塊のよう に緻密、MC反応なし、 磁着度中程度		T.Fe: 49.9%、FeO: 14.3%と少、Fe ₂ O ₃ : 52.7%と非常に多、M.Fe: 1.96%、 造洋成分は17.7%と少、TiO ₂ : 2.89%、 V: 0.10%、Cu: 0.020%、鉄源は砂鉄の 可能性が高、C.W.: 4.66%と非常に多。 金属鉄が錆化したオキシ水酸化鉄が多量に 存在するものと推定	白く見える部分は金属鉄、 写真上では金属はネット状 に観察されるが、洋の中 では海綿鉄の形状と推定、空 孔のなかには鉄滓が詰まっ ている、鉄滓を含めた化学 成分分析値C: 1.40%と高 いので鍛冶加工前の極粗初 期段階の含鉄滓と考えられ る	多量のマグネタイト 存在、ウルボス ピネル、ゲーサイ ト(オキシ水酸化 鉄)の中程度のピ ークと金属鉄のピ ークも観察		含鉄樹 形精錬 遺物	
10	95-79 含鉄樹形遺物 SK9259 図版155-28 PL23-35 図34-136	65×40×25mmで上面が平 ら、下面は凹で酸化鉄が 固着し黄赤褐色を呈する 小型の樹形遺物、遺物の 組織観察が、錆化の 過程で固着したものと考 えられる、MC反応な し、磁着度やや強		T.Fe: 62.7%、FeO: 55.2%と多、Fe ₂ O ₃ : 27.8%、M.Fe: 0.53%、造洋成分は 10.7%と非常に少、TiO ₂ : 1.16%、V: 0.097%、Cu: 0.008%、鉄源は砂鉄の可 能性が高、C.W.: 1.91%でオキシ水酸化 鉄が存在するものと推定	洋の断面組織には一面に灰 白色腐状のウスタイト存在	ウスタイトの強い ピークと中程度の マグネタイトおよ びウルボスピネル のピークが検出、 金属鉄の存在ピー クも観察		含鉄樹 形精錬 遺物	
11	95-80 鉄塊系遺物 SK9259 図版155-26 PL23-33 図34-137	一辺25mmの三角形をし、 びりりと水酸化鉄と土 砂が固着、残存する金属 の断面には多くの空孔観 察、磁着度弱	外部は錆に 覆われている が、内部の 陰影は磁 く金属鉄の 存在が窺え る	M.Fe: 1.14%、TiO ₂ : 1.17%、V: 0.06%、鉄源は砂鉄の可能性が高	金属部分はC量が推定 0.4~0.6%の比較的冷却速 度の速い組織、製錬過程で 生産された溶鉄が凝固した ものと推定	介在物の中にはTiやVが 多量に含まれている		鉄塊 (製鉄) 系遺物	
12	95-81 鉄塊系遺物 SK9259 図版155-27 PL23-34 図34-138	25×15×10mmの小型鉄 塊、ゴツゴツした感じに MC反応あり、切斷面 には残存金属鉄、磁着度弱	中央部は凹 い陰影、金 属鉄の存在 が示唆		白い針状のセメントイトと 黒く見えるパーライトの組 織、C量は0.8%以上と推 定、製錬過程で生産された 溶鉄が比較的遅慢な速度で 冷却され凝固したものと考 えられる	SE(走査電子顕微鏡) 写真の灰色の部分に金属 鉄、中央の黒い部分は介 在物でその中にはTiやV が多量に含まれて鉄源が 砂鉄である可能性を示唆、 金属鉄の中に灰黒色のマ ダラに見える部分はウス タイト		鉄塊 (製鉄) 系遺物	
13	96-01 樹形遺物-精錬 SK4052 図版282-6 PL42-6 図41-152	1片30mmの三角形で水酸 化鉄に覆われ、レプリカ 状の繊維質、明瞭な割欠 き面は一片で黒色発泡粗 粒な厚片、MC反応なし、 磁着度やや弱		T.Fe: 62.2%、FeO: 60.5%と多、Fe ₂ O ₃ : 21.0%と少、M.Fe: 0.53%と僅か、 造洋成分は11.7%と非常に少、TiO ₂ : 2.40%、V: 0.084%、Cu: 0.002%、鉄 源は砂鉄の可能性が高、C.W.: 1.11%で オキシ水酸化鉄は少々	一面に灰白色腐状のウスタ イト、ウスタイト結晶の間 にはファイヤライトの結 晶、100倍の顕微鏡写真で 白い金属鉄存在を確認	ウスタイトの強い ピークとファイヤ ライト、マグネタ イトおよびゲーサ イトのピークを検 出		樹形精 錬遺物	
14	96-02 樹形遺物-精錬 SK4052 図版282-2 PL42-2 図41-148	35×35×20mmで四角に割 欠き面、黒褐色で発泡し 孔の壁面には繊維質らし きもの、内部は緻密なも の重量感、消らかな上面 部には水酸化鉄発生、 MC反応なし、磁着度弱		T.Fe: 46.0%、FeO: 47.9%、Fe ₂ O ₃ : 12.0%と少、M.Fe: 0.42%と僅か、造洋 成分は21.1%と多、TiO ₂ : 6.15%、V: 0.17%、Cu: 0.003%、鉄源は砂鉄の可 能性が高、C.W.: 0.57%と少、Fe ₂ O ₃ と水 との化合物で鉄族の一種であるオキシ水 酸化鉄はあまり存在しないものと推定	主として繊維の広い短冊状 のファイヤライト結晶に灰 白色樹枝状のマグネタイト および少量のウルボスピ ネル存在、製錬洋の組織を 示す洋の中には白く見え る極小粒の金属鉄存在	マグネタイトとフ ァイヤライトとの 強いピーク検出、 ウスタイトのピー クは弱		製錬洋	
15	96-03 鉄塊系遺物 SK4052 図版282-8 PL42-8 図41-154	20×15×10mmの水酸化鉄 と土が固着し、黄褐色の 豆粒状、MC反応あり、 断面が四角な残存鉄塊 察、磁着度強	表面に付着 土と錆化部 分観察、中 央部にはや や細長い金 属鉄の陰影	C: 0.01%以下、硫黄(S): 0.06、Siや他 の元素少なく純鉄と言え、Ti: 0.01% 以下、V: 0.01%以下と非常に少	L方向とC方向との間の組 織には遠いなく鍛冶のよ うな外部からの加工受行 ていない、炭素量の少ない フェライト組織になっている	介在物の形状もL方向と C方向とも球形をしてい るので組織写真で観た様 に鍛冶加工が行われてい ないことが証明介在物 の中にはTiやVが多く含 まれ鉄源は砂鉄と推定		鉄塊 (純鉄) 系遺物	
16	96-04 羽口 SK4052 図版282-11 PL42-11 図41-157	外径90×内径30×長さ80 mmの先端近傍の羽口片で 鉄滓等の付着なし、粘土 に粗い砂塊の混入、磁着 度弱		シリカ: 66.4%とやや多、耐火度を高める アルミナ: 15.7%とやや少、耐火度を低下 させる酸化ナトリウム、酸化カリウムやカ ルシアなどの塩基性成分可なり少	10倍の実体顕微鏡の観察に よると非常に緻密な粘土組 織強度向上のために細かい 塵が混入	耐火度1,230℃弱、 今回測定した粘土 中二番目に高い粘土 羽口用として特別 に選択された粘土 使用	羽口		
17	96-05 羽口 SK4052 図版282-13 PL42-13 図41-159	外径60×内径50×長さ45 mmで先端部に溶融滓が付 着した羽口、磁着度弱		シリカ: 69.5%と多、耐火度を高めるアル ミナ: 16.5%とやや少、耐火度を低下さ せる酸化ナトリウム、酸化カリウム、カル シアなどはやや少			羽口		
50	96-38 羽口 SK4503 図版154-9 PL23-10 図34-113	外径約38×内径約25mmで 厚みが場所によって異 なる羽口片、先端に発泡し ガラス質になった黒い滓 が付着、鍛冶用羽口 としては可成り大きい、 金色の雲母片やササ根も 確認でき、製錬に使用さ れたと推定、磁着度弱		シリカ: 62.6%とやや多、耐火度を高める アルミナ: 19.7%とやや高、耐火度を低下 させる塩基性成分の値はやや高			羽口		
51	96-39 羽口 SK4503 図版154-10 PL23-11 図34-114	50×45×20mmの切り餅状 のガラスが水平に観察さ れ、赤褐色、研削は溶融 しガラス状、磁着度弱		シリカ: 61.1%とやや高、耐火度を高める アルミナ: 19.0%とやや高、耐火度を低下 させる塩基性成分の値はやや高			羽口		
52	96-40 羽口製錬洋 SD4504 図版155-17 PL23-21 図34-121	95×75×60mmの重量感 があり表面が平滑で流動 した形跡のある大型製錬 洋、欠き面が三方にあり その切斷面は黒色発泡、 マトリックスは緻密で均 質、MC反応なし、磁着 度やや弱		T.Fe: 43.6%、FeO: 49.4%、Fe ₂ O ₃ : 6.55%と少、M.Fe: 0.66%と僅か、造洋 成分は27.1%とやや多、TiO ₂ : 14.2%、 V: 0.4%、Cu: 0.001%、鉄源は砂鉄の 可能性が高、C.W.: 0.22%と少、Fe ₂ O ₃ と水との化合物で鉄族の一種であるオキ シ水酸化鉄はあまり存在しないものと推定	洋断面に多くの空孔、形が やや崩れたウルボスピ ネルの灰白色の結晶と短冊 のファイヤライトの結 晶、100倍の顕微 鏡写真では小粒の白い金 属鉄が数個観察	ウルボスピネルの 強いピークとフ ァイヤライトの中 程度のピークとが存 在、金属鉄の存在 を示すピーク検出		製錬 (流出) 洋	
53	96-41 流し流洋-製錬洋 SD4504 図版154-13 PL23-18 図34-123	85×60×30mmの上部が滑 らかで重なりながら流出 した先端部の形状を呈す る流し流洋、下部には砂 塊を噛み込んでおり、MC 反応なし、磁着度やや弱		T.Fe: 42.4%、FeO: 48.0%とやや少、 Fe ₂ O ₃ : 6.76%と少、造洋成分は27.4%と やや多、TiO ₂ : 15.7%、V: 0.42%、 Cu: 0.001%、鉄源は砂鉄の可能性が高、 C.W.: 0.23%と少、Fe ₂ O ₃ と水との化合 物で鉄族の一種であるオキシ水酸化鉄はあ まり存在しないものと推定	灰白色不定多角形のウル ボスピネル結晶と短冊状 のファイヤライト結晶を 観察	強いウルボスピ ネルのピークと中 程度のファイヤラ イトの存在を示す ピーク検出		製錬 (流出) 洋	
54	96-42 羽口 SK4504 図版155-22 PL23-26 図34-128	外径90×内径30mm程度、 長さ130mmの先端部に 溶融した鉄滓が付着、粘土 の粒子はやや粗い石英を 含、濃い肌色、磁着度弱		シリカ: 69.5%と高、耐火度を高めるアル ミナ: 17.5%、耐火度を低下させる塩基性 成分の値は可なり低			耐火度1,320℃、 今回測定粘土中一 番高い値、羽口用 として選別した粘 土を履用	羽口	

表B2 調査・考察結果のまとめ2

No	総番号(分析番号) 資料の性格 出土遺構 図版No 写真図版No 構成図No	外観写真	X線透過 写真	化学成分分析	組織写真	X線回折	E PMA	耐火度 試験	資料の 性格 (判定後)
55	96-43 炉壁 SD4504 図版155-21 PL23-25 図34-129	65×50×30mmの溶融面のある炉壁、胎土は赤褐色で柔らかく簡単に削る事が出来る。磁着度弱		シリカ:61.4%と低、耐火度を高めるアルミナ:18.0%と高、耐火度を低下させる塩基性成分の値はやや高				耐火度1,060℃ 強、今回測定した粘土中、中程度の値	炉壁
56	96-44 含鉄礫形磁治滓 SB3028 図版154-4 PL23-4 図34-107	65×50×30mmで二段になった礫形磁治滓片で上部にMC反応あり、焼化進行による割れの跡で断面、上部は水酸化鉄が固着、砂礫の付着少、鉄滓部は黒色発泡、磁着度強		T,Fe:60.5%、FeO:52.4%、Fe ₂ O ₃ :27.6%と高、造滓成分は14.9%と少、TiO ₂ :0.18%、V:0.019%、Cu:0.004%、鉄源は砂鉄の可能性が高、C,W:2.10%と多、オキシ水酸化鉄が可成り存在するものと推定	滓の断面組織にはオキシ水酸化鉄、金属組織には粒度の大きいフェライトの結晶、 <u>造滓過程の金属鉄と推定</u>		SE像の灰色の部分は純度の高い金属鉄、中央に介在物があるか酸化鉄と所謂造滓成分とから構成		含鉄礫形磁治滓
57	96-45 含鉄礫形磁治滓 SB3028 図版154-3 PL23-3 図34-106	70×50×20mmの全体に水酸化鉄に覆われた中凹の資料、破面からは黒色発泡の内部が観察、MCの感度を上げて反応なし、磁着度やや強		T,Fe:57.0%、FeO:59.4%と多、Fe ₂ O ₃ :14.9%と少、造滓成分は22.3%、TiO ₂ :0.29%、V:0.009%、Cu:0.006%、鉄源は砂鉄の可能性が高、C,W:0.84%と少、Fe ₂ O ₃ と水との化合物で鉄礫の一種であるオキシ水酸化鉄はあまり存在しないものと推定	礫状灰白色のウスタイト結晶とファイヤライト結晶が存在	ウスタイトとファイヤライトの強いピークの他に少量のマグネタイトの存在を示唆する弱いピーク検出			礫形磁治滓、なお、金属鉄は存在しない
58	96-46 鐵造剥片③ (2.1~4.0mm) SK3252 PL23-42 図34-145	青灰色の光沢を有する片と暗赤褐色などを呈する錆化した片とが存在、磁着度やや強		資料量少なく分析不能	鍛冶加工の際に生成した無数の割れ、通常のウスタイト結晶ではなく更に緻密なウスタイト組織				鐵造剥片
59	96-47 粒状滓⑥ (0.5~1.0mm) SK3252 PL23-43 図34-146	鈍い光沢、暗青灰色、錆化した粒の表面は暗赤褐色、磁着度やや強		資料量少なく分析不能	粒状断面は中空ではなく、細かい空孔、組織は礫状のウスタイト結晶のほかウルボスピネルと推定できる多角形の結晶が一面に観察				粒状滓
60	96-48 羽口 SK3252 図版155-29 PL23-36 図34-139	外径約80×内径25×長さ70mmの先端部を含まない羽口で二片を接着、粘土はきめ細かであるが、細かな割れが多、スス痕、塵も存在、磁着度弱		シリカ:62.6%、耐火度を高めるアルミナ:18.4%、耐火度を低下させる塩基性成分値はやや低				耐火度1,100℃ 強、今回測定粘土中、中程度の値	羽口
61	96-49 含鉄礫形磁治滓 SB3027 図版154-1 PL23-1 図34-104	60×45×30mmの水酸化鉄と砂礫の固着した礫形磁治滓片、ほぼ完形品、MC反応全くなり、磁着度強		T,Fe:53.7%、FeO:27.1%と少、Fe ₂ O ₃ :46.0%と非常に多、造滓成分は19.6%とやや少、TiO ₂ :0.27%、V:0.012%、Cu:0.005%、鉄源は砂鉄の可能性が高、C,W:4.11%と非常に多、金属鉄が錆化したオキシ水酸化鉄が多量に存在するものと推定、金属鉄に含まれていたと考えられる、C:0.32%検出	灰白色礫状のウスタイトと短冊状のファイヤライトおよび少量の樹枝状のマグネタイト結晶が観察	強いウスタイトとマグネタイトの強いピークと中程度の強度のファイヤライトのピークおよびゲーサイトの存在を示す。弱いピーク検出			礫形磁治滓、なお、金属鉄は存在しない
62	96-50 鉄器(釘)・錆 SB1	12φ×65mmの錆化した中空化した資料の先端から25mmの所で折れており、錆化したため水酸化鉄と土が固着、外観は丸い形をしているが内部の消失した金属部分は角形の輪郭あり、元の釘は角釘と推定		現存金属なし、MC反応なし					鉄器(釘)・錆化
63	96-51 鉄器(釘) SB4217	12φ×44mmの錆化した金属片、太い方から23mmの所で折れており、中央部は密で錆化割れのある方にはMC反応あり			実体顕微鏡観察からの釘の断面形状は角形であると判定、組織写真では比較的粒度の揃ったフェライト(純鉄)とその境界に点在する少量のパーライト(純鉄と炭化鉄=セメンタイトとが交互に層状になった組織)結晶とが観察、炭素含有量0.2%前後と推定、材質は軟鉄(純鉄)、C方向に比べL方向の介在物は6~10倍延伸、釘の成形のために鍛造加工が行われたことを示唆		介在物(金属鉄の中の不純物)にはTiやVの存在認められず、鉄源は鉱石である可能性が高、L-C方向の観察によっても介在物の形状から鍛造加工の状況推定できず		鉄器(釘)
64	96-52 鉄器(釘) SB5047	4φ×55mm、錆化部を剥離した状態でS字状に曲っており、同伴の9mmの小片は錆化が進行しMC反応なし		金属鉄の残存状態良好	C:0.10%と低、Si:0.08%、Mn:0.15%、他の元素も少なく純鉄と言える、Ti:0.002%、V:0.003%、Cu:0.75%、Ni:0.04%と高		介在物からはTiやVの存在認められず、鉄源は鉱石の可能性が高、L-C方向に介在物の延伸		鉄器(釘)
65	96-53 鉄器(釘) SB21	12φ×55mmの錆化片、三つに折れている		中空で完全に錆化、現存金属なし、外観は丸い形をしているが内部の消失した金属部分は角形、元の釘は角釘であったと推定、MC反応なし					鉄器(釘)・錆化
66	96-54 鉄器(釘) SB5021	11φ×55mmの資料、二つに折れた大きい方の折片にはMC反応あり		大きい折片には現存金属観察(狭い範囲)	実体顕微鏡による断面観察で釘は角形と判明、組織写真では比較的粒度の揃ったフェライトと少量のパーライト結晶とが観察、材質は軟鉄(純鉄)、C方向に比べL方向の介在物は4~6倍延伸、釘の成形のために鍛造加工が行われたことを示唆		介在物からはTiやVの存在認められず、鉄源は鉱石である可能性が高、L-C方向の介在物の延伸		鉄器(釘)
67	96-55 鉄器(釘) SB41	8φ×47mmの錆化片、二つに折れ、4片の錆化剥落片を伴っている		輪郭のみ観察され現存金属なし、外観は丸い形をしているが内部の消失した金属部分は角形の輪郭あり、元の釘は角釘であったと推定、MC反応なし					鉄器(釘)・錆化
68	96-56 鉄器(釘) SB5127	13φ×40mmの錆化片、二つに折れ、錆層が剥落片となっている、一部は錆化進行中であり粉化、かなり薄く扁平な形状		現存金属は二片とも存在、MC反応あり	C:0.71%とやや高、Siや他の元素の含有量少、純度の高い鋼、Ti:0.012%、V:0.001%、Cu:0.15%、Ni:0.01%とやや高	実体顕微鏡による断面観察で釘の断面は角形と判明、比較的粒度の揃った白いフェライトと灰色のパーライト結晶とが観察、材質は硬度の低さと強度を持つ鋼、C方向とL方向の組織および介在物の間に差異なし、釘の成形のために鍛造加工が行われたか否かは明らかにならなかった	Ti少量確認、鉄源は砂鉄ではなく鉱石の可能性が低、L-C方向の介在物には延伸が無く		鉄器(釘)

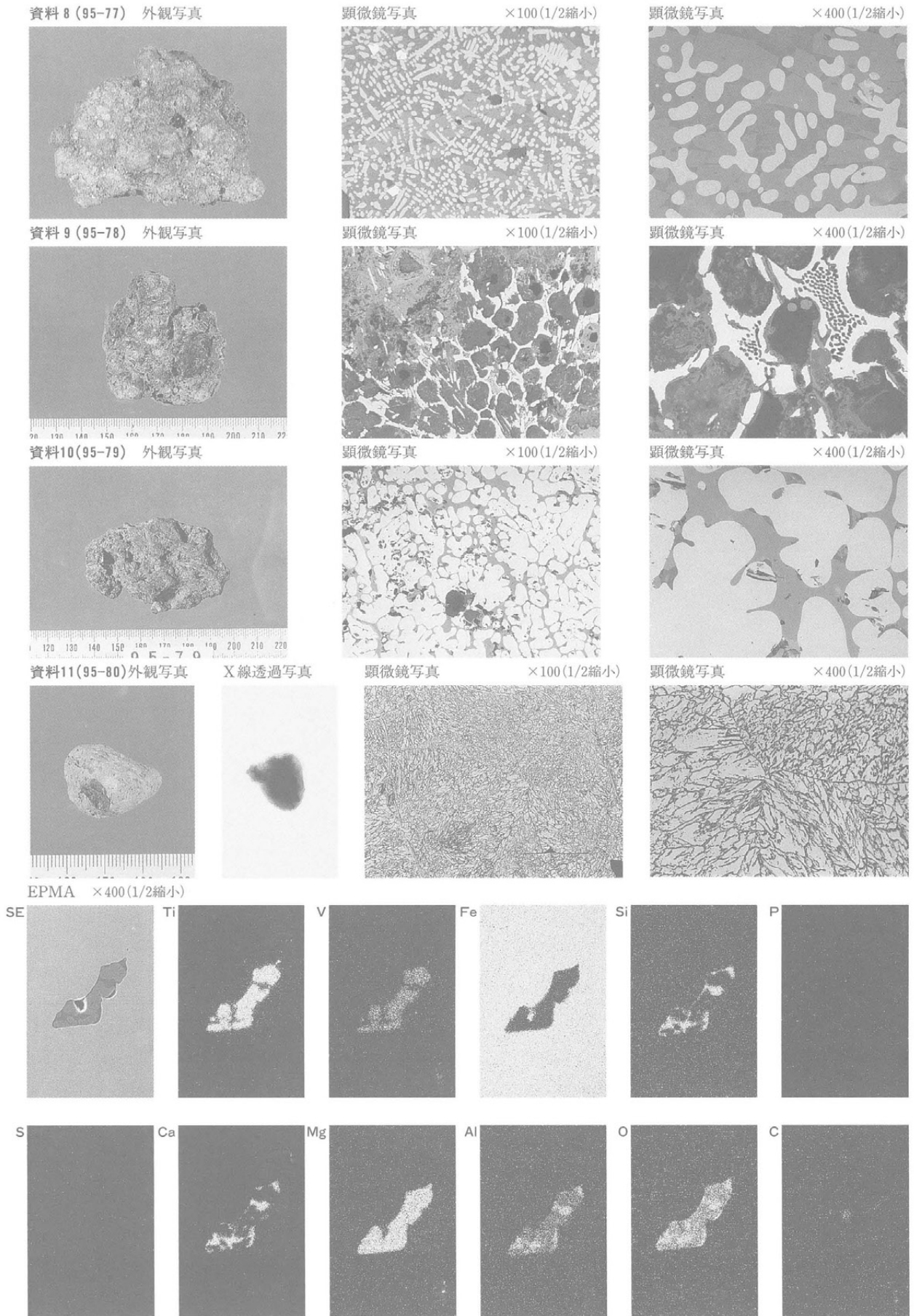


図67 鍛冶関連遺物の分析・調査 1 (更埴条里遺跡)

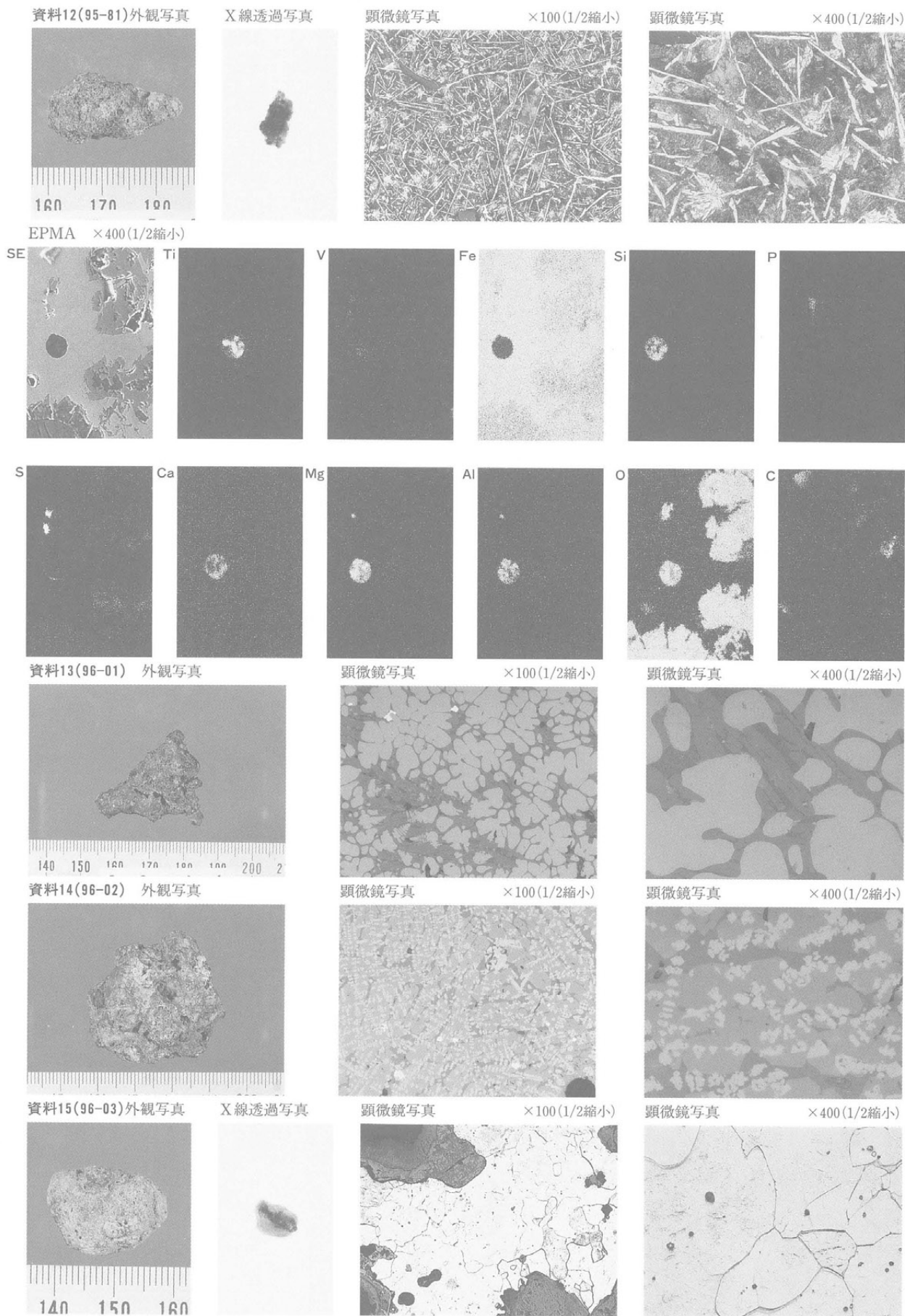


図68 鍛冶関連遺物の分析・調査 2 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群)

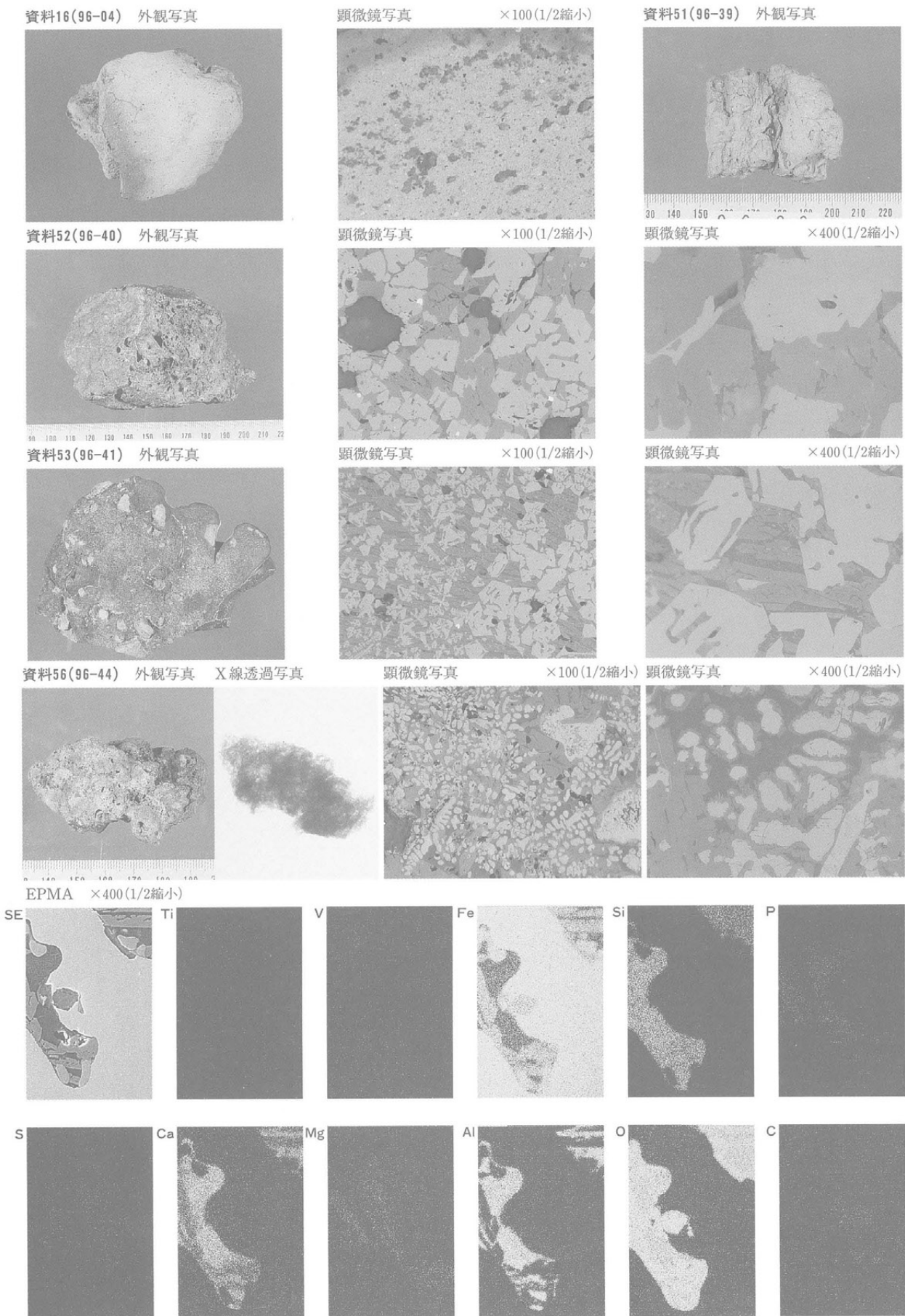
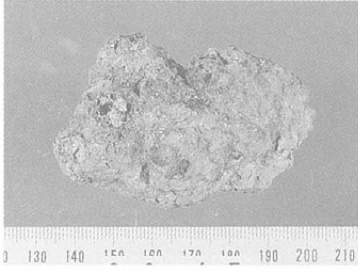
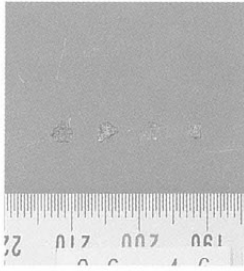


図69 鍛冶関連遺物の分析・調査3 (屋代遺跡群)

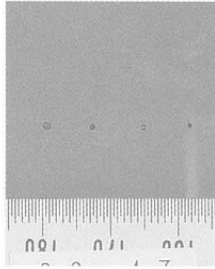
資料57(96-45) 外観写真



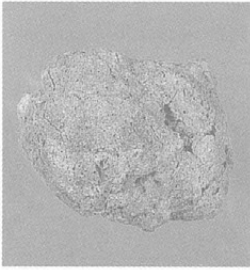
資料58(96-46)外観写真



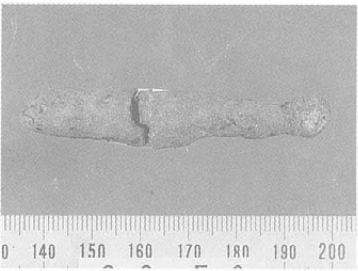
資料59(96-47)外観写真



資料61(96-49)外観写真



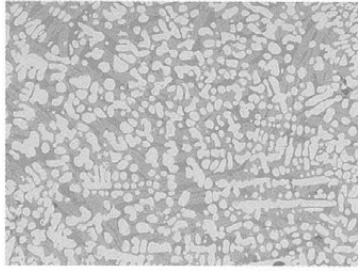
資料62(96-50) 外観写真



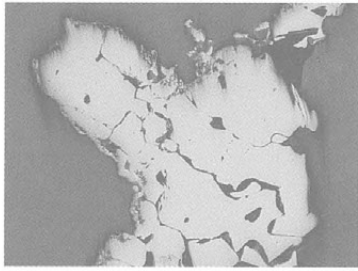
資料65(96-53) 外観写真



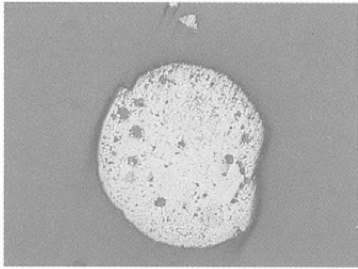
顕微鏡写真 ×100(1/2縮小)



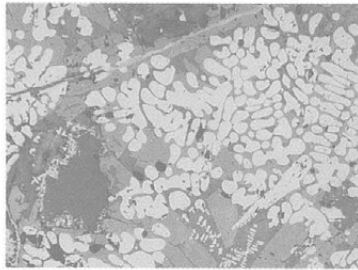
顕微鏡写真 ×100(1/2縮小)



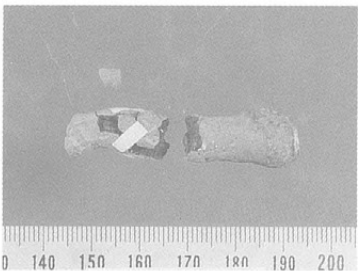
顕微鏡写真 ×100(1/2縮小)



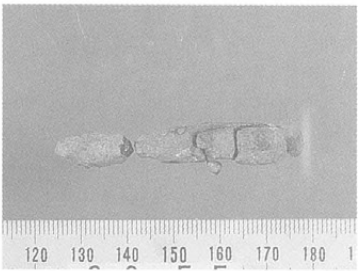
顕微鏡写真 ×100(1/2縮小)



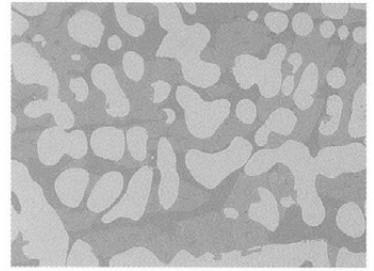
資料63(96-51) 外観写真



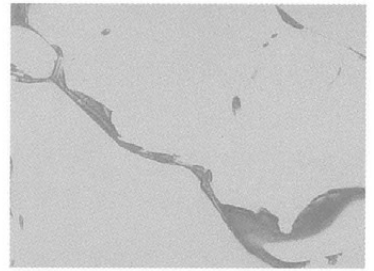
資料67(96-55) 外観写真



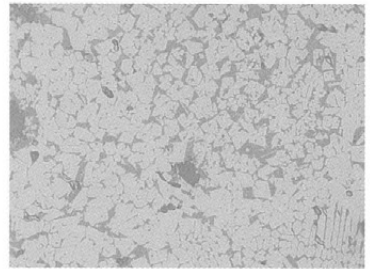
顕微鏡写真 ×400(1/2縮小)



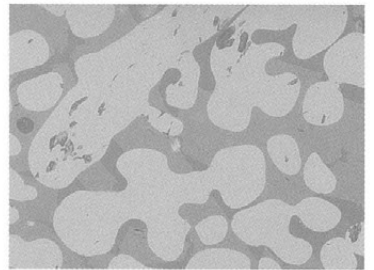
顕微鏡写真 ×400(1/2縮小)



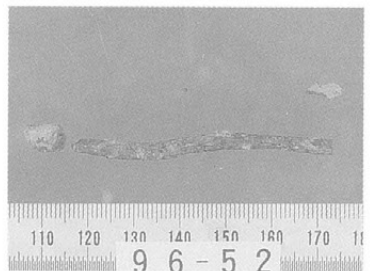
顕微鏡写真 ×400(1/2縮小)



顕微鏡写真 ×400(1/2縮小)



資料64(96-52) 外観写真



資料68(96-56) 外観写真

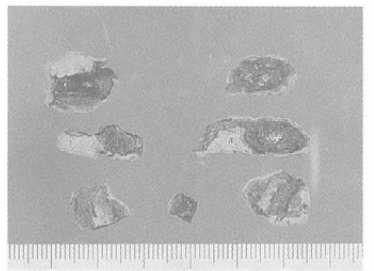


図70 鍛冶関連遺物の分析・調査4(屋代遺跡群)

第11章 成果と課題

第1節 洪水後の集落の変遷と用水開発

はじめに

本節では、第2章、第4章で記述した古代2および中世の各集落の概要、遺構の状況を総合し、集落の動向とその間にみられる新たな用水開発の状況を追うことにより、そこから発生する問題点を整理していくこととする。

1 集落変遷把握の方法

(1) 土器編年による変遷の把握

集落の変遷は、古代2の集落に関しては各遺構から出土した土器を時期判断の材料とし、第3章第1節および第11章第2節で示された土器編年に依拠して、古代8期後半～15期の時期枠に基づく把握を行った(図71・72・75)。ただし、出土土器の様相が8期後半～9期というように幅をもち、他に切り合い等の判断材料がない竪穴建物等の遺構については、それぞれの時期の中で重複して示している。

中世の集落に関しては、出土した焼物に対する時期の判定が第5章第1節で示されている。しかし、集落を構成する主要な要素である掘立柱建物跡について時期を判断する遺物は皆無といってよく、さらに遺構全般に渡って出土遺物が少ないことから、古代2のような時期の変遷を捉えることはできなかった。よって、集落内の遺構から出土した焼物の編年観を総合しておおよその時期幅の中で把握した(第4章)。

(2) 遺構検出状況による新旧・並行関係の把握

重複関係 (切り合い) 遺物が出土していない遺構の内、時期判断が可能な遺物が出土した遺構との重複関係があるものは、その前後関係に基づいて時期の判断を行った。

主軸方位 時期判断が困難な掘立柱建物については、その主軸方位を判断材料として、おおよその並行関係および新旧関係を把握した。特に屋代遺跡群①区中世集落がこれにあたる。

この他、遺構の配置の状況も含め変遷図に示せなかった部分についても、可能な限り新旧・並行関係について記述を行っていく。

2 古代2の集落の変遷 1 (8期後半～10期)

(1) 後背湿地I群への進出と展開 (図71)

8期後半 (9世紀第4四半期) 洪水により水田域、集落域ともに埋没した直後に成立したのは、更埴条里遺跡I地区集落とK地区集落である。両集落の間には東西坪区画畦畔に対応する溝(SD1021・1022、SD808)を基準として、南北ほぼ一丁分の空間地帯が存在する。さらにI地区集落以南は坪区画溝SD746を境として空間地帯が広がる。なおI地区集落では、区画溝SD863をはさんで東西に竪穴建物が存在していることから、東西の集落区画も行われていた可能性が高い。このように集落の配置が旧条里水田の坪区画によっ

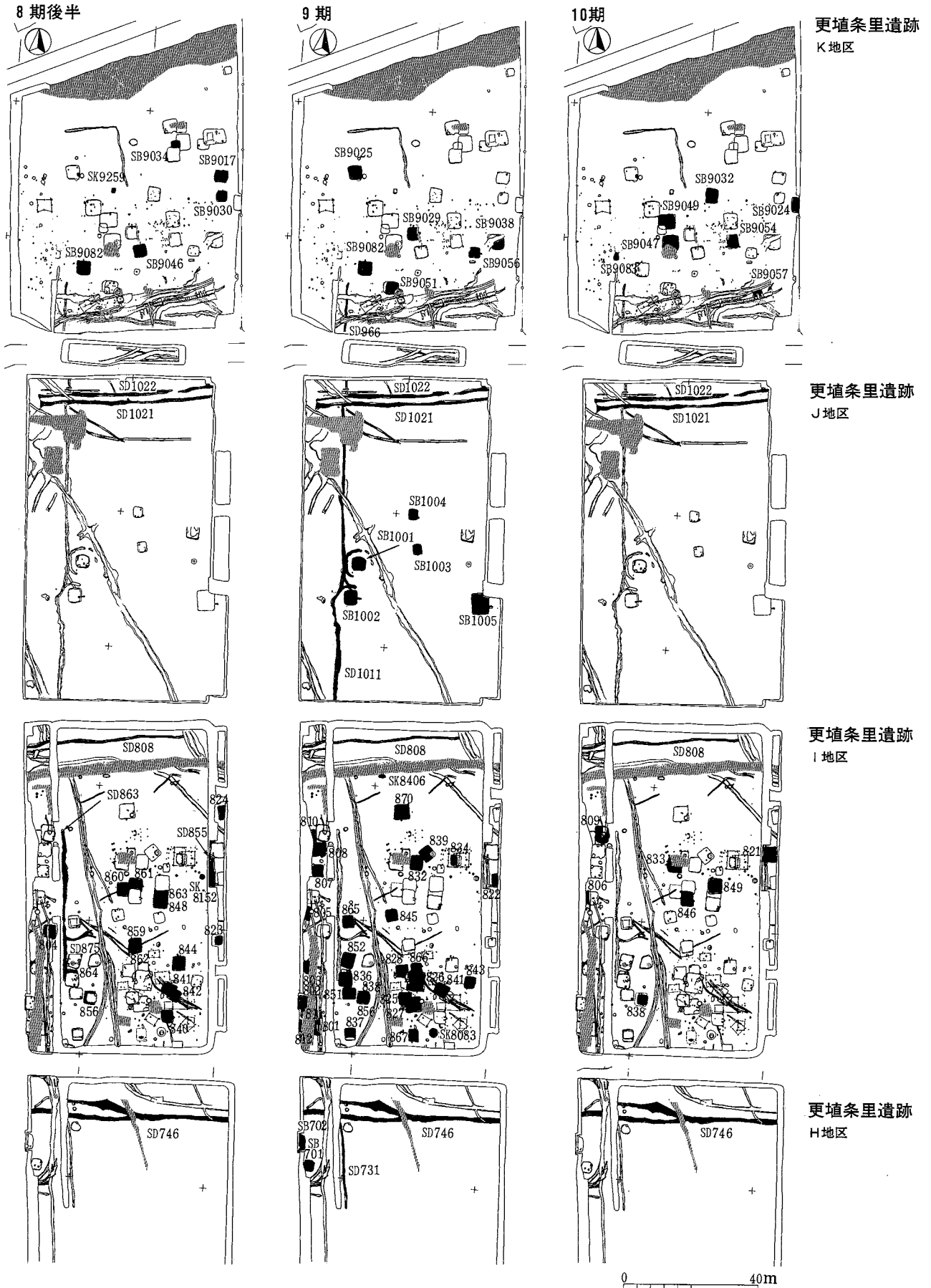


図71 古代2の集落変遷図①(8期後半~10期)

て制限されていたことは明らかで、洪水直後の集落成立と前後して条里区画の復元が指向されていたことがわかる。なお、I地区では竪穴建物の重複関係から、少なくとも2時期の集落変遷が認められる。

9期 (10世紀前半) 8期後半の段階では空間地帯だった更埴条里遺跡H地区とI地区にも集落が進出し、後背湿地I群内の微高地部全域に集落が展開する。建物の配置からみて、東西方向の坪区画溝はこの段階でも集落の区画としての役割を果たしていることがわかる。

I地区集落では竪穴建物が急増するが、重複関係から類推して最低2時期の変遷があったものと考えられる。これに対し、J地区集落の竪穴建物はその数、規模、配置からみて同時期に存在したものと思われる。10期には居住がみられないことから一過性の集落であったと捉えることができる。また、J地区にみられる南北区画溝SD1011は、SB1001およびSB1002の周溝との切り合い関係からみて、集落存続時に掘削され廃絶したことが明らかである。また、I地区集落では南北区画溝SD863の上にSB836が構築されており、SD863は9期集落の段階でその役割を終了していることがわかる。

10期 (10世紀中葉) J地区集落は消滅する。H地区集落の全容は不明であるが、調査地区内に限っては竪穴建物のみならず、集落の配置は8期後半と似た状況になる。K地区集落では8期後半以降目立った建物数の増減はみられないが、I地区集落では9期に比べ減少している。竪穴建物の重複関係もみられ、最低2時期の変遷があったものと思われる。また、I地区集落にみられる掘立柱建物跡およびピット群は9期の竪穴建物との重複関係、10期の竪穴建物との配置関係からみて10期集落に属するものと想定される。

3 古代2の集落の変遷 2 (11期～15期)

(1) 用水の開発と集落 (11期～13期、図72)

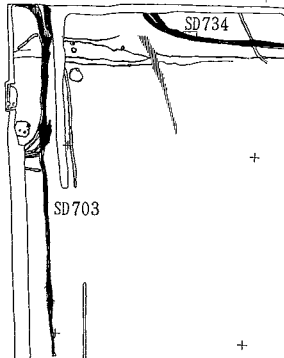
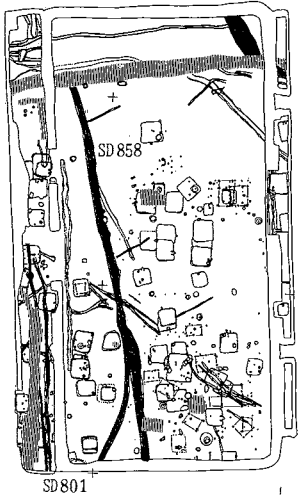
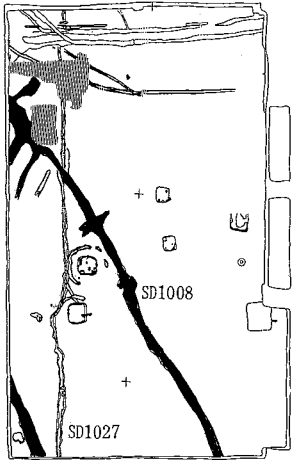
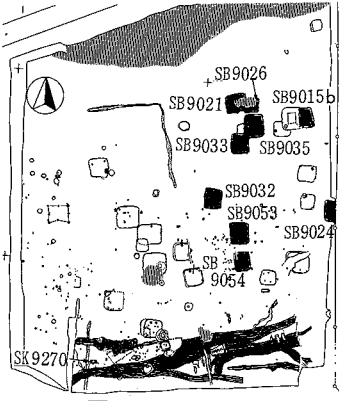
用水の開発 更埴条里遺跡I地区集落の竪穴建物は10期のものが最後となり、これ以降後背湿地I群および自然堤防I群では溝の掘削が行われている。この内、更埴条里遺跡K地区南端の東西溝群、屋代遺跡群④区のSD4504はその規模からみて、それぞれ後背湿地側と自然堤防側へ送水する基幹的水路と考えられ、その支流となる溝も検出されている。

第2章第2節で述べたように、更埴条里遺跡K地区の溝群の内、SD950・955・965が10期の竪穴建物SB9057を切り込み、13～14期に属する墓坑と考えられるSK9270がその流域内に掘削されている点、屋代遺跡群④区SD4504の埋土中から多量の鍛冶関連遺物が出土し、集落が存続した13～14期には廃絶していたと考えられる点を考慮すると、10期集落の廃絶以降に溝の掘削が行われ13期集落成立前後まで存続したものと判断される。

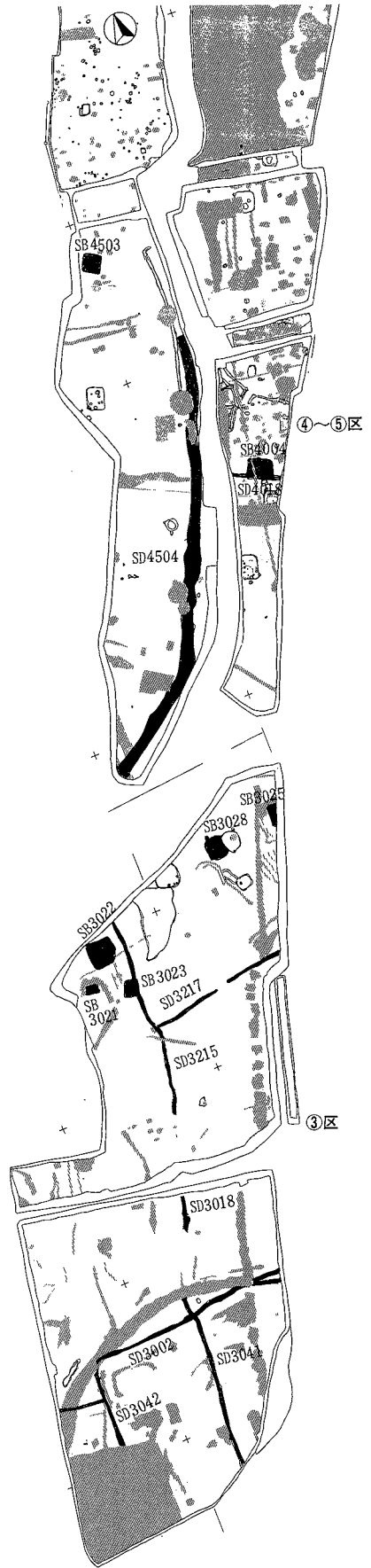
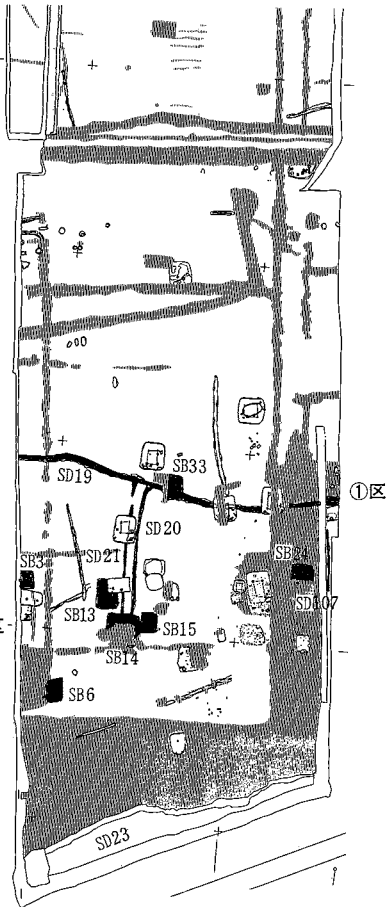
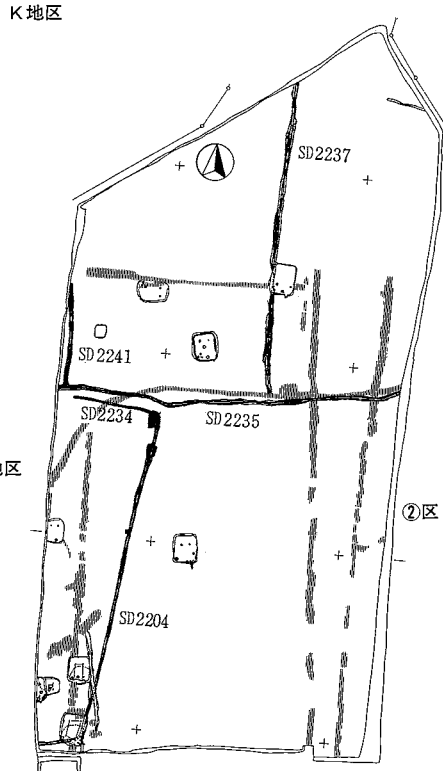
昭和40年代の更埴市域圃場整備以前の用水路(堰)と対比すると(図73)^(註1)、更埴条里遺跡K地区南端の東西溝群は町田堰、屋代遺跡群③区SD3002は町浦堰、屋代遺跡群④区SD4504は下条堰とその流域をほぼ同じくしている。このことから10世紀後半の段階で、現在の用水体系の原形が確立していたことがわかる。なお、この段階では更埴条里遺跡I地区を東西に通過する蛇田堰の存在が確認できないが、J地区北西から南東に下る水路SD1008が旧蛇田堰と交差する状態となる。また、昭和30年代の発掘調査では、この東方約400mの地点で同じくIII-2層を掘り込む南北方向の溝が確認されている(玉口、小出、倉田、岩崎、桐原1969)。この溝は旧蛇田堰手前で終わるが、水取り入れ用と考えられる西へ伸びる溝が検出されている(図74)。取り入れ口は判明していないが、方向的にみて東に屈曲するSD1008とつながる溝であった可能性がある。

更埴条里遺跡K地区南端の基幹水路の位置、SD1008の屈曲位置、さらにSD858-SD734の屈曲位置をみると、後背湿地I群側は旧条里畦畔による東西方向の坪区画を踏襲した感があるが、南北方向の区画とは一致しない。また、自然堤防I群側の東西水路および基幹水路も坪区画とは異なった配置となる。

更埴条里遺跡



屋代遺跡群



0 40m

図72 古代2の集落変遷図② (11期~13期)



図73 古代2 (10世紀後半) の用水と圃場整備以前の堰

用水開発期の集落 用水の開発および存続期に該当する竪穴建物は、仮に13期のものを含めると屋代遺跡群④区まで確認できる。しかし、基幹水路SD4504の支水路と思われるSD4018がSB4004（13期）に切られることから、用水稼働期の竪穴建物をこれ以前のもの（11期～12期）に限定すると、更埴条里遺跡K地区のSB9054（10～11期）、SB9053（11期）、SB9024・SB9032（10～12期）、SB9015b・SB9033・SB9035（12期）の7軒と屋代遺跡群①区のSB15（12期）が該当し、出土土器の時期幅があるが、SB3・SB24（12期～14期）も含まれる可能性がある。いずれも更埴条里遺跡K地区東西基幹水路以北、旧五十里川（SD23）をはさんで屋代遺跡群①区支水路SD19以南の範囲に存在していることから、自然堤防I群南端部の集落を基点として用水が南北に展開していたことがわかる。

(2) 用水廃絶後の集落（14期～15期）

集落の展開 前述のように10世紀後半に開発された用水は、13期（10世紀末～11世紀初頭）にはその機能を停止していた可能性が高く、この段階で竪穴建物は屋代遺跡群③区、④区にも進出している。これ以後の14～15期（11世紀）において竪穴建物の数が再び増加する（図75）。特に目立つのが屋代遺跡群①区集落と②区集落で、かつての支水路の上に集落が成立している。③区集落と④～⑤区集落では建物の密集度が低いが、鍛冶関連の遺物が多く出土しており、集落での生業の一端を窺わせる。基幹水路SD4504は鍛冶作業に伴う廃棄場となっている。

竪穴建物の変化 13期以降は、洪水後から用水開発に至る間居住の認められなかった自然堤防I群内に再び集落が展開する点に特徴がある。さらにこの集落を構成する竪穴建物には、それ以前のものと比較して大きな変化が認められる。それは竪穴平面形の長方形化、面積の拡大傾向、カマド方位の南への偏り、カマド位置の左右コーナーへの移動（コーナーカマド）という顕著なものである（第2章第3節2）。用水開発以前の10期までの竪穴建物は方形を主体とし、カマドは北および東壁の中央付近に設置され、建物の軸と一体になっており、洪水以前の竪穴建物の構造をほぼ踏襲していた。しかし自然堤防I群への集落の再進出とともに、竪穴建物の構造は大きな変化を遂げたことになる。

4 中世集落の展開

(1) 中世集落の成立

中世の集落は更埴条里遺跡K地区、屋代遺跡群①区、屋代遺跡群④区を中心とした⑥区までの範囲にみられ、窪河原遺跡H2区においても集落の1部と思われる範囲が確認された。集落構成の主体となる掘立柱建物跡の重複の状況から何段階かの変遷が考えられるが、出土遺物が少なく、古代集落のように変遷を

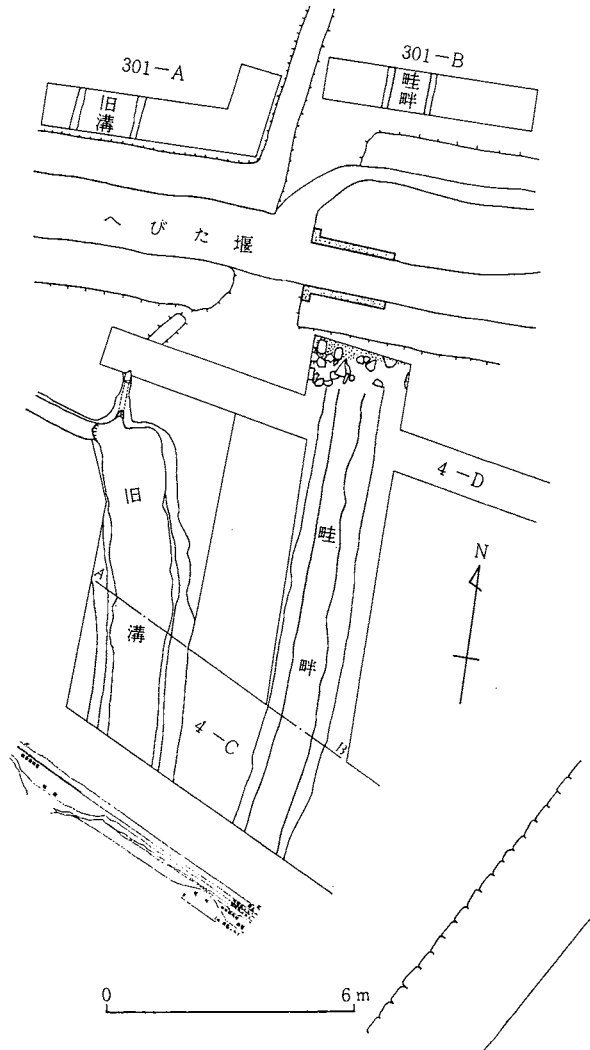


図74 第4地点トレンチ 溝平面図

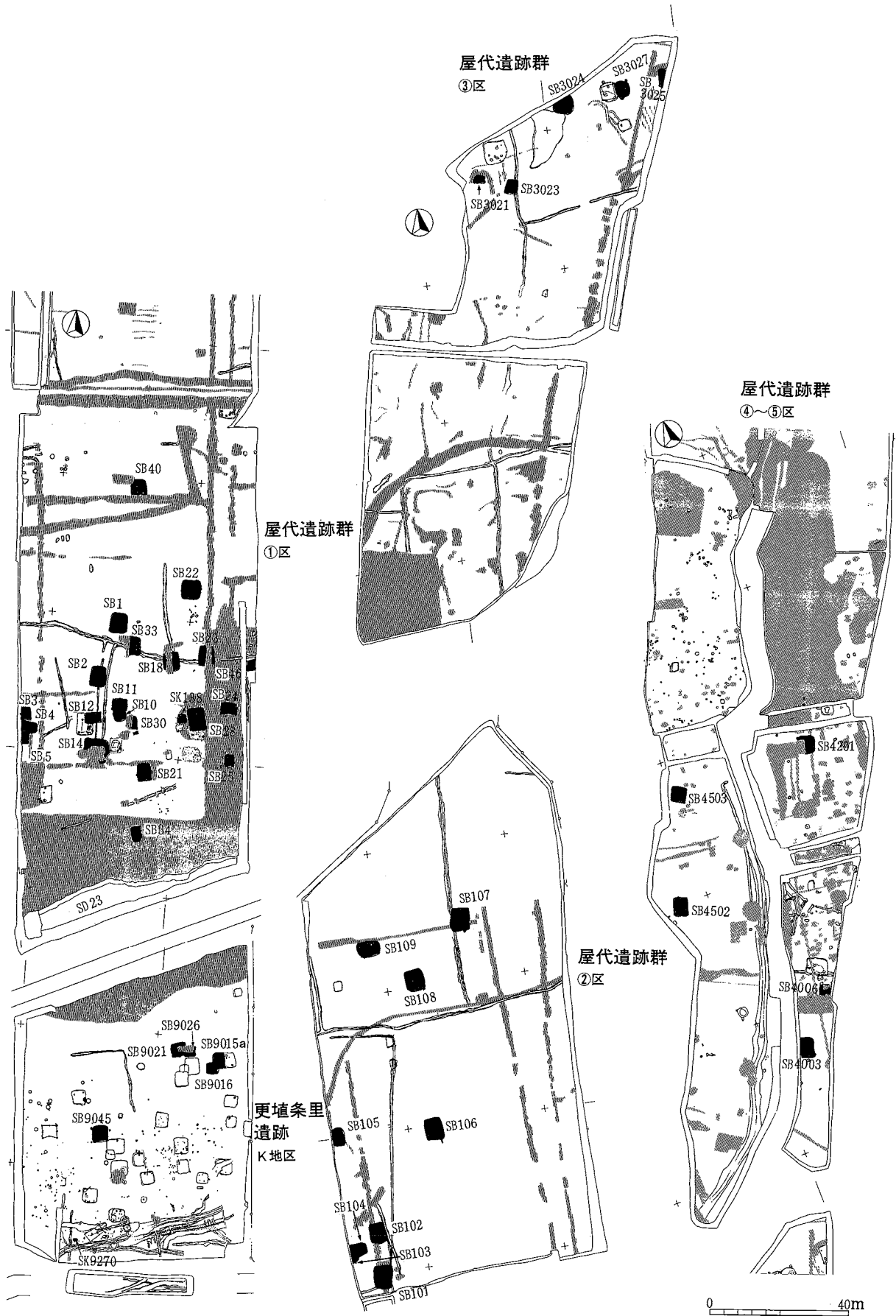


図75 古代2の集落変遷図③ (14期~15期)

時期別に捉えることはできなかった。よって出土遺物から得られた大枠の時期の中で各集落を捉え、その状況を見ていくこととする。

なお図76、77中、井戸を●で、墓および火葬施設をアルファベットによって示す。

集落の成立時期 中世集落の時期については水路や区画溝、竪穴建物跡出土の遺物の時代性を判断材料とし、遺構の重複関係等からおおよその範囲を第4章第2節で示した。これに基づく各集落の成立時期は、更埴条里遺跡K地区集落・屋代遺跡群①区集落が12世紀以降、屋代遺跡群④～⑥区集落・窪河原遺跡H2区集落が13世紀以降と類推される。このことから、中世集落は自然堤防I群南端部において成立した後、北の高所域および自然堤防II群へ展開していったことがわかる。

(2) 自然堤防I群南端部の集落 (図76)

旧五十里川 (SD23) によって南北に分かれるが、主軸方位をほぼ同じくする掘立柱建物A群およびB群の存在は、両集落に密接な関わりがあったことを示唆する。建物の規模をみると (図36参照)、規模の大きなIV群は全て①区集落に存在する。III群は更埴条里遺跡K地区に1棟みられるが、他は①区に集中する。井戸の数にも大きな開きがあり、集落としての主体は五十里川北側にあったものと思われる。調査区内では集落を囲む区画の存在は確認されていないが、更埴市域の圃場整備以前にみられる道の区画がちょうど①区集落を囲んでいる (図78)。さらに北に存在する墓域も道で区画された状態となっている。確証はないが、中世の集落 (屋敷?) の区画が後世に道として残った可能性もある。

①区集落での掘立柱建物A群とB群の重複関係からみて、B群が後続する建物群と考えられる。B群の段階では建物の主軸の

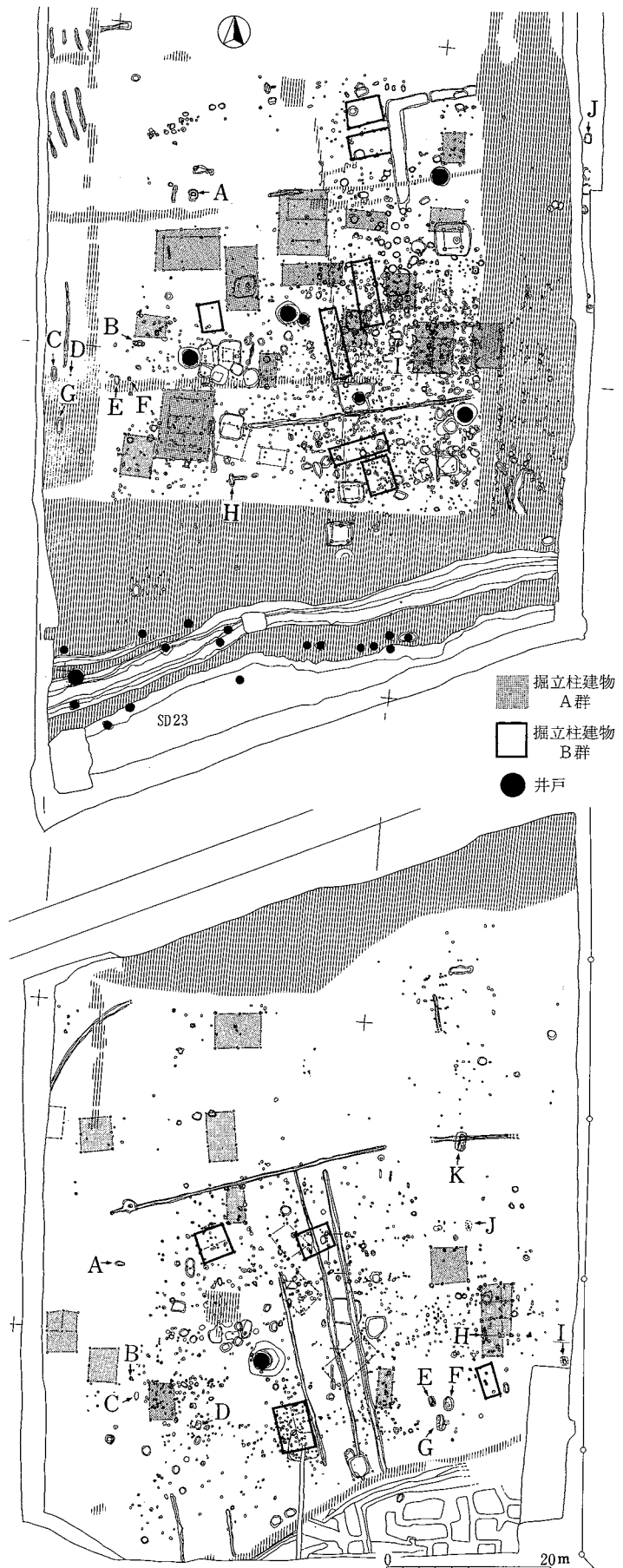


図76 更埴条里遺跡K地区・屋代遺跡群①区中世集落

みでなく、掘立柱建物IV群の消滅という規模の上での大きな変遷がみられる。これは集落の性格に変化が起きたことを示すものと思われる。集落北西域に畠がみられるが、畝の方向が掘立柱建物B群の軸と一致しており、確証はないがこの段階に伴う可能性もある。

集落内に存在する墓の配置をみると、建物等の密集地を避けた周辺部に存在することがわかる。しかし、墓の上に区画溝が掘削されたり、掘立柱建物が立てられた状況からみて、集落の墓と捉えるより、集落内の各段階の住居等に付属する墓と考えた方が妥当と思われる。火葬墓、土坑墓、木棺墓の各種が存在することから、埋葬法も多様であり、集落北側の墓域に存在する墓とはやや性格が異なっていたものと考えられる。

(3) 自然堤防I群高所域の集落 (図77)

中世においては、古代13期に廃絶した基幹水路および支水路が再整備される。屋代遺跡群④～⑥区集落はその水路に区画された範囲内を中心に展開しており、その成立が用水の整備と密接に関連していたことを示す。区画内では掘立柱建物III群を含み、鍛冶炉を有する建物跡(ST4004)等が確認されている。しかし主体部は調査区外に伸びる区画溝(SD5001)の内側に存在したことが予想され、集落の全容およびその特徴を把握することはできていない。

圃場整備以前の地図上で集落の位置をみると(図79)、集落南側の区画となるSD4007・4008に対応する水路は存在していない。しかし、同方向に伸びる道が調査区外から東約150mの地点で北に曲がり、下条堰と交差することによってひとつの区画を形成しており、これが集落全体の区画の名残とも考えられる。注目されるのは、標高356.0mの等高線に沿ってSD5001が掘削されている点であり、自然堤防I群最高所地を集落の主体部(居館?)が占地していたことを示唆する。

集落区画の内外には火葬墓、土坑墓、木棺墓

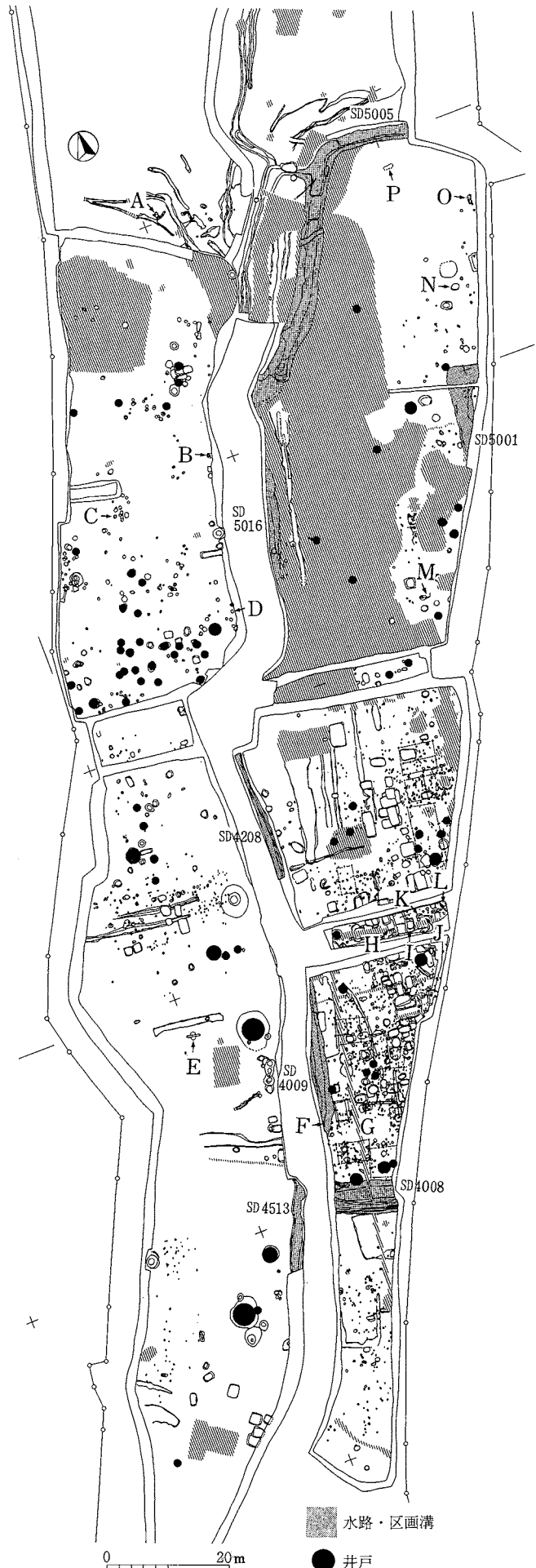


図77 屋代遺跡群④～⑥区中世集落

が点在する。この内H～Lは一カ所に集中しているが、遺構集中域に混在しており、建物の敷地内に付属する墓であった可能性が高い。なお、A (SK7003)・E (SF4501)・F (SK4113) は火葬施設である。この内Fは基幹水路の埋土を掘り込んでおり、用水廃絶後も集落が継続していたことを示す。地区内には井戸が多数存在するが、15世紀前後の遺物が出土したものが多く、用水廃絶後に掘られた可能性を示唆する。特に⑤a区の井戸の集中度は特異であり、周囲の状況からみても生活用水とための井戸とは考えにくい。この一帯では現在でも灌漑に井戸が利用されており、これらの井戸も畠等の灌漑に利用されたものではないだろうか。このように用水廃絶後の15世紀前後の段階では集落の様子もかなり変化していたものと思われる。



図78 屋代遺跡群①区中世集落・墓域を囲む道

等

(4) 自然堤防II 群の集落

窪河原遺跡H2区集落の成立は屋代遺跡群④～⑥区集落とほぼ同じ時期と考えられる。竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡1棟が確認されたが、その広がり是不明



図79 屋代遺跡群④～⑥区中世集落を囲む用水と道



図80 中世の水路与圃場整備以前の堰

であり、墓・火葬施設の集中がみられる点で他の集落とはやや様相を異にする。周辺に水田、畠が存在することから、その耕作には大きく関わっていたことが想像される。時期的にみて屋代遺跡群④～⑥区集落の付属的な集落であった可能性もある。

(5) 用水の再整備 (図80)

(3)で述べたように、屋代遺跡群④～⑥区の中世集落成立と連動して古代11～12期に開発・利用され、13期に廃絶したとみられる基幹水路 (SD4504) が再び掘削されている。各調査区で断片的に検出されたため複数の遺構番号が付されているが、明らかにSD4504の東側に再掘削された水路である。また、その支水路SD4007・4008も旧支水路SD4018の南側に設置されている。屋代遺跡群②区では旧水路とほぼ同じ位置にSD2209が再掘削されており、畠跡も検出された。また、⑥区では窪河原遺跡の方向に伸びる溝があり、H6区の水田及び畠への灌漑と関連する可能性がある。

10世紀後半の段階で確認された、更埴条里遺跡K地区の基幹水路 (町田堰) と屋代遺跡群③区の幹線水路 (町浦堰) に該当する溝および蛇田堰は中世の遺構としては検出されなかった。しかし、生仁氏の城館跡とされている生仁遺跡の1888年地籍図 (図81) にみられる、方形の地割の2方を巡る水路は町田堰の延長部にあたり、更埴条里遺跡K地区南端で水田跡と思われる区画も検出されていることから、中世の段階でも用水が機能していた可能性が指摘できる^(註2)。また、屋代遺跡群③区から東へ約550mの地点では、屈曲した町浦堰とL字状に曲がる道に囲まれた方形の区画がみられる (図82)。雨宮神社 (日吉神社) が立地する標高355.5mの微高地西端に位置し、区画のあり方も屋代遺跡群④～⑥区集落に類似することから区画内の集落の存在が想起される。③区では畠跡も検出されていることから、断定はできないが町浦堰も再整備されていた可能性がある。

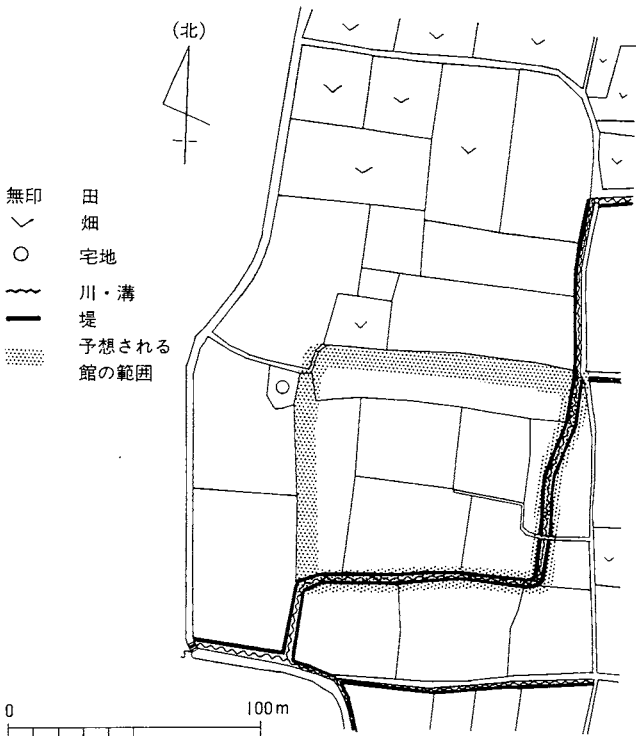


図81 生仁館跡付近の地籍図 (字生仁 1888年)

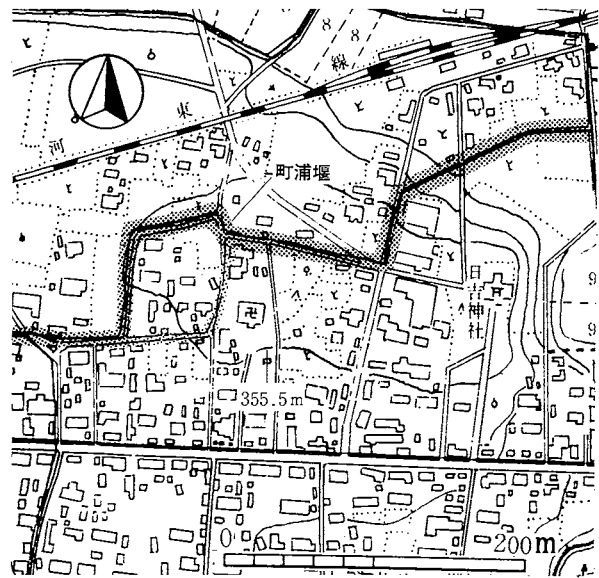


図82 日吉神社 (雨宮神社) 付近の区画

5 洪水後の集落変遷と用水開発に関わる諸問題

以上の変遷に基づくと、更埴条里遺跡・屋代遺跡群における洪水後の動向は大きく以下のように区分することができる（図83）。

- ①条里坪区画復元期（8期後半～10期） 後背湿地 I 群内に旧条里水田坪区画を復元した溝が掘削され、その地割の中に集落が成立する。自然堤防 I 群側には集落が成立せず、その土地利用については不明。
- ②用水開発期（11期～12期） 後背湿地 I 群内の集落が廃絶し、更埴条里遺跡 K 地区・屋代遺跡群①区集落を起点としてその南北に水路網が開発される。
- ③自然堤防 I 群進出期（13期～15期） 洪水後集落が成立していなかった自然堤防 I 群内に新たな集落が展開し、用水は廃絶した状況となる。
- ④中世集落成立期（12世紀以降） 更埴条里遺跡 K 地区・屋代遺跡群①区に掘立柱建物跡を主体とする集落が成立。後続して屋代遺跡群④～⑥区、窪河原遺跡（自然堤防 II 群）にも進出し、廃絶していた用水が再整備される。

以下、各段階でみてとれる問題点を提起し、今後の課題を整理していくこととする。

(1) 坪区画復元期の諸問題

坪区画復元の理由 洪水以前の条里水田坪区画畦畔に対応する溝の内、東西方向の区画溝は洪水直後に掘削されている。条里区画を復元しようとする意図があったことは明らかであるが、その目的が判然としない。確かに III-2 層中からは多量のプラントオパールが検出されており、水田復興の可能性は指摘されているが（第9章第2節）、洪水直後にはすでに集落が成立している。8期後半の空間地帯および低地部分において耕作が行われた可能性もあるが、この時期に対応する水路や畦畔等の遺構は検出されていない。また、耕作が行われていたとして、水田に水が張られた季節に同じ後背湿地内の竪穴建物に居住することが可能であったかが疑問である。この点は、洪水直前の集落内で竪穴住居が使用されていなかった可能性があること（寺内1999）を踏まえて、竪穴住居使用に関わる季節的な問題、平地式住居の存在（第8章第1節）などを検討していく必要がある。

後背湿地内への集落進出の理由 8期後半～10期の集落は後背湿地 I 群内に存在するのみで、自然堤防 I 群にはみられない。この内、更埴条里遺跡 K 地区集落は自然堤防との転換点にあたり、洪水以前にも集落が存在していた。しかし、建物の規模や集中度は I 地区集落の方に目立ったものがみられ、洪水以前には集落の存在しなかった後背湿地をあえて選択したことがわかる。居住域としての適地である自然堤防部を選択せず、後背湿地内に集落を形成した集団がどこから来たのか、立地の選択にはどのような目的があったのかが疑問となる。

(2) 用水開発期の諸問題

用水開発の主体 用水の開発は発掘調査区内のみならず、この地域一帯の動向に関わる大きな問題である。この時期の基幹水路の起点がどこであったかは不明であるが、取水の源は千曲川以外に考えられない。また、SD4504は自然堤防 I 群の低地部から最高所を抜けて旧河道傾斜部に達する水路であり、その掘削は大事業であったことが予想される。洪水によって条里水田に伴う水路は埋没していたことが考えられ、10世紀後半の段階でこのような広範囲にわたる、大規模な工事の主体となり得たのはどのような存在であったのかが大きな問題となる。さらに調査区内でみる限りこの時期の集落の建物数は非常に少なく、用水の開発に直接従事し、さらに開発された用水を利用し、生産活動等を行った集団の居住域がどこを中

心に展開していたかが疑問となる。

用水開発の目的 大規模な用水整備の主たる目的は、当然それに伴って再開されたと思われる水田および畠への灌漑であったことが想定される。しかし発掘調査区内において、この時期に属する水田・畠跡を確認することはできなかった。耕作面は集落が成立したのと同じIII層上面と考えられるが、後背湿地I群内で検出された竪穴建物等が集落廃絶後の水田耕作によって攪拌された様子はみられない。この点、当時の生産域がどのように展開していたかが問題となる。

(3) 自然堤防I群進出期の諸問題

用水廃絶の要因 13期の集落成立と前後して用水は廃絶した状況となり、それ以降の新たな集落は埋没した溝の上に成立する。調査区内のみで捉えた現象であるため、用水網が完全に廃絶したかどうかは不明であるが、基幹水路が埋没している点をもみても大きな変化があったことは想像できる。このことは13期以降(11世紀以降)再び自然堤防I群内に集落が進出する理由とあわせて考察する必要がある。

建物構造の変化の原因 用水の機能停止と前後して成立した集落の竪穴建物にみられる構造変化は何に起因するのだろうか。特に竪穴プランの長方形化とカマドのコーナーへの移動は、10世紀後半以降に認められる顕著な現象である。松本平における発掘調査でも同様な変化が報告されており(望月1990)、北陸新幹線建設に伴う更埴条里遺跡の発掘調査においても、10世紀後半～11世紀前半に属する同様の住居が報告されている(澤谷1998)。

カマド位置の移動については、カマドを中心とした建物空間観念の崩壊と、より有効なスペース利用の必要性に起因し、それが竪穴プランおよび上屋構造の変化につながるものと指摘されている(寺内1989・望月1990)。それでは、その必要性とは何か。当時の社会情勢を含めて考えるべき問題といえる。

(4) 中世集落成立期の諸問題

集落成立の主体 12世紀以降屋代遺跡群①区を中心に成立した集落は、掘立柱建物を主体とし、規模の大きな住居や作業場と考えられる建物を有するものであった。平安から鎌倉へと時代が転換する中でこのような集落成立の主体となった存在は、竪穴建物が中心であったそれ以前の集落の段階と同じであったのか。さらにその経済的基盤はどこに展開していたのかが問題となる。

用水再整備の主体 13世紀以降の屋代遺跡群④～⑥区集落の成立は用水の再整備と連動するものであり、この集落の存在の重要性を示唆する。廃絶した用水網の再整備がどれほどの規模の工事を伴ったものかは不明だが、強力な指導性が発揮されたことに疑いはない。この指導性を発揮した主体がどのような存在であったか、さらに10世紀後半に用水を開発した主体とはどのような関わりがあるのかは解明すべき大きな問題となる。

6 社会情勢の中での位置づけ(まとめにかえて)

9世紀後半の大洪水がいわゆる仁和四年(888年)の大洪水とすると、それは「山頹レ河溢レテ六郡ヲ唐突シ、城廬地ヲ払ッテ流漂シ、戸口波ニ随ッテ没溺ス」る大災害であった^(註3)。当時の住民にとって生活基盤を失ったことの打撃は大きく、浮浪・逃亡等の動きがみられたことが予想されるが、復興への動きはいち早いものであった。洪水直後の段階で、居住の適地とはいえない後背湿地I群内にあえて集落が成立したのは、やはり廃絶した耕地を再開する意図があつたのことと思われる。それは条里の坪区画復元という行為、さらにその区画に基づく集落の配置からも窺え、その一種統率された動きはその背後に復興を主導する有力者の存在を示唆する。さらにこの時期と並行する清水製鉄遺跡における生産活動(上田1997)

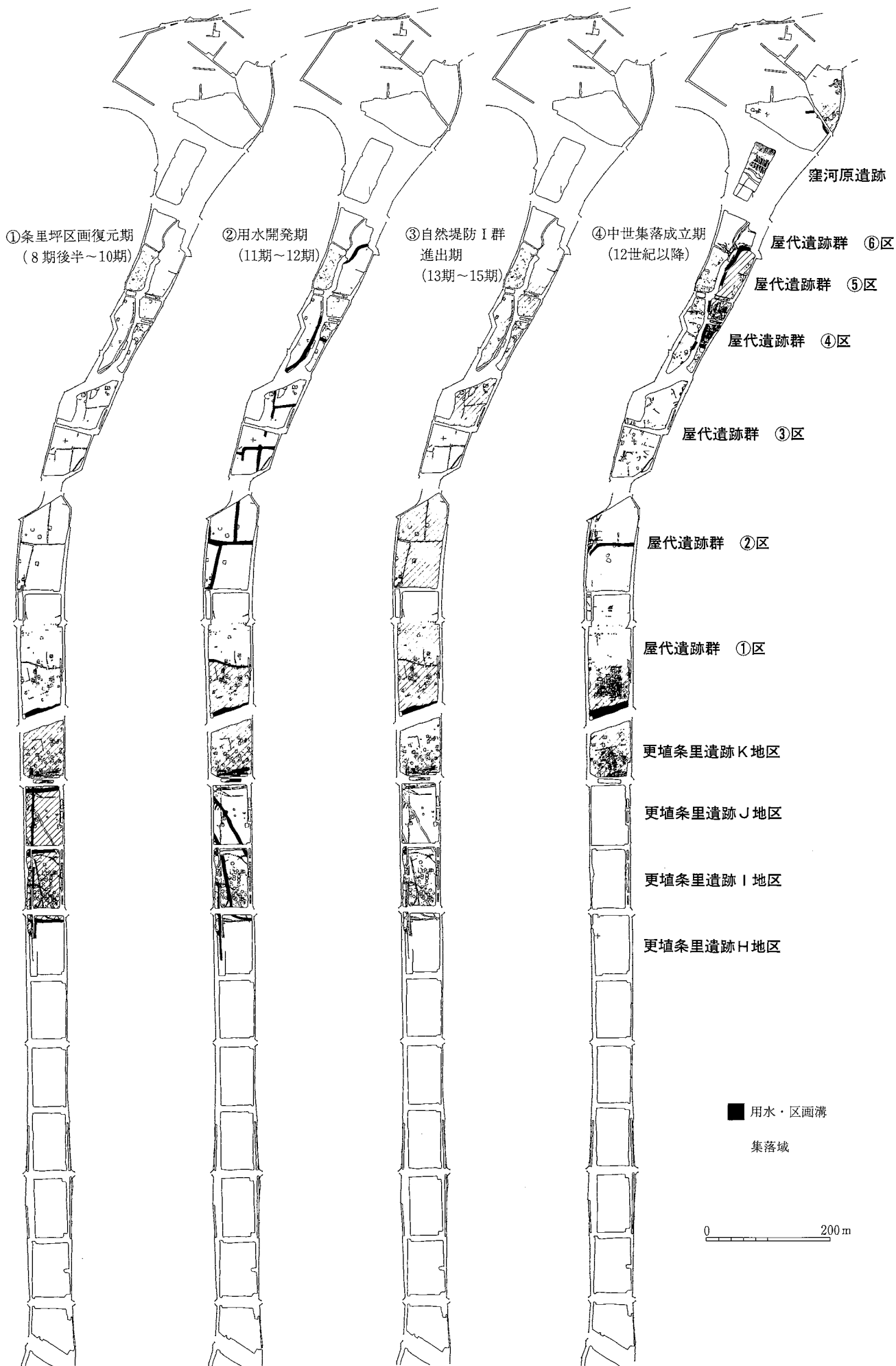


図83 洪水後の更埴条里遺跡・屋代遺跡群の動向区分図

も有力者の存在と結びつけて考えていく必要があるだろう。旧区画の復元を指向している点、また、洪水直後に集落が成立したのが、更埴条里遺跡I地区とともに、条里地割施工開始にともなって最初に低地部に進出した有力者の集落あるいは官衙の存在が指摘される（寺内1999）更埴条里遺跡K地区であったこと。この2点を考え合わせると、条里地割施工に関わる有力者と復興を主導した存在は同一線上で捉えることが可能と思われる。

この観点に立つと、10世紀後半の用水開発が同様に更埴条里遺跡K地区集落を起点として行われていることも無視はできないだろう。ただ、この段階では旧条里地割に固執する様子はみられず、開発の方向性に変化があったことが窺える。このことから、開発主体である有力者の性格のみならず、律令体制の変質から王朝国家への移行という大きな社会的変動を考慮に入れて、10世紀後半という時代における開発の意義を追求する必要がある。

用水開発によってどのような生産体制が成立したかについて現時点では不明だが、11世紀の段階で早くもその体制に変化が起こったものと思われ、用水の廃絶と前後して新たな集落が成立する。また、前述の清水製鉄遺跡における生産活動がこの段階で停止している点もこの動きの中で捉える必要があるだろう。

新たな集落成立に伴ってみられる竪穴建物の構造変化は、10世紀後半以降の社会的変動が集落を構成する住民の生活様式あるいは生産活動に大きな影響を与えたことに起因するものと思われる。屋代遺跡群③b区集落、④～⑤区集落の竪穴建物およびその周辺からは多量の鍛冶関連遺物が出土していることも考慮に入れ、建物の空間利用について今後検討していく必要がある。

12世紀以降、掘立柱建物が主体となることにより集落の景観は一変し、建物周辺の墓の存在、さらには墓域の成立と、中世的様相を一層濃くしていく。13世紀以降の屋代遺跡群④～⑥区集落は、全容の把握はできなかったものの、主体部を囲むと思われる溝と、さらに集落を囲む水路という二重区画の存在から居館的な様相をみせる。このような中世集落の展開は、すでに12世紀後半の段階でその存在が知られる倉科庄および加納屋代四ヶ村（屋代庄？）の動向^(註4)と大きく関わるものと考えられる。現時点ではそれらの庄域および中心的居館の認定には至っていないが、13世紀以降の用水の再整備がどの程度の範囲に及ぶ規模であったかが重要な観点になるだろう。13世紀末の鎌倉幕府下知状^(註5)にみられる「倉科庄東條」が現倉科を中心とした範囲（図84）とすると（米山・浅野井1994）、存在が想定される「西條」の範囲が問題となる。もし沢山川西側の一体を含むとすると、倉科庄は沢山川を起点とする東側一帯と千曲川を起点とする西側一帯の両用水体系の整備に大きく関与したことになるだろう。しかし西側の用水体系に関わらないとすると、加納屋代四ヶ村の存在が浮かび上がり、自然堤防上最高所域に立地する屋代遺跡群④～⑥区集落（居館？）の存在が重要となってくる。いずれにしても、13世紀以降この一帯に勢力を伸ばしていたと考えられる「屋代氏」の存在が大きく関与していた可能性が高い^(註6)。

倉科、屋代ともに律令期においては「郷」として存在した地域であり、それが9世紀後半の大洪水以降の社会情勢の中で「庄」として姿を変えていく、更埴条里遺跡・屋代遺跡群にみられた集落変遷・用水開発と再整備はその動きを反映しているものと言えるだろう。

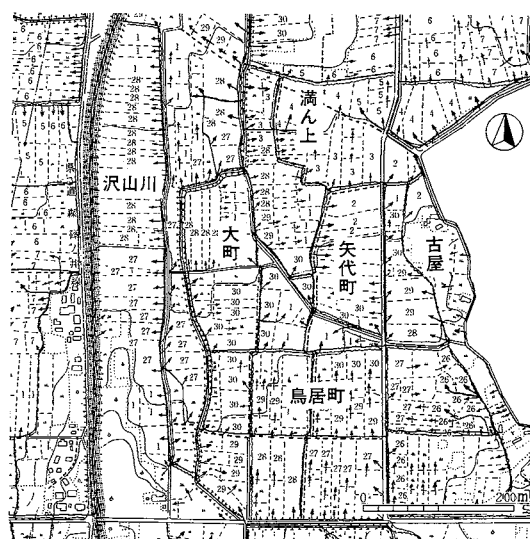


図84 倉科庄東條中心推定地の地割と字名

註1 図73・78・79・80・82・84作成では『地下に発見された更埴市

第11章 成果と課題

条里遺構の研究』に第9図を利用した。

2 図81は『屋代城跡範囲確認調査報告書』より引用した。

3 『類聚三代格』十七から引用した

4 『吾妻鏡』文治二年（1186年）三月に、九条城興寺領として記載されている

5 正応三年（1290年）の鎌倉幕府下知状（熊谷家文書）に「信濃国倉科庄東條」の記載がみられる

6 註5の鎌倉幕府下知状では、倉科庄東條は屋代氏が伝領していたことが知られる。また、建武元（1334）年、雑訴決断所牒（市河文書）には、屋代下條一分地頭彦四郎が下地を横領した件が記されている。「下條」は屋代遺跡群⑤区東側に字名として残っており、『尊卑分脈』では「上條」とともに屋代氏が伝領していたことが示されている。「屋代下條」と屋代遺跡群④～⑥区中世集落の関連が窺え、非常に興味深い。

引用・参考文献

上田 真 1997 「清水製鉄遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22—更埴市内その1』

更埴市教育委員会 1995 『長野県更埴市屋代城範囲確認調査報告書』

澤谷昌英 1998 「第2章第2節 遺構と遺物」『北陸新幹線埋蔵文化財調査報告書3—更埴市内— 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』

玉口時雄・小出義治・倉田芳郎・岩崎卓也・桐原 健 1969 「第5章 地下遺構の発掘調査」『地下に発見された更埴条里遺構の研究』

寺内隆夫 1989 「第5章第3節1 竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2— 吉田川西遺跡 本文編』

寺内隆夫 1999 「第8章第5節 集落の変遷」『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書26—更埴市内その5— 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代1編—本文』

望月 映 1990 「第3章第1節 古代の竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1— 総論編』

米山一政・浅野井担 1994 「第四編 中世」『更埴市史 第一巻 古代・中世編』